

---

# とある数馬の転生物語

墜ちた海鷲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある数馬の転生物語

### 【Nコード】

N7026M

### 【作者名】

墜ちた海鷲

### 【あらすじ】

コミケに行く途中、自らの不注意により事故死した、オタク、数馬光太郎。なんと女神によって運良く「とある魔術の禁書目録」の世界に転生出来ることに。

当初は彼は、恋愛フラグが出来るかと狂喜したが、現実はそうそう甘くはなかった。

数馬に命令される、天使からの危険すぎる任務。

複数ある原作との違いと、変えようしても出来ない原作の流れ。

時が過ぎることに、悩みが増えていく主人公。

さらには、過去に深い傷があるもう1人の転生者まで登場する。

さまざまな困難をなんとか乗り越える彼に、彼女は出来るのか。

ハッキリ言ってしまうえば脇役が似合う、主人公の奮闘が始まる。

コミケに行けねえ！！（前書き）

こんにちは墜ちた海鷲です。こんなひどい駄文ですがよろしくお  
願いします。

コミケに行けねえ！！

深夜24時。一台のバイクが高速道路を90kmオーバーで走っていた。天気は雨で視界は最悪。事故らないのが不思議なくらいだ。

「くっそー間に合うか!？」

バイクのハンドルを固く握りしめながら数馬<sup>かずま</sup>光太郎<sup>こうたろう</sup>年齢23歳は焦っていた。彼にとって人生最大の楽しみといえるものは時間に厳しい。他にも大勢の敵がおり、ちんたらしていたら間違いなく根こそぎ持つて行かれる。

彼の人生最大の楽しみ・・・それはコミケだった。

数馬の職業は警備員である。表向きは真面目に勤務しているため新人ながら評判は良い。特技は体術で実力は上の中から中の上の間、それと暗記だ。

趣味はラノベやマンガ(同人誌を含む)などの読書。典型的なオタクである。ちなみにオタクになったきっかけは「とある魔術のインデックス」シリーズによるものだった。

まあ、くだらない自己紹介はさておき数馬は上述した通り焦っていた。

「まずいなあ、まずいなあ、まさか今日に限って残業だとは・・・せっかくインデックスの同人誌で良いのが出たのに!!!」

さつと腕に掛けてある時計を見る。時計の針は12:43を指していた。コミケにおける買い物客の執念と情熱は凄まじい。前日から並ぶ徹夜組と呼ばれる人々もいる。かくいう数馬もその1人だ。

「やべえ、もう最悪300人はいつてるか。あの同人誌、2チャ  
ンネルで相当騒がれたからなあ。売り切れちまうよ……」

それでもあきらめきれない数馬は思いっきりアクセルを踏み、さ  
らに速度を上げ始める。そして100kmに速度は達した。トンネル  
と速度制限の看板が見えてきたのだがそれをも無視してトンネルに  
突入した。

トンネルの中は外よりは暖かく、数馬はびしょ濡れの服のおかげ  
で尋常じゃない寒さを感じた。

「うわっ寒い！！風邪引くなこりゃ。しっかし……あきらめき  
れないよなあ。あの同人誌……」

じよじよに暗い気持ちになってゆく数馬は前方を完全に見ていな  
かった。そこには100m近くに大型トラックが来ていたのだ。  
トラックの運転手も前方を見ていなかったらしい。双方気づかぬ  
ままその距離は10mとなった。

「だから……こうして購入を……っておうあ!?!」

突然目の前にトラックが出現したことで数馬は半端ではない動揺  
をした。事故という物はこういう事が多々ある。

「うわあつつああああ!!!」

咄嗟にブレーキを踏もうとした数馬だったが、ここで致命的なミ  
スを犯した。雨でブレーキを踏む足が滑ったのだ。

「でええ!!!やべえええ!!!」

その後、原付バイクはトラックに突っ込んだ。

ふつと、眼を開けた時。そこには真っ白く何も無い空間が広がっていた。

「1111・・・ど1111?」

数馬は自分が怪我を全くしていない事をそっちのけでその不思議な場所を呆然としながら突っ立っていた。

「おい、おい。いつまでボーっとしているつもりだ?」

突然声が聞こえたと思うと空中から光りと共にいかにも女神様という感じの服装の女性が出てきた。しかし眼鏡を掛け、丸いおでこで深緑色のストレートヘヤーはまさしく・・・

「らき すたの成美ゆいさん!?!」

「女神にあつた時の第一声がそれなの!?!」

間髪入れずに女神のつつこみとアップパーカットがはいる。直撃した数馬は3m吹っ飛んだ。

「ぼ、暴力はない・・・」

「うるさいよ。まったくオタクというものはこれだから・・・まあいいや。確か数馬光太郎君だね。突然ですが君はテンプレのごとく他の世界に転移することになりましたのでよろしく」

シんつと沈黙が5秒ほどすぎる。あまりにも長い5秒である。

「はい！？何故ですかい！！？」

当然ながら、彼はつつこむ。そりゃ、あんまりにも唐突な話なんだから当たり前だ。

「まあそう質問するよね。典型的なパターンだよ。これまでもそうだった。じゃあ簡潔にいうけど君は地球で稀に見る特殊な能力、重力場変換という力を保持している。これは名前のまんま重力の重さを変換できる能力なのだ。だからだよ」

まったく説明にもなっていない女神の話。馬鹿かこいつと思いつつも数馬は冷静に質問した。

「・・・それがなんで転移と関係ある？」

「他の世界に転移するとき、空間をひん曲げるからとても強力な重力がかかる。並大抵の人間でやると確実に即死だね。だから君のような能力が一番最適なんだ」

なんだかいまいちすつきりしないが納得した数馬は一番重要な事を聞いてみた。

「じゃあもう一つ質問だけど、どこに転移するんだ？」

女神は思い出したかのように手に持っていた少し厚いメモ帳を見ている。数馬は少し、転移する世界ぐらい覚えていろ！！と怒りたくなったが、また殴られちゃたまらなのでやめておく。





「OK!!!」

意気揚々と数馬が立った場所に女神は呪文を唱えてゆき、徐々に地面に五芒星のような紋章が描かれてゆく。そして最後の文字が描かれ終わった。

「よし、準備は出来た。転移するから衝撃に備えて。今回だけ重力変換は自動的に作動するようにしてあるけど最初の一撃は少しくらうよ。それじゃLET・SGO!!!」

女神が消え一瞬で暗闇に周りは包まれ、溝撃ちあたりに衝撃が来る。

「ぐうっっ!?!」

声が出なくなり、脳が揺さぶられるような痛みが12秒ほど続く。それが終わったとたん、数馬は意識を失ってしまった。

コミケに行けねえ！！（後書き）

すいません。設定が無茶になりそうな予感がばんばんきます。勢  
いとのりで始めたけど完結するかな・・・  
とりあえずよろしくお願いします。

えっ！？自由に好き勝手できないの！？？（前書き）

第1話です。ただ先に言っておきましょう。うまくないのはステータスだ！希少価値だ！……すいません。

えっ！？自由に好き勝手できないの！？？

SIDE数馬

ふつと目を開けると電灯と見知らぬ部屋があった。頭が痛む。俺は・・・どうしたんだっけ？ああそつだ。女神に転移させられたんだ。とあるの世界に。

「・・・・・・・・よつしゃあああ！！！！」

本日？二回目の歓喜の叫び！！ここまで嬉しいことは無し。そう断言できるね！

「いや〜生きてて良いこともあるもんだ。この後はもちろん御坂美琴や神裂火織とフラグを立てることにしよう！！まっ、部屋の中に見てみるか」

部屋は5畳程度はあり、洗面所はバスルームと隣接してある。キッチンは1・5畳の広さで学園都市製の良質なガスコンロであった。食器、鍋類は女神が用意してくれたのか、一式すべてそろっている。

「なかなか良い部屋かな、のんびり出来そう。洗面所か・・・そう言えばなんとなく髪に寝癖がついてる感触があるんだよな。まずは髪をとかそう」

洗面所には歯ブラシなどの道具もしっかり完備されてある。その中にヘアブラシもあった。今更ながら面倒見がいい女神なんだなと思う。

「さーて、どこらへんに寝癖が・・・つてえええ!？」

この部屋には自分以外誰もいない。しかし鏡には友人から、らきすたの泉そつじろつが無精髭無しバージョンと酷評されたあの顔はなかった。

「だ、れ・・・?」

不思議な感覚であった。試しに頬をつねってみたところ痛みが走る。

「・・・これが、俺の顔?」

なにかしら違和感が残るが、よく見るとなかなか良い顔立ちだ。髪の色は焦げ茶色、眼は黒に薄く白銀が混じっているような色。年齢は16歳程度。ただ前の名残が眼に泣きぼくろは残っている。

「これは、これは・・・フラグ立つのが滅茶苦茶楽に!!!!!!」

.....

「ん?何だこれ?」

ハイテンション真っ最中の時にKYにも微妙な周期の着信音を出す携帯電話がポケットから鳴った。見てみれば自分が所持していた機種と全然違う。見るからに性能が良さそうだ。

「女神・・・まさかこんな立派な携帯まで・・・まさかこれでフラ

グ立った彼女とたくさん会話しろというのか！！なんて良い神だろっ！！」

「…………今思ったけど俺、壊れキャラになっている。自重しよう。」

「ところでだれからだろ？これタッチパネル式か……これを押すのかな？」

とりあえず出てみると画面が急に変わり始めた。テレビ電話式のようだ。そして相手が映る。

「遅いなあ〜もつと早く出てよ〜」

……薄い青紫色（アニメ版では水色）の膝まで届くほどの超ロングヘアで大きなアホ毛。瞳の色は緑色。左目の左下に泣きぼくろがある。こ、この人は！！

「らき すたの泉こなたさん！！！！？」

「あ〜また言われたよ……死人に会うとよく言われるんだよね。一応これでも君の転移をサポートする大天使だよ。よろしく！！私もおたくだから話は女神様より全然分かる方だよ〜」

大天使って、そうだとしてもやっぱりこなたさんだよ、性格がそっくりだ。

「ああ、よろしく……ところで何のようなんですか？」

「そうそう、とりあえず君を転移させた理由についてだよ」

「えっ？特殊な能力があったからじゃないの？」

それ以外に何かがあるというのだろうか……

「バツカだなあ、そんなもんで転移することは無いよ。君を転移したのは絶対にやってもらおう任務があるからだよ」

「…………マジですか……」

あつれえ〜おかしいな……テンプレでこんな任務なんて物は無かったよな……自由にとある世界を楽しめるんじゃないのかよorz

「まあ、落ち込まないでよ。成功すれば給料もでるし、もしかしたら簡単に君の望むフラグが立てられるかもよ」

「よしやりましょう!!」

「テンションの切り替え早いね……………」

hahaha!!テンションの切り替えは日本一さ!!しかし任務つてのはいったい何だ？よし聞いてみ……

「任務つていうのはね……」

「人の考えてること読んだ!？」

「すごいでしょ、まあそれはそれとして任務ですることっていうのはかなり重要な物なんだ。失敗したら世界が崩壊しかねない任務もある。それは覚悟しておいて」



目つきが真剣になる大天使。これはマジっばいので冗談は無しだ。

「任務の連絡はこの神携帯にするから肌身離さず持つといて。普通に携帯としても使えるから不便にならないよね。ついでに君も分かっているだろうけどこの学園都市は史上最高の科学力を保持しているから任務の危険度もすっごく高いよ。死なないように気をつけてね」

「うわゝすっごく怖いな・・・」

死亡フラグが立ったよ。やばいな、任務って怖いな。出来れば来て欲しくない・・・

「悪いけど1ヶ月に5、6回は来るよ」

「人の心読まないでくれ・・・最悪だぁー!!!orz」

「一応、ガチンコで危険な任務はその中の1つだけだから安心して。ほかの任務はそれほど大変ではないから」

「そうか・・・微妙に安堵するよ」

心の中では恐怖が征服しているけどね!!!

「ちなみに、歴代の転生者がやってきた任務で著名なのを上げると、

「リンカーン暗殺を阻止せよ」

「9、11テロ計画を破綻せよ」

「コミケ会場、東京国際フォーラムを爆破せよ」

とかだね」

第3回沈黙状態が発生。今回は長めに35秒。

「……あのさあ、1つめ、2つめはすごく良いことしているけどなんなんだよ3つめ!! 貴様、俺を愚弄しているのか!!!」

「まあこれは私も大反対だったんだよ。けどやっとかないといタリアが内戦を起こしちゃうからやったんだ……死者は出さなかつたよ?」

当たり前だ!!! 神聖なるコミケになんたることをおおおお!!!

「うわ〜うざいなあ。とにかく話を進めるけど学園都市じゃ君の能力だけだと不安が残るから付属品をつけといたよ。ポケットの中にあるから見てみて」

ポケットの中を探してみると確かに堅い物があるとキャラメル箱程度のアタッシューケースだった。

「それはバイオハザードで有名なアタッシューケースLサイズ。コンパクトにまとめてあるけど中には相当うるんな物が入ってるよ。中から出すとき名称を言えば4秒で出てくる優れものだから重宝してね」

女神が住んでいる所は科学も進んでいるのか……ある意味恐ろしい。

「ところで中には何が入っているんだ？」

「それは後でリストで送るよ。ついでにもう気づいてると思うけど君の容姿だとフラグ立てるのがかなり困難になるから変換しといたんだ。感謝してね」

茶目つ気たつぷりに笑う大天使、プライスレス

「本当にありがとうな。そういえば此処どこだ？なんかどっかで見た事あるけど・・・」

なにかのアニメで見た記憶がある場所。思い出せそうで思い出せない。

「あれ、分からないの？ここは学園都市第7学区、上条当麻がいる学生寮だよ」

・・・第4回沈黙状態。短めに12秒。

「・・・何デスとおおおお！？えっ、じゃあまさか・・・」

「うん、ご想像の通り、上条当麻の隣の部屋だー！！君は新生という設定だよ。ちなみに此処にいた生徒は時空の狭間にいます」

おおおお！！あの上条に生で会えるとは！！最後の方大天使がとんでもないこと言ったけどそれは華麗にスルーだ！！

「まあ伝えることはそれぐらいだからもう切るね。じゃあねー」

ぶつとテレビ電話は切れてしまった。今後とも仲良くやっ  
けそうだ。

「よし！・！・とりあえず、生上条を見れるんだ。さっそく突撃だ！  
！・！」

とりあえず言っておこう。この決断が俺の人生ベスト5にはいる  
失敗だとはまったく気づかなかった・・・orz

えっ！？自由に好き勝手できないの！？？（後書き）

すみません。大天使のこなた、全然似ていませんね。あまりにも  
ふがいないです……

上条の不幸フラグはへし折れねえ！！！！（前書き）

第2話です。皆さん、言い訳は後書きにあります。ただ1つ言い  
ましよう。まことにすみません……

上条の不幸フラグはへし折れねえ！！！！

side 数馬

「よっし、ここか」

俺は今、上条当麻の部屋の前にいる。手には先ほど冷蔵庫に入っていたシフォンケーキを持っていた。ついに生上条と初対面だ。緊張してしまう

「や、やべえ、なんか急に緊張するな・・・そうだと素数を数えよう  
！！1、3、5、7」

とりあえず23まで数えた俺はインターホンを押した。

ピンポン・・・

「・・・」

中から声が聞こえる。これが上条の声か！！

「はい、どちらさまですかー」

「えっと、はい今度ここに転校してきました数馬光太郎というものです！！ご挨拶に来ましたっうあ！！」

「・・・最悪だああああ！！こんな時に舌噛むとはああああ！！  
！！！！まずい、馬鹿と思われたかも！？」

「・・・ああそうですか。ちょっと待ってください。今行きま・・・

「

グシャ、ベキイ!!!!

「……………あれ？」

何だ……今思いつきり携帯らしきものが破損する音が耳に入っ  
たぞ。いや、これは幻聴だ。絶対に幻聴だ。会う直前にそんなこと  
が起きたら大変なことだよ。気まずさ123%だよ……

「やべえ携帯が!!!!ぶ、ぶつ壊れた、そんな……………ふ、不  
幸だー!!!!!!」

残念ながら、俺の否定は崩れ去り、上条当麻の口癖が部屋の中か  
ら響いた。

「……………」

とりあえず、上条の部屋に入ったはいいものの、部屋の雰囲気は  
絶望的に暗くなっていた。俺は罪悪感に悩まされ、上条は上条で自  
分の不幸に落ち込んでいた。



「あの、ごめん。俺が来たばかりに……」

とりあえず謝罪しとく。こればかりはこれ以外どうしようもできなかった。上条と一緒にいれば女性との回数が多くなる。いわゆる「カミジョー属性」だ。ここで上条と不仲になるというフラグが立てば女性フラグ立ちが激減してしまう。それだけは断固として避けるべき事態であった。

「いや〜これは俺の不注意だから気にしないでいいよ……」

優しい言葉を掛けてくれる上条だったが眼は絶望したように死んでおり凹んでいることがよく分かる。

「あの、まあこれシフォンケーキ。良かったら食べてくれ」

「おお、すごいな。うまそうだ……サンキューな!!」

幾分か元気を取り戻す上条。シフォンケーキは偉大だ。

「悪いな、初っぱなから暗い雰囲気させちまって。俺は上条当麻だ。よろしく」

すつと手を伸ばす上条。俺はすぐに答える。

「改めて、数馬光太郎だ。こちらこそよろしく。仲良く行こうぜ」

グツと手を握りしめる。考えてみればなれなれしいな、俺……初対面でこんなにしていいもかな？

「ああもちろんだ!!!」

結論、やっぱ上条は寛大である。

「そうだ、シフォンケーキ、食ってみようぜ。いかにも高級そうだから・・・」

そういうと上条は箱からシフォンケーキを出して持って行く。・・・  
なんかフラグ立ちそうじゃねえか!?

「ああと!!!上条!!!俺がやるよ!!!もってきたの俺だし!!!」

「いいよ、いいよ、数馬は客だろ。ゆっくりしていけえええ!?!」

上条の足には壊れて放置していた携帯が踏まれていた。全体重を掛けれ携帯はカーペットをするりとすべる。それに足を取られ上条は後頭部から転倒する。

ぐべちゃ・・・

そして放り出されたシフォンケーキはカーペットに落下・・・  
最悪だ。上条は呆然としている。

「ふ、不幸だ・・・」

よもや自分がこの言葉を使うとは思っても見なかった。

SIDE上条

カーペットについたケーキは処理しておいた。ううう、うまそうだったのに……

しかし今はそれどころじゃねえ！！完璧に空気が死んでいる！！俺は何てことしちまったんだ……。携帯をぶっ壊して数馬が申し訳なさそうになっちゃって、あまつさえお土産を落とすとは……。不幸だ……

「本当にごめんな……。高かっただろ？」

やっぱり弁償するべきだ。数馬の行為をみすみす無駄にはできねえ。

「ああ、いいよ。それほどの物じゃないし。大丈夫だって、今日は運が悪かったんだよ」

まったく落ち込んでみず責めもしない数馬。聖人君子か！？

「でもやっぱりな……」

「気にするなって、俺だってお前の携帯壊しちゃったようなもんだ。これでチャラになったってことにしようぜ」

ううう、眩しい……。こいつはすげえ良い奴だ。断言できる。間違いないえ！！！！

「そうか・・・ありがとうな。俺が悪いのに・・・」

「ついでにいうとだな上条、こんな言葉がある。「人生は学校である。ここでは幸福より不幸の方が良い教師である」ってな。フリーチエっていうロシアの文学者が言ったんだ。まあ、不幸は人生に言い教訓を作るもんなんだ。落ち込むこたあない」

突然、言葉のトーンが下がり数馬の顔が大人びて見える。何故だかは分からない、奇妙な感じだ。

「なにげに博識なんだな、すげえよ」

「いや、まあ変なことしか知らないだけだ。無駄な知識ばつかな。それよりさっきのことは忘れよう！！上条、学園都市を案内してくれよ。楽しみにしていたんだよ！！！！すげえものが多いからって聞くからさ」

すぐに大人びた雰囲気は消えてしまう。普段は明るい奴なんだな

・・・

「ああいいぜ、おすすめの場所があるんだ。教えてやるよ！！」

ただ、俺の不幸を笑いもしなかった。真面目に励ましてくれた。子供の頃はこんな奴いなかったな・・・こいつとは仲良くやっていけそうだ。

上条の不幸フラグはへし折れねえ！！！！（後書き）

皆さん。ごめんなさい。上条に全く見えませんね。私も読み返したらこれはひどいと思いました。ほんと、すいません………

O r z

友だちが出来ないほど気の毒なことはないね……(前書き)

第3話です。短いです。申し訳ありません。

友だちが出来ないほど気の毒なことはないね……

#### SIDE数馬

俺は第6学区に来ている。「とある魔術の禁書目録の全て」では学園都市のアミューズメント施設が集合していたと書かれていた場所だ。

ここは御坂美琴がよく来ていたと思われるゲーセンがあったはずだから出会いフラグビンビンである。

「へーすごいな。こんなもん見た事ねえ……」

啞然とするしかない。小説内ではあまりここでゲームをしている描写が無かったがすばらしいの一言につきる物が多い。

特に最新のゲーム機は開発が進んでいるのか立体映像で流れるみたいだ。しかしあまり意味がないようなことも否めない……

「まあ学園都市オリジナルの物が多数しめるから、普通外部では入手は出来ないな。俺には手も届かないような値段だし……」

しよげる上条。そう言えば原作では携帯を壊していて家計に大打撃を与えていたな……しかも金欠病になりかかっていたし大丈夫か？試しにそのことを聞いてみると

「ああ、大丈夫だ。あれ結構安いし……」

少し目が死んで答えていたので多分大打撃だったのだろう。

「そうか……知らないことを聞いたな。すまん。ところで上条はいつも此処で何してんの？」

「ん？ああ、だいたいここで俺は土御門や青髪ピアスって奴とゲ  
ーセンで遊んだり駄弁ったりしているな」

そうか、あまりそうだったシーンが無いから知らなかったが記憶  
喪失以前もそうして遊んでいたのか・・・

ところで今は6月27日、上条がインデックスと出会う7月20  
日まであまり時間はない。ここは原作通りに進行させたほうが良い  
のかもしれないが・・・みすみす上条がそうなってしまふのは・  
・見逃せない。

「・・・い、おい、カミヤん」

「おつ、噂をすればなんとやらだな」

後ろから、金髪の青年と青髪の青年が近づいてくる。学園都市の  
多角スパイ、土御門元春と多分自分をも越えるオタクを誇る青髪ピ  
アスであった。

「よお、なにやってんだ？お前ら」

「ひどいぜよ、カミヤん。せつかく良い情報が入ったの部屋にい  
ないんだからにゃ」

「そうや！！なんと今度カミヤんの隣部屋に入る奴はかなりの美  
少女って話なんや。けっこう信頼できる筋からやで！！ってこい  
つ誰？」

「・・・会って早々こいつは無いだろう。という不満はおいとい  
ていたいどんな筋から聞いたんだか、そんな話。まあ自己紹介だ。



「どうも、今度、上条の隣に（此処だけ大きく言う）引っ越してきた数馬光太郎だ。よろしく」

そういった2秒後、青髪と土御門は半端ない落ち込み方をしていた……なんなんだよ。

「そうかぜよ……お前なんか……転校生……」

「何故や……どうなっとるんや……神は見捨てたんか……」

こいつらそんなに美少女に飢えていたのか……申し訳ないか。しょうがない奥の手だ。

「まあ落ち込まないでくれ。お近づきの印に俺の所持する123冊の同人誌を見せてやるよ。もちろんロリ系、シスコン系なんでもござれだ」

「よし、君とは仲良くやれそうや（だにや）」

「はやいなおい……」

上条、ナイス突っ込み。

「何をいうんや！！俺でさえなかなか入手できない同人誌を123冊やで！！友人にならなかつたら百害あつて一利なしや……」

「そうだにや……！！それにロリ系は見逃せないにや……！！」

「おい、おい、そこまで嬉しいなよ……」

そんなこんなで仲良くなっていく俺たち。俺は青春の記憶でこんなに簡単に友人を作れたものかと悩んでいた。

えっ、同人誌はどこにあったかったって？それは秘密さ

電子音が鳴り響くゲームセンター。俺たちは格闘ゲームで死闘を演じていた。

「とどめえ！！！！」

「まっ、また負けたにゃー！！」

「強よすぎやで数やん……」

「いったいどこでそんな腕にしたんだ？」

俺はいつのまにか数やんというあだ名で呼ばれている。……展開が早いのは自他共に認めるよ。

「H A H A H A！！なめるなよ、ゲーム界の四天王と呼ばれた俺の腕！！！！」

この後激闘の1時間が過ぎてゆく……

あたりは暗くなりつつあり、日は沈みかけていた。

「そろそろ帰ろうぜ、いいかげん疲れてきた・・・」

「若者がそんなこと言っただうする!!」

「お前もだろ・・・」

土御門や青髪ピアスはもう帰っていた。第6学区を見尽くした俺らは銀行が近くにある公園で「どろっ」としている青汁」を飲んでいった。滅茶苦茶まずい・・・

「いや〜楽しかった」

「そうか、土御門や青髪ピアス達もお前と仲良かったみたいだし、一件落着だな」

「こちらも満足した。いや〜このまま終わってくれれば

にっくにっくしてやんよ〜

「・・・」

「・・・」

どうして、初音ミクのつくつくしてやんよが……

「数馬……電話出たらどうだ？」

「ああそつだな……」

今から考えてみれば無視すれば良かったとつくづく感じたことが始まる。

ちなみにこの時には上条の中ですでに俺はオタクに中のオタクだ  
という位置づけになっていた……ORZ

友だちが出来ないほど気の毒なことはないね・・・(後書き)

活動報告で書いたとおり、3日間は更新できません。すぐに復帰しますよ!!

初任務の動機がある意味ひどいって？別に良いじゃないかHAAAAAAAAA！

山登りから生還しました！！！！いや〜しんどかった……

3話の現時点での日付を改訂しておきました。矛盾点が見つかったもので……

初任務の動機がある意味ひどいって？別に良いじゃないかH A H A H A H A ! !

S I D E 土御門

「いや、良い奴と出会ったもんだにやー。楽しみだぜい同人誌！」

「……にしてもだ。あのゲームセンター内での数馬の眼光の鋭さ異常だ。戦闘時における臨機応変な攻撃、ただゲームが得意なだけでは……ないはずだ。」

「どこかの組織に属しているとは考えにくいが……まあ今のところ敵対はしそうでもないから構わないかにやー」

勘違いにもほどがある土御門であった……。いいのかなこんな事書いちゃって？

S I D E 数馬

とりあえず上条から少し離れた場所で電話に出た。どうせ大天使が任務の連絡でも死に來たのだと思ったのだが……

「どうもこんにちは。任務のブリーフィングを務めるソロモン72柱の1柱の悪魔ゼパルです。以後よろしくお願いします」

予期せぬ人が登場してきたよ……すげー

「どうして……みゆきさん？」

「まことに申し訳ありませんが……全然関係ありません。すいません……」

ありやりや、落ち込んだよ。でもやっぱりらき すたのみゆきさんにそっくりだな。鮮やかな桃色の髪色。そしてトレードマークの眼鏡。唯一違うのは頭に甲冑があることか……

「悪い、悪い。気にしないでくれ、にしてもなんのよう？」

「あつ、はい。分かっていらつしやると思いますが任務を伝えに来ました。今回の任務はざり言う銀行強盗犯を捕獲することです。念のため言っておきますが殺してはいけませんよ」

……地味な任務ですな。

「お言葉ですがいくら地味な任務でもそれが達成出来なければ世界に多大なる影響が出てしまいます！！それを理解しててください」

「心読まれた！！ついでに説教された！！なんでみんな心読んできるとよ！！？」

「……それはともかく、任務において攻撃される銀行はあなたがいる公園の目の前にあります。犯行グループはスキルアウトの1グループです」



おいおい！！！！どうして心読めんだよ！！！！気になるじゃないか！！！！

「この任務が失敗すると天草式十字凄教が壊滅します」

よし！！頑張ろう！！天草式十字凄教が壊滅したら神裂が泣いてしまう！！！！

「注意点とかはないのか？こちらとしてもそれは絶対に成功したい！！！！」

「なんか理不尽なことでやる気出ていますね……………まあいいです。犯行グループは特殊な装備を所持しています。そのため……………」

## SIDE上条

「おかしすぎるだろ……………」

どうして……………銀行にトラックが突っ込むんだ！？

「もしかして銀行強盗か？だとしたらやばいな……………」

行ってみるか、不安だしな……………」

「おい上条。お前は行っちゃ駄目だぞ」

「数馬！！一体いつのまに来てたんだよ・・・」

「影が薄いと言いたいのか？この野郎」

「いやそう言うわけではないぞ！！」

へんな誤解もたれちゃ困るぞ、おいおい。

「とにかく、上条は不幸が多いからな、最悪なケースになりかねん。俺が行くよ」

「いや待てよ、そこでどうやったらお前が行くことになるんだよ。お前もレベル0のはずだ。それだったら2人で行った方が良くに決まってるだろ！！」

「あゝそこはどうでもいいから、とりあえず行ってくるわ」

「どづいづことだよ・・・っぐ！！」

突然、腹部に衝撃が来たかと思うと目の前が暗くなっていく。最後には悲しそうな顔をした数馬の姿があった。

目の前には腹部を押さえて倒れている上条がいる・・・最悪の方法だったな。しかしやむを得ん。

「任務の遂行は1人でしなければいけない。上条は俺から見れば史上最高の人格者だ。間違いなく銀行に突入しちまうからな」

まかり間違えれば死んでしまう。上条に限ってそんなことはないと思うが何には念を入れてだ。ここで上条が死んでしまえばインデックスは誰が救えるんだ・・・

「せっかく友人ができたんだがこんなことしちまえば険悪な間柄になるな。女性フラグの増加はユメと潰えたか・・・」

兎にも角にも銀行に突入だ。

「こりゃひどいな・・・滅茶苦茶だ」

辺りは砂埃が舞い、ATMは大破し札が散らばっている。それをごそごとと漁っている人影が12人。犯行グループだろう。今は崩れた壁の物陰に隠れているから気づかれてはいないはずだ。

「よっし、特殊装備も装備した。初任務だ、気張っていくか」

走り出そうとしたその時。

「お待ちなさい！！！」

壁がぶっ壊れて光が差している反対側から鈴のような声が聞こえる。もしかや……

「ジャツジメントですの！！！貴方たちを器物損壊及び強盗の罪で拘束します！！！」

白井黒子だよ……来るのが早ええ！！！！

「黒子、さつさと始末しちゃうよ！！！」

……えっと、りんとした美しい声が聞こえたな……嘘だろ、おい

「お姉様？一般人は立ち入り禁止ですよ。早く戻ってくださいな！！！」

「いいじゃない。私がいた方が確実に犯人をとっちめられるですよっ？」

御坂美琴だあああああ×！！！！！！こんな時に限ってええええええええええ！！！！任務達成が不可能に近くなっちまった！！！！！！

「あああん？なんだ、小娘どもがジャツジメントだと？笑わせてくれるぜ」

なんか生理的に受け付けられない声かと思うと犯行グルー

プの1人が顔を上げた。……やっぱなんか生理的に受け付けない顔だ。

「そんなに笑っていると後悔するのはそちらですよ？」

「そりやまあてめえらが能力者だって事は分かっているよ。だからこそこれがあるんでね！！！」

そう言つと生理的に受け付けられない顔をした男は腕時計に似た物のボタンを押した。一瞬にして周りに雑音のようなものが響く。

「な、なんですよ？急に変な音がつ、能力が使えなくつ」

「な、なによ……こ、れ……」

もがき始める2人。

「やったぞ！！！能力者がもがいていやがる！！！おいみんな見る！！！！」

生理的に受け付けられない顔の男がそう言つと他の奴らも札を回収するのを中断しぱつと顔を上げる。……いらいらする顔の奴らばかり

「おお！！！すげえ！！！やっぱりその機械は使えたんだな！！！」

奴ら……能力妨害音波装置なんかを持っていたとはな。ゼペルの言つとおりだ。にしてもやけに小型だ。キャパシティダウンでもAIMジャマーでもないようだし、奴らのオリジナルなのか？

「当たり前だ！！！！俺は元は技術者だったんだ。見習いだけどな

！！！！4ヶ月間も苦勞して能力者が能力を使用できない音を見つけたんだ！！！！これで俺たちは能力者に勝てるぞ！！！！」

「……………なんつー強運なんだ、生理的に受け付けられない顔の男。まっ、どうでもいいけどな」

「ボス、この小娘どもをやっちまいませうぜ。なかなかの上物なんだしいぐべえ！！！！！！」

とりあえずとんでもないこと言った右後ろのデブ野郎に重力を極限まで軽くし物陰から一瞬で接近。今度は足の重力を重くし思いつきり溝撃ちにけりを入れる。

「な、なんだてめえ！？」

犯行グループのメンバーは全員驚愕しているが関係ないね。

「てめえら五体不満足で入れると思うなあああああ！！！！！！！！」

フラグ対象者にやったことを10倍にして返してやるわ！！！！！！！！

S I D E 数馬、暴走したため S I D E O U T

S I D E 御坂美琴

カオスになっているわね……………目の前には高校生らしき男が強盗どもをふるぼっこにしているし。頭がガンガン痛んできて能力が使えなくなっているし……………

あつ、あいつ後ろから殴られそう。と思ったらあっさり避けて反対に相手をぶん殴った。それよりなんであいつピンピンしているの？

「おらぁ！！！」

「あああ！！じゅ、銃が！！！！折れた！！！」

「ナイフまで折れやがったぞ！！！」

あいつ重力を操るみたいね・・・強盗どもの武器、どんどん壊れていくわ・・・

「や、やべえ！！！！なんであいつには音が効かないんだよ！！！」

能力者のはずなのに・・・なんで・・・ってやばいわ。何も考えないほうがよくなってきた・・・

御坂美琴 SIDE OUT

SIDE 数馬

残りはあの生理的に受け付けられない顔の男一人だ。

「HAHAHA！！！！死に方OK？」

「ひい！！！！やめろ、やめてくれ！！！！頼む、許してくれ！！！！」

「いや、許しはしないね。相当痛くしてあげるさ。覚悟死やガレ  
（ぶあっはっはっ！！」

そういうと俺は男の腕時計をぶっ壊し、顔面にグーで殴つといた。  
「応能力は使用していないぜ？」

男は完全に気絶。南無三。

こうして、俺の初任務は終了したわけだが・・・まさか不幸フ  
ラグがこの後立つとは全然考えていなかったよorz



初任務の動機がある意味ひどいって？別に良いじゃないかHAAAAAAAAA！

とりあえず更新です。矛盾点ありまくりで申し訳ありません。

任務の時には慎重に！！！byゼパールさん（前書き）

第6話です。いやゝ展開が早すぎて論外な文章に……

任務の時には慎重に！！！！byゼパールさん

SIDE数馬

終わったよ。任務達成だよ！！やつしやああああ！！！！！！

「よしこれでOKだ。後は……」

目の前でふらふらな御坂美琴（と白井黒子）を看護するだけだ。  
よししフラグ立てるぞおお！！

「大丈夫か？怪我はないか？」

「うん……まだ、頭が辛いけどもう大丈夫だね。ありがとう、  
助けてもらっちゃって」

よし、よし、好印象を与えたぜえ。なんか御坂美琴が素直なのはスルーするぜえ。

「そつちも大丈夫か？」

ついでに白井黒子にも恩を売るところ。フラグ作って別に損はないからな。

「ああ、ありがとうございます……事件解決にご協力いただき感謝  
しますわ……でも……」

ガシャン

あれ？不思議な音が・・・手首に堅い物が・・・

「あなたを暴行罪及び傷害罪で逮捕しますわ！！」

ええええええ！！！！何でええええ！！！！

「ちょ、ちよつと黒子！！！逮捕つて何よ！！この人一応恩人ですよ！！！！」

「お姉様。彼は一般人の部類に所属します。専門外の行動、すなわちこちらの特権が無い者が能力を行使することは犯罪にもなるのですよ」

「じゃあその人はどうなるんだ！！」

「お姉様は特別です！！！！」

「ある意味、差別じゃねえか！！」

「犯罪者はお黙りなさい！！！！」

ひでえ、しゃべらせるよ！！これでも主人公だぞ！！えっ楽屋ネ  
夕禁止？つてそれどころではなく！！

「とにかく、あなたをアンチスキルに引き渡します！！」

「ああ！！ちよつと待っておいこら！！ぎゃあああ！！痛いです  
つて！！髪ひっぱんな！！やめる！！やめないとお前が最近スウイ

ーツ系の物食べ過ぎて体重が増えてきてダイエットしようか悩んでいること言いふらすぞ!!!!」

・・・あ、やべえ。死亡フラグつくちゃった 白井さんが黙りこくってストップしたぞ・・・

「・・・・・・・・一体どこで・・・その情報を知りましたの・・・」

「えっ、黒子、もしかして本当なの？それ？ぷぷっ」

やばいー白井さんからダークオーラが来てるー御坂さんー笑いこらえてないでフォローしてー

「えつと・・・どこだったかなー」

「殺してやりますわ!!!!!!」

殺気を感じ取り体の重力を重くし白井の手から離れる。

ズガガガガ!!! ガス!!!

足下に12本の釘が刺さる・・・・・・・・人生オワタ＼(＾o＾)ノ

数馬、精神的な混乱によりSIDE OUT

ー男が女性に手を出すのは大嫌いだ!!との理由で反撃できずフルボッコにされていますので少々お待ちくださいー

SIDE 御坂

修羅場ね……あいつ反撃していないから黒子、完璧にポッコボコにしてるわ。このままじゃ死亡確定ね…

可哀想だから止めてあげるか

「黒子」

「なんですの！！お姉様あうひやつああああ！！」

弱電流を流して気絶成功。あとで謝らないとね。ところであいつを見てみると……あゝあ、顔に青あざなんか出来ているわ。

「大丈夫？あなた。黒子が怒ったのは自業自得かもしれないけど一応助けてもらったしね。黒子には後で説得しておくから安心しなさい」

「す、すまない。助かったよ…」

余りよく見てなかった顔だけど、良い顔立ちじゃない。まあ青あざで台無しだけど…

「まったくあなた、どこでそんな情報知ったんだか。それにしても……あなたどうして能力が使用できたのよ？あいつらの機械で私でも身動きが取りにくくなっていたのよ」

「ん……これは御坂さんには教えても良いかな」

そついうと耳から耳栓の様な物を取り出した。

「何よそれ？耳栓なの？」

「いいや、違う。これは能力妨害音波破壊装置っていう代物だ。ドイツ第3帝国が製造したらしい」

「一体どんな仕組みになっているのよ・・・そんな小型で」

製造国がおかしいのもすごく気になるけど・・・

「能力妨害音波には12段階の音が合成されているらしい。しかし、その中核をなしている音はそのうちの4段階のみ。これを遮断すれば能力の妨害は出来なくなる。それをするのがこいつの役目だ」

「なんか納得出来ないわね・・・だったらその4段階の音だけで作ればいいじゃない」

「それなんだがどうやら音波は4段階の音と他の音を組み合わせることで能力を使用不可に出来る仕組みらしい。例えて言うなら積み木で城を造るとき1つの大きい積み木じゃ出来ないがそれに小さな積み木をあわせれば出来るというのが同じようなもんだ」

以外とわかりやすい説明ね。これで納得したわ。ってそういえば・・・

「あんだ、どうしてあたしの名前を・・・!？」

そこを見るとそいつはいつの間にかいなくなっていた。

「素早いわね・・・いつのまに消えたんだか。まあいいわ。またあいつとは会いそうだしね」

御坂SIDEOUT

SIDE数馬

いや〜苦労した。まさか白井黒子にフルボッコにされるとは・・・痛ててて。顔がズキズキする。

「そっぴや上条、どうしよう・・・」

あの時、かつこつけて腹部殴っちゃったけどなあ。苦しい決断だったことは否めないよ。

「公園に寝転がっているか？っていたよ・・・」

ぐでんとして気絶している上条。考えてみれば40分しかたっていないことに気づいた。

「起こすか・・・お〜い起きろ上条」

「ううん・・・数馬・・・か？」

「おう、起きたか」

「おい！！！！なんで急に殴ったりなんか、ってお前その傷・・・」

上条、起きてから直ぐにしゃべりまくれるのが君なのか・・・



「ん？ああこれはまあ少しばかり色々あってな」

「・・・数馬、お前まさか俺に不幸フラグが起きて怪我しないように殴ったのか？・・・」

あれ？なんか変な方向に進んでいないか？

「え、いや、その、まあ」

「・・・あのな数馬、確かに俺はレベル0だよ。でもなお前1人でいるんなこと背負っていったら見てるこっちだって助けたくない。少しぐらいは俺に頼ってくれ！！ほとんど役に立たないかもしれないけどな！！」

ドカーンと俺の脳内で革命が起きた。上条当麻の位置づけが史上最高の人格者から神へと進化したよ！！！！

「・・・ありがとうな」

「別に構わないぜ。お前にはけっこう励まされたりもしてるしな。まっ、とりあえず帰るか」

「そうだな」

「そういえばさつきレベル0って言っちゃまったけど本当はいくつなんだ？」

・・・考えてみれば上条の学校、無能力者がほとんどの学校だ

っただんだけ・・・レベル4はいないよな。

「・・・・・・・・ノーコメント」

「ええ！？そこは気になるだろ！！」

・・・・・・・・結局、この後レベル4だと言つことを白状し、転校してきた理由を前の学校で問題がどうのこうのとごまかしていたが・・・あまりにもひどい言い訳だったと思うよorz

任務の時には慎重に！！！byゼパールさん（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

夏休みが始まる22日前に期末テストがあるってどうなの！！？？（前書き）

第7話です。いや〜猛暑ですね。きついです・・・

夏休みが始まる22日前に期末テストがあるってどうなの!!!???

SIDE数馬

昨日・・・俺は任務をクリアした。白井黒子にフルボッコにされた。上条の人物像が神に進化した。などいろいろあったが・・・

「どうして期末テストが転校初日にあるんだ!!!」

今朝、俺は7時に学校へ向かった。そして月詠小萌先生に対面。ここで万歳三唱をしたかったのだがさすがにひかれるのでやめておいた。

つで、小萌先生が最後に放った一言が致命傷となって俺に襲いかかった。

「数馬君には申し訳ないんですけど今日から期末テストがあります!」

.....orz

そんでもってただいま絶賛勉強中!!!今の時間は8時13分!!!不幸だああああ!!!

「大丈夫だ数馬・・・俺なんか全く勉強していない」

「そうだにやー大丈夫だにやー。赤点とるのはカミヤんと相場が決まっているんだぜい」

「そつや、そつや。これが覆されることはないんや」

「さすがにその言い方はないだろう!!てめえら!!」

「・・・少し黙っててくれ、集中できん」

こつなったら当たって砕けるだ。H A H A H A H A!!!!!!どうせテストなんてくそども（小萌先生など数名をのぞく）が作った生徒を苦しめるための・・・

くブラックモードになったのでカットく

「それではテストを始めるのです!!」

スタートしたよ、期末テスト。最初の科目は数?。こつなったらやるしかない!!!

## 問題

(1) 男子4人、女子3人が横1列に並ぶとき、男子と女子が交互に並ぶ場合は何通りあるか?

(2) 1個のサイコロを5回投げたとき、2以下の目が3回出る確率を求めよ。

(3)  $180^\circ$ 、 $270^\circ$ 、 $\cos$ 、 $\sin$ 、 $\frac{3}{4}$  のとき、 $\sin$  の値を求めよ。

(4) ABCにおいて、 $a=3$ 、 $b=7$ 、 $C=150^\circ$  のとき、 $c$  の値を求めよ。

(5) 2次方程式  $2x^2 - 4x + k - 1 = 0$  (2エックスの二乗 - 4エックス +  $k - 1 = 0$ ) が解を持たないように、定数  $k$  の値の範囲を定めよ。

・・・いけるかもしれんな。とりあえず解いてみよう。

(1) 交互に並ぶ並び方は『男1女1男2女2男3女3男4』しかないはず。

だから『男』の並び方は  $4! = 4 \times 3 \times 2 \times 1$

男1の可能性は4通り、男2の並び方は男1で並んだ人を除いて3通り、男3の並び方は男1、男2で並んだ人を除いて2通り、男の並び方は残りの人だから1通り。これらは同時に起こらなければいけないから、積の法則を使う。

同様にして『女』の並び方は  $3! = 3 \times 2 \times 1$

以上より交互に並ぶ並び方は、同時に起こるから積の法則を使い  $4! \times 3! = 144$  (通り) となる。

(2) 2以下が出る確率は $1/3$ 、それ以外が出る確率は $2/3$ 。  
これを踏まえて考える。

5回投げて、2以下が3回出る組み合わせは、5個の場所から3個をとってくる組み合わせなので、 $5C3$ より1通りあるため、  
 $5C3 \times (1/3)^3 \times (2/3)^2 = 40/243$  になるはず。多分だが・・・

(3) 三角関数の相互関係『 $\sin^2 + \cos^2 = 1$ 』を使う。

(4) 余弦定理の式に代入してしまえばおしまいの問題だ。

(5) この問題では判別式をとる方法が一番!!!

次だ。まあOK。次の問題は・・・

これは・・・普通か。少し自信がないな。それで次は・・・

・・・簡単だな。

やっと最後か・・・

問題

2次関数  $f(x) = -2x(2x + 4a) - 4ax - 4a + 10$  ( $a$ は定数)がある。



Q.  $a = 1/2$  とする。  $-t \leq x \leq 2t$  における  $f(x)$  の最小値が  $-4$  であるような定数  $t$  の値を求めよ。  
ただし、 $t < 0$  とする。

.....これどうやったかな.....

（3分後）

$$a = 1/2 \text{ だから } f(x) = -2x^2 + 2x + 8 = -2(x - 1/2)^2 + 17/2$$

確かこのグラフを描いて考えると、上に凸なので  $f(x)$  の最小値が  $-4$  ということは少なくとも  $-t \leq x \leq 2t$  の端点の  $x = -t$  または  $x = 2t$  の値が  $-4$  になることが必要になるはずだ。

やばい、時間食ったな。残り五分か.....

$$\begin{aligned} f(-t) &= -2t^2 - 2t + 8 = -4 \text{ のときを調べると} \\ 2t^2 + 2t - 12 &= 0 \\ t^2 + t - 6 &= 0 \\ (t+3)(t-2) &= 0 \\ t &= -3, 2 \\ t > 0 \text{ より } t &= 2 \text{ で、しかしこのとき } f(2t) = f(4) = - \\ 32 + 8 + 8 &= -16 \end{aligned}$$

よって  $-t \leq x \leq 2t$  における最小値は  $-16$  になってしまっ  
てこれは不適だ。

$$f(2t) = -8t^2 + 4t + 8 = -4 \text{ のときも調べると}$$

$$8t^2 - 4t - 12 = 0$$

$$2t^2 - t - 3 = 0$$

$$(2t - 3)(t + 1) = 0$$

$$t = 3/2, -1$$

$$t > 0 \text{ より } t = 3/2 \text{ で、このとき } f(t) = f(t) = -3/2$$

$$= -9/2 - 3 + 8 = 1/2$$

よって  $-t \times 2t$  における最小値は  $-4$  となる。

したがって  $t = 3/2$ 。

キーンコーンカーンコーンー

「はい、終わりです。後ろから集めてくださいー」

「良かった。間に合った……」

ひとまず安堵する俺。うまくいった自信はある。試しに上条や青髪ピアス、土御門を見てみると……

「(――――)」

上条……死んだか。

「(――)ニヤリッ」

青髪ピアス、お前確か小萌先生に「テストで良い点とったら一者に焼き肉食べましょう!」とか言われてたんだよね……

「(、)、( )。○ ボケ」

土御門はあきらめているな。駄目だこりゃ・・・

「こんな調子で5教科続くのでカット、ってこの学校1日で全教科済ませんの!??」

最後に超能力のテスト。大半が記述問題で出来ている模様だ。

問題” 次の能力の効果などを記述せよ

- (1) 空気風船 エアバッグ
- (2) 視覚障害 ダミーチェック
- (3) 火炎放射 ファイアスロアー
- (4) 肉体再生 オートリパース
- (5) 読心能力(サイコメトリー)

「……………我が青春に誉ありいいいいい!……全部答えられるぜえええええ!!」

(1) 空気風船 エアバック

防護系能力の一つで、空気の粘度を高め緩衝材に変える事が出来る。

(2) 視覚阻害 ダミーチエック

対象物を『見ている』という認識そのものを阻害することで、誰からも見えなくなることができる。

発動中は対象者の目の前に居ても肉眼では捉える事が出来ず、例え目の前で能力を使われようと完全に認識不可能になる。

ただし、『見ている者の認識に干渉する』関係上、直接肉眼で見ない場合……つまり鏡や監視カメラにはばっちり映ってしまう。

(3) 火炎放射 ファイアスロア

腕の延長線上に炎をばら撒く能力。

(4) 肉体再生 オートリパース

肉体的損傷を回復させる。

(5) 読心能力 サイコトリー

人の心を読んで犯人の似顔絵を描いたり、遺留品から相手の行動を読む事が出来る。

問題” AIM拡散力場の特徴、効果を記述せよ

俺はこう書いた。

AIM拡散力場はとても微弱で、精密機器を使わなければ人間には観測できないレベルであるが、千差万別の力や種類を持つ現実に対する無意識の干渉であるこの力場を探ることで、

能力者の心や『自分だけの現実』 パーソナルリアリテイを調査することもできる。

研究を進めれば「ムツ、能力者の気配がするぞ」「ムツ、奴の戦闘力は530000だ」といった少年マンガよろしくな探索も可能である。

……4 / 5行目は削除しようかな。

その後なんやかんや問題があったもののだいたいクリアしていきテストは終了した。いや、苦労したね全く……

ちなみに今後一切こんな話は無いと思われるので順位を先に行っておこう。

数馬 17位

上条 234位

青髪 28位

土御門 57位

この順位が発表されたその後、上条から勉強教えてくれ！と言われてしまった……

ついでに言えば青髪ピアス、小萌先生と焼き肉に行けたそうである。良かった、良かった？

夏休みが始まる22日前に期末テストがあるってどうなの！！？？（後書き）

今回は・・・すげーつまらないですね・・・

## 毒蛇（前書き）

えっと今回は試しにというのも失礼ですが真面目な任務にしてみます。

## 毒蛇

### SIDE上条

テストが終わった（2つの意味あり）後、俺、土御門、青髪ピアスは数馬の部屋に来ていた。俺はただ単に遊びに来ただけだがこいつらは同人誌をもらいに来たのが大半の理由らしい……………

「お前らもよくやるよ……………」

「当たり前や！！！」

「絶対同人誌は持って帰るにやー！！！」

「はいはい、待っててくれ、今持ってくるからその辺でくつろいでろ」

そう言つと数馬は台所に向かつていった。……………なんでそんなところにあるんだ？

「しっかし初めて来たな、数馬の部屋。以外と綺麗に整頓している……………って何だこれ、CDか？」

突然、青髪ピアスと土御門が接近する。

「うわ！！何だよ！！！」

「カミヤん、ちょっとそれ見してみい！！あいつのことだからとんでもないCDや！！！」



「もしかしたらあの「お兄ちゃんと呼ぶ妹の声」のCDかもしれないにゃー！！！」

2人とも最早私利私欲のために動いているぞ……………あと土御門。それ持っているのはお前だけだ。

「なんでそっちの方向に頭が行くんだよ……………」

ただこちらとしても気にはなったので数馬には悪いと思いつつ、CDのパッケージを見てみた。

ワルキューレの騎行 ワーグナー

「……………意外すぎる」

「そやな……………そっちはどうや？」

「駄目だにゃー……………これボレロだぜい……………」

この後、青髪や土御門はあきらめきれずに変なCDを探していたが見つからずじまいだった。

今日は数馬の以外すぎる趣味を知ったな。で、数馬にどこが好きなのかと聞くと

「薄汚れきった世の中全てを忘れさせてくれるからね……………」

悪い、聞かなかったことにする。

ちなみにあの後青髪達は同人誌をたんまり貸してもらっていた……  
……そこまで興味あるのか。

上条SIDEOUT

SIDE数馬

いや〜あいつら53冊も借りて行きやがった。無くさなきゃ良いが。後クラシックが趣味なのはオタクになる前からだったが……  
……まさか女神、俺が持っていたやつ全部置いといたのか。

「テストも終わり、気分は快晴の6月28日！！後はなんにも、特に任務の連絡が来なければ……」

どうか嘆かないで。

世界があなたを許さなくても、私はあなたを許します。

どうか嘆かないで。

あなたが世界を許さなくても、私はあなたを許します。

だから教えてください。

あなたはもうしたら、私を許してくれますか？

「……………何故にひぐらしの鳴く頃にが着信音？」

すげーテンション下がる……………任務があることも、着信音がひぐ

らしの鳴く頃に、になっていることもである。

「で、誰からだ？」

今回もまたらき すたキャラに激似のお偉い人達が出るのだろうけど……………

ピッ

「お久しぶり〜大天使だよ〜」

……………これは意外だ。久しく見なかったかった大天使さんじゃありませんか。

「あれ、新キャラじゃないんだな？」

「残念ながらこちらも、こんなことに回す予算は無いんだよ。制限があるからね〜」

ものすごく悲しくなるな。俺のことってそんなに重要じゃないのかよ。

「ていつかゼベルさんは？ブリーフィング務めるのあの人じゃないの？」「

「それは今回がガチンコでやばい確実に生命を危険にさらす任務だから。私自らが勅命しにきたんだよ〜すごく大変だけどよろしくうー！ー！」「

えっ、ガチンコでやばい任務？……………

「ちよつと待てえええ!!!何だそれ!!!俺転移してから1日しかたつていないんだぞ!?!」

「冗談じゃない!!!」

「ごめん。……………予想外に最悪なことが起きちゃって」

あれ、急に暗くなったよ雰囲気・・・そして大天使の顔が悲しそうになるのが分かる。ああすいません!!!

「でも一体どんな任務なんだ?」

「うん……………第2学区は知っているよね。任務場所はそこにある1つの大型工場」

「第2学区つて爆発物や兵器の試験場や工場があつてアンチスキルやジャッジメントの訓練所があるところだっけ?」

いかにもやばそうな所だな、おい。

「そう、ついでに聞くけど生物兵器禁止条約、通称BWCは知っている?」

「えつと細菌兵器(生物兵器)及び毒素兵器の開発、生産及び貯蔵の禁止並びに廃棄に関する条約だったか?学園都市も加盟しているのか?」

「そうだよ、だけどそれは国際的に良い国家だと見られたいから加盟しているだけで実際は大量生産している。諸外国に売る気はな

「いみたいなんだけど。今回の任務はその生物兵器が大きく関連している」

「えっと、つまりあれですか……………」

「バイオハザードみたいなことをしると!？」

「それとは違うよ。悪い方向でね」

……………悪い方向で？

「そう、バイオハザードでは最初に人間のゾンビが大量に出てきたでしょ？」

「あゝそういえばそうだったな。」

「今回の任務はバイオハザード5ボス、ウロボロス・アヘリの20〜30倍は強力な怪物1匹の抹殺だから……………死なないでね」

「なつ、そんな化け物を……………か？」

「ウロボロス・アヘリはバイオハザード5の後の後に出てくるボスである。やつかいな相手らしい。(友人談)俺はあまりやったことはないが……………友人の涙目から大方の予想がつく」

「そんな強力な化け物なんか抹殺できることは……………無理だろう……………」

「この任務は突如出現したからそれ相応の対価3400万円を支払うよ。頼んだよ、この任務が失敗すれば第二学区の住民は最低8割が死亡するからね……………」

でも……………人が死んじゃうんだったらやるしかないか。

「……………分かった。やるよ。だがそんなの相手するのに俺の能力だけじゃ対処不可能だろ？」

「そのためのアタッシュケースLサイズだよ。中に強力な銃器や道具が入っているから補助としてそれを使って。名称はこの紙に書いてあるから」

ひらりと紙が落ちてくる。なんでもありだなおい。

「それとタイムリミットは明日の4時30分。それをすぎると怪物は工場をぶっ壊してしまうみたいだから注意して」

「……………その怪物はどんな奴なんだ？」

聞いても意味はないとは思うが分かればなんとなく安心するかもしれない。

「……………ごめん。私達でもそこまで予知や探知が出来ないんだ。しようとするとなにか悲鳴や気持ち悪い雑音が入ってまったく分からない。しかもすつごく強力な呪いの音楽がその中にかかっている……………仲間も2人、精神が崩壊しちゃって……………うっ、ひぐっ、」

思い出したかのように声がかすれていく大天使。おい、おい！！  
！なんすかそれ！！？やばい。本当に泣きそうだぞ！！

「レミエル……………カマエル……………うっ、うわああああん

「！！！！！！！！」

「な、泣いちゃったよ！！！！こなたが泣いたよ！！！！どうするこの状況！！！！」

「な、泣くな。大天使だろ！！大丈夫だよ！！お前らみんな偉大なる大天使だろ？」

「えっぐ、……………分からない、今まであんなことなかったから……………」

むむむ……………こうなったら最終手段！！

「じゃあ上条の力を借りてみようぜ！！！！あいつの幻想殺しだったら呪いだつて一発だろ？」

「……………あつ、その手があった……………」

きよとんとした声を出し、泣き止む大天使。あつさりだな……………

「今度、また無理矢理でもいいからそっちに行かせろ！！連れてきてやるから！！」

「分かった……………」

「じゃあ行ってくる！！必ず生きて帰ってやるぞ！！」

勇みながら出陣してやるよ！！！！今は午後6時23分。残り時間は約10時間と行ったところか……………  
とりあえず電話を切ろうとしたところ……………

「待って!!!!」

急に、大天使に呼び止められた。

「なんだ？」

大天使は無理に元気を出させてるような声を振り絞る……………無理するなよ……………

「必ず、生きて帰ってね!!!君には最高のフラグを1本用意するから!!!!!!!」

本当に、けなげでかわいく見える顔をしながら大声で言う大天使。やっぱり可愛いと思うよ。

「ああ……………楽しみにしてるよ」

そう言つと電話を切り俺は外へ出て行った。

数馬SIDEOUT

大天使ミカエルSIDE

行っちゃたよ……………生きて帰ってよ、絶対。

「最高のフラグを無駄にさせないでね……………」

……………とにかく、今はレミエル達の看護をしよう!!!!!!絶対



に助けてあげるからね!!!

大天使ミカエルSIDEOUT

SIDE数馬

「ここか……」

俺は今第2学区の工場に来ている。はっきりいうと滅茶苦茶でかい。ここ、本来は立ち入り禁止だがアタツシユケースに入っていた透明マント（決してドラ えもんとは言わないでくれ……）で警戒網を突破して今に至る。

そして顔には絶対に付けた方が良くと紙に書いてあったガスマスクとヘッドライト付きのヘルメットを装備している。体全体は薄い布のような素材で出来たSATの服装に似ている物を着用。紙には毒素を吸収せずグレネードランチャーだったら軽く跳ね返せるぜ！と書いてあった。

「とりあえず中に入ってみるか」

裏口のドアを見つけると鍵はついてなくあっさりと中に進入できた。しかしすぐに12桁暗唱文字付きのドアにぶち当たった。

「めんどくさいからなあ……………basilliscusでどうだ？」

勘だからあくわけ無いよな……………

ガガシュン!!

「開いちゃったよ……………」

中にとにかく突入。ドアはちゃんと閉めておきました。

「……………なんだこの気体……………」

中は少し暗く、何故かうっすらとどす黒くも見える紫の気体がうごめいていた。はっきり言うと気持ち悪い。

「もう少し奥に進んで……………ん？」

コツンと足に何かが当たる。なんだろうと思いついてみると俺は一気に寒気と吐き気を感じた。

男の死体だった。

「ぐえええ……………」

2巻で上条が死体を見たとき嘔吐していたがこんなにもなるのか

……………

本当に吐きそうだったが何とか飲み込み、その死体を見つめる。

思いつきり嫌気がさすが……………

男の顔は紫に変色していた。眼は腐敗しているように見える。口からは赤ではなく何故か灰色の血液が流れ出している。

「もしかして毒ガスか？」

だとしたら此処に漂っているのはすべて毒ガスってことか。

「大天使に感謝だよ、まったく……………」

毒ガスの元を立たないとまずい。ヘッドライトを付けて探してみるか。

「こっちか……………」

毒ガスは奥のドアから流れ出ている。しかも若干ではあるが、濃いようにも見える。こちらには暗証文字はついていないみたいで簡単に開けられた。

「階段か……………」

目の前には少し急な階段があった。……………なんか液体で汚れていてまたもや死体があつて上る気力はしない。

「しかも、なんだろうなこれ」

ばらばらとたくさん20cmくらいの先がすごく鋭利な刃物？が落ちていた。試しに拾ってみる。ただ死体があり止まりたくないの  
で階段は歩き続ける。

「変な形だな……………なめらかな曲線になっている。まるで牙みたいな……………」

ふつと思いついた。さっきの暗唱文字、basilliscusだったよな……………一応、大学でラテン語習ったんで読める。さっきは適当に押したから気づかなかつたがこれ、ラテン語でバジリスク、

ヨーロッパで蛇の王と言われた架空の動物のことだ。

「しかもこの牙、蛇の物に見えるからな……………」

階段が終わったかと思うと1辺50mはありそうな広い部屋に出た。崖みたいたなくぼみが下にありに何故か水がたまっている。

「だとしたら任務のお相手は……………」

ギシャアアアアアアア

突如として水から蛇が出る。それも出ている分だけで30mはありそうな大蛇が。

「こいつか！……………」

こうして命をかけた俺の大バトルが始まった。

「くそがあ……………」

思いつきり大蛇は襲いかかってきた。暗闇で過ごしてきたのか眼は見えなくなっているようだ。コンクリートか何かで出来ている壁が木っ端みじんになる。

蛇は温度や音で獲物を探すと聞く。多分足音で位置を察知されているだろう。ヘッドライトは消したほうがいいのだがそれを見ると視界が悪くなるから駄目だ。

「いったん逃げるか!?…………… って閉まってる!?!」

どうやらドアは外からしか開けられない仕組みになっているらしい。多分えさが逃げないようにしてあるのだろう。これぐらいの大蛇だ。多分餌は…………… 考えないようにしよう。

ギヤアアアアア……………

大蛇が口を開けたかと思うと小さな、といっても20cmもある鋭利な牙が飛んでくる。さっきの死体もこれでやられたのか……

「だが遠距離系の攻撃は俺には効果が出にくいんでね!?!」

自分の周りの重力を大きくする。もちろん自分に負荷を掛けないようにだ。俺の目の前に来た牙は粉々に砕けていく。

「これでも喰らえ!?!?!?!」

大蛇の顔の周りの重力をおおきくする。これで奴の顔は潰れるはず!?!

ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!

ところが大蛇はピンピンしており叫び声を上げながら突っ込んでくる。

「効いていない……………どういうことだ!？」

大蛇の鱗の隙間から何かどろつとした液体が噴出している。……  
あれで能力を遮断しているのか。  
しかもそこからは紫の煙……………毒ガスまでもはき出している。

「随分用意周到じゃないか!?!」

そういつと俺は自分の体の重力を軽くし部屋の中をぐるぐると逃げ始める。とにかく作戦の立て直しだ。

グギヤアアアア!?!

遠距離系の攻撃が効かないと判断したのか大蛇は体当たりや噛みつきで攻撃してくる。目が見えないのではないのか!?!そんなに知能が高いのか!?!

戦いのさなかで、そんなことを考えていると、すでに大蛇が近くの壁を壊した。

「くそ!?!真後ろまで来やがった!?!早すぎる!?!」

くそ!?!反撃ができない!?!どうする、どうする!?!

「…………あれ?なんだこれ?」

ポケットに手が触れたとき堅い感触があった。アタッシュケース

だ。

「そういえば大天使がこん中にいろいろ入っているって言ったよな!？」

「だったら使うしかねえ!!!!!!走りながらも急いでアタッシュケースを手につと名称を言う。」

「兵器番号001、出現せよ!!!!!!」

紙にはこれしか書かれていなかったからな。何が出るのか……  
って急に手に重みが!？」

「なんだこれ!？」

いきなり銃が出現した。しかも思いつきりSFばいやつが!!

「このさいどうでもいい!!!使い方は!？」

よく見るとハンドガード(被筒)にボタンが2つある。それぞれ単射・連続照射と横に書かれている。とりあえず連続照射を押して引き金を引く。

「あれ!？」

弾が出ない!?!故障!?!

「そんなわけあるか!!!!!!」

突如として大天使の声が聞こえる。

「大天使！！？どこにいるんだよ！？」

「君のヘルメットに無線がついているんだよ！！ところでその銃の引き金の近くにレバーがあるはず！！」

見てみるとレバーがありカタカナ表記がされている。

「それは安全装置だよ！！上から安全Ⅱア、単射Ⅱタ、連射Ⅱレになってるからレバーをレにして！！！！！！急いで！！」

「分かった！！！！！！」

とにかくレバーを一番下にする。

「目標はいる！？」

「真後ろにな！！」

「じゃあ撃って撃って撃ちまくって！！！！」

言われなくても分かっている！！！！！！俺は後ろを向くと大蛇に発砲した。

普通の銃とは完璧に違う音が鳴り黄緑に光る弾道が小刻みに撃ち出されていく。大蛇は予想外の攻撃により避けられずすべてクリンヒットする。



ギヤアアアアアアアアアア!!! グギヤアアアアアアアアアア!!!

大蛇の顔から血しぶきが大量に上がる。顔が徐々に滅茶苦茶になっ  
ていく。肉片がそこらに散らばる。

「よっしゃああああ!!!」

やっと敵に与えた打撃に喜ぶ俺。しかし大蛇はその痛みも気にせ  
ずまたもや突っ込んでくる。

「やべえ!!!」

また俺は逃げ始める。この部屋は滅茶苦茶広いのだがもう18周  
はしているので重力を小さくしても体力にも限界がある。それが災  
いして最悪なことに転んでしまった。

「くそが!!!」

急いで銃を大蛇に構えるが一瞬早く大蛇に体当たりされる。

「げはあっ!!!.....」

胸が強く圧迫され肋骨に不自然な音が響く。口からは胃の中にあ  
ったものが吐き出される。この転移初の重傷を負ったときだった。

ガスマスクの中がどうも不快になる臭いが立ちこめる。息が苦し  
い。胸が痛む。

「くつそ……」

銃を握ろうとするが力が入らない。目の前には大蛇が舌をちろちろとだしていつでも襲いかかりそうな勢いだ。

「数馬！！大丈夫！？数馬！！！」

大天使に言葉を返そうとしたがしゃべることが困難だ。俺が顔を下に向けた瞬間、大蛇は襲いかかる。

グシャアアアアアアアア！！！！！！

「残念だな……………」

大蛇は口を開け牙を発射しようとする。

「もうちょい遅ければお前の攻撃……………成功したのにな」

最後の力を振り絞り狙いを大蛇に向けて銃を撃つ。たちまち大蛇の口に黄緑色の閃光が入っていく。

ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

大蛇はこの世の物とは思えない凄まじい叫び声を上げたかと思うと大きな水たまりに潜っていく。どうやら一時撤退したらしい。

「助かったな……………」

俺も一時この部屋を撤退することにした。

「はあ、はあ……………」

とにかく部屋にあった他のドアを銃でぶっ壊し、大蛇のいた部屋から500m離れた小部屋に入った。

「ここだけ……………何故か毒ガス……………無いな」

それを確認するとガスマスクを外す。

「換気が効いているのかもね……………それより早く怪我を直さないと……………」

大天使の声が震えている。いまにも泣きそうだ。

「アタッシュケースの中にスプレー缶があるからそれをとって。名称はMixed Herbsprayだよ」

「分かった……………」

限界の体力を振り絞り名称を何とか言う。ふっとスプレー缶が出てくる。

「それを全身に掛けて!!」

意味は分からないがとにかく掛ける。気体は緑色をしており、なんかミントの臭いがする。



「それとこの銃何なの？いかにもSFとしか思えないけど……」

「ああそれはAK-01 レーザー自動突撃銃改だよ」

「ごめん。それだけじゃ分からないぞ……」

何が何だか分からねえ」

「宇宙戦艦ヤトにおいて地球防衛軍が使用していた銃を改造した物だよ。毎分1000発の銃弾を放って弾数はほぼ無限というチートな銃！！威力は1発でデザートイーグル10発分、単射モードと速射モードを備えているんだ」

「………本当になんでもありだな。そんな宇宙戦艦ヤトの武器、一般知名度滅茶苦茶低いと思うぞ。まあいいや。強力なのは確かみたいだし。」

「兎にも角にもあの大蛇を倒さないとまずいな。今はもう3時23分………決戦の時来たりか」

「………スプレーはこれ1本限りだから今度はどうしようもできないよ」

「それでもやるしかないからな」

そう言つと俺は掃除したガスマスクを装着してあの部屋へ向かった。

「……………最悪だな」

見事に大蛇は待ち構えていた。しかし背中がおかしい。絶対におかしい。

「なんで大蛇の背中に気持ち悪い植物が生えているんだよ!!!」

ギヤシッアアアアアアアアアア!!!

なんて言ったら襲いかかってきたあああああ!!!逃げろ  
ううううう!!!

「おい!!!大天使、ありや何だと思う!?!」

「無線で話しているから分かるわけ無いよ!!!」

あつ、それもそうだな……………

「とにかくあれが一番怪しいな!!!」

AK-01が唸る。閃光が植物に向かって走ってゆく。この銃は反動が少ないため走りながらも8割方命中した。

すさまじく気持ち悪い音が植物から響いていき、大蛇が激痛に襲

われたかのように叫び声を上げ続ける。

「ダメージは与えているみたいだが……全然死なない……」

考えてみればバイオハザードのボスは決まって体力が半端でなく高いという話だ。拳銃で対処していたら15分は時間を食いかねないという。で、今の時間は4時3分……一気に片を付けなきゃな。

「こうなったら一か八かだ!!! ええええい!!!」

俺は重力を最小限にまで小さくして身体能力を極限にまで上げる。そしたら大蛇の方向へUターンした思いっきりジャンプする。大蛇も突然の行動に対処できなかった。

背中に飛び移ると足下の感触はなにかぞつとするような物が走る。ぬめぬめしていて滑りやすくもあったがそこは重力の調整で落ちないようにした。

で、後は銃を構えて誰もがやるとおりに。

「至近距離でぶっ放すまでだあああああああ!!!」

AK-01が植物の間近で吠える。黄緑の閃光は次々と植物に命中する。植物は当たる度にうねうねと動き、ほんとに何故か知らないが血を大量に吹き出す。気持ち悪くも返り血となるがもう気にしている場合じゃない。

「数馬!!! AK-01は単射モードだと戦車フトバスぐらいは威力があるよ!!!」

「それを早く言え!!!」





..... おお、神様..... orz

「接近戦にだけはしたくなかった.....」

でただいま植物のはずだった人の形をした化け物と絶賛攻防中！  
！！

「ちょこまかと、面倒くせえ！！！」

銃を撃つても避けられちまう。しかも相手の攻撃がグーで殴るだけなのだがそのグーが半端でなく強い。工場もなんか壊れ始めているし.....今の時間4時16分。やばい。

「大天使！！！接近戦の武器はないのか！？」

「あるよ！！！ちょっと待って兵器番号忘れちゃって.....」

早く思い出せ！！！って危ねえ！！死ぬ！！このままじゃやばい！！このパンチはあまりにも強力すぎる。ただ右手だけしか使っていないのにこの威力・・・左手はなんか先端が鋭く尖っていて当たったら即死だな。

「って思ったら振り回してきたああああ！！！！？」

しやれにらん！！！！早く出せ！！！！思い出せ！！！！大天使！！！！

「……………あつ！！思い出した！！確か兵器番号3番だった！！！！」

「よしっ！！兵器番号3番出現せよ！！！！」

言ったとたんにAK・01は消える。どうやら武器は1つしか持てないみたいだ。光が出て形が形成されていく。この時間、4秒といえども隙だらけの時間である。

「ぎゃ！！！！」

たたかれて見事に吹っ飛ばされる俺。やばい、追い詰められた………猛烈な走りで迫ってくる化け物は自分の攻撃距離内に入ると左腕を振り上げ降ろした。

グワアキン！！！！

「だけどそうは問屋が卸さないんでね！！！！」

俺は日本刀を両手に持ちかろうじて化け物の攻撃をしのいだ。

「ふゝ良かったあ……間に合ったよ……」

おい大天使！！！！貴様の御陰で危うく死にかけたんだぞ！！！！！！

「うめんうめん」

「でっ、この刀なに!？」

「雷切だよ」

……………それだけじゃ分からない。まあいい!…!とにかくこいつをぶっ倒す!…!

「うおりゃああああ!…!」

俺は思いっきり斬りかかる。目標はいまのところ一番危険な左腕。化け物もそうはさせじと迎撃してくる。たちまちのうちに熾烈な戦いとなった。

「この野郎!…!」

1度、相手を抉りこむような突きを出し、一端下がる。

グシャアアアアアア!…!…!

化け物に大降りの攻撃をさせたところで一気に懐に飛び込む。そして

化け物の左腕を根本から切り落とした。

その時、俺は体中からアドレナリンが吹き出してくるような感覚



**毒蛇（後書き）**

反省

大天使のキャラが整っていない。

こなたに見えない。

本当にすいません!!!!!!

## キャラクター紹介1（前書き）

キャラクターが増えてきたのでキャラクター紹介をします。

## キャラクター紹介1

数馬光太郎

主人公であり生粋のオタクでもある。意外と博識な一面もある少し器の小さい奴。過去のことは話さない。たまに自己険悪になる。勉強に関してはかなり出来る方だがあまり自覚してない。

好きな物 アニメ、マンガ、友人、平和、幸福、

嫌いな物 争い、自分や友人はたまた自分の母国に対して侮辱する人や国家、他人の不幸、女性に手を出すこと

能力 レベル4の重力変換

特技 体術（実力は中の上）、暗記

好きな女性のタイプ ツンデレ、クールデレ、デレデレなどの性格で形の良い巨乳や貧乳で美人であれば何でも（ry

座右の銘 天下治平てんかちへい

好きな言葉 平和にも勝利があり、それは戦争に劣らず賞賛されるべきだ。ミルトン（イギリス）

重力の変換により相手の動きを封じた後に攻撃に移る戦法を得意とする。友だちは出来やすい方ではある。ただいま女性フラグを立てるのに燃えている。

## 上条当麻

「とある魔術の禁書目録」の主人公。その不幸さは脱帽するほどであり、数馬から言わしてみれば神の手違いにも程がある。数馬とは短い間に親友の關係に発展しており、今後とも良い親友として数馬を支えてくれそうである。

好きな女性のタイプ 「寮の管理人のお姉さん（代理でも可）」  
で、一人っ子が姉に憧れるようなもの、とのこと。

幻想殺し（イマジンプレーカー）を右手に持つ。女性フラグを立てることに關しては天性の腕前を誇り、数馬のフラグ立ちに支障をきたしそうだが数馬は彼のことを神としている。理由は人格が良い上に、実力があるに自分自身を謙遜するその心だとか。

何か危険を冒すたびに知り合った女性の心にフラグを立てている。立ったフラグの数は、原作16巻時点で最低でも1万人以上。というか一人ちよいにとって彼が命の恩人という、ライトノベル史上でも類を見ない存在。

敵と戦う際は、何度倒れても無尽蔵の体力を駆使して立ち上がり、敵の超能力または魔術を右手で打ち消し相手の戦意を奪いつつ、続けざまに戦意を挫く言葉の嵐を浴びせ、相手がひるんだ隙に右手から繰り出される拳だけで勝つという、科学と魔術が全く交差しない原始的な戦法を多用するはずである。

ある意味チートなキャラでもある。



御坂美琴

学園都市のお嬢様学校、常盤台中学に通う14歳で、学園都市に7人しかいないレベル5のうちの1人で序列は第3位。

数馬は良い関係になったら「only my railgun」  
「私らしくあるためのpledge」を歌わせるつもりだ（それ  
って取らぬ狸の皮算用じゃん・おつとこんな時間に誰か来たよ  
うだ）

通り名は「超電磁砲<sup>レベルガン</sup>」。

常盤台中学の二年生にしてエースであり、後輩の白井黒子からは「お姉様」と呼ばれ慕われている…というより完全に惚れられている。

お嬢様学校に通っているが、勝ち気な性格をしている。面倒見が良く、根はお人好し。

高位能力者ではあるが天才型ではなく、レベル1からレベル5まで努力で上り詰めた努力家。

性格に反して趣味はファンシー系で、かわいいものや子供っぽいものが好きだが、やや度を超していて、その趣味を知っているルームメイトの白井黒子からは、わりと本気で呆れられている。

その中でも特にゲコ太というカエルのマスコットにご執心で、ゲコ太グッズを収集する為に、商店街のガチャガチャが空になるまで、ガチャガチャを回す程である。

白井黒子曰く「つつましい胸」。しかし、母親の容姿から察すると非常に将来有望である。

一人ファミレスは当たり前、一人銭湯も余裕であり、実は友達が少ない疑惑がある。原作小説3巻にて黒子に「輪の中心に立つことは出来ても、輪に混ざることにはできない」と言われている。

ちなみに「御坂美琴」という名前は分解するとかなり尊厳である。  
ミサ（聖体祭儀）・かみ（神）・ミコト（神号。神の尊称）

数馬としても墮としたい相手なのだが転移時すでに上条とは接触している模様で上条にとられる公算大の攻略が難しいヒロインである。

白井黒子

学園都市でも5本の指に入る、名門のお嬢様学校、常盤台中学に通う、中学1年生。

大能力者（レベル4）の空間移動テレポートを有し、風紀委員ジャッジメントに所属している御坂美琴の後輩にしてルームメイト。

御坂美琴に心酔しており、「お姉様」と呼び慕たって常に行動を共にしている。自称「お姉様の露払い」。

また、美琴に心酔するあまり、やや百合的な行動を起こす事もあり、シャワー中の美琴の元にテレポートを使用して全裸でドロップキックを掛けたり、美琴の下着のみをテレポートで強制的に脱がす

等のセクハラ行為を日常的に行っている。

数馬のせいで秘密を御坂に知られたため多分次にあったときに何されるか分かったもんじゃ無い。

胸のサイズはA A。能力と役職のため風紀委員の活動で派手に動き回っているらしく、「風紀委員には捕まったが最後、心も体も切り刻んで、再起不能にする、最悪の腹黒テレポーターがいる」と噂になっている。

数馬いわく彼女の百合属性は半端ではないからフラグを立たせたくない。

## 女神

数馬を転生させた張本人。らき すたの成美ゆいさんに性格も容姿もそっくりである。女神のくせに権力が無く、数馬から言わせれば君臨せれども統治せずに近いとのこと。

旦那さんがいるらしくよくそののろけ話を他の神々に聞かせている。

登場時間が一番少ないことでも有名。

## 大天使

らき すたの泉こなたと性格も容姿もそっくりな大天使。本名はミカエル。オタクであり数馬の話に完璧についてこられる。部下思いでもありそれに応じるかのように部下からも信用されている。

数馬に気があるのではないかという可能性は否定できなくもないがかなり薄そうである。

コミケ会場爆破は今でも悔いているらしく、たまにそれを思い出して落ち込んでいる。アイテムの支給や重大任務の時は必ず登場するキャラであり説明キャラとしても使える。

## ゼパル

らき すたのみゆきさんにそっくりな悪魔。

ソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の26の軍団を率いる序列16番の大公爵。それでいて数馬のブリーフィングを務める。真面目でおしとやかでもあるが、たまに感情的になることもある。数馬のことをあまり好いてはいないらしい。

## キャラクター紹介1（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

入院ってこんなに楽しい物なんだな（嘘）（前書き）

うまくないのによく続けている・・・

入院ってこんなに楽しい物なんだな（嘘）

SIDE数馬

体が痛い。意識が戻ったときの最初の感想だ。目を開けてみれば白い天井。病院だな、こりゃ・・・

「生きていたのか・・・俺」

あのおときあの化け物にたこ殴りにされたのだ。生きている時点で不思議に近い。

「まったく、起きたと思ったら第一声がそれ？普通は嬉しがるもんよ」

横から美しい、とても美しい声が聞こえる。見てみれば御坂美琴だった。

「どうして・・・御坂が？」

「だからなんであたしの名前を知っているのよ。そっちのほうがよっぽど不思議だわ・・・まあいいけどね。それよりあんたが血みどろで日本刀片手に持って倒れていたのはびっくりしたのよ。近くには気持ち悪い物もいたし」

・・・へ？それってもしかして・・・

「まさかあの中に入ったのか！？毒ガスも蔓延していたんだぞ！

！！」

「ええそうよ。だけど毒ガスなんてものは無かったわよ?」

「何だと!!???」

通常毒ガスは相当時間は消えずに残る。密室であればなおさらだ。とすればなにか、あの毒ガスは一定の供給が無ければ消えちまうような代物だったのか……

「そうか……分かった。……あれ?ていうことは此処に運んでくれた人って御坂なのか?」

「半分あたりね。あんたを発見したの私だったし、アンチスキルまで運んだのも私よ」

………マジですか!!!!!!

「あの〜どうやって運びましたか?」

「え?あん時は砂鉄を支えに背負って運んだわ。それがどうかしたの?」

本当に嬉しいです……ただ意識がなかったのが滅茶苦茶残念!!!!!!

「まさか御坂におんぶしてもらうとは驚いたな。生きてれば良いことあるもんだ」

「ははっ、何よそれ」



おつ御坂美琴が笑った！写真が欲しい！！カメラ……が無  
い！！！！！！

「うう……カメラが何故無い……」

「何言ってるのよ……」

呆れている御坂美琴……印象ぶちこわしになりそうだからも  
うやめとこつ。

「とにかく、運んでくれてありがとうな。生きていたのもお前の  
御陰だし。何か礼をしたいな」

「えっ……って別に良いのよ。私そんなことのためにあんた助け  
た訳じゃないし」

構わんよ、そう俺は言い、こっそりとアタツシユケースからプラ  
スチックの箱を取り出した。

「何よこれ？」

「コインだ」

へっ？と御坂は不思議そうな顔をする。カメラがないのが本当に  
残念だ……

「お前の能力はレベル5の電撃使い（エレクトロマスター）だろ  
？そして通り名は超電磁砲。通り名の示すとおり超電磁砲レールガンが使用で  
きるんだろ？」

「そうだけど？」

「しかし、お前の超電磁砲は普通のコインの場合射程距離50mが限界だ。これはその射程距離を増幅させることができる」

えっ！！嘘！！と御坂美琴はプラスチックの中をしてみる。・・・  
・さてさてどんな反応するかな？

「ええ！？ゲコ太が描いてある！！！」

コインの中心にはゲコ太を描いてあるようにしておいた。もちろん御坂が喜びそうだからだ。効果はてきめん、本当に狂喜している。

「そのコインはタングステンを改造した物で出来ているから射程距離150mは可能なようにしてある。ただし枚数は100枚限りだ。大事に使ってくれろと嬉しい。ゲコ太のマークも気に入ってくれたか？」

「分かったわ！！本当に大事に使う！！って、えっと、あの、ゲコ太とは関係なしにね！！！」

そう言っただけで慌てふためく御坂。ファンシー系のグッズが好きなのはやはり同じか・・・

「はははっ、まあいい。それと見舞いに来てくれてありがとうな。感謝しているよ」

試しににかりと笑ってみる。一応これでも良い顔をしている自負はあるので効果を期待する。

「あつ……いやつ、その、別に良いのよ!!別に……」  
ありゃま、顔真っ赤だぞ〜

「そ、それより……あなたの名前はなんなのよ。いつまでもあんたって呼んでちゃめんどくさいじゃない」

そう言えば、ここまで名前なんて言っていなかったな……

「それもそうか、じゃあ言っておこう。俺の名前は数馬光太郎。遅れてしまったがよろしくな」

「ええ、こちらこそ」

なんとか動かせる手で握手を交わす。

「おい!!!!数馬!!!お前何で怪我してんだ!?!」

がらつとドアが開いて上条が入ってくる。……少しKYです。

「……」

「……」

「……」

あゝあ、みんな黙っちゃたよ。この展開……

「ああ！！！！あんたはこの前の！！！」

「げっ！！！！ビリビリ中学生！！！！」

やばいね、ああやばいね。喧嘩になるよ。確実に。もう上条と御坂は会っているからな。間違いなく勝負を仕掛けるよな。ちなみに詳しくは「とある魔術の禁書目録 1巻」に書いてあります。買ってない方は是非購入してね！！！！ってそんな場合ではない！！！！！！

「だからあ・・・私には御坂美琴って名前が！！！！」

「そこでストップしてくれええええええ！！！！！！！！」

願い虚しく・・・病室に電撃音が轟いたorz

## S I D E 上 条

不幸だ・・・まさかあのビリビリと出会っちまうとは・・・しかもここは病院だ。下手に電撃が当たれば大変なことになっちまう！！！！

「このおおお！！！！」

至近距離で電撃を右手で受け止める。電撃はすっと消えてしまった。これで何とか被害を最小限に抑えたつもりだ。

「ああもう！！！！何であんただけ電撃が効かないのよ！！！！！！」

「うっせい!! 第一こんな所で電撃を撃ち始めるバカがどこにいる!!」

ビリビリはまたもや次の電撃を放とうとする。このままじゃ死ぬ!!!!

「やめんか!!!!!! 貴様ら子供じゃないんだぞ!!!!!!」

突如として後ろから野太く低い怒鳴り声が炸裂する。あまりにも恐ろしい声だったので振り向いてみれば・・・数馬だった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「「すいませんでした!!」」

「分かればいいんだよ」

滅茶苦茶睨んできた上、あまりの威圧感にビリビリと俺は即刻謝っていた。っていうか数馬・・・

「一体どこからそんな声が出せる?」

「ええ? えつと・・・まあ怒鳴るときはだいたいこうなるだけだぜ?」

結論・・・二度と数馬は怒らせない。チキンだって言えばいい、だってあの眼光の鋭さ見たら誰だって怖くなるわ!!!!

「御坂、むやみに電撃を放つな。人の迷惑考える」

「分かったわよ……」

ビリビリがやけに素直だな……数馬って一体。

「まあこの話は終わりだ終わり。話題を変えよう!!」

「そ、そうだな」

それと性格が急に変わるのが数馬の特長だな。ちなみに怒っている時や大人のような時はダークサイド数馬とでも名付けておこう。

上条SIDE OUT

SIDE数馬

いや〜久々に怒鳴っちまった。雰囲気暗いよ……悪いことしたな。

「そういえば御坂は何で第2学区にいたんだ？」

「ああ、あの時私はジャッジメントの訓練所で黒子の手伝いをしていたね。その時工場で何かが暴れているってことでアンチスキルやジャッジメントが出撃したのよ。私もちゃっかりそこに混じっていてね。先に工場に入っちゃったのよ。そしたら数馬を見つけたわけ」

・・・いかにも御坂らしい理由だな。第2学区は兵器工場のほかにもジャッジメント、アンチスキルの訓練所が多々あるからな。まあそのおかげで侵入に苦勞したわけだが・・・

「ちよつと待て!? 第2学区つて立ち入り禁止のはずだろ。そこに入った数馬はどうなるんだ?」

「あつ・・・」

上条の一言に戦慄する御坂と俺。考えてみればそうだよな・・・  
・処罰関係はどうなるんだ!? 懲役刑とかになるのか!?

「やばい・・・どうしよう・・・」

「どうしようたって・・・どうすることもできないわよ!??」

「やばい、やばい、数馬がやばい」

三者三様、全員が混乱していた。

「えつとだね。それについては多分問われないよ?」

「「「のわ!??」」」

急に後ろから声が出たかと思うとカエルにそっくりな顔をした医者が出た。・・・この人って。

「冥土帰しさん?」

「ほう、よく僕の通り名を知っていたね」

そりゃまあ何度も原作で上条さんの怪我を治してくれますからね。俺の中では脇役なのに印象が強く残っている。

「えっ、数馬、あんたりアルゲコ太を知ってるの!？」

「おい、ビリビリ・・・そのあだ名は失礼極まりないと思うぞ・・・」

上条、ナイス突っ込み。ただしビリビリと呼ぶお前もお前だが・・・

「で？なんで俺は不法侵入で問われないんですか？」

「うん。それはだね・・・君、工場内にいた化け物を倒したでしょ？だから」

話を端折りすぎて全然わからない!!!

「あの～もうちょっと詳しく言ってくれませんか？俺も数馬も全然話しがよめない・・・」

上条、ナイス!!

「ごめん、ごめん。それで工場内にいた化け物はどう考えたって違法物なわけだよ。実際は内藤良一っていう科学者が独断専行で製造していたわけだけど。学園都市は生物兵器禁止条約にも加盟しているわけだし。それを退治してくれた君を処罰するのはあまりにもひどいのではないかっていう理事会の判断らしいね」



「……て言うことはつまり……」

「そう、君は無罪放免だ」

「「「やったあ！！！！！！！！！！！」」」

良かったあああああ！！！！無罪だ無罪！！ちくしょうこのや  
ろう！！！！嬉しいっいたらありやしない！！！！……ってあれ？

「御坂……なんでお前、上条に抱きついている？」

そう、御坂はつい喜んでか上条に抱きついてしまっていた……  
ああああああああああ！！！！

「えっ、あ！！！！ちょ、こ、これは……／＼／＼／」

「な、そのえーとこれはだな……／＼／＼／」

何いい雰囲気になってるんだよこの畜生おおおおおおお  
おおおおお！！！！！！！！！！御坂も電撃を放てえええええええ  
！！！！

「あれ？君たち2人はもしかしてカップル？」

冥土帰しがとんでもないとどめの言葉を放った……このク  
ソじじいいいいいいいい！！！！！！！！

「なっ、別にそんな、わけじゃ……／＼／／」

「そ、そつだ。変な誤解されちゃこ、困る・・・／＼／」

うわあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

数馬、あまりの精神的混乱によりSIDE OUT

SIDE 御坂

な、なに言っているのよ・・・私がこんな奴とカップルなわけ無いじゃない・・・／＼／

「ちよ、ちよつと、あんたも否定しなさいよ!!!」

「い、今してるだろ!!!」

よけいしどろもどろになる私達、そ、そつだ数馬にフォローを・・・つてあれ数馬?

「数馬?・・・おい数馬」

「やばいな、眼が死んでるぞ・・・」

数馬は窓の外を見ていた。な、なんか暗いわね・・・あれ?なんか歌い始めた?

「海行かば 水漬<sup>みじ</sup>く屍山<sup>かはね</sup>行かば 草生<sup>くさむ</sup>す屍大君<sup>おおきみ</sup>の 辺<sup>へ</sup>にこそ死なめかへりみはせじ」

く、暗い!!暗すぎる!!やばいわ・・・数馬、眼が死にかけている。

「2人とも・・・」

「「は、はいっ!?!」」

と思ったら急にしゃべるから裏声が出てしまったわ・・・

「悪いけどもう帰って・・・」

「「・・・はい」」

本当はもう少しいたかったけどこれじゃ帰った方が良さそうね。でも考えてみれば何に落ち込んでいたのかしら？

「あっそう言えば数馬!!」

あいつが急に数馬に振り返る。

「・・・何だ？」

「どうしてお前、そんな工場に行ってたんだ?どうして俺に頼らなかつた？」

そういえば・・・そうね。一番の謎だわ。

「・・・偽善のため、誰1人として傷つけないため、かな」

「そうか……」

あいつと数馬の顔が複雑になっていく。10秒した後、私達は病室を出て行った。

御坂SIDEOUT

SIDE数馬

上条、少し怒っていたかな。まあお互い様だ。ところで……  
……絶望した！！上条のフラグ立ちのうまさに絶望した！  
！！畜生！！もうだめだ。御坂フラグは終わった……上条に完壁にとられた。というか考えてみれば会ったの2回だけなのに御坂ともなんか仲良くなっているな。ご都合主義か？まあそんなことはどうでもよく。

「あの〜悪いことしたかな？」

「いや、大丈夫ですよ……」

もう気にしないよ。大丈夫、他にも女性キャラはたくさんいる！  
！！（涙目）

「そうならいいけど……それと化け物のことは他言無用だよ？  
さっきの2人にも注意はしておいたけどこれは国家間でまずいことがあるからね。お願いだよ？」

「ええ、構いませんよ」

「ありがとね？」

冥土帰しの口調はどうもややこしい。まあそれが人気の理由なのかもな。

「それとお客さんが来ているから会ってあげてね？」

「へ？客？」

そう言ったとたん、ドアを開けて入ってきたのは……

「やつほーこんにちはー！！」

……大天使！？

「僕はいったんここを出るね？」

冥土帰しも出て行っちゃたよ……

「で？なんで大天使がいるんだ？」

「君が任務を成功したからお祝いに来たんだよ！！あとお知らせもあるけどね」

お祝いね……またけつたいなことを。

「お祝いとしては前に任務時に約束した3400万円を作つとした銀行口座に入れといたからね。番号は19441023だから忘れないで。それとこれとこれ」

「なんすか？」

1つは銀色のロケットペンダントだった。中には写真が入っているみたいだ。2つめは・・・なんかでかい黒い箱だ。45リットルバックぐらいか？

「これ・・・なんだよ・・・」

「そのロケットペンダントは完璧にフラグを立てといた女性の写真があるし、その箱にはまあ18禁なものがいろいろと・・・」

「こっちは返すから、さっさと持って帰れ！！」

何を入れていたんだ、何を！！ロケットペンダントもある意味問題あるが・・・

「え〜もつたいないなあ。まあいいや。それと前言った部下の精神が回復したんだ。もう上条君を連れてこなくて良いよ。ごめんね心配掛けちゃって」

「お、おう。そうか・・・」

急に大天使が可愛く見えたな・・・びっくりだ。

「それとあの戦いで使用した雷切っていう日本刀、覚えてる？」

「ああ、あれには助かったよな」

「あれ、立花道雪っていう有名な武將が使っていて雷を斬ったと

されているからそういう名前なんだけど、実はかなり呪いが込められているからあまり使わないでね」

「……はい!？」

「どうしてそう言うことを早く言わない!?!」

「いや〜まさかそんな物が込められているとは全然わかんなくてさあ〜」

「おいおい……そんなことでどうする。」

「ちなみに呪いは戦国武将よろしく斬り始めたら抑制がきかなくなることみたいだから」

「なるほど道理であるとき暴走したわけだ」

「いや〜怖いね。」

「まっそんなところだね。今後とも頑張っつてね、かなり苛烈なことになっていくと思うけど……」

「ああ……」

「そう言うと大天使はふっと消えてしまった。俺も全治1週間らしいし、少し寝るとしますか。」

俺は目をつぶり、夢の世界へと入っていった。

入院ってこんなに楽しい物なんだな (嘘) (後書き)

ご意見感想お待ちしております



7月20日は物騒なことが多く、ヒトラー暗殺未遂事件も起きました。

(前書き

インデックスが初登場!! 原作一巻突入!! いやゝ無駄に長かった。ここまでするのに!!

7月20日は物騒なことが多く、ヒトラー暗殺未遂事件も起きました。

## SIDE数馬

今日は・・・7月20日。あの怪我からなんやかんやあつたがここまで生きてこられた。ただいま夏休み中。今は午前8時12分。運命の時間まで・・・後1時間3分。だがこれからはそうもいかない。激烈な日々が続くであろう。

「やるしかない!!!!!!」

俺は今日までに様々なシミュレーションを繰り返してきた。

「俺の全力を掛けてあの原作をぶち壊す!!!!!!」

今回の目標は1、2、3段階で決められている。第1段階、インデックスの歩く協会と呼ばれる服を上条の手によって壊されるのを防ぐこと。第2段階、上条が神裂にふるぼっこにされるのを防ぐこととインデックスにかかっている呪いの説明。第3段階、断固としての上条の記憶喪失の回避!!!!!!

「この作戦はある意味希望の光を生み出すからな・・・トーチ(たいまつ)作戦とでも名付けろか」

締めくくりで「上条の興廃、この一戦にあり、全力を尽くし対処せよ」とかつこよく言ってみます。

## 数馬SIDEOUT

### SIDE上条

不幸だ・・・昨日の出来事（またビリビリに電撃攻撃）でクーラーは壊れ、冷蔵庫も壊れ中の食品は壊滅。唯一の救いは数馬が援助よろしく食料と扇風機を持ってきてくれたことだろう。なんでジャストタイミングでと思ったがまあいいや。

「ん？どうした」

でもなんか数馬は時計を気にしてばっかの様な気がするな・・・  
2分に一回は見ているような・・・

「いや・・・なんでもない・・・」

なんか・・・眼光が鋭さを増しているような気がする。怖い、怖い。

「・・・今！！！！」

「うおお！！？何スカ！！？急に？」

「上条！！ベランダへ出る！！！」

ええ！！！？急に何を言い出すんだ！？

「早く！！！！！」

「お、おう・・・」

と、とにかくベランダへ出る。・・・あれ？柵に何か干してあるな。シーツは中にあるんだが・・・なんか修道服に見えるな・・・よく見てみれば、動いている。よく見てみれば、顔がある、女の子みたいだ・・・ええええええ!!???

「なんで女の子がいるんだー!!!!???」

「よ、予測通りか・・・」

何だよ!!予測通りって!!お前は予言者か!??って何ビデオカメラ持つてるんだ!?

「・・・ふうう・・・」

げっ、起きた・・・

「・・・お・・・」

「お?」

な、何を言おうと?

「来るか?来るか?」

何の期待!?

「おなが、へった・・・」

グギユウルルルル・・・

「はい!？」

「……これは国宝物だな……」

ずっこける俺とにやつく数馬……美男子が初めて気持ち悪いと思っただよ。何て思ったら急に女の子の頬をふくらませる。

「おなか減ったって言ってるんだよ!！」

「は、はぁ……」

「ダビングして売りさばこうかな……」

怒鳴られる俺と本当に危ないことを言っている数馬。おい、大丈夫か、数馬？

「ご飯いっぱい食べさせてくれると嬉しいな!！」

……一転して可愛い声を出す女の子。……この子にはどこかよそで幸せになってもらおう……

「という考えはやめていただきたいな。上条……」

「ついに人の心読んだな!？てめえ!!!！」

「その表情を見れば察しがつく。とにかく中に入れてやれ。このままじゃ可哀想だ」

・・・俺の部屋なのに数馬が主導権を握っているような・・・  
と考えながらも女の子を柵から降ろし中に入れた。

「上条、お前と作ったアイントプフがあるだろ。あれ食わせてやれ」

確かに残りがあったな。ちょうどいいな。ちなみにアイントプフはドイツの庶民料理でかなりうまい。それにコストが安くて済むので便利である。

「あいよ、ほらこれで腹満たしてくれ」

「わああああー！ありがとうございますー！」

そう言うのがつつき始める女の子。数馬、ビデオカメラを離れたらどうだ？

「うまいかーお姫様ー」

「うん！！！！！」

おい数馬、お姫様って・・・この子服装から見て修道女・・・

「女性は皆、美しければお姫様なのだよ」

「また心読んだな！！！！ていうかお前の思想はかなり危険だぞ！！」

数馬の思考には時々どころかかなりついて行けないときがある。  
まあそれはそれでおもしろいが・・・

「おかわりある?」

「はい!?!あれ全部もう食い終わったのか!?!?」

残り全部食べやがった・・・鍋ごと・・・夕食はどうなる!!

「ああ今はないし、なにより君は何なのか知りたいから我慢してくれ。それと上条、あとで俺が何か材料買ってきてやるから」

「Thank YOU!!!」

いやゝ数馬、お前は変態じゃないな。紳士だ。

「とりあえず自己紹介だな。俺は数馬光太郎。気軽に数馬とでも呼んでくれ」

「そ、そうだな。俺は上条当麻。当麻って呼んでくれ」

「えつと私はインデックス。インデックスって名前だよ。ちなみに魔法名ならdedicatus545。献身的な子羊は強者の知識を守るっていう意味だね」

・・・何?そのいかにも偽名っぽい名前は?

「おい、おい。それが本当に名前・・・ぶべら!?!」

「上条、女の子に向かって失礼だ」

ひ、ひでえ。なんにも急に脳天割りをしなくてもいいだろ!!

「痛てて・・・ま、それはいいとして。何故にそのインデックスさんはベランダの柵に引っかけたおられたわけ？」

「私が持っている10万3000冊の魔道書が狙いだと思う」

えっ・・・・・・・・・・は？

「魔道書？」

い、意味が分からねえ・・・

「うん、エイボンの書、レメゲトン、死者の書、代表的なのはこ  
ういうのだけど」

・・・名前上げられても。それになあ・・・

「中身はともかく・・・お前、手ぶらにしか見えないんだけど」

「ちゃんと持つてるよ！！10万3000冊！！」

むきになるインデックス。数馬・・・ビデオカメラ止めるよ・・・

「10万3000冊って、どこかの倉庫の鍵でも持つてんのか？」

「ううん」

あ、あっさり否定しやがった・・・数馬、だからビデオカメラ・・・  
すいません、睨まないで・・・



「まさか馬鹿じゃ見えない見えない本だつて言うんじゃないだろうな……」

「馬鹿じゃなくても見えないよ、勝手に見られると意味はないもの」

あつそうですか……分かんなくなるな……

「でつ、誰に狙われてるわけ？」

「魔術結社だよ」

「はあ？魔術？」

また突飛な言葉が出てきたな、おい。

「あれれ？日本語がおかしかった？マジックだよ。マジックキヤバル」

「……それって新興宗教か何かか？」

「そこはかとなく馬鹿にしてるね？」

あつ、少し不機嫌に……数馬、ビデオカメラ持ちながらにやにやすんな。美青年が台無しだぞ……って言うかもう訳が分からないよ……溜息が出る。

「そこはかとなく馬鹿にしてるね？」

「うわっ、機嫌が悪くなったよ・・・でもなあ。」

「ごめん、やっぱ無理だ」

「ふえ？」

「俺も色々、異能力知ってるけど魔術は無理だ」

「ビリビリとかを思い出すが魔術なんて言葉を使っている奴は1人もいなかった。」

「この学園都市じゃ、超能力なんて珍しくも何ともないからなあ。科学の力で何でも開発出来ちゃう」

「超能力は信じるのに、魔術は信じないって変な話!!」

「確かにごもつともない分だが・・・」

「じゃあ、魔術って何だよ？なんなら1つ見せてみるよ」

「私には魔力がないから使えないの」

「かくつとくる。それじゃあ証拠がないだろ・・・」

「使えないんじゃない、魔術があるかどうか分かんないだろうが!!」

「あるもん!!・・・魔術はあるもん・・・」

「インデックスがただっ子のようにも見える。それほど情けない立場に立たしている。」

「はあく。まっ、俺も生まれたときからついている妙な力があるんだけどな・・・」

「妙な力？」

意外と反応を示すインデックス。気になるのだろう。

「この右手で触ると、異能の力は・・・電撃だろうが、超電磁砲だろうが、多分、神の奇跡も打ち消せます。・・・はい」

「・・・・・・・・・・プツ」

・・・今笑ったか？今笑ったよな絶対！！！！

「なんだよ！！その怪しい通販見ているみたいな顔は!？」

「だつてえゝ神様を信じてなさそうな人に神様の奇跡を打ち消しますと言われてもゝ」

にやにやと笑うインデックス。は、腹立つ！！

「こ、こんなインチキ魔法少女に馬鹿にされるとは・・・」

「インチキじゃないもん！！」

「じゃあ何か見せてみるよ！！それを右手でぶち破れば、右手のことも認めるしかないよな」

次第に喧嘩になってゆく。大人げないって？まだ学生ですから！！

「分かった！！じゃあこの服！！これは歩く協会っていう防御結界なんだから！！」

「なんだそれ！？さつきから訳の分からない専門用語ぶち込みやがって、意味分からねえよ」

「ムギイイイ！！イイイ！！」

と変な声出すと急にインデックスは台所へ走る。数馬・・・お前今インデックスが変な声出したときにやりと笑ったろ・・・少しは話に参加しろ・・・

と思っていたらインデックスは包丁を持って戻ってきた。・・・包丁！？

「だつたる論より証拠！！この包丁で私を刺してみなさい！！」

「はああ？何言っているんだよ？」

なんかとんでもないこと言ってきたな・・・危ないんだぞ包丁は。

「この歩く協会が必要最低限の協会の要素を取り入れたいわば歩く建物なんだよ！！その防御力は絶対で、物理的攻撃、魔術的攻撃をすべて吸収しちゃうんだから！！」

「ほくするとそれが異能の力なんだな。だとすればそれもこの右手でぶちこわせるんだな」

「ぶつ、ふーん。君の力が本当な・ら・ね！！」

なっ、このガキ言ってくれるじゃねえか・・・よっしそんならやっ  
てやるっじゃんかよ！！！

「という考えを即座に変更してくれ上条」

「うわぁ！！な、なんだよ数馬、急に・・・」

び、びっくりしたくさつきまで何にもしゃべっていなかったのに・  
急に数馬は耳打ちしてきた。

「上条、君は今日も不幸だと言うことを忘れていないかね？」

「あっ・・・」

そういえば、冷静に考えてみれば・・・

「もしも君がインデックスの服にさわることによってなにか異変  
が起きた場合はどう対処する！？」

「確かに・・・不幸フラグが立つな・・・」

だとすれば避けなきゃいけない！！

「何？どうしたの？」

後ろには不機嫌そうなインデックスがいる。ここはどうかして  
和睦をしないと！！

「あの～インデックスさん？」

「何？」

うわゝ不機嫌だよ。自分からしておいて何だけどやりすぎだな。

「や、やっぱり魔術はあるような気がしてきましたので、もうさ  
わりません……」

「えっ！？何それ！！！」

やばい、言い訳がひどい……数馬！！お前あきらめてるだろ！  
！！顔が明後日の方向に向いているぞ！！

「駄目だよ！！さつき君は魔術を馬鹿にした！！私はそれを誤り  
だと認めさせなきゃいけないんだから！！」

「いや！！もう本当に大丈夫ですって！！！」

やばい逃げ……！？！？

ポン……

あれゝ俺の右腕がインデックスに掴まれて方の上に！！あれっ？  
でも何も起きないな……もしかして本当に大丈夫なのか？

「別に何も起きないんだけど？ふふーん！！」

よ、良かったあ……これで一安心……

バシユウ!!!

ってあれ？なんか変な音が・・・あれ布きれが・・・あれ、女の子の裸が・・・

「うがが・・・が・・・」

数馬が・・・鼻血出して倒れたよおい！？

「ん？どうかした？」

「あの・・・インデックスさん・・・」

「へ？・・・きゃああああああ!!!!!!」

ガブリッ!!!!!!

「ギヤアアアアアア!!」

数馬・・・分かったよ。こつこつことか・・・orz

7月20日は物騒なことが多く、ヒトラー暗殺未遂事件も起きました。

(後書き

あゝあ、なできですが・・・ご意見感想お待ちしております!!



と、とにかく作戦の立て直し!! (前書き)

更新です!!

と、とにかく作戦の立て直し!!

SIDE数馬

オーマイゴッドorz……………初っぱなから作戦崩壊!?  
おいおい!!!

「大丈夫か?上条……………」

「ああ、な、なんとか。しかしあっちこっち噛みつきやがって……………」

上条にはフつの菌形がついている……………しかしよくこんなにくつきりと菌形残せるな、インデックスの歯。とにかく治療をしておこう。

「少し染みるぞ〜」

「……………」

消毒液を塗ってやる……………やっぱりなあ。

「はあ〜どうせなら美人の治療に使いたかった……………」

「ひどくないか……………それ」

おっと心の声が出てしまったか。まあいいや。

「ところであなたは大丈夫か?まあ少し自業自得かもしれんがな」

「……………」

「……………黒いオーラ出てるな〜こりや深刻だ。」

「まあさっきのは俺も悪かったよ。だから・・・て、おわあー!」

上条がそう言い終わらないうちにインデックスが投げた時計が頭にクリーンヒット!!

「…………あれだけのことがあったのにどうして普通に話しかけるんだよお」

「なつ、俺だって大変どきまぎしているというか、何て言うか……………」

「俺なんて鼻血がひどすぎて死ぬかと思ったんだぞ……………」

あの時は凄まじかったな。まさかあんなものだけで鼻血を出すとは…………同人誌なんてもっとすごいこと描いているのにな。

「お前、同人誌持つてるのになんで鼻血を……………」

「まだ心は純情なんだよ、俺は」

「…………馬鹿にして、もう!」

そう言つとインデックスはそっぽを向いてしまった。駄目だこりゃ。上条は何か考えている。多分魔術があると信じ始めているのだらう。

「・・・服まだなの?・・・」

「もうちょっと待ってくれ」

「お前・・・どうやって片手で服を縫っているんだ?」

「重力変換で」

原作では安全ピンで服を直していたがあまりにも不憫なため俺が縫っているところだ。まっすぐに破れているため修復は意外と簡単である。

「ほいつ、出来たぞ〜着替えてくれ」

「ありがとう・・・」

上条と俺は後ろを向きインデックスは着替える。俺の頭の中では後ろを向けという考えが過半数をしめたがやめておいた。どうせ布団の中で着替えているだろうし・・・

「もういいかも」

「ほ〜似合ってるぞ」

「って数馬、なに刺繍しているんだ?」

調子に乗って破れていた両方の部分に十字を刺繍してみた。うまくできたと思うぞ。ちなみにこういう縫い物は元の世界で練習してできるようにした。独身だったからね・・・

「これはこれで結構気に入ったからありがとうかも」

「どういたしましてだ」

喜んでくれた。いやゝ苦勞？したかいがあった。

「あつやべえ！！補修があつたんだ。俺学校行ってくるわ」

「おう行ってこい。俺は補修とは縁がないからな」

「1週間休んでなんで補修をくらわないんだよ・・・ところでインデックスはどうするんだ？此処にいるのなら鍵預けるけど？」

まあそれは国家的陰謀だろうな。そして考えてみれば見ず知らずの人に鍵を預けるのって不用心だと思っぞ、上条。

「別にいい、出てく」

インデックスはそう言うとベットから降りる。

「いつまでもいると連中が此処まで来そうだし。君だってこの部屋ごと爆破されたくないよね」

すたすたとインデックスは玄関に歩いていく。

「ちよ、おい！！待てよってうわぁ！？」

上条、何故かずつこけて携帯ふんで壊す。・・・また買いに行くか。

「……君の右手、幸運とか神のご加護とかそういうのをまとめて消してしまっているんだと思うよ」

「はあ？」

すつとんきよな声を出す上条。

「つまり君の右手が空気に触れている限りばんばん不幸になっていくわけだね」

その言葉を聞いた瞬間、上条は絶望のオーラを出して落ち込む。

「不幸だ……」

「何が不幸かって、そんな体質を持って生まれて……」

「そこはけっこう上条が傷つくから言わないでくれ……」

とりあえずインデックスを止める。とどめをさすような一言だけは回避した。

「お前……」

「ふえ？」

「お前此処を出てどっか行く当てでもあるのかよ……」

「……此処にいと敵が来るから」

そう言つと少ししんみりとした表情をインデックスは作る。

「敵？」

「この服は魔力で動いているからね。それを元にサーチかけてるみたいなんだよ。でも大丈夫、教会まで行けば匿ってもらえるから」

「ちよつと待てよ。それが分かつてて放り出せるかよ!!」

上条の意見はもつともだよな・・・でも次のインデックスの一言にYesと返事は出来ないだろうな。

「じゃあ、私と一緒に地獄のそこまでついてきてくれる？」

「えっ・・・」

答えに詰まる上条。

「じゃあ・・・」

「ちよつと待ってくれ」

「え？」

俺は出て行くとしたインデックスを引き留める。そして手にあるものを握らせる。

「お前の食欲じゃ多分あれだけだと1時間もすれば行動不能になりそうだからな、飴を持ってけ」

「……………ありがとう。じゃあ……………」

インデックスはそう言うのでドアを閉めて外へ出た。すると上条が急に立ち上がり外へ出る。

「おいインデックス！困ったことがあったらまた来て良いからな！！！」

やっぱり良い奴なんだな……上条。ただロリコンと思われなければいいが……………」

「うん！！おなかすいたらまた来る……………きゃあああ！？」

あゝ何かインデックスが掃除ロボットに絡まれているみたいだな……………」

「な、何これ！？おかしいよ！！きゃあああ！！！」

「はあ……………やつべ補修！！！」

そう言うと上条は中からバックをとりだし学校へ行った。

「鍵を俺に預けるな……………」

俺も上条の部屋の鍵を閉め自分の部屋に戻っていく。鍵は上条が帰ったら返すつもりだ。

「しっかし、もろくも第1段階が崩れるとはな……………まあ緊急策をしておいたから大丈夫だと思うが……………」



ステイルとの戦いは上条1人に任せておこう。あいつも戦闘経験  
をさせとかなきゃな。ここいらで軽い任務がくれば御の字なんだ・  
・

如何に狂風吹きまくも

如何に怒涛は逆まくも

たとえ敵艦多くとも

何恐れんや義勇の士

大和魂充ち満つる

我等の眼中難儀なし

「なんだか最近ネタ切れしてないか？なんでさ・・・軍歌なん  
だよ？あれか、著作権が無いからか？」

まあいいや今回の任務は何だ？そう思い俺は携帯を開けた。

と、とにかく作戦の立て直し!! (後書き)

ご意見感想お待ちしております!!

白井さんの護衛は骨が折れる・・・(前書き)

更新です!!

白井さんの護衛は骨が折れる・・・

SIDE数馬

で、ネタ切れの着信音が鳴る携帯を出てみれば案の定ゼパルが出てきた。

「お久しぶりです。最近はどうも出番が来なかったゼパルです」

「楽屋ネタは禁止の方向で頼むよ・・・」

何となくらき すたのみゆきさんとは雰囲気が違うんだよな・・・  
・なんとというか少し冷たい？

「別に冷たくなんてありませんよ？」

「また心読まれたよ・・・」

まあいいや・・・任務の内容を聞こうじゃないか。

「ずばり制限時間終了まで白井黒子さんを護衛、補助せよ、です」

「勘弁してくれないか？」

俺まだ死にたくないよ・・・前、フルボッコにされたんだぞ！  
？まあ俺の自業自得でもあったが・・・

「今回の任務が失敗すれば御坂美琴さんが悲しみます」

「よしっ、やるうではないか!!」

フラグをボキッと折られたけど好きな人ではあるからな、その人が悲しむのはさすがに嫌だ。

「まったく・・・こんなお方のどこが大天使はお気に召したのでしょうか?」

「さくつとひどいこと言ってない?」

兎にも角にも・・・

「制限時間は?」

「20時間です」

「却下だ!!」

たつくふざけているのか!?それだと俺は野宿してでも白井を護れと!!???

「白井さんの寮に入ったらどうですか?」

「殺されちまうよ・・・」

あいつ、本当にまずいからな・・・可愛いの種類では高い方だがあの百合属性は・・・そりゃ滅茶苦茶可愛いけどさ・・・本当に可愛いけどさあ・・・

「失恋の時に起きる一種の自暴自棄ですね」

「刺さるよ、その言葉……」

そりゃまあ御坂の件ではまだ落ち込んではいるけどな……まあ可愛いことに関しては本心だ。

「で、今回のTGTは不良234人、スキルアウト211人、テロリスト123人です」

「本当に何をやらかしたんだ！！白井は！！」

「どうやら今までに捕まえられた元犯人どもが一斉蜂起したみたいですね」

テロリストまで捕まえたのか……白井の……

「とりあえず常磐台中学学生寮に向かってください」

「OK!!」

こうして俺の長い20時間が始まった……

常磐台中学、学生寮目の前。さすがお嬢様学校と言つべきか豪華な建物である。ちなみにトーチ作戦の第2段階は明日の午後9時なので問題は無い。今は夏休みであるため多分白井は出かけるだろう。そこを狙いTGTは攻撃してくるはずだ。

「さてさて、じゃあ俺は白井にはれないようにどこかに潜伏して  
でもいますかな・・・」

「どこに潜伏するつもりですか？」

「・・・・・・・・・・うわぁ!?!?!?!」

目の前に白井黒子・・・・・・・・また計画が崩れた・・・・・・・・どうしてだ!  
!?!?!

「さてあなたはいつぞやの殿方・・・・・・・・この前のことはお忘れ  
にでもなりましたの？」

「いえまったく!?!あときは死にかけましたから!?!」

やばいよやばいよ!?!白井の後ろからデーモンオーラがわき出  
しているよ!?!こゝ、殺される!?!

「そゝ、そういえばみ、御坂さんは何処へ!?!?」

THE話をそらすを発動!?!白井にはこれが一番効果あります  
!?!

「はっ!?!そうですの、お姉様だったらいつのまにか外へ出かけて  
しまって・・・・・・・・この黒子がいるというのにですわよ!?!」

「頼みますから俺に八つ当たりしないでください・・・・・・・・」

どうも白井の前だと調子が出ないな・・・・・・・・まあ先日件につい  
てもお詫びの品を贈らないと。

「それで白井さん？」

「なんですの!？」

「……えっと先日に関しては誠に申し訳が立たなかったの  
でお詫びの品を持ってきた所存です」

そう言うと俺は手に持っていた箱を差し出す。

「……まあ先日の件のことはもう構いませんが……お詫びの  
品ですか、この私を満足させられる品はそうそう無いですことよ？」

「まあ気に入るはずですから……あそこのベンチでご確認を……」

まあこの詫びの品は今回のためだけの物だからな……

「か、完璧ですわ……」

「そりゃどうも」

白井、ただいま絶句中。まあ品が品だしなあ……

「本当にこれを買ってよろしいの!？」



「じゃなかったら持ってたないよ」

「な、何という幸運ですよ!!!まさかお姉様のあんな絵やこんな絵が!!!」

「……ははっ、こ、これでまあこの前のことは勘弁してくれ……」

「もちろんですよ!!!!!!」

お詫びの品でここまで喜ばれることはないな……いや、持ってきて良かった。

ちなみにお詫びの品の内容は……

御坂美琴&白井黒子がいちゃいちゃするマンガ (R - 15)

御坂美琴 & 白井黒子があんなことやこんなことをするマンガ (R - 18)

6冊 + 4冊 計10冊

御坂美琴のバニーガール姿のイラスト

御坂美琴の初音ミク姿のイラスト

御坂美琴のサンタ娘のイラスト

御坂美琴の2等身姿（幼児体型）のイラスト

30枚+25枚+10枚+35枚 計100枚

これらは大天使が文芸の神ミューズ（ミュージアムの語源ともなった神）に頼み込んで書いて貰った。そのできればは美しすぎる。どうやら文芸の神も意外とオタクらしい。まあこのご時世だからなってしまうのだろう。

とりあえずここに来た理由を言っておくか……

「元犯人の一斉蜂起？」

「まあそつだ」

なんとというかまあ先ほどの品はすばらしい物でしたわ……国宝物ですわね。つと、そんなことを考えている場合ではなく、まさかそんなことが計画されているとは……

「しかし……一体あなたはどこでその情報を知りましたの？」

「独自の情報網で引っかけたんだ。当たる確率は96%だけ」

まあこの人の情報は正確に的を射ているのですからあまり間違いは無いでしょうね……。あのダイエツトしようか迷っていることも知られていましたし……

「それであなたは何をしに来たんですの？」

「護衛だよ、護衛」

「はあ？このあたくしを？」

レベル4のあたくしにレベル0が敵うわけありませんのに・・・護衛などは邪魔なだけですわ。

「・・・などと侮つていては痛い目に遭うぞ」

「心を読みましたの!？」

「いや、どうもそんなこと考えているように見えたからな。相手は合計400人は上回るんだ。さすがに人海戦術でやられちまうだろ？」

「テレポーションで逃げれば・・・」

「多分、連続使用で使えなくなるまで執拗に追い回されるぞ。それにあんたは人殺しが嫌いだから攻撃勢力もなかなか減りはしない」

確かに・・・それは言えてますの。アンチスキルに言うのが良いのでしょうがそれだと武装集団どうしのぶつかり合いになりますわね・・・それは避けたいですわ。

「まっ、こちらとしては外へ出かけてくれて犯人どもをフルボッコに各個撃破していくのが楽だから」

「・・・その時あなたはどこにいますの？」

「とりあえず隣にカップルよろしくい・・・ぶべらっ!!」

変なことという輩にはボディーブローを突っ込んだときましよう。でも、確かに2人のほうが楽なのは当たっていますわね。・・・ここはどーしても、仕方がないのでお姉様には申し訳ないですが・・・

「仕方がありません、そうしましょう」

「なんでボディーブローを・・・」

「でも、護られるだけで打って出ないのは癪ですし・・・あなた、どこにその馬鹿どもはいるのですの?」

「ひどいね、無視かよ・・・一応、第9学区の廃棄工場にいます。5割が」

なるほど・・・あの学区はあまりアンチスキルが入りにくい場所ですから、集結にはもってこいなんでしょう。5割というのが気になるんですが・・・

「残りの5割は各地に分散している。正確な位置はつかめない」

「また心を読みましたの・・・まあいいですわ」

「本当に打って出る気か?」

「当然ですの!」

私にまたたてつこうとしたこと、後悔させてやりますの!」

## 白井SIDEOUT

### SIDE数馬

でっ、結局ここ、第9学区にきたわけだが……

「どうして追われているのかな!!」

「しかも……女性を背負ってとも思っているのです?……

」

「瀕死に近い状態なんだからしゃべるな!!」

敵はなぜか早くもキャパシティダウンらしきものを保持していた。それも32台。これのおかげで白井は行動不能になってしまった。俺は例の耳栓を急いで装着したがあいにく1人分しか保持していず、分が悪すぎたため、逃走を開始した。相手は52台の車で追ってくる。

「やつら、車にキャパシティダウンを乗せているのか……くそ!!これじゃ逃げていられるだけで埒が明かない!!」

白井を背負いながら逃げているため重力変換をそっちに向けることしかできない。相手はご丁寧にもマシンガン?らしきものを車に乗せて撃ち込んでくる。避けるだけでいっばいっばいだ。

「しょうがない!!こうなったら・・・」

近くにあった廃墟ビルの中に入る。エレベーターが使用できないため適当な階まで階段を使って上った。ひびが入った窓ガラスを見れば周りには車からぞろぞろといかにも悪そうなやつらがここに入ってくる。

「追い詰められたか・・・」

「・・・あ、ただけでも・・・」

それまで意識混同していた白井がしゃべりだした。

「ば、馬鹿!!しゃべるな!!」

「あなた・・・だけでも逃げてください・・・こうなった、私の責任なのですから・・・」

「・・・なんかとんでもないこと言ってますか?まったく・・・」

「女性を置いて逃げるのは俺の思想だと反逆罪に問われるのでね・・・」

天井のタイルが1つ外れている。なんとかよじ登り中に白井を隠す。外れていたところにはちょうど?あったタイルをはめ込んでおく。

「さってこれで準備完了!!後は・・・」

皆さん考えるまでも無く・・・

「ゲリラ戦の開始だ!!」

数馬、どこかに潜伏中なのでSIDE OUT

どうもおかしい、それが白井黒子討伐隊の面々の思ったことだった。中に入ったはいいがTGTがまったく見つからないのだ。まああまり頭のよい集団ではないので隠された場所がわからないのだから。

「兄貴いゝまったく見つかりませんぜあの小娘!!」

「そうだな・・・どこに行きやがった?それにあの小僧も・・・あつちのほう危険ではあるのだが」

そのうちの52人がある1部屋に来ていた。この廃墟ビルはなにか大型事業を行うつもりだったのか異常に広い。かなりの余裕があったのだ。

「おい、あの小娘をとっ捕まえたらどうする?」

ほかのやつがそんなことを話し始める。それに乗って2人が話しに参加する。

「そりゃまあたっぷりかわいがってやるのさ!!」

「あんなの可愛がってなにがいいんだよ、このロリコン!」

「なんだとこのやるっ……」

突然男の1人が倒れた。頭に何か焦げたような痕があった。

「なっ!! やばい!!」

「大変だ!! 待ち伏せされているぞ!!」

53人が一気に戦慄した。戦闘態勢をとる。

「つぎやああ!!」

最前列の1人が倒れる。ヘッドショットを喰らったみたいだ。奥のコンクリートの柱から光が見える。

「ぎやああ!!」

また1人が倒れる。男たちはコンクリートの柱に射撃しようとする……しかしその前に銃がすべてつぶされた。

「なっ、何だと!!」

「こうなったら素手でって、足が動かねえ!!」

足元、15cmの重力のみを大きくされ歩くことができなくなる。逃げることをさえできなくなった者たちにまた狙撃が開始される。

「わや……」



「ぐわっ!!」

嫌な声が1つの部屋だけに響く。外には聞こえない。ビルの壁は防音仕様になっていてみるみたいだ。次々と倒されていく男たち。仕舞いには2人に減っていた。

「どっ、どうして、こんなことに……」

「まああんたらの作戦も無く突撃してきたところがこういう結果を招いたんだろ？」

コンクリートの柱から数馬が現れる。その顔は悪魔のように冷酷な顔である。

「そ、それにどうしてお前だけ……能力が使えるんだ……」

「まあそれは企業秘密ということで」

数馬は手に持っていたAK-01を撃つ。男の1人が倒れる。

「ひい!!……」

「大丈夫さ、死ぬことは無い。攻撃力をとことん下げているからな。長時間の気絶だけだ」

またもやAK-01が撃たれる。最後の1人も倒れた。

「……これで後150人程度か……」

「その後、2つの階で同じようなことが繰り返される。

#### SIDE数馬

「でっ、こついつことになるわけか・・・」

ここは5階。俺が白井黒子を隠しておいた階である。今、そこに32人の男たちが白井黒子を人質にとっていた。

「はあ！！ざまあみる！！これで小娘をゲットだ！！」

う、うぜえ！！天井に隠したのがまさかあっさりばれるとはな・・・

「おっと、言うておくがもし能力を使おうものならこの小娘は死ななけりやならないぜ？」

そういうと男は両手の2本のナイフを白井の首根っこに突きつける。

「そつちもずいぶん考えたんだな。確かに俺は2つの目標に重力を向けられないよ」

今まで能力を使用していたのでわかっていたのだが・・・めんどくさいことになった。

「でもこちらにも策があるんでね!!」

「すみません・・・本当は何にも考えていない・・・」

「ほほう!! やってみるや!!!!」

「・・・やばいですorz」

「なんかハツタリをかました戦いが始まる・・・上条さんの方は大丈夫かな。」

「ただいま追い詰められています、数馬です。どうしようかな・・・」

「おい、お前ら!! やつちまえ!!」

「うらああああ!!!!」

「やばい、やばい、やばい、やばい・・・あっ!!」

「えいっ」

「びしゅ!!!!!!!!!!」

「「「ぎゃ!!!!」」

「「「「どわあ!!!!」」」

最終手段、腰に緊急時に付けておいた音響手榴弾。卑怯だと言っ

なら言っが言い！！だってどうしようも出来なかつたんだぞ！？

「てい」

「ぐべえ！！」

いつきに白井にナイフを向けている男に接近、顔面をぶん殴る。  
そして白井確保。でっ、後処理がめんどくさいので……

「手榴弾（かなり弱めの火薬しか入っていないので怪我しかしま  
せんよ）〜」

パンパカパーンの音が似合いそうな口調で10個程度の手榴弾を  
投げ捨てる。俺は白井を連れて窓の外へ直ぐ逃走！！無論飛び降り  
ます。

アポーン！！！！！！！！（） BOMB！！（）

5階、爆発。ヤレヤレ（、ー、） マイツタネ。重力変換  
で落下速度を落として着地しようとしている。高さは100m。後は  
アンチスキルに連絡入れて。

「そっういやあの車、壊しておくか……あり？」

あれれ？なんか1台の車のマシンガンに人がいる……なんか閃光

が撃ち出された・・・

「最悪じゃねえか！！！！！！」

重力を変換しているとしても落下速度を減少させているだけで銃弾の威力を下げることは出来ない。ちなみに今の高度は62mぐらい。

「くそ！！！！こうなったら・・・」

天に身を任せて白井をかばいながら横向きで落下。当たるの必至。

「ぐっ！！！！」

背中に焼けるような痛みが走り、麻痺したような感覚になる。多分銃弾がかすったのだろう。幸いどころか奇跡的にそれだけの被害だけでマシンガンは弾切れになったらしい。

「このやる！！！！」

間髪入れずAK-01を車に向かい撃つ。相手も危険を察知したのが大急ぎで車から飛び降りる。で、車爆発。今の高度は12m。着陸の姿勢をとる。

ドサ・・・

着地成功。マシンガン撃った相手もどこかへ逃げ去っていた。仕方がないので残った車进行处理していく。そして最後の1台を破壊

した時。

「うう……」

白井が目覚めた。キャパシティダウンは能力を使えなくしたただけだがどうやら相手の保持していた物は能力者自体にもダメージを負わせるようだ。

「よう、起きたか？」

「……ふええ?!」

ゴン!!--

……まさかの頬殴り。

「お姉様以外のお方に抱きしめられるなんて……なんたる不幸ですの!!--」

「ひ、ひでえな……いてて……」

背中が急に痛み出す。出血しているみたいだ。

「ってあなたその怪我!!--」

「へへへ、面目ないな」

白井が申し訳なさそうになる。

「ごめんなさいですの……私を護るために……」

「構わんよ」

サイレン音が聞こえてくる。アンチスキルはもう少しで到着のようだ。

で、深夜。あの後アンチスキルの救護班に治療を受け白井の護衛を再開した。犯人どもに死者は出ていなかったみたいなのでよしとしよう。

「まだいるのか……」

昼頃には計125人程度のスキルアウトや不良が来たがこれは白井と共闘してあっさり撃退。それでもまだ330人が残っていた。

白井には学生寮の門限を守らせるため帰らせたがまさか学生寮まで習ってくるとは予想がつかなかった。しかもテロリストが中心という最悪なパターン。

「唯一の救いは全員が単独で攻撃してくることだろうか……」

それでも動きが素早いので狙撃には少し手こずる。

ダアン……

サイレンサーを装備したおかげで小さな銃声ですむ。そうこうするうちにテロリストがまた1人倒れる。

「結局、徹夜になるのか……」

まあ……学生寮に帰る前に白井に「今日は……ありがとうでしたの」と言われたのは嬉しかったからな。頑張りますか。

どっちにしろこれが次の日のトーチ作戦第2段階に大きく支障をきたすことは目に見えていた。



白井さんの護衛は骨が折れる・・・(後書き)

ご意見感想、ついでにポイントをお待ちしております!!

うん、迷ったね(前書き)

更新です!!

うん、迷ったね

SIDE数馬

あれから……結局白井の護衛が完了して家に帰ろうとしたのだが……不幸だ。

「家が……俺の部屋だけが……炎上って……」

どうやらスタイルのイノケンティウスが俺の部屋に攻撃を当てたらしく、もうひどいのなんのって……上条、貴様……

「今、小萌先生のアパートに向かっているが……どこにあるんだろう……」

原作にどこにあるかなんて記述は無かったが、多分第7学区のどこかにあるのだろうし、上条が短時間？で付ける場所であるのは確かなのだが……

「そんな広範囲をどうやって探せというんだ……」

「こちらは滅茶苦茶眠い上にこの夏の猛暑の攻撃により完全にふらである。うう……どこか休む場所を……」

「き、喫茶店……」

よし……あそこで休憩をとろう……腹も空いているし。財布を見れば10万円。伊達に任務こなしているわけじゃない。

「め、飯にありつける」

そう言いながら店に向かった瞬間。

ドガシャアアアン！！

店にトラック突っ込み強盗登場……不幸だ……

「普通に強盗ぶちのめしているだけなのでカット（え！？そこは書けよ！！by数馬）」

「作者の野郎……覚えておけよ……」

結局、強盗をぶちのめしコンビニでサンドイッチ2つと麦茶1本を購入した。

「ああ……うめえ……」

2分後には全部完食。ごちそうさまでしたつと。

「後は小萌先生のアパートが見つかれば良いのだが……」

「結局この後1時間も時間無駄にして見つからずじまいだったの  
でカット(またかよ!?)」

「……………もう午後1時か……………」

もうそろそろ見つけれないかな……………あれ?なんか目の前に  
ジーンズの片方の裾が無いのをはいていて腹が見えるぐらい短いT  
シャツで髪がポニーテールになっていて胸がでかい女性。もう1人  
は髪が赤く長い、そして背も高い男性……………

「目の前に神裂とスタイル!?!」

……………うん、都合が良すぎる。なんでこんな時間帯にこんな所に  
……………あつ、そうか。

「もしかしてあいつら小萌先生のアパートを探しているのか?」

あいつらが小萌先生のアパート見つけたのは午後3時程度。何故  
分かるかって?大天使がそんな予測を教えてくれたんだよ。

「……………話しかけようかな……………」

……………ただ話しかけるにしても……………下手をすれば抹殺されかねない……………

「じゃあ捨て身で……………」

ごく自然に2人に近づいていく。至近距離、40cmに近づいたら独り言のように……

「インデックスと上条はどこへいったかな……」

2人に反応があり、こちらを向く。少し話した後、こちらに向かってくる。

「あの、失礼ですが……」

「はい？」

神裂から話しかけてくる。ここでの選択。

1、素直に「俺も探していましたので一緒に探しましょう」

2、「魔術師さんは何を目的としているんで？」とつぶやく

普通は1が妥当なのだが……俺としては神裂と手合わせしたかったしなんか1を選ぶとあまり今後の展開に関わりづらくなるからな。それに1選んだ後に呪いのこと説明しても信じてくれるわけがないし、だったら戦闘して話した方がなんか信じてくれそうだしな。

「あなたが今、申されたインデックスとやらは私達も探している者のようですが……何か知っているのですか？」

「……それを知ってあんたら魔術師は何の目的があるんだ？」

すつと冷たい空気が流れる。周りを見ると何故か人影が無くなっている。人払いのルーンか・・・いつのまに・・・

「何故・・・私達が魔術師と？」

「さあて何故でしょう？」

「いい加減なことを言つとぶちのめすぞ」

ステイル・・・怖いよ。生で見るとすごい威圧感を感じるね。神裂さんはやっぱり美人です。

「おゝ怖い、怖い。まっ、あんたらの情報はこちらに筒抜けなん  
でね」

「「!」」

2人が固まる。そりやまあ驚くわな。

「あんたはステイルIIマグヌス。魔法名はFortis931）  
我が名が「最強」である理由をここに証明する）。そんでそつちの  
別嬪さんは神裂火織。魔法名はSalvare000（救われぬ者  
に救いの手を）」

「くっ、よくそこまで知っていやがるな・・・」

「一体どうやって魔法名を・・・あなたはどこの回し者ですか？」

「へっ、残念ながら俺はどこの回し者でもない。まあたった1人の  
陰謀者とも言うのかな」

そういうと神裂は大太刀、七天七刀を構える。ステイルもなんか用意しているよ……

「あの子を……インデックスをどうするつもりですか!？」

「それを今教えるわけにはいかないね」

「七閃!!!」

突如として神裂から七閃が放たれる。やっぱり地面を斬るように7本の衝撃波に近い物が突き進んでくる。これはすごいね。

「ただ……やっぱり一直線か」

俺は重力変換で思いっきり重力を小さくして軽々と避ける。

「その攻撃、直線上にしか動けないのか？」

「くっ……」

「灰は灰に

(AshToAsh)

塵は塵に

(DustToDust)

吸血殺しの紅十字!!」

(SqueamishBloodyRoad)

っておおお!?危な!!炎剣が来やがった、なんとか避ける。しっかしステイルの野郎……



「やっぱ2対1じゃ不利か……」

「だったら話してもらおうか？」

「嫌だね!!」

追いかけてこが始まった。こっちは能力使って全速力。神裂とステイルもついてきている。

「はは!!さすがだな14歳のヘビースモーカーと聖人!!」

「あなたは一体どこまで……」

こんな感じで追いかけてこ始まったわけだけど……勝算0なんだよ。

……どうしてすぐに教えなかったかな？orz

うん、迷ったね（後書き）

ご意見感想お待ちしております！

ちょっと雑談です。(前書き)

今回はまったく本編と関係ありません。

ちょっと雑談です。

「ごういうのはだいたい更新ネタがないときに使う物だ・・・」

「数馬・・・それいつたら終わりだぞ・・・」

「そうだよ・・・そんなこと言ったらただでさえ少ない読者がさらに激減だよ!!」

此処は数馬の部屋。前話で燃えていたが気にしないで欲しい。

「でさ、インデックスの好みの食べ物を知りたいというのが今回の議題」

「えっ？私の？・・・うんこれといって特別に好きな物はないかも」

「それだったら・・・上条の食費を安くしやすい食べ物を考えやすいな」

「それぜひ詳しく頼む!!」

じゃあまず最初はこれ。

スペイン風オムレツ

材料（4食分）

たまご 3個 ￥45

じゃがいも 2個 ￥30

たまねぎ 1個 ￥10

オクラ 8本 ￥50

ハム 適量

>調味料<

塩小さじ1、こしょう、おろしにんにく、オリーブオイル、バジル

「おお！ーうまそうだな！ー」

「そうだろ？」

「でもお腹いっぱいになれないかも・・・」

「・・・」

じゃ、満腹になれる物を・・・

もやしぎっしりハンバーグ

材料（2人分）

・ 合いびき肉 150g

もやし 1/2袋

ねぎ 1/2本

サラダ油 適量  
ベヒーリーフ 適量  
プチトマト 適量  
(A) パン粉 大さじ3  
マンズワイン(白) 大さじ2  
(B) 卵 1/2個  
塩 少々  
こしょう 少々  
砂糖 少々  
しょうゆ 小さじ2  
(C) 辛子しょうゆ 辛子 少々  
しょうゆ 少々

「これならポリウム満点!」

「わああ!!--すごいよ!!--」

「でもな・・・結構食費がかさむな・・・」

「.....」

「どーしてどうまはそんなこと言っの!!--!!--」

ガブリ!--!

「ぎゃあああ!!--!!--!!--」

・・・これはどうだろ。

## もやしのオムレツ

材料 ( 2人分 )

もやし 1袋

玉子 2個

ピーマン 1個

人参 3cm

塩こしょう 少々

お好みソース 適量

マヨネーズ 適量

かつお節・青海苔 お好みで

「意外とお腹が埋まる」

「おっ、これは良いな。食費もあまりかかりそうもないし」

「私も満足できるかも!!!」

じゃあじゃあ決まりです!!! いや、なかなか安い料理は見つか  
らない物ですね。

「そんでまだ尺が余っているから話をしよう」

「だから数馬・・・楽屋ネタやめろ」

「それよりも何を話すの？」

「「「「「「「「」」」」」」」」

これといって無いようすな・・・

「じゃあ上条、小萌先生のことについても話すか」

「小萌ってとうまの先生のこと？」

「そうだ、しかしあの人には謎が多すぎる・・・」

まあそうすな。

「あの背の小ささは半端ではないからな・・・上条、何か知っているか？お前、つきあい長いんだろ？」

「いや、まったくと言っていいほど知らないな・・・」

「何か公式ホームページでは完全幼女宣言の教師って書かれていたみたいだよ!!」

「インデックス・・・どこでそんなこと知ったんだ？」

「え？普通にインターネットで」

「夢は「ううふうふう」にして壊れるのか？上条・・・」



「そうだな……」

インデックスがインターネットを扱ってはいけない。イメージが崩れるよ。機械音痴のインデックスが無くなるよ!!

「と、とりあえず……とあるキャラのヒロインでも最年長のキヤラって書かれているから……いつたいいくつなんだ?」

「か、上条……ネットのウィキペディアに小萌先生は最悪壮年かもしれないと書いてある……」

「か、かずま!! 壮年って30代後半から40代後半を示すんだよね!!」

「……」

小萌先生の謎は深まるばかりであった。

ちょっと雑談です。(後書き)

ご意見感想お待ちしております!!

前話の評判の悪さは凄まじいね（前書き）

どうも、風邪でぼろぼろになっていた作者です。昨日は少しでも更新をと思い出しましたが・・・いやーひどい。

19話を改定しておきました。戦う理由が無いのはあれなんで

## 前話の評判の悪さは凄まじいね

SIDE数馬

うん、苦しいね。作者は七閃と唯閃間違えるし、前話で変な話を書く。こちらは自分の力試そうという考えでバトルしていてピンチだし……

「七閃!!」

グベシャアアアアア!!

「なんか先ほどよりも威力増してる!？」

「灰は灰に

(AshToAsh)

塵は塵に

(DustToDust)

吸血殺しの紅十字!!」

(SquamousBloodyRoad)」

ステイルの攻撃もうざつたいな……待てよ、ステイルの攻撃は確かルーンが張ってある場所にのみ作動するはずだ……やつが攻撃しているということはこの周辺はルーンが張ってあるのか!!

「こんなところでイノケンティウスなんか出されたら最悪だな……ステイルは体術が不得意だったはずだから!!」

こちらの突如としてのUターンで相手の不意をつく。とりあえず神裂の攻撃が来ない一瞬でステイルの懐に飛び込む。

「なっ！！！！」

「このやる！！！！！」

ドガッ！！！！

「ぐっ！！！！！！」

みぞうちを殴る。人間ここを強く殴ると悶える、最悪気絶になる。ステイルの場合は最悪なケースになったようだ。ばたりとステイルが倒れる。残るは神裂のみ。

「よくもステイルをつ……………」

「まあ気絶しただけだから心配すんな。とりあえずこれであんただけだぞ、こちらにも少しは勝機が見えてきたな」

「私をなめないでください。あなたぐらいだったらさすがにひねりつぶせますよ」

……本当は人を殺すことさえもできないのか。まあいい。

「じゃあこちらもいかせてもらおうぞ！！！！」

この前大天使から使用禁止のようなこと言われた雷切を出す。手に持つだけでなにか精神が壊れそうになる感情が湧き出るがこのさ。いこのような感情も無ければ勝てっこないからな・・・

「七閃!！」

神裂の七閃がくるが軽々とよける。・・・なんで避けられているのだろうか、俺。それはどうでもいいとして七閃を連続で撃たれたらこちらとしても終わりなので接近戦に持ち込む。

「うらあああ!！」

2 m付近で神裂の七天七刀と雷切がぶつかる。全重量をかけているのか押される俺。しかし試しに自ら後ろに下がると神裂のバランスが崩れる。その隙を突き斬りかかるがすぐに体勢を立て直され防がれた。

「やっぱりその大きさじゃあまり細かくは扱えないみたいだな!！」

「それはどうですかね!！」

思いつきり押されぐらりと後ろへ倒れ掛ける瞬間に横から七天七刀で斬りかかれる。雷切で受け止めたものの遠心力の影響かその力は凄まじく横に突き飛ばされる。

「ぐっ!！」

「七閃!！」

間髪いれずに七閃がはいる、それに俺は避けきれず直撃する。

ブシュー！！ザシュー！！

「ぐわああああ！！！」

両腕から鮮血がほとばしる、しかしまだこれだけですんでいるということは手加減してもらったのだらう。

「最終確認です。あなたは何者ですか？」

「……………」

ここで降参して正直に呪いのことを話したほうがいいのだがどうも……ね。意固地になっちまうよ。

「誰が話すかよ！！！」

徹底抗戦だ！！！！

ガキン！！キン！！キン！！

刀と刀がぶつかり合う音が鳴り響く。

「いい加減っ、しづとい！！！」

「それがとりえなんでね!!」

ただこちらのほうがダメージが大きいため長くは持ちそうに無い。両腕の出血もひどい。一撃で方を決めなければだめか……。しようがない、あれにかけてみるか!!

作戦のためすつと神裂から距離をとる。

「なにをしても無駄ですよ!!七閃!!」

弱まっているこちらにとつて七閃は死刑宣告にも等しい攻撃だがこうなりやどうでもいい。俺は重力を極限まで小さくするとBダッシュなりに走り出す。

「なっ!!」

3m付近まで接近したら横にそれる。神裂が斬りかかろうとするがあの大太刀である七天七刀に早すぎる標的を狙うのは無茶である。現に神裂の攻撃は外れた。

「後はあちらこちらに斬りかかるのみ!!」

神裂の40cm付近に一瞬にして姿をあらわすと斬りつける。避けられたらまたほかのところに現れて斬りつける。ちなみにこの攻撃方法を考え付いたのはネギまの瞬動のおかげである。いや、転生前に読んでいてよかったよ。

「とりゃ!!」



「くっ・・・」

「このー!!」

少しずつだが追い詰めている。しかし神裂は手加減はしていません。思っから本気を出せれる前に一撃を入れなければならぬ。

「てえい!!」

「あっ!!」

うまくバランスを後ろに崩すことに成功する。前に少し隙ができる。今がチャンス!!

「ちえすとおお!!・・・て、あり？」

な・・・なんかやわらかい感触が・・・おかしいな、目の前真っ暗だぞ・・・ちなみにこの攻撃方法の欠点はすばやく動いているため特定の場所に正確な距離で現れにくいということ。でっ、俺は神裂の正面に接近したのだから・・・胸だ・・・

ゴン!!!!

「ぐっ・・・」

突然のことに思考が停止していたため殴られる。頭に痛みがくる。・・・意識がなんか消えていく・・・戦闘でこんな結果って・・・

Orz・・・ひどい。



前話の評判の悪さは凄まじいね（後書き）

すみません。まだ調子が悪くてうまく頭が働かないです・・・あ  
あ、グダグダになりすぎてひどい・・・

最近話の展開が早すぎて質がひどい・・・（前書き）

更新です！！昨日今日は部活のあれこれがあり遅れました。申し訳ありません。

ついでに誤字脱字が多すぎとの報告がありましたのでもしもあつたら報告していただければ幸いです。こちらも頑張って探してはいるのですがなかなか発見が出来ないので・・・

最近話の展開が早すぎて質がひどい……

## SIDE神裂

目の前に何故か笑顔？で倒れている男。まさかあれほど苦戦するとは思いませんでした。まあ最後はなんか……あっけなかったですが。

「っ、つつつ……」

倒れていたステイルも復活したようです。彼、昨日も殴られたばかりなのに今日も殴られるなんて……

「ご愁傷様ですね」

「……なんか嫌になるな。そんなこと言われると……」

仕方がありません、あなたはこんなことばっかですから。

「でっ、こいつどうするんだ？なんか色々情報を持っているみたいだし、尋問でもするか？」

「そうですね……とりあえず起こしましょう」

ぐらぐらと体を揺すりますがなかなか起きませんね……やっぱり頭を殴ったのがまずかったですか？

「ぐへへへ……なんで退却すると味方が攻撃するんだよ……」

督戦隊どもが……」

「……なんか不気味な寝言？ですね。まったく意味が分からない。あつ、でも起きましたね。」

「ふああ、何か頭が痛い……あつ……」

「……」

起きたと思っただけ固まりましたね。恐怖というものが彼を覆っているような……こういう場合はステイルの方が得意なので任せましょう。」

「さて、お前の知っている情報すべて吐いてもらおうか」

「もし嫌だと言ったらどうなる？」

「そんな時は拷問でも何でもして吐いてもらおう」

「貴様らイギリス清教の必要悪の教会所属だろうが！ネセサリウス！ジュネーブ条約に加わっていないのか！？」

「これ以上言つとどんどん墓穴掘っていくぞ。それに僕たちの組織はそんな物に加わっていない」

「なんだか哀れに見えてきますね……いかにもしましたという顔していますよ。」

「……分かったよ。話すよ……」

「それなら良いだろう。早く話せ」

「……言っておくが俺はただの高校生で間違いない。あんたは疑っているみたいだが組織なんて物に属してはいないよ」

「じゃあ、なんで僕たちの情報をあんなに知っていた？」

「ははっ、まあ色々とあるんだな。情報網というやつが」

ゴン！！！

ステイルが頭を殴る。それはさすがにまずいのは……

「ふざけるな、いいから白状しろ」

「そんな無茶な、スパイだってそうでしょう。情報網をばらすなんてまねはできない」

ゴン！！

また……これ以上はさすがに止めなければいけませんね

「ステイル、もうやめたらどうです。これでは彼は死にますよ？」

「……分かった」

「痛い・・・まあ情報網は言いたくないがインデックスの情報なら言っても良い」

「それを早く言え!!!」

つ、つい怒鳴ってしまいました・・・ってそんなことはどうでも良いですから!!

「あゝはいはい。それじゃ言うけどな。あんたらはインデックスの記憶を消そうとしているんだろ？インデックスは完全記憶能力の持ち主で脳内の記憶容量があいつの頭の中に入っている10万3000冊で85%閉めてしまっているから残りの15%だけでは脳内がパンクしてしまうっていうんだろ？そんだから1年周期で記憶を削除している」

「そうです、それだから私達は・・・」

「あんたらは少し科学を勉強しろ。サヴァン症候群を知っているか？インデックスの完全記憶能力と似ているのだがな。これもなんでも瞬間的に記憶してしまう能力を持つ人がいたりする。しかしその人は脳内がパンクしたりはしない。なぜなら人間の脳は140年分の記憶が可能な上に、記憶には感覚記憶、短期記憶、作動記憶、長期記憶などさまざまに分かれる。そのそれぞれに莫大な数の記憶を入れる事が出来る。だからな、完全記憶能力だからって脳内の記憶容量がパンクすることはない」

「そ、そんな馬鹿な・・・」

愕然とした表情になる私達。まさかそんな事実があったとは思



もよりませんでした……

「じゃああの子が1年周期に何回も死にかけた状態になったのはどうなんだ!？」

「冷静に考えてみる、禁書目録なんていう満州第731部隊でも思いつかないような残酷なことをした連中がためえら下つ端に真実を全部話すと思うか? あんたらの属しているところはインデックスが自分達の所から離れるのを恐れたんだろ。インデックスの喉には呪いの紋章が描かれているよ」

そんな……あの子は……そんなことのために苦しんで……それを自分たちは分からないでただあの子のためと思い記憶を消していたなんて……

「それでは……私達はどうすればよいのですか!？」

「決まっている、上条と結託するんだよ」

「け、結託だと? ふざけるなあいつとはもう敵対関係になっているんだぞ!!!」

「大丈夫だ、上条は物わかりが良いからな、事情話せば直ぐに協力してくれるさ。それにインデックスの呪いを解くときに防衛装置が作動するようだからな。しかもすっげー強力なやつが。やつの右手が必要になるのは分かるだろ、ステイル?」

「……ああ……」

ステイルはそのかみじょうという少年と戦って敗北したらしいで

すからその少年の能力のすごさが分かっているのでしょう。しかし・

「それにしても、やはり一般の高校生がそこまでの知識や情報を知っているなんてさすがに不自然ではありませんか？」

「それもそうだな、やっぱりそこだけは吐いてもらおうか!!！」

Wir stürzen vom Himmel der Erde zu,  
An Wolkenbergen vorbeii.  
Wir lassen dem Feinde keine Ruhe,  
Wir sprengen das Herz ihm entzwei.  
Wir schlagen die Gegner mit Mütten und mit Kraft  
Wir? ffnen dem Sieger das Tor  
Ihr Schlichter  
— : Stuka, Stuka vor! : —

(著作権が消滅している歌です)

「はっ?」

「あつ、悪い。携帯が・・・というか着信何なんだ?ドイツ語?

もしもし」

なんか私達をほっといて話していますね……

「はあ？無茶言つなよ。諜報機関に今から所属しろ！？なんでそんなことを……えっ？けっこう良い給料だからって、それはちよつとな……肩書きそれだと後々楽？……分かったよ」

話全部聞こえてますよ……何ですか、今から諜報機関には入れって……電話の相手は一体？

「今からアタツシケースに紋章バッジと道具送るからって急過ぎるだろ……まあいい。それじゃ」

「……おい、電話の相手は一体誰なんだ？なんか変な話していたみたいだが……」

「少し黙ってる。えつと間諜番号01と02、出現せよ」

すつと光が走り彼の手元に物体があります、転移魔術？……いえ彼は能力者のようですし……

「なんでセンスが悪い紋章バッジなんだよ、赤光に黒十字って……付けたくないな……この腕時計も、鷲と鷹の紋章だしな……」

腕時計とバッジみたいですね。しかもそのマークは……

「あなたの所属はもしかして赤光の黒十字ですか？」

「へ？なにそれ？」

「お前、それを知らずにそんな物付けたのか！？」

「赤光の黒十字はこの学園都市と隣接している国とヨーロッパのドイツが合併して出来ている大諜報機関です。魔術者もかなり所属しているとの情報もあります・・・そのバッジは特殊な構造がされており、一定の微弱な魔力は放射することが出来たりします。偽装は無理です。それにしてもまさかそんな機関に所属していたとは・・・」

「こんな高校生風情がそんな機関に・・・驚きです。」

「なるほどな、だから僕たちの情報にも詳しくあったわけだ」

「えっ？マジすか？」

「・・・なんでそんなに自ら驚いているんでしょうね・・・」

「・・・とにかく俺は今度から赤光の黒十字に所属することになった数馬光太郎だ。よろしくな」

「スパイなのに身分をばらすのはどうなんでしょうか・・・」

「なんか前にいる2人にはばらしといてと言われたからな・・・」

「一体何者なんでしょう・・・電話の相手・・・」

「まあ電話の相手はあまり言いたくないな・・・」

「読心術ですか……」

「それよりももう夕暮れになっているぞ。インデックスを探さないといけないんじゃないのか？」

「あつー!!」

完璧に忘れてました……しかし今からでは居場所がなかなかつかめない……

「ということでお困りなら俺も手伝おう。こっちも用があるんだな」

「また心を読みましたね……」

しかしそれは良いですね。探してが増えるのは便利です。

「ところで、お前。さっきのあの子の呪いの話が本当なら相当大変だぞ？何が起ころるか分からない」

「そうですね……一体どんな魔法を使用してくるのか……」

「ヨハネのペン自動書記は防衛戦に対して凄まじい力を誇るからな。しかし1つの標的にしか攻撃できないと思われるからな……1人圏に使って上条に後は特攻させるしかないな」

「……………」

かなりの修羅場になりそうですね……………



最近話の展開が早すぎて質がひどい……（後書き）

駄目だ……もうぐっだぐだ……もう神裂とステイルの口調が違  
う……ひどい

ご意見感想お待ちしております。

決戦日和ですな(風邪なのに!?) (前書き)

更新です。



決戦日和ですな（風邪なのに!?)

SIDE数馬

……スパイになっちゃったよ、ついに。この小説なんでもありだとは思っていたけどここまでくると馬鹿以外の何者でもないな。

「と、兎にも角にも小萌先生の家を探すぞ……」

「上条という方はそこにいるのですね」

「先生のアパートにいるとはね、道理で見つからないはずだ」

小萌先生のアパートはとにかく外見が小汚いということにしておく。アニメではそのぐらいしか印象が無かった……そんなでもって歩き始めた俺たちだったが……

「」「」「」

話がないのは辛い!!暗いし、この上なく寂しい!!

「音楽でも聴いてよ……」

この携帯、iphoneの進化形のような物でなんでも出来る。音楽鑑賞なんて簡単だ。

「」  
「」  
「煙草消滅!」

「一刻も早くその曲聞くのをやめてくれないかな!？」

「嫌がらせはやめられな〜い」

「子供じゃないのですからやめなさい!〜!」

神裂さんに怒られちゃったよ・・ちっ

「じゃあ・・・Ade Pollenlandを」

「もう国名が出ている時点ですくなくない歌じゃありません!〜!」

神裂さん、何もそこまで言わなくても言いじゃん・・・俺もこの曲知らないけど。

「Salvia farinacea があるのか・・じゃあこれを」

「「?」「」

この曲は神裂さんのキャラソングとして発売されています。是非購入してね!!

「あ〜これを神裂さんに歌わせたかった!〜!」

「何故私に!？」

「神裂さん、声綺麗じゃん」

「なっ・・・// // //」

「・・・・・・・・・・」

あり？何この雰囲気は・・・神裂さん、何故頬を赤くしている？  
ステイル、何故貴様は何ナンパしているんだこの野郎みたいな顔し  
ている！？

「・・・・・・・・すみません」

「そ、そこで謝られても・・・」

「早く行こうか！！！」

ステイル、怒らないでくれ・・・

くどうも雰囲気気まずい上に結局4時間かけても見つからな  
かったのでカッ

「もう、夜だ・・・」

「最悪ですね・・・」

「あきらめるか・・・」

・・・・・・・・眠いよ、今更だが昨日から今日にかけて俺は一睡もし  
ていない。一刻も早く自らの部屋に帰還したい。上条のことは後回

しー!!

「でっ、あんたらはどうするんだ？野宿？」

アニメでも原作でも不明だったのだが神裂さんやステイルは学園都市のどこで休息をとっていたのか不明だった。野宿が一番有力だと思っのだが……

「いままでその手段が妥当だったのですが……」

「どうもこのところ不良に絡まれることが多くなって安らかな眠りがとれなくてね」

そりゃステイルの派手な格好や神裂さんの抜群のスタイルだったら絡まれてもおかしくはない。

「じゃあどうするんだよ？」

「できることなら君の部屋に泊めてほしいというのが今のところ一番妥当だね」

「」「」「」「」「」「」

ゴン！！ゴス！！！！ベキイ！！！！

とりあえずステイルにすね蹴りとアッパーカットと脳天割りを食らわしとく。

「な、何をするんだ!!!」

「貴様のおかげでこちらの部屋は全滅していたの忘れていたよお  
おおおおおお!!!!!!」

上条とステイルの戦闘の時にステイルのイノケンティウスの攻撃  
が炸裂したらしく部屋が大破したことをすっかり忘れていた……

「ステイル……まさかそこまで惨事を拡大したのですか……」

「……そうみたいだね……」

「お、俺の同人誌……漫画……アニメDVD……」

そう言いながら泣き崩れる俺。いや、シヨックの大きさはとてつ  
もないんだぜ!?冬のボーナス全部ぶっ飛ばしてまでかき集めた同  
人誌をすべて失い!!!残業代をすべて吹っ飛ばしてまで手に入れた  
あの漫画の数々を……くううううう!!!!!!

「と、兎にも角にもだ!!!部屋には神裂さんしか入れない!!!  
!!!!!!」

「何で私だけ!?!」

「そつ……」

ゴベシ!!!ガン!!!ベキベキ!!!

なんかしゃべろうとしたステイルには鉄槌を下しとく。何をやっ  
たかは秘密だ。

「なんやかんやでステイルはどこかで野宿させておいて神裂さんだけアパートに連れてきました」

「とりあえず此処で就寝してください」

俺は真っ黒焦げに焼けただれているドア開けて神裂さんの中に入る。

「……あなたはどうするのですか？」

「あっ……」

重要な事忘れていたよ……俺はどうする！？さすがに恋愛フラグ成立したわけでもないのに同じ部屋で寝るのはまずいからな……

「……」

「野宿してくる……」

「そうしてください……」

「どうしてかな、此処で良い雰囲気醸し出したかったのにと絶

望してみるがどうしようもなかったのであきらめて野宿して9時間経過

朝、公園のベンチから起きてステイルぼこした時に決めた集合場所へ向かう。風邪はもちろん引いている。ヘックシヨイ!!!

「そう言えば原作では昨日の夜に上条と神裂は戦っているんだよな・・・どうなったんだろう・・・」

ヘックシヨイ!!!

「うえ〜風邪の御陰で思考回路パーになりそうだ・・・」

ちなみに寝たときはTシャツ一枚とジーンズだけ、これじゃ風邪を引く。おっ、神裂とステイルがいる。

「単刀直入に言いますと、上条の潜伏場所が発見できました」

「いきなりすごいね・・・」

あの夜中に見つけたのか？

「上条があの子とせんとつとやらに出かけているところを発見したので・・・追跡しました」

「やっていることがストーカーまがい・・・」

「仕方がないよ、方法がこれしかなかった」

・・・なんか悪いこと言ったみたいですね・・・すみません。

「とりあえず行きましょう」

小萌先生のアパートが、楽しみでもあるな・・・

「小萌先生のアパートって意外と遠いことを知る」

「・・・」

「もうお前は帰れ」

戦力外通告はないよ・・・風邪引いているからって・・・

「ステイル、その言い方はさすがに・・・」

「しかしな・・・」

ガン！！

とりあえず無理にアップパーカット

「分かった、大丈夫みたいだね・・・」



「そ、それではレキシゴウ……」

3日ぶりの上条&インデックスにご対面……!!

決戦日和ですな(風邪なのに!?) (後書き)

風邪がぶり返し苦しい毎日ですが・・・

ご意見ご感想お待ちしております!!--!

## 決戦（前書き）

更新遅れて申し訳ありません。なにしろ学生の敵とでも言う宿題に追われていまして・・・すみません

## 決戦

SIDE数馬

上条・・・頼む話を聞いてくれ・・・

「数馬にいつたい何をしたんだ!!」

「別に。何もしていないよ・・・」

「嘘付け!!何かぼろぼろじゃねえか!!」

風邪の御陰で上条に何か疑われている俺たち・・・

「上条・・・俺が風邪引いているだけだぞ・・・」

〜30分後〜

「本当に風邪引いてただけなのか・・・」

「そういうことだ」

なんやかんやでインデックスは就寝中。なので小声で話している。  
ところで本題。

「（インデックスの呪いのことであれこれ）というわけだ」

「さつきから作者はしよすぎじゃない？」

ステイル・・・言うな。それを言ったら終わりだ。

「そうか・・・インデックスは・・・」

悲しそうな顔になる上条。まあ不幸なことに關しては人一倍同情する奴だからな・・・

「まあ作戦の第3段階は夜にすることにしよう」

「なんでですか！？一刻も早くあの子を解放してあげましょう！」

「神裂さんはインデックスのことになると感情的になりすぎだ、こんな真っ昼間にやったらやばいことになるだろ。アンチスキルに連行されかねない」

衛生ぶっ壊す可能性もある。というか原作では壊している。

「それとインデックスはステイルと神裂さんを毛嫌いしているよ  
うだし、少し出て行って貰おう。作戦決行は午後11時だ」

とりあえず魔術側の2人は外へ追いやっておく。いると前述した  
とおりやっかいなことになる。

「兎にも角にも今は午前10時。残り約12時間か・・・」

これから始まるであろう修羅。それは俺に、いや上条とインデッ  
クスにとって一番長い日となるだろう。

## 数馬SIDEOUT

### SIDE上条

インデックスは今眠っている。しかし謎が1つだけあった。

「数馬・・・インデックスの歩く教会だっけ？あの服、俺の右手で完璧に効力を失ったみたいなんだけど・・・魔術師の攻撃くらってもかすり傷しか負っていなかったんだ・・・何で・・・」

「理由、インデックスに上げた飴がドラ もんの秘密道具のがんじょうつて名前の飴だったから」

「「・・・・・・・・」」

沈黙。

「今なんて・・・」

「ノーコメント！！！！」

・・・謎は解決した・・・のか？

（10分後）

「・・・ふえ？あつ、かずま!！」

インデックスが目を覚ました。いつのまにかいた数馬にびっくりしている。

「おつ、起きたか可愛い修道女さん」

「なんとなく嬉しいかも」

数馬・・・お前口リ・・・すみません、こつち睨まないで!!

「さて、晩ご飯の材料は用意してあるから暇になつちまったな」

「数馬・・・此処小萌先生のアパートだぞ。そんなにくつろいじまってる良いのか？」

「お前らは泊まっているのになんで俺が駄目なんだよ・・・それにあの人が買物いって長時間を費やしその後同僚と出くわして居酒屋いって長時間費やし、銭湯行って長時間費やすから当分帰ってこない」

何で小萌先生の私生活知ってるんだ!？・・・やっぱり紳士なのか変態なのか見分けがつかないよな・・・

「じゃあかずま、何する?」

「上条何する?」

そこで俺に話を振られてもな……あつ

「怪談でもする？」

「「へっ?」「」

うわぁお、完璧に受けが悪いよ、どうする上条さん!!

「……上条よ、真つ昏間の怪談は全く怖くない」

「そっだよとうま!!」

す、すいません……

「でもまあそれも悪くないかもしれない……」

「えっ!?!」

インデックス、顔が真つ青になっているぞ……

「か、かずま!!何でそんなこと言うの!?!」

「数馬、お前なんか怖い話知ってるか？」

数馬は急に電気を消してカーテンを閉めると、どこからか懐中電灯を取り出して

「さてこれは私のおじから聞いた話なんだが……」



「いやああああ!!」

がぶ!!!がぶ!!!ぐしゅ!!!!

何故か俺の頭に激痛発生!!

「ぎゃあああ!!不幸だあー!!!!!!」

くなんやかんやで12時間後

「じゃあ決行しましょう」

「僕はどうすればいい?」

「ステイルは壁にルーンを貼りまくってイノケンティウス作る用意して、神裂さんとはとにかく臨戦態勢、上条は死ぬ覚悟でインデックスの喉を右手で触れ」

何で俺だけ適当!?

「それしか今のところ・・・ああ後命がけでインデックスの防御装置であるヨハネのペンの攻撃に対抗してくれ」

「何故に俺の役割だけすべてレベル高んだよ!?!」

「それだけの能力を持っているから」

・・・何かなあ・・・でもまあインデックスのためだ、やるしかない。

「主よ、我をお守りください」

数馬・・・お前キリスト教徒じゃないだろう・・・

作戦決行のため上条SIDE OUT

SIDE 数馬

「ふう・・・やばい」

インデックスのヨハネのペンの攻撃は予想していたが何か原作やアニメ以上に大威力だ。上条1人じゃ押さえきれないので全員で押している。

びす！！ぎす！！ぎゅしゅしゅ！！！！

小萌先生のアパート崩壊しそう・・・

「おい！！！！これからどうするつもり！！？」

「ステイルは上条の援護だな！！イノケンティウスだせ！！！！」

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ（MT WOTFFTOIIIGOOIIOF）それは生命を育恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり（IIBOLAIIAOE）それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり（IIMHAIIBOD）その名は炎、その役は剣（IINFIIIMS）顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ（ICRMMBGP）！！！！」

初めてイノケンティウスを見るが化け物だ。こいつとは戦いたくない・・・とりあえず次！！！！

「上条！！！！突撃、突撃！！！！！！」

上条がインデックスに突入する。

「警告、第6章13節新たな敵兵を確認、戦闘思考を変更。戦場の検索を開始。完了。戦場においてもっとも難易度の高い敵上条当麻の破壊を最優先します」

冷酷なインデックスの声が聞こえる。その声はまるで人工知能AIのようにも聞こえる。

「ステイル！！！！」

「分かっているよ！！！！！」

イノケンティウスを上条の盾にする。これで30秒以上は持たせることが・・・

「・・・セント・ジョージの聖域、第二段階に変更」

ばしゅう！！！！

「なっ！！イノケンティウス！！」

「な、何だと！？」

異常な速さでイノケンティウスが撃破された・・・！？計算が狂った。このままじゃ上条が！！！！

「神裂さん！！！！インデックスのバランスを七閃で崩してください！！！！」

「七閃！！！！」

畳にワイヤーが刺さり床を崩す。ぐらつとインデックスが後ろに崩れる。発射したビーム？が天井に向かって発射される。天井には大穴が空き、閃光が天空を貫く。それが終わると羽のようなものが振ってくる。

「まさか、ドラゴンブレス竜王の殺息!?!」

やばい、上条が!?!!

がし!?!!

上条がインデックスの頭をつかんだ。なにか割れる音がすると攻撃が止まった。見ればインデックスも倒れていく。

「警・・告・・最終章・・第0・・首輪・・致命的な・・破壊・・再生不可・・能」

上条が倒れたインデックスを受け止める。周りには羽が散っていて神秘的な・・・やばい!?!?!!

「上条!?!避ける!?!!」

遅かった・・・上条の頭にドラゴンブレスが命中する。ぱったりと倒れる上条・・・

「だめだった・・・か・・」

最悪な結末だった。それは俺の計画の完全失敗を示していた。

「ま、まずい!?!まだドラゴンブレスが!?!!」

神裂さんが叫ぶ。見ればまだ羽が空中にまっっている。そのなかの4個が上条に落ちようとしている。

「それだけはさせるかああああ!!!」

無我夢中で突っ込む。頭にあるのは上条を守ることだけだった。そして俺はなぜか、

仰向けに上条に覆いかぶさっていた。

羽がその直後、両目と右肩、左足に落ちる。

「あぐわあ!!!あああああ!!!!!!」

今までに負った怪我以上の激痛が部分部分に走る。意識が混同する。この時点で分かった。

俺、死んだな……

## 決戦（後書き）

「ご意見」「感想」お待ちしております！！

必ず守るもの(前書き)

更新です!!



## 必ず守るもの

SIDE数馬

目の前……真っ暗だ。何も見えない。右肩動かない。左足動かない。……はあ

「まさかこんな短期間で死ぬとはね……」

誰でも良いから作者の曾祖父が作曲した海ゆかばでも歌ってくれ……しゃれを言ってる場合じゃないな。

「そうだね。しゃれ言ってる場合じゃないね」

「うわぁお!?!」

「こ、この声女神様!?!?!久しぶり!!」

「作者に忘れかけられていたよ。私……」

「そうですもんね、登場回数一番少ない……」

「今回は何用で?」

「ずばり、両目失明、右肩損傷、左足切断の状態の君を治すべくつれてきました!?!」

「あれ?じゃあ今俺の体は……」

「あの世界の時間をこっそり止めて君だけ連れてきたのだよ、まあ場所は秘密だけどねえ」

「ふーん。さつきから番犬の鳴き声が聞こえるから地獄の門の前といったところ？」

「なっ！！こらっ、ケルベロス！！静かにしなさい！！」

あゝあ、自らばらしちゃっているよ。

「女神様はこれだから権力が無いんだね」

大天使！？いたの！？

「さつきからいたんだけど・・・」

すみません・・・気づかなかった。

「とにもかくにも行こうか！！！」

どこに行くつもり？

「冥府の神ハデスの所」

わぁお、すごいね・・・

く来ましたよ、結局く

「あんさんが数馬光太郎はんか、よろしゅうな」

エセ関西弁にこの声は・・・黒井ななこ先生・・・

「よく言われるわ。やってられへんで、威厳もがた落ちや」

「「「」」愁傷様!」「」」

「で、何の用や?」

〜説明中〜

「そんなわけだから処刑された悪魔の体の一部ください」

女神・・・俺にそれをくつつけるのは嫌だ・・・

「そんな無茶なことをいうなや!下界のものが悪魔の一部を取り入れることはとある魔術の禁書目録上まずいんや!」

「だったらハデスが気になっているアポロン紹介してあげるよ?」

「なっ、そ、それは・・・」

おい、たちの悪いセールスになってるぞ・・・

「メアドも教えるよ?」

・・・ひでえ・・・

「わ、分かったわ・・・持って行け泥棒!」

「処刑場に来ました」

「ハデス、最近処刑された位の高い悪魔は？」

「ウヴァルやな」

「誰ですか!？」

「ソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の37の軍団を率いる序  
列47番の強大にして大いなる公爵だったよね」処刑されたんだ」

「偉い方だったんだ……よく分からないけど……」

「そうなんや、下界の19歳の女性と(禁止事項)や(禁止事項  
です)なこととしていてな。下界にてえだしちやあかんのにてえ出  
したから」

「そんな奴の体の一部貰いたくないよ……」

「私も同意。あいつ能天使だった時から嫌な奴だった」

「マジすか……」

「他には？」

「それに期待するよ……」

「もう無いわ」

「「「はい!?!」「」」

無くなるのはやくないかおい!?!?!?!?!

「そりゃそうや、そうほいほい悪魔が処刑されたらこっちだって  
かなわんわ」

じゃあどうするや?

「「「「.....」「」」」

誰も考えていなかったわけか.....やっぱり。

「あつ!?!そうや!?!そういえばザガンが後継者探しとったな  
あ」

「誰?」

「ソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の33の軍団を率いる序  
列61番の大王にして総裁だよ」

分からないよもう.....そもそもソロモン72柱って何!?

「とにかくLet's GO!?!?!」

スルーかよ!?!?!?!

〜で、歩くこと30分、ザガンの部屋にきました〜

「大天使、ところでさあ……」

「何？」

「俺両目失明して左足無いのにどうやって移動してるんだ？」

「ドラ えも……」

分かりましたもういいです!!!!!!

前では女神とハデスが門番と話し合っているみたいだ。おっ、扉が開いた音が……

「中に入るよ」

やっぱり怖くなるなあ……本物の悪魔との対面……

3分後

「ほお、この古いぼれに何のようですか？冥府の神ハデス」

うわぁ……重々しい声が響くよ……いかにも悪魔って感じの

「下界のものやけど後継者連れてきたでえ」

「マジで!?!いやっほおい!!!!!!」

急にテンション高!!!!!!なんなの!?!

「元々愉快なおじさまキャラな悪魔だからねえ……」

なんだよこのaggaggは……

「よし!! そうとなれば採用試験だ!!!!」

「はい!?!」

聞いてないよそんなこと!!!!!!

「ザガン、こいつ眼とかに障害あるんやけど……後継者になったら治してくれへんか?」

「勿論だ」

話を勝手に進めるなよ……俺分からないよ? 悪魔のことなんて……

「とりあえず始めるぞ」

はぁ……あきらめたほうが……

「第1問、新世紀エヴァンゲリオンにおいて……」

おかしくない!?!?

〜全問正解中〜

「おお・・・全問正解とは・・・悪魔ではまったく答えられなかったのにお・・・」

そりやまあ新世紀エヴァンゲリオン詳しく知っている悪魔なんていないだろうよ・・・しっかし第14使徒の攻撃特徴を述べるは難しすぎるだろ・・・

「じゃあOKなんか？」

「当たり前だ！こやつは下界のものみたいだから。ついでに改造してやるぞ」

改造！？なんだよそれ！！

「といっても障害のあるところだけ治すだけじゃ心配ない」

良かったそれなら・・・

「私の能力を植え付けたりもするがな・・・」

オーマイガット・・・orz

〜30分後〜

「よく似合っているぞ」

「良くないだろ！！！！！！」

貴様何したんだよ！！！！目の色に変色しているぞ！！！！右目が赤



と黒混ぜたような色だし、左目は灰色と青混ぜたような色だし！  
！右肩は元に戻っているけど触ると鉄の感触がするよ！？左肩にい  
たつては体温が感じられなくなっている……

「一番の問題は足だよ……」

地面についているはずだが感覚がまったく無い。よく見れば暗黒  
のオーラ出しているし、若干黒く変色している……

「ついに化け物になったよ……俺」

「詳しく言えば悪魔だな」

そこまでやったの！？

「説明しておくとな、貴様の両目は魔眼と言ってな。対象物に呪  
いを掛けたり直径12kmの円周上にある物体の把握が可能になっ  
ておる。ついでに私の能力である水を灯油、石油類に変換したり、  
ワインに変えたり、血液を水に変えられる能力もつけておいたぞ……」

最後の能力めちゃうちゃ危険ジャン！！使わないぞ！？

「じゃあ1000年後にまた来てくれ」

「絶対来ない！！！！」

く兎にも角にもく

「「「く・・・」ポンポン」「」

「こんな体になった原因に励まされたくない!!!!!!」

とりあえず元の世界に戻ろう。場所は上条が入院している病院。

「そういえば転生時にかかった重力の負荷は？」

「数馬、もう悪魔に近いから大丈夫」

「そうですか・・・そうですか!!!!!!」

2回目の光に包まれた。

目が覚めると病院の待合室のベンチにいた。インデックスが上条に会っている時間帯のようだ。なんとなく上条の病室を見つけた。インデックスが元気に病室から出てきていた。

「さて、入るか・・・」

俺はある覚悟を決めてがらがらとドアを開けて中に入った。

数馬SIDEOUT

上条SIDE

「よお！！上条元気かあ？」

明るく陽気な声で人が入ってきた。・・・これが数馬っていう俺の親友なんだろう。

「あ、ああ、よお」

「・・・すまなかった」

突然の謝罪だった。

「へっ？」

「俺はお前は助けるように努力はしたんだ・・・なのに、失敗した。上条、お前にとってもない苦痛を、押し付けてしまったんだ・・・」

「いや、それは・・・」

まさかあつさりばれたのか・・・

「いいや、これに言い訳はできない。ただ・・・今後のことはどうにかしてみせよう」

「な、何をだよ？」

「俺は上条とインデックス、あなたたち2人を必ず守ってみせる。」

せめてものお詫びだ……」

……何だそんなことか。

「何言ってるんだよ」

「え？」

「そんなことで謝罪されても別に俺は困ったことなんか無いぜ？  
それにお前は全力を尽くしたんだろ？俺なんかのために頑張ったや  
つにそんなお詫びなんかさせられるかってんだ」

「そうか……やっぱり上条は記憶を失っても上条か……」

にかつと笑う数馬。初対面だがなんとなく良いやつだと分かる。

「さあて、そうと決まれば退室するか!」

「早いなおい!」

「まだこちらにも用があるんでね」

そついつと数馬は出て行ってしまった。

**必ず守るもの（後書き）**

「意見感想お待ちしておりますー!!」

夏休みが宿題につぶされるってどういことだよー！（前書き）

更新です！！

最近、お気に入り登録100件越えました！！ありがとうございます！！

夏休みが宿題につぶされるってどういことだよー！

IDE数馬

何も感じない・・・今は8月8日、原作2巻に突入である。ちなみに部屋は修理してもらったよ。

「いい加減、この体やめたい・・・」

どうも悪魔に近くなった体だと何故か朝4時に起床するし、どうも（禁止事項です！！！！）になりやすくなるし・・・辛いな

「でも今日は原作では2巻だもん・・・つまらないな」

俺が参加してもしなくても別に異常が発生するわけでもないんだからねえ・・・

生まれてきてごめんな・・・

「ひぐらしネタはやめろ！！！！！！！！！！」

なんつー着信音だよ！！！！！！怖いからやめろ！！！！！！

「ひにやりしてただけたでしょうか？」

「ゼパルさん！？ジョークでもひどいぞ！！少女の声使うな！！後ひにやりって何？」

「ひんやりでしたね」

間違うな!!!

「まあ任務ですのでご了承ください。今回の任務はインデックスの世話です」

「しよっぱい……」

「ロリコンには喜ぶべきことだと思いますよ？」

殺すぞてめえ!!!!!!

「原作によればインデックスが出かけちゃってさあ大変、なことになるので……」

それはまあわからなくもない……

「とにかくお願いしますね」

「はい、はい」

じゃあやりますか……

くで、上条とインデックスと一緒に外出

「やっぱりな、参考書は高いっつただろ？」



「納得出来るな……まさか3600円もするとは思わなかった……」

上条は参考書を買いに本屋に来た帰り道なのだが、思いがけず異常に参考書が高額だったため滅茶苦茶に落ち込んでいるよ……

「半額セールが昨日で終了とは……不幸だ……」

「その前に参考書を1冊も持っていなかったお前が信じられないよ」

「そこは言って欲しくない……」

あゝあ、傷口に塩みたいなことしちゃったかな？まあいいや。

「とうま」

不機嫌なインデックスさんの声が聞こえる。可愛いなあ……口リコンって言った奴は殺す！！

「とうま、3600円あったら何が出来た？」

「言っちゃ駄目だよインデックスさん!!」

「何が出来た？」

もう脅しに近い……上条がいーわなーいでーっ!!と耳を塞ぎ両目を閉じて全ての現実から逃げだそうとしている……!!

「おい、インデックス。上条がこのままじゃ気の毒だ。そのくらいにしてあげろって……」

見るとインデックスはくるくると回っているアイスクリーム屋の看板を凝視している。上条もその様子に気づいたようだ。

「分かるけど3600円分もアイスは食べないぞ、普通」

「む!!」

上条……言わなきゃ良いのに……

「とうま、私は一言たりとも暑い辛いバテたなんて言っていないよ？ましてや他人のお金を使いたいとも考えたこともないし、結論としてアイスを食べたい何てみじんも思っていない!!」

徐々にまずい方向に進んでいくのが分かる。上条の不幸の序曲が……ああ、やばいインデックスが自分の身の上話している!!このままいくと……

「んじゃやめとくか。無理して食べる必要も……」

ないしと言おうとした瞬間にがしつと上条の肩をつかむインデックス。あゝあ、金欠なのにどうするんだか。

「た、確かに私は修行中であるから嗜好品の摂取は禁じられてるけれども!!」

「じゃあ駄目じゃん」

「しかしあくまで修行中であるから完全なる聖人の振るまいをするのはまだまだ難しかったり、難しくなかったり!!従ってこの場合誤って口の中にアイスが放り込まれる可能性のなきにしもあらずなんだよとうま!!!」

「.....」

どうもひどい言い訳にしか思えないぞ、突っ込みのしようがないし.....とにかく欲しいんだよな、アイス。と、思考していると後ろから

「なかなか素敵な交渉中なんやけどな、ちなみにその子供、誰なん?かみやん、数やん」

後ろから危険人物青髪ピアスと土御門元春せつきーん!!!上条、誰だか分からずぼーっとしている。ちなみに数やんは俺のあだ名だ。微妙って言った奴は出てこい!!!!

「うん?どうしたんかみやん、ぼけーっとして?なんか他人行儀みたいな視線やなあ、もしかして夏の暑さにやられて記憶でも飛んでんのかいな?それと数やんはなんか色々変わってへんか?何か雰囲気が違うなあ、悪魔にでもなったんか?」

「「なっ!!!」」

やっば!!!そっぴや色々身体に変化があっただ!!!

「分あーってるって、冗談がな。記憶喪失なんて不思議系電波少女の特権ですよ?悪魔に変身なんてロリ娘の特権ですよ?」

「甘いな、青髪。記憶喪失によってツンツンしていた少女がデレデレに変わるといふシチュエーションがあるだろう！！ロリ巨乳の悪魔娘もあるだろう！！！」

一度で良いから言ってみたかった突っ込み。

「なっ、それは気づかなかつたなあ・・・さすがやな数やん！！・・・で、かみやん。ほんまにこれ誰なん？何でこんな小っこい知り合いがおんねん？かみやんの従妹・・・と違うよな。この銀髪にかみやん遣伝子が混じっているとは思えへんし」

青髪・・・何故初対面の女の子に「小っこい」と言えるのか分からない。さすがにインデックスもまだ怒りは・・・

「その子、実は女装少年っておちやないの？」

おーまいがっとorz・・・・・・・・

くで、この後インデックスがきれて怒りを落ち着かせるためにアイスクリーム屋に行ったが休みで、ファーストフード店に直行

「シエイク、シエイク、シエイク！！！」

楽しそうにインデックスがイチゴ味、チョコ味、バニラ味のシエイクをお盆にのせて階段を上っていく。土御門、青髪、上条も持っている。無論俺のおごりです。

「しっかし混んでいるなあ・・・座れるかな・・・」

「無理だにやー」

土御門しゃべたああああ!!

「何だぜよ、その驚きは・・・」

「いや、今の今までしゃべっていなかったから・・・」

多角スパイなんだけどね・・・

「とうま、かずま!!!!ここ空いているよ!!!!」

そういえばここで登場するんだよね・・・

「うっ!?!」

あの巫女さんが・・・

夏休みが宿題につぶされるってどういふことだよー!! (後書き)

ご意見感想お待ちしておりますー!!

巫女さんというのは美しい物である(前書き)

皆さん、架空請求には気をつけてください!!!

巫女さんというのは美しい物である

SIDE上条

此処はファーストフード店の2階の禁煙席。うん、そこまでは良いんだよ。

「……………食い倒れた……………」

何だつてこんな俗っぽいお店に巫女さんがいて、その巫女さんがテーブルに突っ伏してあまつさえそんな謎の台詞を投げかけてくるのかー!?

巫女さんは俺と同じぐらいの年齢で、スタンダードな巫女装束に腰まである黒髪。普通?の巫女さんだ。

「……………」「……………」

エレベーターの中の微妙な空気とはこの事は言うのか……………ってインデックス、青髪、数馬、土御門!何で俺のことを見ているんだ!?

「……………何で俺をみんな見るんだよ?」

「……………ほらかみゃん。話しかけられたらには答えてやらなっ!」

「……………そうだよそうそう。とうま、見た目で引いてはいけません。神の教えに従いあらゆる人に救いの手をさしのべるのです。ア



「メン」

「……陛下!!!この場合、この中の被害担当艦であるあなたが行くべきであります!!!」

「そつだにゃー!!!それが一番にゃー!!!」

てめえらふざけんな!!!ここは公平にジャンケンだろ!!!インデックス、数馬!!!てめえら何神妙な顔つきで十字きってるんだよ!?

で、そんなこんなでジャンケン開始。

「『『『最初はグー!!!ジャンケンポン!!!』』』」

左から土御門、青髪、上条、数馬で

パー、パー、パー、グー………

「『『?!?』』」

き、奇跡が起きた。ジャンケンに俺が勝利するなんて……

「オーマイガット………」

数馬………気の毒に………

上条SIDEOUT

数馬SIDE

さすがにね。油断していたよ。まさかみんなパーを出すなんて！  
！！！！！なんか不幸だー！！！！

「あのーもしもし？」

ぴくつと巫女さんの肩が動く。

「えつとー食い倒れたとは何ぞましょ？」

原作通りに進もう。それが良い。

「1個58円のハンバーガー。お徳用のクーポン無料券がたくさんあったから」

「ほう、ほう」

「とりあえず30個ほど頼んでみたり」

「お徳すぎだ馬鹿！！」

「上条バトンタッチ！！！」

何故か反射的に突っ込んだ上条に全てを任せる。上条の言葉を聞いた瞬間、巫女さんはぴくりとも動かなくなってしまった。何も言わないが、それだからこそ傷ついたというオーラがわき出ている。

「あー、いや違うんだ。言葉が足りなかった、馬鹿だ、しかし

何故そんなことを？」という一連の会話を円滑に進めるものであり乱暴な言葉遣いは親愛の証で決して悪意のある台詞ではない。それと業務連絡、そのシスターと青髪と金髪と悪魔は後で顔貸せみたいな目で見るな！！！！」

うわーんと沈黙に耐えきれなくなり上条が叫ぶ。

「やけ食い」

「「「「「は？」「」「」「」

突如として死んだように動かなくなっていた巫女さんがしゃべりだす。

「帰りの電車賃、400円」

ぶつ切りな感じでしゃべる巫女さん。

「全財産、300円」

「……その心は？」

「買いすぎ、無計画」

「……」

「だからやけ食い」

上条、馬鹿と思っちゃだめだ！！可哀想な人と思え！！！！

「つてか、300円分でも電車乗ればいいじゃん。そうすりゃ歩く分100円分で済むし。それ以前に誰かから電車賃借りれないのか？」

「おお、それは良い案」

ぐいっと、巫女さんは顔を上げる。人はそう言う楽が出来る案に反応するんだなと思う。それはともかくも皆さんご存じ、姫神秋沙の初登場。いやね、美人だな〜ほんとに。肌がもう美しいほどに真っ白。

〜で、10分後、ごったごったのまま姫神は黒服どもに帰らされる〜

夕暮れ、結局遊び倒した俺たちは小学生よろしく5時に別れた。ばいばーいと言っているかのように手を振る青髪ピアス。舞夏との約束があるとか何とか言っつてそそくさと帰る土御門。残されたのは俺と上条とインデックスだけだ。

てけてけと歩いていく俺たち。辺りには風力発電の風車がくるくると回っている。と、その根本に段ボールが置いてある。

「あつー!」

子猫がミ〜ミ〜と段ボールの中で泣いていた。

「とうま、ネ……」

「だめ」

、コとインデックスが言おうとした瞬間に上条が遮る。

「・・・とうま。私はまだ何も言っていないんだよ」

「飼うのは駄目」

とにかくこいつだけは飼っちゃ駄目。例外は除きこいつの御陰でインデックスに不幸がおこるのは間違いなし。

「何で何で!!どうしてどうしてスフィックスを飼っちゃいけないの!?!」

「うちは学生寮だしペット禁止だしお金はないしもう名前付けてんじゃねーよ!!!しかも何だスフィックスってバリバリ日本産の三毛猫に付ける名前じゃねえ!!!」

上条、怒っているところが違うぞ・・・

「Why don't you keep a cat!! DO  
as you are told!!!」

「?????」

「上条、訳はどうしてネコを飼っちゃいけないの!!あなたはなんてこと言うの!!だ。これは中学生レベルだぞ・・・」

「くっ、そこは・・・とにかく駄目なものは駄目だ!!」

「やだやだやだ!!!飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼う飼うか  
ーうー!!!」

「そんな得体の知れないスタンド攻撃みたいに叫んでも駄目なのは駄目！！ってというか野良猫びびって逃げちまったじゃねえか！！」

「とうまのせい！！」

「俺のせいだよ！！！！」

ぐぎゃあ！！とわめき喧嘩をする2人。その姿はなんとなく兄妹のようにも見える。良いな、とついつい思ってしまう。しかし、上条はインデックスが好いているのは記憶喪失前の自分だと思っているのは見ているこちらとしても辛い。

「別に、インデックスはそれでも嫌いになんかならないと思うが・・・」

小声でそうつぶやく。上条に教えてやっても良いが、自分で分かった方があいつは納得するだろうな・・・

「・・・何だろう？近くで魔力の流れが束ねられているみたい・・・」

インデックスが魔力を察知したらしい。こちらもピリピリと何かが伝わってくる。悪魔に近い身体になってからというものなんか感知する能力もついたようだ。

「・・・属性は土、色彩は緑、この式は・・・地を媒介に魔力を通し、意識の介入によって・・・」

ここまで分かるインデックスはやっぱりすごいと言わざるをえない。

「……ルーン？」

そうつぶやくとインデックスは道路の脇、ビルとビルの中の裏路地に向かって走りだした。

「ちょ、おいインデックス!!!」

上条が止めるまもなく裏路地にインデックスは消えていってしまった。

「先に帰っていてといわれてもな……」

「そうだよなあ……」

で、ところだ。

「早く出てこい!!! ステイル!!!!!!!」

背後を振り向き叫ぶ。沈黙が少しの間続く。

「やっぱりばれたか。さすが赤光の黒十字のメンバー。まあ久しぶりだね、上条当麻、数馬光太郎」

ずっとステイルが現れる。上条、誰だか分からずまたもやぼーっとしている。

「ふん。久しぶりだというのに挨拶も無しか。うんうん、結構結

構。やはり僕たちの関係はこうであるべきだ。一度の共闘で日和っ  
てはいけないからね」

ずかずかとしやべっていくステイル。とりあえず上条に耳打ち。

（上条、こいつは・・・えつと記憶失う前の上条と一緒にインデ  
ックスの呪いを解いたステイルって奴。ちなみに14歳でありなが  
らヘビースモーカーな野郎だ）

上条は状況を察したのかとにかくスマイルをする。

刹那、ステイルはカードのようなものを1枚取り出し

「Don't smile with everything  
（いちいち笑うな）Are you ready to die  
?（ぶっ殺すぞ）」

紅蓮の炎剣がステイルの手から噴き出す。それをステイルは躊躇  
なく振りかざす。

「どわあああ!？」

突発的な攻撃に反射的に上条は右手を前にかざす。

バシユウ!!と音を立てて炎剣は消える。しかし上条は記憶を失  
つてから初めての魔術攻撃に恐怖していた。

「「てめえ何するんだこの野郎!!!!!!!!!!!!!!」」



上条と同時にとにかくステイルのその行動にきれておく。

「うん？内緒話だけど？」

ぶちつと怒りが限界に達した。瞬間的に重力を小さくしてステイルに接近。

「なっ！！」

ゴギ！！ゴギ！！ゴギ！！

軽く、軽く3発みぞうちを殴っておく。

「ぐげえっ……！！！」

もっとも、悪魔にとっての軽くって人間でいったらすごく痛いんだろっけどな。

「ごほっ、ごほっ、君は……僕のことを……殺すつもりか……」

「炎剣いきなりやった奴に言われたくない」

「数馬すげえ……」

「まったく……君は化け物か？また殴られるかもしれないと思って鉄板を身体に付けといたに……見事にぶっ壊してくれたね……」

知ったことか。これだからこいつは……

「で？何のようなんだこの野郎」

喧嘩腰で話が始まった。とりあえずステイルに対する態度がひどいってのは認めるよ。

巫女さんというのは美しい物である（後書き）

ご意見感想お待ちしております！！

悪の本拠地にさあ出発!! (行きたくねえ・・・) (前書き)

更新です!!

悪の本拠地にさあ出発！！（行きたくねえ・・・）

SIDE数馬

「君達は三沢塾という進学校の名前は知って・・・」

「その三沢塾がインチキ科学宗教に乗っ取られた。その上、そこに吸血殺し（ディーブラッド）という吸血鬼の天敵のような女の子が監禁されている。それを救出するのを今回俺たちに頼んできたと・・・」

「「「「・・・」」」」

話の腰を折るのは大得意さっ！！

「で、今回の作戦内容をもうちよい詳しくスタイルが説明している」

「ほお、貴様は何も作戦を考えずに乗り込むという馬鹿にも程があることをしようとしたのか・・・」

とにかく殴る用意をしておくか・・・

「か、数馬！！落ち着け！！！！」

「止めるな上条！！こいつを八つ裂きにしてくれる！！！！」

上条に結局押さえられてあきらめたが・・・今度は覚悟しやがれ

「……………とにかく君達も来てくれると助かるな……………」

「突如として怯えている……………」

「ざまあみるだ、まあ話も進まないし」

「上条、行ってくれ」

「何で俺だけ!?!」

「俺はインデックスと一緒に留守番しているから、めんどくさいし」

「できれば君が来てくれればすごく楽になるんだけど……………」

「あああ!?!」

「……………」

「不良っぽいって?構わんよそれでも!」

「き、君に拒否権は無いはずだよ?インデックスを回収することも僕たちには出来るんだよ?」

「その前に貴様を地獄の門にくぐらせて証拠隠滅することだって出来る。まあ名目上、名誉の戦死を遂げたとしてもしておけるしな!」

もう臨戦状態に入るスタイルと俺。上条はそこに仲裁に入る。

「ああ、もうお前ら落ち着け！！こんな所でごたごたしていた所でどうにもならないだろおが！！！」

（結局講和）

「じゃ、とにかく今回の作戦名はグラン・サツソ襲撃作戦とする。これで決まりだ」

「まったく名前関係無いだろ！？」

縁起を担ぐんだよ。こういうときには。

「各員、アウレオルスの情報暗記、それと敵戦力の把握、敵主力兵器などの確認は各自で完了しておいてくれ、以上！！」

「君に命令されるとなんか癪だけど、まあそうしよう」

うつせえぞスタイル、ぶっ殺すぞ。

「数馬、心の本音駄々漏れだぞ・・・」

「突っ込むな、それと上条！！さっき見た巫女さん、もとい姫神秋沙が吸血殺し（ディーブラッド）だったからって自分を責めるな！！！」

「！？・・・また心読んだのか・・・」

原作読んでりゃそのくらいのことは分かる！！

「貴様は人格者の鏡のような奴だからな、どうせあの時、自分があの子に金貸していれば監禁から逃げられたと思えば自分のことを責めているみたいだが、そういう宗教じみた気持ち悪い組織は追跡手段なんていくらでも持っているんだ。むしろ捕まったときに抵抗して最悪な結果になるよりはああいう結果の方がbetterではあるだろう!！」

とにもかくにも上条の苦しみはただでさえ多いんだ。少しぐらい減らしてやらないとな。

「では一時解散! ! ! ! !」

〜一度アパートに帰還〜

「・・・インデックスに何て言ってごまかすつもりだ？」

「さっきのあれでいいだろ・・・」

しかしインデックスの子守どうしよっかなあ・・・今のところ有効手段は大量の食料でそこにへばり付かせることしかない・・・

「数馬はよく平気だな・・・ほとんど死地に向かうようなもんだぞ・・・」

「まあ慣れているからな・・・」

何回もそんな状況だったし、もうね・・・

「俺はもうどうしちまったんだろうな・・・」



小声で上条に聞こえないようにつぶやく。元オタクだった俺が今じゃこんなになっちまった。

「ん？何か言ったか？」

「いんや、別に」

上条宅に帰宅。

「とうま！！かずま！！お帰り！！」

畜生癒されるなこの野郎！！！！

「インデックス、餡買ってきたぞ！！」

「わーい！！！！」

懐から餡の袋を取り出す。甘やかすなって言われても無理！！！！

「ああそれとだなインデックス、ちょっと俺たち出かけなきゃならないんだが・・・」

上条！！ナイス切り出し！！

「え？どこに？」

「ああ、チヨーハイテクプライマリーカルチャー施設に行く」

「それ、嘘だよな？」

「「え……」」

あれえ？……なんか今絶対インデックスさんが言うはずがない  
一言が……

「インデックスさん？何故そのようなことを思いに？」

「だって数馬の貸してくれた学園都市科学技術全集5432ペー  
ジにそんな施設なんて載ってなかったもん！！」

……あああああああああ！！！！！！！！！！  
！！

「しまった、インデックスの科学に弱いところ直してあげたいと  
思っただけちゃったんだ……5日前に……」

「おい、数馬……」

（小声で言ってます）

作戦大失敗いいいいいい！！！！

「とうま、かずま？どうしてそんな嘘ついたのかなあ？」

や、やばい！！！！どうするどうする！？……あっ！！

「か、上条！！それ違うだろ！！全然貴様人の話聞いていないだ  
ろ！！！電磁推進実験施設に行くんだろっが！！！！それはお前マン

ガに描いてあった施設じゃねえか！！！」

「何か言い訳がましいような気がするんだよ？」

ぬぬう・・・手強いな・・・

「インデックス！！上条さんは少しこの暑さでばけているんだよ！！その所のミスは見逃してやって！！」

「確かに電磁推進実験施設はあるって書いてあったけど・・・何でいつも不真面目なとうままで行くの？」

けっこうひどいこと言うね、インデックス・・・

「お前、それは言い過ぎだろ・・・まあいい加減勉強しないと最悪な状況だからなあ・・・」

「とうま・・・そこまでお馬鹿さんだったの？」

ひどいね、インデックス！！！！

「でも、とうまの頭が良くなるんだったら行っても良いよ！！！！」

よっしゃあああ！！ナイス上条の頭の悪さ！！！！！！

「ああ、冷蔵庫の中にひもで引くと温められる弁当40個用意しておいたから晩飯にはそれ食べておいてくれ、あと電子レンジにスプーン入れて火花飛ばして遊んだり、冷蔵庫で涼んだりしないように」

「それとインデックス・・・」

「へ？な、何かな、かずま・・・？」

「お腹に何隠しているんだ？」

「えっ？」

ぎくり、とそんな音が聞こえそうな感じにインデックスは固まる。

「な、何も隠していないよ？天にまします我らの父に誓って、シスターさんはうそをつくはずないんだから」

言った瞬間にミィという子猫の鳴き声がインデックスの服の中から聞こえてきた。

「ぐるあ！！てめえの信仰心はそんなもんかこの野郎ー！！」

上条マジギレ。

〜この後14分間このネコを飼う飼わない騒動で大騒ぎ〜

アパートの部屋から出ると先ほど別れたステイルがルーンの書いているカードをたくさん貼り付けていた。

「インデックスの防御ってどこかな？」

「そうだよ、もしも他の術者に襲撃されたらやっかいなことになるからね」

「……ルーンをばらまいた結界の中でしか使用できず、ルーンをつぶされると形を維持できなくなるのが弱点、だったよな」

上条がそんなことをつぶいやくと少しスタイルが不機嫌になった。

「……言っておくけどあれはスプリンクラーがあったからああいう結果になった訳であって、決して僕が君より劣るといふことではない」

「あれ？俺たち喧嘩したっけ？」

「」「」「」「」「」「」「」

何か険悪な雰囲気ですあ出発！！

で、来たけどさあ……本当に普通のビルじゃん……しかもでかい。  
い。

「こんなでかいビルで、殴り合いするのは何か映画みたいだな」

「確かになあ……」

そう言い、ビルの上を見上げる上条と俺。

」

〜とにかくやるるか!!!〜

「今回の作戦は・南棟5階食堂脇に突入するので良かったっけ、ステイル？」

「そうだよ」

魔力を使用したらこっちの位置が完璧にばれちまうしな……上条には何か持たせとかないと

「上条、とにかく貴様は38式歩兵銃を所持しろ。銃剣も付けているから大丈夫!!!」

「何がだよ!？」

「お前攻撃できるの幻想殺し（イマジンプレイカー）と素手だけじゃねえか!!!」

こんな所で死ぬような奴では無いが怪我なんてされたくない。

「携帯弾丸6発、補充弾丸100発の袋用意したから!!! 持つてけ!!!」

「ふざけんな!!! 人殺しちまうじゃねえか!!!」

「それをやるかもしれないんだ!!! 早く持つてろ!!!」

ぐいつと無理矢理38式歩兵銃を上条に押しつける。

「敵は頭の中で考えたことを現実に引きずり出せる錬金術師アウレオルス・ウィザードだからね。油断していたら死に直結するから、覚悟しておいてくれ」

「……分かった……」

ステイルの説得？に折れたのか上条は納得してくれた。

さあ出発だこの野郎!!!

〜1階ロビー〜

「ごく普通なんだがな……」

「本当に悪の根城かよ」

奥にエレベーターが4基ある。あれに乗っていくのか……

「あれ？」

「どうした？」

「エレベーターの間の柱に何かぶつ壊れたロボットが……」

あっ……そっいちゃ……

「何言っているんだい？あれはただの死体だよ？」

死体があつたんだ……orz

はっきり言って俺は死体にもう慣れてしまっている。まあいくら  
か前の話でもう2体は見ているからね。他にも何か色々あった任務  
で相当な数見ているし……

「し……たい？」

長くなりそうだからカットしたいけどここはできないなあ……  
上条もこういう所慣れて貰わないと……

「上条、ここは戦場だ。死体があることは当たり前だ……」

「そうだよ、1つ2つ転がっていてもおかしくはないんだ」

「でもまだ息してっ……!!」

「そんな重傷な状態じゃ助かるわけがない、あきらめてくれ」

苦しい現実だな……そうは思っても、ほっておくしかない。

俺たちは先に進む。

死体おいてきてなんだけども俺たちは「コインの裏側」にいる。  
まあ現実世界と幻想世界の2つの世界の幻想世界にいるようなもの  
だ。



「だから俺たちの存在は気づかれない、今のところは……」

「……………」

非常階段上つていながら思考中なんだけど……………今俺を除く2人がもうへとへとなんだよね………… orz

コインの表と裏、このビルはその2つの世界に別れている。裏から表の世界に干渉することは不可能であり、それを行えば返しとなつて自身に降り注ぐ、そんなルールだ。

このビルは表の世界にあるもの。そして俺たちは無理矢理、アウレオルスという錬金術師に裏の世界に引きずり込まされた。そんな俺たちがこのビルを歩いていけば、足には足が地面に与えた衝撃が自分に来る。

「あ、足が……………」

上条が早くも根を上げ始めた。ステイルももう一言もしゃべっていない。元々体力が無い、特にステイルは14歳にしてヘビースモーカーなので肺はぼろぼろであり、限界が近くなっているようだ。

「……………君はよく平気だね……………」

「まあな」

こっちは足自体があゝの世の物になっていいるからまったく衝撃などの感覚が感じられない。

「敵、も……同じ条件であることを祈りたいね……」

「百歩譲ってありえないけどな」

「「「………」」」

また雰囲気が悪くなったよ！！畜生！！！！

「こんなことなら……エレベーターに乗った方が早く済んだんじゃないのか？……」

「裏の世界にいる僕たちに表世界のエレベーターのボタンを押せる方法があるのならばぜひそうしたいね」

「……」

「それに仮にもし生徒達と共にエレベーターに乗り込んだとしてもどうせ表にいる生徒達に押しつぶされるのが関の山だしね」

ああ、もうみんな鬱状態！！何かもう帰りたい！！

「……そういや、ここって携帯通じるのか？」

「「「？」」」

「いや、表の世界と裏の世界で会話することは出来るのかなーっと思っ」

ああ、そういやここで上条の電話イベントがあるんだっけ。

「でもこんな所で電話なんかしたら敵に襲撃されちゃうかな？」

「まあもともと正面から突っ切って此処に突入したからね、もう敵はとっくのとうに気づいているはずだよ」

「そうだよな、じゃあ掛けるか・・・」

「インデックスにか？」

「まあな何か心配だし」

上条もある意味では過保護のように思えるな・・・俺が言えたことじゃないけど。

とうるるる・・・とうるるる・・・

何回かコール音が鳴り響く。インデックスがまだ出てこないの得上条にも焦りの表情が見え始めた。

とうるるる・・・とうるるる・・・

9回目のコール音でとうとう上条に危機感の表情が見えた。多分出るはずなんだが・・・

「ただいま留守になっております。ピーとなりましたらご用件を

言ってください」

「……………」

出なかった……………はいつ!?

「上条、インデックスに鍵とか渡したのか?」

「ああ……………」

「ステイル、お前イノケンティウスのルーンの魔力、此処まで探知できないようにしたか?」

ステイルは何も言わない……………やってないのか……………

「インデックス、此処まで来ちまうと思うか?」

「……………」

全員、結論はわかりきっていた。Yesだ。

「こりゃとつと片を付けるしかないな……………」

思いがけないタイムリミットが出来ちまったか……………

やっと、25分掛けて隠し部屋の近くについた。学生食堂の入り口である。しかし裏側の俺たちにはドア1枚も開けることは不可能

なのだ。表の世界の誰かが此処を開けてくれるのを祈るばかりだ。

「此処には間違いなく警報装置みたいなものがあるはずだからな・  
生徒達が襲ってくる可能性が高い」

「まじかよ……」

現に原作では襲われている。しかし、俺が転生したことによって歪みでも生じたのかどうも若干原作との違いがあることは否めない。

「嫌な気がするね……」

ステイルは今回魔術を使えない。敵の本拠地でわざわざ位置を示すことになるからだ。となると攻撃は俺と上条のみ。

「おい、お前ら此処の生徒殺すつもりか!？」

「上条、今回で気はやむを得ない。お前も右手と38式歩兵銃用意しておけ」

「でもなあおい!!てめえら人の命なんだと思つてっ……!!」

「此処ではそんな常識通用しねえんだ!!!!!!!!!!!!!!」

瞬時に怒鳴り返すとまたまた雰囲気暗くなっていく。ああもうい、や、だ!!!!!!!!!!

「とにかく……入るよ……」

突入開始だ!!!!!!!!!!

おかしい、入った瞬間にそう感じた。部屋には食堂らしきものや此処の生徒達等は何も無かった。ただ目の前には・・・

人だけ人と思えない何かがビルの大きさと全く合わない広すぎる部屋にひしめいていた。

「最悪だな・・・」

「そうだね・・・」

「やばすぎるだろ・・・」

何か原作とはすっごく違うな、うん。そしてそのただっ広い部屋の奥の方に不自然に空間が曲がっている場所がある。多分此処を抜け出せる通過ポイントだろう。

「おい、あれ何だよ・・・」

「ステイル、お前知っているか？」

「知っているわけ無いだろう、あんな気味の悪い物体」

・・・正直言って外見がねえ・・・エヴァンゲリオンのあれだ、新世紀エヴァンゲリオン 使徒XXファイギュアシリーズのA・03 サキエル XXだ。・・・要するに滅茶苦茶可愛い女の子なんだがね。分からない人は調べてみれば一発で出てくるはず。

「まさかATフィールドなんて付けていないだろうな・・・」

「君が何を言っているのか僕にはさっぱり分からないよ・・・」

「それよりもさあ、こんな所中央突破するの？」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

はつきり言ってしまったくない。だってみんな目が据わっていて生気が感じられないんだぜ！？目が据わっている女性が最も怖いというのが俺の考えだ。そんな目が据わっている女性が大量にいる所に突っ込むのは・・・愚策だと思う。

「別ルートを探そう・・・」

「そうだね」

「じゃあこんな所はさっさと出て行っちゃおうか」

そう言っただけで上条がドアを開けて引き返そうとしたのだが・・・

「あれ、開かないぞ・・・」

「「え!?!」」

そう言った矢先、そこにいた大量のA-03 サキエル XX達が一斉にこちらに視線を向けた。・・・あゝあ。

「何か警報装置を作動させちゃったみたいだね・・・」

oh j e s u s ! ! ! ! !

A - 0 3 サキエル - XX 達が何かを唱え始めた。

「熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白・・・」

「純白は浄化」の証、証は行動の結「果・・・」

「結「果は未来、未来」は「」は時間、時間は「」律・・・」

どんどんそのつばやきが感染していき、しまいには全員が唱えている。

「」は全て、全てを創るのは過去、過去は原因、原因は一つ、一つは罪、罪は人、人は罰を恐れ、恐れるは罪悪、罪悪とは己の中に、己の中に忌み嫌うべきものがあるならば、熾天の翼により己の罪を暴き内から弾け飛ばべしッ！！」「」

都合、大合唱している間に魔眼で数えた、3333人のA - 0 3 サキエル - XX 達の言葉の渦により、部屋に凄まじい反響が起きる。

ふつと1人のA - 0 3 サキエル - XX の眉間からピンポン球くらいの大きさの青白い光が生まれた。しかし狙いも曖昧で上条の横の壁に当たるとジュツと音を立てて壁を焦がし薬品の臭いがした。



1つぐらいだったら火傷程度で済むかもしれないが……

それが何百個、何千個と出現し始めた。

「どこが悪夢だよ……」

上条、言っている場合か！！！！！

「言ってる場合じゃないよね！！！！」

そんなこと言っている間にどっと球体の光が押し寄せてくる。

「なっ！！！！！！」

くびくびくびくびくびくびくびく！！！！！！

じゅ！！じゅあ！！じゅ！！！！

すかさずAK-01を撃ちまくり誘爆させる。しかし数が数だけにどんどん沸いてくる。

「どここのソ連だよ！！！！！！」

「じゃれ言っている場合か！！！！！！」

「それにしても、レプリカでもグレゴリカの聖歌隊を作るなんて

「……」

「なんだよそのぐねこりお何とかって奴！？」

「元はローマ正教の最終決戦兵器さ。3333人の修道士を聖堂に集めてその聖呪せいじゆを集める大魔術。太陽の光をレンズで集めるように、魔術の威力を増幅することが出来るんだ」

「何でそんなもんが・・・」

ああもううるさい！！！！

「とにかくあの空間がねじ曲がっている所まで突撃する。とにかく進路開けるぞ！！！！」

しかし、敵ともいえども相手は可愛い女の子、手を出すことは俺には絶対出来ない。仕方がないので非殺傷衝撃波手榴弾を5個投げる。これは人を殺すことは出来ないが障害物などをどかすことができる。

ドーン！！！！ドーン！！！！ドーン！！！！ドーン！！！！  
！！！！！！

見事に中央にいたA-03 サキエル-XXを吹っ飛ばす。

「中央に進路が開けたぞ！！！！突撃いいいいいい！！！！！！」

3 矢継ぎ早に俺たちは走り出す。しかし、それを追うようにA-03 サキエル-XXが接近してくる。

「くそがあ！！！！」

それでも傷つけることはできないのでまた衝撃手榴弾を投げる。

ピドーン!!!

半径5mが吹っ飛ぶ。それでもA・03 サキエル・XX達が死なないのはどんな物理法則無視だと言いたいが、そんなこと言っている場合じゃない。

「上条!!! 幻想殺し(イマジンブレイカー)今のうちに用意しておけ!!!」

「おう!!!」

何とか空間がねじ曲がっている場所にたどりつく。しぶとくA・03 サキエル・XXが近づくとたびに衝撃手榴弾を投げつける。

「上条!!! やれえ!!!」

上条が空間に手を添える。

バシユウ!!!

思いつきり割れた音が鳴ったかと思うと、幅60cmぐらいの正方形の穴が出現した。隠し部屋の入り口だろう。

「よし、突入するぞ!!!」

上条が中に入るうとする。

「……ちよつと待って」

「何言ってるんだステイル、さっさと行け!!!」

「こんな穴をそのまま放置しておいたらあいつらが入ってくるだろう？幸いこの穴、一定時間たつとまた空間がねじ曲がって出入りが不可能になるんだけど、その一定時間が10分もあるんだ」

「……ってことは……」

「誰かがしんがりとなつて一定時間ぎりぎりまで此処に残るしかないね……」

「なつ!!!ふざけんなてめえ!!!此処に誰が残るっつんだよ!!!」

「「「「……」」」」

黙りこくつている間にもA-03 サキエル-XX達が近づいてくる。やばい状況になっているな……仕方がない。

「俺が残る」

「「!?!?」」

「ばつ、馬鹿野郎!!!数馬、お前を残すなんて出来るか!!!だつたら俺がつ!!!」

「貴様がいなくちゃことが進行しないだろおが！！早く行け！！」

「けど……」

「大丈夫だ。必ず生き残ってみせるさ。ステイル、上条頼んだぞ。途中で罠になんか使ったらぶっ殺してやる」

「分かっているよ、まったく」

「……数馬、死ぬなよ」

上条とステイルはそのまま穴の中に潜り込んで見えなくなっていく。

「……さあて、ここから先はてめえらに一歩も通させはしねえぞ……！！」

正直一番やりにくい戦いになりそうだけだな……！！

「せいやあああああ……！！」

一本背負いでA・O3 サキエル・XXの1人を投げ飛ばす。もう手を出さないもへったくれもない。それでもどんどんわらわらと

攻撃してくるA・O3 サキエル・XX達。ああやばい。

「まっさか一定時間過ぎて此処に閉じ込められるとはな・・・」

もう最悪である。衝撃波手榴弾もすべて使い果たし、他には殺傷兵器しかない。その上相手はいつの間にか鉄パイプを全員が所持している。勘弁して欲しい。しかしグレゴリオの聖歌隊はあまりにも至近距離過ぎて当たる確率がめっっぽう下がっている。

「こっのお！！！」

それでももうほとんど体術で対処するしか方法がない。また1人を投げ飛ばす。ここまでダメージを受けていないのが不思議でならな・・・

ゴン！！！！

「ぐっ！！！！」

と思った矢先に頭部を殴られる。悪魔に近くなってもダメージが半端ではない。そこにグレゴリオの聖歌隊の攻撃が当たる。

ぐじゃあ！！ぐじゃあ！！ぐじゃあ！！じゅ！！じゅ！！じゅ！！じゅ！！  
！！！！

「ああああああああ！！！！」

あちこちに凄まじい熱さが走る。その数100個以上。顔面には1個も当たってはいないがそれでも体中がやばいことになっている。

そこに追い込みを掛けるように鉄パイプの応酬が来る。

ゴン!!ゴン!!!!ガス!!!!ゴン”!!!!ビキイ!!!!ゴン!!!

ぼつこぼこに殴られまくる。痛い、それだけだ。それが何回も重なる意識が消えていく。もうなにも見えなくなっていく。この時、ak-01を取り出して撃ちまくればこの状況を乗り切れたかもしれないが・・・それでもやっぱりそんなことはできない。

ああ・・・もう死ぬなこりゃあ・・・

そんな絶望な考えを思っていると・・・

「やめなさい!!!!!!」

凜とした声が部屋に響き渡る。声が聞こえた方向を見れば、そこには巫女さん・・・姫神秋沙がいた。

しかし、途中で振り上げられた鉄パイプを寸止めることはできない。

ゴン!!!!ゴン!!!!ゴン!!!!ゴン!!!!

「うっ!!……ぐわぁ……」

鉄パイプの連打に俺は耐えきれることが出来ず、意識が完全にブラックアウトした……

心地よく風が吹いている。目を開けてみれば林の中だった。

「……此処どこ!？」

俺また死んだのかな・でもそれだったら大天使とかいるはずだし……何か嫌なフラグだなあ……

「つてか本当に綺麗なところだなあ、田舎に来たみたいだ」

何か和む………ん?何だろ、空に白い粉がばらばらと……

「……なんか足下に灰らしきものがある……」

見れば周り一面に大量の灰が。怖いねえ……稲川淳二じゃないんだから。リアルにこんなに灰がたくさんあるなんて……

「ちなみに言っておくけど俺、けっこう怪談は苦手です」

どうでもいいか……でもまあ此処にいても埒があかないからな、



灰が流れてきた方向に向かってみるか……

で、村に着いたわけだが……誰もいない。人の気配すら感じられない。

「どうなっているんだよ？」

そして誰もいなくなった、っていう小説あるよな。アガサクリステイーの。どうでもいいな。

「とにかく人探そう。怖い」

くで、30分後

「誰もいない!!!!!!」

怖い!!和風ゴーストタウン!?

「しゃれにならないな……もしかしたら何か起きたのか？」

気づくの遅いって?うるさいわ!!

「灰……誰もいない……田舎……あつ」

もしかして此処は……いや、違って欲しい。もしも、俺の仮説がビンゴしたら、ここにある灰は……

「灰が……こつちに来る……」

風の流れてきた方向に向かってみる。

そして……見つけた。大量としか言いよの無いほどの灰と、その中心にいる、巫女の姿をした黒髪の少女を。

「まさか……姫神？」

少女はその声に気づくと、こちらを振り向いた。

「……」

「……」

何もしゃべれない。あまりにも苦しい雰囲気だ。

「……また、私、やったのね……」

「……ぐう！？」

その言葉を聞いた瞬間。頭に凄まじい衝撃が走り、目の前が真っ暗になった。

目が覚めた、視界がぼやけてる。何か柔らかいものに寝かされて  
いるみたいだ。何となく視界がはつきりしてきたら姫神の顔が真正  
面に・・・いいいい！？

「はいいいい！？」

「何でそんなに驚かれなくちゃならないのかとても不満」

いや〜唐突な登場は人を驚かせる物ですぜ。にしても心地よいな。  
・・・まるで膝枕！？

「姫神、でいいんだよな？ちょっと重大な質問があるんだが……」

「何？」

「俺は一体どこで寝ているのでせうか？」

「何故そこで口調がおかしくなったか気になるけどおいといて、  
私の膝で寝ている」

いやっほう。美女の膝枕、こんな所で叶っちゃったよ。

「神よ、私に祝福をありがとう。でも出来れば自分の家で叶って

欲しかった……」

「あなたの言っていることがよく分からない」

「願いだよ。一度も叶ったこと無いけど。ってそんなこと言っている場合じゃないな。とにかく上条と合流を……う……！」

立ち上がるうとした瞬間、左足首と右太ももに激痛が起き、頭に鈍痛が発生した。

「無理しちゃ駄目。さつきあれほどまでに殴られたから、多分、足首は折っているし、右肩も脱臼しているはず」

「つまりは……」

「完全に行動不可能、戦力外、役に立たないということ」

「オーマイゴット……！ひどすぎる……！！」

「どうしよう」

「あなたがもし誰かと合流したいのなら私が手伝うことにする」

「いやでもな、敵に会ったときどうするよ？」

「大丈夫、私、魔法使いだから……」

「スタンガン埋め込んだ警棒を新素材のステッキというのは無茶があるぞ」

先読みしてそんなこと言ったら何かしらけてしまった。こんなパターンが定例と化しているな。自重しろ俺。

「あなたは人の言うことを先読みして言うから間違いなく人気は無いと思う」

「言ってくれるじゃないかこの野郎……かに今の今まで恋愛とがそんなもの一切持っていなかったけどな!！」

「うわーんと現実のつらさに凹む俺。……とにかく合流しよう。」

「どうやって手伝ってくれるんだ?」

「それはもちろん、肩を貸す」

……美女に肩を貸されるなんて何という幸福フラグ。

「それではLet's go!!」

目指すは……そついやどつだろつ。

（行方が分からず、探し回って13分後）

「大丈夫か?重くないか?」

「そう思っただったらあなたの能力を使ってくれれば良いのだけだ」

「あれ・・・俺の能力言っただけ？」

「あなたがあのファーストフードキッチンで友人にそのことでギヤールギヤール言われていたのをすっかりと」

「そうですね、機密保持とかの観点から見れば一番俺みたいな人が向いていないというわけか・・・しかしそんなにうるさかったか・・・」

「そういえばあなたに聞きたかったことがある」

「？」

「どうしてさっきの戦闘であなたの能力、重力を変換することをしなかったの？」

「・・・そういや何でだろう。」

「あなたがあの子達に怪我をさせなくなかったと言っただけなら移動が出来ないように足にある位置だけに重力を集中させればいいはず」

「・・・」

「まさか戦闘中にすっかり忘れていた？」

「・・・それはきっと・・・」

「戦闘行動においては、自分の戦力を把握することが重要」

「さーせん・・・」

「それはもう良いとしてあそこに誰がいる」

「自分から話題振っておいてそれはないだろうが……って本当だわ」

100m先に人がいる。あの特徴あるツンツンした髪型は……上条か。近くにステイルらしき存在が見受けられないからあの野郎、上条圏に使いやがったな。処刑決定。

「……あの人、あなたと一緒にいた……」

「ああ」

「私に対して馬鹿と言った人……」

まだ根に持っていたのかよ……

「なんだかあの人、女性に追い詰められている」

「こんな所までフラグを立てて……てっあっ!!」

この時間帯、この状況。間違いなく、怪談から突き落とされて逃げている途中にすっかりグレゴリオの聖歌隊の一部である生徒にくわして攻撃を喰らいそうになっている!!! やばい上条!!!

「上条!!! 撃てえ!!!」

大声で上条に発砲をするように促す。上条、がこちらに振り向く。あいつの持っている38式歩兵銃は安定性に優れた銃だ。素人にで

も扱えるはず。念のために確認しておくが非殺傷のゴム弾使用だ。しかし、上条は撃つてくれない。

「早く撃て！！！！」

此処で撃たなければあの少女にグレゴリオの聖歌隊をまた呼ばれてしまう。姫神が命令すれば帰えらせることは出来るだろうがアウレオルスに逆探知されないと限らない。それに、あの少女が傷ついてしまうことを見逃せない。

「撃つんだ！！！！」

それでも上条は撃ってはくれない。あいつ、実弾だと勘違いして心の中にある良心がその行為を必至にとがめてみたいだ。完璧に俺の説明不足だ。ここで少女を撃たなければ最悪、インデックスがここに来てしまう前に片を付けることが出来なくなる。・・・ここは決断するしかなかった。

ターン！！！！！！

そして1発の銃声が鳴り響いた。少女がぐらりと倒れる。なんとか右手を無理に動かしてスナイプに成功。しかし、気が動転していて俺はあることを忘れていた。

「あつ！！！！」

放った銃弾が殺傷用のものであったことに。そのことに気づいた



ときにはすでに遅し、少女からはだくだくと流血している。

この世界に転生してからあってはならない俺の最初のスコアだった……

悪の本拠地にさあ出発！！（行きたくねえ・・・）（後書き）

申し訳ありませんが学校という名の地獄が始まりましたので更新が遅れると思います。ご了承ください。

作者の公約は信じない方が良い(前編)(前書き)

更新です!!

作者の公約は信じない方が良い（前編）

SIDE上条

目の前には見たくない現実が広がっていた。足下に大量に出血している少女、50m先にはこの状況を作り出してへたりと座り込み顔面蒼白の数馬がいる。

「数馬つてめえ!!!」

「.....」

状況を頭がやっと理解してきたのか怒りがどつとわいてくる。許せない、そんな感情しか起きてこない。

「とにかくこの子を治療しないとっ!!!」

「それは無理」

「はっ!?!」

数馬に肩を貸していた巫女さん、今回の救出TGT姫神がとんでもないことを言う。

「正確に心臓を貫通している。大動脈、肺動脈などがやられているはず。残念だけどあきらめて」

「けどっ!!!」

少しの希望に望みを託すようにもう一度聞くが姫神は首を縦に振ることをしてくれない。

「くそがつ!!!」

それでも俺はあきらめきることが出来なかった。こんな無関係な人を犠牲にしてしまったことが許せなかった。

（10分後）

「とにかく死体の処理は出来た。後は祈るだけ」

「.....」

負傷している数馬は未だにショックが大きいようだ。

「数馬、さすがに仕方がなかったんだよな。確かにあのとき撃たなかったら間違いなく最悪な状況になったことは確かだし.....」

「.....もう完璧に戻れないか.....」

「へ?」

「んいや、何でもない」

そう言っている割には顔色が絶望しきったようだな.....

上条SIDE OUT

ついにやってしまったよ……人を殺すという所業を……もうぐっただぐだな心境だよ。

「それはそれで今は割り切るか……後で塩まいとこ」

今ステイルが偽アウレオルスと絶賛バトル中なはずだから……ここに来るな。絶対に。

「上条、2手に別れるぞ」

「えっ？あつ、ああ……」

……いまいち引かれている反応だなおい……まあいいや

「姫神は預けたから、頼むぞ」

さあて、こちらはどこかにこっそりと避難しているか……えっ？怪我はどうしたのかって？そりゃまあ……救急スプレーを使用したよ。存在忘れていたんだよ……！！

↳3時間後、この間には原作と同じ事が起こってます

辺り一面、大爆発。そうです。グレゴリオの聖歌隊の攻撃です。

「原爆と同じだろ・・・」

何もかもが吹っ飛びやがった・・・まあこの10秒後には・・・

ゴゴゴゴツゴ・・・

また直ぐに戻っちまうんだがな。さすがに原作2巻のボス？ではある。ついで今のところ上条とステイルがここに入っているからな。すぐに合流を開始しようか、インデックスも・・・あっ

「ああああああ！！！！忘れてたああああああ！！！！」

インデックスこっちに来ているじゃん！！！！もう捕まっているだろ！！！！うわああああ！！！！

「とにかく急げええええ！！！！」

Bダッシュばりに急ぐ俺。目指すは北棟の最上階。ちなみにこの時点で任務は不達成だな

～10分後～

や、やっとついた・・・何か色々畏に引っかかったけどようやくついた。ドアが開いているということはもう始まっているということか・・・念のため確認しておくがアウレオルスはインデックスの元パートナーであり、彼は1年周期で記憶を消されるインデックスを救おうとしてまあ何たらこうたらあったわけだが・・・





「倒れ伏せ、侵入者ども！！！！」

上条とステイルが地面に叩き伏せられる。さあて原作2巻、最後の戦いの始まりだ！！！！

作者の公約は信じない方がよい（前編）（後書き）

すみません！！後編で終了させます！！！！約束破って申し訳ありません！！！！ご意見感想お待ちしております！！！！

作者の公約は信じない方が良（後編）（前書き）

更新遅くなりました!!! すいません!!!

作者の公約は信じない方が良い（後編）

SIDE数馬

さあて戦の時間だ！！まずは1発アウレオルスに狙撃。

「っ！！放たれた銃弾、その発砲者の元へ反転せよ！！！」

アウレオルス、めんどくさいから錬金術師がそう言つと弾丸が反転してこちらに戻ってくる。やっぱいいね。ふつと避けるとそのまま部屋に転がり込む。

「ほう、まだネズミがいたか・・・まあいい。どうせすぐ死んでしまうのだから・・・感電死」

電流がそこらじゅうから接近する。

バシユウウウウウ！！

アウレオルスが感電死と言おうとした直前に、地面にたたきふせられていた上条が右手をかざして流れてきた電流を防いでいた。

「数馬！！いままでどうしてたんだよ！！？」

「えつと・・・疎開？」

「馬鹿じゃないのか！？」

うわぁん、あっさりと馬鹿って言われたよ畜生。とにかく上条に耳打ち。

「それはともかく・・・あのくそつたれには上条の右手だけしか効果ないみたいだからな。上条はカルタをとる要領であいつの攻撃を先読みして防いで欲しい」

「ああ!!--」

「よっしゃ、じゃあとつげ・・・」

そう言っただけで突っ込もうとしたときだった。

「待って」

姫神秋沙が錬金術師の目の前に立ちふさがる。しまった・・・このイベント忘れてた!!

「姫神っ・・・」

やめる、そう言って止めようとした。しかし姫神の背中へ、上条や俺のことを本気で心配し、決定的に壊れる前に錬金術師を立ち直らせたという必至の願いが感じられた。それを感じとったためにコンマ1秒のためらいが起きた。それが最悪のミスを引き起こす。

「邪魔だ、女・・・死ね」

錬金術師がその一言を言った瞬間に姫神は立つ力を失ったように倒れ始める。吸血殺し（ディーブブラッド）。その少女は犠牲しか

残さず、何も出来ないまま死んでしまう。それを俺は啞然としてみている。

「つざけんじゃねえぞ、てめえ!!!!」

しかし、こいつは、上条は俺とは違った。上条は姫神を床に倒れる前に抱き上げる。姫神の左胸、すなわち心臓に右手を重ねながら。微かに姫神から呼吸の音がする。弱々しくも確かな呼吸が。

「なつ・・・我が金色の錬成を、右手で打ち消したと!?・・・ありえん、確かに姫神秋沙の死は確定したはずだ。その右手、秘術でも内包するっ・・・」

ズダアアアアン!!!!

錬金術師がしゃべり終わるか終わらないかで俺は憎しみ、そして抹殺を込めた銃弾を錬金術師に向けて撃ちはなった。

数馬SIDE OUT

上条SIDE

俺は怒りが頂点に達していた。確かに、こいつには同情もした。すべての地位を捨て去ってインデックスを救おうとした。しかし、こんな形ではかなく、その努力は砕け散ったのだから。

しかし、だからと言って、それが人の命を奪う理由には絶対にながらない。その怒りを人にぶつけて自己満足を得ようとする感情は許せない。そう思い殴りかかるうとしたその後ろから、1発の銃弾が錬金術師に放たれ、その横をかすめた。後ろを見れば数馬が鬼

神の様な形相で錬金術師を睨んでいた。

「てめえ……ふざけてんじゃねえよ……人の命軽く奪い去ろうとしているんじゃないやねえ！！！！！！そんな感情、俺がたたきめしてくれる！！！！！！」

数馬からは軽々しく命を消そうとした者に対する、断固としての抵抗心が出ている。……そうだよな……

「ああそうだ！！アウレオルスIIザード。お前が何でも自分の思い通りに出来るって言うのなら……」

「まずは……そのふざけた幻想をぶち殺す……！！！！！！」

色あせた空間に立っているのは3人だけ。俺は姫神に視線を向けない。向けられない、その余裕さえも消えている。この少女が死を代償にしても止めたかった奴、目の前にいる錬金術師を一刻も早く止めるために。直線距離10m強。数馬も身構えている。

「……………」

無言のまま、俺と数馬は1歩踏み出す。そして……………

爆発的に駆けだした。つぶし合いの始まりである。10m強の距離はつまくいけば4歩でまたげる。

「窒息死!!!」

しかし錬金術師が一言放つとがくと勢いを失う。ゲイゲイ、と鉄の襟巻きで首を締め付けられるように、俺は呼吸が出来なくなる。思わず身体をくの字に曲げて右手を首に当てる。しかし呼吸は元に戻らない。

考える、考える、あいつは何て言った？窒息死？・・・つまり息が詰まって死ねたっていつているんじゃないか!!そう分かると俺は無理矢理喉に右手を突っ込み、喉を触った。するとふっと呼吸が出来るようになる。

まだ数秒もたっていない、しかし長すぎる数秒である。それでも俺は安堵する・・・数馬はどうした。

「数馬!!!」

あいつも同じ風になっているはずである。早く右手をっ・・・

しかしあいつは微動だにせず、冷静に銃弾を錬金術師に撃ちまくっている。

「おいつ大丈夫なのっ・・・」

「いいから早く進め!!!!!!」

大声で叫ぶところを見ると平気ではあるみたいだ。俺はすぐに走



り出す。

「絞殺および圧殺」

錬金術師からまた一言放たれる。周りから無数のロープが出てきて体中にまわりつき、上からは錆びた廃車が落ちてくる。

しかしロープに右手が触れば水のように消えて無くなり、落ちてきた廃車に触れば砂のように消えてしまう。……消せる！！

要は殴り合いと同じである。コンマ1秒でも隙を突ければ俺の勝ちになる。しかし俺の表情に余裕が見られることに気づいた錬金術師は眉をひそめ、

「なるほど真説その右手、私の黄金錬成も打ち消すことができるのか……」

「だがその右手に触れない物であれば打ち消すことは出来ぬ！！」

最悪にも今度こそOUTなような一言だった。

「銃をこの手に、弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで12分」

錬金術師が右手を振ると、そこには西洋剣……いや剣のつばにフリントロック銃が埋め込まれている……暗器銃だった。

「人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始せよ」

その瞬間に火花を散らす轟音が鳴り響き、次いで後ろの壁に魔弾がめり込む。

「先の手順を量産せよ。10の暗器銃にて連続射撃の用意」

錬金術師の両手には10もの暗器銃が握られていた。これは絶対に防ぐことは出来ないっ!!そう思い回避しようとしたが、俺の背後には倒れたステイルがいる!!!

「馬鹿が!!何を立ち止まってっ!!!!」

ステイルが叫ぶがもう遅い。

「準備は万端、10の暗器銃。同時射出を開始せよ!!」

錬金術師の声と共にまたもや轟音が鳴り響く。避けきれない、俺は激痛がくることを覚悟した。

キン!!キン、キキン!!キイン!!

しかし、予想された痛みは来ず、代わりに金属がぶつかり合った甲高い音があった。

「あつぶねえ・・・たつく、気をつける。全部防げたのは俺でも奇跡に近いぞ・・・」

「数馬!!」

数馬は今まで銃撃をしていなかった。まさか予測でもしていたのか?

「そんなもんしていない」

「心を読むな!!!」

「・・・失笑。よくこんな状況下でそんなことが言えるものだ・  
」

数馬との会話で錬金術師のほうに集中していなかった。しまった、  
数馬が!!

「内から砕けよ、少年」

やばい!!!!!!

ボン!!!!と音を立てた。数馬が一瞬にして大量の肉片となる。

「・・・っ!!!」

胃からすべて戻しそうになる。しかし、見たくは無いが見てみる  
と数馬の血管が動いている。あの状態でも生きている・・・

俺は錬金術師をにらみつけた。しかしそんなこと、どうでも良い  
とばかりに高笑いをする。確かに、絶望的な状況だった。ゲームで  
言えばの残りHPの状況でラスボスに立ち向かっているものである。  
る。

「確實。これで私の勝利は確定した、後は貴様を・・・」

「だあれが勝利確定だあ？」

錬金術師の言葉をさえぎるように後ろから声が聞こえた。しかもしゃべれないはずのやつの方が……

「か……ずま？」

後ろを見れば両足でたっている数馬がいる。しかしその体に両腕は存在していない。

「な、なんだと……」

錬金術師を見てみるとさっきの余裕はどこへやら、一瞬にしておびえて表情になっている。

「けっ、笑わせてくれる。確かに、すごいよな、その黄金練成。だけどな……俺にはそんなもの、意味がねえんだよ！！！！」

数馬の顔は笑っているようにも見えれば本当に何かのスイッチが入ってしまったかのように狂ってもいた。

「意味がねえんだよ、この体にはな！！！！」

数馬がそう叫ぶと何か触手のようなものが自らの腕があった場所に生えてくる。そしてそれはたちまちにして数馬の両腕を形成した。

「ひっ……！！！！」

その様子を見た錬金術師は急に震えだした手で首に針を刺そうと

している。・・・なんでこんな状況にまで・・・っ！！！！まさか！！！！

「上条、もう察しがついているだろう！！！！こいつはな、自分が思ったとおりに現実を歪めてしまう。しかし、それはこいつが無理だと思ったこともそのようになってしまう。つまりな！！こいつの攻撃は諸刃の刃でもあるんだよ！！！！！！！！」

数馬の言葉を聞いたつかの間、錬金術師が叫ぶ。

「くっ、暗器銃をこの手に、数は1つで12分、用途は破砕、単発銃本来の目的に従い、獲物の頭骨を砕くために射出せよ！！！！」

錬金術師から銃弾が放たれる。その狙いは正確なはずだ。しかし、その銃弾は数馬に当たらず、すべて横にそれる。それを見て完璧に分かった。先ほど数馬がなぜか再生したために、錬金術師には一瞬だけ不安が過ぎった。こいつには何も効かないのではないと言う不安が。そのために現実が完全にゆがんだ。

「っ、先の手順を複製せよ！！用途は乱射。10の暗器銃を一斉斉射せよ！！！！」

錬金術師はまた叫ぶ。しかし、それはまた外れる。

「くっあ。おのれえ・・・！！我が黄金練成に逃げはなし。断頭の刃を無数に設置。速やかにその体を切断せよ！！！！！！！！」

一瞬にして現れた刃も、数馬に振り下ろされる前に消えてしまう。

「ちよ、直接死ね、しょうね・・・っ！！！！！！」

錬金術師がまた意味のない一言を言う前に、俺は錬金術師の前にいた。

「はっ、ああああ！！！」

錬金術師は自分を落ち着かせようとポケットから針を出そうとする。しかし震えている手はその機能を果たせず、針を地面に落とすてしまう。

「あっ！！ひっ、ひいいい！！！」

・・・哀れだった。今までの努力が散々な結果に終わり、自暴自棄なった者の末路のように見える。

「・・・これでちったあ反省しろ！！！！！！！」

そいつに、錬金術師に、俺は精一杯力を込めてぶん殴った。

「・・・・・・・・っ！！！！！」

錬金術師は何も言えずに、小さな呻き声を残して吹っ飛ぶ。

「お疲れだったな、上条」

いつのまにか近づいてきた数馬がねぎらいの言葉を掛けてくる。つぶし合い、に勝利した瞬間であった。



作者の公約は信じない方が良い（後編）（後書き）

ご意見、ご感想、お待ちしております!!!



## 雪原突撃（前書き）

更新遅くなりまして申し訳ありません！……！学校が大変でなかなか苦勞しています……！！

後書きに反省会を書いています。

## 雪原突撃

SIDE数馬

何回目だろうね、此処の病院。

「しんどくなる、今度は全体の骨に罅だらけ」

もうこんな時に任務が来るなんてことは……

落ちろ！！落ちてしまええええええ！！！！！！ by北条沙都子

「あああああああ！！！！もうひぐらしのなく頃にの着信やめろ  
おおおおおお！！！！」

怖いからやめろ！！絶対やめろ！！

「でっ、誰！？」

「やつほっー、元気？ついでにご愁傷様」

「大天使か……」

出番の少ないことが最近気になってはいたが……作者もこんな時に出すとは……

「ご愁傷様って？」

「いやね、君が頼まれていた任務に見事に失敗してくれたからさ、ちよいと罰金を払って貰ったよ」

「え……」

インデックスの世話は確かにやれなかったが……罰金までとるつもりかよ……

「いくら？」

「君の持っている金額の3分の1かな」

「高っ!？」

ふざけているだろ!？」

「仕方がないよ、任務をこなさないとこの世界に多大なる影響が出るからね。これでも少ないんだよ？」

「……そうか……」

「というわけで君の全財産、1億5436万円から5423万円を没収するね」

ああ……そんなたまったのかよ……しくしく……

「まあ落ち込まない、落ち込まない。その話はもう終わりにして君には怪我が治り次第ドイツに行って貰います!……!」

「話が急すぎるだろ!!!!!!!!!!!!!!」

何でそうなるんだ!?

「いや、君に命令で諜報組織「赤光の黒十字」入って貰ったでしょ?今回はそっちの組織から受け付けた任務なんだよ。それに本部がドイツにあるからね、挨拶に行つて貰わないと」

「マジで?」

そついやそんなことあつたけどさ……あんまり乗り気じゃないな……

「これはすごいよ、報酬1億5489万円だもん!!」

「やります!!!!!!!!!!!!!!」

それは見逃せん!!没収された金の3倍程度は取り戻せるじゃねえか!!!!!!!!!!

「その代わり戦死率97%だけどね」

……やりたくねえ……97%つてどこのソ連軍ですか……  
100人のうち97人が死ぬンじゃん……

「言つておくけど君に拒否権はないよ」

「……ああ分かつている……」

今まで断ろうとしたけどどれもこれも突っぱねられたんだ。

「あつ！！でももう原作3巻間際だぞ！？御坂妹と一方通行はど  
うするんだ！！」

「そこはあきれめてくれないかな・・・」

うああああああん！！！！

「御坂妹10031号助けたかったのにいいいい！！！！フラグ立  
てたかったのにいいいい！！！！」

「ごめんね・・・」

急にしょんぼりとした声を出す大天使。 ああすいません！！！！

「そんなにしよげないで！！！！あきらめますから！！！！！！」

もったいねえけどなあ・・・・・・本当に・・・

「でも一方通行とは打ち止め（ラストオーダー）の時にでも会わ  
せるから期待して！！！！」

「ああ・・・頼むよ・・・」

「それじゃあ2日後、君を退院させるからよろしく。説明に関し  
ては道中で説明書よこすからそれを読んでおいてね。じゃあ頼んだ  
よー！！」

「・・・OK・・・」

死地に行くことになるとはなあ……………

（10分後）

上条と御坂美琴がお見舞いに来てくれた……………!!!!!!??  
???????

「なつ、なつ……………」

何でてめえら一緒にいるんだよおおおおお!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!

「いやな、御坂とは途中道で出くわしてな」

「あんたが入院しているって言うから此処まで来てやったの。感  
謝しなさいよ？」

そして何で原作よりも早くビリビリから御坂って言う呼称に変化  
しているんだこの野郎!!!!!!!!!!!!

「上条、お前銃殺と斬殺どっちが良い？」

「何物騒なこと言ってるんだ!？」

「何よ?こいつと来たって別に良いじゃない?」

……………言ったな御坂美琴さん!!!!!!言っちゃったな!!!!!!

「もう良いよ！！！！どうせ貴様ら原作の終了間際でかなりの確率で両思いになりそうだからな！！！！いまからでもキスでも何でもしまええええええ！！！！！！！！」

「なっ……！？」

その絶妙なハモリが腹が立つ！！！！！！

「うわーん！！！！！！」

もう泣き寝入りしたい………まあ良いや。

「……ところで上条。俺、とつぶんいなくなるからよろしく」

「急に何言っているんだよ！？……お前、怪我人だろうか」

「まあ色々あるが気にしないでくれ……そんなわけだからいくらでも御坂を呼んでくれていくらでも嬌声上げさせればいいさ……」

この作品初？の問題発言を言っちゃったよ……

「なっ！！！？……／／／何言ってるよ！！！！！！！！」

ここで御坂からゲーで殴られる。ひどいね。

「何だっって？」

上条、微妙に聞き取れなかったのか見事なKY発言。

「………もういいや」

「？・・・そ、そうか・・・じゃあ帰るぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

御坂様め・・・・・・・・頬を赤らめるんじゃない！！！！

（10分後）

今度は姫神と何故かステイルまで来た。

「まったく、君は負傷が多いね・・・」

「何にも活躍できなかったクスに言われたくない」

「・・・・・・・・言ってくれるじゃないか・・・」

「こいつとは会った瞬間から喧嘩状態になるな。」

「そんなことで喧嘩はしていて欲しくない・・・」

姫神、ナイス仲裁。

「・・・・・・・・ところで一体アウレオルスはどうしたんだ？」

分かっているが一応聞いておく。

「まあ君だつたら分かっていると思うけどね。記憶を消去して顔を変えて放したよ。死んだも同然な状態だね」



「お前もちったあ粹な計らいするじゃねえか。そのことは上条に言ったのか？」

「あいつは直ぐに聞いてきたからね、今の通りのことを話したよ  
そうか、と俺はつぶやくと姫神に話を向けた。

「ところでお前、住むところどうするんだ？今、放浪状態だろ？」

「それに関しては今悩んでいるところ」

「だったら……」

「俺の部屋当分誰もいなくなるからな、お前当分そこにいて良いぞ？」

「……唐突に女の子を自分の部屋に住むように誘うなんて……  
あなたは変態？」

……orz

「でもその申し出はありがたいからお言葉に甘えることにする」

「そうか……じゃあ部屋の鍵渡しとくからな、無くすなよ？」

「分かった」

懐にしまっていた鍵を姫神に差し出す。

「じゃあ僕はおいとまさせて貰うとしよう・・・」

すつと立ち上がるステイル。そういえばと思い出し俺は一言言っておいた。

「・・・ステイル、インデックスにお礼言われて・・・嬉しかったか？」

「・・・」

ステイルは何も言わずに出て行ってしまった。しかし、その顔にはうつすらとだが嬉しそうな表情が見てとれた。

「私も帰らせて貰う」

姫神もすくつと立ち上がる。

「おお、そうか、気をつけて帰れよ？」

「・・・ええ・・・それと・・・」

「？」

「ありがとう」

そう言うと姫神は出て行ってしまった。・・・まともに美女に礼言われたのは初めてだな・・・ちなみにこの後俺は少し感激の涙を流していた。

（2日後）

皆さん、俺は今学園都市の空港に来ているわけだが……

「俺は自分で操縦しなけりゃいけないのか……」

何故か俺だけ係員に連れて行かれ倉庫の前に来させられた。何故か俺だけ飛行服になった。で、目の前には何か絶対おかしい戦闘機がある。

「ACE COMBATの戦闘機X-02が何であるんだよ……」

しゃれにならないぞおい！！しかし乗るしかないらしい。操作方法分からないぞ……でも結局そのまま係員に押し込まれ操縦席に入った。

「……おふざけも大概にしるよ……」

何回も使っている何故かだがこれは凄まじい何故かである。

「PSP式のコントローलって……」

そりゃまあPSPは玄人持ちになるまでやってたけどさあ！！！！  
・愚痴っても仕方がないので操縦席を見てみると何か紙の束がある。説明書ってこれか……

「えつとなになに・・・」

この戦闘機X・02は例えて言うなら戦闘妖精雪風のような人工知能を所持していますので基本的な操作をそのPSPでやってくれば結構です。ちなみに最高速度マツハ10は伊達じゃないからね！！！！

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・マツハで1225km。それが10で12250km。・・・・・・・・逃げてえ！！！！

しかしそんなこと言ってられない。目の前ではもう滑走路の準備がされている。此処でやめるなんて言ったらどんな目で見られるか分かったもんじゃない。

「じゃあない、やるか・・・・・・・・」

そう思い、俺はRボタンを押した。

意外にも爽快感があったためびっくりな5分後

今はマツハ5で飛行している。Gのことを懸念して能力を使おうとも考えたがどうやら重力安定装置が使用されているらしく全く来ない。

「じゃあ説明書読むか・・・」

ぺらっと1つの束のページをめくる。題名は

30分で記憶出来る真実の歴史の教科書

などと書いてあった。

「何だよこれ……」

で、呼んでみたわけだがあまりにも凄まじい内容だったためかいつまんで説明する。

1603年3月25日（慶長8年2月13日）

涼宮ハルヒ閣下ことソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の20の軍団を率いる序列55番の偉大なる君主である悪魔、オロバスと参謀長キヨンことデーモンの40個軍団を配下に置く序列7番の大いなる侯爵であるアモンが江戸前（現在の東京湾）から日本に隠密で侵入。その3時間後に江戸幕府の重要関係者を暗殺して乗っ取ることに成功する。

この乗っ取りにより、実質上涼宮ハルヒ閣下が国家権力者となる。

その後、鎖国などの不採用など日本に弊害をもたらすようなものの否決を実行した後、幕府を崩壊させる。1613年4月11日のことである。

そして幕府崩壊後に近代的政府を建造。その時、SOS団なる日本初の会社を設立。今後共々この会社が国の実権を握ることとなる。

嘉永6年6月3日（1853年7月8日）

この日、大日本SOS帝国として独立を表明。

1865年3月2日

ロシアの南下政策により、いざこざが発生、発展していき、仕舞いには日露戦争の発生となる。この時、悪魔60個軍団がアラスカ、ロシア本土侵攻開始。

1866年5月4日

日本SOSとロシア講和。アラスカが日本SOSに割譲される。

この後、サラエボ事件の未遂により第一次世界大戦が勃発せず、欧州の財政破綻が発生せず、史実よりも早くロシア革命が起こる。しかし、1929年、ニューヨークで株が暴落したことにより発生した世界大恐慌によって全世界は大打撃を受ける。

1935年 中華民国、中華人民共和国共々、財政の危機により苦渋の決断として満州を日本SOSに売り払う。

1936年 日独伊英仏中5国同盟結成

1939年 アメリカ、ニューデール政策に失敗

1940年 ソ連、フィンランドに侵攻開始、冬戦争勃発

ソ連、満州に侵攻開始。日ソ戦争、別名第2次日露戦争

勃発

1941年 ソ連、ドイツに侵攻開始。これにより第1次世界大戦勃発。

アメリカ、突如として日本、イギリス、ドイツに宣戦布告。

1945年 ワシントン陥落、モスクワ陥落、これによりアメリカ、ソ連降伏

で、今に至る。ちなみに涼宮ハルヒ閣下と参謀長キヨンは1945年から3年後に天界に招集。懲役5643年の刑を受けている。

「とんでもないな・・・」

じゃあ俺の世界と滅茶苦茶違うじゃねえか・・・まあ今のところ平和のようだけどな・・・歴史がこんなに違うなんて・・・

「確かにそうじゃなければ学園都市なんて造れないな・・・」

妙に納得してしまう俺である。

そんでもってハンブルク国際空港に着いたわけだが・・・その直後に変な奴らに連れ去られるのは勘弁してほしいね。

「で、ついたところが超高層ビルとは……」  
とんでもないことになったねこりゃあ……

数馬SIDEOUT

SIDE???

「こんな所に来るなんて嫌になりますね、火織さん」

「仕方ありません、イギリス清教が予測するにはこの国で大規模な魔術師によるテロがあるらしいですから……」

それにしてもフィンランドとは……あまり来なかった。僕と、聖人である神裂火織は今、雪原を進んでいる。

「それでも、やはりこのような任務にこそあの人がいると面白いのですけど……」

「またそいつの話ですか……」

最近、火織はよくとある男性の話をするようになったのですが……聞かされるこっちはたまったものではない。は火織さん、あなたのこと……げふん、げふん。



「彼は・・・いるだけで聖人の私でも拭い取れない不安を消してくれます。そう考えるとやはり・・・」

「もうその話はやめにしましょう、仕事に集中ですよ」

「そ、そうですね・・・」

・・・何故か釈然としませんね・・・そう思いながらも僕達はフィンランドの雪原を進んでいく・・・

そいつに会ったら半殺しにしてやる覚悟を持って。

??? SIDE OUT

SIDE 数馬

俺は今、超高層ビルの最上階にいる。目の前には簡素だが見えな  
いところに贅沢が施されている部屋、そして立派なデスクがあり、  
60代の老人がいた。

「・・・おや、君が数馬君かね・・・遠いところをよく来てくださ  
った・・・私はフォツケ・ローゼンクロイツだよ・・・」

ずっと手をさしのべられたので握手をする。手は意外にも大きく、  
握力はまだ衰えていないようにも見える。

「こちらこそ・・・」

握手を交わし終わった後、話は本題に入った。

「今回の招集された任務とは何ですか？」

「今回の任務、それはな……」

「いますぐフィンランドに行きロシアの魔術師4500名が行う大規模テロを阻止して欲しい!!!」

状況確認、あなたは今なんて言いました？

「フォツケさん……無茶は言うのはやめましょう。前話で書くこと忘れていたけどあなたこの諜報組織「赤光の黒十字」の創設者でしょ！？メンバーの命の安全を第一に考えてください!!!」

「いやいや、無茶で済まされる話ではない。だってこのテロを阻止しなければ最悪なことになるんだよ？フィンランド壊滅だよ？何万人死者が出るか分からないんだよ？その上これロシア成教から信頼が無くなるから頼むって言われたご要望だから今更断れないんだよ」

だからといってそれは……死亡フラグだよ

「しかも運が悪いことにキューバでも不穏な動きが見られていてな、第1騎士団から第12騎士団までの主力部隊、計12万人は全部そこにとられているのだよ……」

「マジですか……」

「キューバよ……一体何やらかしているんだよ。それにしても何で騎士団単位で部隊構成がされているの？」

「ただ不幸中の幸いと言っべきか、非常事態に備えて残しておいた第13騎士団がいてな、それが君の救援となる」

「そ、そうですか……」

それなら良かった……1万人も救援が駆けつけてくれるのなら安心でき……

「計13人だけだけだな……」

………終わった……orz

「何でそんなに少人数なんですか!？」

「まああれだね、全員チート野郎だからかな？」

「へ!？」

全員チート野郎って………どの三国志？

「まあこつちに来なさい。彼らを紹介してあげよう。大丈夫、彼らも日本語くらいぺらぺらじゃよ」

そういうとフォッケさんもとい正式名称と言っていたフォッケ將軍は何か豪華な物が入っている飾り棚に隠されていた扉に入っていた。そう言えばこの人何で日本語ぺらぺらなの？

でっ、中の狭い道を進んでいくと広い部屋にでた。そこには先人が13人がいた。この人達が……

「こいつらが我が「赤光の黒十字」もとい黄金の薔薇十字団が誇る精鋭、第13騎士団の面々だ……1人1人紹介していこう……」

黄金の……？まあいいや。とりあえず最初の方は……！？

「アグリマス・オークスさん！？」

「何故私の名前が分かった！？」

しよっぱなから……まさかFFT、ファイナルファンタジータクティクスのルザリア聖近衛騎士団のあの美人女騎士がいるとは……もうすごいね。生で見れるなんて思ってもいなかった……分からない方はグーグルでググるかヤフーで調べてください。

「お会いできて光栄です！！！！！！」

「そ、そうか……」

「彼女は魔術師だが近距離戦も得意なんじゃ、重宝するぞ……」

「やはりすごいですな！！！！」

「……」

最初から何か引かれているが気にしない。次は……！？「カミ

ソリの刃」と形容される鋭い目つき、猛禽類の翼のような眉毛が印象的。髪の色は黒、瞳の色はとび色・・・ま、まさか・・・

「ゴルゴ13っ・・・デューク東郷!？」

何でこいつが出てくるんだ!？ふざけている、世の中不条理だ!

!!--!

「・・・・・・・・ああ・・・」

「彼は狙撃手だ。あまりしゃべることが好きではないので・・・まあ良い奴だよ」

「じゃ、じゃあ聞きますが・・・俺の第一印象は？」

「・・・・・・・・表面ではへらへらしているが・・・裏面ではかなり冷酷な奴だな・・・」

・・・・・・・・そんなのかな・・・・・・・・orz

「まっ、他はもうめんどくさいからとばすとして・・・」

「「「それはないだろ!?!?」「「「」

「じゃあ作戦内容の説明じゃ、相手はロシア成教に属していない共産主義者、通称アカ共の魔術師4500名がフィンランドのヘルシンキにおいて大規模なテロ行為をやるという情報がある。諸君達はこの阻止するのが任務である。奴らアカ共は未だにネチネチと冬戦争で大敗北したことを恨んでいるみたいだからなあ・・・」

「敵の侵攻順路は？」

すぐに質問するアグリアスさん。金髪が綺麗だなあ……は  
っ！！いけない、いけない。

「カレリア方面から侵入するつもりらしい……陽動の可能性  
があるかもしれないが此処以外ではヘルシンキに接近するのは困難  
じゃ」

「じゃあそこで迎え撃つのか？」

俺も質問する。何せ命がかかっているんだ、詳しく聞いておかな  
いとまずい。

「まあゲリラ戦じゃな。1人につき400人程度を死傷させたら  
我々の勝ちじゃよ……」

「圧倒的不利じゃねえか……」

「じゃあそんなわけだから君達13人は転移魔術で先に迎撃にで  
ていてくれ、数馬君は乗ってきた戦闘機で空路から突入してくれ、  
フィンランドには許可とっておくから」

「何ですか!？」

俺も転移魔術で行かせてくださいよ!!!

「しかしな、奴らどうやら軍事のコネから12機程度戦闘機を用  
意しているみたいだし……最初にそれらを撃墜してくれ、後が  
楽になるから」

「…………俺戦闘機で戦ったこと無いですよ……」

「あの戦闘機だったら大丈夫じゃろ……」

そういう問題では…………無いのにな…………

「とにかく全員出撃じゃ…………!!」

「……オオー!!」「……」

「はあ……………災難だ……」

フィンランド、カレリア方面上空

「本当にやるのかよ…………!!」

俺は今命がけで12機の戦闘機に追われている。ちなみに相手はSu-47、試作機だけで実戦配備はされていないのに何故かいます

「何て思っている暇はなく…………!!」

相手は第5世代戦闘機。つまりは最新鋭戦闘機。ちなみにこいつはACE COMBATシリーズでSu-37として登場。複数いるとやっぱりこの上ない敵である。





ミサイル弾数を見ると一体どうやって積んであるのか短距離75発、中距離10発もある。

「短距離だと射程35000mになっているな・・確実に撃墜を狙うには14000mといった所か・・・」

俺はRボタンを押して加速する。一斉に発射できるミサイルは6発、さい先良く撃墜したい。

「250・・・200・・・145・・・発射!!!!」

ボタン連続押しでミサイル6発を一斉発射する。次のミサイル発射は30秒後。

急なミサイル発射にSu-47達は回避運動をとることができず・

バババツババババババアアアン!!!!!!!!!!

すぐさま5機が火を噴き墜ちていった。残り7機。

「さっさと片付ける」

この高速を出せるXO-02だが、ゲーム上では改造次第でもはやチートの域に入るほどの旋回能力が生まれる。この機はそんな魔改造されているらしく・・・

「マツハ5出していて旋回半径400mは物理的法則無視すぎ

だろ……」

まあいい、うまく反転できたことだし、150m付近で俺がエス  
コンで一番得意だった戦法を使う。

「まあ機関砲だけどね」

問答無用で後ろからさっさと発射

ガLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLL  
LLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLLL

相手もまさかすぐに後ろにつかれるとは思ってもしなかったらし  
く、簡単に1機に無数の弾痕を付ける。

ボン!!!!

「はい1機撃墜!!!!」

残り6機、機関砲はもう弾切れ。

「後はまた同じく……」

Rボタンを押して加速、またもやSu-47達を抜かして、反転。

（残り1機）

「でっ、ドッグファイトかよ・・・」

エスコンで一番嫌なのがドッグファイト、格闘戦、それも相手がフェンリアだったとき。

「本当にやるとなると厳しいことなんだね・・・」

きつきから右旋回、左旋回やっているわけだが・・・いつごろに決着がつかない！！！！

「敵パイロット・・・間違いなく熟練だよな・・・たまにいるゲムに出るバグのような奴・・・」

こういうとき、どうする？・・・じゃあチート方法で。

「墜ちませんように・・・」

祈りながらコントロールスティックを左に倒している限界あたりから、ほんの一瞬、右に倒す。つまり逆の舵を使う。そうするとXO-02はくるっと物凄く小さく回る。それをうまく利用して一気に後ろにつく！！！！

「よっしやあー！！！！」

間髪入れずにミサイル発射、

バゴス！！！！

命中だ。

「全機撃墜！！！！！」

1度やってみたかった戦法、左捻りこみ。エスコン関係で調べていたら関係無いけど出てきた戦法だ。旧日本軍の撃墜王、坂井三郎が最終手段として残しておいたらしい。

「もうチート過ぎるから使うことはないけどな・・・着陸しよう」

「どうやって着陸するかだつて？ハリヤーと同じ感じでやったよ・・・これどんだけ万能機なんだ・・・」

「仲間は先に進軍しているみたいだな・・・急ごう」

XO-02はそこに放置して装備を確認後、雪で覆われた森を進みだす。まだ昼だったが夜になったら此処にいたくはない。

「・・・ロシアとの国境線の中央近くまで接近するのか・・・」

地図を見て方向を見た後歩く。とにかく歩く。ひたすら歩く。

「小説で此処まで見所無い物なんて無いだろうな・・・」

ついでに作者にクレームを1つ入れる。

い  
「フィンランドのこの地方を歩くと自然の優雅さ以外は何にもな

．．．．雪原に出た．．．．

「拓けているなあ．．．．」

「こつも拓けていると狙撃手にとっては恰好のカモだな。避けて通  
ろう．．．．？」

「．．．．誰がいる．．．．」

しかも2人が100m先に。第13騎士団は1人、1人単独で行  
動しろと命令されているはずだ。しかもなんか恰好が怪しい．．口  
シア魔術師か!?

俺は急いで銃を構えると叫んだ。

「K u k a o l e t , l o p e t a ! ! ! 《だれだとまれ》」

フィンランド語でまず質問する。もしかしたら猟師かもしれない。  
．．しかし彼らはこちらに気づきはしたが応答しない。

「  
!!! 《だれだとまれ

》

次にロシア語で質問する。これも応答無し。

「．．．．誰だこの野郎!!!!!!」

そして何故か日本語で怒鳴る。こりや意味が通じるはずがな……

「その声はもしかして……数馬光太郎？」

へっ！？……急に女性の声が……どンドン2人が近づいてくる。

「……やはりあなたでしたか……」

「はい！？神裂さん！？」

何であんたがいるの！！！

「……何故此処にあなたがいるのですか？……」

「いやあ……まあちよつとテロリスト狩りで……」

「ということとはあなたも！？」

急に喜ばないで神裂さん！！！ていうかあなたも、って何？

「これはやりましたね、あなたがいれば鬼に金棒です」

……何かまともに褒められているよ。

「ということとは神裂さん、あなたも……？」

「はい、こちらも必要悪の教会から共産主義者の魔術師達が大規

ネセサリウス

模テロを行うという情報を聞きましたので」

そうなる今回もしかして神裂さんも味方に!!!? やったこれで勝つる!!!

「それはあまりにも嬉しいこととして・・・そいつ誰?」

俺は隣の奴が気になったので聞いてみる。年齢は18歳程度、顔立ちからしてゲルマン系だが珍しいことに黒髪である。

「あつ、この人はレン・アクリウス、イギリス清教「必要悪の教<sup>リウス</sup>会」のメンバーです。今回は私のサポートをしてくれます。レン、この人が話していた方です」

「・・・よろしくお願いします・・・」

初っぱなから何で無愛想なんだよこの野郎。しかし此処は日本人として我慢のしどころ、堂々と真面目な顔をしながら話そう。

「ああ、こちらこそ」

そう言いながら握手をしようとする。が・・・

「いや、触りたくありませんので」

小声でとんでもないこと言ってきたこいつ。・・・殺す。

「どづしました? レン?」

「いや、何でもないですよ」

「……?…そうですね」

よし、少しこいつとは直談判しよう。

「あのさ、神裂さん、こいつと親交深めるためにその草むらで少し話させてくれないか？」

「別に構いませんが・・・」

「よし、こっちに来い、てめえ・・・」

「言われなくても行ってやりますよ、この野郎・・・」

さあって殴り合いだな。

（10分後）

「どうして火織さんはお前なんかの話ばかりかしてくるんですかあ  
!?!?!」

「知るかそんなこと!?!?!」

で、初対面なのに殴り合いに発展、ただいま絶賛ボコ殴り中



ゴン！！

ゴン！！！！

ガゴン！！！！！！

「しかも何ですか！！あなた火織さんの胸の中に入ったそうじゃないですか！！！！どこのエロゲキャラなんですかああああ！！！！」

「知るかそんなこと！！！！しかもそれは事故だったんだし！！！！」

ゴン！！

ゴゴン！！！！

バゴン！！！！！！

「畜生おおおおお！！！！！！」

ガガガガゴン！！！！！！と一気に3発殴られる。

「僕の方が絶対にあの人を、火織さんを、愛しているのにいいい！！！！！！！！」

しかも何か好きだって言っちゃっているよこの人！！

「俺さ・・・初対面の奴からフルボッコにされたこと無いんだぜ・・・」

「僕も・・・無茶苦茶になりました・・・」

作者も考えて書けばいいのに。だから最近になってポイントが伸び悩んでいるんだよ。

「と、それは置いておいていったん戻ろう。どう考えたって神裂さん心配している・・・」

「そうですね・・・何をやってたんでしょう、僕ら・・・」

「作者、滅びてしまえばいいのにな・・・全面的に・・・」

作者の文章力と集中力のなさは凄まじいの域を超えている。音楽ガンガン鳴らさないともうすぐに行動不可能になるし、しかもそれがひぐらし関係だし・・・

「もういい加減この小説やめたらっ・・・」

「これ以上言つと本当にお前を殺す！！！！！！by作者という事情でカット」

「遅かったですね、何をしていたんですか？」

「ノーコメント」

「……………そうですか」

とりあえず歩こう。歩けばいいことがある。絶対に！！！というわけで歩き始めたわけだが……………

「冬戦争でソ連軍が泣いたわけがよく分かる……………」

足場の悪い雪原や森を何kmも進まなければならない自体に今直面している。

「あとのくらいでつきますか、数馬？」

神裂さんが聞いてくるので地図を見てみた。

「この調子だと……………後22kmは歩かないとな。野宿は確實」

……………自分で言うておいて何だが絶望的な気分になる。このままじゃ間違はなく日が暮れちまう……………

「あなたはそこまで体力が無いので？ たった22km、夜通し歩けばいいじゃないですか」

レンがまた気に入くないキャラに逆戻りしやがった。うざい。

「こんな所じゃ夜に歩いたら間違いなく大変なことになるらしいんだよ。本部から聞いたが変な呪縛霊があたりにつじゃうじゃ出てきちまうみたいだ、そんな行動避けた方が良い」

「それぐらいだったら火織さんが何とかしてくれるでしょう、彼

女は聖人ですよ？」

「……………そりゃまあそうだけど……………」

「いえ、レン。ここは彼の意見を取り入れましょう、さすがに呪縛霊と戦うのは気が進みません」

「火織さんがそう言うなら」

急に言っていることを変えるとは……………この野郎本当に俺のと嫌っていやがる……………」

「……………とりあえずそうと決まれば後13kmぐらい歩いたところで野宿をすることにしましょう……………」

ドツドツドツドオオオオオオン!!!!!!!!!!

「と、言ったところで爆発音か……………」

「何となく不幸にも感じますね……………」

「君が運んできたとは思えませんね」

貴様後で裏に來い。と言っている場合ではなく。

「どうやら炎系統の魔術を使用しているみたいですね。他にも魔弾装備の銃を持っているのが1人……………双方戦闘しているようです」

・・・あゝ・・・あの人か

ズキューッン！！！！・・・

1発の銃声。そして辺りは静まりかえる・・・

「もう、あの人、作者としても登場させたくないらしいからな・・・」

「戦線は・・・ここまで移っているのですか・・・」

決戦近し・・・か。

で、なんやかんやで本隊との合流に成功する。そこでは野戦陣地が作られており、俺はひとまずアグリアスさんと会った。

「アグリアスさん・・・あとのくらいですか？」

一番それが気になることである。戦局が不利か有利か分かるから

な。

「残りは2600名。思ったよりも強力な魔術師が多くてな、時間がかかってしまった。しかし、君があああの戦闘機共を撃墜してくれた御陰ですつと楽になった。感謝しているよ」

前話で引かれてしまった人に褒められるとは・・・嬉しいな。

「それぐらいしかできませんでしたしね・・・」

「いや、謙遜することはない。立派な働きをしてきているよ」

うう・・・アグリアスさん・・・あなたの同人誌で悶えていてすいませんでした！！！！と心の中で土下座しているとゴルゴ13も近づいてきた。

「・・・・・・・・・・なかなかの腕だった・・・・・・・・」

！？

「ど、どうも・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・よもやゴルゴ13にまで褒められるとは・・・・・・・・・・  
人生、まだ捨てた物じゃないな。

「と、ところでアグリアスさん、今後どうします？」

「そのことだがロシア魔術師達は損害の大きさのためかある雪原に集結し始めてな。愚策にも程があるがこちらにとっては好都合だ。一気に殲滅する」

・・・はい!?

「こつち13人だけですよ!？」

「ははっ、何を言っているんだ。15人だろ？君が連れてきた聖人と魔術師がいるからな」

そう言っても無茶だ!!!

「圧倒的に不利っ・・・」

「数馬・・・確かに、数が勝っている相手の方が有利ではある。しかしな、それを今まで撃破してきたのが私達、第13騎士団だ」

「・・・」

・・・  
どういっても無理か・・・やりたくはないけどやるしかないと・・・

「じゃあ、やりますか・・・」

「よし・・・全員戦闘用意!!!!!!目標、ロシア魔術軍!!!!!!」

アグリアスさんの号令がかかると共に全員が慌ただしく動き出す。俺も準備に入ろうとするが手が武者震いか、それとも臆病なのか震えてしまう。しかしそんなこと言っている場合ではない。今から死地に行くのだから。

「…………ふう…………」

「どうしたのですか、出撃前から顔が暗いですよ？」

溜息をついた俺の元に神裂さんとレンがやってきた。

「……あんた達は良いのか？目的は同じとしても仮にも別組織だぞ」

「僕たちだつてあなたとは共闘したくはないです、しかしまあイギリス清教は合理的が好きですから。楽が出ければそれでいいんですよ」

「そうか……………」

腹立つこと言っているようにも聞こえるが怒る気力も出ない。

「数馬、大丈夫です。敗北のような無様なことは絶対になりません」

神裂さん、そりゃ無茶だろ……………と言いたいところだが聖人が言っているんだし間違いないか……………

「……………さあて、戦だ」

戦いが始まる。



作戦はそのまんま、後ろから突っ込む。それだけ。しかし1人だけでは各個撃破されかねないので3人ずつに分けて突撃する。それで今、俺たちは全力で走っているわけだが

「で、俺のメンバーがあんたらだとはね」

「僕だって嫌ですよ・・・」

俺と組むのはレン、神裂さん。正直言ってレンが使い物になるかが心配だ。

「お前、何が出来るの？」

「思いつきり戦力外のように言いますね・・・確かに僕は回復、補助系統の魔術しかできません。でも、こんな激戦には重宝するでしょう？」

「・・・ああ・・・」

何かすごく失礼なことを言ってしまったが置いておく。それよりも突撃戦法。3人ずつのメンバーを間隔450mで配置、円形状に突撃を敢行する。

「それだけで勝てるかどうかはすごく不安だが・・・今更不安になってもしょうがない」

銃を構える。今回はいつものあのチートな銃ではなく、S & a m p ; W M 2 9 の魔弾装備リボルバー式拳銃2丁である。あのチートな銃、さつき壊れてしまったのだ。直ぐに壊れるなんておかしくないかと言われそうだが、まともに整備をしていなかったためのがつけとして回ってきたのだろう。

「見えてきたぞ……」

少し薄暗い森に光が差し込む場所、それを一気に突っ切る。そしてすぐさま広がってきたのは雪原と……

大量の魔術師達だった。

「突撃いいいいいい！！！！」

視界に入る20名程度の魔術師の足下の重力を最大限に大きくして身動きを出来なくする。本来なら身体全体の重力を大きくして押しつぶしてしまうのが理想だが、この能力は重力を大きくする範囲を広げるほど、能力の効果が現れる人数が減るという致命的な欠陥を持っているためこんな乱戦には不利なのだ。

「ファイヤー！！！」

ともかくも動きを封じた瞬間、拳銃から全弾数10発が放たれる。うまく照準を付けているためすべて顔面に命中。マグナム弾なので

一瞬にして人間のザクロが10個できた。

「まずは10人!!」

すぐさま重力変換を使い、弾をつまぐ弾倉に入れ再装填を完了する。

「普通、マグナム弾装備の拳銃片手で撃つたら肩が碎けるが・・・

そしてすぐに10発連続射撃。

「俺みたいな人外には問題なし!!」

また10人をしとめる。直ぐ横では神裂さんが無双をしている。

「七閃!!」

七本のワイヤーがすぐさま20人以上の魔術師を切り裂く。今度は相手方からも続々と反撃が来た。

「SAT I」

1人のロシア魔術師の呪文詠唱が終わった直後に地面から土塊の手が襲いかかる。

「Fort Erie Barrier to protect the homeland faithful!!」

レンがすかさず防御魔法を作動させ、防壁を作る。それに土塊の手がぶつかる手は一瞬で砕け散る。

「すげえな！！！」

「当たり前です！！！！」

俺も負けじと連射を再開する。向こう側からは大きい炎の爆発が見え、甲高い女性の怒鳴り声が聞こえる。アグリアスさんも善戦しているようだ。

「死ねえ！！！！！」

最早単純作業となった装填 発射が次々とロシア魔術師を食っていく。もうとつくのとうに100名は射殺しただろう。

「しっかしいつこうに数が減らないな！！！！人海戦術かこの野郎！！！！！！」

もう次から次へと呪文詠唱が行われて魔術が放たれる。今まで持っているのは防御をつとめるレンの御陰であるのは間違いない。

「となるとありがとうな！！！！レン！！！！」

「お礼は後で良いですから早く片付けてください！！！！！！」

ちっ、人が礼を言っているのにこれか。まあいい。とにかくこいつらを片付けることが優先だ。そう思いまた再装填しようとしたが・

ポケットからは弾が出てこなかった。つまりは……

「弾切れ……だと!？」

300発以上あった銃弾はそこについてしまったのだ。急いで雷切りを出そうとするが……その一瞬の隙を逃すような相手ではなかった。

グジュリ……

魔術師の1人が、魔術による攻撃ではなく、所持していたナイフで俺の腹部をえぐるようにさした。

「あぐあ……」

俺は激痛が来る前に魔術師に雷切りを突き刺す。すぐにそいつは絶命したが、ほとんど相打ちのようであった。

「くっそお……」

俺は激痛に耐えることが出来ず、倒れる。倒れ込んだ下にある雪がすぐに赤色に染まっていく。

「光太郎!!!」

俺の負傷に気づいたのかレンが駆け寄ってくる。こいつ、そういえば人のこと名前で呼ぶんだな……そんなどうでも良いことが最後

に浮かび俺は意識が消えた。

## 数馬SIDEOUT

## レンSIDE

「ったく、何でこうなりますかね!!」

見てみると出血多量、十二指腸、大腸がえぐられてとびでている。間違いなく重傷です。

「・・・・・・・・」

まったく、こつも情けなく倒れてしまつと見捨てたくなりますが、それでも

「火織さんを悲しめることはしたくないですしね」

すぐに治癒魔術を行う。しかしこの傷では最低10分程度は行動は不可能です。火織さんに助けを求めようとしましたが、この乱戦でどこかに消えています・・・・・・・・私がやるしかありませんか・・・・・・・・

「もう2度と、自らの手で人を殺めることは遠慮したかったです  
が・・・・・・・・」

どうしようもありませんね。すぐそこまで敵が来ていますし。ちよつとよく、此処から200m付近に小川がありました。

「さあて、まずはあそこまで退却ですね!!」

体力には少し自信がありませんが、1人ぐらい背負うことは問題  
はないです。とにかく逃げる逃げる。

バゴオン!!!!

「よつと!!」

炎系統の魔術が飛んでくるがすれすれで避ける。

「しかしあの魔術師達も呪文詠唱が長いですね・・・」

まったく、ロシアの魔術も落ちた物です。ですがこっちにとつて  
は好都合。小川につきました。すぐさま僕は手についた指輪、魔術  
作動装置の力を最大限に引き出します。

「・・・やっと逃げる必要もなくなりましたか・・・」

徐々に300名近くの魔術師が接近してくる。さあて、やります  
か。

「世界を構築する5元素の1つである、大いなる水よ

それは命を保つ優しさであり、邪悪を洗い流す力なり

それは緩やか流れを起こすと共に、全ての邪悪を飲  
み込む物なり

その名は水、その役は弓

顕現せよ、悪を砕いて力を使え」

呪文詠唱を終えると小川の水が動き出し、一点に集中して10mはあろうかと思われる人の形を形成する。ひさびさにこいつの姿を見ましたね。

「お久しぶりです、ネロ。早速ですが、奴らを殲滅してください」

ネロは従順に魔術師達に向かい、攻撃を開始しようとする。

「やはり……元の世界の時と……同じようなことになってしまいますか……」

ネロの身体から無数の水の弓矢が放たれ、一瞬にして40名を倒す。魔術師達も反撃として魔術を作動しては当てる。

「残念ながら、直ぐに再生できるんで効き目はないですけどね」

まったく効き目が見えないネロに恐れを成したのか魔術師達は逃げようとする。

「……1人も逃がさず殺してください、ネロ」

その言葉の直後。ネロは先ほどの攻撃の何倍はあろうかという水の弓矢を放つ。結果は言わなくても分かる。

「……僕……勝ちですか……」



もう2度とこれは使わないつもりでしたが・・・やはり、使う時は  
どうも至福の喜びのような物を感じてしまふ。

「・・・この残酷さが、あの時みたいなことになった原因なんです  
かね・・・」

そう思うと少し悲しさがあふれ出る。その気持ちを打ち消したい  
ように、空を見上げる。轟音はもう無くなりかけている。戦は終わ  
ったのだ。

## 雪原突撃（後書き）

反省会です。もう皆さんお分かりだと思いますがこの小説、ぐっだぐだの域を超えるほどひどい有様です。作者としても努力はしていますが、それでこんな状況。あまりにも申し訳ないです。お許してください。

次からやっとな原作に戻れますが・・・3巻飛ばしたのは愚策だった気がしてなりませんね・・・orz

とりあえずご意見、感想お待ちしております!!!!!!

フィンランド イギリス 窃盗 パラシュート降下(前書き)

更新です!!!

フィンランド イギリス 窃盗 パラシュート降下

SIDE数馬

・・・また負傷だよ。

「今回の原因は・・・能力使用をしていなかったからか・・・」

「

「能力者なのに何で能力使うこと忘れるんですか・・・」

いや、まあ理由は一応ある。俺は転生者であり、実際に能力開発を受けたわけではない。能力開発は能に刺激を与えて能力を引き起こすという物だが俺の場合は脳に能力自体を注入したわけなので・・・能力が共にあるという感覚がなく、そのため乱戦、熱戦の時に能力の存在自体を忘れてしまうのだ。

「まあそれでも勝てたから良いではありませんか、レン」

「確かにそうですね、それにしても火織さんのあの七閃はすばらしかっ・・・」

とまあさつきからこんな調子の話ばかり、軍用ヘリの中でしている。ちなみにフィンランド軍支給だ。

「しっかしあんな乱戦でこちらの死者0って・・・」

本当にチートな野郎達である。しかも俺以外の第13騎士団のメンバーは何か敗残兵処理とかでまだ活動中だ。疲れという言葉を彼

らは知っているのか？

「確かにそうです・・・あなたも彼らもすごい人達だと思いますね・・・」

「神裂さん、あなたに褒められるとは恐縮至極だな」

「いえ、本当にあなたは強いと思いますよ？数馬光太郎」

・・・レンの視線が痛い。貴様はそこまで神裂さんが好きか・・・それにしてもこうも褒められているが俺途中で負傷して意識がなかったからなあ、間違いなくこいつ、レンが結構な数仕留めているはずだが・・・何で言わないんだ？複雑な事情か？？

「ああ、そういえば知ってますか？フィンランド政府が今度僕たちに秘密裏にですが白薔薇勲章をくれるそうですよ？」

「マジ？」

白薔薇勲章、フィンランドでは外国人だろうが何だろうがフィンランドに貢献したものに贈られる勲章である。・・・まさか勲章が貰えるとはなあ・・・

「なんだか感慨深い物があるな・・・」

「唯一負傷した奴にも贈られるなんて何てフィンランド政府は寛大なんでしょうね」

・・・レンに言い返したかったが本当だから何も言えない。畜生、作者め、もっと俺に華を持たせろよ！！！！

「ところで数馬はどうするのですか？またドイツのハンブルクに戻るつもりなので？」

ああ、そう言えばどうしようか・・・全く考えてない。

「・・・いや、どうもそうはしなくていいみたいだな・・・」

奇跡的に壊れていなかった携帯を見ると、大天使からメールが来ていた。内容は

エンゼルフォールが起こる直前まで神裂さんと同行。ついでに多分お城に行くはずだからそこで指定された物盗んできてね。

「馬鹿なのか？あいつ・・・」

「なんですか？」

「えっ・・・いや何でもなし・・・」

唐突に何か盗んでこい何て言われてもな・・・死亡フラグをよっぽど立てたいのか彼奴は・・・

「独り言なんてただでさえ気持ちが悪くあなたにさらに拍車を掛けるような物ですよ？」

「殺すぞ、てめえ……」

「上等ですよ、やってみてください」

「すぐさま険悪な雰囲気になるな、こいつとは……一生天敵同士になるな……」

で、結局、ハンブルクには凱旋せずイギリスのロンドンに直行することとなったわけだが……あのさ、どうして俺はどっかの知らないアメリカ人と喧嘩しているんだ!?

「G o t o H e l l , y e l l o w m o n k e y ! ! !  
」!

アメリカ人からぶつつんワード、イエロー・モンキーと言われる……言われたからにはボコらなくては!!!!!!

「Y o u w i l l d i e ! ! W h i t e M o n k e y  
! ! ! ! !  
」

こっちもぼろくそ言い返す。事の発端はロンドン・ヒースロー空

港到着時、俺が何となく黒澤明監督の「トラ・トラ・トラ」を神裂さんと話していたら、トラ・トラ・トラの単語だけ分かったのかい  
ちやもんつけられたのだ。

「数馬！！！やめなさい！！こんな不毛なことしている場合ですか！！！！？」

「神裂さん！！！！今回だけは黙っててくれ！！！！こいつがイエロ  
ー・モンキーと言った瞬間に俺はこいつに裁きを下したくなった！  
！！！！」

ゴン！！！！と殴られ、こっちも殴り返し。あんまりにも苛烈なん  
で空港の職員も近づけたものじゃない。しまいには警官が止めに入  
る始末で……………

「はあ……………あなたは一体何をしたいんですか……………」

レン……………うなずきたくはないがそれが正論だ……………

「俺としても馬鹿だったと思うよ。と警官に連行されそうになり  
権力で何とかして2時間後」

「いや〜碌なことが起きないね」



「それは自業自得という物でしょうが」

さくつと言つなこの野郎。

「まあとりあえずウィンザー城に行きますので……ちょっと待ってください。此処で待ち合わせだったはずなのですが……」

さつきから空港の真正面にある建物で待機しているのだが……誰を待っているのだろうか？……あつ……もしかして……

「神裂さん、もしかして土御門を待っているのか？」

「へっ！？」

思いつきり過剰反応する神裂さん。

「な、なぜ彼のことを……彼は仮にもスパイ。素性を知っているのはごく一握りのものだけのはず……つてあ！！」

あゝあ、自らスパイだって言つちやたよ。まあでも土御門そりゃあ原作で相当な地位を築いていますからね……原作じゃロンドンいたみたいだし

「まつさか数やんが知っているととは思っていなかったにやゝ」

唐突に後ろからしゃべりかけられる。見ればイギリスに来てモアロハシャツ1枚という土御門本人だった。

「あつ、噂をすれば何とやら……遅いですよ土御門さん、火織さんを待たせるなんていう極刑に値する行為をよくもしゃあしゃあと

できますね」

レン、それはさすがにひどすぎると思うぞ？

「悪い、悪い。こっちにもいろいろ事情があるでな、勘弁してほしいにゃ〜」

「登場回数が半端無く少ないのはそのややこしい口調のせいか・  
」

「数ちゃん、さりとひどい事を言わないでほしいぜよ・・・」

まあメタ情報で・・・作者としては土御門はかつこいいがあの口調がどうも書きにくいという欠点がああ・・・って言っていたからな。あ、うっかり忘れていた。

「そういえば同人誌どうした？」

確か相当前に貸したまままだ返して貰わなかったはず・・・

「あつ、あれは・・・その〜実は舞夏に見つかった・・・」

そろそろ返して・・・はい？

「土御門君、もう一回言ってみる」

「いや、だからにゃ〜・・・舞夏に見つかった・・・その捨てられて・・・すいませんでした！！！！！」

「・・・」

残りの同人誌、 230冊 - 165冊 - 30冊 || 35冊 . . .

「俺のコレクションがここまで落ちぶれるとは . . . 神は私を見放したか . . . .」

「数やん . . . 本当に申し訳ないぜよ . . . .」

泣くに泣けないが . . . 仕方が無いか . . . . ううう (涙)

「とにかく . . . ウィンザー城に向かいますから早く歩いてください . . . .」

地面で体育座りして泣いている俺をレンが恥ずかしそうに引つ張っていく . . . . こいつにはよく世話になっちまっているなあ . . . .

目の前には城がある。しかもすつごくでかい城がある。

「流石英国、やることが異常に無駄に豪華で愚かだ」

「喧嘩を売っているんですか？」

「ああもちろん」

ちなみに作者はどっちかって言うといギリスよりもイタリアの方が笑えるから良い。まあどっちも良い勝負なだけだね。

「それにしてもこれがあのロンドンから日帰りで行けるウィンザー城か・・・先ほどの発言は撤回して立派だと言わなければいけないな」

「そうだろうにやゝ何てったってイギリス清教が誇る城塞結界を施してあるんだ、並大抵の魔術じゃ当たりもしないぜえい」

まあエンゼルフォールの前でもかなりの効果があつたみたいだしな・・・でも一体ここから何を盗めと言うんだ？

「とりあえず、数馬、いったん此処でお別れです」

「へ？何で？」

神裂さんからちよつとまずい一言が・・・

「当たり前でしょう、あなたは観光に来たみたいだから良いですけど僕たちは必要悪の教会からの出頭命令なんですから。いくら大謀報組織のメンバーだからと言って部外者に機密事項を聞いてもらいたくはないです」

「ああ、そうか・・・」

不味い、神裂さん達と一緒に城に入って物を盗んでついでにエンゼルフォールを受けないようにしたかったのに・・・

「じゃあ此処でさらばだぜよ、数やん」

と言うと3人は行ってしまった。どうするよ？

ただ今、午前2時53分、8月28日。ウインザー城に城壁からこっそり侵入、目的の部屋に向かっている。俺は今凄まじいほどに神経を尖らせているから油断なんて物はない。というか絶対に出来ない。

神裂さん達に見つかったら間違いなく玉碎必至だな……

ばれたら即刻死しか選択肢は残らない。帰りてえ……兎に角しらみつぶしに調べまくっているわけだが……全部が全部鍵すらしていねえ……

「此処かな？」

分かっていたがこの城すつごく広い。半端ではない。トラップもそこら中に仕掛けてあるみたいだし、本当に危険すぎる場所である。見てみた部屋では……

「見なけりゃよかった……」

何を見たかは読者の皆様のご想像にお任せします。というか何処

にあるんだ！！！！

「畜生、何で4階にあるってだけしか書いてないんだ・・・」

無責任にも程がある。あぁもうどうしよ・・・？

「なんだあれ？」

前方の右奥にある部屋の雰囲気がおかしい。悪魔に近くなった時に付けられた魔眼がその部屋のドアの周りから信じられないほどのどす黒い煙を出しているように見える。

「此処か・・・？」

他の部屋と違って何故か此処だけ鎖が何十にもされている。やばいよ、やばいよ・・・

「あかん、これはあかん」

逃げたいいいいい！！！！

「でもやるしかない！！！！」

というわけで鎖を音も立てずに雷切りでスッパスッパと斬っている、ドアを開ける。

「あかん、これはあかん。本当にあかん」

東京都出身の俺が関西弁になるほど此処はやばかった。部屋は10畳くらいでそこら中に黒い煙がどろどろと。中央には何かガラス

ケースに入っている本が……

「これって……何？」

ああやばそうな物があるよ……これを盗めというのか!?

「確か物の名前は Hinamizawa surgical  
killing curse だったよな……これかよ」

ガラスケースの前に物品名が書いてある。見れば本当にそう書いてあった。

「……こういうのはガラスケースを開けると絶対警報が鳴るんだよな……」

だけど壊すと何かすんごくやばいことになりそうな予感がしたので恐る恐る外してみたが……何も起きなかった。

「へ?」

あんまりにもおかしいが……この際気にしたら負けだ。とりあえずその本を取る。

「さてと逃げることにし」誰かそこにいるのですか!?!?!?!」  
「げっ!?!?!?!」

やばい……どじりどじり……ドアの前に神裂さんがいる……

orn

「どじりする、どじりする、どじりする……?」

このままじゃ死ぬ、このままじゃ死ぬ!!!!.....  
.....あっ!!!!!!

「どうやら出てきてはくれないようですね.....七閃」

ズバアっと7本のワイヤーがドアを切り裂き神裂さんが中に入る  
うとしたその瞬間に!!!!

シュバアアアア!!!!!!

閃光手榴弾2個、音響手榴弾を3個投げ捨てる。一瞬ひるむ神裂  
さんの隙を突き重力転換で重力を最小限にしてBダツシュ!!!!!!  
奇跡的に逃げることに成功。

その後、いろんな人に搜索されまくるが天佑が味方して脱出でき  
た。

数馬SIDEOUT

SIDE神裂



「私としたことが・・・不覚でした・・・」

あの部屋に何者かが侵入していた時点で焦って七閃を使用するなんて・・・愚かなことをしました。今は城中の者達が必至になって犯人を捜索しているようですが・・・

「仕方がないにやゝなんせあの部屋はとんでもない物が保管されていたんだぜよ？誰だつて焦ること必至だにやゝ」

「ですがあするとき普通にドアを蹴破っていればあのような隙を見せずに済んだはずです・・・」

「いや、火織さんには何ら一つ責任はないです。むしろ防犯体制にゆるみがあったことが原因でしょう」

そうだとってもあの本は・・・

「とにかく、犯人を一刻も早く見つけることだにやゝあの本は最早禁忌とされているものなんだぜい」

「そうですね、私達も行きましょう」

神裂SIDE OUT

数馬SIDE

「人生オワタ＼（＾o＾）／」

結局、どっかの公園に逃げ込んだわけだが・・・監視カメラがやばい程多い。さすが世界一の犯罪国家。

「こりゃ写ったら即ばれてしまうな・・・覆面でも付けていようか・・・」

とりあえず、この本どうしよう？

「連絡がなんにも無し・・・燃やすか？」

燃やすかといった瞬間にやばそうな殺気がこの本から感じられた。  
・・・やめておこう。

ぎおんしょうじゃの　かねのこえ  
しょうぎょうむじょうの　ひびきあり  
さらそうじゆの　はなのいろじょうしゃひっすいの  
ことわりをあらわすおごれるものも  
ひさしからずただはるのよの　ゆめのごとしたけきものも　つい  
にはほろびぬひとえにかぜのまえの　ちりにおなじ

「平家物語だけはやめてほしかった！！！！！」

「こんな夜中にそれを着信音にしないでください!!!!!!!!!!!!!!」

「やつほー!!お元気?」

大天使が……

「今にもショック死の危険があるぞ」

まだ心臓バツバツしています。

「で、この本どうすればいい?」

「持ってた」

「……………」

……………OK、もう一度確認。

「今何と?」

「いや、だからそれ持っていてよ。マジで危険な物だから」

「そんな危険な物を持たせないでくれ!!!!」

「頼むよ、これ預けられるの君ぐらいしかいないんだって!!!!」

「じゃあウィンザー城にそのまま置いておけばっ…………!!」

「あのまま置いておけばロンドン市民が全滅するのは確実なんだ

よ・・・」

「!?何それ!!!!!!??」

「・・・・・・・・その本の題名を日本語訳にしてみて」

「え?・・・あつ・・・」

よく分からないが試しに訳してみるとだ・・・

この本の題名は *Hinamizawa surgical illing curse*。これを日本語訳に直すと

呪殺術式 雛見沢

「まさか・・・雛見沢症候群?!?」

「そう・・・それ、あの雛見沢症候群のウイルスを人工的に作り出す魔術の術式が記載されている・・・いわば史上最悪の書物」

マジですか・・・

「君も知っているよね?雛見沢症候群の恐ろしさを・・・」

ひぐらしのなく頃にでは、村人全員が全滅したあのウイルス。あの、残酷で、容赦ない、恐ろしいウイルス・・・

「でもあれは雛見沢の寄生虫でしか不可能だったはずだろ?」

「それを人工的に魔術で作ってしまったのがいてね・・・まあとりあえず持っていてね、捨てたりしたら間違いないとんでもない不幸が起きるから」

「怪異現象が起きることはないのか？」

「大丈夫、一応持っていてくれる人にはちょっとした強運を授けてくれるみたいだから」

それならまあ・・・持っていようか

「あのLサイズのアタッシユケースに詰めとけば多分ばれることはないよ、邪気が漏れることもないし」

「大切にしておく」

そして電話を切った。が、何か・・・怖くなるよな、こんな物を持っているのは。

くで、12時間後

俺は公園から出ると、覆面をとり、ホテルに入った。イギリスは飯は不味がベッドの質が良い。

「・・・どうやってエンゼルフォールから逃れようか・・・」

今のところ神裂さん達はいま持っているあの本を躍起になって探しているようだ。このままだとばれるんじゃないかと思えば、大天使に初めて電話を掛けてみると、今精巧な偽物を製造しているからそれまで持たせて。と返事が来た。

「とりあえず早くしてくれ……頼むから……」

とにかくエンゼルフォールの避難場所がなあ……

「仕方がない、こうなったら……」

魔術でも使用するか……

ただ今、午後11時56分。周りには結界を使用するときに必要な魔方阵のような物を地面に描いてある。

「原作で魔術使って怪我した土御門を見るとあんな怪我だけはしたくはないと思っていたが……」

もう俺それ以上の怪我ばっかしているからな。使っちゃおう。

「あつ、補足説明。魔術に関してはザガンさんからちよつと結界

だけ教わったから一応出来るはず」

午後11時59分32秒。 . . . 40秒 . . . 50秒!!!!

「ああ全知全能の偉大なる精霊達よ、その力を我を守護するために行使せよ!!!!」

言ったとたんに腹部に激痛。吐血する。しかしこんなものどうってことはない。結界がうまく出来ればそれで万事OKだ。

結界が出来た直後、世界の空間がぐらりと変化したようにも感じた。エンゼルフォールの始まりである。

「この怪我どうしよう . . . . .」

今更考えるとどう対処するべきか . . . . .

（2時間後）

「で、何故あなただけこの、御使墮とし（エンゼルフォール）と名付けた現象にかかっていないのですか？」

で、今俺はどうやって居場所をつかんだのか分からないが唐突に神裂さん、土御門、レンの尋問を受けていた。ちなみに今は神裂さんに尋問されています。

「……………まあ色々……………」

「まだしらばつくれるつもりですか？この部屋で魔術が使われたことは少し残っている魔力やあなたの傷の痕跡から分かるとおり確実なんですよ、あなたが何故魔術を使用できるのですか？」

まいったね、どうしよう。これじゃ何かしら言い訳を考えないといけない。適当に……………」

「……………うちの機関から教わった……………」

「嘘ですね、「赤光の黒十字」は能力者に魔術を教えるほどひどいことはしません」

やべえばれた……………さすが神裂さん。

「…………………………」

「黙秘権を貫くつもりですか？」

「……………ソロモン72柱は知っているな？」

「「！？」」「」

「あれ経由で独学で学んだ……………以上」

「「……………」」「」

この後何も言っただけでこなかったのを見ると相当ソロモン72柱関係はやばいらしいね……………」



で、結局。うちの組織の会長のじいさんがX-02をロンドン・ヒューストン空港に寄越してくれた。あの御仁もこの状況を分かっているみたいだ。

ただ今、午前7時13分。

「でも、何で僕たちが爆弾搭載庫に入っていなければいけないんですか……」

「ごちゃごちゃとレンが文句を言ってくる。」

「しょうがないだろ？これ元々1人乗りだし……」

「だとしても文句は言えないにやゝすぐにエンゼルフォールの発生地点に行けるんだから」

「ですが……」

「そうです。文句は言っていられません」

神裂さんに言われたのかレンは何も言わ無くなった。

まあ皆様が納得したところで発進しますか……俺はぐいっ

とRボタンを押した。速度はマッハ6に設定。

「もうそろそろ日本上空だぞ」

「早いです・・・」

「早すぎます・・・」

「すごく無茶苦茶だぜよ・・・」

まあまだ2時間もたっていないからな・・・とりあえず次は・・・

「お前ら全員投下するからな。なんとかうまく着地してくれ」

「「「はい?」「」」

「ごたごた言われる前にさっさと投下。」

ガチャ

ヒュウウウウウウ・・・

「よし、完了」

一瞬レンの断末魔の声が聞こえたが気にしない気にしない。後、念のため言っておくが神裂さんだけにはパラシュートを付けておいたから大丈夫なはず。

「さて最後に俺が降下しますか」

機体の速度を120kmに低下させる。なんでストールが起きないかって？そんなのは知らん。人工知能による操作に切り替え、操縦を任せる。

「降下開始！！！！」

無理矢理コックピットの窓を開けると、俺は勢いよくダイブをする。もちろんパラシュートは付けている。

「目指すは真下の海岸線！！！！」

補足、この時の高度は3000m。常人だったら凍死しているかもね。それと日本政府には領空を通ることを会長が伝えておいてくれたみたいだから堂々と日本に侵入して大丈夫。

フィンランド イギリス 窃盗 パラシュート降下(後書き)

展開が早すぎるとしか思えませんね。申し訳ない・・・orz

ご意見ご感想お待ちしております!!!

この話はみなくても多分差し支えないb y作者(前書き)

更新です!!--!ごめんなさい!--!今回はひどい!--!!--!

この話はみなくても多分差し支えないby作者

SIDE数馬

藍より蒼き〜 大空に 大空にたちまち開く〜 百千の〜真白き薔  
薇の 花模様〜見よ落下傘 空に降り 見よ落下傘 空を征〜  
見よ落下傘 空〜を征〜

「出だしから唐突に歌ってみたところで……」

ただ今高度300m。普通、パラシュートで降下するのはこのくらいだったはず。しかし今回は3000mで降下したため。

「真夏なのにもう寒くて仕方がない……」

正直、俺も気が狂っているとしか思えない行動をとったものだな。  
・とりあえず地上が近くに見えてきた。

「海岸線に降下したつもりだが少々誤差が出るのは仕方がないか。  
・でも砂浜に落ちそうな感じがするな。」

やっぱりご都合主義でも何でも良いから上条のいる海岸に降りられ  
たらどれほど楽になるか……

「おっ、後56m……」

そういえばさ、パラシュートでの着陸というのは素人がやると本  
当に危険らしい。

「どうするかな・・・かくいう俺も素人だ・・・」

骨折だけはしたくない。今後のハプニングに迅速に対処出来なくなる。

「補足説明、ノルマンディー上陸作戦では1万8000名がパラシュート降下したが、運悪く海に落ちたり、井戸に落ちたり、川に落ちたりした兵士がいた」

余計怖くなってきた・・・

「高度23m・・・高度15m・・・高度10m・・・

」

補足説明その2、ソ連ではパラシュート無しで10000人が10mから降下したら全滅した。

「高度5、4、3、2、1・・・」

ばさつと着陸成功。いや〜怖かった。

「ところで此処は・・・」

そう言いながら辺りをキョロキョロ見渡してみる。目の前にはまだ少ししか上っていない太陽に照らされる海。なかなかな風景だ。まだ観光客で賑わっていない。それ以外には特に・・・おっ、何か近くに海の家があるな・・・行ってみるか。と、近づいてみる・・・が・・・

「出たよ、作者のご都合主義・・・」

海の家「わだつみ」

上条達が確か宿泊していたような……ああ……

「この頃作者の手抜きが目立つな……」

だが手間が省けたから結果オーライということだ。

「多分……今インデックスは青髪ピアスに……」

あ、悪夢だ……あの愛くるしい美少女が……あんなオールマイテイ野郎に……

「魔眼が元の姿に見えるようにしてさえくれれば良いが……」

あの姿でインデックスの口調は……まずい、手榴弾を取り出してしまう……

「まあまだ早すぎるからな……少しどこかで休んで……」

「光太郎、貴様ああ……!」

「どわああ……!」

急に登場するレン。よく見ればもう疲れ切った顔をしている。

「あなたのおかげでさんざんな目に遭いましたよ……」

「そ、そつだぜよ……ほんとにもうボロボロ……」



「何故か私以外にはパラシュートがついていなくて……」  
不思議がる神裂さん、喜んでくれ、これは故意にやった。

「まあ生きていたんだから良しとしてくれ。とりあえず、どっかに待機だ、待機」

そう言っつて無理矢理話しを変えて移動する。

「今はまだ6時43分。多分上条が起床したのは9時頃。よつて2時間程度のあまりがある」

「じゃあどうします?」

「I have no idea」

「……」

「よつし……!どうする!」

「じゃあ……別行動で」

「はい……?」

「いやまあこちらにも行動事情があるんでね・・・」

そう言うと俺はそそくさとどこかに行く振りをして・・・

海の家「わだつみ」の床下に入り込んだ。

「魔方陣、魔方陣」

そしてひょうきんに魔方陣を書き込んでいく。何の魔術かはお楽しみだ。これを1時間続ける。

「で、残りの1時間は今回の決戦の準備」

もうしょっちゅう決戦と言っているからありがたみがないけど決戦は決戦。やるぞー

「S&amp;P;W M29の銃口は丁寧に磨いとかないと・・・」

「ああ！！手榴弾の信管が！！！！」

「嘘だろ・・・銃弾が4割死んでる！」？

「やばい・・・対地ミサイルが作動しなくなっている・・・」

「あかーん!!!!!!!!!! 離見沢が大変なことに!!!!!!!!!!」

「どす黒い煙がああああああ!!!!!!!!!!」

「死んじまう!!!!!!!!!! このままじゃ死ぬ!!!!!!!!!!」

「チュド!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「決戦前にして大爆発起きるとかWWW………何が起きたかって? 言いたくもない………」

この話はみなくても多分差し支えないby作者(後書き)

反省会 . . . . . すいません、すいません、すいません . . . . .  
午前9時頃からPCがゲームオーバーな状態に入ってしまった書くに  
もできない状況でした . . . . . 本当に申し訳ない . . . . . orz

ギャグと惨劇が絡み合った海の家（前書き）

更新ですが・・・今回は結構シリアスになっています。

## ギャグと惨劇が絡み合った海の家

SIDE数馬

前話のあの不毛すぎる話からパラシュート降下が成功して、雛見沢が爆発してと大変だったが・・・ここで連絡が作者からある。

「えっと、確認しましたところ原作よりエンゼルフォールが1日早く起きてしまっているため、原作4巻のスケジュールを無理矢理1日早く起きたことにします。作者より心からお詫び申し上げます・だそうだ」

こういうことは前書きにでも書けばいいだろ・・・まあいいや。

「そうになると30日だけ空白が生まれるわけだ。この日は休日にしておこう」

作者のミスが俺にとっての安息日になるうとは・・・

「で、もう11時だ・・・」

昨日は上条とインデックス2人きりで泊まっていたはずだから・・・  
・多分あの御坂美琴の姿をした竜神乙姫ちゃんが部屋で上条にボデイプレスをして、もう海に行ってしまったている可能性が高い。

「どうするかな・・・」

まいったことに今回、上条とは初対面のレンがいる。あいつの説  
明をどうするべきか・・・

「俺の友人、つとするのは嫌だな・・・」

今までの喧嘩腰状態から見てやっぱ友人とするのは気が引ける。かといって、魔術師というのは・・・問題ないか。

「後はあの狂った殺人犯だな」

アニメ版では放送的な問題からか出てこなかったが原作では火野神作という28人連続殺人という正直たちの悪い軍人よりも恐ろしい野郎がいる。

「あの殺人犯、多分後2〜3度は脱獄しかねない・・・生きて返すわけにはいかないな」

最も・・・俺がそんな言えたりやれたり出来る立場では無いけどな。

「さて、そろそろ行くか」

神裂さん達とは合流しなくても良さそうなので、海の家「わだつみ」に駆けだした。

「やっぱりこの魔眼は便利だな」

幸いなことにこの眼のおかげで全員が全員、元の姿に見える。ついでに切り替えも可能で、姿が変わってる状態も見ることが出来る。

「海の家のおっさんもちゃんとおっさんに見えるし、その奥さんもちゃんと元の姿っぽいし」

ところで上条達は・・・砂浜にいる。とりあえずてくてくと歩いていき、

「上条ー！！！！お疲れだったなあー！！！！学園都市第1位打倒おめでどうー！！！！」

このくそ暑い中、（書くのを忘れていたが対ロシア魔術戦からの恰好）フィンランド冬装備白軍服着ている奴がこんなこと言ったらどうなるか？

「」「」.....「」「」

全員沈黙。こつこつ挨拶が一番白けることがよく分かる。

「そうかい、君が当麻の友人の数馬君か。私は上条刀夜だ。よろしく」

さっきの白け具合から何とか説明して上条の父と挨拶を交わす。

「しかし君は随分変わった恰好しているね。いかにも軍隊所属って感じの・・・」



「いや、3時間前までドイツ行って、フィンランド行って、イギリス経由で帰ってきたものですから」

「ず、随分といろいろなところに回っているね……」

そりゃまあこれでも諜報機関に属していますからね。

「数馬、お前本当にドイツ行ってたのか……」

「信じてなかったのか？」

「お前のことだからどうせコミケでも行っているのかと……」

「上条君、ちょっとこっちで話さないか？」

そこまで俺の印象がひどいことが分かった。ただし上条に事情説明をしないと。

「刀夜さん、少し上条君借りますので……」

「え？ああ良いよ」

とりあえず無理矢理上条を少し離れたところに連れてくる。

「……上条、お前は気づいているよな？」

「ああ……なあ数馬。インデックスが俺の母だって言っているわ、御坂美琴が妹キャラになりきっているわ……これ何のドッキリ

だ？」

ずっとこける俺。……おいおい。

「残念ながらこれはドッキリでも何でもない。現に今回は神裂さん……お前がインデックスを救ったときに共闘した魔術師だが……と他2人を引き連れてきている。これは魔術による事態なんだ」

「魔術……？」

「まあ詳しい話は後だ。俺も仕事で疲れていてな。少し羽を伸ばして遊びたいんだ」

「そ、そうか……」

「話は終わったかい？」

ちょうど刀夜が後ろからこちらに来る。

「ええ、もう終わりました……ぶっ!？」

後ろを振り返り、刀夜を見る。普通、夫婦は隣に連れ添っているものだ。実際、上条刀夜にも上条の母親である上条詩菜が隣にいた。ただし、その詩菜の恰好が問題だった。

「あ、ぐわあ……」

「ははっ、やっぱり数馬君も良いと思っただろ？さっき当麻に見せたらものすごい剣幕で怒られたけどなあ」

隣では上条があちゃーという顔をしているがそんなの関係無い。原作4巻では詩菜さんはインデックスの姿だったが、あの布の面積がふざけているほどに小さい大人水着ハカみずきの威力は相当凄まじい物だった。それが今は、あの一体どうやったらあの若さが保てているのか分からないぐらいの美人が着ているのだ。俺はその姿に完璧に赤面した。

「当麻さんがいつもお世話になっております。上条詩菜です」

ゆつたりとした口調で詩菜は頭を下げる、が……そのもうほとんど隠れていない水着から丸見えの胸の谷間を見た瞬間。

「ぶぼはっ……」

俺は勢いよく鼻血を噴き出しぶっ倒れた。

「か、数馬あああ!？」

「お、おい大丈夫かね!？」

「あらあら何でこんなことに……」

多分、対ロシア魔術戦よりも脅威に感じた……さすが上条詩菜さん……

〜13分後〜

「いや〜この調子じゃ先が思いやられる・・・」

「お前・・・何俺の母さん見て興奮しているんだよ・・・」

うるさい、そう言いつつも完全に否定は出来ないからもの悲しい。

「ところでインデックスは？」

「そういやまだ来ていなかったな・・・あつ・・・」

上条の顔が一気に蒼白になる。考えてみれば上条の眼にはインデックスは青髪ピアスに見える。その状態でインデックスが水着姿で登場したら・・・

「とうま、とうま。遅れてごめんね。待つてくれたんだ」

後ろからインデックスの可愛らしい声が聞こえた瞬間、上条が凍り付いた。きつと彼には恐ろしく猫なで声な男の声に聞こえるのだろつ。

「よお！！インデックス、元気だったか？」

「あれ？かずまも来てたんだ！！！」

俺は後ろを振り返り可愛らしい、とても可愛らしい水着姿のインデックスに対面する。いやあ〜可愛いなあ・・・だがこれはやばいな。

「いやはや、やっぱりインデックスはどんな姿でも美しいな」



おもちゃのスコップを使い大急ぎでインデックスを掘り返す、掘り返す。上条、この状況から逃げたいのか刀夜達の方へ向かっている。

「上条おおおお！！！！戻ってこiiiiiiii！！！！」

しかしもう現実と向き合いたくないとでも言うように上条は戻ってくれない。とりあえず何とかインデックスを引きずり出し刺しっぱなしにしてあったパラソルの下に寝かせておく。

「インデックス……ごめんな……上条は決して悪気があってやった訳じゃないんだ……全部エンゼルフォールのせいなんだ……」

未だに気絶しているインデックスに向かって何回も謝る。何回も何回も……

「いつまでその方に謝っているつもりですか……？」

神裂さんがいつのまにか後ろに来ていた。どうやら情報収集が終了したらしい。一応、インデックスだぞ……見た目は青髪ピアスだが。

「……ところで上条当麻はどこです？」

「へ？……ああ、向こうにいるぞ」

そう言いながら上条のいる方向に指を指すと神裂さんは一瞬にしてそっちの方へ向かって行ってしまった。

「あ、そついや上条が犯人じゃないこと言うの忘れてた……」  
「やっばい、やばい。見てみれば先回りしていた土御門が上条に避難勧告をしている。が、神裂さんの接近に気づいたとたん、あちゃーという顔をしてダッシュで逃げ出そうとする。」

「早く事情説明するか……」  
「じゃないと上条、本当にぶつた切られちまう。」

「あそこまで怒っている火織さんは始めてみましたよ……」  
レン、実際あの人怒っているのは乙女心を傷つかせたようなものだから……」

「大急ぎで事情説明中」

「つまりだ……そのエンゼルフォールとかで天使が墮天使になって、それが原因で世界中の人々の姿と中身が変わってしまった……」

上条が簡略的に復唱する。

「簡単に説明すればそうなるぜよ」

「で、俺はこの右手のおかげで何もかもが無事だったが……土御門や数馬や神裂と……そこにいる奴は……他の奴らから見れば例外的に入れ替わって見えると？」

「僕の名前はレンです」

ああ余計な口挟まない!!!と、心の中で愚痴る。それと訂正を言っておく。

「いや、俺は入れ替わってもいない」

「え?何で」

「俺はエンゼルフォールを防ぐときにソロモン72柱式魔術を使ったから何か例外中の例外で何にも変わっていない。現にインデックスも俺を見ても何にも言わなかっただろ?」

「そっぴやそっぴやだな………って待てよ?」

あれ、まだ疑問でもあるのか?

「数馬、お前、カリキュラム時間割受けているはずだよな?確か能力者は魔術を使用できないんじゃない?後土御門も」

何か俺だけ適当だぜよ!?!という土御門の発言は無視してこれも事情説明。

「あ……つまりだ……俺、とある大諜報組織に属している……まあ簡単に言えばスパイをやってるんだ……土御門もスパイだ」

だから何か俺の説明だけ適当にやー!?!という土御門の発言を無視して上条が驚愕の表情を浮かべる。



「……………お前がスパイ!? 土御門は兎も角として……」  
俺だけ、俺だけおざなりだにや………という土御門の悲痛の叫び声も無視して俺は説明する。

「ああそつだ。これでも10時間前まで戦場にいた。まあいろいろなことやっているよ」

「その数だけ負傷ばっかしていますけどね」

うつせえぞレン。

「土御門は魔術側の必要悪の教会のスパイだな。これで説明は終わりだ」

とって説明を終わらせるが上条の顔からは驚愕の表情が消えない。やっぱりこんなあっさりとスパイだって言われても理解が追いつかな……

「おい、おい、何だよそれ……びっくりしちまったじゃねえか」

すると上条はあっさりと言葉を返してきた。

「あれ……もうちょい驚くとかしないのか？」

「何言つてんだ。これ以上驚けることなんて無いぜ? まさか友人2人がスパイだったなんてなあ……」

その顔からはさっきまでの驚きの表情が消えている。すごいな……

上条。

「けど、それでも数馬には変わりないし、土御門にも変わりはないんだ。気にしてもしょうがないだろ」

「……上条＝ネ申という理論は間違っていないかったか……」

「やっぱりお前はすごいやつだな、その調子であそこでしょうげている土御門を励ましてやってくれ」

「ああ、そうだな」

そういつて上条は土御門のもとへ行くこうとする。……あっ、忘れてた。

「上条、ちょっと待ってくれ……」

「え？何だ？」

「そうそう、初対面のやつがいたな。紹介しよう、こいつがレン……」

「イギリス清教必要悪の教会のメンバー、レン・アクリウスです。以後お見知りおきを……」

どがっとな俺を突き飛ばしレンはすぐさま上条と握手する。

「あ、ああよろしくな」

「おい、レンこの野郎、お前俺と会ったときと全然態度が違うじ

やねえか！！！！」

「仕方がないでしょ？あなたと違ってこの人は間違いなく神にふさわしい方だ。そんな方には礼節をわきまえるのは普通でしょう？」

「てめえええええええ！！！！！！」

「何ですか！！やる気ですか！！！！！！」

この野郎！！！！ぶっ飛ばす！！！！とこんな感じで喧嘩が発生。上条が急いで仲裁に入った。

〜イギリスのBBC放送から占領下の皆様へ……………（意味不明）

今、俺たちはちよいと他のみんなと離れたところで話し合い中。

「で、状況確認だが…………俺と上条は全く姿が変化してないとして…………神裂さん達は何に変わったんだ？」

それが一番気になるところ。

「…………私は…………ステイル・マグヌス…………です…………」

神裂さんが苦痛の声を出しながらつぶやく。「ご愁傷様。

「俺っちは大人気アイドルの…………だぜよ」

土御門はまあどうでもいい。問題はレンだ。

「僕は何故か知りませんが・・・前原圭一というマンガのキャラでして・・・」

「OK、貴様ふざけんな」

「数馬!!どこから刀持ち出した!!後振り回そうとするな!!」

上条に押さえつけられて俺は落ち着いたが・・・

「何でマンガのキャラまで入れ替わっているんだ・・・」

実際に懐にいれていたひぐらしのなく頃に鬼隠し編を見ると本当に圭一がレンに変わっている。

「それもエンゼルフォールの影響なのですか・・・」

となりで見ていた神裂さんも驚きを隠せない。

「ところでその本は一体どういう話で・・・」

「神裂さんは見ては駄目だ!!!!!!!!」

これを見たら後悔するどころじゃ済まなくなる。

「とりあえず、海の家に戻ろう。それが一番だ」

「へえ、貴方たちも当麻の知り合いかね、いや、友だちが多くて良いことだな当麻」

「ま、まあな……」

上条、うまくごまかす。

「あらあら、でも随分と変わった方が多いですね。大柄でがっしりした人もいますし……」

ブチツと神裂さんの血管が切れるような音がしたような気がする。詩菜さん、それは禁句だ。

「それにいかにも軍人さん風の方が学友ですし……」

おおっ、刺さるようなことを言うねえ……

「こらこら、いくら風体がかつくて女言葉でもそんな見た目なんてどうでもいいだろ？」

ここで刀夜さんが大爆弾発言。やばいねえ……神裂さんぶち切れ寸前だったけどレンがフォローに……あれ、墓穴掘ったようだぞ。あゝあ、何か連れてかれちゃった……

「……上条、少し見に行こう」

小声で上条に話しかける

「へ？何でだよ、触らぬ神に祟りなしだろ？」

「いや、ここでレンを見捨てるのは酷すぎる。救出だよ救出」

「・・・乗り気ではないけどな・・・」

と、周りのみんなに少し2人で散歩してくると言っていてこっそりと神裂さんを追い始めた。

数馬SIDEOUT

レンSIDE

やばいですね・・・死亡フラグ立つちゃいましたか・・・

Orz

「お、お許してください神裂さん・・・」

「いえ・・・別に謝られるようなことではありません・・・」

それでもずりずりと襟首を掴まれて引きずられていきます。方向は風呂場・・・まさか僕を溺死させるつもりですか！？と、風呂場に着いたとたん火織さんはそこでストップしました。

「・・・言われてみればこんな所でも風呂はあるのですね。こんな

こと言うのも何ですが最近はずラブル続きでろくに湯浴みもしていませんでした……」

「確かに……そうですね。ずっと忙しいままでしたし……それで僕はどうしたらいいの？ 作戦でも考えた方が良いでしょうか？」

火織さんは軽く首を横に振り、僕にちよいとした重大任務を与えてきた。

「いえ、あなたに頼みたいことは簡潔に言えば見張りなのです。此処の風呂はどうやら温泉と同じく共用みたいですし……」

「ああ……なるほど……」

つまり火織さんが入っているときに誰か男性が入ってきたら火織さんの裸体が……これはすんごく重大じゃないですか!!!!!!

「分かりました、このレン・アクリウス、命をかけてでもこの任務を全うします!!」

「そこまで張り切らなくても良いですが……」

そう苦笑しながら火織さんは風呂場に入ってしまった。

「おっすレンちゃん。何しているぜよ？」

「元春、あなたは出てきちゃ不味いでしょ」

元春は姿が最近、どっかの女優に手を出した野郎アイドルらしくこんな所に出てきたら間違いないくマスコミ沙汰になります。

「ばれなきやいいんだぜよ。それより本題」

「本題？」

「ザザン！ー夏のドキドキ神裂ねーちん生着替えのぞきイベント

！ー！ー」

「あなたは正気ですか！？」

何か爆弾発言が！ー！ー！それはギャグで言っているのでは！？

「・・・見てみてレンちゃん、最近の携帯、カメラ機能がついているんだぜい？」

「聞いてください！ー！ー！そんなことするなんて外道野郎の行為ですよ！ー！ー！」

「ひぐらしのなく頃にのYOUを立体音響でずっと聞いている作者よりはずっと人道的だにゃー！ー！ー！」

「それは今関係無いです！ー！ー！作者も未練がましいですね！ー！ー！」

「それにレンちゃんは神裂ねーちんが好きなんだぜよ！ー！？だったらそのぐらい愛のための行為としての許容範囲だにゃー！ー！」

「そ、それは・・・」

一瞬、マジで任務全うの石が揺らいでしまい、どうしようか悩ん



でしまった。

「おまえら・・・何不毛な会話を・・・」

「はあ・・・」

「「!?」」

後ろかあいつのまにか当麻と光太郎が!!! やばい、今の話を全部聞かれましたか!?

「一部始終を完璧に録音しておいた」

光太郎がそう言うてすつと携帯の録音機能を見せる。ボタンを押すと、僕と元春の音が・・・

「あああああ!!!!!!!」

最悪だあああ!!

「大丈夫だ。編集して土御門の声しか残さないから」

「うおそれはひどくないか神やん!!!!!」

「第一、土御門、お前、確か義理の妹がいたよな? 実はな・・・」

「

光太郎が何かビデオカメラを・・・何をする・・・っ!? な、何ですかその(禁止事項です!!!!!!) な動画は!!!!!!

「ぶっ……！！！！か、数やん……その、動画一体どこで……」

「お前のアロハシャツにこっそりと超小型ビデオカメラを仕掛けておいてな。どんな日常を送っているのかと思えば……あ、兄貴、何するんだよお……」なんて義理の妹にそんな声ださせてなあ

「数やん！！！！それ以上しゃべったらお前をぶっ殺す！！！！！」

そう言いながら光太郎の襟首をつかもうとした瞬間、きしっ……と床のきしむ音が鳴り、元春は一瞬にして忍者のように消えてしまいましたね……端から見れば多分、少年の首を芸能人がしめているとでもなるんでしょうか……

「やつほーおにーちゃん達！！こんな所で何やっているの？」

当麻の母と従妹がこちらに来ました。

「へ？いや……まあちょっと中に入っている人に見張りを頼まれたんですよ」

「見張り？……わっけ分からないなあー中にいるのどうせおにーちゃんの友だちでしょ？だったら一緒に入っちゃってよーまだ料理が出来そうにないからさっさと入っちゃいたいんだもん」

……な、何を言っているの！？や、やばいですね……ここはあの2人に救援を……つていない！！？？5秒前までいたのに！逃げたのかあああ！！！！

「い、いえ僕は風呂に入るには今……せめて中に入っている人が出てから……」

「えー駄目だよー流石に次ぎの次だったら料理が出来ちゃっているよ。絶対に冷めているよ。いいじゃん、男同士なんだし、さつさと入っちゃってよ」

「いや、待ってください!!!話せば分かりまーー嗚呼!!!」

一瞬にして引き戸を開け、脱衣所に放り込まれる僕。そして、そのこの目の前に。

絶対に文章で表現をしておけない火織さんの姿があつた。彼女の表情、啞然。運が悪くも、神裂さんは長風呂派では無かつたみたいです……しかし、僕としてはどうすればいいんでしょう？

「ぶっ……」

鼻血出してぶっ倒れるぐらいしか出来ませんね……

レンSIDEOUT

数馬SIDE

「はい、ちよつとどいてね」

俺と上条は大急ぎで放り込まれたレンの救出のために風呂場の脱衣所に侵入した。念のためサングラスも着用している。

「レン、大丈夫か!？」

それで引き戸を開けると……うん。ちよいとおかしい。レンが鼻血だしてぶっ倒れている。

「こいつ結構純情なんだな……」

「そうだな……」

「2人とも……早く出て行ってくれませんか……」

見ればほぼ全裸に近い身体をタオルで隠している神裂さん、めちやくちや怒っている。やばい、やばい、撤退撤退。というわけで急いで脱衣所から俺たちは逃げ出した。

午後10時38分。

「もうひどいめにありました……」

レンはその後12分ぐらいかかって何とか復活。直ぐに神裂さんに謝りに行き許して貰ったそうだ。今は誰もいない1階で少し離れたところに土御門、上条、神裂さん、レン、俺が床に座っている。

「……ところで今回のエンゼルフォールの犯人ですが……どうやら火野神作という死刑囚兼脱獄囚である可能性高いです……」

「死刑囚が……!?!?」

どんどんみんなは火野神作の話になっていくが……よもこの床下でそいつがいるとは……そしてそいつに対する制裁があるとは……誰も思わないだろうな……

#### 数馬SIDEOUT

実際、火野神作は、海の家「わだつみ」の70cmの幅がある床下に潜んでいた。そいつは床の小さな穴から上条のことを見ていた。

「エンゼルさま、エンゼルさま……」

その声は小学生の様に高く、狂気に満ちている。

「エンゼルさま、エンゼルさま……どうかお聞かせください……」

そいつは木の板に無意識に手に持っている奇妙な形をしたナイフを突き立てて文字を彫っていく。

「エンゼルさま……どうしたら警察から逃げられるでしょうか?」

木の板に書いてある文字には生贄、と書いてある。

「エンゼルさま、それでは今回も生贄を捧げれば助けてくれるのですね？」

木の板にはYesと書かれている。・・・そいつは生贄を誰にするか決めた。

「エンゼルさま、それではあの少年でどうでしょう？」

またもや木の板にはYesと書かれている。決まった。

「分かりました。エンゼルさま、今日もあなたのことを信じます・・・」

そう言って火野神作は、床下にある電流ケーブルを切ろうとした、その時。

ガタッ！！！！

唐突に物音になる。

「ひっ・・・！！！」

それが何か分からないため辺りを見回す。しかし、誰もいない。安心して火野神作が電流ケーブルを切断するため、前をむき直したとたん。

「ぎゃー！！！」

目の前に血だらけの顔の女がいた。それも……彼1番最初に殺害した女が……

「な、何で、お、お前は俺に殺されたはずっ……！！！」

血だらけのその女は四つん這いでこちらに近づいてくる。思わず逃げだそうと後ずさりしたが……何かにぶつかつた。火野神作が後ろを見れば……

「あ、ああああ！！！！！」

そこには4番目に殺したあの幼稚園児がいた。幼稚園児はちょうど火野が刺した動脈辺りから血を出している。そいつは手を前に出し、ゾンビのように火野に近づいてくる。

「ひ、ひやあああ！！！！！」

火野は逃げだそうと、床下の出口に向かおうとするが……それは不可能に近かつた。辺りには、火野が殺した28人全員が、亡霊のようにそこにいた。そして全員が全員。火野を捕まえるかのよう近づいてくる。

「や、やめろ、くるなああ！！！！！」

しかし、彼らは止まることはしない。次第に火野は床下の奥に追い詰められていく。彼はどうすることも出来ず、木の板にナイフで文字を彫りだした。

「え、エンゼルさま……！た、助けてください……！」

大急ぎで無意識に文字が彫り込まれていく。しかし、木の板には無情な答えが彫られていた。

Die、死ね、と。

「そ、そんな、エンゼルさま……！私はあなたのために何回でも命令を聞いてきました……！なのに捨てるなんて……！」

原作ではとてつもない心理戦を展開した火野神作だったが、死者に対してはどうすることも出来ない。そしてついに、5番目に火野に殺された社員が火野の肩に手を掛ける。

「うわああああ……！」

社員に向けてナイフを斬りつける。しかし、それは虚しく空をきる。それが始まりとして、28人の火野に殺された者達が、その張本人をつかみ始めた。

「ああああ……！やめろ……！やめろ……！やめてくれえええええ……！」

しかしそんな願いなどは通用しない。血だらけの亡霊達は全員がニタリと笑い、床下から外に連れて行くこうとする。

「い、嫌だ……！出たくない……！嫌だ、嫌だ、嫌だああああああああああ……！」



ついに発狂した火野神作は、自らの首の動脈付近にナイフを突き立てた。

## 数馬SIDE

下では、惨劇が起きているだろう。しかし、此処にいる者達は俺以外に知らない。何も知らない。今回は、術式難見沢の1つを使用した。その効力は、目標に対して幻覚症状を起こさせ、発狂、自殺に追い込む方式だ。

「・・・・・・・・くくつ・・・・」

この魔術は暗殺に使用するため、一定距離の空間の音はすべて通さない。だから誰にもばれない。

死刑囚の、殺人犯の、脱獄犯の、惨めな最後だった。

ギャグと惨劇が絡み合った海の家（後書き）

「ご意見感想お待ちしております！！！」

**最短で神の力と戦うという奇跡(前書き)**

更新遅くなりました!!!!!!すいません!!!!!!

あと今回、過去3位に入る程ひどいです!!!!!!

ついでに、とある魔術の禁書目録?、放送開始、やったね!!!!!!  
言うのが遅い!!!!by数馬)

## 最短で神の力と戦うという奇跡

### SIDE数馬

どうも、とりあえず、死刑囚を抹殺した数馬だ。俺は今、こつそりと海の家を抜け出し、砂浜の影で血の反吐を吐いている。

「うげえ……」

正直難見沢の後遺症は半端ではないぐらいひどかった。使って少し遅延できるみたいなのでうまくごまかせたが……これはひどい。

「いくら吐いても血が止まらん……」

回復行動は2回はやったのだが……まったく止まらない。止まらない。

「決まりだな……これ2度と使わない……」

もう1度、血反吐を吐く。やっと収まってきたみたいだ……

「あれだな、人を呪えば穴二つという諺と同じか」

「……問1。あなたは何をしている？」

「ぶっ……!!!!」

唐突に横から話しかけられる。ううう……びっくりした……

ってこの独特な口調は……

「……ロシア成教「殲滅白書」のミーシャ・クロイツェフ……」

「問2、何故私の名前を知っている？」

このままじゃ埒があかない。

「問1の答え、血反吐を吐いていた。問2の答え、ロシア成教さんからの任務で色々あったからとしか答えられない」

「問3、何故血反吐を吐いていた？」

「能力者なのに魔術を使ったから」

「……」

話が途切れた……！！！！どうしよう、原作4巻のラスボス相手にどう対処すればいい？！

「……ガムはいる？」

とりあえずフレンドリーな会話から始めよう……

「神裂さん……！！！！助けて……！！！！」

「……」

「……………」

ちよいと全員が集合したわけだが吐血しているのがばれた。不味い、みんなの視線が痛い。

「数馬、あなたは何をしましたか？」

「ノーコメント」

「第1の答え、魔術を使ったから」

「あ、この野郎！！！！」

「ミィシャばらしやがった！！！！」

「何で数やんが魔術使ってたんだにゃ〜？」

「……………」

「そうやって無言でも何の効果もありませんよ」

「……………火野神作が床下にいるはずだ、死体でな」

「……………！？……………」

30分後、火野の死体が床下から引きずり出された。首の動脈付

近から血があふれ出ている。

「・・・・・・・・・・うげえ・・・・・・・・」

上条、少し萎えている。それも当たり前か。周りには警察がぞろぞろと集まっついていて土御門、レン以外は全員が質問されていた。

「・・・・・・・・・・やっかいなことになったな・・・・・・・・」

「それはあなたのせいでしょう」

神裂さんから鋭く文句を言われる。痛いね。

「一体何の魔術を使ったのですか？床下からどうみたって邪悪なものしか感じられませんか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・悪魔術とでも考えてくれ」

「・・・・・・・・・・あまり使いすぎると死にますよ」

「分かっている」

会話がどうにも暗い。この状況は俺は苦手だ・・・・・・・・ましてや血反吐はいた後なのに。

「まあまだ人生には未練が多いから死ぬようなことはしないさ」

「・・・・・・・・・・」

軽くそう言ってみる物のあまり受けなかったようだ。神裂さんは黙ってしまった。……もうこれ以上は心配を掛けたくはないな。

「自爆なんぞ俺が許さん！！！！！！by坂井三郎」

「さつて税金泥棒共も帰ったようだしミーティングでもしますか」

「話の流れが無茶苦茶だろ……今、午前4時だぞ」

上条の突っ込みを無視してさてやろう。

「火野は俺が殺したようなものだからまあいいとして」

「もうそこらへんから突っ込みだらけですけど……」

レン、うるさいよ。

「残念なことに火野は今回の事件の首謀者では無いっぽい。ありやあ多分2重人格だったからもう1つの人格が入れ替わっただけだろう。じゃあ一体誰が首謀者か？」

「今のところ手がかりは無いですね……」

「神裂さん、あんた重要な事忘れてるよ……上条、お前の父親の刀夜さんだが、あの人入れ替わっているか？」



「へ？」

唐突に話を振られる上条。

「実はだな・・・ここに上条宅からこっそり盗んできた家族の写真があるわけだが・・・」

「何で持っているんだよ！？ってどうか何人の家に盗みに入っているんだ！！？」

「大丈夫だ、やましいものはあつたが内緒にしておいてやる」

「何でそんなことを言うかな！？」

不幸だ・・・！！と泣き叫んでいる上条はほっぽっておいて話を再開。

「この写真の左上を見てくれ」

上条をのぞく全員がそこに見入る。そしてすぐに驚愕の表情に変わる。

「これは驚いたにや・・・上条の父親だけ入れ替わっていないぞよ」

上条、すぐに写真を見る。

「嘘だろ・・・父さんが・・・」

一瞬にして顔面蒼白になる上条。現実が最悪なことになったときの俺のような顔になりやがった。

「こうなると・・・当麻の父親が今回の首謀者となることに・・・」

「しかし、上条当麻の父、上条刀夜は一般人。到底、魔術の術式を形成することは出来るわけ無い・・・」

全員が全員、混乱してしまう。そこで今回の事件の発生理由を説明。

「確かに、上条刀夜は魔術なんかは出来はしない。そんな魔術道具も持つてはいないだろう。しかしな、上条刀夜は世界中からお土産、もとい変な物を買ってきたはずだ。実際、家に行ってみたらあったからな。」

土御門、1度、確かどんな道具でも小さな力を宿しているって言ったよな？そしてそれらが大量に集まれば強力な術式を形成出来るとも・・・」

「数やんの言っていることは当たっているがそんなことしゃべった覚えはないぜよ？」

あつ、そう言えばそうだな・・・しかしどうでもいい。

「そんなことはどうでもよろしい。重要なのは大量の土産が偶然にも魔法陣を形成するような配置になってしまっていたら・・・どうなる？」

それに答えるように神裂さんが1番深刻そうな顔をして言う。

「それでは……このエンゼルフォールは、上条刀夜の偶然から始まったというのですか……」

「ビンゴだ」

次に上条が聞いてくる。

「それじゃ、そのエンゼルフォールで堕ちてきた天使っていうのはどこにいるんだよ？」

あれ、原作で上条そこまで分かってたっけ……まあいいや、都合が良い。

「それについてはここに機密事項であるロシア成教の殲滅白書メンバー表がある」

「数やんはよっぽど死にたいんだにや……」

土御門、突っ込み入らない。

「ミーシャさん、あんたフルネームだとミーシャ・クロイツェフだったよな？」

「第1の解答、Yes」

「しかし、このメンバー表にはミーシャではなく、サーシャ・クロイツェフという名前であんたの写真が載っていた」

「……?!?」「……」

俺の一言で全員がミーシャを見たとき、そこに彼女はいなかった。

「か、彼女はどこに!?!」

「あそこだ、畜生め!?!?!」

彼女は瞬間的に砂浜にいた。オーラも何か異常である。大急ぎで全員が近づぐ。

「どうするんですか、光太郎?何か変なことになってきましたよ」

「知ったことか、こうなったらやるしかねえ」

俺はさつと回転式拳銃2丁を取り出す……が、直ぐにしまう。

「数やん、何でしまっちまうんだ?」

土御門、口調がマジになっている……

「これがあると能力使用が怠るからな、縛りだ、縛り」

「あまり勝手に縛りなどは作って欲しくはありませんが……」

神裂さん、腰にある七天七刀を構えながらの文句は少し怖いよ。

「というわけで作戦、土御門、上条、一時撤退及び上条両親の新家にあると思われる魔法陣の破壊、ちなみに残り魔術式、完成するまで時間30分。レン、俺、神裂さん、前方の目標破壊。以上」

「あれ?術式が未完成だっていったか?」

「そこを気にするんじゃない、シスコン軍曹！！！！！」

土御門、すこししょげる。

「何で俺まで後方支援なんだよ！？」

上条、抗議。あぁめんどくさい。

「上やん、ありやお前が相手するのは無理だ」

そう言いつつ土御門は上条を引っ張っていく。さて次だ次。

「フォーメーション、神裂さん、レン、攻撃、俺、守備」

「何でそうなるんですか、光太郎この野郎！！！！！」

レン落ち着け。

「だってお前の方が確実に攻撃力高いじゃねえか！！！！ロシア魔術師、多分45人をぶちのめした野郎が！！！！！」

「だから僕は使いたくないんです！！！！あれを使うのはもう禁忌！！！！！」

「さっきから何話しているんですか！！！！きますよ！！！！！」

「ごたごた話している間にサーシャもとい天使、いや原作での正式名称、「神の力」は背中から水翼の剣山をいくつもはやしていた。

「ういtrj」

そして神の力が人外の言葉を話したとき水翼の剣山が一気に飛んできた。

「このくらいだつたら重力変換も楽だ楽」

複数目標全部を防ぐのは難しいが、自分達に必中しそうなものを防げばいい。俺は神裂さん、レンに落ちてきそうな23個の水翼を重力をおおきくして叩き落とした。

「神裂さん!!レン!!攻撃しろやこの野郎!!!!」

「分かっていますよ!!!それでは、唯閃とともに、1つの名を・  
・  
・

Salverre000!!!!」

神裂さん、突っ込む。レン、お前も早くしろ!!!

「レン!!あなたは後方支援をお願いします!!!あなたは攻撃系統の魔術は不可能でしょう!?!」

あれえ?神裂さんも知らない?じゃあどういう・・・レンを見てみると、何か役立たずと遠回しに言われた気がしたのか決断をした顔をしている。

「いえ、僕もやりましょう・・・」

「何をバカなことを・・・」

神裂さんが言い終わる前にレンの手についている指輪が光る。・・・  
・あんな物、魔術用具にはないぞ!?

「さすがに今回はネロじゃ厳しいですから・・・あれと・・・これ  
れも使いましょう」

我が祖国に敵対するすべての暗愚

その暗愚は地獄の水に飲まれ

息の出来ぬ間に消え去るがいい

ジブラルタルの守護をする

もの

ここに現れ、

我が身を守れ!!!」

何だあの呪文詠唱!?!あと何か魔法名言っていない!?!?!?!?!  
ジブラルタルって何?それと、も!?!まさか複数!?!?

「ついでに、

ヤコブからの手紙 第5章1節から3節を抜粋！！！！

聞け富める者よ

汝らの上に来らんとする

苦難のために泣き叫べ

汝らの財は朽ち

汝らの衣は膿み

汝らの金銀は錆

びたり！！！！

そ

の役目を負う者よ！！今こそ出現せよ！！！！」

たちまち砂浜に2つの魔法陣が描かれ、海水がそこに集中して2体の巨人を形成、出現した。・・・どうええええええ！？何か2体も出しやがった！！！！予想外すぎる！！！！！！

「レ、レン！？あなたは確か・・・」

神裂さん、愕然。

「今はどうでもいいです。チャーチル、ゴリアテ、目標はあの少女です。いくらでもぶちのめしても、構わない！！！！神裂さん、突撃を！！！！」

「・・・分りました」

神裂さんは俊足を生かして先に突入。巨人2体はレンの命令に従順に従い、突撃を開始する。神の力も対抗して攻撃するが・・・巨



人はいつこうに命中しようが、お構いなし。神の力に攻撃し始めた。

「すげ………」

神の力に巨人は見かけによらず滅茶苦茶素早いグーで対抗。相手にも相当効いているのか、神の力の身体がぐらつと揺れる。間髪入れずに神裂さんが斬り込む。この連係攻撃のためか神の力は守勢にまわっている。

「当たり前です、チャールスは1943年にソ連の魔術師の巨人に対抗して、ゴリアテはアメリカのインディアン魔術師の30体の巨人に対抗して作られましたから……1762年に……僕が自ら」

横にいるレン、表情が余裕だ。……1762年？

「え？」

今とんでもない単語が……

「とりあえず、30分間、持たせりゃいいんでしょ？」

話ずらしたぞ……

「やつ、それはそうだが……」

「とつとと片付けちまいますよ！！チエックメイト！！！」

瞬間的に2体の巨人がロングソードを手に所持する。何か大技が来そうなので神裂さんも少し離れる。

「Suicidal case!!!!」

レンがそう叫んだとたん、神の力に向かい、ロングソードが振り下ろされる。

ゴガギイイイン!!!!

凄まじい音が鳴り響く。一瞬、閃光が散る。光が収まり、見てみれば・・・

「おふおえ f h f 愚劣 god」

人外の声とともにロングソードを結界か何かで防いでいる神の力がある。

「やべえ、失敗？」

「いえ、そうでもありませんよ」

そうレンが言った瞬間、神裂さんが神の力の背後に飛び出した。狙うは結界のためにから空きになっている背後。

「はっ、アアアアアアア!!!!」

神裂さんが、神の力に、ずばっと斬りつけた。

「…………でも峰打ちかよ…………」

神裂さんは……とどめを刺さなかった。しかしそれでもダメージはある。それも強力な。

「あの人も、色々不運な人でもありますからね……」

「そうだな……」

聖人と呼ばれる彼女。その人生には、実は他人の血が何滴も流れている。そのたびに彼女が味わった苦痛は相当な物だろう。

ズドオオオオオオオン

「「「!?!?!」」」

唐突に起きる大砲声。見れば海の家から光の砲弾が東に向かっていく。

「土御門……やってくれたか……」

「あゝあ、救急箱でもいりますかね」

「レン、用意しているのか？」

当たり前でしょう、そう言いながらレンは神裂さんを見ている。神の力は、その術式を破壊されたためか、ゆっくりと、光の塵となり消えていく。その様子はある意味、神秘的であった。

「火織さんも喜んでいますかね」

「あの表情じゃそうだろう。何せ、誰も死なずに事が済んだから  
な……」

実際、神裂さんの表情は、嬉しそうであった。

**最短で神の力と戦うという奇跡（後書き）**

ごめんなさい、ごめんなさい、本当に展開早い。何もかも中間テストが悪い。．．．すいません更新また遅れるかもしれませぬ．．．

o r z

ご意見、ご感想、お待ちしております!!!

戦が終われどいくらでも悲劇を作るのが作者の趣味（前書き）

更新遅くなりました！！！！すいません！！！！テスト終わったんで余裕が出来るはず！！！！

## 戦が終われどいくらでも悲劇を作るのが作者の趣味

辺りは静まりかえり、「神の力」は消滅し、砂浜には3人の猛者がいた。しかし、そのうち2人は1人に疑問の目を向けており、その1人もどう説明するか分からなかった。

「質問です、レン、あなたは一体何者ですか？」

神裂は冷静にそう質問する。しかし彼女の奥底では疑問の渦が回っていた。彼は、彼はあんな化け物を出した。確かに、それは「神の力」との戦いを有利に進めることが出来た。しかし、あのような魔術は、短時間で複数の、しかも凄まじく巨大なゴーレムを出現させられる魔術は、レンには出来ないはずだった。少なくとも必要悪ネセサリウスの教会ではそう言っていた。

「.....」

レンは何も答えられない。彼は前話において堂々と、禁忌だと言っていた魔術を使ってしまった。あの魔術はこの世界では使っていない。彼は思惑した。この場をどう言い訳するのか。じゃなければ、自分はまた消さなければならぬ、この人達を。

「1762年、この年は、フレンチ・インディアン戦争のまっただ中。その時に自らが作った、お前はそう言ったよな？」

数馬は先ほどレンが言ったことについて正確に情報をのべ上げる。余計なことを、そんな目つきで連は数馬を睨む。

「おい、おい、そんな目つきで睨むな。自らが話しちゃったこと

だろう?」

数馬の言い分は正論であり、レンもそれは分かっているので何も言えない。しかしこれではまったく話が進まない。神裂が再度質問する。

「もう1度聞きます。あなたは・・・何者ですか?」

すると、レンも観念したのだろう。重い口を開き始めた。

「僕は・・・此処の世界の人間じゃない・・・」

神裂は少々驚くも、数馬としては読者の皆様でも容易に想像がつくことだったので驚きはしなかった。・・・のだが、その後の内容はあまりにも、むごかった。レンは淡々と話し始める。

「僕の世界の祖国、イギリスでは、1760年、北米植民地にてフランスとの対立を境に、魔術に力を入れ始めました。フランス側はインディアンを味方に付けていた、それに対する対抗手段の1つだったんですよ。1761年、フレンチ・インディアン戦争が勃発。圧倒的優勢なインディアン軍に対して、とある兵器が作られました」

話している内にレンの表情はどんどん暗くなっていく。いかにも話したくない過去を話すようだ。実際その様だが。

「名称、Humanoid battle weapon。通称、HBW。人型決戦兵器。人体の改造、主に心臓、大脳など。さらに血液の成分変化により製造可能。まあある種の人体実験で作られるわけです。これにより、常人には不可能な能力を手に入れられ、なおかつ、長命になります。それが第1線に100人投入されたとき、



フランス軍を壊滅せしめました・・・」

徐々に話の先が読めてくる。

「それでも、インディアン軍もフランス軍に頼らず、長年育成し続けていた魔術師達を投入、戦線は膠着状態になります。で、イギリス軍はさらに強力なものを1体、製造しました。それが、Humanoid ultimate weaponです」

確実に話が読めるだろう。

「それが、僕です」

「・・・・・・・・・・」

「ですが、この兵器、作るにしても人材がいないのでから。最終的には貧乏な農民や、浮浪児を連れさらって無理矢理改造されたんですよ。僕の場合は前者の農民の子供だったみたいですが・・・」

神裂、数馬は、何もしゃべることが出来ない。此処でしゃべったとしても何と言葉を掛けて良いのか分からないのだ。

「正式名称、Destroyer。破壊者つて意味です。その名の通り、僕は製造された後、すぐに第1線に投入され、大活躍しましたよ。人殺しという、大罪のおかげでね・・・・・・・・・・」

レンは明るく言ったつもりだろうが、その声には幾分か、苦しみが混じっていた。

「・・・・・・・・その甲斐あってか、イギリスはフレンチ・インディ

アン戦争に勝利しました。あのときはイギリス女王から褒められたのが一番うれしかったですよ。あの頃の僕は、少々、狂っていたのか、人を殺すことに抵抗を持たなかったのですね、何だ、こんな楽なことです。賞賛をうけられるのなら、これからもやり続けようという考えが僕にはあつたんでしょね」

「しかし、その後、破局が来たって言うのか？」

数馬が話の区切りで質問する。レンは破局という言葉を聞くと、苦虫を噛み潰したような顔をしてまた話し始める。

「ええ……その140年後、第2次世界大戦が勃発する訳ですが、その時の戦い、僕の世界のイギリス軍で何と呼ばれているかわかりますか？イギリス滅亡戦争ですよ。イギリスに対し、米ソ中独仏西伊が宣戦布告ですよ。信じられないでしょう？1国に7カ国が攻撃してくるんですから。無論、イギリスは全国力を結集させて反撃しましたが……数は力なんですよ、最終的にロンドン間近まで上陸、侵攻され続けましたね」

レンの声が悲しみに満ちたようになる。大切な者を失ったような、そんな感じの。

「大戦中、僕や他の人型兵器は各地を転戦し続けました。そのたびに1人、また1人と死んでいく。まだ、8歳の子供だっていたはずですよ。そんな人達がみんな死んでいく。これほど、辛いことなんて無いですよ……で、その時の僕は、狂ったように仇を討とうとしてました。それこそ、何人も何人も、殺して殺して殺して殺して……」

徐々に危なっかしいことを口走っていくレン。数馬としては見て

るだけで不安になっていく。

「それでも、仲間は死んでいく、それを許せずに、また殺す、それでもまた死んでいくので殺す、殺す、何回でも殺す、いくらでも殺す、殺す殺す殺す殺す。まさしく負のスパイラルです。これが永遠に続くのかとも当時は思っていました。・・・けど、最後は誰も仲間がいなくなって、そのスパイラルも作動しなくなって、結局はもう何もしたく無くなりましたね」

レンは端から見れば滅茶苦茶ストレスがたまっているようにしか見えない状態になっていた。一緒にいるだけで気分が重くなるような感じだ。

「もう、僕が動くことさえも出来なくなったとき、イギリス政府は僕を捨てることを決定しました。ロンドン陥落寸前、僕をイギリスの国会議事堂に放置して、味方は誰もいなくなって、周りには300人も敵兵。何もかもあきらめて死のうと思いましたが、そうは問屋が卸さないっていうのか・・・」

「大砲が命中して、衝撃で転移したのか？」

「ビンゴです。思いつきり衝撃を感じた僕は、10分間、意識が無く、目が覚めたときにはロンドンにいました」

そこまで言うと、レンは口を止めた。数馬も神裂も何と云っているのか未だに分からない。黙ったままだった。

「ははっ、やめてください、そんな、申し訳なさそうな顔なんか僕がやってきた人生ですし、深く考えなくて良いですよ。・・・それよりも、当麻や元春が心配ですから早く行きましょう」

レンはそう言うと、すつと立ち上がり海の家に走って行ってしま  
う。後に残された数馬と神裂2人は苦々しい気持ちが残っていた。

3時間後

もう日の出寸前、一睡もしていない。睡魔に負ける寸前の数馬が  
いる。それでも辛抱して戦の後処理をやり終わった。上条、気絶し  
ていたので学園都市の病院に直行。

「負傷者、上条、複数打撲。土御門、出血多量、重傷」

「土御門は大丈夫なんでしょうか……」

不安な表情に変わる神裂。確かにあの出血多量は半端ではない。  
常人だったら即死である。そんなのに、病院行かず、自力で休養中。

「元春は大丈夫でしょう、不死身の男ですから」

「どこの新造人間だよ……」

若干、元ネタがわかりにくい突っ込みをする数馬だがレンの考え  
と同じだった。土御門「絶対生きて変える男という方程式は絶対に  
変わらないのだ。」

「それも、そうですね」

何となくおもしろかったのか、少し笑う神裂。そんな笑顔が拝め  
たので話は変わる。

「ところで、光太郎、唐突に言いますが僕、学園都市にこっさり侵入することにしました」

「唐突すぎるな……」

初っぱなから突飛すぎる話だ。あいかわらず作者の文章構成力のなさから来るものであるう。

「とりあえず何で？」

「それは秘密ですね」

じゃあ何で言ったんだこの野郎と、怒鳴りつけたくなる数馬だが大人の対応として、スルーする。

「何で学園都市に来ることだけ言っ？」

「いや、まあめんどくさいとき利用できるようにですよ」

「絶対に協力しねえ」

「ひどいですねこの野郎……」

美女の頼み事以外にはやっかいなことには関わらない数馬である。

「数馬、そう言わずに手伝ってあげてください」

「神裂さんの頼みだからな。分かったよ」

つまり美女の頼み事だったら十中八九言つことを聞くわけである。数馬「人間のくず」作者という方程式も絶対的である。

「何ですかこの差別感・・・」

作者としては前話で活躍させすぎたので今後十数話に渡ってひどいめにあつて貰つつもりである。

「それはともかく、今から来るのか？」

「いえ、少し日をおいて準備してから来ますよ」

「そうか・・・」

そしてその10分後、彼らは解散、それぞれの場所に帰還した。

（2時間後）

「帰つてきたぞ学園都市！！！！ちなみに一睡もしていない！！！！」

自らのアパートに帰ってきたとたん、第一声がこれである。目の前には数話前に部屋を貸した姫神がいる。

「何をやってきたのかがすごく気になる・・・」

「姫神、気にしなくて良い」

じゃあ何で言ったのか（2回目）、姫神はそんな顔をするがこれ

と行ってとがめることもしなかった。

「どうするかな・・・出かけるか・・・」

すくつと立ち上がる数馬、それに姫神が一言。

「その発想のおかしさは最早そうい星に生まれきたとしか思えない」

「・・・行つてくる・・・」

姫神のさつくという言葉に少しめげる数馬。それでも持ち直すと姫神も出かけたかもしれないと思ひ聞いてみる。

「姫神は行く?」

「何故か頭の中で行くなという天命が来たからやめておく・・・」

姫神の電波発言は軽くスルーし、行かない旨を聞くと数馬はドア開き外へ出た。

く作者としてはあの戦 姫の美女化した信長が好（ry）

「今、8月29日・・・やったぞ、まだ1日半も休暇がある！

!」

そう狂喜しながら第6学区にやってきた。数馬としてはゲーセン、

その他諸々で遊び倒す魂胆である。

「いや〜神様（といっても成美ゆい似の女神だが）も見捨てちゃいねえな」

しかし、作者としてはそんな世の中甘くないと言いたい。

「あれ、数馬、何でこんな所にいるのよ？」

「げ、あの変態紳士ですよー！」

即刻、御坂美琴&白井黒子が登場。

川Orz 御坂美琴はともかく何で白井黒子までいるんだよ、間違ひなくジャツジメントの仕事につきあわされるだろうが・・・と滅茶苦茶落ち込む数馬の図。

「黒子・・・さすがに会って早々変態紳士はひどすぎると思っただけど・・・」

「しかし、図星のようですよ・・・あの反応は」

余計な濡れ衣（といっても当たらずとも遠からずのような・・・）を着せられてはたまらないので急いで反論する数馬。

「失敬なこと言っなこのレズ野郎！！！！」

前言撤回すると暴言である。

「なっ！！！！何を言いますの！！！！」



出会って23秒で口論開始。そして10秒で気力が果てる。

「もうやめよ……」

「そうですね……」

正直、書くのも嫌になるほどの罵りだったためすぐに2人はくつたくなってしまうている。

「あゝあ、何でこうなっちゃうのよあんたらは……」

御坂はあきれかえってしまっている。そりゃそうであろう。

「言わないで欲しい……ところで何でこんな所にいるんだ？」

「ああ、ちょっと夏休みも終盤だし、友人誘ってどっか遊びに行こうと思って。あんたもどう？」

「……なっ!?!?」「」

数馬、白井黒子とともに御坂の一言に驚愕。正直波乱な予感しかないという話である。数馬さあどうする。

ちなみにこの決断次第では碌なことが起きないかもしれない。作者の都合にもよるが。

戦が終われどいくらでも悲劇を作るのが作者の趣味（後書き）

ご意見感想お待ちしております!!!

めんどくさいことは避けたいが避けられないジレンマ(前書き)

更新遅くなりました!!!!!!

めんどくさいことは避けたいが避けられないジレンマ

前話では御坂美琴が急に数馬と一緒に遊ばないかという誘いで終わった。で、今の状況カオスであった。

「お姉さま!!!何でこんな変態紳士をお誘いになるのです!」  
「？」

「黒子、あなた・・・さすがにひどすぎるわよ?これでも数馬にはあなた2度救われたでしょ?」

現に白井は銀行強盗、テロリスト狩りで九死に一生を得ている。

「そ、それはそうですけど・・・」

御坂の指摘に言葉を詰まらせる白井黒子。実際に救われているのは確かである。

「いや、別にあんときはこっちも迷惑かけたし・・・救ったって言うほどのものじゃない」

しかし数馬としてはたいしたことしたわけではないので否定する。彼には珍しい謙遜である。

「別に謙遜しなくてもいいんじゃない?あなたがいなかったら黒子もここにはいないはずだし」

「お姉さま、それはさすがに大げさではないのです?」

さつきから数馬のことしか褒めていない御坂に食ってかかる白井。なまじ悔しさが感じ取られる。

「確かにここにいないっていうのはおおげさかもしないけど、それでも相当なやばいことになるのは分かっているでしょ？もしかしたら片腕無くなっていたかもしれないし」

ちよいと怖いことをいう御坂に白井も黙ってしまう。しかしあの時のテロリストどもだったらやりかねないことである。思えば命がけの戦いであつたのだ。それを思うだけで数馬は思わず身震いする。

「まあそんな話はやめておこう。今さらほじくり返したって意味はない」

そう言つて話題は誘いのこととなる。

「いや、私の友達、佐天涙子さんと初春飾さんっていうんだけど、その子達とセブンスミストに買い物行くんだけど・・・あんたもどう？」

「お姉さま・・・本当にお誘いになるので・・・？」

いまだに不満げな白井だがそれは無視する。

「いや、さすがにせっかくの友達との買い物におれが入り込むわけにはいかんだろ？」

そう数馬が言つと、御坂はつつすらと頬を赤らめ、ぼそぼそと言い始める。

「そ、その・・・あいつに・・・上条に何か買ってやりたくて・・・この前のお礼も兼ねて・・・」

「じゃあ俺帰るわー」

惚気には付き合っていられないのでそっごくBダッシュで帰ろうとする数馬。

「あつ！・・・ちょっと待ちなさいよ！・・・黒子！・・・！」

「・・・はい、はいですの」

しかし、白井のレポートにはかなわず、ものの5秒で捕縛される。それでも数馬は抵抗しようとするので白井に首筋に手刀を1発突っ込まれる。

「ぐぼげえ！・・・！」

手刀は結構痛い。

「まったく、往生際の悪いことですの・・・」

「黒子、お疲れ。で、あんたはあいつの友人だから何かあいつが好きなもの知っているはずよね？教えてくれない？」

それだったら上条本人に聞けばいいじゃないかと思ったがツンデレにそれを聞くのは愚の骨頂と思い、遠慮しておく。

「・・・何かあったか、あいつに」

「何でもいいのよ、とにかく思い出しなさいよ」

と言われても思いつかない。原作にはあいつの好物が書かれていた覚えがない。作者が見落としているかもしれないがいまさらそんなこと調べている暇はない。

「……………あ、あった」

「何よ？」

ふっと思い出したことだったため、まったく確認もせずに数馬は言ってしまった。

「寮の管理人のお姉さん、代理でも可」

一瞬にして3人、全員が黙りこくってしまう。数馬もしまったと思っただが後の祭りである。

「ふざけてんじゃないわよ…………？」

御坂、頭に血管浮かべてマジの電撃をくらわせる準備を開始。命の危険を感じる数馬。逃げようとしたが。

「逃がしませんわ」

白井に阻まれる。

「ちょー！！お前何するんだよ！！！！」

「今のお姉さまから逃げたら町中が大変なことになりますので……」

・・・」

それもそれで恐ろしいがまともにくらったら死んでしまう。冗談ではないので強行突破を・・・するまえに。

「おりゃあああ！！！！」

電撃が複数飛んでくる。・・・数馬、今回でご臨終か？

「冗談じゃない！！！！！」

ここで死ぬのはどうしても嫌な数馬は複数、実際は6本、の電撃をギリギリのところかわす。ちなみに後ろでは白井がテレポートできずに直撃している。

「ぎゃあ！！！！！」

短くも思いつきり苦痛が伝わってくる

「白井！！！！！」

見てみれば体中焦げている白井。生きていることを祈る。周りでは唐突に発生した電撃に驚愕して全員逃げてしまっており、助けは求められそうにない。もっとも、レベル5に楯つこうとする奴もいないと思うが。

「お、落ち着け御坂！！！！今のは上条の好みのタイプだ！！！！冗談ではない！！！！現に本人も言っていた！！！！だから勘弁してくれ！！！！！！！！」



しょうがないので必死の謝罪をする数馬、あまりにも哀れである。しかし、御坂も少し落ち着いてきたようだ。

「そ、そうね……」

確実な死亡フラグを避けられたことに感謝する数馬。白井はまだ焦げている。

「いや、しかしだな……本当に上条の好きなものなんて知らないぞ？あいつ何でも食えるものだったら大喜びしちまう」

「どんだけ大変な生活なのよ……」

呆れかえる御坂。白井はまだ焦げている。

「とりあえず……その体でも捧げた……」

ズドオン！！と電撃を食らう数馬。女性の前じゃ言ってはいけないだろう普通。

「何馬鹿なことやってんのよ！！！！！！」

「すみません……」

弱めにしてくれてはいたのか真っ黒焦げにはならなかった。それでもすっごく痛い。

「……駄目だ考え付かん。ちよつと道中で考えるから待っていてくれ」

「そう・・・頼むわよ」

時間制限つきだが地獄から逃れられ安堵する数馬。にしても上条の好きなものっていったい何だろうか。白井はまだ少し焦げているが何とか復活している。

「ひ、ひどいめにありましたわ・・・」

「ん、お疲れ」

そっけなく返事を返す数馬、それが電撃を喰らった人に対する返事かと思うとひどいと感じる。

「・・・お姉さま、結局この方も連れて行くので?」

「そうよ、何か文句あるの?」

「いえ・・・別に」

すこしすこみをかけて文句を一切言わせないようにする御坂。それにあっさりと屈したのか白井はまたもや何も言えなくなってしまふ。そんなちよつと怖い雰囲気の中。

「おーっす!!御坂さん!!白井さん!!」

元気で勢いのある女性の声が聞こえてくる。見れば30m程先に佐天涙子がいた。隣には初春飾も見える。

「ああ、佐天さん、初春さん、こつちこつち!!」

御坂が手を振りながら返事を返す。すぐに佐天と初春は近づいてきた。

「いあゝ遅れてごめん、ごめん。ちよつと初春を待ってたら遅れちゃって」

「何言っているんですか佐天さん!!!佐天さんが道中でスカトめくつたりなんかしたかたアンチスキルに尋問されたんじゃないですか!!!」

しよっぱなから元気な雰囲気をばらまく2人。でも佐天のやっていること犯罪だと思つう。

「まあまあ、それはもう勘弁してよ。それにしても、なんかここだけ人がだれいないんで御坂さん達をあつさり見つけられましたよ。いったい何があつたんですかねえ・・・?」

佐天の疑問に御坂は目をそらす。さすがに自分が原因とは言えないだろう。答えに窮しているとき、初春が数馬の存在に気付いた。

「あれ?御坂さん、この焦げている人だれですか?」

御坂はここぞとばかりに即答する。

「ああ!!!そいつは前、話していた奴よ。数馬光太郎っていうんだけどね。ちなみにレベルは4よ」

レベル4と聞いた瞬間、初春が目をきらめかせる。

「ええ！！レベル4ですか！？だったら相当な名門校に行っているんですか！？」

ずんつと数馬にマジかに近づいて質問する初春。正直期待したような答えは数馬には持っていない。

「い、いや……普通のところだぞ……」

数馬の回答に失望したような顔をする初春。何もそこまで落ち込まなくてもいいだろうとは思わずにはいられない。

「そうですか……」

「初春、さすがに高レベル能力者の全員が名門にいつているわけじゃないんだからさあ……」

佐天がフォローに入るがなんか悪いことした気分になってしまったため、代用としてあるものを取り出す。

「ああ、でもフィンランドの国家勲章ならあるぞ」

「……ええ！？」「……」

全員、めちやくちやびっくりする。そりゃ勲章を持っている高校生なんていないだろう。

「ほれ、これ」

服の下につけてある勲章見せる。御坂達は興味津津で見ている。

「うわぁ・・・すごいですねこれ!!どうしたんですか!!?」  
初春、さっきの落ち込みようとは一転して大喜びである。

「へえー勲章ってこんなものなんだ。はじめて知りましたね」

「そうね、でもなんであんたが持っているのよ?」

「そうですね、何故ですか?」

この勲章、実際は秘密裏に贈られたものである。ロシア魔術師と大決戦やったなんて言えないし、言ったとしても信じてもらえないだろう。数馬はまあ新種のウィルスを発見したからとお茶を濁しておいた。

「すごいです!!数馬さんは意外とエリートなんですね!!」

「そ、そこまで大したものじゃないぞ」

「そうやって謙遜していますけど本当は内心自慢したいんですよ?」

「なっ・・・」

佐天のからかっているような指摘にちよいと凶星だった数馬は狼狽する。それを見て佐天は少し笑ってしまう。

「冗談ですよ、冗談。別にそんなこと思っていませんって・・・  
ところで御坂さん、この人はどうするんですか?」

「ああ、こいつにはちょっと頼みごとがあるからついてきてもら  
うわよ？荷物運びにもちょうどよさそうだし」

最早道具扱いではないかと不満な数馬だが電撃をまた食らいたく  
ないので言わないでおく。

「ああ、確かにそれはいいですね。結構今日はいろいろ買います  
し。あ、でも数馬さんに申し訳ないですかね・・・」

「いや、俺はまったく問題じゃないぞ？どうせフィンランド帰  
りで暇だったし」

「あなたはいったい何をいつもしているんですの・・・まあ  
いいですわ、結構時間を食ってしまいましたし、早く行きましょう」

「そうね」

そう言って御坂達はセブンスミストに歩き始めた。

セブンスミストにはとにかくいろいろなものがそろっている。洋  
服からはたまた何かのはく製までなんでもござれだ。

「本当にいろいろ買っな・・・」

「すみません、数馬さん・・・」

紙袋を10個持っている数馬に初春が申し訳なさそうに謝られる。

「いや、大丈夫だ。こっちもついてきているんだし、これぐらいはしないとな」

「数馬さん!!!こつちのも持ってくださいーい!!!」

佐天が次の紙袋を持ってくる。

「他にも買うのか・・・?」

「いや、それが白井さんが相当買い込んでいて・・・」

見れば白井はなんかすごく過激な洋服を大量に買い物かごに入れている。・・・あれだけはどうしても持ちたくないと思う数馬。

「勘弁してくれないかな、あんなもの俺が持っていたら変態扱いされちまう・・・」

「いやぁーすみませんねえ本当に」

御坂はというと上条に何か買いたいのかいろいろ小物のところを見ている。・・・相当迷っているようだ。

「良いの見つかったか?」

「駄目、なんかいいのがないのよねえ・・・」

そう言いながら御坂は皿などを見ている。数馬としては御坂が上条と惚気られるようなものがいいと思う。

「・・・だったらこれはどうだ？」

そう言っただけ数馬はすつとペアカップと取り出した。模様は双方、赤と青の星が描かれている。

「え、ペアカップ？」

「やっぱ上条にお礼といってもやっぱり御坂も嬉しいようなものがいいたろ？ だったら上条とおそろいのコップみたいなものがベストだと思っぞ？ 何かいかにもカップルみたいな感じでいいし・・・」

「な、何言っているのよ!!!」

御坂は赤面してローキックを数馬にくらわせる。

「ぎゃあああ!!!」

2mぐらい吹っ飛ぶ数馬。

「ば、馬鹿じゃないの!? なんであいつとカップルなんか・・・」

そう言いながらも内心嬉しそうです。それを持ってレジに向かって行ってしまった。数馬は激痛に耐えながらもゆっくりと立ち上がる。

「ひどいな・・・ローキックはないだろう・・・あれがツンデ



「しつてもものなのか・・・？」

「一番被害受けている数馬としてはこの仕打ちはないと思っていた。

その30分後、全員が目当ての物を買終わって、セブンスミストから出てきた。数馬の両腕には合計16個の紙袋がぶら下がっている。

「重いな・・・。」

御坂はペアカップを大事そうに持っている。どことなく嬉しそうである。

「御坂さん、嬉しそうですね・・・何買ったのかな？」

「佐天さん、そういうのはあまり詮索しないほうがいいぞ？」

「わかっていますよ、しかし御坂さんにも春が来たのかなあ・・・。」

ぶつちやけ当たっていると思えるのだがそれを考えるとある意味苦々しい気分になってしまう数馬がいる。

「お姉さま、それはなんですか？」

「あつ、えつとこれは・・・。」

御坂も言い訳に苦しそうである。白井は空気を読まないのか。

「さて次はどこ行きます?」

佐天が助け舟のように話題を皆にふる。

「……ゲーセンは?」

「お姉さま……またそんな庶民的なところへ……」

白井の指摘に御坂は言い返す。

「い、いいじゃない、ほかにいくとこないでしょ?」

「確かにそうですね、まだ結構時間余っていますし……最近面白いゲームが出たらしいですし行きませんか?」

「で、ですが……」

白井がまだごねるがそんなことお構いなしに御坂達はゲーセンに向かってしまった。

「あ、私を置いて行かないで下さいですの!!」

どことなく皆、私にだけ冷たい気がしますの……と白井は感じられずにはいられなかった。

「これですね、これ」

ゲーセンの中で佐天が指差した先にあつたのを見た瞬間。瞬時に初春、白井、御坂、数馬が感想を述べる。

「これはちょっとどうかと思いますの……」

「そうね……」

「怖そうですね……」

「ちょっと学生にやらせるのは問題があるだろ……」

それはあまりにもグロテスクそうな雰囲気をかもしだしているシューティングゲームの類だった。ゲームセンターの3割の場所を陣取っていて周りには暗幕がたれている。ゲームタイトルは「ゾンビ地獄」と安直な名前である。

「ここに置いてあるアサルトライフルの形をした銃で画面に向かって射撃するみたいですね。なんか立体映像でゾンビが襲ってくるんですごくリアルな恐怖を味わえるとか……!」

暗幕の入り口に置いてある2丁ほどの銃をとりながらのりのりで説明する佐天だが、誰一人乗り気なやつはいない。

「佐天さん、やめましょうよこんなゲーム……!」

初春はもうビビりまくってしまっている。隣にいる御坂と白井も遠慮しがちだ。

「えええ？いいじゃないたまにはこういうゲームやってみたって言う人いないの？」

佐天の問いにYESと答える奴は誰一人としていない。普段、御坂、白井、初春、佐天だけだったら佐天はあきらめてくれただろう。しかし今日はイレギュラーがいる。

「数馬さん、やってみませんか？」

「え！？なんで！！」

数馬としてはシューティングゲームは好きだがこんなホラーと混じったものなんぞは絶対にやりたくない。

「い、いやおれも嫌なんだが・・・」

必死で断ろうとする。あんな未恐ろしいゲームなどは相当肝が大きい人でなければ無理だというのが見解だった。ちなみに作者は呪怨というゲームを見ているだけでビビりまくっている。

しかし、そんなことであっさり引き下がる佐天ではなかった。

「えええ！？やりましょうよ！！せっかくですし！！！！」

「そんなせっかくはいらんわ！！！！」

佐天も粘るが数馬は頑として首を縦に振らない。このままじゃちが明かないと察した佐天は挑発的な言葉を言う。

「あれえ、数馬さん、もしかして怖いんですかあ？高校生なのに」  
「な、べ、別に怖いというわけでは・・・」

数馬、挑発に見事に引つ掛かる。

「じゃあやりましょう、そうしましょう!!!」

「いや、あ、ちょっとなあああ!!!」

佐天に引きずられ、暗幕の中に入って。御坂達もしぶしぶついてきてくれた。暗幕の中には超特大サイズの大画面があり、横にはコインを入れる50cm程度の箱があった。価格は200円。

「意外と安いんだ・・・」

ここまで設備がしっかりしているのに200円とは破格であろう。

「学園都市にあるゲームとかはみんな試作品ばっかだし、そこまで料金とる事はできないんじゃない？」

「なるほど・・・」

御坂の説明に納得する数馬。佐天と白井と初春は勝手に選択画面を進めてしまっている。

「難易度はやっぱりhardの上にあるNightmareにしません？」

「ええ！？そ、それはひどいんじゃない・・・」

「いいですわね、あの野郎に吠えずらかかせることができますわ  
!!!」

「し、白井さん、賛成しないで下さいよ!!!」

と言いながらも初春ものりのりで1つのマガジンに装填されている弾数を10発と最低限にして、ゾンビの数を最大の100体に設定している。おとなしい奴ほど乗り気になると怖いというのはこのことだろう。

「よっし、これでできた!!!」

「どうなるか楽しみですこと・・・くっくっく」

「数馬さんすいません・・・」 笑いをこらえている

と3人はほくそ笑んでいた。ある意味悪魔といえるだろう。

「おい、もう良いのか?」

そんなこと何にも知らないで数馬は銃を手取る。哀れだ。ゲームの仕様はWi-Fiと同じでありトリガーが決定ボタンの役目をしているようだ。

「あっ、はい!!!いいですよ!!!」

「じゃあお姉さまもこっちの閲覧席で数馬さんのお手並みを拝見  
いたすとしましょう」

「ど、どうしたのよ黒子、急に数馬さんなんて呼びだして・・・」

「数馬さん、がんばってください!!!」

そう言いながら女子4人は閲覧席に座る。それを確認した後、数馬はスタートボタンを押した。

「ああもうなんかOPムービー見るだけで嫌になってくるな・・・

画面にはしょっぱなからゾンビの群れが人々を襲っているシーンがでる。このゾンビがリアルに気持ち悪こと気持ち悪いこと。初春はもう目をつぶってしまっている。画面が一転して変わり、空港のシーンになる。ジャンボジェットらしきものから1人の男性が下りてくる。あれが主人公なのだろう。体格は少しがっちりとしており、背は170cmはあった。

その後、ごたごたと自分はCIAの人間だとか、任務でここにやってきたとか、家族のこととか話があったがそれは割愛する。で、破壊されつくした街に画面が変わり、ミッションスタートと表示される。ゲーム開始だ。

すぐに3匹程度のゾンビの立体映像が襲いかかってくる。バイオハザードと違い足が速い。すぐに近づいてくる。

「おおっと!!!」

数馬はすぐに5発連射する。1発、3発、1発とそれぞれのゾンビに命中したが胴体にあたっただけなのか怯んだだけで倒れない。

「ヘッドショットが必要なわけ・・・」

すぐに頭に狙いをつけて撃ち始める。今度は1発で吹っ飛んだ。しかし今度は10体(さすがにいきなり増えすぎだろう)が接近してくる。すぐに撃ち始めようとするが早くも弾切れである。

「なっ!?!早すぎじゃねえか!?!」

しかしそんなことを言っている間にゾンビは接近してきた。しようがないのでリロードする。このゲームは意外と銃にも凝っているようでリロード形式は本物の銃と大差はない。マガジンを銃から取り出すと、銃床にぶら下がっているマガジンを装填。射撃する。

間近まで接近していたゾンビは突然打ち出された銃弾に吹っ飛ばされる。

「よっしや!?!...」

ゾンビを倒すと主人公が自動で動き始める。戦闘だけプレイヤーがやることになっているのだろう。60歩程度歩くとゾンビの群れが群がっている廃墟ビルに来た。あれが目的地みたいだ。

「これは厳しいな・・・」

ぶっちゃけて言えばゾンビの数は100体はある。これはひどいである。

「でもやるしかないな!?!」



そういつてゾンビの中に突入する。猛然一撃、すぐさま射撃して5匹を撃ち抜くとすぐに装填する。

「ファイヤー!!!」

またゾンビを複数撃ち抜く。一見すると数馬が優勢である。

「す、すごい。数馬さん、すごい射撃の腕……」

「あいつ、結構何でもできる奴みたいだから……」

「悔しいですがそうですね……」

「さすがレベル4です!!!」

閲覧席からはヤジが飛んでくるが数馬はかまっている暇がない。

「畜生!!!弾数が少なすぎる!!!」

10発だけしか撃てないのに相手は100匹はいるのだ。あまりにも難しすぎる。

「なんかアイテム落ちていないのか!!!??」

隙を見せないように地面を見る。すると3m先に銃剣のようなものがある。逃がしてはなるものかと数馬はゾンビを打ち倒していきナイフのある場所まで大急ぎで近づく。

「これ使えるのか?」

ナイフに向けてトリガーを引くと表示画面に銃剣を手に入れたと

出る。アイテム欄を開き銃に装着。すると表示画面にゾンビに対して銃を刺せば倒せるという表示が出された。すぐさま実行開始。

「どりゃああー!!!」

ぶすつとゾンビに銃剣が刺さる。一撃で倒せる。矢継ぎ早にゾンビに射撃、弾数が無くなると銃剣で対応する。一連の動作をなめらかにやっていくその姿はまさしく鬼神とも戦神とも言えるだろう。

「す、すごすぎですね・・・」

「最早チートの域ですの・・・」

「あいつ、本職軍人？」

「いえ、もしかしたらスパイ？」

初春が鋭いことを言ったがこの際数馬はスルーする。気にしたら負けなのだ。そんなこんなであつというまに100匹は壊滅してしまった。

「よっしゃ次だ次!!!!!!」

主人公はビルの中に入っていくと奥の部屋に到着する。どうやらボス戦のようだ。ドアを開けて部屋の中に入り込むと目の前には最悪なものがいた。

「これはなあ・・・」

一言でいえば醜さの塊である化けものであった。描写するのも嫌

である。ミッションスタートの画面が表示される。

「どりゃああー!!!」

バラバラと弾を撃っていく。すべて命中するが化けものはびくともしない。これはやばい、と数馬から余裕が消え去った。銃剣で刺そうとするが相手のガードが堅すぎるため刺さらない。

「どうするよ、どうするよ!!」

アイテムがないか部屋を見てみると棚の上に何かある。数馬じゃBダッシュのごとく棚に走り寄る。棚にあったアイテムはバレットM82、マグナム弾装備の大口径の狙撃銃だ。

「よっしゃこれで勝つる!!!」

ニコ動用語を使いながら数馬はバレットを撃ち始める。大口径の狙撃銃のためか、化け物に相当のダメージを与えているようだ。弾数の32発（どうやらこのときだけは変更になるらしい）を使い切ると、画面に銃剣を刺しまくれというような指示がでる。ちょうど化け物のガードが弱まっているのだろう。

「じゃあこれでとどめええええ!!!」

瞬時に化け物の懐に潜り込むと銃剣を刺しまくる。刺しまくる。頭上では化け物の絶叫が聞こえるがそんなものは無視する。ザク!ザク!!!と嫌な効果音も混じるが気にしない。化け物も反撃しようとしているのだから1秒間に6回は刺されており反撃できないようだ。

「おらおらおるあああああああ！！！！」

数馬、完全暴走状態。最後に思いっきり銃剣を刺し込むと、化け物はグギャアアアアアと叫び声をあげて倒れる。

「ありやま、終わったのか？」

テレビ画面にはゲームクリアの表示がされている。ランクは堂々とSと出ていた。

「おお！！すごいな！！おいどうだ見ていたか！！？」

数馬も結果に満足したらしく、御坂達の砲に振り向く。しかし彼女達は何一つしゃべれない。いやしゃべれなかった。

ゲームプレイ中の数馬の顔は、鬼神と呼ぶ以上の、まことの悪魔といってもいいようなものだったのだ。

「」「」「」

どんな言葉を掛ければいいのか分からない。数馬はそんな状況を察し、取り繕いをする。

「ああ、いや、怖かったか俺の顔？」

「えっ、いや、その・・・」

急に聞かれてしどろもどろする御坂を見て数馬は少し悲しそうな顔をするもすぐに明るい顔になり、

「じゃあ次に行こうや」

と進み始める。呆然としていた佐天や初春もはっと気づき大急ぎでついて行く。何となく、後味の悪い思いをしたゲーセンだった。

さて、時はたちもうすでに夕方、完全下校時刻間近である。

「じゃあ解散するとしますか・・・」

「そうね、もうこんな時間だし・・・」

しみじみと思えば楽しい時間ではあったはずである、と数馬はそう信じたかった。ゲーセンの時に見られた視線はどうみたって危険視のようなものではあったが。

「ああ、じゃあこれで失礼します。数馬さんも今日1日中付き添ってくれてありがとうございます」

「また今度お誘いします！！その時には勲章の詳しい話もしてくださいね！！！！」

「ああ、分かった、それじゃあな」

数馬はふつと帰り道をたどって行く。有意義な1日であった。

「しかし・・・俺が一般人とは違う存在だと分かったような気がするな・・・」

それはそれでどうでもいいことだ、そう思いアパートに帰ろうとする。が、

「ご利用下さい、おやっさん! ! ! ! !」

と、携帯の着信音が鳴る。 . . . . 大天使からだった。

めんどくさいことは避けたいが避けられないジレンマ(後書き)

「意見感想お待ちしております!」!

ロボットミー手術はマジで怖い。(前書き)

更新すんごく遅くなってすみません!!!!!!学校で記念祭という私にとつちや学校に8時まで居残りさせられる地獄の黙示録が発生しております.....もうやりたくないです。引きこもっていたいよ.....



ロボットミイ手術はマジで怖い。

ご命令 今からこっちの地獄に来てね

話の最初から唐突な無茶ぶりであるっ命令がメールで来る。どうやって行けというのだろうか？

「まさか……死んでいくのか？」

3分間、悩んだ末に、数馬は自らの首の動脈にナイフ（どっから取り出した）を突き刺した。（おいちょっと待て！！！！）

S I D E 数馬

「いやね、私、君が本当にバカなのかと思っちゃうよ」

目の前に呆れかえっている大天使。ちなみに此処地獄です。

「言うな……」

ほら、あるじゃんよく考えずに行動することって。今回はそれが運悪く作動しちゃって……

「だからって自らの動脈にナイフを刺すなんて行動考えずに出来るわけ無いよ、普通？」

さくつと痛いこと言われて自らのバカさ加減に嘆く俺。実際狂っていたのだからしょうがない。

「最近はよく負傷していたからな……その影響が身体に刺すことに慣れちゃってな」

そう言った瞬間、大天使、もうめんどくさいからこなたと表記する、がどん引きする。

「え、ちょっと、君もしかしてそういう性癖が……!?」

「いやそういうわけではなく!!」

危うく俺「すんごく気持ち悪い性癖を持った野郎という印象になりかけたのですぐさま否定。

「まあそれはそれで良いとして、しょうがないから君の身体は何とか処理しておくから安心しておいて良いよ」

「ありがたい……」

でもそんな性癖はないぞ!!!マジだから!!!

「うるさいな、しつこい男は嫌われるよ」

ざっくりと心をえぐられるような一言に心が深く深く沈む俺。めそめそと泣きたくなってしまふ。そんな俺にこなたは少し言い過ぎたと思っただのか肩をぽんぽんとたたきながら

「大丈夫、大丈夫、君との恋愛フラグが立っている娘さんはもうすぐ現れるよ?」

とんでもなく嬉しい言葉を掛けてくれた。

「マジですか!!!!」

立ったその一言で復活し、驚愕し、狂喜する俺。我ながら情けないと思う。でもこの転生も恋愛フラグ立てたくて来たようなものであるからな。

「あれ？ロケットペンダント見ていないの？」

驚愕する俺を見てこなたは首をかしげる。そう言えば遠い昔にそんな物貰っていた。しかしまだ1回も開けていない。

「……………あんまりにも怖くて開けられなかったんだな、そういや」

「ええー!?もつたいないなあ……………すんごく美人だよ？」

「いやそれは絶対だから。美人じゃなかったら却下しているぞ？」

俺が即答した瞬間、こなたが最低な物を見つめるような眼になる。おい、そんな目で見なくても良いだろ!?

「君はやっぱり人間の底辺にいるような人だね……………」

「うおい!!!!それはないだろう!!!!人間の底辺にいるのは作者だろ!!!!」

「作者が人間の底辺だってことはそうだけど、人のこと言っている君も君で底辺なんだよ……………」

そう言われた瞬間、俺は地面に突っ伏して滅茶苦茶落ち込んだ。ここに来て6分でも心がぼろぼろである。あんまりにもひどい言葉だ。最も俺が人間のくずなのは認めるけどな。

「ほらほら、さつさと中に入るよ。紹介したい人もいるし」

こなたは地面に体育座りして落ち込む俺を引っ張りながら地獄の門に入っていく。見れば地獄の番犬ケルベロスは門の前で爆睡している。のんきなものだ。しかし、爆睡しているといっても地獄の番犬。そこから発せられる殺気は凄まじい。3つ首で、竜の尾と蛇の鬣を持つ巨大な獅子の姿。これぞ怪物である。

「ケルベロスか・・・。前来た時滅茶苦茶吠えていたな・・・」

「あの時30人ほど亡霊が抜け出してね、ケルちゃんも大忙しかったんだよ」

ケルベロスも大変なんだな。30人も生き返る前に捕まえなけりゃならないとは。しかしケルちゃんってあだ名はどうかと思う。しかし言ったら殺されそうなので黙っている。ともかくも門の中に入る。

「じゃあこれから冥府の神ハデス、めんどくさいから、ななこ先生にするけど、に会いに行くから」

こなたがとんでもないことを言う。

「ハデスのことななこ先生って呼ぶのは失礼じゃないか？」

いくらエセ関西弁しゃべっていて無責任だとしても仮にも神である。無礼なことは出来ない。大天使をこなたって言っている俺が言えた義理ではないが。

「いや、ななこ先生、アスクレピオスとの結構うまくいつているみたいでいつもいつも、ななこ先生って呼ばれているからむしろそっちの方が喜ぶよ?」

そう言えば前、ハデスもとい、ななこ先生は医療の神アスクレピオスのこと好きそうだった。メルアド教えてあげるよ、ぐらいで心ぐらついていたし。あの後色々あったのだろうか?

「・・・分かった。ななこ先生と呼ぼう。それと紹介したい人がいるって言っていたが誰だ?」

「いや、ななこ先生の部屋にみんないるから、そこで紹介するから待ってて。後引つ張るの疲れたから立ってくれなかな?」

これは失礼、そう言いながら俺は立ち上がり、こなたと平行して歩き出す。辺りは何となくおどろおどろしく、気持ちの悪い何かが漂っている。地獄らしいと言えば地獄らしい雰囲気だ。

「ん?なんだあれ?」

右方、遠い向こうに何か長い長蛇の列が出来ている。列にいる奴は皆、フードを深くかぶり顔を見えなくして、両手にはなんらかの武器を持っている。

「ああ、あれは重罪人、それも特に危険な者を連行しているんだ。多分、あれはジャックリッパ。切り裂きジャックのことだけだ。

の犯人のモンタギュー・ジャン・ドウルイトを連行しているところだよ」

すごくとんでもない奴が連行されている。切り裂きジャック、そのロンドンの悪魔とさえ言われたそいつは何人もの女性を殺害しておきながら捕まらなかった殺人鬼である。つまりは犯人が分からなかったのだ。

「モンタギュー・ジャン・ドウルイトが切り裂きジャックかどうかは不明なんじゃ……?」

「それはちよいとこちらの捜査で調べてね。当時まで出向いて捕まえたらしいよ」

何から何まですごいことをやる地獄だ。タイムスリップして捕まえるほど地獄に墮としたいらしい。まあ、やっていることがやっていることだから当たり前だが。

「それよりもついたよ」

目の前にはでかい門があった。いかにも冥府の神が中にいそうだな。こなたがぐいっと門を押していくとぎぎっと開いていく。

「さあさあ、中に入って」

「お、おう……」

押されるがままに俺は門の中に入る。で、そこにはいろんな意味でびっくりな光景が広がっていた。

「……………らき すた女子主力メンバー集合（結構色々ないけど）!?!」

もう、啞然とすることしかできない。これは……………っ

「えつと右からアテーナー オリュンポス十二神。都市の守護・戦い・技芸の女神。通称かがみん。アプロディーテー オリュンポス十二神。美と愛の女神。通称、つかさ。ムーサ、別名ミューズ、芸術全般を司る神。通称、ひよりん。アルテミス オリュンポス十二神。森林・狩猟・豊穡の女神。通称ゆたかちゃん。アレース オリュンポス十二神。戦争の神。通称みなみちゃん、だよ」

つまり右から柊かがみ、つかさ、田村ひより、小早川ゆたか、岩崎みなみ、というわけか。

「だからかがみんって言うなって言っているでしょ!!!!!!」

おお、かがみんの生怒り。これは見れただけでも価値があるぞ。

「えええ〜いいじゃんそれぐらい……………」

なんとなく、なんとなくだが聞いてて心が癒される会話だ。しかしこの話をのんびり聞いていると話の展開が進まなくなりそうな予感がする。

「あのお……………」

試しに話しかけてみる。こなた、ななこ先生にはかなりドライな感覚で話しかけたが今回は本当に初対面の神だ。ご丁寧な、丁寧に接しないと。

「あつ、ごめん、ごめん、あなたが数馬光太郎ね。私はアテナ、まあ此処にいる大天使からはかがみとか呼ばれているけど……まあよろしくね」

おつ、やっぱり原作同様優しい。ありがたいですな。

「ええ、こちらこそよろしく申し上げます」

そう言いながら俺はアテナ、面倒くさいからかがみさんと表記する、と握手を交わす。次に本題だ。

「で……わざわざ自殺して来たわけだが……何するの？」

自殺というキーワードを聞いた瞬間、かがみさん達が「はい!?!」みたいな顔をしたが気にしない。

「そう!?!それが重要なんだよ数馬君!?!」

「何で急に口調が変わる……」

「コホン……冗談はさておき。ほら最近君、激弱だよね?」

ぐさつと来ること言うね。当たっているけど。

「ずっと前に悪魔になったはずなのに一切強くなっていないし……御陰で何で数馬はこんなに弱いんだ、ってという意見も来ちゃったし」



驚愕の事実が判明。

「マジでか、マジでか!?!」

そんな話は一切聞いていない。作者!?!早く報告しろや!?!  
!?!氏ねじゃなくて死ね!?!!?!!

「きたならしい言葉はやめようよ。作者が可哀想だし」

「あんな奴に同情はいらぬ!?!!?!!」

あーもうだから俺の活躍を増やせと言ったんだこの野郎!?!?!  
いつまでも学校の記念祭が嫌で嫌でしょうがないからって学校帰っ  
てからずっと why , or why not (ひぐらしのなく頃に  
ED) 聞いているんじゃないねえ!?!?!?!だからいつも睡眠時間  
3時間 (ry

「まあ、まあそのへんで落ち着いて。で、さすがにこれはひどい  
からってわけだから君のステータスを底上げすることになったから」

「よし、やるうではありませんか!?!?!?!?!」

こんな千載一遇のチャンス逃してたまるか!?!?!絶対レベル  
アップするぞ!?!?!?!!

「じゃあOKだね。みんな、こっち来て来て、大丈夫だよ、別に  
襲ったりはしないから!?!」

こなた、てめえ何人のことけだもの扱いにしているんだこの野郎。  
ほかの皆さんもかがみさん、後ほか1名以外怯えながら来ないでく

ださいよ！！！なまじ傷つくんですぜ！？

「と、とりあえず、こんにちは……アプロデューサーって言います。ふ、普段こなちゃんからはつかさって呼ばれているから、そっちで呼んでください……」

「おう、こちらこそよろしく。……頼む、そんなに怯えないでくれ」

「ひ、あつ、はい、すみません……」

おいこら、こなた、貴様一体どんな説明したんだよ……らきすたの1巻でもそんなことあったような気がするし。

「えつと私、ミューズって言いますっス！！こなたさんからはひよりんとかひよのとかが愛称なんでそう呼んでくださいっス」

「ああ、そういえば前に白井黒子に対する賄賂の絵を描いてくれたっけ。あん時は助かったよ」

「いえいえ、こちらもなかなかいい美人さんの絵を描けましたからお互い様っス」

「そうかい……御坂の同人誌は出すなよ」

正直、この世界で御坂さんを同人誌のモデルとして使ってほしくない。いいや絶対あってはならない。のだが、

瞬間、ひよのがギクツという擬音を出して硬直する。

「まさかもう作っているとかないよな？」

「め、めっそもございません！！！！！」

怪しすぎるな。怪しすぎるな。

「こなたー。ひよのが不審な行動したら即教えてくれ、すぐに駆けつけるから」

「分かったよー」

とりあえず予防線を張っておこう。絶対、ミサかは防衛する。

「こ、こなたさん！！それはないっス！！もうペン入れに入っちゃっているんすよ！？」

「いや、いや、ひよりん。あの人が怒ると本当に怖いんだから。あきらめなっつて」

こなた、別に俺はそこまで怖い人ではないぞ。まあ脅しには最適か。

「そ、そんなぁ……」

落ち込んでしまうひよの。これで良い。さて次だ、次。

「あ、あのこんにちはアルテミスです。こなたお姉ちゃんからはよく話を伺っています。ゆたかつて呼んでください」

「アレースです。よろしくお願ひします……」

「あつ、アレースさんはみなみちゃんっていう愛称を使ってもいいって言っていました」

「ああ、分かったよ。よろしくな」

と、挨拶交わしながらも怯えているようにしか見えない女神2人さすがにこれは悲しいので。

「へい、讃岐うどんお待ち!!!」

「!?!?」

すつとどこからか讃岐うどんを出してあげる。確か原作だとゆたかちゃんはずどんが好きだった。だったら本場仕込みの讃岐うどんで親交を深める!!!

「冷めないうちにどうぞどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「どうぞも・・・」

とりあえず讃岐うどんを食ってくれる2人。うん、これでよし。

「君は本当に美人とか可愛い女の子には優しいよね」

「こなた、俺は美人な女性と可愛い女の子のためだったら、鋼鉄の男に資本主義万歳とでも言うし、ムカデ高地だろぅがスターリングラードだろぅが行ってやるよ」

「またマニアックな具体例を出すねえ。読者が分かんないよ?」

調べれば出てくるよ。多分。鋼鉄の男はどうか分かんが。

「とりあえず君はみんなと親交を深めたみたいだし、早速レベルアップの準備をしよう」

「あれ、ななこ先生は?」

「あの人は先に準備室に行っているよ」

準備室って……どんな準備をしているんだ?

「じゃあLet's Go!!!!!!」

「医学上、本当にやばい手術がそこにはある」

「嫌だ、嫌だ!!!!!!」

「安心せいや。別に死にはせえへん」

「ななこ先生の行っていることは信用出来ない!!!!!!」

今、手術室にいるわけだが。もうやばいことをやるうとしていない  
としか思えない。

「ロボットミー手術なんて絶対にやるか！！！！史上最悪の手術じゃねえか！！！！！！」

「いや、別にロボットミー手術をやる訳じゃないんだけど・・・」

「かがみさん！！！！だつてあなた俺の脳の前頭葉を切るって言いましたよね！！？絶対ロボットミー手術だ！！！！」

ロボットミー手術とは前頭葉の一部を切除する手術。

ポルトガルのエガス・モニスが発案した手術で、うつ病や不安神経症に効果があるとされる。

第2次大戦後の一時期には、精神分裂病（現在の統合失調症）の患者に対して全世界で盛んに行われた模様。当時はまだ精神分裂病に対して効果を示す薬が開発されていなかったこともあり、画期的な治療法として広まった。

しかし、後遺症が多数報告されるようになり、抗精神病薬が開発されたこともあり、ほとんど行なわれなくなる。

そして1975年になって、日本精神神経学会で「精神外科を否定する決議」が可決され、現在では実施されなくなったよう。

ちなみにこの手術を患者に許可無しでやったため殺された医者もいる。それほど忌み嫌われている手術だ。

「そんなもんやるか！！！！」

「大丈夫だつて、普通に前頭葉を悪魔のと取っ替えるだけ・・・」

「今の大天使の一言で絶対にやるもんかと決心したよ！！！！」

なおさらたちが悪いじゃねえか！！！！！！ロボットミーよりも怖い！！！！そう俺が断固拒否をしていたのを見かねてこなたがすぐさま命令。

「みなみちゃん、お願い」

「分かりました・・・」

ガスッ！！！！

「はうあ！！！！」

音速ぐらいは超えているのではないかと思えるほどの早さでみなみさんは俺の後ろに回り込み、うなじに手刀をくらわす。その攻撃に俺はすぐさまブラックアウトした。

数馬SIDE OUT

「作者、お前はロボットミー殺人事件と同じことやっているの分かっているのか？」

「ここらへんをぐりつと抉ってやな・・・」

「麻酔は大丈夫かな？」

「あ、あの、血圧安定していませんよ？」

「げ、ほんまかいな！！！！」





かれる。モロクの残忍性を象徴付けたのは、王に力を与える代償として初子を贄とさせたことだろう。この贄の儀式は、エルサレム南端のヒンノムの谷（ゲー・ヒンノム転じてゲヘナ）の聖堂で行われた。聖堂に響き渡る盛大な音楽の中、親は子を炎へ放り込むという……おいこら!!!!!!

「何でそんな残忍な奴のもの使う!？」

「いやいや、数馬、それは違うで？あいつ、こつちじゃすごく根の良い奴でな、何か裏表がまったくないような奴やったんや。それが召喚されたとき召喚した王が急に子供の死体を生贄だとか言っただけで……そつから勝手に人々はモロクを忌み嫌われてるような扱いにし始めたんや」

うわぁ……何この裏事情。悲しいなあ。

「あいつ召喚された後ずっとずっと悩んでいたなあ……自分があんな罪なき子供を殺したようなものだって。私が相談に乗ってやればあんなことにはならなかったはずや……」

「……」

ななこ先生の表情が悲しそうに曇っていく。まわりの奴らも悲しげになる。暗いよ!!!話が重いよ!!!!!!

「まあ、過ぎ去ったことやし、まさらくよくよしててもしゃーない。とりあえず、これであんさんはレベルアップできたはずや。もう帰っていいで」

「あ、あぁ……」

帰っても良いと言われたので俺は即刻帰ろうとしたが、2つ気にかかったことがあったので聞いてみた。

「あのさ、何でモロクっていう悪魔の前頭葉にしたんだ？」

ななこ先生はその質問に数秒間黙り込んだがぼつりと答え始める。

「……あいつが自殺したとき、遺言書があつてな、万死に値する行為をとった私ですが、この残った体はせめてもの罪滅ぼしに何か役立ててくださいつて書いていたんや。悪魔の死体は自然には腐らんからな」

「そうか……それともう1つ質問。何であんなに多くの神がいたんだ？」

次も真面目な回答が帰ってくると思つたが。

「いんや、あんまし深くは考えてあらへん。気分やな、気分」

ずっこける程適当な答えが返つて来やがったよ畜生め!!!!!!

「ま、まあいいや……じゃあ帰る」

「ああ、お疲れだったね、そこから右に曲がって30mくらいの所にエレベーターあるからそれ使つてね」

何でエレベーターが地獄にあるんだとも思いつつ俺は手術室からでていった。

「エレベーター内」

「本当にレベルアップできたのか？」

正直、ロボットミイ手術もどきをやって出来た物だ。信用出来ん。

「まあいいや。次、打ち止め&一方通行が中心の第5巻だし・・・  
とにかく頑張りますか・・・」

さてさてどうなることやら・・・

ロボットミイ手術はマジで怖い。(後書き)

今回はひどい。それは認めます。ですが、どうか見捨てないでください………！

作者は一方通行と打ち止めのほのぼのSSが好きだ(前書き)

何かやっと更新できました。遅れて申し訳ない。

作者は一方通行と打ち止めのほのぼのSSが好きだ

「ゴミ箱に突っ込まされている人の気持ちってこんなものなのかな・  
・・・」

ただ今、俺は裏路地のゴミ箱に体を突っ込んでいる。大天使の仕  
業だろう。時刻は8月31日午前12時10分。一方通行と打ち止  
めがああ衝撃的であり、なおかつ変態的な出会いをしてから間もな  
い時間帯だ。

「じゃあセロリがいる学生寮、行ってみますか」

注意、俺は一方通行がいないとき、もしくは心の声の時はアクセ  
ロリータ、略してセロリと呼びますぜ。と、そんなおでもいいこ  
と言いながらのろのろと歩き始める。

「・・・」

これといって喋ることがない。

「・・・」

やっぱり何にもない。暇なので音楽でも。

「~~~~~） ひぐらしのなく頃 解OP 奈落の花」

この曲、血みどろなシーンを背景にしながら聞いたら・・・もう  
地獄。

「……………」

しかし、1曲聞いて直ぐ飽きる。どうするか……………っていうかセロリの学生寮、結構裏路地で人気がなかったはず。

「裏路地に行くか……………」

そう思い、道をずれようとする。……………が。

「おーい、その学生。なにやっているじゃん？」

タイミング良く、本当にタイミング良く、特徴的な語尾を付けている女性に話しかけられる。いるかないか分からない読者の皆さん。予想はつきますよね？

「黄泉川……………愛穂……………」

「あれ？何で名前知ってるじゃん？会ったこともないのに」

あつ、やべえ。まだ初対面だったか。

「いや、「じゃん」なんていう時代遅れの語尾を付けるアンチスキルがいると有名なんで」

「ほう……………その情報源はどこから来たじゃん？」

黄泉川の顔が不機嫌になる。言い訳で墓穴掘ってしまった。

「そこはまあ、オフレコで」

「……まあ良いじゃん。それよりも、もつとつくのとうに最終下校時刻は過ぎてるぞ。こんな所で何してるじゃん?」

不味いな、何て言い訳するか。下手に言い訳してもこいつに通じるわけ無いし。

「えつと……まあ道に迷った……」

「嘘じゃん?」

うお、一発で見破るやがッた。どこのCIAだよ。

「いやいや、何で嘘と思いになるの?」

「ここら辺には複数のナビゲーションシステム搭載の案内板があるんだぞ。それも見ないでぶらぶらしている奴が道に迷っているわけないじゃん」

や、やばい。そこまで考えてなかった。この人鋭すぎるぞ……

「で? 一体何してるじゃん?」

「……」

どうする。此处で万が一にも捕まったら色々面倒くさいこととなる。例えば、胸ポケットにしまつてある2丁のS & amp; W M 29がばれたり、背広な服を着ているので見えないが、ベルトに付いてあるデザートイーグル魔改造版2丁(LLアタッシュケースの中に入っていた)とか、両足首に2個ずつ付けてあるM67破片手榴弾、背中にスモールライトで小さくして装備しているFGM-1



48 ジャベリン《携帯対戦車ミサイル》など。

「答えることが出来ないなら調べさせてもらっじゃんよ」

黄泉川がそう言いながら、俺の来ているコートを脱がそうとする。こいつのことだからコートの異常な重みだけですぐに拳銃に気づくだろう。

「だが断る！……！」

「なっ!?!」

だったら逃げるのが一番最適だと考え俺は走り出した。体を改造されたためか、凄まじい速さで走ることができた。それはまさしくマオのBダッシュのごとく……

「ごらー!!! 待っじゃん!!!」

「いつの間にダンプカーに乗っているんだよ!!!」

相手もなかなかやる。SS 2巻の様にダンプカーで追っ手来やがった。しかし、それでも俺のダッシュにはなかなか追いつくことが出来ない。ふはは、ざまあWWW

「よし、高速に入るか」

そう言って高速道路の入り口に入って行く俺。どこかセロリの学生寮に近いところで飛び降りれば黄泉川から逃げられるし一石二鳥だ。

「ああ、高速に入りやがった！！運転手、このまま突っ込むじゃん！！」

ダンプ、爆走しながら高速に突っ込む。俺も黄泉川ダンプも料金所なんて無視。

「ふははっは！！！俺についてこれるかな」

高速だから猛スピードで走行する車が複数いたが、そんなの避けて通ればいい話だ。ダンプだとそんな無茶な運転は出来るわけ・・・

「あいつら・・・車はね飛ばすのも辞さないのかよ・・・」

そんなの関係ねえとばかりにダンプは爆走し続ける。アンチスキルは暴走族の一種か？

「そこにいる爆走学生ーさっさとお縄につくじゃん」

「メガホンでそんなこと言ったってお縄につくか、この野郎！！」

こちらもメガホン（どっから取り出した）で言い返す。とにかくダッシュだ、ダッシュ。セロリの学生寮の近くまで後6000mほど、もうちょいだ。

「そんなこと言う学生にはお仕置きじゃん。鉄装！！奥からマシンガンとゴム弾用意しろ」

「は、はい！！！！」

げ、鉄装までいるのかよ。ていうかマシンガン？おい、使うのか？マシンガン使うのか？

「貴様ら、少年法はどうしたんだよ！？」

「そんなの知らないじゃん」

鬼か！！！！って本当に撃ち始めやがった。

「ゴム弾だから死ぬことはないはずじゃん」

「骨折しちまうだろ！！！」

無数のゴム弾。次々と連射してくるので避けることは難しい。だったら能力を使用する。前話の人体改造は能力のレベル底上げにも貢献しているとななこ先生は言っていた。

「目標は100発以上。すべての弾丸を防ぐことが出来るかどうか・・・後ろ向きで」

そして、黄泉川が完璧に狙いを定め、弾丸、ミニミ軽機関銃とそっくりなので、200発から反動、照準ずれによる外れを差し引いて、128発程度が放たれる。それは直進的に俺に向かってくる。で、俺に6m程度近づいたところで。

がくつと銃弾は下方方向に向いていき、銃弾は地面にめり込んでしまった。

「何でじゃん!？」

「す、すごい・・・」

黄泉川、鉄装は啞然としている。よし、成功だ。従来の能力よりも重力を大きくすることが出来たわけだ。しかも複数の目標に効果あり。いやはや嬉しい。

「じゃあ反撃」

躊躇せずにダンプのタイヤに俺はデザートイーグル・・・ではなくジャベリン（対戦車ミサイルだよ、テヘ）をぶっ放す。まさに外道。

「な!?!何でそんな物持っているじゃん!？」

「や、やばいですよ黄泉川先・・・」

そう鉄装が喋り終わる前にジャベリンは見事にダンプのタイヤに命中。ふははは、ざまあwwww

「まあ、炸薬の量は本来の4分の1程度だから吹き飛ばすことはな・・・ってあれ」

俺の考えではダンプは止まってくれることとなっているのだが、現状はまったく違う。考えてみれば時速100kmをとっくのとうに超えたスピードで突っ走っていたんだ。それが急に前面からの衝撃で急激に速度が落ちるようなことがあれば。

間違いなく、変な方向に転がり、高速だから最悪、道路から転落、

の可能性は大だ。

「で、今、その可能性の通りになっちゃっている・・・」

ダンプは前にまっすぐ転がっているのだが、カーブの所が後100mぐらいだ。落ちる。やばいよ、やばいよ。此処で黄泉川さんが死んだら全てが終わる。そう、もう使い古しと言われそうな変な語尾付けるジャージ姿の巨乳美女という貴重なキャラが!!!!!!

「それだけは避けなくてはならない!!」

突撃!!!!!!

数馬SIDE OUT

SIDE黄泉川

「ど、どつするじゃん!?!」

今、ダンプの中でぐるぐると転がっている真っ最中。幸いと言っべきか、このダンプは学園都市製。何十回転がろうが人員に被害が出ることはない。しかし、転がっている先は高速道路の外。約30m程度の落下となる。

「よ、黄泉川先生、どうします!?!?運転手は気絶していますよ!?!」

さ、最悪じゃん。1人だったら扉から無理にダイブすることも可能だが、この2人、一方は気絶しているし、もう一方は気絶してい

なくてもそんな芸当出来るわけがない。万事休すと言った所じゃん・

「もう、ここで終わりじゃん・・・」

こんな、こんな最期はさすがに遠慮したかった。せめてスピリタスを豪快に飲んでの最期が希望だったじゃん。はあ、人生なんてこんなものなのかねえ・・・

「黄泉川先生！！！」

「ん？どうした鉄装、そんなに慌てて？」

「ま、前にあの学生が！！！！」

げ、見てみれば前方に本当に爆走学生が。何やっているじゃん！？

「ば、バカ野郎！！！！さっさとどくじゃん！！！」

「黄泉川先生、それ、多分聞こえませんか・・・」

今言っている場合か鉄装！？と、とにかく軌道を変えないと・・・！？

「「どわああ！！！！」」

急に、ダンプの転がる速度が激減していき、停止する。しかも爆走学生の3m手前で。その衝撃は凄まじく、脳を揺さぶられる感覚を覚えた。

「おっ、うまく止まった。どうも近場で止めてみた方がかっこいいと思ったが危ないことしたな・・・」

爆走学生はぶつぶつとつぶやきながらこちらに寄ってくる。

「な、何か助かったじゃん」

「そうみたいですな・・・」

横向きになっていたダンプのドアがいつも簡単に剥がされる。

「おお～生きてたよこの人達」

そ、その言い方は酷いじゃん。そもそも原因がこの学生なんだし。

「そ、そのこの学生！！今すぐお縄に・・・」

「だが断る！！！！」

一瞬で学生は逃げてしまう。は、はやすぎるじゃん・・・

「よ、黄泉川先生・・・どうします？」

「もう、めんどくさいじゃん・・・」

今日は早く帰って眠ること。それが一番じゃん。

黄泉川SIDEOUT

SIDE 数馬

どうにか撒いたようだ。ジャベリン最高WWW

「セロリ〜は何処いすこ〜や、セロリ〜は何処〜」

とにかく広瀬中佐（歌です）風な口調で歌いながら探す俺。ちなみに作者はこの歌に出てくる広瀬武夫中佐の大ファン。

「しっかし、見つからないな。あんな目立つ奴ら、34秒で見つかると思したんだが」

あんな風貌、一方は真っ白なもやしっ子だし、もう一方は空色のモーフを身にまとっただけの超超可愛いそして美しい少女。セロリがなんかしないか心配だ。

なかなか見つからない。暇だ。今のところ時刻は12時53分。もうセロリ寝ているな。・・・急ぐ必要なくなった。

「じゃあここで、まだ中学生のくせに戦エロゲー 姫の女性化した織田信長が大好きな作者の話を・・・」

〜カット、カット、カッツツツツトオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!!



「ちっ、セロリの学生寮が見つかったよ。命拾いしたな作者」

さてさて行きますか。多分セロリの部屋は4階にあるはず、それも端っこに。もうとつくのとうにセロリの学生寮襲撃は終わっているはずだから部屋は凄まじいことになっているな。

・・・あった。うわぁ、見るからに誰かに襲撃されましたって感じだ。

「入って良いのか？」

何か地獄に入っていく気分になるな。え？前に行ったたろう？あれは地獄じゃない、病院だよ。と、まあお邪魔します。

「・・・シユールな光景だ」

中は何かすごかった。もう何もかもが滅茶苦茶。そんな寝たくないような場所でもやしな男子と超可愛い女の子が寝ているのだ。ふざけている。

「打ち止め（ラストオーダー）とは俺が寝たかったのに・・・」

本当に一緒に添い寝をしたかった。別にやましいことなんかは何にも無しで癒されたかった。打ち止めはあれだ。よ ばと！！のよつば、のようなものだ。

「だから断じてロリコンではない」

それにしても一体俺は誰に向かってこんな話、力説しているんだ？それよりも準備だ準備。

「まず最初に、ブルーマウンテンのブラックを10本。それと可愛い、とにかく可愛い打ち止めにぴったりな洋服を置いておいて」

ちなみに洋服は32着は用意してある。ほんとにカメラで撮りたいよ。

「次に・・・掃除だな」

さすがにここまで滅茶苦茶だと打ち止め（ラストオーダー）が危険だ。あの妖精のような足に切り傷がいたら一大事だよ。

「セロリは現時点じゃいつも反射をされていて音が聞こえないはずだから大丈夫だろう、そうすると打ち止め（ラストオーダー）が起きないか不安だな」

・・・・・・打ち止めに耳栓をこっそり付けておいとけばいいや。

「さて掃除開始、開始」

まず、ガラスの破片を・・・

くめんどくさいんでカット

「時刻、4時ジャスト」

掃除は終わっちゃったし、打ち止めは可愛いし、セロリは寝ているし、打ち止めは可愛いし。

「……………どうするかな、こっち眠いし」

此处で寝ちゃおう。うん、そうしよう。

「じゃあ打ち止めの近くに失礼して……………」

と言いながら俺は目をつぶる。

この判断が後々問題を引き起こすとは……………夢にも思わなかったけど。

作者は一方通行と打ち止めのほのぼのSSが好きだ(後書き)

ご意見感想お待ちしております

一方通行&打ち止め&数馬(前書き)

更新です。すいません、学業に苦戦して遅れました!!

## 一方通行&打ち止め&数馬

「ねえねえ、あなたは誰？ってミサカはミサカは聞いてみたり」

可愛らしい声が聞こえる。実に可愛らしい声。俺はぼんやりと重いまぶたを開ける。目の前には御坂美琴にそっくりな空色のモーフを体に巻き付かせた女の子がいた。

・・・打ち止めだ。

「・・・ふああ・・・」

「そんな欠伸していないで早く答えてよ！！ってミサカはミサカはせかしてみたり」

どうやら寝過ぎてしまったようだ。時刻は6時10分。で、何故か起きてしまった打ち止めにはれてしまったと。

「・・・何かな？」

「ええ！？分からないの？ってミサカはミサカは驚愕してみたり！！」

「ははっ、冗談だ冗談。でも俺が誰かって言うのはちょっと不味いからなあ」

実際、諜報員なんて言ったら警戒されること間違いなし。お前らを救いに来た、何て言ったら100%警戒されるだろう。

「まさか暗殺者！？ってミサカはミサカはすつごく警戒してみたり！！」

「いや、それはないな。・・・じゃあ護衛者とでもしておこうか」

「じゃあー？じゃあって何！？怪しすぎるよ！！ってミサカはミサカはすつごくすつごく警戒してみたり！」

何か墓穴掘っているようだ。大丈夫か俺？

「いや、こいつ、一方通行のことだが、を護衛するのは本当だ。ちよつと言えない本部から命令されてね」

「それでもあまりにも怪しすぎるし、第一この人は強すぎるから護衛なんか必要ないよ！！ってミサカはミサカは反論してみたり」

ああ、そう言えばそうだな。一方通行は今のところ欠点はほとんど無い。だったら護衛なんかは必要ない。じゃあどうするか。・・・  
・・実力行使だな。

「じゃあこいつに護衛が必要な理由を見せてやろう」

すくつと俺は立ち上がり、寝ている一方通行に近づいていく。

「何をするつもり？ってミサカはミサカは聞いてみたり」

「ちよつとこいつを起こすだけだ」

「え！！そんなこと出来るの！？ってミサカはミサカは驚愕して

みたり」

ちょっと無茶苦茶な方法なのだが、やった方が良さだろう。というわけで俺は「サイズアタッシュケース（縮小版）からちょっと大きめの鉈を取り出した。

「わわっ！！何でとんでもなく物騒な物を取り出すの！？ってミサカはミサカは少し怯えながらも聞いてみたり！！」

「ああ、こいつは対一方通行戦用兵器の鉈だな。これで、よつと鉈で一方通行の体の表面をなぞる。するとプツン、と音が鳴った。これでよし。」

「てい！！」

後はSSで毎回打ち止めといちゃいちゃしている、このロリコン変態野郎に憎しみを込めて脛をキック！！

「いてエー！！」

一方通行は突然の痛みに跳ね起きる。ふはは、ざまあ。

「うわあ！！この人に初めて攻撃できた！！ってミサカはミサカは今世紀最大の驚きを試してみたり！！」

打ち止めもこの通りびっくりしている。ちなみに今回使用した鉈は「ひぐらしのなく頃」の竜宮レナのあの鉈だ。これ「アタッシュケースの中には存在しなかったはずなのに、「呪殺魔法陣 雛見沢」の隣で出来ていた。正直、何なのか分からなかったので大天使



に聞いてみたところ、何か怨念の塊で出来ている代物で、目に見えない何かを何でもぶった切ってしまうそう。一方通行のベクトル変換は、目に見えない膜のような物で覆われており、それに触れると能力が働く。だったらその膜をこれで切ってしまうという理屈で使った。しかし、残念ながら切っても30秒程度で復活するらしい。

「な、何すんだ、このガキ!!」

「うわあ、滅茶苦茶この人怒ってる!!ってミサカはミサカは恐怖してみたり」

一方通行は目をひんむきながら俺を見る。

「どうもこんばんわ」

とりあえず挨拶。

「誰何だこの野郎はア？」

「あなたを護衛する人だって!!ってミサカはミサカは報告してみたり」

打ち止めのそんな報告を聞いた一方通行は怪訝そうな眼でこちらを見てくる。

「護衛だア？何ふざけたこと言ってるんだ。俺は学園都市第1位だぞ。何で護衛されなきゃ何ねんだよ、バカらしい」

「だが俺はお前に攻撃できたぞ？」

予想された反論に俺は即答する。一方通行は虚を突かれたように黙り込む。

「何でだ」

「じゃあ説明してあげよう。まず昭和58年に遡るが・・・」

「これ以降、30分間にわたって厨二病的な嘘話を語り続けるのでカット」

「とまあこんな感じなんで今日だけお前のことを護衛する」

30分間の厨二病話は自分でも火が出るほど恥ずかしかった。まあぶっちゃけバイオのパクリだが。

「と、途中のお話がとつても怖かった！！ってミサカはミサカは恐怖してみたり」

そう言っただけ一方通行、まあセロリって呼ぼうか悩んできた、にすぎりつく打ち止め。うん、可愛いよあんた。だけど一方通行にすぎるのはよしなさい。妊娠するぞ？

「ああ、分かった・・・いちいち引っ付くな、ガキが」

一方通行、もうセロリって呼ぶのも飽きてきたよ、は話に納得しながら何となく嫌そうに打ち止めに払いのける。が、俺にはお前が照れているようにしか見えないんだよ、この畜生が。

「でエ？どオするんですかア？こんな早朝に起こしやがって。こっちは眠くてしょうがないんだよ」

「知るか、眠いお前が悪い。まったく、日本男児がなんたるざまだ。俺なんか最近はしょっちゅう4時起き、もしくは徹夜だぞ?」

おめエがおかしインだよ、と一方通行はつぶやきながら再度寝ようとする。もう一回鉈でなぞって脛をキック!!

「いつてエ!! てめエ、また何するんだ!!」

「そんなに寝ているからてめえはもやしっ子なんだよ。いいから起きろ。飯にする」

飯という単語を聞いた瞬間に打ち止めは一瞬にして嬉しそうな顔になる。

「ご飯だ、ご飯だ、わーいわーい。ってミサカはミサカは喜びを露わにしてみたり!!」

打ち止めは素直で可愛いな。本当に可愛い。作者が一方x打ち止めSSに、はまる理由がよく分かる。一方通行も2回も脛を蹴られて流石に眠気が取れたのかしぶしぶ起き始める。それを確認した俺は半壊しているキッチン、直すのは無理だった、に向かい縮小型LSサイズアツシユケースからガスコンロ、そして料理が入った鍋を取り出す。ちなみに今回持ってきたのはグヤーシユ。パプリカの粉と、肉とじゃがいも、たまねぎ、そしてタルホニヤ(Tarhonya)というゆでた団子と一緒に煮込んだスパイシーなシチュウで、9世紀にマジヤール人が伝えた料理に18世紀からパプリカが加わったと言われる。とてもおいしいらしく、日本人からしてみれば結構腹がふくれる料理のようだ。こういつているから分かりますが、これ作ったのは今回が初めて。

「結構簡単だからすいすい作れちつたんだよな」

で、今は再加熱中。一晩おいてからまた加熱するとおいしく出来上がるそうだ。ちなみに今から作ると4時間はかかる。

「うわ〜すっごく良いにおい！！ってミサカはミサカは賞賛してみたり！！」

「お褒めにいただき大変嬉しいよ」

打ち止めは子供のように大はしゃぎ。うん、可愛い。ついでに俺も少し味見してみる。

「おっ、これでよさそうだな。おい、一方通行！！飯が出来たぞ」

とりあえず、グヤーシユを自前で持ってきた皿に盛りつけ、壊れていないテーブルに持って行く。

「けっ、まア食えそオな物じゃねエか」

寝ぼけ眼で一方通行がグヤーシユを見て言う。

「そりゃどうも」

こいつは人を褒めていても悪口にしかな聞こえない。まあいいや。とりあえず2人分、俺と打ち止めの分だけ置く。テーブルには打ち止めと一方通行がすでに両端に座っている。

「おお、温かいご飯ってこれが初めてだった。ってミサカはミサカははしゃいでみたり。すごいお皿からほこほこ湯気が出てる。ってミサカはミサカは凝視してみる」

そう明るく言う打ち止めだが、遠救助から無理矢理追い出されて一方通行に会うまでの間の生活はいかなものだったのか。それを考えるだけであまりにも泣けてくる。

「……………くっだらねエ」

一方さん、あんたそう言いながら罪悪感とか自己険悪らしきオーラがすげえ出ているぞ。まあ食べ始めるとする……………あつ。

「やべえ、一方通行の分忘れちゃった。持ってくるから先に食っててくれ」

そう言い、俺はテーブルから立ち上がり、キッチンに向かう。しかし、キッチンについても食べる音が聞こえない。不思議に思い、後ろを振り向いてみる。打ち止めは料理の前に行儀良く座って一方通行を見ていた。料理に手を出す様子はない。しかしその表情は直ぐにでも食べたいと感じさせる表情だ。

「？何やってんだオマエ。湯気が出る飯はこれが初めてなんだろうが？」

一方通行も気になったのか、聞いている。すると打ち止めはこう答えた。

「でも、誰かのご飯食べるのも初めてだった。ってミサカはミサカは答えてみたり。いただきまーす、っていうのを聞いたことが

ある。ってミサカはミサカは思い出してみる。あれやってみたい。ってミサカはミサカはにこんご希望を言ってみたり」

「……」

一方通行は何も答えない。そして俺は超特急でグヤーシユを皿に盛りつける。

26秒後。打ち止めの元気な「いただきまーす」が部屋の中いっぱいに聞こえた。

「キング牧師もこういうことを望んでいたのかもしれない、と感傷に浸りながら食って20分後」

「時刻は7時12分。・イベント発生まで8時間と31分程度か」

「こいつらがレストランに行くまで時間が余り余ってしまったな。さてどうするか。」

「俺はもオねみイから寝る」

「手前は寝ることしか考えないのかこの野郎」

打ち止めはどうすれば良いんだ、って。

「( \*、)、\* ) 〇〇」

いつのまにか打ち止めも可愛く寝てしまっている。やべえ、可愛  
いすぎるwww

「……じゃあ俺は外にでも出るか」

結局、起こしちゃ悪いので俺は玄関のドアから外へ出た。

「そう言えば姫神……」

存在すら忘れていた。今気づいたよ。あいつに会った方が良いの  
か？

「……でもあいつも小萌先生の所いつているような気がする」  
やっぱりいいや。大丈夫だろ。

と、言うわけで、姫神には会わず、絶対能力進化実験を最期まで  
推し進めていた天井垂雄、今回の話では特に重要な、というかすべ  
ての元凶であるこいつを探すこととなる。こいつは原作とかアニメ  
じゃ死んだかどうか描写されていないが死んだんだろう。しかしだ、  
利益的に考えればそれは余りにももったいないことだろう。今回は  
こいつを死なせることも阻止しなければならぬ。そして、もう1

つ重要な事。

「一方通行はどうするか・・・」

護衛とは言っておいたが、原作通り進んじまうと一方通行は前頭葉に被弾、能力制限がかかるという状況なってしまうのだ。だったらそれも阻止すればいいと思うかもしれないが、そもいかない。このイベントが起きなければ一方通行は何か後々になって大変なことになるような気がするのだ。だからこれを阻止するのは無し。ぶっちゃけ気が進まないがしょうがない。

「で、天井亜雄は何処にいるや」

あいつ、どことなくフォン・ブラウン氏と似ている部分があるからちょっと暴走が怖いのだが、それをうまく制御していけ利用価値はあるだろう。

「アニメじゃ黄色いスポーツカーだったはず・・・そんでもって近くのファミレスの駐車場にいたか・・・ってあれ」

目の前にスポーツカー。しかも乗っているのが天井亜雄。

「・・・発見しちまったよ」

何という奇跡だろうか、スポーツカーはそのまま走り去ろうとする。逃しちゃ不味いので俺は小型の発信器をスポーツカーに投げつける。

「これで多分追跡は可能だろ・・・後はどうするかな」



今、一方通行の所に戻ると昼飯も作らされてイベント発生が無くなりそうな気がする。しかし、今の時間、7時43分。まだまだ時間が余っている。

「ぶらぶらしているしかねえな」

こうして俺は長いことさまよい歩くこととなった。

〜8時間後〜

「さて、ウイルスに感染していた打ち止めがファミレスで倒れて一方通行が研究所に向かっているところだろう」

しかし、考えてみれば俺はどうしても出る幕がないのだ。一切無いのだ。というか出てしまうと物語がぶっ壊れかねない。今までのさんざん原作に關与してきたがこれだけは変えてはいけなのだ。絶対に変えてはいけないのだ。これを変えてしまうと、何かが崩れてしまう。

「でも、やっぱり何かしないって言うのは嫌だな」

よし決めた。

一方さんの手助けだけ、してやるっじゃないか。

「で、ここがどっかの研究所跡地という訳か」

跡地と言ってもまだ建物は完全に除去されておらず、大部分が残っている。で、天井亜雄は何処にいるのか。

「多分裏側だな」

とりあえずぐるっと建物を回り込む。ま、俺はとりあえず天井亜雄を発見するのが第一。俺が活躍して良いような話じゃないし、それに一方通行は前頭葉に被弾するというのが自分自身のいろんな意味でのレベルアップだ。しかしそれでも人道的にやらなきゃ行けないような気がするのだ。

「おっ、いたいた」

目標の黄色いスポーツカー＆中にいる天井亜雄＆打ち止め発見。足止め開始だな。

「じゃあ・・・何をしてやるか」

数馬SIDEOUT

天井亜雄SIDE

「くっそっ・・・」

どうする、選択を間違えた。本来だったら打ち止めにウイルスを注入した時点で学園都市外に脱出、敵対勢力にかくまってもらう手はずだった。だが打ち止めが脱走する刀予想外の事態が発生したために全てが崩れ始めていた。打ち止めは今瀕死の状態だ。今死んでしまつてはウイルスが打ち止めを通じて御坂妹に感染しなくなつてしまう。そうなれば、借金返せない 敵対勢力からも学園都市からも板挟み 全てが終わる。

「・・・・・・・・」

とにかくパソコンの画面を睨み、助手席にうずくまっている打ち止めを見る。額には汗が流れており、顔色は良くない、というか悪い。状況はいまだに改善していなかった。何としてでもどうにかしようとしてパソコンの画面をまた睨み始めようとしたとき

車の前に1人の学生がいた。学生は徐々にこちらに近づいてくると、車体の前面の窓をノックしてきた。

「ちっ・・・」

そんなのには構っていられないので無視してパソコンの画面を見始める。が、学生は一向にノックをやめてはくれない。コンコンコンとエンドレスに音が続く、さすがにいらついてきたがそれでも無視する。すると、あきらめたのか音はなくなった。とりあえずこれ

で集中できる。そう思い安堵したが、

ガバリアリ！！

「なっあ・・・っ！！」

金属が避ける音がし、車体の側面のドアが車体から引き裂かれた。見ればさつきノックしていた学生がいる。引きちぎられたドアを持つて。

「な、何をする・・・っぐあ！！」

唐突な被害に抗議しようとして口を開く前に私は胸ぐらを掴まれ、車の中から無理矢理引きずり出された。そしてそのまま首を絞められる。

「まったく、こんな所で何やっているかと思えばまさか少女誘拐とはな。まったく、あんた生粋のロリコンか？」

学生はふざけた軽い口調で言うてくる。

「わ、私はそんなことっ・・・」

「していないとは言わせないぞ。天井亜雄。てめえがその助手席にいるNo.20001打ち止めによるウィルステロの計画はとつくのとうにばれてるんだ。いい加減お縄に付け」

何でこんな学生がそんなことを知っているのか。頭の中で様々な思考が錯誤したが強くなる首締めを考えられなくなる。このままじ

や命が危ないと思い、懐にしまつてある拳銃を確認する。

「……打ち止めのウィルス解除はどうすればいい？」

「……」

私は答えない。答えないようにする。チャンスが来るように。

「答えるって言つてんつ……」

学生が私の顔にだけ意識を集中させた瞬間。すぐさま拳銃を取り出し発砲する。距離は実に30cm。必中距離だ。事実、銃弾は学生の腹部に命中した。のだが。

「なつ……何で……」

銃弾は3発、学生の腹に決りこんだはずだ。しかし学生は倒れるそぶりも見せない。それどころか全然平気のようだった。

「残念だったな、これでもこちらは化け物なんでね」

私はわなわなと震えだした。最後の反撃手段も潰えた。もう、命はないだろう。虚しい感情がわき上がった。今まで死なないように努力していたのにこんな最後になる、バカらしかった。何だったんだ。私の人生は

「……もう、終わりだ……殺すなら殺せ」

あきらめて命を投げ出す。此処まで言ってしまうとある意味ですが、すぐさま動脈を圧迫されて死に至ると予想したが。

「何言ってるんだ。殺すわけないだろう?」

予想外の回答が帰ってきた。とたんに首を絞める力がゆるむ。

「何を言ってる・・・」

「あんたみたいな優秀な科学者、死なすには惜しいんでね、雇おうかと思ってるな」

この学生の言っていることが分からなかった。何せ唐突に私を雇おうと言ってきたのだ、驚かすにはいられない。

「だが、私には借金もある。物騒な勢力ともつながりが・・・」

「そんなの俺の組織が何とかしてくれるさ。俺の所属は大組織なんでね。給料も良いし、待遇も良いぞ?どうだ?」

願ってもみない話だった。これを断る理由はないだろう。だが、1つ懸念がある。

「だが、私を雇えば学園都市を敵に回すことになるんだぞ?」

そんなことまでして雇おうと言つのならまた学園都市の敵対勢力に違いない。それだったら話は別、ごめんだった。

「はっ、俺ん所の組織は超親学園都市派の諜報組織「赤光の黒十字」だぞ?そんなの問題にならん」

学生はそう言ってけらけら笑う。しかし「赤光の黒十字」、世界

の8割の情報はこの組織に集まっているとさえ言われている組織にこんな学生がいて、そんな学生に勧誘されることになるとは・・・縁は異なるもの味なものだ。まあこの際助かるんだったら何でも良い。

「じゃあ・・・頼むとするか・・・」

「商談成立だな」

こうして、私は命を救われた。

天井亜雄SIDEOUT

SIDE数馬

「とりあえず、打ち止めのウィルスどうにかしろ」

「すまないが無理」

「殺すぞ」

なんやかんやで勧誘成功しちゃったが、何だよ打ち止め救えないのかよ。

「一方通行が来るのを待つしか・・・」

「こんな所にイヤがったか・・・天井・・・っておめエなんで天井と一緒にインだよ?」

ナイスタイミング一方通行!!

くとにかく超特急で説明中!!」

「とにかく一方通行はウィルスの解除を頼む!!」

「・・・あア」

一方通行はベクトル変換で打ち止めの脳は信号を書き換え始める。  
お邪魔してはいけない。

「で、問題はまだあんだな」

「そうなんだ・・・」

この天井<sup>バカ</sup>、学園都市の敵対勢力と結託して今回の事件を起こしたのだ。と言うことは失敗した場合、暗殺部隊みたいな奴らは用意してあるだろう。しかも寝返ったのならなおさらだ。

「お前の服に盗聴器仕掛けられていたし、多分商談内容聞かれていただろうな」

「だが赤光の黒十字のメンバーの君には手を出せないんじゃない・・・」

「学園都市の仲間を敵だと考え込んでるに違いねえから多分その理屈は駄目だ」

そう言いつつ俺はデザートイーグル2丁を用意する。



「銃撃戦は間違いないな」

「私はあまり射撃に自信はないぞ」

「役立たずが」

天井はあんまり使えなさそうだな。しょうがない、ここは1人で奮戦・・・

「どわあ!?!」

天井が素っ頓狂な声を上げる。銃弾が飛んできたのだ。早くも刺客の登場だ。

「畜生が、やるしかねえのかよ!?!」

まず最初に一方通行と打ち止めの安全の確保。うまいことにちょうど車の影になっていて当たりそうにはない。で、敵兵力確認。

「1、2・・・8人か。結構間隔が1人1人離れていやがる。能力で全滅させるのは難しいか・・・」

なお銃弾は飛んでくる。とりあえずは応戦だ。デザートイーグルは威力が半端ではない、その上使用銃弾が学園都市製のシヨックラッサー。まさに鬼に金棒である。

「ファイヤ!!!」

まず一撃。命中。ザクロが1つ出来る。このまま次に行こうとするが相手もプロ、直ぐに反撃される。

「・・・面倒くさいな」

ここで能力を使用する。相手で一番近くにいる2人を選ぶ。ぎりぎり射程距離なのでOK。そうしたら能力使用。

首の動脈を重力で押しつぶす。

「2人撃破」

「すごいな・・・」

天井も<sup>バカ</sup>啞然。

「よし、次は・・・」

目標を再度定めようとする。が、

敵側の遮蔽物に誰かの銃弾が当たる。

「なっ、誰だよ!!」

「不味いな、芳川だ・・・」

銃弾が来た斜め後方を見てみればアニメの通りの姿をした女性が

いる。本当だ芳川だ。しかも隠れもせず堂々と立っている。

「バカだろ、彼奴バカだろ」

まさかとは思うが困じゃないだろうな。困になろうとしているんじゃないだろうな！？そんな嫌な気がするので芳川を見ると、その視線は打ち止めと一方通行に向けられており、その表情は申し訳ないと言っているようだった。

「不味い!!」

敵側の1人が芳川に銃撃する。俺はすぐさま芳川に向けられた銃弾を重力をおおきくして叩き落とす。とりあえず守り通せた。芳川は驚いた表情を見せて俺を見る。だが無視だ無視。

「よし、次だ次!!」

1人、また1人、敵側の人数を減らしていく。そして最後の1人を

「撃破……」

終わった。何とか終わった。一方通行も無事だし、良かったよかつ……

ダズン!!

「なっ!?!」

銃声が響く。後ろを見るとそこには壊されていない建物から狙撃

した敵がいた。しかし敵が持っている銃は狙撃には向かない拳銃。その上、こちらまでの距離は20m。当たるはずがなかった。しかし運命は非情だ。

「一方通・行・？」

俺に向けられたはずの銃弾は、一方通行に当たったのだった。

一方通行&打ち止め&数馬(後書き)

ご意見感想お待ちしております。

## 8月の終わり（前書き）

更新です。ぶっちゃけ今回、信じられないほど短いですがこれだけは書いておきたかったので更新しました。本当だったらもっと時間があるときにたくさん書きたいですがプライベートの時間もあまりないので。

## 8月の終わり

最悪の展開であろう。原作の展開通りになることを阻止しようとした数馬の奮闘虚しく、一方通行は銃弾に倒れた。

「そ、そんなっ……」

数馬は愕然とするしかない。隣では天井亜雄も芳川も呆然としている。数馬は嘆き崩れた。自分の無力さ、不甲斐なさに憤りを感じる。

「くそがあ!!」

そして数馬の怒りの矛先は銃弾を放った敵に向けられる。相手は彼の殺気に恐怖したのか逃げようとする。

「させるか!!」

能力を使い相手の足の筋肉を重力で押しつぶす。するとたちまち敵はすっころぶ。逃げ足が無くなった相手に数馬は間髪入れずに2丁のデザートイーグルを連射した。

「死ねえい!!」

6発の銃弾が敵の体に決りこむ。これでもう絶命しただろう。しかし数馬はそれでも気が済まない。

「死ね、死ね、死ね!!」

敵の死体に弾切れになるまで銃弾を送り込み続ける、その数14発。それを撃ち終わっても数馬はマガジンを換えてまで打ち続けようとする。

「やめなさい」

しかし、マガジンを付けようとした手を芳川に止められる。

「離せ!! 離せ!!」

「もう、やめなさい。そいつはもう、死んでいるわ。あなたが誰だか知らないけど、一方通行の友人みたいね」

「そうだよ!! 友人みたいなもんだよ、それをこいつが!!」

数馬は芳川の手を振りきってマガジンを取り付けようとする。

バシイ!!

しかし、数馬が撃ち始める前に芳川が彼の頬を強くたたいた。

「分かっているわ。確かに、そいつは許せないかもしれない。でもね、もうどうすることも出来ないわ。そいつはもう死んでいるの。死んだ相手にいくら銃弾を撃ち込んだって、復讐にも報復にもならないでしょう?」

「.....」

「そんなことをしている暇があったら、銃弾を受けた彼を助けるのが先決でしょう!?!」



そう言いながら芳川は倒れている一方通行を指さす。見てみれば天井亜雄はとつくのとうに一方通行の看護に当たっている。

「分かった……」

数馬は静かに頷く。芳川はこわばらせていた顔を緩める。

「さあ、早く治療しましょ？彼を」

そう言い芳川は一方通行の元へ行く。数馬もそれにつられていく。

「被弾箇所は額。喰らったのはグロック19。ぎりぎりまで打ち止めのウィルスの解除に成功、反射に入れたのか頭蓋骨の中まで行っていない。だが……」

一方通行を先に見ていた天井亜雄はそこで言い淀む。そしてその言葉の続きを芳川が言う。

「確実に前頭葉に障害を来しているという訳ね……」

「最悪だな……」

数馬がはき出すように喋る。確かに状況は最悪だった。携帯電話は全員が全員、電池切れという事態。天井の車を使って病院に運ぼうにも数馬がエンジンをぶっ壊していて使い物にならない。

「とにかく出血を止めることが第一ね」

芳川は懐から止血剤と取り出すと、一方通行の額に振りかける。これで出血は一時止まる。数馬としては本来だったら何でも治癒してしまう万能救急スプレーを使いたいところだがこんな時に限って持ち合わせていない。

「後は、病院に運ぶだけだけど・・・運搬手段が無いんだ」

天井が額に指を当てて悩みこむ。一方通行の絶対安静させた方が良いこと考えると背負って運ぶのは余りにも振動が大きい。その上、打ち止めも打ち止めで安静にさせておいた方が良い。

「そうね・・・」

芳川もこれといって良い策がない。八方ふさがりという状況と思われた。しかし、神はこういうときに限って幸運を授ける。

「どうしましたか？」

タクシーが、ちょうど裏路地に入ってしまったタクシーが、偶然数馬達を見つけたのだ。

「一方通行は大丈夫なんだろうな!？」

病院で数馬は手術室から出てきたカエル顔の医者、冥土返し（へブンキャンセラ）に鬼の形相で問い詰める。冥土返しはゆっくりとした口調で返事する。

「君は誰に向かっていているんだか。此処は僕の戦場なんだよ?必ず帰還してみせるさ、今まで1人ぼっちで戦ってきた患者を連れてね」

冥土返しはゆっくりと微笑む。数馬もその言葉に落ち着きを取り戻す。

「だが、前頭葉の障害はどうにもならないのか?」

「それはね、さすがに完治するのは無理だよ?でも、他の方法でおおかたの機能を取り戻してみせるよ」

数馬は思わずミサカネットワークのことかと言おうとしたが、何故知っているのかと聞かれると後々やっかいなので黙ることにした。

「そうか・・・それなら、な」

彼はそう言いながら芳川と天井の方に振り返る。2人とも安堵の表情が見受けられる。

「じゃあ、俺はこれで失礼するでしょう。天井、お前に関しては後13分後に迎えが1人来るからそいつについて行け。カミソリのような眼をしているから一発で分かる」

数馬はそう言い残すと手術室から離れていく。しかし、見えなくなる途中でふと何か思い出したように立ち止まり振り返る。

「ああ、それと芳川。お前の隣に革製のバッグがあるとと思うけど、その中結構な金があるから貰っといってくれ」

えっ、と芳川は驚き暇もなく数馬は階段を下りて行ってしまふ。

芳川が急いでバックの中を見ると、そこには諭吉、一万円札の束が大量に入っている。全部合計すれば6000万はするだろう。

「一体……何なのかしらあの少年。一方通行の友人とか言っていたけど」

「さあな。まあ私にとつちや救いの神みたいなものだ」

芳川の疑問に、天井亜雄が隣でつぶやく。いつかまた会うことになることになるが、その時はやっぱりかいごとに巻き込まれるのも知らずに。

「さて、帰ろうか……」

時刻は午後5時近く。辺りはもう、夕暮れ。このまま、ゆっくりと、8月31日の地獄は終わるであろう。そう数馬は思った。しかし運命はそう甘くない。

「あっ……」

それはこんな時に限って牙をむいた。

「宿題やってねえ……」

まだまだ一波乱ありそうだった。

## 8月の終わり（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

徹夜 始業式 着替え ガブリ！！（前書き）

更新遅れました。本当に申し訳ありません。それと地の文を多くしてみましたので、何かおかしな点がありましたら、ご報告願います。

## 徹夜 始業式 着替え カブリ!!

「ふふふ・・・夏休みの宿題は始業式直前に済ませる物なんだよ」

9月1日午前3時4分、数馬はそうつぶやきながら自宅にて宿題に奮闘していた。あの後、病院からダッシュで寮に戻り大急ぎでやり始めたが宿題の量は多かった。

「姫神に手伝って貰おうにももう小萌先生の所に行っちゃっているし・・・」

数馬が帰ってきて机を見てみたら姫神の置き手紙があり、小萌先生のマンションに引越すと書かれていた。数馬としてバッドタイミングである。

「後・・・この世界史のテキストが終わったらもう完了だ」

意外にも数馬は名門大学の出だ。高校1年生の問題なんかは簡単である。それでも大量にある宿題の前には大苦戦を強いられた。が、あともうちよいである。

「えっと、第1次世界大戦中、満州虎頭要塞にてソ連軍の満州侵攻を4ヶ月間膠着状態にさせた指揮官は誰か?・・・なんだこりゃ?」

ただし、自分の世界と違う歴史の問題を短時間で解くのは不可能だが。ちなみに答えは栗林忠道である。



「ね、眠い……」

結局徹夜をしてしまった数馬。時刻は7時10分。登校時刻が8時15分なのでかなりぎりぎりである。

「今頃、窓のないビルではごたごたとした暗い話で盛り上がっているんだろうな」

窓のないビル。原作においてアレイスター・クロウリーが本拠地としているビルである。第6巻では魔術師が学園都市に侵入したので大騒ぎのはずである。

「その時、上条さんと魔術師をぶつけようじゃないか的なこと言っていたが、俺には関係無い」

そう、思いながらてきばきと登校の準備をする数馬。しかし、そんな予想とは裏腹に事態はとんでもない方向に進んでいたのだ。

今から2時間前。窓のないビルの密室の部屋で、シヨクコン結標淡希という  
テレポーターにエスコートされ土御門がテレポーター転移してきた。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか」

土御門が話しかけた先には赤い液体に満たされた円筒があり、その中には手術衣を着た男がさかさまに漂っていた。

「構わぬよ。侵入者の所在はこちらでも把握している。これを使わない手はないだろう。若干ルートを変更するだけでプラン2082から2377まで短縮もでき・・・」

「言っておくが」

ばん、と土御門は手に持っていたレポートを円筒のガラスにたたきつける。

「こいつは流れの魔術師じゃない。シェリー・クロムウエル。れつきとしたイギリス清教、必要悪の教会ネセサリウスの人間だ。アウレオルスの時みたいにはいかないぞ」

土御門はしゃべり続ける。

「だからあの時、必要悪の教会から魔術師を送るという申し出を断ればよかつたんだ！！」

ついには赤い円筒のガラスを思いつきりたく。本来だったら割れてもおかしくはない威力だが、特殊ガラスなので傷ひとつつかない。それどころか土御門のこぶしに血がにじみ始める。

「イギリス清教は協定を組んでいるんだ。そう無碍にはできないさ」

アレイスターはそう言いながらつつすらと笑う。

「まあ、とにかく俺がシエリー・クロムウエルを討つ。魔術師が魔術師を討てばイギリス清教との亀裂も軽くなるだろう。まったく、これでスパイは廃業だ。心理的な死角にいるからこそスパイは成り立つのに、ここまで動けば必ず目をつけられちまうからな」

そう言い土御門はため息をつく。実際、収入が減少するのだからため息をつくのもわからないではない。

「いいや、君は手を出さなくていい」

アレイスターの言い放った言葉に土御門は凍りついた。何を言っているのかわからない、そんな真理に彼はなった。

「君は手を出さなくていいと言っているんだ」

「・・・本気で言っているのか？」

土御門は正気を疑うかのように聞く。

「可能性は決してゼロじゃないんだ！水面下の工作戦なんて綱渡りのようなもんだ。下手したら戦争になるかもしれない。ただでさえロシアとの関係が悪くなっているんだ。こんなときに戦争なんかやっけていられるか！！」

夏の真っ只中、フィンランドに対して流れのロシア魔術師が、テロ攻撃を仕掛けた。しかし、ドイツ・日本政府が協力して結成した諜報機関「赤光の黒十字」の主力部隊の攻撃により攻撃は失敗。その際、たった1人生き残ったロシア魔術師が戦闘時に学園都市の能

力者がいたと証言。これにより両国は関係が悪化したのだ。

「アレイスター、お前は一体何を考えている？上条当麻に魔術師をぶつけるのがそんなに魅力的か。彼奴の右手は確かに魔術師に対するジョーカーだが、教会全体を破壊できるわけがない！！」

「プラン2082から2377までを短縮できる。理由はそれだけだ」

土御門はアレイスターの言葉に息が詰まる。此処で言うアレイスターのプランは1つしかない。

「虚数学区・五行機関の制御法か」

土御門は吐き捨てるようにつぶやく。学園都市が出来た当初の「始まりの研究所」と言われているが、本当にあるかも分からない幻の存在。実際にはそれは実在する。ただし、制御なんかは出来ておらず、何をするのか分からないまま、彷徨っているが。

アレイスターは何としてもその制御法を見つけない。いやもう制御法はつかんでいるのかもしれないが、実行するための材料が絶対数が、足りないのだ。それならばと、彼は実行するための手順を1から作り上げていく。そして、その中心には1人の少年がいる。上条当麻だ。

彼は最初から手順に盛り込むつもりだった。だが、禁書目録などの魔術戦までは考慮していなかった。それでも、アレイスターは、そんなイレギュラーな出来事を利用して手順を短縮するつもりなのだ。今回のシエリー・クロムウェルもそうなのだろう。

「その程度のためにか？」

「この街の軍事力や影響力を考えればその程度とは呼べないはずだがな。何せ世界を引き裂くほどの暴れ馬だ、手綱は直ぐに握り直した方が良好だろう」

迷い無く言うアレイスター。だが土御門は納得しない。

「それでも、何も知らない上条当麻には荷が重すぎる！！」

「別に、彼だけに任せる訳じゃない。彼はある種の勢力を形成している、その中に強力な奴がいるはずだ」

アレイスターの一言で、土御門は直ぐにそれが誰だか分かった。だが、土御門としてはもつと納得出来ないものだ。

「数馬光太郎か・・・」

「そう。彼はプランの中で最もイレギュラーであり、なおかつすばらしい利用価値がある。先ほど言ったロシア魔術師の証言も、彼のことだ。彼自身は能力は優秀、体術や射撃、何をとってもトップレベル。その上、戦術戦略の両方を正確に掴むことが出来る。さながら第1次世界大戦開戦直後に登場したジークの様だよ」

「あいつが零戦か。まあ、多くの連合国の空を守り通した機体と、上条当麻を守り通そうとする彼は似ていなくもない」

土御門はそう言いながらも、ふざけた話だ、と心の中で舌打ちをする。

「そうさ、だから彼にはもつと利用させて貰うつもりだ」

アレイスターはそう言い、微笑しているのか苦笑しているのか分からない笑みを浮かべる。

土御門はそんなアレイスターを苦々しげに見ていた。コードネーム、Zeroと書かれた数馬光太郎の書類を握りしめながら。

「だるい……」

ぼそつと数馬はつぶやく。ちなみに此処は学校の教室。隣には上条と青髪ピアスがいる。

「数馬、頼む、分かんない所教えてくれ!!」

「数ちゃん、わてからも頼むわ」

そう言つて2人は世界史のテキストをずっと持つてくる。もう授業は始まる寸前だというのにまだあきらめきれないらしい。

「だいたい青髪、お前小萌先生の補習に残りたくて忘れたんだろ？別に教えなくても良いだろう」

数馬の言葉に青髪ピアスはすぐさま言い返す。

「それがや！！何か分からんけど補習が小萌先生じゃのうて、災<sup>リ</sup>誤になつてもうたんや！！小萌先生やない補習なんて行く意味はないんや！！」

嘆き悲しむ青髪だったが、数馬としてはそんなのやってこない奴が悪いので、見捨てることにする。

「悪いが自分でやって・・・」

「頼むわ！！夏休み中に学園都市であつたコミケ学園都市・ve rで買った同人誌50冊やるさかい！！」

「商談成立だな。上条、お前のも教えてやる」

あっさりと考えを変える数馬<sup>バカ</sup>。人間、物につられるとだいたいた承してくれるのだ。

「さて、テキストの問題にある、1933年、世界大恐慌の対策としてアメリカが行い大失敗したニューディール政策の第一弾として行われたのは

#### 緊急銀行救済法

TVA（テネシー川流域開発公社）などの公共事業

CCC（民間資源保存局）による大規模雇用

NIRA（全国産業復興法）による労働時間の短縮や超越論的賃金の確保

AAA（農業調整法）による生産量の調整

ワグナー法「全国労働関係法」による労働者の権利拡大。

この中で32個の多目的ダムなどの建設を中心とした総合開発で、失業者を大量に吸収し、賃金を支払い、購買力を向上させようとした政策は、TVEだ」

ふむふむと、上条と青髪はテキストに書いていく。ちやんと理解してくれているかは怪しいが、数馬はそんなことはお構いなした。

「しかし、当時のアメリカ大統領でありこの政策の実行犯であるルーズベルトより2ヶ月先に政権の座に就いたドイツのヒトラーが実行した全体主義的経済政策と比べると、結果は芳しいものではなかった。1933年に55.2%と最悪の数字を記録したアメリカの失業率は、ニューディール政策のおかげで1937年には24.3%にまで下がったものの、翌年には49.1%にまで跳ね上がっており、25%以下になるのは、アメリカが大東亜戦争を行う1941年以降のこと。これに対して、ヒトラーは、45%もあつた失業率を順調に減らし、第2次世界大戦前の1939年までに、失業者数を20分の1にすることに成功した。

最大の原因は、ルーズベルトには、ヒトラーほどの権力がなかったことだ。ルーズベルトは全体主義的な経済政策を行おうとしたが、アメリカの政治形態は民主主義であり、全体主義ではなかった。ルーズベルトは、ヒトラーのように大胆な公共投資が行えなかった。国内の反対派と妥協した結果、ニューディールは中途半端な形でしか実行されなかった。特に38年には、政府債務の累積を憂慮する財政均衡主義者の声に押されて、連邦支出を削減した結果、GNPは6.3%減少し、純投資も46億ドルのプラスから66億ドルのマイナスに転落したんだ」



数馬の説明に、青髪は55・2%あたりで頭がショートし、上条は全体主義的な経済政策で頭が爆発した。ちなみに、この世界ではヒトラーのことにしても大幅どころかまったく違い、1933年に政権を取り、全体主義的な政策をするも、景気が完全に好転した1935年には共和制に移行したとあった

「……こんなんで大丈夫かお前ら？」

もう滅茶苦茶にやる気が消えている上条達を見て数馬は呆れたようにつぶやく。

「も、もう終わりだ……(や……)」

死んだようにつぶやくバカ共。此処まで来ると哀れに思えてきてしまう。

「授業も始まるし、まあ地獄を見ることだな。後青髪、手伝ってやったんだから同人誌よこせよ」

「うう……数さんは悪魔や……」

俺にとつちや褒め言葉だよ、と言いながら数馬は小萌先生が入ってくるのを確認する。

「はいはい、それじゃさっさとホームルーム始めますよ。授業式まで時間がおしているのです、てきぱき進めちゃいますからね」

小萌先生が入ってきた頃、ほとんどの生徒達は着席している。ただ1人を除き。

「ありや？先生、土御門は？」

「お休みの連絡は受けていませんー。もしかしたらお寝坊さんかもしれませんー」

上条の間に小萌先生は答える。しかし、数馬から考えればどうみただって暗部の関係だと言うことは直ぐに分かる。

(やれやれ、あいつもお疲れ様だな)

そう思い同情するが、彼自身、暗部に巻き込まれようとしているのだから、とてももの悲しい。

「えー、出席をとる前にクラスのみんなにビッグニュースですー。なんと今日から転入生追加です！ー」

小萌先生の言ったことに、まともに話を聞いていなかった生徒も耳を傾ける。

「ちなみにその子は女の子ですー。おめでとう野郎どもー、残念でした子猫ちゃん達ー」

そして女のことという単語にクラスの、特に男子が色めき立つ。数馬としてはこれから起きることに、少しおかしくなってきたてしまふ。上条を見てみれば、彼は彼なりに嫌な気がするのか少し顔が青く、ぶつぶつとしゃべっている。

「い、いけない！ちょっとでも楽しそうだか思ってた自分が行けない！ー！」

「上条ちゃん？何頭を抱えてぶつぶつ言っているんですかー？」

そう、小萌先生に指摘された上条は、ゲツとした顔をして押し黙る。

「とりあえず、顔見せだけですー。詳しい自己紹介とかは始業式が終わってからにしますからねー。さあ転校生ちゃん、どうぞ！」

教室の引き戸ががらがらと開く、そして、数馬の予想通りの展開がそこにはあった。

「なほあ・・・!？」

上条が頭の中が真っ白になり、啞然とする。数馬は予想通り過ぎてついつい気持ちの悪い笑みを浮かべる。このあたりの気持ち悪さに、彼が美男子になっても告白されないということは今はどうでもよく、そこには

三毛猫を抱えた白いシスター、インデックスが突っ立っていた。

クラス全員も困惑している。確かに、彼女の着ている服はこの学校の制服とは全く違う。何なんだ、というひそひそ声がクラス中に響く。

「あ、とうまとかずまだ。うん、ということはやっぱり此処がとうまの通うガッコーなんだね。ここまで案内してくれたまいかには、後でお礼言っておいた方が良いかも」

インデックスはそんなことお構いなしと、ひょうひょうと話す。クラス中の皆はインデックスの当麻、数馬の言葉に、またお前かとも言うように目で睨んでくる。数馬としてもこの視線はきつい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、あれ？なのですよー」

小萌先生も予想外の展開だとも言わんばかりの動揺を見せる。

「ちょ、小萌先生。これ、どうということなんだ・・・？」

上条は問い質すと、小萌先生は我に返った。

「シスターちゃん！！全くだこから入ってきたのですかー！！転入生はあなたじゃないでしょ！？ほら出てってくださいー」

「で、でも、とうまやかずまにお昼ご飯のことを・・・」

小萌先生は聞き耳持たずにインデックスを追い出そうとする。反射的に上条は席を立ち、

「お、おいインデック・・・！！」

「上条ちゃんは、もう、これ以上話を複雑にしないでください！！」

「はっ、はい！！！！」

追いかけてようとするが、小萌先生のいつ泣き出すか分からない怖

さの前に諦めざるおえなかった。小萌先生達はそのま教室の外に出て行く。そして入れ替わりに黒髪の少女が入ってくる。

「ちなみに、本物の転入生は私。姫神秋沙」

姫神の姿を見た上条は安堵した表情になる。

「よ、良かった。地味に姫神で本当に良かった。しかも数馬を暴走させるような巫女装束じゃなくて何の捻りもない地味な制服姿で心底本当に良かった・・・」

「君の台詞には。そこはかたない悪意を感じるんだけど・・・」

転入して早々に、地味地味と連発された姫神は少しだけむっとした。

「インデックスの制服姿か・・・考えただけでも癒される。しかしそれにしても姫神の制服姿、似合っているな。巫女装束も良いがこれもこれで・・・」

そして数馬は数馬で初っぱなから暴走していた。

（なんやかんやで、50分後）

「まったく、始業式抜け出すとはお前も悪だな」

「そう言うお前もついてきているじゃねえか」

今、数馬と上条はがらんがらんになっている廊下を走ってインデックスを探していた。

「くっそ……せっかく違和感無くクラスに溶け込んでたのに……」

「まあ仕方がないだろ。それよりもインデックスだ、インデックス。始業式抜け出して小萌先生にしかられるより、インデックスよる被害が怖い」

そう喋りながら廊下を走っていると、とある部屋からインデックスの声が聞こえる。ドアプレートには保健室の文字。

「こ、この声はあのバカシスター……っ。あの野郎、自分だけ保健室のベッドでぬくぬく状態を満喫しているんじゃないのか？」

「さすがにそれは疑いすぎるだろう」

しかし、数馬がなんと言おうと、上条はドアノブに手を掛ける。上条が酷い目に遭うのだが、数馬としてはそれでも今回は見てみたいものがあるので忠告は無しにしておく。

「おいインデックス！お前がなんで保健室にいるんだ！！てめえが病気だしたらあれだ、万年五月病だああ！！」

ぱーん、と勢いよくドアを開ける上条。彼としては見たら直ぐにお説教タイムにする意気込みだったのだが。

そこには、数馬にとっての幻想郷。つまりはマンガみたいに着替え中の少女が2人もいた。1人は見慣れたシスターだが何故かいつもの修道服ではなく、半袖短パンの体操服に身を包んでいると思われたが、短パンは中途半端にはきかけの状態。2人目はどうもこの学校には見慣れない少女だ。しかし、その恰好はブラウスのボタンを全部外し、半袖の体操服を片手に持ってカチコチになっている、まあつまりはブラジャー丸見え状態だ。

「Oh, God, gave me my happiness, thank you. (おお、神よ、私に幸せを授けてくれて、ありがとう。)」

数馬は最後にそんな言葉を残しぶっ倒れる。上条はもう大慌てだ。それでも、身の危険は感じたので、

「……………えーっと、間違いました!!」

そう言い撤退しようとするも。顔を真っ赤にしたインデックスから逃れることは出来ず。

ガブリ!!!と痛そうな音が保健室に響いた。

「大丈夫だ、頭を鉈でかち割られるよりずっとマシだ」

「上条さんにはその例え方が全く安心できる物ではないのでせうが!?!」

数馬のフォローとは思えないフォローに思わず上条は突っ込む。で、噛んだインデックスはちゃんと修道服を着ており、頬をふくらませている。もう一方の少女もちゃんと他の服に着替えてはいるのだが、何か怯えた状態になってしまった。

「まあ、とりあえず食堂に来たんだから飯でもおごろう、何が良い?」

「しょうゆラーメンと、スタミナどんぶりが良いんだよ!」

数馬の間にインデックスが即答する。その様子に思わず苦笑する数馬。

「ああ、じゃあ俺は・・・」

「上条、お前は自腹」

「なんで俺だけ!?!」

ははは、冗談だ、と数馬は少し笑いカレーを注文する。

「えっと、風斬さんは何が良いかな?」

「あれ・・・私の名前なんて知っているんですか?」

風斬の質問に数馬は答えが詰まる。つつい、原作で名前を知っ



ている物だから呼んでしまったのだ。

「・・・えつとあれだ・・・俺の頭の中には全世界中のとびきりな美人や可愛い女子の名前がインプットされているのさ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

思わず返した答えに全員が沈黙する。数馬自身、この答えは気持ち悪いと思った。

「さて、食券を買おう・・・」

かなり凹んだ数馬が小銭を入れて食券を買う。後ろでは3人が喋り始める。早く料理を持って行こうと数馬が小走りになり始めたとき。

「か、かつか、上条ちゃん！！！！あんた一体此処で何やっているのですかー！！」

「「げ、小萌先生！！！！」

まるで曹操が関羽を見たときのように、まずい、どうするかという顔になる。どうにもこうにも、碌なことが起きない初日の学校だった。

で、学校から出た男子2人と可愛い女子2人。風斬は途中、どこかに消えてしまったのだが、再度再開。せっかくなんで何処かに遊びに行こうということになった。

「地下街か・・・学園都市のは行ったことがなかったな」

「だろ？ついでにあそこにはいろんな学校の学食があるし、費用もかさまないし、その上インデックスの不機嫌も少しは直るだろうしな」

学園都市の地下街は設備が整っており、立派ではあるのだが、数馬としてはわざわざ限定された空間で、戦闘になることだけは避けなかった。

「だが・・・俺がとびきり豪華な鍋を作っても・・・」

「行きたいんだよ！！とうま、かずま！！」

そんな愛くるしいインデックスに数馬の心は0.1秒で折れ、結局地下街に行くことに決定した。

「全員、所持金はいくらだ？」

「私はおかね、持っていないかも・・・」

「私も・・・」

「俺は銀行から降ろしてくれば4000円ぐらいは」

飯食いに行くにはあまりにも少ない、しかもインデックスがいる時点で足が出ることは直ぐに予想できる。

「よし、俺が30万降ろしてくる」

数馬が銀行に行くことになった。

「はい、そこで黄泉川に発見されるといふ悲劇がある」

「何バカのこと言っているじゃん。前のこと忘れたわけないな？」

原作ではATMに上条が金を降ろしていたときに黄泉川に会ったのだが、此処では数馬が遭遇してしまった。前回彼女にあったときには、逃げる追いかけるの関係だったが、運悪く今回は逃げられそうにもない。

「頼む、見逃してくれ・・・」

「嫌じゃん。あのときお前のせいで、散々な目にあっただぞ」

地下街に行く早々、数馬は予定変更をせざるを得なかった。

徹夜 始業式 着替え ガブリー!! (後書き)

ご意見ご感想お待ちしております

## 大能力者へレベル4と魔術師（前書き）

更新です。申し訳ありませんが、短いです。これには理由がありまして、何と私、今日、鼻の骨折っちゃいまして。詳しくは、活動報告で書きますが。麻酔やら、痛み止めの薬やらで微妙にテンション高く、ぼけていますので、頭が全く働かず、こんな感じになってしまいました。お願いします、どうか見捨てないてください。

## 大能力者〈レベル4〉と魔術師

「まったく、面倒ごとは嫌いなんですけどね」

イギリス清教「必要悪の教会」ネセザリウス所属の魔術師レン・アクリウスはつぶやきながら、駅前の大通りを歩いていった。

目の前のTGTを見逃さぬようにしながら。

「シェリー・クロムウェル。3年前に会っただけですが、なかなか複雑な方でした。どうにも怖いな、とは思ってしまいましたがこんなこととしては……」

駅の大通りは凄まじい人の量だが、褐色で、ゴスロリなのに何か荒んでいる、ゴスロリの幻想をぶち壊しにしような女は、普通に目立ってしまう。そんなわけだから、レンは余裕綽々と尾行できた。

「この都市には、まあやつかない警備組織がありますし、とっとと済ませたいんで」

と、レンが喋り終わらないうちに、ドウン！と上空に信号弾が上ががり、閃光が走る。大通りにいた人々は閃光が消えるか消えないうちに、矢継ぎ早に退避していく。

「なるほど……治安部隊による避難命令のための信号ですか。科学が発展している学園都市でも使う物なんですね」

レンは退避する人々に流されないようにしながら、興味深そうにつぶやく。

彼が元々いた世界のイギリスは、科学を放棄して魔術に特化した。通信手段も魔術でどうにか代用できたが、如何せん大人数に対する同時連絡は成功しなかった。そのため、大戦中、イギリスは信号弾を多用していたのだ。そんな経緯から、レンにとって、信号弾はなじみ深い物だった。

「ですが、面倒くさいことに。あちらの警備組織がこうもやってくると、シェリーの捕獲は難しくなりますね」

いつの間にか、人々は居なくなり、残っていたのはレン、シェリー、クロムウエルと、1人の少女だけになった。位置的には、レンから30m離れたところにシェリーと、少女は対峙していた。

「動かないでいただきたいですわね。わたくし、この街の治安維持を務めさせていただいてます、白井黒子と申します。自信が拘束される理由は分かっていらして？」

少女、もとい白井黒子は対峙するシェリー、クロムウエルに話しかける。しかし、シェリー、クロムウエルは大した反応を見せない。何とというか、感情が全くない感じである。

で、たっぷり5秒掛けてから、シェリーはようやく顔を白井に向け

「探索中止。……手間かけさせやがって。畜生が」

明らかに軽蔑している声を出し、白井の眉が動くよりも早く、シェリーは黒のドレスの破れた袖へ手を入れ、何かを取り出そうとする。

刹那、白井黒子はシェリーの鼻先に悠然と立っていた。

シエリーと白井の間には10mはあったはずである。その距離を瞬間的に縮めたのだ。これにはさすがのレンも驚いた。シエリーも少しだけ怪訝な顔をする。

無論、白井はその原理を説明することはしない。レベル4の「空間移動」<sup>レポート</sup>を使って空間を突っ切ったなど説明する必要がないからだ。

白井は手を伸ばし、シエリーの手首を掴む。直後、シエリーの体は地面に倒されていた。あまりにも一瞬でそれが起きたので、レンもシエリーも何が起きたのか分からない。

何とか、シエリーは回避運動として、地面を転がるうとする。しかし

「ですから」

ドドドド！と、ミシンのような音が炸裂する。見れば、シエリーのドレスの袖やスカートの布地を沿うように、釘で地面に縫い付けていた。

「動くな、と申してるのが分からないのですか？」

空間転移による、釘での攻撃方法。その威力、速射性は並の機関銃と同等の威力を誇る。しかし、それを目の当たりにしても、シエリーの表情が変わることはない。それどころか、

その口元が、能面のような顔のその唇だけは、真横へ細く、音もなく笑っていた。



「な……」

かえって、それは白井を驚かし、不気味に思わせた。その時、白井のすぐ真後ろで地面が爆発する。

「な……ん……です……っ!？」

白井が驚き、振り返る暇もなく地面の隆起に巻き込まれ、吹き飛ばされる。彼女はアスファルトの固い地面にたたきつけられた。

「ぐ……っ!！」

背中に衝撃と、痛みが来る。アスファルトの堅さは、少女の背中を大いに痛めつける。それでもどうにか、背後を見た白井は驚愕した。

巨大な腕。それが地面から2m近くの大きさで、生えていた。しかし、腕と言っても、辺り一面のアスファルト、ガードレールが混ざり合って、粘土のように形成されたものようだ。

(ああゝあ。こんなおおっぴらに魔術なんか使いやがって、後で迷惑するのはこっちなのに……)

レンはこっそりと観戦しながら、そんなことを考える。彼の片手には、いつの間にか、ミネラルウォーターのペットボトルが握られている。

で、戦況はそこまで芳しくはない。白井にとっては。ただでさえ、得体の知れない侵入者だというのに、さらには訳の分からない能力まで使用してくるのだ。白井も流石に形勢不利と見たのか、撤退を

開始しようする。

「ま…ずい…体勢を立て直さないと…」

そう言い白井は立ち上がろうとするが、地面の隆起物に足首が挟まってしまい、思うように足が動かないのだ、ちよつど何かに噛みつかれているような感じである。

しかもその隆起物は、徐々に穴を狭めており、足首を食いちぎろうとしているようにも、見える。

(ま、ず…い…)

白井の空間転移。それはすばらしい物である。しかし、そんなの能力にも弱点はある。この空間転移は三次元の枠を越えた、十一次元の枠の中で自分の座標を特定、そこから移動ベクトルを作動させ、転移する。

そのため、普通の能力者の「炎を出せ」などと比べて格段の複雑な命令文コマンドが必要になるのだが。その場合、冷静に精神を落ち着かせなければ、つまり激痛や焦燥などの感情があれば、命令文を作成できず、能力を使うことが出来なくなってしまうのだ。

この時、アスファルトが白井の足首に食い込んだだけで、白井は能力を封じられたと言ってもいい。逃走手段をふさがれた白井に、腕がユラリと、狙いを定めるように近づいてくる。

地面に縫い付けられたシエリーは片手にチヨークを持っており、地面によく分らないオカルトじみた物、魔法陣が書かれていた。そしてとどめとばかりに、チヨークを宙に曲線を描くように振る。すると、巨大なその腕は指を強く握り、振り下ろそうとする。

「あつ…ひいつ…」

それでも、それでも諦めきれずに、白井は逃げようとする。それを阻止せんとするように、アスファルトは足首に噛みつく。余りの激痛に、白井は目を閉じた。

その時、ベキバキゴキ！と何か不気味な音が、目を閉ざした白井の耳に聞こえた。

「えっ……？」

それは、白井の足首が砕けた音でなく、瓦礫で作られた腕でもない。

それは、腕を何かが切断した音だった。

(え……、な……?)

一瞬、白井は何が起きているのか分からなかった。恐る恐る、目を開ける。そこには、水平に手首を切断された、腕があった。

「な、何が…」

思うまもなく、足首に食い込んでいた隆起したアスファルトが取れる。急に枷が外れたので、思わず後ろに転がってしまう。切断された手首は、その衝撃を受けたとたんに結合が解け、ばらばらと元の部品に戻ってしまう。

ブウン……ツー！と、蚊の飛ぶ羽音の何千倍にもしたような不思議

議な音が鳴り響く。ふと、見上げればそこには黒い鞭のような、何十mもあるようなレイピアのような物が空中を漂っている。しかも、それは砂鉄で出来ており、膨大な量が磁力が何かで動いている。

いわば、超高速のチェインソーであるそれは、元の持ち主の所に戻っていく。

「まさか、磁力で、操るって……!!」

白井は砂鉄の塊が戻っていく方向を見る。

そしてそこには、学園都市の電撃姫、御坂美琴がいた。

キーン、と小さな金属音が鳴り響く。御坂の親指が一枚のコイン、いつぞやに数馬が贈呈した物、を弾いた音だった。コインはゆっくりと彼女の頭上を舞う。その間に、彼女は言った。

「何の騒ぎか知らないけど」

手首を遮断された腕は最後に一撃しようと、白井に殴りかかろうとする。だが、それより先に、御坂の親指に弾かれたコインが乗った。

「私の知り合いに、手え出してんじゃないわよ、この野郎！  
!!」

瞬間、彼女の異名、超電磁砲レールガンの所以となる、一撃が撃ち出された。

コインは音速の3倍の早さで突っ込み、光の尾を引いて腕に突き

刺さる。その凄まじい衝撃に、腕は一瞬で折れ、繋がっていたと思われる頭部も巻き込み、粉々に砕ける。本来なら、これでこの一撃は終了する。本来の、普通のコインであった場合だ。

しかし、数馬から贈呈されたコインによる一撃は、彼女に「破壊姫」という別の異名を付けた。その、TNT換算190%、現時点で量産可能な火薬の中で最高威力を誇るヘキサントロヘキサアザイソウルチタンを一杯凝縮し、作られたコインは、着発した瞬間、半径20mの空中において大爆発を起こした。

轟音も、少し遅れて響き、爆発の余波も凄まじかった。

「す、すこい……」

白井はあんな状況にあっても、引き続き周囲を警戒している。が、心の大半は御坂美琴のすごさに惚れ惚れしている。

対して、御坂美琴は危険は去ったとばかりにのんびりと、白井の元へ歩いてくる。

「あー、黒子。もう堅くならなくても良いわよ。あの腕みたいなもの、困だったみたいね。煙幕に隠れて、あの女、逃げ出していると」

刹那、もう一本の腕が、<sup>トラップ</sup>罠が作動したかのように、御坂の後ろから出現した。

「なっ……!!!!」

御坂はすぐさま超電磁砲を放とうとするが、それも間に合わないまま、腕は御坂達に振り下ろされ、御坂と白井を叩き潰した。

はずだった。

「一体…どうなっていますの…？」

見れば腕には、4本の剣が深く、深く刺さっていた。その剣は、透明であり、向こうが透けて見える。つまりは、水だ。腕が崩れると共に、水の剣も水に戻り、地面に流れてしまう。御坂と白井は、唯々、それを見ているしかなかった。

「やれやれ、どうやらシェリーは面倒くさい相手になりそうですね」

レンは駅の大通りを離れて、そこら辺の道をぶらぶらと歩いていた。手には、空になった2リットルペットボトルが3本ある。

「しかし、先ほどついつい、水剣を投げてしまいましたか…：少々、不味いことでしたかね。まあ女性を傷つけないだけマシですが」

結局、シェリーは見失ってしまったため、また探す羽目になるのだが、レンとしてはとある奴が接触するような気がした。

「あの変態野郎、多分、シェリーと出くわしそうですね。フラグ的に」

ぶつくさ言いながら、レンは歩き出す。「必要悪の教会」からの命令、シェリー＝クロムウエルの捕獲、もしくは抹殺を遂行するために。

大能力者へレベル4と魔術師（後書き）

ご意見感想、お待ちしております。

## 地下街戦（前書き）

更新遅れて誠に申し訳ありません。学校の期末テストという地獄からやっと抜け出せました。それでも駄文です。ごめんなさい。許してください！！



## 地下街戦

「逃げる〜逃げる〜俺1人〜」

またもや道路を突っ走っている数馬。黄泉川にしょっ引かれたが、無理矢理脱走。ただ今絶賛、アンチスキルから逃亡中!!!

「こら〜!!!待っじゃん!!!」

後ろからは前回と同じく黄泉川のダンプが来ている。

「I c h h a s s e e s ! (嫌だね!)」

そう言い、数馬はM67破片手榴弾を2秒間ためて、ダンプに投げつける。そうすると3秒後、直ぐに爆発が起こる。

「なあっと!!!あの野郎、手榴弾なんか投げて来やがったじゃん!  
!鉄装、こつちもR P G - 7用意!!!」

「はっ、はい!!!」

車体の後ろに乗っている鉄装が、奥の方からロケット砲のような物、実際には無反動砲だが、を取り出してくる。

黄泉川はぐいっとダンプの窓から身を乗り出すと、即刻弾頭を発射する。

ボグワア!!!

「なっ、黄泉川の野郎、RPG-7なんて用意してんのか……」

弾頭はつまりこと数馬の前方に着弾しており、彼の逃げる速度を遅らせる。しかし、数馬も負けては居られない。

「これでも喰らえ!!」

数馬は高速で接近するダンプに、背中からフルメタの某軍曹よろしく、ブローニングM2重機関銃を取り出しぶっ放した。（実際には手に持って射撃できません。出来たら化け物だよ）

「なあああああ!？」

黄泉川も当然のごとく絶叫。で、撃ち放たれた弾丸、98発はダンプ前面に直撃。それだけでも大破なのだが、撃破とばかりに1発が跳弾となりタイヤに命中、横転した。

「あっははははっはっは!!この俺を捕まえるなんて12年早いわ!!」

捨て台詞を残し、ダッシュで走り去っていく数馬。横転したダンプのドアから黄泉川は不満げな顔で出てくる。

「畜生……また逃げられたじゃん……」

後部からも鉄装がひょっこりと出てくる。

「で、でも……2度目なのにこちららも怪我してませんし、向こうに

気遣って貰われているような……」

「確かにそうじゃん。……まったく、学生に嘗められるとは私も落ちぶれたじゃん」

がつくりと頂垂れる黄泉川。そこで鉄装がフォローする。

「それでも、先輩、意外と楽しんでませんか？普段は結構冷静に対処するのに、あの学生を追跡した2回はすっごく、はしゃいでいましたし……」

「まあな。今時、自らの足で逃げる根性のある奴なんて、そうそういないじゃん？どうもそういう奴を相手にすると楽しくなっちまう」

にやりと笑う黄泉川。いかにも、仕事に充実感があるといった顔である。

「いやはや、まったくもってやつかいだった……」

数馬は今、全力ダッシュで上条達を追跡している。多分、地下街に行っているはずだ。この場合、上条だったら律儀に待っていてくれるかもしれない。が、彼の隣には暴飲暴食シスターがいる。多分10分と待っていられないだろう。

「ここから後5000m。ぶっちゃけ、つまらない。だから独り言を。」

まず1つ。何か俺は幼女に対する感情がおかしくなってきたような気がする。インデックスとか打ち止めとかのへの対応が、何とか変態紳士というか。

2つ。犬組、猫組どつちのWORKING!!も神。

3つ。種島ぼぶらかわいいよ種島ぼぶら。

4つ。白藤杏子さん、美しいです。

5つ。宮越華様、ど(以下18禁要素満載なので略)ああ、ちなみに宮越華様はWORKINGの原作者である高津カリノ様のWEB漫画ですので気になった方はどうぞ。

以上、何だが此処で言って良かったのか？」

と、まあ何やかんやで地下街に到着。そのまま数馬は入っていく。地下街の構造は複雑であり、強度は相当な物のようである。

「ふへえ〜こりゃすごい。確かに、地下世界つつてもおかしかねえ」

中央、その他に複数の場所にも極太の柱があり、これが地下街を支えているようだ。つつい、これ爆破したら面白いことに、何て考える数馬ダークモードがいる。

「よし、上条さん達が何処にいるか探さない」とうま!!此処が良  
いんだよ!!」……いたよ」

見てみれば20m程度のファミレス?のような所にインデックス達がいる。今まさに店に入ろうとしている所だ。数馬はすぐに駆け寄る。

「おーい、ちよつと待ってくれー!!」

「あ、かずまだ!!何処行っていたんだよ!!こっちはすごく迷惑だったかも」

出会い頭にさんざんなことをインデックスから言われてしまう。それでも彼は笑顔を絶やさない。

「ごめんな、ちよつと色々あつてね。金は持ってきたから、お詫びにいくらでも食って良いぞ、お姫様」

そう言い、インデックスの頭をなでなでする数馬。インデックスは大喜びだ。

「ほんと!?!とつま、やったよ!!かずまが奢ってくれるって!!」

「お、おい数馬、そんな奢って貰うのは流石にこちらとしても申し訳ないんだが……」

しかし申し訳荘になる上条をよそに、数馬は全然構わないとでも言うように話を進めていく。

「風斬さんもどうですか?なあに、こっちは腐るほど金があるですから、どんどん食べてください」

「ええつと……じ、じゃあお願いします……」

「よし、じゃあ皆、入るぞ〜」

そのまま店に入っていく数馬とインデックスと風斬。

「ちょ、ちょっと待ってくれ!」

上条も後を追うように入っていく。地下街の飯はどのような味なんだろうか。

「あ〜美味しかったあ〜お腹ポンプンのポーン」

可愛らしい声と共に店から出てくるインデックス。その隣には風斬が少し微笑みながら歩いている。

「可愛いなあ、インデックスは……」

「数馬、お前、土御門と同じロリコン……」

「なっ、失礼な! 別にロリだけが好きな訳じゃない! 俺は貧乳、巨乳、美乳、美脚、眼、太もも、背が高い、背が低い、バニーガール、看護婦、シスター、メイドさん、ゴスロリ、軍服、獣耳（特にキツネ）、黒ニーソ、網タイツ（以下略、だとしても何でもOK、なだけだ!」

公衆の面前でそんな発言をする数馬。そしてそれにどん引きする

上条。そして輪を掛けて白い目を向ける半径5mの人達。

「お前、なんつーこと言っているんだ、公衆の面前で堂々と!!」

「構わないよ、そんなこと!!」

ぎゃーぎゃーと喚いている男<sup>バカ</sup>二人を差し置いてインデックスと風斬の2人はゲームセンターに着いた。

「なになに？此処なんかテレビいっぱいあるんだよ!!」

インデックスとしては、こんなゲームだらけな所に来たことがなかったのか、相当楽しそうだ。

「おお!!こんなテレビ見たの初めてかも!!」

しかし、若干、ゲームとテレビを勘違いしているようだ。

「いいなあ、ああいうの」

それにさえ可愛いと感じる数馬はもう末期だろう。

「あの、それテレビとは違うんだけど……」

風斬がおどおどしながらもツッコミを入れる。ほのぼのとした空気がまた良い物である。

ピリリリリ、ピリリリリ。

突然、上条の携帯の着信音が鳴る。姫神からのようだ。

「あつ、何だ姫神？……あれ、何か聞き取りづらいな。…って切れちまった。ここ地下街だからな」

「……そうか」

数馬に悪寒が来る。それも凄まじく。昔、原作とアニメで照らし合わせてみると、確か、確か、電話が来てから10分もたたずに、状況が危機的なるはずなのだ。

ここで確か、としか言えないのは、数馬自身が、運悪く、原作の6巻を行方不明にさせてしまい正直、情報源がアニメしかないからだ。ぶっちゃけ何が起こるか分からないので怖い。

「どうしたんだよ数馬？眉間にしわなんか寄せて」

「すまん、上条。ちょっと用事思い出した。10万渡しとくからそれで楽しんでくれ。じゃ」

数馬は上条の手に10万を乗せると、大急ぎで走り、直ぐに消えてしまった。

「なつ、ちよ、数馬！……どうしたんだ？一体」

1人残された上条は不思議そうに頭をかいていた。

く地下

周りにはいくらかのアンチスキル専用の装甲車両がある。



「ああもう、今は逮捕している場合じゃないんだっつーの!！」

「関係無いじゃん。まったく、お前のせいでダンプ2台が……」

今、数馬は黄泉川の所に自ら行っていた。そして、当たり前のごとく逮捕。

「それこそ、どうだっかっていいんだよ!!今、学園都市に潜入したテロリストについての話なんだよ!!！」

その一言で黄泉川は一変して表情が驚きに変わる。

「お前……その話何処で効いた?まだ秘匿されているはずだぞ」

黄泉川の間に数馬はめんどくさそうに舌打ちをする。

「貴様らの本部にでも電話してみる。数馬光太郎の詳細を詳しく調べてな」

「はあ?なんでそんなことしなきゃいけないじゃん?」

「そうすりゃ分かる」

納得しないながらも黄泉川は数馬の言うとおりにアンチスキル本部に電話を掛ける。

スパイというのは隠密であるからこそ意味がある。しかし、学園都市の防諜の前にはそれは全く無力に等しい。ましてや、大天使の話だと、数馬の所属する「赤光の黒十字」は学園都市と親密な関係

があるという話だ。だとしたら数馬のスパイとしての存在は、確実にばれているはずである。

「……………そうですか。分かりました」

黄泉川が苦い顔をして電話を切る。どうやら予想は当たったようだ。

「どうだ、分かっただろ？」

「ああ…お前、まさか…」

スパイ、と彼女が言う前に数馬が遮るようにしゃべる。

「おおっと。こんな所言つて欲しくないな。これでも機密事項なんだぞ？まあ、あんたの所の本部はあんたを信頼して話したようだがな、他言は無用だ。ばらした時には命はないと思え」

数馬がそう言いながら人睨みする。

「分かったじゃん。でも、そんなとんでもない奴が一体何どんな情報を持ってきたんだ？」

「まず一つ、敵を殺すのは大問題になるから駄目だ」

最初の一つから最重要情報だ。

「なっ、それは随分と無茶な情報じゃん。で、次は？」

「ああ、これも重要だ。敵は能力でやっかない物を使う。多分、戦

力換算すると重戦車50両分はある」

この情報に黄泉川は目をむく。

「重戦車50両!?それってドイツの重戦車大隊以上じゃないか。なんつー戦力じゃん」

ちなみにドイツ重戦車大隊は1945年当時だと戦車45両である。

「だから、こつちとしては援護した方が良いかと思ったわけだ」

実際、学生といえどもスパイであり、実力は相当な物であることは確かである。戦力向上は期待できる、が。黄泉川は首を縦には振らなかった。

「だめじゃん。私達は学生を守るために組織されている。それなのに、学生を戦力に取り入れるなんてことは出来ない」

「何だよ、それぐらいだったら大丈夫だろ。今更そんなこと言っていたんじゃない…」

それでも黄泉川は首を横に振る。

「絶対に駄目だ。私は生徒達が傷つくことが嫌いだからアンチスキルに入ったじゃん。お前にもしものがあつたらどうするつもりだ?私はそんなリスクは犯したくない」

頑なに譲ろうとしない黄泉川に数馬も諦めるしかなかった。

「……分かった。貴様らの手助けはしない。それでも、やばくなつたと思つたら加勢する。それで良いな？」

数馬の条件に黄泉川はやつとうなずく。

「それなら良いじゃん。絶対にそんな状況を形成しなけりゃいい話だ」

「……そうだと良いがな。失礼する」

そして数馬はふつと何処かへ行ってしまった。数馬が消えてから黄泉川はつぶやく。

「まさか、学生がスパイしているなんてなあ……この世の中、碌なことがないじゃん」

そう言い、小さく溜息をついた。

「まいったな。アンチスキルと共同作戦が出来ないとは」

数馬としては、予想外の状況に少し危機感を感じていた。正直、シエリー・クロムウエルとの戦闘では数馬自身では完勝とは行くことは絶対でない。いくら悪魔の力があるうとも。出来れば他の戦力

が欲しいところだ。

「つつても、もう戦力になってくれそうな奴なんて居ない……」

まず最初に、ステイルは論外。神裂さんはちよつと何処にいるか分からない。一方通行、色々と無理。……やばいね。

「上条さん。大丈夫かな。……今更になって思ったんだが、どうして俺、上条の所離れたんだ？」

根本的に考えてみればそうなってきた。護衛対象が近くにいるのに、それから離れてしまうというのは愚策もいいところだ。

「別にアンチスキルと共同しなくても上条と俺がタツグ組んだら最強じゃねえか。ああバカだ、俺は世に稀に見るバカだ。早く上条の所戻らんと……!!」

「独り言が駄々漏れですよ」

隣から話しかけられる。

「どわあああああ!!」

突如として、本当に、3秒前までだれもいなかったのに、そこには「必要悪の教会」ネセサリウスの魔術師、レン・アクリウスがいた。

「な、なんでお前がいんだよ!!」

「何って、御察しがつくでしょう?」

相変わらず、数馬に対する少し嫌み的な態度は変わってない。しかし、今はいらいらしている場合ではないのだ。

「シェリー＝クロムウエルの捕獲、若しくは抹殺といったあたりか……」

「ご名答です。まあ、僕としては抹殺は嫌いなんで捕獲を優先しますがどね。それより、あなたは一体何やっているんで？」

数馬は事の顛末を話した。途中、レンが失笑したりもしたが気にしない。

「ほほおう。それで、アンチスキルとの共同行動をすることが出来ず、渋々1人でやるうとしたと」

「……そうだよ」

数馬は苦虫を噛み潰したような顔で答えると、レンは嫌みのように失笑する。

「笑いたきゃ、笑え。怒る気力にもなれない」

その余りの落ち込みに、レンも彼が思い詰めているのがひしひしと伝わってくる。

「いいや、別に。笑ったりなんかしませんよ。事態が事態ですし、相手方の大戦力に対抗するために、こちらの戦力の増強を図ったのは優秀な策ですよ。それよりもどうするんですか？」

「上条の所に戻って奮戦するしかないだろうが」

レンはたちまちの内に笑うのをやめ、真剣なまなざしになる。

「バカなこと言わないでください。上条も、あなたも確かに強力でしょう。でも、相手が悪すぎますよ。一蹴されるのが落ちになりそうですね」

「そ、それはだな……」

レンの指摘にぐうの音も出ない。原作では運良く上条が黄泉川と会えたから良い物だが、まかり間違えて会えなかったらアンチスキルの支援なしという状況になる。それはつまり、絶望的戦況に繋がる。数馬は何か打開策は無いかと唸る。すると、レンが口を開いた。

「まあ、僕は今気分がどうかしているんですよ。あなたみたいな人に、これっぽっちだって助けるなんてこと、したくないんですが」

そこで一息おいて一言言う。

「今だったら、共闘しても良いですよ」

「思いがけない一言を。」

「ま、マジか!?!」

数馬が驚愕する。色々と、犬猿の仲なこいつが共闘するか、何て言ってきたことが信じられなかった。

「ええ、こっちとしても、1人だと多少厳しくなりそうな気がしますし。あなたの実力は僕も認めていますから。共闘できる人がいる

なら呉越同舟も覚悟ですよ」

「あ、ありがたい……」

数馬が頭を下げる。急にされたのでレンも少し動揺する。

「ちょっと、ちょっと。あなたが頭下げないでくださいよ。気持ち悪い。てっきり、あなたは『俺1人で充分戦える』なんてこと言うだろうと予想したんですがね」

「俺は戦の時は自分自身を過信するなんて愚策は採らない。己の力を性格に見定めることが出来る人こそ智将たる？」

数馬の言葉にレンは笑う。

「なるほど……意外にもあなたには軍師の才能あるかもしれませんね」

「お褒めの言葉ありがとよ。……さて、行くか」

化け物2人が歩き出した。

（地下街）



数馬、そしてレンが戻ってきたとき、前方ではアンチスキルの銃弾の嵐がゴーレムに向けて放たれていた。

「なるほど、大量の銃弾の衝撃でゴーレムの足を遅くする戦法を使用するとは。元いた世界じゃドイツ軍が使ってきましたが、人間考えること同じですね」

「んなこと言っている場合か。ありゃ上条が突っ込むつもりだぞ」

アンチスキルの後方部隊に、いまにも突撃しそうな上条が居る。

「おいおい、ちょっと待ってくださいよ。あれもしかして、ゴーレムの下をくぐり抜けてシエリーに殴りかけるつもりですか！？魔術師を甘く見ているのですかね、シエリーには確か、近接接近用にダガーナイフが5本保持してあるはずですから。…十中八九失敗しますよ」

原作においては本当に運良くゴーレムの下をくぐり抜けてシエリーを殴れたが、今の状況から察するに、シエリーは武装している。対して上条は拳一つ。最悪である。

「やばい！！銃撃が止まりやがった。上条が走り出すぞ！！」

と言った直後に上条が走り出した。

「仕方ありません。数馬、突撃してください！！援護します！！」

「ああ分かったよ、畜生が！！」

数馬はすぐさま駆けだした。

上条当麻は走っていた。ゴーレムに向かい。

(いける、これならなんとかつ……!!)

ゴーレムの動きは鈍り、上条の突入に対処出来ない様だ。このままうまく抜けて、あの女に1発拳を決めれると思った。

しかし、そうは簡単にいかなかった。

銃弾の衝撃に解放されたゴーレム、あの魔術師はエリスと呼んでいた、は思いも寄らぬ早さで上条を捕捉した。そして、その巨大な手で上条に逆襲とでも言うかのごとく殴りかかった。

「なっ……」

右手を構えようとするも、その右手にとつもない痛みが来る。右腕にダガーナイフが刺さっていた。魔術師が投げた物だろう。幸い、そこまで深く刺さっていないようだ。しかし、その痛みによって右手を構えるのが遅れた。ゴーレムの手はもう目の前まで接近している。チェックメイトかと思い、上条は目をつぶる。

しかし、来るはずの衝撃も痛みも何も来ない、代わりに音が聞こえた。

ズバア！！                   ドシヤアア！！

何かが斬れて、落下する音が。

（な、なんだ……？）

恐る恐る上条は目を開ける。

「ま、まったく危ねえな！！もうちょいでお前、死ぬところだった。だろ！！」

日本刀を手に持ち、ゴーレムの腕ごと切り落としていた数馬がいた。

「か、数馬、なんでいるんだよ！！」

「そんなことはどうでも良いだろ！！それより次、来るぞ！！」

ゴーレムが叫び声を上げながら反対の腕を振りかざす。

ズバア！！

しかし、その片方の腕は飛んできた水の大剣が真っ二つに斬ってしまう。

「よっしゃナイスだ、レン!!」

後方のアンチスキルの中央に水道管から流れる水を操っているレンの姿も見えた。

「上条!! 突っ込むぞおお!!」

「お、おう!!」

上条と数馬が走り出す。シェリーがダガーナイフ3本を投げつけるが、片っ端から数馬がはじき返す。そして

奇跡のように、滑り込みでゴーレムの後ろについた。

「撃ち方始め!! (Fire!!)」

間髪入れずに、黄泉川とレンが命令して、銃弾が弾き出されていく。これでゴーレムは後ろに回り込んだ上条達に手を出せなくなった。

そしてシェリーはクロムウェルと対峙している。彼女の手には最後のダガーナイフ、もう片方にはチヨークが握られている。

「な、なんだこりゃ? これじゃお前達も逃げる事が出来ないじゃない」

そのシェリーの疑問に答えるのは簡単だ。とても簡単だ。

「上条、言つてやれ」

「ああ。…俺たちには逃げる必要なんか無いんだよ」

はっ？、とシェリーは疑問の声を上げる。上条は続いてこう言った。

「だからなあ！！お前が此処で眠っている、って言う意味なんだよ！！！！」

刹那、シェリーがダガーナイフを刺すことも出来ず、上条の拳が顔面に炸裂した。

「うぐっ……！！」

そのまま彼女は吹っ飛ばされる。成功である。

「上条、良くやった！！」

「よし！！次はこのゴーレムを……って何！？」

次の段階に取りかかろうとした時、シェリーから気持ちの悪い声が聞けたかと思い、見てみると

そこには魔法陣が書いてあった。

「ま、まさか2体目を召喚するつもりか！！」

上条の間にシェリーは一段と声を上げて笑う。

「無理さ、1度には2体も持たせらんねえさ。けどねあ……」

そいつをうまく利用すれば、こんなことも出来んだよ!!」

魔法陣が赤く光る。ゴーレムの魔術の特徴として全身形態を2体以上作ると崩壊してしまうが、それを逆手にとって地盤崩落を引き起こしたり、人体を溶かしたりといった応用も可能なのだ。

そして、今、それを使われた。

ゴジュー!!

シェリーと魔法陣の周りだけ地盤が崩落、消えてしまう。

「くっそ、逃げられたか!!」

数馬が歯がみする。状況は、最終段階に移行していた。

「状況は最悪だ。多分、シェリーとクロムウエルは地上へ脱出しよ  
うとしている」

今、数馬、レン、上条、風斬は黄泉川達アンチスキルからこっそ

りと700m程度離れて今までの情報と状況を確認していた。

「目標は、禁書目録。インデックスだ。分かっていると思うが、シエリーは戦争の火種を欲しがっていた。だとしたら、インデックスでも事足りると判断したんだろう。なお、この事はアンチスキルには協力を要請できない。インデックスは学園都市の住民じゃない、不法滞在者だ。捕まる確率が大幅にある」

「じゃあ、どうするんだよ？まだ地下の封鎖は解かれそうにないんだぞ？」

上条が言ったとおり。アンチスキルとは地下の封鎖の管轄が違うらしく、未だに此処から出られていないのだ

「ぶつちやけ、シエリー、クロムウエルを追跡するには、あそこの穴から降りるのが一番良いと思うのだが……」

レンが言った穴とは、先ほどシエリー、クロムウエルが脱出時に空けた穴である。まだ14分しかたっていないので追跡は十分可能だ。

「でも、あの穴……すごく深そうですね」

風斬が言った通り、滅茶苦茶深そうなのだ。最悪100mはあるかもしれない。

「誰か、行くしかないな」

そんな数馬の一言で、上条が穴に行こうとする。すぐにレンが止める。

「ちょっと待ってください、上条。あなた何行こうとしているんですか!？」

「だって、こうしている間にもあの魔術師は地上に出ちまうかもしれねえんだぞ!！」

「だが、お前があの穴入ったら死ぬぞ!！」

作戦はどうにもこうにも立ちそうにはなかった。刻々と時間が過ぎていく。このままでは、と思ったとき、ピリオドを打つように、風斬がしゃべった。

「私が…私が行きます!！」

「!?!?!?!」

男3人全員が風斬の言葉を何かの間違いかと思った。風斬は言い続ける。

「わ、私は…さっき話したとおり、人間なんかじゃありません。だからあの穴から落ちても全然平気です。…それに……化け物の相手は化け物がするべきですから」

風斬の泣きそうながらもはっきりとした声には覚悟があった。他の3人は何も言えない。

「大丈夫です。私、化け物ですから、いくら殴られても死なない…」

「軽々しく、自分のことを化け物なんて言わないでくれ!！」



急に、レンが声を張り上げて怒鳴る。

「言っておくが、あなたは歴とした、ちゃんとした人間だ！！化け物なんかじゃ絶対じゃない！！化け物の相手は化け物がするべき？化け物でも、なんでもないあなたがそんな物の相手なんてしなくて結構だ！！それだったら、

私も行く！！風斬さんは隣で可愛い女の子の様にしている！！そうすりゃ分かるさ、自分が化け物なんかじゃないとな！！」

そう言い、レンは風斬のお姫様だったように持ち上げ、穴を見る。

「おらぁぁぁー！！」

そしてすぐに、ダッシュで穴の中にダイブ、落下して行ってしまった。

「……おい、おい」

「あの野郎、独断専行しやがった……」

じつと、数馬と上条は、レンと風斬が飛び降りていった穴を見る。

「なんで、レンはあんなに怒鳴ったんだ？」

上条の疑問に、数馬が答える。

「詳しいことは話せんが、レンも一種の化け物言われ続けてきた。

多分、そんな自分が脳裏に焼き付くような嫌だったことを、風斬が  
悲しそうに言ったのが見ていられなかったんだろっな」

そして2人は黙る。地下封鎖が解かれるまで。

## 地下街戦（後書き）

ご意見ご感想、お待ちしております。

## AIM拡散力場の少女(前書き)

更新です。結構酷いですが、見てくれれば幸いです。

## A I M 拡散力場の少女

ドスー!!

穴の上から、2人の男女が落ちてくる。お姫様だっこで、だ。

「よし、着陸成功!!」

「ど、どうもありがとうございます……」

深度は多分、200m程度。どうやら物質運搬などをしていた、地下鉄のようだ。

「さて、急ぎますよ」

レンがそう言って駆け出そうとする。が、風斬が急に、待ってと言う。

「……どうしましたか？」

「あ、あの……もう降ろしてくれませんか？」

恥ずかしそうに言う風斬に、レンは自分がやっていることが分かり、急いで降ろす。

「す、すみません!!なにぶんあの時は、滅茶苦茶慌てていました……」

「い、いえ、だっこしてくれた御陰で私は痛くなかったですし……」

「そ、それなら良かったですが…ま、まあ行きましょう」

やっと走り始める2人。しかし、何しろ距離は相当ある。2人も、黙りこくって走り続けるのには限界だった。

「そういえば、風斬さんは、どうやってインデックスと出会ったんですか？」

レンが痺れをきらして、話しかける。内容的には、一番当たり障りのない物だが。

「そ、それは……えっと何て説明すれば良いんでしょうか……」

風算が答えに窮してしまった。地雷を見事に踏んでしまったようだ。

「あつ、無理にお話ししなくても良いです、無粋なこと聞いて申し訳ありません」

そんな様子を見て、レンは直ぐに謝る。

「いいえ……で、でもこんな話しても信じてくれそうになくて……」

風斬がそう言いつつむいてしまう。

「いや、そんなことはありません。あなたが真実だと思っているのなら、私は必ず信じます」

レンが笑顔でフォローする。風斬は顔を上げる。

「じ、じゃあ……」

そして彼女は淡々と話し始めた。

## SIDE風斬

私は1人、いつのまにか、街にいた。自分がいつ、生まれて、いつ、ここに来たのか分からない。持っていたバッグの中を見ても、そこには学生証が入っており、風斬 氷華と書いてある。これが自分の名前なのだろう。

「何なんだろう……此処は……」

ふと、横にあるコンビニを見してみる。たった今、清掃員が中に入ろうとしている。が、扉をくぐったとたん、清掃員の形は変わり、幼い少女となってしまう。

「えっ……?」

自分でも何が起きたのか分からなかった。もう1度見てみると、少女である。確かに、コンビニに入ろうとしたのは、清掃員だったはずだ。私はよく分からなかった。すると、もう1度見せるかのように、今度は少女が若い女性に変わってしまった。

「どっいつ……ことなの?」

突然、頭の中に何かの情報が流れ込む。

それは、重さも風も、何も感じられない、学園都市のA I M拡散力場によって作られた『陽炎の街』

学園都市と同じ位置にある、見えない場所。私が、誰かに話しかけると住人が役割に応じた姿に変化していく。私には、直ぐに理解が出来なかった。

その後、いくらかの年がたっても、私はこの場所に慣れなかった。

それどころか、私はこの街が怖くなっていった。私が見ることで、誰かに、役割を与えてしまう。私が思うことで、誰かの人生を狂わせてしまう。私の役割はゼンマイ。この社会という巨大なカラクリ細工に、命を吹き込んでいく、ゼンマイ。

ゼンマイという、一部品。外には出られない。外の物や、人は見えても、私には、話すことも、触ることすらも、出来なかった。絶対に。

でも、あの時。白い修道服を着た彼女を見たとき。困っているような彼女を助けたくて、無駄だと分かっている、触れてみた瞬間。突然、ぼやけていた視界がハッキリとして、初めて、私は外の世界に出ることが出来た。



話しかける。あの子は私に気づいてくれた。私は、初めて人と喋ることが出来た。

それから、いろいろなことがあった。初めて体操服を着た。初めて男の人に裸を見られた。初めて、何かを食べに行った。初めて、ゲームセンターに行った。……また、裸を見られた。初めて、初めて、トモダチが出来た。

## 風斬SIDEOUT

そこで、風斬の話は終わった。風斬が隣を見ると、目尻に涙を浮かべていたレンがいた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

風斬が話しかけると、レンは、すぐに、自分の目にたまっていた涙を拭く。

「だ、大丈夫ですよ。でも、これで確信できましたよ」

涙を拭き、明るい調子で言うレンに、風斬は疑問を示す。

「な、何がですか？」

「そんな、誰かを傷つけることが嫌だと言える、優しい感情があるあなたが、化け物だなんて言えるわけがないことがですよ……」

そう言い、レンは風斬をひょいと抱き上げると、さらに早く走り

始めた。

「急げ！！まだそう遠くには行っていないはずだ！！」

上条と数馬がレン達が走っていた場所を通過する。地下の封鎖は、電力施設のエラーやら何やらで、遅延。希望は見えそうになく、やむを得ず、無理矢理、穴の中に降下したのだ。

「無茶するな上条、お前、相当数打撲があるんだぞ！！少しはスピードを緩めろ！！」

穴に降りるとき、上条は勢いでダイブしてしまい、着地の際、見事に体を打ち付けてしまった。ぶつかる直前、数馬が重力を操作して衝撃を和らげたが、それでも大きいダメージを負っている。

「そんなことはどうでも良い。早く風斬達の所に行かないと………つ！？？」

突如として、走っている上条が差し掛かろうとした石柱が崩れる。

「おらぁー！！」

数馬がすぐに、石柱の周りを包み込むようにして、無重力空間を形成すると石柱はふわふわと浮いてしまう。そして、ブローニングM2重機関銃で浮いたままの石柱を破壊する。

「この近くにいるのか!？」

「残念ながら、もう此処にいるよ!！」

上条が前方を見ると、高らかな笑い声が聞こえ、目の前にシエリー・クロムウエルが現れた。数馬はすぐさまゴーレムの奇襲がないかを確認する。が、攻撃してくる気配はない。

「エリスなら先に追わせているわよ。今頃もう、標的の前にたどり着いてるかしら……それとも、もう肉塊に変えちまつてるかもな!！」

「てめえ……!！」

シエリーは不敵に笑う。上条は憎しみを含めた視線でにらみ付ける。そんな上条の様子を見てシエリーは満足そうな表情になった。

「ふふつ、それでいい。お前達は私の相手をしていれば良い。特にあなたはエリスを壊せるみたいだしね。あの女は見逃したけど」

その一言に、上条はシエリーが「戦争を引き起こすんだよ」と言っていたことを思い出す。

「一体何考えてんだ、てめえは!!今はまだ、科学も魔術もバランスが取れてるじゃねえか!!なのになんで……」

「超能力者が魔術を使うと、肉体を破壊してしまう。聞いたことはないかしら?」

急に、シエリーが言ってきた話は、上条もアウレオルス戦で聞いた

たことがあった。しかし、何故そんな話を持ち出してきたのか。

「くくつ、おかしいと思わないかい？どうしてそんなことが分かっているのかって」

数馬がはつと何かを思い出す。

「そついや、機密文書第1682499号にこう、書いていやがったな。」

20年ほど昔に学園都市とイギリス清教のそれぞれ一部で起こった、『新たな能力者を作り出す』実験があった。魔術と超能力を共に使いこなす者を作り出そうとしたが、政治的判断で介入した『騎士団』乱入により被験者は1人を除き全滅した。その際、その1人を逃がそうと、科学側の少年が魔術を行使するも、拒絶反応を起こし自爆。直後に騎士のメイスで殴打され死亡したとも書いてあった……」

まさか、と上条がシェリーを見る。彼女は少し自嘲気味に笑うと話し出す。

「そついうこつた。エリスは私の友だちだった。エリスは、学園都市から連れてこられた超能力者の一派だった……私が教えた術式で、エリスは血まみれになって死んだ。そいつが言ったように、エリスは施設を攻撃してきた『騎士団』から私を逃がすためにな……」

「私達は住み分けなきゃならない！！魔術師は魔術師の、科学者は科学者の、それぞれの領分を決めておかないと、何度でも、何度でも同じことが繰り返されちまう……！！」

怒声を交えた声で喋るシェリーに、上条が言い返す。

「何をバカなこと言ってるんだ!!!んな矛盾だらけな話だけで戦争を起こすなんてばからしさも程があるだろうが!!!」

上条の反論に、シェリーはさらに怒声を張り上げて言い返す。

「そんなの、知ったことじゃないよ!!!私は起こせれば何でも良いのさ!!!」

「……もう黙れ」

唐突に彼女の後ろから声が聞こえた。いつのまにかシェリーの後ろに、数馬が回り込んでいる。すぐに反撃しようとするシェリーだが、それすらもさせない内に、数馬は攻撃に入った。

「戦争、戦争、軽く言っている暇があるんなら、もっとマシな方法考えろ!!!!」

シェリーの鳩尾に、数馬の拳が直撃、吹き飛ばす。壁にまで吹き飛んだシェリーは、ぶつかり、地面に落ちる。

「くっそお……」

それでも、まだ彼女は立ち上がるつとする。

「それでも、今は……戦争を起こさなきゃならねんだよ。学園都市はガードが緩く、イギリス清教は禁書目録をよそに預けるなんて甘えを見せてんだ。

何もかもが、あの時と同じだ。あの時だけでも、あれだけの悲劇が起きたんだ。これが、学園都市とイギリス清教との全面戦争になつたらどうする!？」

シエリーはよろよろとした足で前に進んでいく。

「くつだらねえ……」

その後ろ姿に向けて上条がつぶやいた。それに、シエリーは止まる。

「怒るのはいい。悲しんだって良い。だがな、風斬が何をした!! インデックスが何をしたっていうんだ!! 矛先を誰かに向けちまつたら、何もかもが最悪な方向に向いちまうじゃねえか!!」

上条が言い終わったとたん、シエリーは床に膝をつき、座り込み、ぼそぼそと言い始める。

「分かんねえよ…畜生。魔術師も、科学者もみんなぶつ殺したいと思っっているよ……」

そして、立ち上がり、怒声を上げる。

「だけどそれだけじゃねえんだよ!! 本当に魔術師と争わせたくねえとも思ってたんだよ!! 頭の中なんてはじめからぐちゃぐちゃさ。信念なんて……1つじゃねえ、星の数ほどあるんだ……」

しかし彼女の声は徐々に、弱々しく怒りではなく、悲しみが含むようになった。

「……なんで気づかないんだよ。お前の中にある信念は、たった1つだけだろうが!!」

それを見ていた数馬が喋り始める。

「お前の目には、上条がインデックスに嫌々つきあっているように見えるのか？互いの領分決めてないと、争いになっちまうのかよ！俺はな、インデックスがどちら側の人間だろうが大好きだ。上条だってそうだろうし、逆にインデックスだって俺たちのことが嫌いじゃないはずだ!!俺たちはな、住み分けなんかしなくて、一緒に生きていけるんだ。だからな、俺や、上条の大切な人達を、もう奪わないでくれ!!」

「つつ、あ、あつ、Intimus115!!!」

数馬の言葉を聞いた瞬間、目頭に沢山の涙をためていたシェリーは何かがはじけたように魔法名を唱える。同時に上条の後ろの壁に魔法陣が出現し、爆発、粉塵を起す。

「くつ……つ!!」

上条がそれに気をとられた瞬間、シェリーが間近まで接近する。右手を突き出そうとするが、先ほどの負傷による痛みが激しく響き反応が遅れる。

「死ねええ!!」

シェリーの手に握られている、ナイフと化したチョークが上条の胸に突き出される。

ゲゲチャ

そして、刺さる。肉に刺さる音もした。だが、上条には痛みが全く来ない。

刺されたのは、上条の前に割り込んだ数馬だった。

「だから言っただろうがあ……」

シエリーのチョークは数馬の胸を深く刺している。出血も尋常ではない。普通だったしゃべれることはないだろう。そう、普通だったら。

刺さったチョークは、流れ出る血に溶かされていき、最後には、シエリーに握られている4分の1の部分を残し、消滅してしまう。これで、魔術の制御は出来なくなった。

傷口に刺さっていた物が消え、さらに多くの血が流れ出す。

数馬はそんな傷もお構いなしに、チョークを突き出していたシエリーの腕を掴む。掴まれた彼女には、おびえの表情が出る。

「もう、これ以上、俺が守り通そうとしている奴を傷つけんな！！」

叫ぶと同時に、数馬の拳はシエリーの顔めがけて炸裂、その大威力の拳は、彼女の体を易々と吹き飛ばした。



地上では、インデックスとゴーレムが死闘を繰り広げていた。だいたいがゴーレムの攻撃なのだが。それでも、インデックスは善戦していると行って良かった。

ゴーレムは制御の性質から『強制詠唱』の影響をモロに喰らう。強制詠唱とは「ノタリコン」という暗号を用いて術式を操る敵の頭に割り込みを掛け、暴走や発動のキャンセルなどの誤作動を起こさせるという『魔力を必要としない魔術』であり、順番に数を数えている人のそばで出鱈目な数を言って混乱させるような物だ。

またその最大の特徴として、魔力を一切使わない為、インデックスで使用できる。

「きゃあっ……！！！」

ゴーレムの攻撃による衝撃波でインデックスは吹き飛ばされる。強制詠唱は言えなければ全く意味を成さない。ゴーレムは倒れたインデックスを踏みつぶそうと接近する。

「A V F B A T C J！！（両足を平行に配置し、その重心を崩せ）」

インデックスはそれを許さないかのように、強制詠唱を唱える。これを繰り返していけば、遠距離操作のゴーレムの場合、再生率が著しく低いので行動不能にすることだって可能だ。インデックスは自信の勝利を確信した。

それでも、運命とは時に残酷であり、そんな簡単にいくことは、絶対になかった。

グオオオオオオ！！

強制詠唱を唱えても、ゴーレムは崩れる気配を見せない。

「ま、まずいかも……」

直感で、遠距離操作から自動制御に変わって、割り込めなくなった、とインデックスは悟った。

ゴーレムはさらに近づき、インデックスに腕を振り上げ殴りかかろうとする。

「と、とうま……」

最早万事休す、インデックスは死を覚悟して、最後に彼の名前をつぶやき、涙をにじませ目をつぶる。

ゴーレムの腕が振り下ろされた。

だが、運命は時に残酷であり、時に、強運をもたらすことがある。

ゴガアー!!

ゴーレムの振り下ろした腕は、突如として、何かに弾き返された。その音にインデックスは目を開ける。

「ふえ………?」

目の前には風斬 氷華が、インデックスを守るように立っていた。

「ひよ、ひょうか!?!」

インデックスが驚き、視線を下に向けると、風斬の右足の一部分がない。インデックスがびっくりすると、無くなっている部分がしだいに再生していく。

「逃げて……早く、逃げて」

「えっ………逃げるったってひょうかは……」

喋り終わらない内に、ゴーレムの攻撃が来る。しかし、それは風斬に食いとどめられる。その様子に、インデックスは啞然とするほかない。

ミシミシと、音が鳴る。風斬の腕に、罅のようなきしみが見え始める。それでも、彼女はゴーレムを食いとどめる。それどころか、

逆に押し返し始めた。ゴーレムはそれに苛立ち、今度は逆の手を振り下ろそうとする。

が、今度は投げられた2本の水の大剣で振り下ろしかけた腕を3つに切り離され、1本が風斬が食いとどめていた腕を切断する。

「まったく、風斬さん！！先に行かないください！！あなたには傷1つ付けさせないと言ったのに、もう約束を破ってしまった！！」

10m付近の所に、金髪の英国魔術師、レン・アクリウスが立っていた。隣にはぶつ壊された水道管と大量の水が流れており、あれで魔術を構成しているとインデックスは分析した。

グゴガア……

ゴーレムはすぐに再生を開始する。だが、再生するにしても、荒々しく、そこら中の者を無理矢理吸収していくといった感じである。

(ゴーレムが暴走している……再生機能が制御できないのかも……)

インデックスの予想が当たったとしても、再生したことには変わりはない。レンはゴーレムが行動する前にさらに積み掛けていく。

「世界を構築する5元素の1つである、大いなる水よ

それは命を保つ優しさであり、邪悪を洗い流す力なり

み込む物なり

それは緩やか流れを起こすと共に、全ての邪悪を飲

その名は水、その役は弓

顕現せよ、悪を砕いて力を使え

！！！」

呪文詠唱が行われると、水道管から流れ出た水は1つに集まっていき、巨人の形を形成する。レンの相棒である、巨人ネロだ。

「そう言えば、この世界の魔術師は、魔法名を言うことが戦闘行使する時に重要でしたっけ。……僕にはそんな物は無いですから、こう言っておきましょう。」

Death force NO.444、攻撃を開始する」

レンの一言でネロが殴り込みを開始する。ゴーレムも負けじとばかりにやり返すが、戦略兵器扱いだったネロと比べれば不利なのは確かだ。

ネロがゴーレムを相手にしている間にレンは風斬とインデックスの方に向かう。

「インデックスさん、風斬さん。お2人ともお怪我はないですね。大丈夫です、私が出来たからにはあなた方に指1本も、触れさせたりはしませんよ」

レンは2人に安心させるかのように微笑みかける。

「は、はい!!」

その清らかな笑みに、風斬は、彼が言っていたことを思い出した。

## SIDE風斬

時間は、地下を走っているところまで戻る。

私を抱き上げて、走っているこの人は、何故、ここまで私に言うてくれるんだろう。それが不思議でしようがなかった。

「あ、あの……」

「何ですか？」

意を決して私は聞いてみることにした。

「何で…私に対してこんな優しいんですか？まだ…会ってから1時間もたっていないのに……」

その間に、彼は優しく答えた。

「それは…あなたが言っていた言葉が、僕が元板世界で、僕の存在意義を示してくれた大切な人の、最後の言葉だったからですよ……」

えっ、と私はその答えが良く飲み込めなかった。彼は続けて話していく。

「この話の方が、信じてくれないかもしれませんが、私は異世界から来ました。嘘なんかじゃありません。本当ですよ？子供の頃、親は農家で、僕は畑を見るのが好きでした。だけど、私は、すぐに、人間じゃなくなっただんですよ。戦争という名の悪魔のせいだね……」

「に、人間じゃなくなるって……」

彼の表情は暗くなっていつてしまう。私は、そこで止めようとしたけど、すぐに話が再開されてしまう。

「人間じゃなくなるって言うっても、実際は人間を超越した劣化型人間みたいな、矛盾した存在ですけどね。僕は家が財政的に破綻寸前で、その時、莫大な金を寄越すからという理由で、政府に引き取られてそうになりました。」

あの当時、改造した方々はご丁寧に感情を綺麗サツパリ、消してしまいましたから、僕は笑うことさえ出来ませんでした。それで、すぐに戦争にかり出されて、死にものぐるいで戦い続けました。190年間もね」

190年間、その数の多さに、私は驚くほか無かった。彼は見た限りじゃ、高校生としか見えない。

「でも、戦うだけで、他には何も、僕に与えられた物はありませんでした。何も無い、そんな虚無感が僕の中を埋めていきました。僕は何で、何で此処にいるのか。死にたい、生きていてくれない。そう

も感じていましたね。

「だけど、1888年目のある日、とある少女が現れました。その少女は私はあなたと同じような人だよ、と話しかけてきました。」

その子は感情が豊かで、当初は本当にそうなのか分からずに、政府の伝達で、実験的に感情を残したと分かるまで疑り続けていましたよ」

「あの子は来た時からとても元気で、明るい子だった。」

それで何故か僕になついてくれて、僕も部隊の仲間も全員、最初は煙たがってましたが最終的には自分達の子供のように可愛がってました。

この時、初めて、僕はあの子に笑顔という物を見せられました。あの子が喜んでくれたのは、とても嬉しかった」

私は、彼が私と似ているような気がしてきた。人間じゃないにしても、私はゼンマイ、彼は戦道具と違うけど、人に使われるのは同じ。そして、何かに救われたのも同じ。

「でも、僕の国を取り巻く状況は刻一刻と、悪い方向に向かっていきます。最後には、全世界を敵に回して、絶望的な戦いを始めてしまいました。当然、いくら様々な地域を転々として戦おうが、戦況は悪化していつて、どんどん僕たちは負けていきます。」

そのうち、僕の部隊の仲間も、死んでいくようになります。帰ってくる度に、あの子に、戦死した人はどこにいるの、と聞かれて僕はどう答えればいいのか分からなかった。

あの子はその時、400kmの彼方で何が起きているのか知りま



せんでした。戦場に出すのは政府が禁じていました。それに、僕たちも出したいとは絶対に思っていないませんでしたしね」

「そんなことが何十回と繰り返されました。僕の部隊は、1000人いたはずなのに、45人にまで減っていました。もう、限界だと判断した政府と軍は、近くにあった都市の民間人をテムズ川という川にある橋まで護衛するという形で撤退させられることになりました。」

撤退の最初は、敵も来なくて、楽に民間人を撤退させられました。しかし、橋についたところで、敵の軍隊が来てしまったのです。民間人の撤退はまだ終わっていない、此処で、僕の部隊は迎撃戦を始めました。相手は何万と来ますから、勝てるはずがありませんでした。

それでも、やっと民間人が全員、橋を渡りきることが出来ました。僕の部隊には、抱き寄せて守っていたあの子を含めて、もう3名しか残っていませんでしたけど。それで、僕たちも撤退しようと思つて気づいたんです。誰が、この橋を破壊するんだと。

橋を破壊しなければ、敵が追撃しに来る。だが、そんな莫大な量の火薬は所持しておらず、その上、僕の力を跳ね返してしまうように、橋はなっていました」

「僕はへたりと座り込んでしまいました。自分達も此処までか、と死を覚悟しました。あの子がそんな僕に話しかけてきます『ねえ、私達どうなるの?』 彼女には、戦っている最中は眼をマスクで隠していましたが、それでも音で何が起きているか分かったんですよ。悲しそうな声で聞いてきたんですよ。僕はどうにかしてでも、この子だけは救いたいと思ひ『君だけでも逃がすよ』と言いました。」

「ただ、彼女はその答えにとっても怒りました。私だけ助かってみんなが死んでしまうなんておかしい。君まで失いたくない、ってね。どうしても、言うことを聞いてくれない。敵軍はさらに、近づいてくる。僕は泣き崩れ、つぶやいた。『あの橋さえ破壊できたら…』と。僕が言ったことに、あの子は急に反応しました。『橋が壊せればいいの?』そう言ってきました。『ああ、そうすれば大勢の人が助かる』私は言い返しました。」

「唐突に『私だったら、何とか出来るかもしれない』と彼女が言い出します。僕は『どうやってだ?』と、半分諦めかけた感じで聞きます。僕を励ますように言ってくれているんだと思いました。だけど、彼女の話聞き、確かに橋を壊せると思えました。」

彼の顔が悲しそうに顔が歪んでいく、それでも私は彼が話すのを止められない。

「彼女は言います。『私はね、作られたとき、目の前の男の人からお前は、科学を扱う化物共を殺すための化物だ。お前は、その身を挺して化物を抹殺することが出来る。って言われたんだ』」

「僕はすぐに、それが自爆であることが分かりました。あの子も分かっていたようです。それは出来ない、絶対にはいけない。僕はそう言っただけ彼女を止めます。彼女はそれでも止まろうとしてくれません。『私は、いつも友だちが死んでいくのが悲しかった。君まで失いたくない。この力があれば、君や大勢の人を救うことが出来るから』」

僕は泣いて、『絶対に行くな！！行くんじゃない！！』と言います。そんな僕を見て、あの子は最後に『泣かないで、私は大勢の人を救いたいんだよ。あそこまで来ている化け物をやっつけるには、化け物じゃないと……』

彼女は、僕が掴んでいた洋服を引きちぎり、敵軍が着ている橋の向こう側に行ってしまう。すぐに追いかけてようと向かおうとしたその瞬間に、凄まじい閃光と爆風が来ました。その爆発は、僕でも死ぬかと思っただけです。爆発は、何故か敵軍と、橋の3分1だけを消滅させました。これで、僕たちは助かったのです。

ですが、取り残された僕は、歯がみして泣きました。自分の無力さに、後悔しながら……」

話が終わったとき、私の頬に、彼の涙が落ちてきた。私は、自分が聞いたことの罪悪感に駆られた。

「ごめんなさい……そんな、ことがあったなんて知らないで聞いてしまつて……」

彼は顔をブンブンと振って涙を飛ばすと、直ぐに笑顔に戻る。ただ、まだちょっと悲しさが残つてしまっている。

「だから、あの子みたいにならないように、私はあなたを守ろうと思つたんですよ。」

それに、あの子が天使だったように、あなたも天使のような綺麗

な心の方ですから、自ら化け物と言って欲しくないんです」

彼の言った言葉は、私の心にずっと響いていた。

風斬SIDEOUT

そして、風斬の前には守るように前にいるレンがいた。

「ネロ！！護衛対象ありの攻撃態勢を取れ。私も援護する！！」

先ほどから、双方共に致命傷を与えるまでには至っていないようだ。レンも水剣を投げているが、それでも決着がつかない。

「早く、早く来てくれ。あのバカ野郎！！」

レンは誰かが来るのを待っている。

そしてそれは来た。

「おらぁあああ！！」

サイドカー装備のバイクに乗った上条と数馬だ。すでにサイドカ

ーに乗っている上条は飛び上がるうとしている。

「3、2、1、今だいけえええええ!!」

数馬のかけ声と共に、上条がゴーレムめがけて飛んだ。ゴーレムはネロを押しつけて上条を殴り飛ばそうとする。上条は自身の右手、幻想殺し《イマジンプレイカー》を突き出す。

「うらああああ!!」

上条の右手とゴーレムの拳が重なった瞬間、何かはじけるような音が鳴り、

ゴーレムは拳からがらりと崩壊していく。

(終わったんだ……これで……)

それを見ていた風斬はそう思い、目を閉じた。

夕方、辺りの道路にはゴーレムを形成していた物が散乱してる。これでは当分通行は不可能だろう。

「本当に、うまく終わって良かったよ。レン、てめえには礼を言わなくちゃならんな」

数馬が積み重なっているアスファルトに座ってレンに話しかける。

「だから、あなたからのお礼なんて気持ち悪いですから、やめてください。……それよりも、上条とインデックスさんは何処に行っているんです?」

「ああ、上条が見事に指の骨をいくら折ったみたいでな、病院に向かったよ。風斬も行っているみたいだぞ?」

風斬と聞いたとたん、レンは寂しそうな顔になる。

「おい、どうしたんだレン?」

「……………1年前、SIS（イギリス情報局秘密情報部）の極秘情報で、虚数学区・五行機関たるものと、その制御の方法という未確認情報があったんですよ。あの時は信じていませんでしたけど、風斬さんの話を聞いた時、間違いなく、情報通りだと分かりました。AIM拡散力場によって生み出されたのが彼女だとしたら、いずれは消えてしまう。」

その上、今日、あんなに無理したんです。今日中には居なくなってしまうでしょう。ですから、彼女に最後に会うのは、辛くなるんでやめましたよ」

レンはそう言い、顔をうつむかせる。数馬がフォローするのに困っていると、前方に誰かがいるのに気づいた。

「どござら、辛いのを我慢しなけりゃいけないみたいだな」

「えっ……………?」

数馬の言ったことに、レンが顔を上げ、そして驚く。

「……………風斬…さん?」

「はい……………」

目の前には、風斬 氷華がいた。

「ど、どござってここに……………」

レンは見事に動揺してしまっている。

「お、お礼を言いに来たんです。今日は、色々お世話になったり、助けて貰いました。それに、あなたの言ってくれたことが嬉しかったです……………」

風斬が頬を赤くする。レンは、すでにオーバーヒート状態だ。

「それと……………多分、分かっていると思うけど、私は学園都市の超能力で出来ている、不安定な存在です……………だから、そろそろ、消えてしまいかもかもしれません。だから、最後に、あなたに会っておきたかったんです」

「あ、ありがとう……………こっちも嬉しいですよ」

そう答えるレンの手を急に、風斬が握る。レン、ついに大爆発。

「なっ、へっ、ええ、っと………」

「でも、私はまた現れることが出来るかもしれません。その時には……また私と会ってくれますか？」

手を握る、風斬のその間に、レンは、爆発を抑えて言った。

「それは、もちろん。必ず会いますよ！！」

レンの返答に、風斬は嬉しそうに、にこっと笑う。そして、彼の頬に、唇を付けた。

「なっ、なああああ！?!?!?!?」

レンの素っ頓狂な声を聞いたのを最後に、彼女は走り去って、消えてしまった。

「ひゅーひゅー。この色男。あんな可愛い子にキスして貰うなんて良かったじゃねえか！！」

「なっ、そんな大声で言わないでください！！恥ずかしいでしょうが！！」

レンが赤面して、からかってきた数馬を怒鳴る。しかし、ほのかに暖かみが残っている頬に、レンは嬉しく思っているに違いない。



夕日はもう、沈みかかっていた。

AIM拡散力場の少女（後書き）

ご意見、ご感想、お待ちしております！！

## オルソラ争奪戦争・開戦前（前書き）

更新です。後書きに土下座文が書いてありますので、目を通してください。

で、最初に言っておきますが、この小説って色々酷いよね。

それと、作者はこの小説のお気に入り登録数や、ポイントを怖くて最近見ていなかったので、試しに見てみたら、お気に入り登録数が350人となっております。

皆さん。私は貴方たちを本当の神とあがめます。本当に、本当にありがとうございます!!!

## オルソラ争奪戦争・開戦前

SIDE???

数千年前、とある国の南端の谷にある聖堂。

そこで、儀式が行われた。

目の前で、炎が燃えさかり、その周りで恰好から高貴なくらいだと思われる人々が、流れる盛大な音楽と共に不吉にしか思えぬ歌を歌う。

数分前に召喚された私、まあ彼らには見えていないだろうが、は何が行われるかサツパリだった。

「ああ、我に力を！！我に力を！！」

やけに豪華な服装の奴が大声で私に祈り捧げる。多分国王だろう。その手にはまだ生まれて間もない、赤ん坊がいる。

(ああ、可愛い……………)

つつつい、そんなことを考えてしまう。おおっといけない。これだから、他の神々から『変神』扱いになるのだ。

(にしても、こやつらは一体何をしようと言っのか?)

召喚されてから、もう40分は経っただろう。いい加減に長すぎる。

(それに、何だこの、凄まじく不吉な音楽は……)

さつきから歌われているのは、聖堂の清らかさをぶち壊すような、『力』とか『権力』を貪欲に欲する言葉ばかりだ。気分が悪くなる。

(もう、いい加減にしてくれないかな……こっちだって下界に長時間いると疲れるのに)

そう思い、国王から目を離し、気味悪い歌を歌う人々を見てみた。

(……………あれ?)

驚いた、いつのまにやら、彼ら全員の手には赤ん坊が抱かれている。

(どういうことだ? 訳が分からん)

何故だろう。嫌な予感しかしない。音楽はもうピークに達しているのか先ほどの倍以上はうるさい。

「どうか、どうか力を!」

(うるさい、うるさい、うるさい、うるさい、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ)

もう力を、力をつけてうつせえよ。と、マジギレしようとしたとき、王に抱かれていた赤ん坊が高く持ち上げられる。

(……………?)



が、焼かれていく。

泣きたかった、目の前の惨劇に、何も対処できない私が。

「力を！！力を！！」

そう叫んでいる、力にしか興味がない、クソ共を、抹殺、いや生き地獄でたっぷりと痛ぶり、殺したかった。

とうとう、最後の赤ん坊が投げ込まれようとする。が、母親らしき人物は必至で、我が子を投げ入れるのを拒否する。

「おかしい、おかしいわ！！国のためだからって、何の罪もない赤ん坊達が、何故こんな目にあわねばならないの！？」

母親は、全員に言い放つ。勇敢な女性だ。だが、この場でそんなことを言えば、結果は分かりきっていることだった。

「貴様！！下級貴族なのに、国のために生贄を捧げぬとは、万死に値する。こやつもろとも投げ込め！！」

王が、命令すると、人々はその母親を猛火の中に押し出す。母親も抵抗するが、押される力には叶わず、その猛火に押し込まれた。

(く、くそがつ！！！)

猛火の中に入った母親は、もがき苦しむ。だが、その両腕だけは、我が子を持ち上げ、猛火に当たらぬようにしていた。その姿に、涙を流しそうになる。

「おのれ、早く子供を火の中に落とせ!!」

ところが、クソ野郎の命令により、1人が棒を使い、赤ん坊を叩き落とそうとする。

私には、もう我慢が出来なかった。

猛火の上より、私は、人々の前に表した。

「おお!!」

私の姿に、人々は驚愕する。

「や、やったぞ!!我々は神を召喚した!!」

どよめく人々。王は狂喜している。

「ああ、神よ、私はあなたに、100人も新生児を捧げました。どうか、私の願いを聞き入れてください!!」

新生児というと、出生後28日未満の乳児だ。もう、許す必要はないだろう。

「ほう……どんな願いだ？」

私はわざと、満足そうな声で訪ねる。王は、まんまと引っかかり、自分の欲望をさらけ出した。

「はい、私には力が必要です。この世界を征服するためにです。で



すから、私に永久の命、財力、そして武力を……………」

王は最後まで言わなかった。いや、言わせないように、その体を真つ二つに引き裂いた。

「残念ながら、その願いは聞けないな。いや、1つだけ、永久の命だけ叶うかもしれん。まあ、一生、灼熱の責め苦を受けることになるかもしれない！」

真つ二つに引き裂かれ、内蔵が飛び散り、ぐちゃぐちゃになった王を見て、人々は恐怖に駆られ、一目散に逃げ出した。

「いや……………逃がさん、誰一人、絶対に」

ずっと、右手を逃げ出した、患者共に向ける。

ブチャー！！ブチャー！！ブチャー！！ブチャー！！ブチャー！！

人々の喉が、一斉に切り裂かれ、倒れ、悶え苦しみ、死んでいく。

「腐れどもが、一生、責め苦を受け続けるがいい」

すぐに、赤ん坊の方を見る。まだ、生きている。掲げ上げている母親の腕は、ほとんどが炭化しているのにも関わらず、まだ崩れなっていた。

「可哀想に……………」

私が赤ん坊を抱き上げると、母親の腕は崩れ落ちてしまった。まるで、安心したかのように。そう思うだけで、涙があふれる。

急に抱き上げられたのが原因かは分からぬが、赤ん坊がゆっくりと目を開けた。

やばい、私の姿は端から見れば滅茶苦茶怖い。泣き出してしまっ

「んああ、んああ」

ところが、赤ん坊は泣きもせず、逆に笑いかけてくる。驚いた。

私の姿は青銅の玉座に座る王冠を被る牛頭である。笑いかけてくるなんぞ考えられん。

だが、これで私の情はこの赤ん坊に完全に移ってしまった。

「よし……」

私は、この子を天界に連れて帰った。

その後、いろいろなことがあった。天界に連れて帰った赤ん坊を見た、大神、というより女たらしの神、ゼウスに叱責、罰まで言い渡された。赤ん坊までもが、罰せられようとされたが、女たらしの苦勞人妻である女神ヘラが赤ん坊だけは免除してくれた。

あの嫉妬の女神も赤ん坊を罰するのは嫌だったらしい。ヘラは最後に、「まあ、この子には良い人生を送らせてあげましょう」と言ってくれた。

私は、2000年間、罪を償うために囚人となった。周囲からは、何やっているのかと呆れられた。まあ後悔はなかっただろう。

だが、ヨルダン東部の口トの子孫：アモン人の強壯な神であった私は、ユダヤ人に最も忌み嫌われる存在のひとつとなった。どうやらあの生贄が尾ひれを引いて、伝わったらしい。

悲しかった、私はそんなことをしていない。だが、下界の人々はいくらかでも私のことを魔神やら悪魔やらと罵った。辛かった。

それから、5000年の時が経った。もう、私も精神がボロボロだった。下界じゃ、碌でもない評判。天界でも、お払い箱になりそうだ。もう、長らく生きていてもしょうがない。

だが、最後に、あの赤ん坊のことが気になった。私は、何とかヘラに面会し、そのことを聞いた。

紀元前446年に、他の貴族の生まれとして転生させたらしい。国は共和制ローマ。微妙な時代にしたな。ゲーで殴られた。

「じゃあ実際に見てみる」

そんなこと言われてその下界に行かされた。

そして、私はあの赤ん坊がどんな人になったか見た。

優れた武人になっていた。ただ、市民からの人気は悪かった。そんな彼は、あらぬ罪で市民からローマから追放された。

私は危機感を感じたが、杞憂だった。ローマはこの時、北からのケルト人の侵略を受けた。

ついに、ローマ本国が陥落してしまう。そこで、彼は呼び戻された。そして、彼はローマを救った。

名前はマルクス・フリウス・カミルス。多分、有名じゃない。だが、英雄には違いない。

そんな彼が、部下にこう話していた。

「私には赤ん坊の頃の不思議な記憶があるんだ」

「どんな記憶ですか？」

「言つと笑われそうなんだが、牛頭の不思議な奴にだっこされていた記憶がはつきりとあつてな。ははっ、まあちゃんちゃらおかしい話だが、私にはそいつが良い人に見えた。」

そいつも俺に笑ってくれたな。それだけなんだが。まあ……私が目標にしているのが、こんな奴なのかもしれん」

「どづいつことぞ？」

「そいつは姿は怖かった。だがな、優しさがそいつからは感じられただ、赤ん坊の私でもね。私も表は怖いが、中は優しさもある人

間になりたいんだよ。軍人になっちゃそれも叶わないがな」

彼の笑顔を見たのが最後、私は天界に戻った。

ヘラからどうだったと聞かれ、私は幸せそうに、良かったよと答えた。もう、思い残すことはない。私が消えても良いだろう……………

魔神モロクSIDEOUT

SIDE数馬

「……………夢？」

目覚めた。しかし微妙な目覚めだ。

「なんつー夢だ。オチが死かよ。見事にバッドだ」

他の夢を見たかった。エロい夢とかエロい夢とかエロい夢とか、打ち止めとかインデックスに癒される夢とか。

「ああ、最近はこんな夢ばっかだな」

風斬がレンにキスした夜から、こんな夢を見始めた。何故だ。

「しかも、6日連続は厳しいな。ていうか嫌だ」

まあどうにも出来なくなったら大天使にでも聞くとしよう。

「そっぴや、レンの奴、どうしたかな」

キスされた後、シエリーを連行していった。あいつ神裂のことが好きだったはずだから、風斬にキスされたのは嬉しくもあり、複雑でもあるだろう。

「まあ、キスされてない俺よりかはマシか」

自分が虚しくなるな。恋愛フラグ立てると言っておきながら、いまだに1つもないよ。そっぴや前に、大天使にフラグを作ってもらったような気がするが本当に立っているかも怪しくなる。

「で、今日は原作第7巻の1日前、9月7日。とある魔術の禁書目録のイラストを描く灰村キヨタカ様の誕生日だ!!」

今日はお祝いだな。上条も無理矢理誘うことにしよう。別に、何かあるって訳でも……

~~~~~ ひぐらしのなく頃に なのです の着信音

「うん、羽入ちゃんは可愛いよ。だけど出ない……」

(映画 黒い太陽731の何かグロテスクなシーンの台詞と音が流れている)

「分かりましたよ!!! 出ますよ!!!」

数馬SIDEOUT

「やつほー!!! みんなのアイドル、大天使だよー!!!」

これまたハイテンションで登場の大天使。久しぶりの登場だ。

「どうも、確かに可愛いですが、今の俺には必要ありませんよ」

適当にあしらい、本当にパーティーをしたい数馬。だが、叶うこととはなさそうだ。

「そんなこという数馬君には任務だよ。今回は結構めんどくさいから頑張ってね」

「ごめんなさい、電波が悪くなってて聞こえないわ。一端、終わりに……」

「映画 黒い太陽731を頭の中に無理矢理流すよ?」

「すみません、すみません、すみません、勘弁してください」

色々戦場に繰り出した数馬だが、赤ん坊の解剖シーンがあるこの映画には確実に拒絶反応を示す。というか無理だ。

「で、任務は何ですか？」

「えっと、今回の任務は、天草十字凄教のオルソラ防衛を援護せよだね」

数馬は任務の内容に、疑問があつた。今回、オルソラを誘拐したのは天草十字凄教。で、上条さんは、まあ敵対するわけで。

「OK。あなたは俺に死ねと言うのか!？」

大天使に問い質す。上条と敵対するなんて敗北フラグ以外の何にでもない。援護なんて無茶だ。

「いや、そういうわけじゃないよ。ちゃんと君が何か考えてくれそうだから言ってるんだよ」

数馬も考えてみるが、天草十字凄教の戦闘行動可能兵力は52人。対する迎撃目標である、原作では黒幕のような立場であつた、ローマ正教所属、アニニューゼ部隊は252人。

「無理だ。絶望的すぎる」

ランチエスターの法則において、局地戦：8(2・8)約3)の兵力では確実に勝算があると言われ、天草とアニニューゼ部隊の兵力比は1対5。敗北は必至だ。

「あっさり諦めないでよ。君の灰色の脳細胞を駆使して勝利に導いてよ」

「俺はポワロじゃないし、軍師でもない。孫子も言っているが、無



謀な戦いならしない。それが一番だ」

「この戦いに敗れたら天草十字凄教が潰されるのは分かってるよね？ そうなれば、天草教徒の運命は……分かってるよね？」

大天使の言うことは、数馬にも分かつてはいた。あのアニューゼ、通称ロリロリ部隊は、間違いなく白豪主義並の差別を徹底している。原作じゃなかったが、虐殺も考えられる。

それは、彼としては、絶対に望まないことだ。数馬は言う。

「……………じゃあ後で電話かけた時、頼んだものを用意してくれ。そうしたら何とかしてみる」

了承の返事を得られた大天使は笑顔で、彼に言った。

「やっぱり君は優しいよ。まかせなさい！！どんな物だろうと用意するし、君のフラグもさらに極太にしてあげるよ！！」

「おい、それどういう……………」

最後の大天使の台詞に数馬は気になったが先に切られてしまった。

「……………大丈夫かな。不安だ」

主にフラグを太くするって言った辺りに。

「とりあえず行動開始だ」

そう言い、数馬は外へ出る。ここからが、死闘の始まりだったの

かもしれない。

↳学園都市 検問所 出国↳

「天草教の本拠地、まあ仮の陣地はどこかって話なんだが……」

数馬は迷っていた。あの教徒達は全員、隠密行動若しくは隠蔽工作、あと偽装のスペシャリストだ。どこにいるかなんて、皆目見当もつかない。

「そっぴや大天使に聞いてみれば一発で分かるな」

そう思いかけてみようとしたが、何かそこら辺は意地というか何か敗北感がありやめた。じゃあどうするかというと。

「ぶらぶらと彷徨つか」

根本的に間違っている判断だが、数馬は歩き出す。天草教徒発見にこの後3時間は要することになるが。

一方、この18時間前。朝のロンドンの街では、3人の『必要悪ネセサリーウスの教会』所属の魔術師が歩いていた。

「アークヒショップ  
最大主教」

そのうちの1人、ステイル・マグヌスは、隣にいる金髪の女性に話しかける。

「んん。折角地味な服装を選ったのだから仰々しい名前で呼ぶべからずなのよ」

簡素なベージュ修道服、実際は違法なのだが、に身を包んだその女性は変な日本語使い、ステイルに言葉を返す。

この女性、自身は街に馴染んでいると思っっているが、その逆だ。

その美しい白い肌、サファイヤのような透き通った青い瞳。そして、くるぶしの辺りで折り返され、大きな銀の髪留めで止められている素晴らしい金髪。それらは馴染むという概念からかけ離れていると言っても過言ではない。

イギリス清教『必要悪の教会』最大主教 ローラ・スチユアート。

それがこの女性の名と職業だ。その権力は強大であり、イギリス清教の実質的な支配者とも言える。そんな彼女が護衛もなしにロンドンの街を歩いている。とんでもないことだ。

本来だったら、ステイルともう1人が彼女のいる聖ジョージ大聖堂に向かう手はずだったのだが、古くさい聖堂にずっといるのは嫌

だ、みたいなことを言われ今に至る。

(それにしても、この人もこの人だがこいつの恰好も何とかならぬ  
いのか?)

ステイルはローラの隣にいる異様な恰好の奴をじろりと見る。

赤色の詰襟でシングルボタンの上着に緑のズボン。第5近衛竜騎  
兵連隊《プリンセス・シャーロット・オブ・ウェールズ》の服だと  
当の本人は言っているが、街を歩いていると目立ちまくるので困る。

ステイルとしては他の服にしてくれと言っても良いのだが、あち  
こち血が付着しているのを見ると長年愛用しているとみたいので  
言っに言えない。

「レン?そんな恰好していたら目立つことこの上なくてよ?」

そんな配慮も考えていないのか最大主教は言ってしまう。貴様に  
言えることなのか、と小一時間問い質したいステイル。

言われたレンはそれでも、怒りはせずに彼女に笑顔で説明する。

「この恰好はイギリス王室やあなたのような方に忠誠を尽くす意味  
で着ています。何と是ご容赦を」

そんなことを言うレンに、最大主教も納得する。

「そう、それなら文句は言っべからずなのね」

「それに、逆に問い質しますが、最大主教は何故、そんなばかばか

しい口調の日本語をお使いになるの？」

レンもそんなこと考える奴ではないようだ。言われた最大主教は、最初はキョトンとしてすぐに顔を真っ赤にする。

「な、え、あ、おかしいの？日本語というのはこんなものではあらんこと？」

追い打ちをかけるようにレンは最大主教に言っていく。

「はい。古語としても狂っている上に、もう何が何だか分からない日本語と呼べない言葉です。あなたは新しい言語でも構築する気ですか？」

いや、考えないのでなく毒舌と言うべきだろう。最大主教と会ったときだけ。ステイルもレンと行動することはよくある。いつもは穏やかで礼儀正しい性格なのだが最大主教に会っているときだけ毒舌になる。何か恨みでもあるのか。

「そ、そんなことはないに等しきであり、えーとこ、これは……はあ、もういいでありけるよ。仕事の話に入るのことよ」

しよげる最大主教。いつもこんな感じでレンが勝ってしまう。そんな場面をよく見るステイルは、最大主教が何故怒らないのかが、不思議でならなかったがそれは今のところどうでもいい。

「一応機密事項でありけるから……きゅきゅきゅ、きゅ〜きゅきゅきゅ〜」

最大主教が通信用の護符を書いている。

「ああ、ここに用意してあるんで大丈夫です」

だがそれを予期したかのようにレンがすでに書かれた護符を用意する。最大主教がシヨックを受けた表情になる。

「お前……さすがにひどくないか？最大主教が気の毒だろう」

ステイルがレンに諭す。

「さあ、んなこと知ったことじゃねえです。さあ貼りますよ」

ペタッとステイルと最大主、面倒くさいのでローラにする、に貼っていく。

「うう……わ、私は名誉ある最大主教でありけることよ。なのに何で……」

しょげているローラ、はほっぽっておき護符による話がされていく。

(で、つまり『法の書』を解読可能と思われるオルソラ・アクイナスが、ローマ正教の腐れ外道どもから天草十字凄教の手に渡ってしまい、腐れ(ry)が援助を求めてきた。腐(ry)どもに恩を売るからお前ら行ってこい。禁書目録とか幻想殺しにも援助を頼め。というのが今回の概略ですね)

(だ、だからレン！！私が一生懸命に説明たる物をしているのにそ

の様に言いたるとはひどいのよ!!)

可哀想なことに10分もかかったローラの説明はレンがすぐに要約してしまった。時間の節約にはなるが、これはひどい。喧嘩が始まる。

(頼むから喧嘩なんてしないでください。つか仲が悪すぎですよ、本当に)

ステイルが2人の仲裁に入る。2人もやっと落ち着いてくれた。

(さーせんでしたね)

(まったくなのでありけるのよ)

ggdgd感が残ったまま話は連絡が取れなくなった神列の話に移る。

(神裂の件でも、連絡が不可能という状況のようだから間違いない。天草側の支援に向かっている可能性があるな)

ステイルの言葉通り、その可能性は高い。神裂は元天草十字教、通称?天草式の元トップであった。話によると諸々の事情でその地位を捨てたが、関係はそのままらしい。

その詳細は原作4巻で記されているのだが省く。

(だからステイルとレンには神裂がやっかいなことをしない内にとつとと処理して欲しいと申したるよ。まあ禁書目録と幻想殺し以外にも超強力な戦力がありにけることよ?)

ステイルもレンもすぐに誰だか分かる。レンとしてはこの上なく強力で頼もしい奴であり、ステイルとしてはボコボコにされそうなので嫌な奴だ。

（数馬光太郎ですか）

（数馬光太郎か…）

2人の声のテンションに温度差が出来る。だれがどれなのかは言わずもがな。

「まあ続きは……………」

ローラは護符による通信をやめる。目の前には聖ジョージ大聖堂がある。

「中で掛け合おうとしましょう？」

中に入っていく3人。ロンドンの街は活気だっていた。



## オルソラ争奪戦争・開戦前（後書き）

土下座文です。

まず1つ。前半の文ですが、長すぎだと思っただ方、申し訳ありません。私自身もこりや飽きるなど予想できません。

2つ。ローラのキャラが何か酷い。いや、私は原作はちゃんと読んでいます。彼女のキャラだって分かっているつもりです。ですが……これは酷い。

3つ。いい加減に、この小説の滅茶苦茶、はちゃめちゃな所はどうにかしたい。でも出来ない。私の文章力のなさがよく分かる。

4つ。誰かご指摘をください。お願いします。文章が良くなるんなら何でも取り入れますから。ただし根本的なところから駄目なのは言わないでください。分かってはいるので泣きます。

そういうことでご意見ご感想をお待ちしております。

## オルソラ争奪戦争・準備（前書き）

あけましておめでとございませう。今年もこの駄作をよろしくお願ひします！！

## オルソラ争奪戦争・準備

SIDE数馬

「……………石原都知事は独裁者として抹殺しても良いだろう」  
ゴミクスヤロウ

おおっと。つつい、いらぬことを考えてしまったよ。しっかしあの元官能小説作家の知事、死んでくれないかな。ゴルゴ13に狙撃されるとか。

「まあそんなことより、諸君、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。で、目の前の天草教徒らしき奴がいるわけだが」

人数は3人。斥候<sup>せっこう</sup>、まあ偵察に来ているのだろう。俺は25m離れたビルの屋上から監視している。

「多分、アニエーゼ部隊からも幾人かが偵察に来ている可能性が高いからな。遭遇戦にならなきゃ良いが……………あっ」

言っているそばから天草側の後方、約35m付近にアニエーゼ部隊の斥候約5人が接近中。アニエーゼ側は気づいている模様で臨戦態勢に入っている。

「やべえやべえ」

すぐにこちらも対応する。相手の距離は約60m、遠距離攻撃ではもってこいの位置だ。

「新装備の試射をしてみるか」

アタツシユケースレサイズから狙撃銃をとりだす。今回、試射するのは99式短小銃、別名キングオブボルトアクションと呼ばれる代物を、岩崎みなみ、もといオリュンポス十二神のアレーヌが改造した100式短小銃だ。

大天使が支給してくれるらしく入っていた。

99式短小銃は知名度に関しては高くはないが、第2次世界大戦当時の日本軍が装備している。大戦末期には目も当てられないほどの粗悪品になったが初期型は素晴らしい性能を誇り、今でも高値で取引されたりしているとか。

狙撃銃としても活躍し、ペリリユー島では米軍憲兵司令官を一発で頭蓋骨を撃ち抜き射殺した。その性能を現代でも通用するように改造したのが100式短小銃だ。

「しっかし、精密射撃なんてあんまし、やったことないから不安だな……………」

狙撃をしたのは白井黒子を護衛した時以来だ。あの時は近距離だったから成功したが、今回は60mと遠距離だ。訓練もしていないの出来るのか。

「まあ時間がないからやるしかないな」

スコープ、種類はルーラー・FP、を覗き目標を決める。距離は50m、目標を先方にあるシスターに設定。風向、風速などは魔眼で計算。

「誤差修正完了……………」

引き金に指をかけ、引いた。

弾丸が放たれた。

「命中!!」

先方のシスターが倒れる。成功だ。念のため言っておくが、使用している弾丸は学園都市製の非致死性弾丸だ。効果は対象者の10cm手前で睡眠作用がある霧状になり、48時間冬眠状態にさせるというもの。

構造はどうなっているか分からないが、後遺症が残らないとのことなので安全だ。

「天草教徒も気づいたらしいな。よし、次だ」

急いで目標を決め、射撃に入る。ボルトアクション方式は薬莖を詰め込まなくてはいけないのですぐさまやる。直動式ボルトストレートアクション方式なのでボルトハンドルをそのまま後方に引き、また前方に戻せば完了だ。

射撃する。

「命中……」

2人目もうまくいった。天草教徒も奮戦、アニエーゼ側を撃退している。前哨戦は勝利しそうだ。

数馬SIDEOUT

「さあて、天草教徒とご対面といきますか」

てくてくとビルの階段を降りていく数馬。天草教徒には美人が多い可能性が高いので期待が高まる。

「そついや捕虜（さっきのシスター5人）の処理、どうするかな…  
下手に監禁したら破壊工作される可能性もあるし」

期待感と問題処理の悩みの両方が彼の心で蠢く。何なんだろうか。

「とりあえず、天草教徒とご対面……」

ビルから出た瞬間、のど元に刀を突きつけられた。

「えっ……」

動揺する数馬。目の前には大柄な男、挿絵で確認出来た容姿と酷似しているので原作の脇役キャラ牛深、に戦斧を突きつけられてい

た。

「お前、何者だ？」

低い声で質問される。怖い。非常に怖い。見ればいつのまにか他の2人の教徒にも刀を突きつけられている。

「はい……………」

状況が読めない数馬。そんな様子の彼に牛深がもう一度問いかける。

「だから、お前は何者だと言っているんだ。狙撃手」

どうやら警戒されているらしいということの数馬は気づいた。

「あ、あの、話しますからちょっと喉もとに戦斧を突きつけるのやめてくれませんか？刺さったら死にます」

「いや駄目だ。何をしでかすか分からないからな」

完全に警戒心丸出しだ。

「待つてくださいますよ。一応、あなた方の援護をしたんですけど……………」

「いや、信用出来ない。第一、身分も分からない奴を信用しろと？」

状況は良くない、むしろ最悪と言っても良いだろう。数馬は天草教徒を発見できても、どう接触すればいいのかまで考えていなかった

た。

天草十字凄教も今は戦時下であるためそこら辺厳しくなっている。そこを失念していたのだ。

「えつと……………」

必至で考える数馬。答え方によっては死にかねない。いや、悪魔に近いんだから死にはしないが重傷を負うのは確実だ。何かないか。何かないか。

ドラえもんは、いつもこんな感じに焦りながら道具出すのかと、どうでも良い考えをしながら打開策を考え……………ついた。

「こ、これを見てください……………」

少し震える手で彼は、懐から一枚のサインらしきものを取り出し牛深に渡した。

「こりゃあ……………元女教皇 プリエステス の書名！？なんでお前が……………」

動揺する牛深。フィンランド戦での帰還の際、ヘリの中でこっさりサインを神裂から頂いていたことが幸いしたようだ。そんな描写は一切書いていないが。

「い、一応は彼女と親交があるのでその証として持っているんですよ。これで良いでしょ？」

実際には親交よりも単なるファンとして頂いた感があるのだがこの際どうでもいい。



「……まあな。で、一体その元女教皇 プリエステス と親交が深いお前が何の用なんだ？」

「えっと、単刀直入に言えばあんたらの援護、若しくは救援、はたまた援軍と考えてくれませんか？」

数馬の言ったことに、牛深とその他2名は、はっ？とでも言うような顔をした。

「何で見ず知らずのお前に援護されなきゃいけないんだ」

「あ、それは……えっと……」

まさか大天使に頼まれてと言うわけにはいかない。狂人と見られるだろう。で即座に考えられた選択肢は3つ。

- 1、 神裂さんに依頼された。 嘘、ばれるとすごく面倒くさいことになる。
- 2、 神のお告げで…… 死亡フラグ確定
- 3、 自らの組織の命令によって 作り話をするのが面倒くさい上に、フォツケさん（組織のボス）に謝らないといけない。

2chの安価に頼りたいと切実に思ってしまう数馬。で、結局決めたのが

「本当は機密事項だが、ことは一刻も争うんだ。話してもいいか……俺は諜報組織『赤光の黒十字』の一員なんだが、オルソラ・アクイナがあんたらに誘拐されたと聞いて……」

一字一句、即興で考えなければならぬので四苦八苦したが、概要をまとめると、

自分は諜報組織の一員のだが、命令により貴軍を援護することになった。そろそろそちらの首領にも連絡が回るはずだ。ということに。

「なるほど……だが本当に連絡が回っているか信憑性に欠けるな、このローマ側の気絶した修道女もいるし、本部に戻るぞ」

結局、いまだに命が危機的状況のまま連行される羽目になる数馬ただ、彼らが携帯を持っていなかったのにはほっとした。すぐさま確認されたらOUIだった。

連行される途中、ポケットの中の携帯でフォックさん宛にメールを送信。文はポケットの中で指の感覚だけで書いた。

ひとまず、これで多分大丈夫なはず。

「……本部って何処だよ？」

原作では天草教の本部なんて書いてあっただろうか。いや、なかったはずだ。

「少し離れた所にある遊園地のパラレルスイーツパークだ。行って見りゃ分かるが仮本掘みたいなものさ」

牛深の隣を歩いていた男が説明してくれた。

そう言えば原作でそこに本隊がいるって記述があったことを思い

出す。数えるほどしか書いてなかったのですっかり忘れていた。しかし、機密事項なんだから見ず知らずの自分にあっさり話すなよと数馬は思うが、スルーする。

「ところでオルソラ・アクイナスは無事なんだろうな」

本部に行く道中、ふとそんなことを聞く数馬。

「そんなこと考える意味ないだろう……」

面倒くさそうに返事をする牛深だが、その言葉を聞いた瞬間、数馬が凄まじい剣幕で牛深に詰め寄る。

「てめえ、どうでも良いとは何事だ！！貴様ら俘虜の扱いも知らないのか！！！」

ハーグ陸戦条約 条約付属書『陸戦ノ法規慣例ニ関スル規則』に記載。

第2章 第4条：俘虜は敵の政府の権内に属し、これを捕らえた個人、部隊に属するものではない。俘虜は人道をもつて取り扱うべし。兵器、馬匹、軍用書類を除き俘虜の所有するものを没収してはならない。

第7条：政府はその権内にある俘虜を給養すべき義務を要する。

数馬国際信条法付属文書『美女・可愛い女の子の扱い』に記載。

第1条美女、可愛い女の子は神とあがめなければならぬ。

第2条、なお美女若しくは可愛い女の子には暴行等の行為は万死に値する。

第3条、また束縛、逃走阻止としての牢屋は除く、なども許されず、警沢な料理を振る舞うべし！！

これらが守られていなければ国際上、大問題になるぞ！！！」

後半、ツツコミだらけなほどおかしい条文があつたが余りの剣幕に牛深も問い質すことが出来ない。大柄な30代の男が高校生の剣幕に負けているのはなんとも滑稽だ。

他の教徒2人も何か圧倒されている。

「オルソラ・アクイナスは聞くところによると美人と聞く。貴様ら、ちゃんとやっているのか!!」

ギロリとした目で睨み付けられ、固まる天草教徒3人。何なんだろうかこの状況。

(やばいぞ、何かこいつ怖え……………)

(どうするよ、たしか魔術で束縛状態だったはずだぞ)

(終わった……………)

こそこそと話す3人。数馬の眼からは邪悪な気が感じられる。そして、何か眼球が赤い。

「だ、大丈夫だ…問題ない。そこらへんはちゃんと、ちゃんとしているぞ……………」

牛深はそう言いながらも、早く本部に報告しないと大変なことになるという危機感と何で数馬の眼が赤くなっているのか疑問に思った。

「そうか、それなら問題ない」

と言う数馬だが、いまだに目は真っ赤だ。間違いなく疑りかかっている。それは牛深他2人にも分かっただけ、命の危機さえ感じ

てきた。

とりあえずは進んでいくが雰囲気は重い。いまだ数馬の眼球は赤い。

「「「「」」」」」

数馬の眼は赤い。

「「「「」」」」」

数馬の眼は（ry

「着いたか……」

目の前にはパレルスウィーツパークがあつた。学園都市からそう遠くない東京都内にある遊園地と言うよりは菓子専門のテーマパークだ。

美味な菓子店が多くあり、食料には不自由しなさそうだ。栄養バランスは偏るが。

「此処に本部があるんだな？」

「ああ……」

眼球が赤いままの数馬を入れても良いのか悩む牛深だがしょうがないので本部に連れて行く。

本部、言い方を変えれば天草十字凄教総司令部と言った所だろう、はどこにあるのか。

「一体、本部は何処にあるんだ？」

「あの塔だ……」

牛深が指した方向には、全高15m程度の塔があった。なるほど、全高が高ければ敵の侵攻の際に発見しやすい利点がある。

「……天草十字凄教のトップも考えるじゃないか。全高が高いと攻撃を受けやすいが敵の攻撃を早期に発見し全部隊にすぐさま命令するのが何より重要と考えたんだな」

勝手に自分一人で感心している数馬。見れば徐々に目から赤が消えていく。

「いや……そこまで考えているか？」

数馬が感心しているのをよそに教徒3人は話している。

「絶対、深い意味ないだろ……敵の早期発見なんて考えてもいなかっただぞ」

「住み心地が良いから決めたんだぞ……」

しかし、数馬の眼が赤くなくなったので彼らとしては都合が良かった。

「と、とりあえず行くぞ……」

「このテーマパークもゲリラ戦にはちょうど良いな。此処の店の上に機関銃陣地を設置するのも良いし狙撃としても恰好の場所……」

「行く、く、ぞー！ー！」

く塔内の司令本部く

「……で、何で欧州の魔王の異名を持つあんたがこの建宮齋字に何のようだよな？」

「まったくそう怒らんでも良いだろう。それとその語尾の、くよなはやめた方が良いと思つよ？」

中では建宮齋字が携帯を手に取り会話をしていた。相手は、『赤光の黒十字』創設者、フォツケ・ローゼンクロイツ。

「それは自分の勝手なのよな。早く用件を言っで欲しいよな」

「はいはい、分かりましたよ。簡単に言えば君達、天草十字凄教の支援をしようという話だよ……」

「えー!？」

唐突な支援の申し出に驚く建宮。しかし驚きはすぐに疑いの心になる。

「どうことなのよな？急に支援を申し出るなんて？そっちは巨大諜報組織、こっちは極東の小宗派。支援する義理も利益もないのよな？」

しかし建宮の疑いとは裏腹に、フォツケは利益も何にも考えていなかった。実はフォツケ自身、あんまり交渉ごとは得意じゃない。むしろ全然駄目だ。いつもサポートやソフト面は嫁がしていたりする。

それに普通、部下が捕まった場合、諜報組織だったらすぐさま見捨てるとかの対処があるのだが、プロイセン魂とでも言うべき彼の信念がそれを許さなかった。そこら辺が部下に慕われたりしているのだが。

(やべえやべえよ。何でそう疑ってかかるんだよ！！大人しく受け取ってくれ！！つーかあの小僧、何で急にそんな頼み事してくるかな……………宗派関連の交渉ごとは嫁に任しているのに今いないし。やべーよどうしよう。ローマの腐れどもに喧嘩売るのはまったく良いけど天草に手を貸す理由って……………あっ)

「いや、こちらには将来有望な奴がいてな、そいつに実戦経験を積ませようと思って……………」

フォツケはうまく乗り切れたんじゃないかと言んだ。

「そんな新人はいらないよな」

そしてそれは物の5秒で打ち砕かれた。



「いや、新人じゃないよ？実戦経験豊富だよ？」

「じゃあ何で実戦経験を積ませないと何て言ったよな？」

電話の向こうで、フォツケの固まる音が聞こえたような気がした。というか絶対に聞こえた。

「えっと……………（もう泣きたい…………）」

「矛盾点がある話なのよな」

墓穴を掘ったフォツケ。ドイツのハンブルクの会社の社長室で泣きそうになってくる様子がありありと伝わってくる。

しかし疑りかかっていた建宮もローマの修道女部隊に対して戦力不足は否めなかったので受け取ることにした。

「まあ……………こつちも戦力不足は否めんのよな。ありがたく受けさせていただくよな」

フォツケさん、嬉しい意味で涙目。

「ほ、ほんとか！？あ、ありがとう、マジでありがとう……………！！」

支援してやる方が感謝しているというおかしなことになっていた。

「で？その支援とは何だよな？」

「1人なんだが、戦力としてはロシア魔術師400人〓ローマ正教修道女部隊、正式名称アニエーゼ部隊の7割って所だな」

戦力UP 確実である。

「マジかなのよ……化け物が来るなのよ？」

「見た目高校生、頭脳は諸葛孔明、最低楽毅と言った所」

補足説明、楽毅とは中国戦国時代の燕国の武将。すごく強い、めっさ強い。それしか言えないほどすごい方。

「強さの度合いがほぼ違わないのよな。というかそこまで分かるものなのよ？」

「いや、前、こっそりそいつのことを占ってみてさ。やってみた結果がこれだよWWW」

「占いだけで実力を決めて欲しくないよな……普通」

ただ、そんな占いでも大魔術師ともなればバカには出来ない。実際にはほとんど正確な情報なんだろうと建宮は思うことにした。

しかし、このフォツケの占い。実は諜報組織のくせに占いの結果が漏洩しまくった。それも全世界に。学園都市のアレイスターにまで知れ渡ったのは言うまでもない。後付設定だよ。そうだよ。ごめんなさい。

「じゃあよろしく頼んだ。諸君ら、天草十字凄教の武運を祈って…

…（あゝやっとなと終わるよ）」

「そりゃどーもよのな」

交信は終了した。建宮は今更だがどんな奴がくるのか、噂に聞いた程フォツケって恐ろしくないんじゃないかねという考えが出始めた。

後者はまったく違うと言えるのだが、前者に関しては今のところさっぱり分からなかった。

「そーいや国籍何処かも聞いてないよな……」

外人、ないとは思うが日本語が通じない可能性も少しある。そうなったら戦力としての意味が全くない。

「あゝ余計な支援を受け取ったちゃったかもしれないよな……」

じわじわと後悔し始める建宮齋字、教皇代理の立場である彼だが作者と同じく胃痛に悩まされないのか不安だ。

コンコン

ドアがノックされた。どうやら支援戦力が来たらしい。

「あ、どうぞ入ってよのな」

ゴバチャアアアン!!

言ったとたん、ドアが不自然な音をして吹き飛ばされる。

「はいのよな!?!」

「貴様らああああ！！それでも帝国軍人啊ああ！！」

「……俺らは天草教徒だよ！！」「……」

大の大人3人がたつた1人の青年を相手にボコボコにされている  
図がそこにはあった。

「何だあのオルソラに対する仕打ちは！！何で口にお札貼っているんだ！！何で手首にひもが巻き付けられてんだ！！そういうプレイは相思相愛の仲じゃいけないのが常識だろうが！！！」

「んなこと知るかああ！！！」

牛深が青年に向かって怒鳴りつける。こんな大柄な男に怒鳴られれば大抵の男はびびるのだが、青年はびびらない。

「黙れ！！！！俘虜の扱いもなつとらん宗派なんぞ、宗派でも何でもないわ！！！」

「あの〜」

恐る恐る、声をかける建宮。かなり小さかったのにもかかわらず青年は反応してくれた。

「何だ！！！」

ただしめちゃめちゃ怒っているが……

「た、たのむから落ち着いてのよのな？」

机に隠れるようにしながら建宮は青年をなだめる。牛深、他2名が哀れなような視線を送ってくるが建宮は気にしない。いいや気にしたくないはずだ。

青年は、怒りの形相、そして何故か目が赤い状態で建宮を見つめる。

「……………やべえ……………」

10秒間見つめられた後、青年は何か気づき、顔を青ざめる。

「も、申し訳ありません……………」

その次の瞬間に青年は頭を下げ、謝罪の言葉を述べていた。

「……………ええええええ！？」

4人の教徒、内1人は教皇代理は驚きの声を上げる。そりゃあんな怒鳴り散らし、ぼこぼこに大人を殴っていたのが急に大人しくなったのだから当たり前だが。

「きよ、教皇代理……………あなたにはなにか特殊能力でもあるんですか！？」

「んなもんあるわけないよのな！！」

青年を大人しくさせてくれた建宮に感謝の目を向ける牛深他2人で、その暴れていた張本人は、地べたに正座すると深々と礼をして。

「ど、どうも、今回、支援者として派遣されました。数馬光太郎です。い、以後よろしくお願いします……………」

震えた声で言う数馬光太郎。

「嘘、だ！……！」

その言葉に建宮斎子、天草十字凄教教皇代理は全力で、認めたくない事実を否定した。

「すみませんでした、すみませんでした……………」

20秒後、そこには土下座をしながら謝罪している数馬がいた。

「いや、もう良いぞ……………」

さすがに土下座されて此処まで謝られちゃ牛深も許さないわけにも行かない。

「でも本当にお主が支援戦力よのな？まだ高校生じゃ……………」

建宮の疑問の通り、数馬の見た目は高校生。先ほどの会話にあったような戦力になるのか怪しい物だ。

「いやすみません、初っぱなから刀を突きつけられていららしていて、ついつい暴走しちゃいまして……………もうこんなことしませんから……………」

「いや、もうそれは良いよな……」

話がさっさと進まない。

「って、ああはい。大丈夫です。これでも武術の心得だったらあります」

そう言う数馬に牛深もうなずく。

「こいつには結構本気で殴りかかっていたが一発も当たらなかったですからね……多分本当ですよ」

「そう言うんだったら……大丈夫そうよな」

実力に関しては本物のようだ。

「じゃあ、この……数馬はどうしますか？」

牛深の間に建宮は少し思索する。

「この状況なのに受けないわけにはいかないよな……お主、数馬光太郎。今回の事態に対し、支援をお願いするよな」

事実、余裕がない建宮は、彼に手を差し出した。

「は、はい分かりました！！！（おっしゃあ！！奇跡！！）」

ぱあっと笑顔になり、すくつと立ち上がり手を握る数馬。採用試験に受かったような笑顔を見せる新人社員のようだ。

「そうと決まれば、作戦会議よのな」

数馬が仲間に入ったところで状況確認の時間だ。

「今の状況は……」「ローマ正教との全面戦争と解釈しますが？」……  
「……そうなのよな」

いきなり話の腰をボキッと折られ、少し落ち込む建宮。

「で、相手は修道女の部隊で人数は252人。こちらは52人。圧倒的な戦力の差よのな。質ではこちらの方が上だが、人海戦術なんて使われたらお終いよのな。ゲリラ戦するにしても限界がある。で、一気に決戦に持ち込む算段なのよのな」

孫子の兵法書においては長期戦の無意味さが書かれている。戦力の消耗と共に士気の低下もある。その上、長期間の戦闘で敗北したら一気に敗戦になるだろう。

短期決戦の場合の方がメリットは多い。戦略を考えるとしたらこれは当たり前なので、建宮もこれを採用したのだ。

「……………ほお」

建宮の説明を聞く数馬。建宮が作戦をしっかりと考えているのがよく分かる。

「作戦としてはとある手段を用いて、敵側の近くに移動。時刻は深夜、夜戦に持ち込む感じよのな」



その建宮の作戦を聞いてた数馬が口を開く。

「いいや……………この作戦では駄目です」

「はい？」

「いいですか？夜戦に成功しても、これじゃあ間違いなく敗北です。何故ですか？相手だつてプロです。特に修道女部隊は徹底的な訓練を仕込まれていると聞きます。間違いなく巻き返されるでしょう。混乱つて言つたつて警備とかもいるでしょうから発生しにくいでしょ？仮に発生しても直ぐに立ち直つて包囲されますね。ええ確実だよ。」

人数のこともありますよ。攻勢を行つても多数面からの攻撃で各個撃破されるのがおちです。そもそも数で押し負けてすぐにちりぢりに分断され、それで各個撃破の可能性の方が高いです。

いくら質が上だからと言つて、5倍近くの戦力差を巻き返すのは奇跡が何回か起きないと駄目ですね。

孫子にも書いてありましたが、勝算がなければ戦はするなと言つてでしょう？そんな綱渡りのような作戦は、俺は認めません」

すらすらと立て板に水を流すような、筋の通つた数馬の反論に、建宮は納得せざるを得なかった。

「……………むう。だとしたらどうするよのな？」

「そうですね。まあいくらか他の支援を俺が徴収しますし、色々用意しますから。そこから作戦を練ることとしましょう、ちよつと待ってくださいね」

「え、どうするつもりよな？」

ポケットから携帯を取り出す数馬。誰かにかけ、相手が出ると、おもむろに電話を始める。

「ああ、こなた。ちょっと取り寄せて欲しい物があるんだが……  
いいか？」

S I D E 数馬

「君から電話してくれるとはちょうど良かったね。今からかけようとした所だけど、何を取り寄せればいいのかな？」

俺は考えた作戦に必要な物をこなたに対して1つ1つ言っていく。

ただうつかり大天使と言わずにこなたと言うことにする。聞かれ  
たら変人に思われるからな。

「まずオート・メラーラ 76 mm 砲を独立砲台にしたのを2  
基。次にブローニングM2重機関銃を20挺。スタンガンを30個。  
それとティーガーII戦車を現代戦に通用するくらい魔改造したの  
を2両つてとこだな」

「うわぁ………またメジャーな奴とマイナーな奴を頼んできたね。  
っていうかさ、君が転生してから結構立った今聞くのも何だけど。  
何でアニメ以外のミリタリーとかにもそこまで詳しいの？」

今更過ぎる大天使に、俺はすぐにこういった。

「俺のモットーは趣味と仕事は広く深くだ」

何か電話の向こうで、大天使が引いたような気がしたが無視だ無視。

「ま、まあ良いよ。で？他には？」

「あとそれぞれの弾薬を1会戦分は用意してくれ。ええつと後は……ああそつだ、人を殴りやすい金属バットを1本」

「今の今まで近代兵器で急に何でそうなるの!？」

これは必要だからなあ………いろんな意味で。

「まさか気分とか雰囲気じゃないよね？」

「その通りだ」

「……………はあ、君は本当になんなの？」

失敬な、これでも人間だ。

「とりあえず……………ドライカーボン製のバットにしておくけど。これで良いのかな？」

「ああ、十分だ」

やはり大天使がいると助かるな。こういつときに一番役に立つ。

「それと、何処に送ればいいのか？ 指定してくれない？」

「じゃあ…… パラレルスイーパークスの中央広場に15分後につてくれ。ただ、76mm砲はもう一回電話して場所を指定するからそこに設置して」

中央広場が一番広いから来ても問題はないだろう。76mm砲は、今のところ良い場所が分からないから後回しで。

「じゃあこれでお終いだね」

装備に関しては良いだろうから…… あっ、やべえ。

「待ってくれ、それと最後に……」

「……まっ、こんな物だな。悪いな、迷惑かけて」

「何の何の。難しい任務を引き受けてくれたんだからこんなの、どつてことないよ。フラグも強靱で、上条当麻でも折れないから安心してね。じゃー!」

……最後の言葉がすごく、すごく期待を持てる。やべえテンシ

ヨンあがってきたWWW

「ニヤニヤしている所を悪いんだが、一体誰と話を……………」

「すみません、もう1件かけますんで」

建宮が話しかけてきたが今はスルー。次は少し面倒なのだが、ちよっとハツキングして……………よしOK。

「あれ？頭の中で声が聞こえるってミサカはミサカは不思議に思ってみたり!!」

はい、次は可愛い可愛い打ち止めちゃんだ。

「俺のこと覚えているかな？数馬だよ」

「ああー!!あなたはあの時、とてもお世話になった人だ!!ってミサカはミサカは大仰天!!」

ち、畜生。可愛いじゃないか。俺の萌えゲージはもうMAXだ!!

「お久しぶりだね。元気にしてた？」

「うん。ってミサカはミサカは元気いっばいに返事してみたり。でも、何であなたの声が頭の中から?ってミサカはミサカは疑問に思ってみたり」

「まあ君のミサカネットワークにちょっと無理矢理侵入しているからね……………」

案外簡単にハッキング出来たので楽だった。さすが支給品の携帯、うまくやってくれる。

「ええー！それは駄目だよ！ってミサカはミサカは憤慨してみたりー！」

「い、ごめん。ごめん。許してくれないかな？」

「まったく…………でもまああなたには散々、お世話になったし良いよ。ってミサカはミサカは自分自身の寛容さに感心しながら許してあげたり」

やっぱり可愛いなこの子。持ち帰って養女にしたい。いや、一方通行：セロリに殺されるから無理か。

「それで、用件は一体何なの？ってミサカはミサカはあなたを急かしてみたり」

「ああ、ちょっと聞くけど、調整が終了して、激しい機動が出来る御坂妹は何体いる？」

この人数が多くないとちょっと厳しいのだが……………どうだ？

「えっ、何であなたが調整のことを知って……………」

「頼む、そこは聞かないでくれ。頼むー！」

今はそんなこと説明している場合じゃない。

「分かった…ってミサカはミサカは頼みを聞いてあげたり。うーんと、とりあえずは30体はいるみたい。でも何でそんなことを聞くの？ってミサカはミサカは再度疑問に思ったり」

ここは単純明快、そして絶対に来てくれそうな理由を言おう。

「その内です承してくれた御坂妹だけでいい。上条当麻の命がかかっているんだ。至急、救援を頼む」

一応、事実だしね。

数馬SIDEOUT

## オルソラ争奪戦争・準備（後書き）

えっと、今回、話があんま進んでない、オルソラでない、五和でないという大変不服な事態になっていますが、必ず次には出します。どうか待っていてください。

展開が早いと思われる方もいると思いますが、これが作者の限界です。許してください。

それと作者は孫子の兵法書は読破しています。それなので内容は一応知っています。ただ、作中のことは結構無茶苦茶です。

と、なんか後書きさえgdgdな感じですが、今年もよろしくお願ひします。



オルソラ争奪戦争・戦力増強とイベントと(前書き)

更新です。本当に遅れて申し訳ありません。

## オルソラ争奪戦争・戦力増強とイベントと

「うわぁ……………なんか大変なことに……………」

15分後、中央広場には先ほど頼んだ装備、そして30体のAK-47《アサルトライフル》を装備した御坂妹がいた。

「ちょ、お主……………何やったよのな？本当に……………」

「ま、まあ……………戦力増加ですよ。ちょっと行ってきますんで……………」

「その前にあいつら何で同じ顔……………」  
「てめえは黙ってる……………」  
ひでえ」

牛深の扱い酷し。というのは置いておいて。

数馬は御坂妹達の所に行き、話しかけてみることにした。しかし初対面の御坂妹だが、本当に御坂美琴にそっくりだ。頭にかけてある暗視ゴーグルらしき物がなければ見分けがつかない。そしてやっぱり美人。

「あ、どうもこんにちは。<sup>シスターズ</sup>妹達の皆さんですね？」

1人の御坂妹に話しかけると、相手も気づいてこちらを見る。

「はい、そうです。とミサカは正体不明のあなたに返事をします」

「えっと、今回上位個体、ミサカ20001号に召集を頼みました  
数馬光太郎と申します」

無表情だったミサカ妹が全員、数馬を見る。話しかけたミサカ妹がぐいっと彼に銃口を向けた。

「ちょっと待って、待って！！殺すつもりか！？」

「とりあえず、上条当麻はどこだ、この野郎。とミサカは焦燥感に駆られながら問い質します」

いつのまにやら他のミサカ達も数馬に銃口を向けている。

「ちょ、待ってくださいよ！！えっと、ミサカ10032号さん！？事情説明しますからお願いだからAK-47こっちに向けるのはやめてくれ！！」

当てずっぽうで検体番号を言ってみる数馬。ミスると終わるのによく出来た物だ。

「……………分かりました、じゃあとつとと話やがれ、後何で私の番号を知っているのかはスルーしてやる、とミサカは疑問点を無視して話をするのを促します。」

出会って早々、銃口突きつけられるとは悲しいことだ。嘆きながらも数馬は話し出した。

「えっと……………まあ色々機密事項なる物があるゆえ、話せないことが多々あるのですが……………」

「じゃあその機密事項とやらを抜きにして話せやボケ、とミサカは言い洪るあなたに罵詈雑言を浴びせかけ、その上で話の腰を折るよ

うに1つ質問をします」

このミサカは性格悪いなと思いつつも数馬は了承する。と、ここで彼は気づいたのだが、検体番号10032号と言えば原作3巻にいて上条が初対面した御坂妹だったはずだ。

長つたらしい話になるので簡単に言えば、彼女は熱烈に上条のことが好きだ。

(なるほど……この焦りようと機嫌の悪さはそのせいか……)

なまじ大げさに言って召集してしまったのは数馬なので彼自身は少し罪悪感に駆られる。

「で？質問とは？」

「ええ、じゃあ聞きますが何で指定された位置に来たら急にここに来てしまったのかを……」

「上条さんのブロマイド50枚あげるから、その質問をしないでくれないか？」

「おk、とミサカは即答してブロマイドを受け取ります」

数馬としては、こなたとの連絡の際、指定地点に来たミサカ達を此処に寄越してくれと頼んだなんてどう説明すればいいか分からないので誤魔化すことに徹する。

それに10032号、原作表記だと御坂妹、も機嫌が良くなってくれたし。

「あ、それとこの封筒の中にもブロマイド入っているから他のミサ力達に渡しといてくれ」

「おお、こんなにあるのですか、しかし何故あなたがこんなものを……はっ、まさかそういう性癖が！？とミサ力はどん引きします」

「何でそう思っちゃうのかな……学校の裏サイトで上条当麻関係のスレがあつてな。そこから持ってきた」

「それはそれで危ない行為ですよ、とミサ力はあんまり変わらないと思いつながらブロマイドを見ます」

御坂妹の表情は無表情だったが雰囲気から察するに狂喜しているのがすぐに分かるような感じだった。ブロマイドの役目の典型的例がそこにはあった。

「幸せそうで悪いんだが話に戻るぞ？」

「……はっ、これは申し訳ありません。とミサ力は畜生空気読めよと思いつながらあなたの話の話を聞きます」

ミサ力達は己の心理状況も詳しく言ってしまうので若干、傷つく数馬。そこまで上条が好きかと小1時間問い質したくなる。

「……で、上条は悪い宗教武装組織に騙されてそいつらを手伝っています。実際やることは殺人なので上条には早く気づかせたい。しかしこちらには戦力が足りない。だから貴方たちに頼んだ。これで分かったか？」

「おk、とミサカは簡易な内容を即刻理解し上条奪還に心を燃え上がらせながら了解します」

無表情だが、雰囲気からすごいやる気を感じられる。戦力として、士気が高くなるのは嬉しいことだ。

「じゃあ貴方の仲間にも了承を得てくれ……………ってミサカネットワークがあるから大丈夫だな」

「はい。もう全員が志願しています。とミサカはやはり同じクロールンではあると今更ながら実感します」

他の妹達も全員がAK47をしっかりと持ち、雰囲気から闘志を燃え上がらせているのが分かる。

「分かった。それならこちらも対応の報酬が必要だな……………何が良い？」

「上条当麻のプロマイドを……………」

まだ欲しいのかと呆れてしまう。

「あのなあ……………まあいいや。じゃあ交渉成立、任地に着かせるわけだが貴方たちは志願兵だから死なせるわけにはいかない。後方支援に着いて貰うぞ？」

御坂妹は黙っていたがすぐに、はい、と言ってくれた。

後方任務では上条に良いところを見せられることは出来ないのだ。嫌ではあるだろう。

しかし妹達の1人が誰か死んでしまつたら一方通行……セロリに殺されるだろう。いや、此処に妹達を呼び出した時点でO.U.Tかもしれないが。

その上、妹達は接近戦でもレベル3なので充分戦力にはなるのだが能力者だと勘違いされて学園都市とローマ正教の戦争にも発展しかねないので使えない。

それよりも原作第3巻でも見せたM82A1のフル・オート射撃による狙撃はシモ・ヘイへ並みの腕前。

元の実験内容もあつて戦闘向けのカスタマイズがされており、銃器全般を始めとする戦闘技術に長けているともあり期待が持てる。重火器でも説明すればすぐに使用できるようになるとか。

「じゃあ、今回の司令官に挨拶するか……………」

そう言つて数馬は建宮斎字の元へ、妹達30人を連れながら戻つていった。

数馬が交渉している最中。建宮は牛深と話していた。

「……………あの女の子達は何よのな?」

「まったく分かりませんね……………全員が全員、顔もそっくりだ。し

かもなかなか美人……………」

端から見ればおっさん2人の下世話な話だ。と、そこへ1人の女性近づいてきた。

「あの…教皇代理……………」

建宮に話しかける彼女に彼は直ぐに気づいた。

「お、五和。どうしたよのな？」

二重まぶたの五和と呼ばれた、原作11巻、アニメじゃ7巻辺りの話で登場した彼女。アニメの時にはその巨乳具合で五和を知らぬ視聴者にも重要キャラと判断された素晴らしき女性だ。

で、巨乳として有名な彼女は、数馬を見て建宮に質問してきた。

「一体、彼は誰なんですか？先ほど、大暴れしていたみたいなんです……………」

「ああ、ある組織からの支援戦力よのな」

支援戦力と聞いたとたん、五和が少し驚く。

「え、あの人が…？だってまだ高校生みたいですよね」

必ず驚かれる数馬の若さ、五和も彼と同年代だがそこは気にならないようだ。

「8月にフィンランド国境線で起きた数百人のロシア魔術師による



テロを迎撃した1人らしいのな」

「本当ですか！？……………信じられません」

御坂妹に銃口を突きつけられている数馬の姿を見て、そうつぶやく彼女。

「でも先ほど暴れていたのは一体何だったんですか？」

「それはまあ……………」

牛深が数馬が暴れた理由。まあオルソラの扱いがひどいということとで暴れたという話を話した。

聞いた彼女は少し呆れる。

「それでそこまで怒りますかね……………」

「うーん……………」

何か数馬に対する目が不味い物になりかけてきた2人に建宮が言う。

「いや、彼は芯が真っ直ぐな軍人みたいよのな。軍人は国際法を厳守するのは鉄則と言うし……………きまじめな奴かもしれないのな。一部私利私欲の面もあったが……………」

実際は数馬は変態で、オタクで、巨乳好きで、幼女好き、それで芯が曲がっているような真逆な奴なのだが、彼らには分かっているようにいようだ。

「そうですか………」

再度、数馬を見る五和。交渉はすでに決着がついたようだった。

「建宮さん、とりあえず今回の作戦に参加してくれることになりました義勇軍の指揮官、御坂妹です」

「どうもこんにちは。とミサカは変な名前だと持った奴は殺すと殺意を出しながら挨拶します」

最初から物騒な挨拶だ。牛深だけが顔を青ざめる。………どうやら………ねえ。

「そ、それは………どうもよいな」

手を差し出し、握り合う建宮と御坂妹。すぐにちよつと話し始める。で、数馬の方は、やはりとでも言うべきか、すぐに五和に気づいた。

「あ………どうも。今回、支援させていただきます数馬光太郎と申します」

心の中じゃ五和の登場に2chの祭のごとく多い賑わいだったがここは平静を装って、さわやかに挨拶。

「あ、えつとどうも。五和といいます」

突然、物腰の柔らかい挨拶をされ、少し動揺したが、五和の方も挨拶を返す。遠巻きに大暴れしていた所しか見ていなかったが、間近での彼は美形で優しそうであつたので以外に思っていた。

数馬の美形を良いと思ったのは今までで、彼女の他数人しかいないだろう。

「数馬さんですね……分かりました」

「数馬でいいですよ。さんを付けられるような身分じゃないですか」  
「ら」

静かに微笑する彼だが、心の中じゃ数馬さんと呼ばれた時点で2chの嵐並の暴走状態だ。

「でも私の場合はさんの方が呼びやすいので……」

誰もいなかったら数馬は齒がみしているはずだろう。

「そうですか。話は建宮さんから聞いていますか？」

「はい。支援してくれるそうでありがたく思います」

「気にしないでください。本部の方はそちらに適当な感じに言ったと思いますがかもかく、俺は全力で支援します」

あれほど頑張っていたフォックェさんが聞いたら激怒するだろう。

「はい、ありがとうございます……」

ありがとうございますの言葉で瀕死寸前に陥る数馬。何かさつきからテンションが高い奴である。嬉しがりじゃないのか？」

「あつちで御坂妹と建宮さんが話していますが……時間がかかりそうですね」

「そつみたいですね……」

御坂妹、他30名は建宮をせせら笑っており、建宮が少ししょげている様子がうかがえた。何の話をしているのだから。

「……ちょっと面倒くさいですし、五和さん。教皇代理に説明したいことがあるんで代わりに来てくれませんか？」

期待の眼差しで言う数馬。心の中じゃ競馬で大金かけたような心境だ。

「え？私にですか……？」

少し戸惑う五和を見て、数馬が凄まじいほど、残念がる。

「……駄目ですか……？」

「えっ、いや……別に駄目じゃないんですけど……私、教皇代理の代わりが務まるか分かりませんし……牛深さんとかだったら良いんじゃないですか？」

「しかし牛深さんは……」

数馬が再度、建宮の方を見ると牛深までもがしょげ始めている。妹達の毒牙にかかったようだ。

「確かに……あれじゃ駄目ですね。分かりました、良いですよ」

助けに言っても良かったが、彼女も毒牙にかかるのは嫌なので了承する。

「それは良かった。説明に同行してくれるのなら美人な方が一番ですからね」

さりげなく、本音を言ってしまう数馬。ナンパにしか見えない。

「えっ………そ、そんな美人だなんて……／＼／＼」

そんなナンパみみたいな台詞だったが、元来真面目な彼女は顔を真っ赤にしてしまう。存外に成功したみたいだ。

「あつ、す、すみません………ついつい言ってしまいました」

「い、いえ。あんまり美人とか言われたことがなくて………」

実際はナンパされまくっているのだが、彼女は覚えていないみたいだ。

「そうなんですか………あなたみたいな美しい方だと、男から可愛いねとか言われて言い寄られそうですけど………って、再度すみせん」

数馬のナンパ発言2回目。これはひどい。わざとやっているよう

に見えてくる。

「い、いえ。そんなこと、全然ないんですよ………本当に」

そんな彼の発言にさらに顔を赤める五和。台詞は結構ベタなのだが、彼女には強力なのだろう。

「っと。申し訳ない。時間をとってしまいましたね。じゃあ行きましょう」

「えっ、あっ、はい、分かりました………」

数馬の隣に沿って歩き始める五和。彼が後ろで組んでいる手は、ガッツポーズをとっている。やはり確信犯だった。

「で、こちらが今回、支援戦力として持ってきた装備です。1つ1つ説明しましょう」

「はい………」

五和の心境は美人と連呼されたので大揺れで、少し頬も赤い。

「これがオート・メラール76mm速射砲を独立砲にしたもの。今回の遠距離支援兵器です。1秒に1発、砲弾を撃ち出すので優秀で

す。これは御坂妹達が操作してくれるので大丈夫ですかね」

「すごい大きいですね……………」

4 mもの砲台は堂々の威容を呈している。

(本当だったら指定地点に設置してくれって言ったはずだが……………こなた、間違えたのか?)

「ええ、その分、強力ですよ?」

「うわぁ……………」

次に、魔改造を頼んだティーター?、キングタイガー戦車と言った方が有名か、を見る。

「何か、原型とどめていないような……………」

「すごいですね……………」

元々、WW2の戦車なので現代に通用するようにとの要求に苦勞したのだろう。完全にSFチックになってしまっている。

「これは……………ちょっと中を見ないと……………」

操縦の仕方とかはどうすればいいのかまったく分からないので、試しに足をかけて上ってみることに。

「あ、あの……………私も良いですか?どうなっているのか気になりますし……………」

しようとしたとたんに、五和がそう言い出した。フラグにしか見え  
ない。

「あつ、良いですが……結構高いですよ？」

全高が4mはあるティーガー？戦車に上るのは結構きついことだ。  
それでも五和は大丈夫とでも言うように少し笑う。

「平気です。これでも体力には自信があります」

原作でそんなことは普通に分かっているのだが、フラグ臭がピン  
ピンしていることなので不安になる数馬。

「そうですか……ならどうぞ」

「ありがとうございます！！」

だが断る勇気もないのですぐにOKしてしまった。

「と、とりあえず五和さんは先に上ってください。念のためです」

「分かりました」

すぐに彼女は登り始める。数馬も後から続くが心配でならない。

（大丈夫だよな。うっかり落ちて怪我させたりとかなないよな……不安だ不安だ……）

だが、五和はそんな落ちる気配もなくすいすいと上っていく。そ



してあっさりとてっぺんに足をかける。

「着きましたよ〜」

何にもなかったので数馬も安堵する。ここでかけた足を滑らせなければ大丈夫だと思った……………

その矢先に。

ツルツ

「ふえ!?!」

見事に足を滑らせ、落ちそうになる五和。

「のわああああ!?!」

数馬は予期していなかったにも関わらず、すぐさま五和を受け止める。さすがに女性のことになるといろいろな意味で早い。

「……………やっぱりそうなるのね……………」

だが、受け止めたはいいが数馬自身も巻き添えのごとく4m下の地面に見事落ちてしまった。

ゴンっという音が鳴り響く。まさしくギャグと言える。

「だ、大丈夫ですか!?!?」

五和自身は数馬がクッションになってそれほど衝撃は伝わらなかつたが、逆に数馬は大ダメージだ。

「ええ……………大丈夫ですよ。一応……………五和さんは？」

それでも格好悪い所は見せられないのでそう答え、逆に五和のことを心配する彼。

「だ、大丈夫です……………すみません。私のせいで……………」

「気にしないでください……………さあ動きましょう……………あれ？」

何か数馬の手の中には柔らかい感触があった。ちなみに五和さんを背中から受け止めたので、手はもちろん。

(む、胸だああああ!?)

驚いた拍子に、少し強く揉んでしまう。

「ひゃい!?!」

何か言い声を出してしまう五和。数馬も大慌て。

「ああ!?!す、すみません!?!すぐにどきます!?!」

「い、いえ……………」

すぐに数馬は離れるが……………空気は何となく気まずくなってしまう。

（こつこつエロゲ的な展開は今のところ、勘弁して欲しかった！！）

彼はそう思い、神を恨んだ。

## オルソラ争奪戦争・戦力増強とイベントと（後書き）

すいません。展開がひどいと思われた方、土下座します。ちょっと大急ぎで書いた物ですから……

冬休み中、結構忙しくて書く暇がなく、こんなに遅れてしまいました。

鬱気味なこともありまして……書くにもかけなかったのです。

で、何故か今日、午後8時頃に12月中旬頃から行方不明になっていたPSPを弟が発見してくれまして、それで書く気になれました。

動機が不純ですいません。

とりあえず、次は早めに更新しますので、ご意見ご感想お待ちしております。

## オルソラ争奪戦争・決戦前のエロイベント2（前書き）

えっと、どうも、皆さん。お久しぶりです。作者です。このたび、滅茶苦茶、更新が遅れてしまい、誠に申し訳ありませんでした……

…

後半に土下座文がありますので、見てくれたら幸いです。

注意・今回、何かが狂ってます。

## オルソラ争奪戦争・決戦前のエロイベント2

エロゲ

(と考えてる場合じゃない、やべえええええ！！)

前回、見事に、というか……まあ、エロCG90%越えしているエロゲ並の早さで五和の胸を揉んでしまった数馬。会ってからまだ30分も経ってないというのにこの有様である。

「えっと………ちょっと戦車の中見てきますね」

「はい………／／／」

未だに顔が赤い五和。胸を揉まれたのだから当たり前だろう。で、数馬も何か此処にいると居たたまれない気持ちになるのでそそくさと、戦車を登る。

天蓋に着くと、重厚なハッチを開けて中に入った。

「………内装は、シンプルに作られてるな………」

元のタイガー戦車は結構、狭かったとの話もあり居心地が悪いのではないかと心配した彼だったが、存外にも中は広く余裕があった。

「装甲を薄くしてるのか……？まあ住み心地がよい方がよい………御坂妹乗せるんだから」

コックピットを見ると、そこには紙の束が1つと、恒例の物があった。

「ああ、またPSPだな……………」

やはりと言うべきか、やっぱり操作方法はPSPでやるらしい。

「たまには他の物でやろうぜ……………」

ネタ切れを思わざるを得ない数馬だが、はつきりいって操作が簡単なのは事実だ。とりあえず、紙の束も見てみる。

「えつと……………タイガー？戦車魔改造版。通称、魔タイガー戦車。携行弾数84発、装甲厚は……………いいや、面倒くさい。概要、すごい戦車……………」

学園都市7位、削板軍覇の能力技、すごいパンチのパクリである。

「ふざけんじゃねえぞ！！！」

紙の束を投げ捨てる。確かに、概要がこれだけなのは酷い物である。ただまだ続きがあるので拾い直す。

「詳細は……………とにかく魔改造したので強いです。自衛隊のTK-X戦車と喧嘩できます。定員は3名。

ただし今回用意した砲弾は、5割方、非致死性の睡眠弾です。アニエーゼ側のシスター達に撃ってください。ステイル？んな奴は知らねえ。徹甲弾か榴弾でぶつ飛ばしちまえ」

原文ままでこんな感じである。ステイルの扱いがひどい。そして説明がおざなりすぎる。ちなみに徹甲弾は対装甲車用の砲弾。榴弾

は対人用砲弾である。

「戦車の操作は簡単。PSPのアナログスティックをくいくいと動かせばOK。他のボタンは飾りですので使えません。……じゃあPSPじゃなくてもいいじゃん」

ツッコミだらけの文章が終わったかと思い、下の余白を見てみるとそこに小さく

「なお、天蓋の一部にオイルが塗ってあります」

と書いてあった。

「……………」

2、3本、数馬の頭の血管が切れる。そしてさらにもう1文。

「なお、戦車の愛称は、側面に黒い薔薇が描かれているのが 二条院司<sup>いんつかさ</sup>。赤い薔薇が描かれているのが 恩田水樹<sup>おんだみずき</sup>です」

6本程度の血管が破裂した。

「ふざけんなあああ！！何で天蓋にオイルなんて塗ってるんだよ！！おかげで酷い目にあっただぞ、五和さんが！！っか愛称、どっちもエロゲのヒロイン名じゃねえかああ！！」

最終的には、マジギレして大暴れする数馬。



何故そんなことしたのか彼にはサツパリ分からず、それがさらにイライラさせている。この時点で彼は、大天使の言っていたフラグを立てたの事を忘れてしまっているようだ。

それと、補足的に言えば、エロゲメーカー、アトリエかぐや製、「艶女医」というエロゲのヒロインである。当たり前ながら18禁。

「戦車の中で大暴れ中」

「くっそが……………手が痛い」

戦車の中で、砲座を殴ったのだから当たり前だろう。

「畜生……………こなため。悪戯にも程があるだろうが」

彼としてはものすごくありがたいイベントだったが、五和にとっちや迷惑千万、この上ない話だ。

後で苦情の電話をかけるつもりでいる数馬は、前面、コックピットの上にある出口から出て行こうと

「あつ……………此処から入れば良かったじゃん」

今更、そのことに気づく数馬。

「……………」

己の愚かさに、悔やんでも悔やみきれなくなってしまった。

「遅くなりました。申し訳ありません」

車体の前面から出てきた数馬に、五和が少し不思議そうに質問する。

「あれ……？そこに出口があったんですか？」

「忘れてました。すいません。すいません。すいません。すいません。すいません。すいません。すいません。すいません。すいません。」

出てきて早々土下座している数馬を、五和が慌てて止める。

「えっ、いや、大丈夫ですよ。誰にだって忘れてしまうこともありますし！！数馬さんは悪くないですよ。さっきは……その、私がいけないんだし」

最後の方はしどろもどろになりながらも、必至に数馬をフォローする五和。その可愛さは半端ではなかった。

「……………あなたが女神か？」

あんまりにも罪悪感にあふれていった言葉がこれである。

「えっ、いや別に、女神だなんて……………」

「いや、女神に違いない。その容姿の端麗さ、何もかもを包み込む包容力のある優しい性格。まさしく女神。……どっかの誰かさんとは大違いだ」

一番最後に、ぼそつと何か言っていたが五和は聞き取れなかったようだ。というよりは、顔を赤くしていてそれどころではなかったと言った方が正しい。

「ああ、時間をとってしまいましたね。さて、どうします？ 一通りの物は見ましたし、一端建宮さんの元へ戻りますか？」

「は、はい。そうしましょう」

2人は、御坂妹達に言いようにもてあそばれている建宮齋字&牛深の元へ戻っていく。

その後の道中、五和に戦車の中で何かあったんですか？と聞かれ、華麗に、実際には無茶苦茶な言い訳、で誤魔化した数馬だった。

「……………76mm速射砲は此処に配置しておくか」

20分後、五和と建宮の元へ向かい、とりあえず装備の説明を彼にした。で、すぐさま邪魔になっっている速射砲を設置する作業に取りかかる。

本当はこなたに頼んでやらせるつもりだったが、先ほどの紙の束からちよつと頼んだら大変なことになる予見があったので自力でやることにした。

「よし、その塔の上段に設置しろー!!」

彼がクレーンに指示を出す。このクレーン、パーク内にあった代物なのだが、非常に使い勝手が良く、妹達だったら簡単に操ってしまふ。そのため作業は順調に進んだ。

「雑貨店の駐車場が……………この位置にあるからあの塔から狙い撃ちできるぞ」

地図を見ながら言う数馬。雑貨店駐車場までの道のりは約500m。そこまでに、高層建築物はないので誤射を心配せずに射撃出来る。

「なあ、主は敵がどこから来るのか予測してるよのな？」

「そりゃあまあ、大兵力を集結させるのに一番適しているのはそこしかないからな」

ゆらり、ゆらりと速射砲が上げられているのを見ながら、建宮と数馬は話していた。

「じゃあ、あれが設置できたら作戦会議でもするよのな？」

そう提案してきた建宮に、数馬はゆっくりと首を縦に振る。

「ああ。あまり時間がないからな。この戦、一気に片を付けるつもりだ」

「それは、それは。期待しているよのな」

ふっ、と建宮が笑い、それにつられて数馬も笑ってしまう。と、そこに五和と御坂妹が近づいてきた。

「何を笑っているんですか？とミサカは出会い頭早々に気持ち悪く思いつつも質問します」

「お前は……何でそんなに毒舌なんだよ。上位個体（打ち止め）はもっと愛くるしかったぞ？」

最初っから毒舌な御坂妹に、数馬が諭す。が、打ち止めを使ったのが間違っていたらしい。御坂妹は少し不機嫌そうな顔をした。

「それは、上条当麻の命がかかっていると分かれば苛立つのは当たり前です。とミサカは何で上位個体を持ち出してきたのか分からないが腹が立ったので言い返します」

「本当に上条のことが好きだな……と数馬は少し呆れて御坂妹を見ます。なんてな」

1発、拳を喰らった。

「……ててて……ひでえな、おい」

「当たり前だよ、バカ野郎。とミサカは激怒しながら言い放ちます」

塔では妹達シスターズが一所懸命に速射砲を取り付ける作業をしている。手際が良いのかサクサクと進んでいるようだ。

「五和さん、それで何かあつたんですか？」

御坂妹の隣にいた五和に話しかける。御坂妹が、「なんで敬語なんでよとミサ（ry）とつぶやいているが気にしない。

「はい、斥候から連絡が入りまして、近辺に20名程度の敵兵が来ているとのことです。幸いまだこの場所を察知されてはいないようですけど………」

五和がどうしますか？みたいな視線を数馬に向ける。

「いや、迎撃にはでない方が良いでしょう。まだ戦力的な面で問題がありますし。とりあえず泳がせときましよう。この場所は改装工事中という名目がありますから察知されるのは遅いでしょうし」

原作では、一体どうやって天草教徒達がこのパレルスウィーツパークを占拠していたかが不明だったが、改修工事をしていることになっていたらしい。工事をしている風に見せかけたこともしていたと聞くので涙ぐましい。

ただ、どうやって営業者を誤魔化したのが不明である。真実は建宮とその他数名の者しか知らず、一説には催眠術が有力との話も。

「独立砲塔が完成しそうだな……………」

クレーンがゆらゆらと、1基目とは別の塔に2基目の独立砲塔を設置した。これで、設置は完全に完了した。

「じゃあ、作戦会議にでも洒落込むよのな？」

「もちろんだ。御坂妹も来てくれるか？一応、お前が隊長みたいだし」

何か悪態をついてきそうな気がしたが、御坂妹は素直にうなずいてくれた。

「分かりました。とミサカは珍しく、素直に返事をします」

それを見た牛深が一言。

「いつもそうであって欲しいんだが……………」

2度目の拳が炸裂した。

「ぶつちやけ、この戦は敵を定位置に追い込まなければいけないだよな……」

「えっ、敵の来襲位置を予期していたんじゃないよな!？」

司令部の1室にある長机で、彼らは作戦会議を行っていた。メンバーの内訳は、数馬、建宮、牛深、五和、御坂妹。ホワイトボードも完備。

最初っから色々大変そうだ。

「そりゃ予想はしているさ。大部隊が駐屯出来る場所なんざあそこしかない。だが……」

数馬は、普通に原作でアニメーゼ部隊が駐屯していた場所を選んだだけだ。今になって、もしかしたら別の場所に駐屯するかもしれない、と不安になり始めたのだ。

「それは、敵がそこを確実に陣地とするか確証が持てない。相手方も気づくかもしれない。そう言うわけですか？とミサカはあなたが考察していることを予想します」

途中で御坂妹が説明の肩代わりをしてくれた。

「そうだ……問題はそこなんだ」

頭を突っ伏す数馬。五和も考えている。

「だったら、おびき寄せる何かが必要ですね……例えば罠とか」

「……………五和。もう1度言ってくれませんか？」



数馬がびくつと反応し、彼女に言った。五和は急に、聞かれたものだから少し驚いた。

「えっ……… 罠を使ったらどうかと、でも罠役は、生存率が低そうですね？」

ちなみに五和の言うとおり、罠役は大半、生存率が低い。レイテ沖海戦などが最たる事例だろう。

「それ採用だわ」

だが、数馬はあっさりと採用発言をしてしまった。会議の場は騒然となる。

「はい！？採用ってどういうことよのな!？」

「そうだぞ、おい。そんな簡単に決めちまって……………」

「ミサカも反対の意を示します。とミサカは何言っているんだとバカ野郎と思いつつ突っ込みます」

すぐさま反対意見が続出するが、数馬は右手を挙げて静める。

「ちょっと待て。何がそんなに反対なんだよ？」

「見ての通り、五和も言っていただろうが!! 罠役は生存率が低いって!!」

何言ってるんだお前ら?みたいな顔をする数馬に牛深が怒鳴る。

「……………は？」

「何が『は？』だよ！！」

数秒ほど、？マークが頭に浮いているような顔をした後、数馬は呆れたような口調で彼らに言い始めた。

「おい、おい。もしかしてお前ら、罔に人を使うって考えてんのか？」

「そうじゃなけりゃんなよのな？」

数馬がとうとう、お前ら……………バカ？五和&御坂妹を除いてみないな顔をする。

「何だ……………その顔」

特に牛深に対しての視線が酷い。

「さあてね？何でしょうか？と、まあ丁寧に教えてやるよ」

すくつと、彼は立ち上がりホワイトボードに水性マジックで書き始めた。

兵とは詭道なり。故に、能なるもこれに不能を示し、用なるもこれに不用を示し、近くともこれに遠きを示し、遠くともこれに近きを示し、利にしてこれを誘い、乱にしてこれを取り、実にしてこれに備え強にしてこれを避け、怒にしてこれを撓みだし、卑にしてこれを驕らせ、佚にしてこれを勞し、親にしてこれを離す。其の無備を攻

め、その不意に出ず。此れ兵家の勝にして、先きには伝うべからざるなり。

「これ、誰が書いたか知ってるか？」

数馬が全員に問うが、誰も答えられない。御坂妹は答えられるかと思つた彼だが、考えてみればそんなことインプットされてないの  
で無理だと悟つた。

「これは中国戦国時代の名将、孫武が書いたとされる孫子の兵法書  
の一文だ。意味はこうだ」

隣にまた書き始める。

戦争とは、敵をだます行為である。

だから、本当は自軍にある作戦行動が可能であっても、敵に対しては、とてもそうした作戦行動は不可能であるかに見せかける。本当は自軍がある効果的な運用のできる状態にあつても、敵に対しては、そうした効果的運用ができない状態にあるかのように見せかける。

また、実際は目的地に近づいていながら、敵に対しては、まだ目的地から遠く離れているかのように見せかける。実際は目的地から遠く離れているにも関わらず、敵に対しては、既に目的地に近づいたかのように見せかける。

こうした、いつも敵にいつわりの状態を示す方法によって、

敵が利益を欲しがっているときは、その利益を餌に敵軍の戦力

を奪い取る。

敵の戦力が充実しているときは、敵の攻撃に備えて防禦を固める。

敵の戦力が強大なときは、敵軍との接触を回避する。

敵が怒り狂っているときは、わざと挑発して敵の態勢をかき乱す。

敵が謙虚なときはそれを驕りたかぶらせる。

敵が安楽であるときはそれを疲労させる。

敵が親しみあっているときはそれを分裂させる。

敵が自軍の攻撃に備えていない地点を攻撃する。

敵が自軍の進出を予想していない地域に出撃する。

これこそが兵家の勝ち方であって、そのときどきの敵情に応じて生み出す、臨機応変の勝利であるから、出征する前から、このようにして勝つと予告はできないのである。

「さて、この戦では 敵が利益を欲しがっているときは、その利益を餌に敵軍の戦力を奪い取る。もしくは、おびき寄せる方法を使おう」

建宮以下全員は真面目にその講義を聴いている。御坂妹なんかはすげえくみたいな顔をしている。

「では、何で敵を釣り上げるか？人を使うのは釈然としない。というか危険度合いが高すぎるだろう。だったら………」

数馬がマジックで書いた物は

オルソラの幻影で惑わさせる。

「は？」

「は？」

「え？」

「え？とミサカは（ry」

ある意味で驚愕なことだった。

「ちょっと意味が分からないよな……………幻影って」

「幻影って言ったらあれか？あの幻のような？雇気楼のような？人が見えたと思ったら本当はいなかったみたいなの？」

「その通り！！」

牛深が言ったことにgoodみたいな感じで数馬が返す。

「あの……………そんな幻影なんて、どうやって作るんですか……………？」

五和は疑問の声を上げる

「ていうかもう私には訳が分かりません。とミサカは毒づきます」

御坂妹に至っては魔術関係を知らないため、話しについていけなくなっている。

結果、数馬以外の全員が、何か溜息顔になってしまった。

「オイコラ、何でそんな顔になるんだよ」

「いやだって、そんなの出来るわけないよのな。天草教でも、そんな魔術は無いよのな……………」

建宮の意見に、数馬は軽く

「だから、いつ俺がお前らの魔術に頼るつつたよ？」

と返した。それに建宮は首をかしげる。

「え？違うよのな？」

「当たり前だ」

胸を張って、数馬は言った。

「とりあえず、そこら辺のことは出来るから心配すんな。じゃあ次だ……………」

数馬はまた話しを再開する。その、作戦を説明する顔はまさしく軍師にふさわしい顔…………と、言ったら格好がつくのだが見た感じでは厨二病末期の学生が話している風にしか見えなかった。

時はすでに18時

「Ten little Indian boys went  
out to dine;  
One choked his little self and  
then there were nine.  
Nine little Indian boys sat up  
very late;  
One overslept himself and then  
there were eight.  
Eight little Indian boys travel-  
ling in Devon;  
One said he'd stay there and  
then there were seven.  
Seven little Indian boys chop-  
ping sticks;  
One chopped himself in half and  
then there were six.  
Six little Indian boys playing  
with a hive;  
A bumblebee stung one and then  
there were five.  
Five little Indian boys going  
in for law;

One got in Chancery and then  
here were four .  
Four little Indian boys going  
out to sea ,  
A red heron swallowed one an  
d then there were three .  
Three little Indian boys walki  
ng in the zoo ;  
A big bear hugged one and then  
there were two .  
Two little Indian boys sitting  
in the sun ;  
One got frizzled up and then t  
here was one .  
One little Indian boy living a  
ll alone ;  
He got married , and then there  
were none .

何故か英語の歌を陽気に歌いながら数馬は五和共に遊園地内を歩  
いていた。

「それ、童謡、10人のインディアンですか？それにしても随分歌  
詞が長いですけど……」

歌い終わった数馬に五和が聞いてきた。

「ん？ああ、まあ何か気分で歌いたくなっただんですよ。飯の前には



明るい歌を歌うのが1番ですから」

そう言いながら、にっこりと微笑む数馬。五和は感心したような声を上げて

「なるほど、そう言えばそうですね……………夕食がさらに美味しく感じるのは良いことです!」

と言い、彼女も同じく笑顔になった。それを見ると、可愛いと思ってしまう数馬だったが、それとは別に、純粋な彼女の心を羨む気持ちが出てきた。

(本当は、今の歌詞は明るい歌とはほど遠いけどな)

先ほどの歌詞の訳では

10人のインディアンの少年が食事に出かけた

1人が咽喉をつまらせて、9人になった

9人のインディアンの少年がおそくまで起きていた

1人が寝すごして、8人になった

8人のインディアンの少年がデヴァンを旅していた

1人がそこに残って、7人になった

7人のインディアンの少年が薪を割っていた

1人が自分を真つ二つに割って、6人になった

6人のインディアンの少年が蜂の巣をいたずらしていた  
蜂が1人を刺して、5人になった

5人のインディアンの少年が法律に夢中になった  
1人が大法院に入って、4人になった

4人のインディアンの少年が海に出かけた  
1人が燻製のにしんにのまれ、3人になった

3人のインディアンの少年が動物園を歩いていた  
大熊が1人を抱きしめ、2人になった

2人のインディアンの少年が日向に坐った  
1人が陽に焼かれて、1人になった

1人のインディアンの少年は1人ぼつちで暮らしていた  
彼が結婚し、そして誰もいなくなった

こんな感じのダークな童謡なのだ。そしてふっとそれを歌った数馬も、何で歌ったのか疑問に思ってしまった。しかもご丁寧に原曲の英語のまま。

(どうも……………俺は濁っているな、精神的に)

転生前でも、あんな感じ《オタク》でクレイジーなのに今じゃ、精神的な意味でもクレイジーな自分を哀れに感じてしまった。

久々に、歌ってみた歌がこんなだとは情けないものである。どうも、この世界に転移してから、自分自身が変わり始めているような気がしてきた。

「どうかしましたか？」

そんなことをずっと黙りこくって考えていると、五和が心配してくれた。

「い、いや何でもありません。ああ、そういやこの夕食、オルソラが喜んでくれると良いんですね」

視線を下に向けて、無理矢理に話の話題を変える。

その視線の先、数馬の腕には少し大きめの鍋が抱かれている。まだ作ってからそこまで時間は経っていないので温かい。

一方、五和の手には中ぐらいの袋が持たされており、それもまだ温かい。

これらはすべて、オルソラのための夕食なのである。

一応、飯は普通に天草教徒が配給しているのだが、数馬が一目会って彼女に自らの手料理を食べさせたいという懇願があり建宮が快く、実際は数馬の威圧感に負けて、許可してくれたのだ。

ついで、五和も数馬の料理に興味があるとのことと、それに参加料理を持って移動中というわけだ。オルソラの方にも連絡を入れて承諾を得ているとのこと。

「大丈夫ですよ、数馬さん、すごく一生懸命に料理していましたから。きつと喜んでくれます！ー！」

五和が彼を励ますかのように笑顔で言ってくる。見ていただけで癒されてしまい、先ほどまでのくだらない考えが消しとんでしまう。

「そう言ってくれるととても安心するよ………」

しかし、今回は作ったことのない料理なので不安はまだ少しある。オルソラの料理の腕前が良いのはSS1巻に記載の通りなので、多

分舌も肥えてるだろう。不味い者を食わせるのは忍びないのだ。

「それにしても数馬さん、少し見てみたら手際よく調理してましたよね。私じゃとてもまねできません」

「まあ自炊は出来た方が良いでしょう。俺も独身ですから……1度で良いから、彼女の作った料理を食べたいものです」

少し、彼女がいないことを寂しく思い、気分が暗くなってしまう数馬。そんな彼に五和は励ますようにフォローしてくる。

「だ、大丈夫ですよ。数馬さん、手際も良いし、恰好いいですから直ぐに彼女なんか出来ちゃいます!!」

何故この子はこんなにも、良い子なのだと思数馬は不思議に見え、そして一生懸命に励ます彼女も本当に美しいと彼は思ってしまう。

「五和さんは本当に良くできている女性だ。あなたの方が、ずっと男性に言い寄られるでしょうな……」

何となく半泣き状態で言葉を返す数馬。

「えっ、そ、そんなこと無いですよ……私なんか、全然。って数馬さん、何で半泣きなんですか!？」

とまあ、こんな感じで2人はオルソラのいる場所に向かっていった。

「着いたな……………」

そして着いたのは普通の売店。この奥にオルソラはいる。ちなみに見張りは2名。

数馬は1度、此処に来ているのだが、暴走中であつたためあまり記憶がない。

「さて、入りましょう、五和さん」

「分かりました」

売店の中に入っていく、オルソラがいるのは売店の店員が休憩するような場所だ。それも普通の休憩場とは違い、安いアパートより良い暮らしが出来るような感じの部屋である。

どうも、学園都市に近いほど設備が凄くなつていくようだ。

「ここだな……………」

暴走時の後、建宮が言うには拘束は解いてくれた（ただし部屋からの逃走は出来なくしている）ので、一応不自由にはなつてないだろう。

部屋の前に立つ2人。部屋は和風式で、障子が使われている。で、

数馬がスーツと開く。

「どうも〜こんにちっ w s h f j c ! ? 」

そこにはブラジャーのフック（胸の方についている）が全て外れている下着姿の女性が。

当たり前のことながら、ブラジャーに保護されていたであろう、そのたわわな胸すべてが見られ、その上胸の先端にあるほのかなピンク色をした……

ピシヤアン！！

すぐさま障子を閉じる。

「あ………ありのまま今起こったことを話すぜ！！」

「数馬さん。現実を見ましよう」

何かがおかしかった。何故、下着姿の女性、オルソラがいるのか。数馬は再度考えるが、先ほどの胸が頭の中でぐるぐる回って考えられない。

「OK。もうフラグ嫌だ」

「数馬さん、落ち着いてください………」

棒読みでブツブツとつぶやく数馬を五和が現実に戻す。

「五和さん………頼みます、部屋の中見てきてください」

「わ、分かりました」

数馬は部屋の中が見えないように後ろを向く。その間に五和が部屋の中に入っていった。

「しっかし…………勘弁して欲しいよ。こういうイベントは」

原作にないイベント程、心臓が止まることはない。しかし、そんなインパクトがあるイベントであるのにもかかわらず、鼻血が出ないという不思議。

（特にあの胸……………健全な男子だったら大変だな。現に俺がそうだし）

理由。下半身に血が行き過ぎて鼻にまで回らない。（いやその理屈はおかしい）

で、そんな下半身に血が行き過ぎてギンギンな状態の時、五和が部屋から出てきた。

「数馬さん、もう大丈夫ですよ」

「あ、そうですね……………ではお邪魔します」

下半身はどうか抑制させておく。

部屋に入ると、若干どころか真っ赤な顔をしたオルソラがいた。

「ど、どうも……………先ほどは申し訳ありません……………ついでに数馬光太郎と申します」

「いえ……………それはついつい着替えていた私にも責任があるので」

ございます…… / / オルソラ・アキナスと申します…… / / / 「

謝罪する（ついでに自己紹介）数馬に対し、平気であるように言うオルソラ（こちらと同じ）であるが……顔の紅潮具合から動揺が激しいのは自明の理だ。

「「「……………」」」

何故か数分間、このまま黙ってしまう3人。このままじゃ永遠に黙り続けてしまうような雰囲気だったが

「あっ、そういえば数馬さん。夕食作ってきましたよね、早く食べちゃいましょうよ」

五和が勇者となった。

「そ、そうですねあ！！さあて、用意しましょうか」

数馬もすぐに便乗する。

「はい。分かりましたのでございます。で、先ほどの件はあなたが悪いわけでは」「

「さあ飯を食おう！！！」

オルソラが話しを戻そうとするが全力で阻止した。



「これはこれは……大変、おいしそうな料理でございます」

「そう言ってくださればありがたいです」

部屋の中央に持ってきたちゃぶ台には再度、少し温め直した鍋があつた。

中身は、ウクライナの伝統料理であるボルシチだ。

「じゃあ食べましょう」

五和が用意した皿にボルシチを入れていく。テーブルビートの色素から出来る鮮やかな深紅が食欲をそそる。

「ではでは……………」

すべての皿に入れ終わったので3人全員が手を合わせて

「いただきます」「」

これだけは何故かしておかないといけない気分なのだ。

「さあ、食べましょうや。結構作ってきましたし」

「あつ、数馬さん。ピロシキも出さないと」

五和が袋から紙に包まれたロシアの伝統料理、ピロシキが3個出される。汁物と一緒に出されるこの料理はボルシチとは相性が良い。今回、数馬は本場風に焼いて作ってみた。外はカリカリ、中はフワフワな感触に仕上げている。具には畜肉レバーなどを使用。

「おおっと、忘れてた。オルソラさん、はいどうぞ」

ピロシキの1つをオルソラに渡す。受け取ったオルソラは笑顔でお礼する。

「どうもでございます。……それと、オルソラと呼んでいただいて結構でございますよ？敬語も使わなくても大丈夫ですし」

まさかの呼び捨てでいいよ宣言が来る。

「えっ、いや、それは………どうも。じゃあお言葉に甘えて……」

唐突な発言にしどろもどろな状態の数馬。それに追い打ちが来る。

「そ、それじゃあ私も五和と呼んでくれませんか？………その、救援に来て貰った方にさん付けで呼ばれるのはなんだか申し訳なくて………」

そんな可愛らしい姿で願い出てくる五和に、数馬の脳内が鯖落ちした。

「あっ、変なお願いでしたね。すいません………」

「いやいや。私としては別嬪さん2人にそう言われて嬉しいんで。じゃあそちらにもお言葉に甘えて」

少し照れくさくなりながらボルシチを口に入れる数馬。それに従うように、彼女たちも食べ始める。ちなみにここでじゃあ、あなたたちも敬語は無しでは言い難い。彼女たちはこれがデフォルメな

のだから。

「あら、大変美味しゅうございます。とても優秀な腕をお持ちですね」

ボルシチを食べたオルソラから高評価の声が

「いや〜良かった。作ったことはあまりなかったから、正直味に不安だったけど、そう言ってくれば嬉しいよ」

五和もピロシキを美味しそうに食べている。

「このピロシキも美味しいですね。中の具と生地がすっごく合ってますし、何より生地サクサク感がとても良いです」

「本場風だから味的にどうかと思ったが………杞憂で済んで良かった。ピロシキも五和やオルソラみたいな美人に食べて貰えれば本望だろうし」

後半の発言、ナンパの発言と思われる。

「それはそれは、数馬さんはお世辞が大変お上手でございますね」

「数馬さんは優しいですから。でも言ってくれるとやっぱり嬉しいです……／＼／＼」

彼女たちはこう言うが、彼は大真面目で言っている。

「ははっ、本心なんだけどなあ。おおっと、ボルシチが冷めてしまっな」

すでに2杯目に突入する数馬。ハイペースな食い方である。

「あ、じゃあ私もお願いします」

五和も皿を渡してくる。自分のを入れ終わると、そちらにも入れる。

「オルソラは？」

「私はまだ時間がかかるのでございますよ」

ゆっくりマイペースな感じで食べていく彼女。1杯目を食べ終わるのはいつになる事やら。

その後も談笑しながらボルシチを食べていく。7割方数馬が食した。3人。いつのまにか、鍋の中は空っぽになっていた。

「「「ごちそうさまでした」「」」

最後は手を合わせ、食事終了の挨拶を済ませる。

「さあて、食べ終わっちゃったな」

「大変、美味しい食事ありがとうございました」

「数馬さん、本当に美味しかったですよ」

再度、褒めて貰い嬉しそうな表情を露わにする数馬。

「さて……結構早めに食べ終わったから。少し話でもしていこうか」

時刻は19時30分。確かに早い。

「そうですね、何を話しましょうか？」

話をしようというのに適当な内容がぱっと思いつかないでいるとオルソラが口を開いた。

「それでは……数馬さんは何故、私と共に食事をなさったのですか？」

「え？」

オルソラからの意外な質問に数馬は驚く。この食事に何故来たかという原点という核心を突いた質問である。

それに数馬はゆっくりと口を開ける。

「そうだな……やっぱり、あなたに会って、話してみたかったというのがあるかな」

「それはどういふことでございますか？」

オルソラの疑問に、数馬は素直に答えていく。

「あなたは発展途上である貧困国にオルソラ教会なるものを建てている。それに、あなたはか弱い人々に救済をしている。これだけ聞けば、とても立派な女性だと思うのが常だろう。だが……」

2呼吸おいて数馬はまた話し始める。

「俺は、どうしてもそういう風に素直に考えることが出来なくて。ついつい、何か裏があるんじゃないかと疑っちまうんだ。それだから、今の状況を聞いてあなたを見極め、話通りの方だったら助けになるうかと思つてな」

本当は、原作を読んでいる彼にとってはオルソラは本当に、本当に素晴らしい女性なのと知っている。

だが、元の世界でもそうであったように、彼は慈善行為をしている人が純粹に人を救いたいと思つているのかと疑問に思つていた。アグネス・チャンのケースもあるのだ、どうしても怪しいと考えてしまう。

そんな数馬の理由を聞いたオルソラは静かに、真っ先に気になることを質問した。

「それでは、私は……どうだったのでございますか？」

数馬は少し黙つた、かと思うとすぐにニツと笑う。

「完璧。無論、あなたは立派な方だよ」

そう言つと、彼は視線をオルソラの手に向ける。

「あなたは女性にしては珍しく、短めに爪を切っている。これはうつかり怪我人や病人、子供達を切つてしまわないようにするための配慮だ。そして手の豆。母が言つてたが、赤ん坊を長時間抱いているところなったりすることがあるらしい。それにそもそも、片手に4個もある時点で重労働を行っている証拠だ」

原作では微塵も書いていなかったことなので、正直彼も驚いていた。そしてさらに彼女の信念の強さを思い知ったのだ。

そんな数馬の説明に、五和が感心したような声を出す。

「すごい……………数馬さん、そこまで分かるんですか？」

「まあそこら辺は何となく予想できるからな。まあオルソラ、あなたは素晴らしい方だよ。確信できるね」

笑顔をオルソラに向ける数馬だが、反対に彼女の顔は曇っていた。

「そこまで言ってくれるのは嬉しいのですが……………私には限界があります。まだまだ救われぬ人々は居るのに、救いの手をさしのべることが出来ないのをごさいます」

顔を曇らせ続けているオルソラに彼はまた言った。

「そこで、自らを褒めないのもあなたの良いところだ。どつかの境界平和と声高に言っているだけの馬鹿共と違い、あなたは実際に人々を助けている。その行動力には感服する。それに、あなたが行動していれば、さらに多くの人々が行動に移ってくれるはずだ。まさしく最高のスパイラルに入ってくる。悩むことはない」

彼が言い終わると、オルソラの顔は晴れていた。

「……………そうでございますね。きっと、そうなってくれるに違いありません。私が自信を失ってはどのようなもうもないでございますからね……………ありがとうございます、励ましの言葉、ありがたく受け

ました」

オルソラが礼を言ってくると、五和も笑顔で数馬に話しかける。

「数馬さんは、本当に優しいんですね。あんなにまで、人を褒められるなんて天性の才です」

「ははっ、そんな大した物じゃないよ。……………まったくね」

数馬の心の中では、またもや複雑な感情があつた。彼は、今までに日は浅いながらも戦場を経験している。数馬はそういう時、必ずと言ってよい程、多くの人命を奪っている。

そんな、オルソラが最も嫌悪しているような、行為をしている自分が、彼女を励ますという権利があつたのか？彼の心情は揺れていた。

彼自身に、ジレンマという代物が生まれてしまっていたのだ。

「……………だから、俺はあなたを粉骨砕身の思いで守ってみせるさ」

だが、今はそんなことで悩んでいる場合ではない。今まさに、彼女が、彼女の命が危機にさらされているのだ。

今更ながら状況を説明すれば、解読すれば十字教（ローマ正教等）が減びるとさえ言われる「法の書」をオルソラが解読に成功したということなのである。なので、ローマ正教は彼女を抹殺しようと企んでいるわけだ。

天草十字凄教は、神からも見放された者に救いの手をといて精神の元、彼女を匿っているようなものなのだ。

「ですが……………今、私を匿っていることによつて、あなた方にまで迷惑がかかります。もしも、あなた方が傷つくようなことがあれば…



……それならば、私自身がローマ正教に捕まった方が……」

守るという台詞にオルソラは申し訳なさそうな表情をする。数馬は彼女の最後の言葉を聞くと、笑顔を無くし口を引き締める。

「オルソラ。1つ言っておくが、自己犠牲は美しくも何ともないぞ？」

「え？」

「自己犠牲っていうのは、確かに端から見ればもの悲しくも美しいと感じる人が多いかもしれない。映画でも良くあるしな。しかし、現実<sup>リアル</sup>でやるのはいけない。人には必ず1人はその人の死を悲しむ人がいるもんさ。自らの死によって、嘆き悲しむ人が増えるのは悪事、それも上位の悪事に匹敵することだ。

それにあなたは、様々な人々に愛されているようなことばかりしている。そんなあなたが死んだら、一体いくらの数の人が泣き崩れる？何人の人が絶望すると思う？

あなたはまだまだ、必要とされているんだ。自身の死を選ぶことだけは、絶対にしないでくれよ」

シンツと静まりかえる部屋。そしてその3分後には、少し目に涙をためながら笑うオルソラと、精一杯笑う数馬、五和がいた。

結果、1時間以上も話し込んでしまった数馬と五和。だが、帰り際

「今日は、ありがとうございます。本当に、本当に嬉しかったでございませ……」

と言ってくれたオルソラを見られただけでも、すがすがしい気持ちになることは確かだった。

司令部までの帰り道、数馬と五和は先ほどのことを話していた。

「数馬さんの言葉はとても心に響きますね。こっちまで感動してしまいました」

五和がまた褒めてくれるが、彼自身はあんな赤面なことを言っているだけだとしか思っていない。

「まあ、オルソラは本当にそんな人なんだろうからなあ。うん。人に愛されているっていうのは良いものだ。まあ、俺はそんな奴、いるわけもないか」

太陽が水平線に消え、雰囲気は暗い時だったためか、数馬は何となくネガティブなことを言ってしまう。

しかし、彼の言っていることもある意味真実だ。家族はこの世界にはいない、友人だって元の世界には何十人もいたが、此処では1桁しかいないような物だ。

だから自分が消えても、涙する人なんぞはいないと考えることも

出来てしまつ。

「何言っているんですか！！数馬さんはたくさんの人に愛されてます。絶対に！！」

しかしそんな数馬の一言を、五和は必死に否定してくれた。それも直ぐに、確信を持つかのように。そんな彼女の心の優しさに、数馬は泣けてきた。

「……………そうだな、俺にもまだいるよ、少ないかもしれないが。どうも疲れていると変なことを言っちまう。良くない癖だ」

涙声にならないように、努めて冷静に返事をする数馬。心の中じや大泣きであるのに。

上条当麻、青髪ピアス、悩ましいところだが土御門元春。彼らぐらいだったら、自らが消えても、泣いてはくれるのではないかと数馬は思えてきた。

それに、彼にはすでに何人もの人に愛され、今後もさらに多くの人から愛されることになる。その中には、最も大きな愛もあるのだ。

「さあて、励ましありがとな。俺もまだまだ頑張るか！！」

数馬の明るい声に、隣で五和が微笑む。そんな、どことなくカッブルのような雰囲気の際は、夜中の遊園地を歩いていった。

## オルソラ争奪戦争・決戦前のエロイベント2（後書き）

ジャンピング土下座をしたい気持ちの作者です。

言い訳がましく言ってみると、この2週間、英検準2級をやったり、漢検を受けてたり、テストがあつたりと学業面でひどいことになっておりまして……言ってしまうえば死にかけてたわけです。

なんとか休みに入り、更新したわけですが。さすがに読んでくれる人いるかと、自問してしまいます。もう誰も読んでくれないんじゃないという不安にさいなまれます。とにかく、今後とも頑張ってくださいますのでどうか見捨てないでください。

次で、多分この章は終わります。いや、終わらせてみせる。

オルソラ奪還戦争・大激戦「前編」(前書き)

えっと、すいません。本当にすいません。遅れたこともすいませんし、何か痕秋で終わらなくなったのもすいません!!

滅茶苦茶長くなってしまい、入りきらないんじゃないかという事でこうなってしまうました。申し訳ありません!!!

という訳で、こんな駄文ですが、読んでください。

それと挿絵ですが、今回の場面しか描いていなかったという自体になってしまったので、今回はありません。大変申し訳ありません。

## オルソラ奪還戦争・大激戦「前編」

9月8日 午前12時18分

「でね、でね。とうまが、ガッコーっていう所へ行っちゃったからお昼ご飯、どうしようか困っているんだよ!!」

此処は上条と数馬が住んでいるアパート兼学生寮。上条の部屋のドアの近くではインデックスと掃除ロボットにちよこんと座っている謎のメイド 土御門舞夏 が話し込んでいた。それを角から見ている男が2人。

「いや〜子供は良いですね。癒される」

「君は何を言ってるんだ……………」

一方は、真っ白のYシャツに黒い背広を着て、小型の肩掛け鞆を持った白髪の青年。もう一方は派手なアクセサリーに赤く染めた長い髪を持ち、香水の匂いを漂わせ、右目の下にはバーコードの刺青をしている大男。

そして双方、インデックスを見ながら頬をゆるませている。レン・アクリウスとスタイル・マグヌスだ。

「で、どうしましょかね。必要である上条はいなさそうですし」

「まったく、こんな時にいないなんてね。時間は刻一刻と過ぎていくのに、やっかいだな」

ステイルが眉をひそめ、インデックスらを見てみると、レンは痺れを切らしたかのようにインデックスの元へ近づいていく。

「なっ、何やってるんだ!？」

予想外の行動に動揺するステイル。しかし、レンはお構いなしに接近していく。

「やあ、どうもお久しぶりですね」

そして普通に、インデックスらに話しかけてしまった。ある意味すごいことである。で、インデックスが話しかけてきた人物を見ると、思い出したかのような声を上げる。

「あっ、あの時、海の家で女湯をのぞき見したって言われてるお兄さんだ!!!」

開口一番、この攻撃。土御門舞夏がマジ!?!みたいな目で見える。

「……………ステイル、バトンタッチ」

レンはいつのまにか隅っこで体育座り。

「早すぎる……………」

しょうがないのでステイルが向かう。で、インデックスが彼を見るところ

「あ。……………また何のようなのかも」

「少し用があつてね。上条当麻はいるかな？」

先ほど、いないことは確認しているのにその質問をするステイル。

「えっと、とうまは今、ガッコーっていう所に行っているからいないんだよ……！」

なるほど、一生懸命に説明するインデックスの姿、確かに癒される。と、そんな雑念をついついしてしまうステイル。何とか振り払い、本題に入る。

ちなみに土御門舞夏は話の中に入ってけいけてない。

「そうか……………どうするかな」

1つの案としてはインデックスを誘拐、そしてそこにいるメイドに手紙を渡して上条を誘い出す方法。これが一番手っ取り早い、時間的には。

だが

「強引な方法は僕は好きじゃありませんね」

レンが絶対に許してくれない。

「ちっ……………君はどうして、そういう風に心を読むんだか……………」

「戦を長丁場してれば自然にそうなります」

ステイルはレン自体は高く評価しているが、その信念と行動が好



きではない。男性相手なら、どんな拷問でも顔色一つ変えずに実行するが、子供や女性、特に子供にはとことん甘い。

普通に、本当に普通に暗殺対象である子供と仲良くなり、最終的にはイギリス清教の騎士団と全面戦争となったりもしたのだが、これは別の話。

ともかくもステイルはレンが好きになれなかった。

「で？じゃあ君はどうするんだい？」

「ちよつと部屋で待たせて貰いましょう」

軽く、上条の部屋にお邪魔しますよ発言。ステイルが眉をひそめる。

「それは……………不味いだろ」

「何故です？一番、楽でしょう？」

それはそうだが…とステイルは口ごもる。あまり、上条とは会いたくない。最も的確に言えば、上条の部屋の隣の部屋にいる、あの悪魔のような軍人に会いたくないのだ。もしも、もしも彼が来たらと、ステイルは寒気を感じる。

「とにかく……………事は一刻を争うんだ。とつとあの子を」

「インデックスさん。上条さんと話したいから、部屋に入れてくれないかな？」

ステイルの意見はスルー。ひどいな、おい。

「え、それは……ちょっと駄目かも。此処はとうまの部屋だから……」

「お昼ご飯にビーフシチューはいかがで？」

「どうぞ、いらっしやいなんだよ！ー！ー」

このやりとり。要した時間は10秒。あっという間である。

「後、そこのお嬢さんもどうですか？」

レンは振り向き、土御門舞夏を誘う。が、彼女は首を横に振る。

「あゝ残念ながら、私は遠慮しておこう！。メイドさんも、暇ではないのだー」

「さつきから無駄話ばかりかしていたくせに、よく言う……」

すかさず、ステイルに腹パン×2。1つは舞夏、もう1つはレン。

「……っな、何で君までやるんだ」

腹を抱えてよろめくステイルに、レンは言う。

「レディには言葉遣いを丁寧に」

笑顔をステイルに向ける彼だが、端から見ればもう鬼だ。

「くっ、最初からこんな感じか……辛いな」

「数馬光太郎、がいなただけ大分マシでしょ？」

レンの言っていることに、ステイルは反論できない。実際に、あいつがいたら、間違いなくこの3倍はひどいことになる。

「さあて、お邪魔させてもらいましょう。願わくば、数馬光太郎が帰還せぬことを祈りながら、ね」

そう言い、レンはドアの中に入っていく。ただ、最後の言葉が、数馬が来たらおもしろくなるな、みたいな言い方であったため、ステイルは胃の痛みが出始めていたが。

「主よ……………どうか僕をお守りください……………」

彼はその時、久方ぶりに神に祈りを捧げたのだった。

「諸君、私は……………いや、これやめとこつ」

昼時、数馬は1人部屋にこもり紙の上に文をいくつも書いていた。「ワロスwww」やら「日本語でok」等々もある。

「そうだな……………出撃前には演説で士気を高めたいんだが……………無理だわ」

かれこれ2時間程度、考えているのだがサッパリ思いつかない。

「生徒会長だった友人の偉大さが分かるな。あんな短時間で演説文  
思いついてたし」

と、そんなことを思っているとドアが叩かれる音がした。

「あ、どうぞ！！」

キィ、とドアが開かれ五和が入ってきた。

「数馬さん、準備状況を伝えに来ました」

りりしい表情で彼女は言う。そんな感じの彼女も何か魅力的だな  
と数馬はついつい考えてしまった。

「おお、そうか。で？どうなってるよ？」

「はい。弾薬の点検などは御坂妹さん達が行ってくれています。独  
立砲塔、戦車も右に同じです。私達も、各員自らの装備を点検、馴  
染ませています。とりあえず、良好と言ってもいいでしょう」

五和の報告を聞いて、心配無しと判断する数馬。次の仕事に取り  
かかることにした。

「そうか、じゃあ大丈夫だな。だったら、俺も準備するか」

机に置いてあった紙の束をしまつと、彼は椅子から立ち上がり、  
掛けてあったコートを着た。

「何処に行くんですか？」

「ちよつとな。あつ、そういや五和。暇そつな奴いた？」

数馬の質問に彼女は困つた顔をする。

「そうですね……みんな切磋琢磨に鍛錬に励んでいましたし……いないと思いますよ」

「じゃあ……五和、ちよつと付き合つてくれないか？」

そんな五和の答えに、数馬は少し考えるとそんなことを言った。

「えつ……」

少々動揺する五和。そんな彼女の様子を見て、数馬はすぐに謝つてきた。

「ああ、悪い。五和も忙しいかつたか……じゃあ俺一人で」

「い、いえ！！私は大丈夫です！！」

話を勝手に進め、落ち込んだまま外へ出ようとした数馬を五和が呼び止める。数馬は振り返るとみるみる内に嬉々とした表情に変わつていく。

「良かった……一人で行くのは流石に寂しかったからな。五和みたいな美人さんと一緒なのは嬉しい」

自分がそんな口説き文句みたいなことを言っているのに、まったく気づかない数馬。何故か、この遊園地に籠城し始めた時からキャ

ラ的なものが変わっている感がある。会ったときは、そりゃあ確信犯であったのだがそれ以降は全自動で口が動いていると言っても良い。彼に何があったのか。

「そ、そんな、だから私なんかは美人じゃありませんよ……………」

しかし、そんな数馬の口説き文句に五和はまたもや顔が赤くなってしまう。純情な彼女の事だ、そういうのを連発して言われるという経験は皆無だろう。で、とどめの一撃。

「ははっ、ご謙遜ご謙遜。五和はどう見たって女性の中じゃ上位の部類に入るからな。俺だったら間違いないくコクっているよ」

「……………!!」

とどめの一撃で五和の頭の中がパンクした。というかその前に、数馬の言ったことは、つまりは五和に告白したいとも取れるだろう。それに気づいた五和はさらに顔を赤くしてしまう。

「おおっと、じゃあ行こうか」

「は、はい……………」

かくして2人は部屋を出た。ちなみに数馬の手にはお札がべたべたと貼られている風呂敷を5重に包んだ何かがあった。

「さあて、ここに仕掛けるか」

で、来た場所は雑貨店の駐車場の近くにある廃屋。本来だったら入ってはいけないのだが。

あえてそこは無視する。

「良いんですかね……………」？

こつそりと廃屋に入ってしまったので、少々罪悪感に駆られる五和。しかし数馬はお構いなし。

「ばれなければどうということはない」

廃屋の中は暗く、懐中電灯で照らさないと見えない。一体、どういう仕組みになっているのか。本来だったら、日光が入ってもおかしくはないはずなのに。と五和は疑問に思った。

「それはそうと此処、臭いな……………」

数馬が眉をひそめる。確かに、廃屋には何かが腐ったような臭いがする。

「ちょっと……………怖いと言わないでください」

怖がる五和に、数馬はしまったというような顔をして、直ぐに謝る。

「ああ、ごめん。ごめん。変なこと言っちゃったな。じゃあさっさと済ませて帰ろう」

木片が散らばっている床にお札が貼られまくっている風呂敷に包まれた何かを取り出す。

「何ですか？それは」

「まあちよつとした物だ。さて、どうするかな」

五和はその何かが気になったが、数馬が話したくなさそうなそぶりを見せたのでやめておいた。ただ、一見すると普通の本である。表紙には何も書かれておらず、造りは重厚。相当な年代物だと言ったことが分かる。

「……………じゃあ今回はこれでやってみるか」

数馬はふつとつぶやき、1本のチョークをポケットから取り出す。そして、床に何かを書いていく。

J T O T D I M B R W V X Z I X D H X T Q Q K I H P S W N H  
D N M O C K V Q S V B P F T J J

さっぱり意味が分からないアルファベットが書かれていく。

「これ……………何ですか？」

「暗号。とりあえず、この術式で完成でいいだろう。長時間は使用しないつもりだし」

その書いた文の上に、先ほどの本を置く。置いた瞬間、五和は黒い煙が見えたような気がしたが次の瞬間には見えなくなっていた。



「……………あれ？数馬さん、魔術使えるんですか？」

ふっと、数馬が術式と言ったことに気づく。確か、彼自身は魔術師じゃないとの話を聞いたはずだったのだ。すると、彼は少し黙って、言った。

「これは……………魔術っていう物じゃないからな。言ってしまえば……………呪いだ」

彼が言ったその一言に、五和は固まった。

呪い、それは古くからある魔術のような物であって、実際は魔術師のような専門家じゃなくても成功してしまうというもの。

そして、魔術との決定的な違いは、それを行った者の体を蝕むこと。呪いの規模が大きければ大きいほど体が壊れていく。そんな物を彼はやっているのだと分かると、五和は危機感に駆られた。

「か、数馬さん！！呪いって、何をやっているんですか！！！！すぐにやめてください！！！」

「んあ？別に、呪いって言っても地味な物だから大丈夫さ。それよりも臭いが本当に酷いな此処……………」

ひょうひょうとした感じで答えていく数馬。それに、相変わらず臭いを気にしているようだ。

「確かに酷い臭いですね……………ってそんなことじゃなくて、呪いは自らの体を蝕むと言います。数馬さん、それを分かってやってるんですか？」

「そんぐらいは分かっている。ただ、この呪いは無害に等しいから

な……………が理由なのかもしれないが」

最後の方、数馬が言ったことは五和には聞き取れなかった。彼女が再度聞き出そうとするが、

その瞬間に、彼女の背に寒気が走った。それも唐突に。しかも……動けない。

数馬は、術式が完全に完成したと言って改めて廃屋の中を見渡す。

「本当に、此処は臭いがひどい。気持ち悪くなってくるな」

五和は、怯えながらも彼に助けを求めようとする。

「……………っ、っ……………っ」

しかし、声が出てくれない。声が出ない。まるで何かに、喉を押しさえつけられているかのように。

「……………五和？」

やっと数馬が気づいてくれた。すでに五和の目には涙がたまって  
いる。

「……………！？」

彼女を見たときに、数馬は顔が青くなる。視線は五和の顔のち  
ようど真横を向いている。そこに何かいるみたいだ。

「やべえな……………まさかの心霊体験とは……………しかも、

悪霊？」

彼の一言で五和は涙がこぼれ始めた。なんということだろう。よくテレビ番組で悪霊ネタが多いこのご時世だが、まさか本当に出くわすとは思わなかった。

感動する場面でもないのに、涙が止まらない。恐怖が、とてつもない恐怖が彼女を襲い、もう何が何だか分からなくなっていく。

本来、こういう話ではカップルの場合、彼氏の方が逃げ出してしまふことが多い。

が、数馬は、まったく逆の事をしでかした。

「そおい!!」

つまりは逃げないで、彼女に抱きついたということだ。

抱きついたらすぐさま、目つぶしでもするかのように手をチョキにして前に突き出す。グチュ、といやな音が鳴り、五和は体の束縛から解放された。

「ふう、とりあえずは消えたのか？」

数馬がほっと、安堵の溜息を漏らす。五和もその得体の知れない、たぶん悪霊、が消えているのを感じた。それだけでも、涙があふれてくる。

「……………ごめんな。まさかこんな事になるなんて」

泣いている五和の頭を撫でながら、数馬はベタな謝りをする。

「とにかく、帰ろう。ここ、なんかいる」

2人はすぐに、この廃屋から出て行った。

「しかし、何だったんだあの廃屋」

てけてけと廃屋から遠く離れた道、人通りは少なめ、を歩いている2人。一方はもう一方の腕に腕を絡ませ、顔を肩につけて怯えている。

その腕を絡まれている一方は、その怯えている方の頭を撫でている。

どちらがどつちなのかは言わずもがな。

(……………五和がこんなにビビッているとは。原作じゃ勇敢な姿しか見たことなかったが)

容姿は美しいが、あまり彼女は怖がるといったそぶりを見せないと思っていた数馬は、意外な一面を見ているような気がしていた。

(まあ、普通急に体が金縛りになって横に何かがいたら誰だって怖がるか。修羅場中の女性以外は)

数馬自身も、寝ているときに窓の外にはつきりと女性の顔が見えたときにはガチで泣いた記憶がある。その時は見間違いということにした。

他にも完徹中に暖房つけているはずなのに寒気と気配があったので、怖がりながらもパソコンの画面いっぱいにエロ画像を張り出して寝た記憶もあるがそれはどうでもいい。

つまりは、自分でもすごく経験したくないことを他人に経験させてしまったわけなのだ。

たちまちのうちに罪悪感に駆られてくる。

「今回は、マジですまなかつた。反省している」

再度、数馬は五和に謝る。五和は肩から顔を動かし、数馬を見る。その目は赤く腫れており、余程泣いたということをおぼわせる。

しかし、彼女は無理に笑顔を作ってくる。

「そ、そんな。大丈夫です………ちょっと怖かっただけですから」

身振りそぶりからはとてもじゃないがそのようには見えない。むしろ、さらに申し訳なってくるほどだ。

「後もう少して、何とか本部に着く。とにかく、休もう」

五和はそのまま、数馬の腕に体を絡めたまま、「はい………」とか細い声を出しながらコクリと頷く。

一方の数馬も、つくづく置いてきた物の危険さに悩まされている。

2人ともそのような状態だから気づいていないのかもしれないが、腕を絡ませて歩いている状態なのだ。

はつきり言おう。腕を絡ませて歩いている男女2人組みはカップルにしか見えない。

(……………ぶつちやけ、あんな廃屋にあれを置いてきたのは失敗だったか?)

あれ、まあ俺がイギリスから任務で盗んできた、あの碌でもない呪書。正式名称、雛見沢。毎度、毎度、レアアツシユケースのスペースを3割がた埋め尽くし、持っているとか何か得体の知れないものがよってくるあの本。

実際に、さまざまな呪いが使用できる優れもののだが……そのもの自体が私怨の塊のようなものだ。使ったときに何が起こるかわかったものじゃない。

以前、海の家で一回使ったときは、後に聞いた話だと幽霊の目撃情報が多々あるようになったと言うからその効力はやばい物がある。

(あれ、回収するときにはお札用意しておこうか)  
ふだ

そして、五和には悪いことしちゃったな。誘わなければ良かったかな?とりあえずは、落ち着いてきたみたいだけど……………もうちょい頭なでてあげようか。

「おつ、やっと着いたな」

何とか到着。此処まで来るのが長く感じたよ。さて、五和は大丈夫かな?

「五和?着いたぞ?」

「えっ、あ、本当だ……………良かったあ……………」

パレルスウィーツパークスの門を見た五和は、安心した表情をして俺の肩に顔を寄せ掛ける。

……………今気付いたんだが、今の俺と五和腕組んでいるよな。

やっべえ、何やってんだ俺、恥ずかしいな！！そりゃ女性とこんな事出来るのは至福の極みだけどね！！

「ところで、五和。そんなに腕掴んでて暑くないか？」

平常心を保って五和に言ってみる。そりゃこの状態を保ち続けたいのはやまやまだけどさ、さすがに五和に悪いよ。いろんな意味で

「え？……………あつ、す、すいません！！！」

俺に言われて、やっと気付いたのか大慌てで五和は俺の腕を放す。若干寂しい。

「いや、別に謝ることじゃないさ。怖い思いさせちゃったし」

「それでも……………迷惑でしたよね？」

「男性の心理として、女性に腕を絡まれるのをいやがる奴はいないものさ」

多分、みんなそうだ。絶対にそうだ。2次元に走った奴だってそのはずだ。

「そ、そうですね……………／／／」

断言する俺に、五和は納得しながらも顔をまたもや赤くして下に  
向けてしまった。もしかして、俺とんでもないこと言ったか？

まあいいや。とにかく早く入ろう。

「じゃあ、入りましようや」

「は、はい!!」

五和、何か緊張しすぎてないか？

数馬SIDEOUT

「まったく、一体あなたは何をやってきたのですか？とミサカは先  
ほどの女性と一緒に帰ってきたあなたに向かって質問します」

帰還 五和と別れる（彼女は顔が赤いまま） 御坂妹が見ていた  
今ここ

「いや、まあその、何だ。ちょっと罨<sup>トランプ</sup>を仕掛けてきた」

「じゃあ何で先ほどの女性はあんなに頬を赤く染めていたの？と



ミサカは仕掛けてきただけじゃないだろうと疑りながら質問します「

数馬はなんと行って説明したらいいのかが分からなかった。幽霊  
と言ってこいつが信じることは無いだろう。この、科学の塊のよう  
な御坂妹に。

「……………えゝあゝとゝそのゝ」

「早く答えてください。とミサカは返答に困る貴方に対してさらに

」

「ミサカ10032号。そちらに数馬光太郎がいるならこちらに寄  
越してください。とミサカはためえ作業中断しているんじゃないぞ  
という思いを秘めながら呼びかけます」

そう言いつつ、1人のミサカが呼んできた。まさに助け船。すぐ  
に数馬は乗った。

「ああ、分かった。すぐそっちに行こう。じゃ、また後で」

「あっ、ちょっと待ってください。とミサカはまだ質問の内容を聞  
いてないので引き留めようと」

「御坂妹が言い終わるか言い終わらないうちに、数馬はそのミサカ  
の元へ行ってしまった。

「ちっ、あの野郎逃げやがったな。とミサカは後で問い詰めること  
を決定し、舌打ちをします」

御坂妹はそう言い、戦車の試運転をするのを思い出し、走ってい

った。

「やべえな。御坂妹とは少し離れてた方が良いか」

少し、戦慄しながら数馬はつぶやく。それを聞いてたミサカは。

「何かあったんですか？とミサカは気になるので質問します」

「えっと、何が問題なんだ？」

ミサカの質問はスルーする。

「いや、あの質問に……………」

「は、や、く、言っつて」

絶対に言いそうにない数馬の様子を見てミサカは諦めたようだ。  
用件を言い始めた。

「……………はい。実はあなたが用意した機関銃の事で問題が……………  
とミサカはあなたが口を割りそうにないので諦めて問題の内容を話  
します」

「機関銃？……………あつ、ブローニングM2重機関銃のことか？」

30挺ほど、こなたに用意させたこの機関銃。大威力で、そん

で持って何故か狙撃中としても優秀な成績を収めているという化け物だ。

今回の戦では活躍を期待しているのだが……

「弾丸が若干不足気味なのですが。とミサカは用意された弾薬の足りなさに不安を感じつつ質問します」

「えっ、マジで？」

一番あつてはならない問題が発生してしまった。

相手は戦車も何も無い、ただ魔術が使えるシスター部隊。銃のような遠距離戦に向いている武器もない。前近代的装備なのである。それに、魔術でも出来なくはないが時間がかかる。多分、先に撃破されるのがオチだ。

だったら、一番良い機関銃を、という訳でこれを選んだのだが。

弾がなければ、ただの鉄の塊に過ぎない。

「ベルト給弾式の弾丸、計1万8000発も用意したのにか？」

「はい。機銃掃射をする場合には、相当数の弾薬が必要です。それに相手もプロでしょうから密集体系ではなく分散して突入してくるでしょう。」

そうなれば各個を撃破しなければいけませんから、最低でも5万発は用意してください。とミサカは要求します」

5万発。半端ではない量だ。

「おい、本当にそんなに必要なのか？もうちょい少なくても……」

「先の大戦で、不敗を誇った日本軍は弾薬をケチるということとは絶対ではありませんでした。とミサカは過去の事例を挙げて説得します」  
そんなことを言われてしまうとぐうの音も出なくなってしまう。

その上、そんなにこの世界の日本軍は自らの世界の日本軍、貧乏で弾丸がない惨めな軍隊と違っていたのかも驚かさされた。

「……………分かったよ、弾薬はどうにかして用意する。他に問題は？」  
「その他にはこれとってありません。とミサカはあなたの理解の早さに感謝しつつ、報告を終えます」

「OK。とにかく、準備は念入りにやってくれ。あつ、そういやAK-47の弾薬とかは大丈夫なのか？」

ミサカ達が持ってたAK-47だけは想定外であったので一切、弾薬は持っていない。彼女達は、非殺傷弾を持ってきたというので安心していただけだ。

「大丈夫です、1会戦分の弾薬はあります。とミサカはあなたの不安を杞憂にします」

「……………ならいいか」

「どうやら問題はなさそうだ。数馬は安心して司令部に戻ろうとして、止まって、再度ミサカに話しかけた。」

「ああ、ところで君の検体番号なんだが……………」

「はい？とミサカは唐突な質問に再度聞き返します」

数馬は、若干考えるように腕を組んだ後、ふっと答えた。

「いや、君、検体番号10763号じゃない？」

「どうして分かったのですか。とミサカはあなたの能力に脱帽します。というか逆に怖いです」

ちよいとミサカ10763号が引く。数馬はすぐに言い訳した。

「えっ、いや、まあどこことなく、雰囲気で分かるんだよ、俺は。そんな気にするな……………で、名前は河城でいい？」

「良いわけないだろ。それ番号と全く関係ない。とミサカは怒りを露わにします」

ミサカ10763号に睨まれ、数馬はすぐに謝る。

「すまん。すまん。なにせミサカ達の呼び方が検体番号じゃ寂しいから。せめて呼称だけでもと思っただけ」

彼の言い分にミサカ10763号は呆れてしまう。が、ヤレヤレといった様子で

「仕方ありませんね……………いいでしょう。河城でいいです、とミサカはしぶしぶその呼称を許可します」

ミサカ10763号、もとい河城がうなずいたので、数馬はどこからか、1つの紙の束を出した。

「ああ、そっぴや忘れてた。ほかのミサカ達の名前も決めておいたんだが」

「おい、何やってるんだよ。とミサカはあなたの行動に馬鹿馬鹿しささを感じません」

「検体番号じゃ間違えちまうかもしれないからな。兎に角、ほかのミサカ達に渡しといてくれ」

数馬から手渡された紙の束を受け取り、河城はため息をつく。

「どっしてこんなことしなければならいんでしょうか。とミサカはブツブツと、文句を言います」

「戦においては、部隊、そして各員の情報をすぐさま確認できるようにしなければならいんだ。だったら分かりやすい方が良いだろうっ?」

先ほどとは逆に、数馬が河城を理屈で説得してしまった。これには河城もぐうの音も出ない。

「……………分かりました。とミサカは諦めて元の場所に戻ります」

「おお、頼んだぞ」

で、そんな訳でミサカ10763号、正式呼称河城が、行ってしまった。

そうならば次の仕事である。

「……………ねえな」

という訳で、仕事がなくなってしまった。

作戦会議は、もう5回はやっている。あまりやり過ぎれば情報の混乱が生じる。

各員の鍛錬状況の視察。これにいたっては、ちよくちよく見に行っている。はつきり言ってしまうは見に行きすぎている。

じゃあどうするか。

「五和の所行こう……………見舞いとして」

結局、また彼女に会いに行くことにした。

道中で、建宮に五和と何をやってたのだと聞かれて、ありのままの事を話したら、彼の顔面蒼白になってしまったりもしたが、大丈夫だろうと数馬は判断した。

そして、他の十字教徒に五和の居場所を聞くついでに、結局、視察などもしておいたりした。

五和がいたのは自動販売機の隣にあるベンチだった。

「こんな所でどうした？」

座っている彼女に話しかける。手には抹茶ラテがあった。

「あつ、数馬さん。ちょっと此処で休憩してたんですよ。鍛錬を  
していましたので」

なるほど、確かに彼女の隣には海軍用船上槍フリウスピアがある。これで鍛錬  
をしていたのだろう。

「数馬さんは何をしていたんですか？」

「いや、まあ全員を視察していただけだ。みんながみんな、凄い手  
練ればかりだよ。古強者つてというのがピツタリだ」

牛深からも技を見せて貰ったが、その戦斧とは思えないような優  
雅な技には驚きだった。その他の教徒の技も見たがそれらも素晴ら  
しい物ばかり。さすがとしか言いようがなかった。

「ところで、体の調子は大丈夫か？異常はないか？」

「はい、大丈夫です。……………それと、さっきは恥ずかしいところ  
を見せてしまいました。申し訳ありません……………」

あの腕を組んでいたところを思い出したのか顔を少し赤らめる彼



女。数馬もつられて赤くなってしまった。

「いや、えっと、まあ気にしなくて良いさ。俺はすっごく可愛いと思っただし」

数馬、最後の最後で本音を言ってしまった。言った方、聞いた方、双方が顔を真っ赤にする。

「ふえ！？い、いや、そ、そんな、可愛くなんてないですよ……私なんか……」

五和、恥ずかしさの余りしどろもどろ。

「いや、失敬。変なことを言っ、いや嘘じゃないんだが、本当のことなんだが、失礼な、あっ、失礼じゃないか。いやでも、ああ頭が………！！」

数馬、自分の発言に大慌てする。言動が挙動不審のような状態に。

「お、落ち着きましょう！！そ、素数を数えましょう！！」

「そ、そうだな。じゃ、じゃあ………」

そう言い、2人は素数を数え始めた。

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 3 | 1 | 2 | 7 | 1 | 3 | 1 | 1 | 3 | 7 | 1 | 3 | 9 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 3 | 6 | 1 | 6 | 7 | 7 | 1 | 7 | 1 | 1 | 0 | 9 | 1 |
| 6 | 3 | 1 | 6 | 7 | 1 | 7 | 3 | 1 | 7 | 9 | 1 | 8 | 1 | 1 | 9 | 1 | 1 | 9 | 3 | 1 | 9 | 3 | 1 | 1 | 9 | 3 | 1 | 1 | 9 | 3 | 1 |

1 3 0 7 1 3 1 9 1 3 2 1 1 3 2 7 1 3 6 1 1 3 6 7  
 1 2 8 3 1 2 8 9 1 2 9 1 1 3 0 1 1 3 0 3  
 1 2 3 1 1 2 3 7 1 2 4 9 1 2 5 9 1 2 7 7  
 1 1 9 3 1 2 0 1 1 2 1 3 1 2 2 3 1 2 2 9  
 1 1 5 1 1 1 5 3 1 1 6 3 1 1 8 1 1 1 8 7  
 1 0 9 7 1 1 0 3 1 1 0 9 1 1 2 3 1 1 2 9  
 1 0 6 1 1 0 6 3 1 1 0 6 9 1 0 9 1 0 9 3  
 1 0 2 1 1 0 3 1 1 0 3 3 1 0 4 9 1 0 5 1  
 7 7 9 8 3 9 7 9 4 1 9 7 1 9 6 7 9 7 1 9  
 6 3 8 7 8 2 7 8 1 8 8 3 8 7 8 5 0 7 8 1 9  
 8 2 3 8 2 7 8 2 9 8 9 8 3 8 5 3 8 5 9 8 8  
 6 1 7 6 9 7 7 3 7 8 7 7 9 8 0 9 8 1 8 2 1  
 7 1 9 7 2 7 7 3 7 3 7 9 7 4 3 7 5 1 7 7  
 5 9 6 6 1 6 9 6 7 3 6 7 6 8 3 6 9 1 7 0 7  
 6 1 7 6 9 1 9 6 3 1 6 4 6 4 3 6 4 6 5 3 6  
 7 1 5 7 7 5 8 7 5 4 1 5 9 5 5 7 6 0 7 6 1 3  
 5 2 1 5 2 3 5 4 5 4 7 5 5 7 5 6 3 5 6 9 5 5  
 6 3 4 6 7 4 7 9 4 8 7 4 9 1 4 9 4 9 5 0 3 5 0 9  
 4 3 1 4 3 3 4 3 9 4 4 3 4 4 4 4 5 7 4 6 1 4 2 1  
 7 9 3 8 3 3 8 9 3 9 7 3 9 4 0 1 4 0 9 4 1 9 3 3 1  
 3 3 7 3 4 7 3 4 9 3 5 3 3 5 9 3 6 7 3 7 3 3 1  
 8 1 2 8 3 2 9 3 3 0 7 3 1 1 2 6 9 3 1 7 3 3 1  
 2 4 1 2 5 1 2 5 7 2 6 3 2 6 9 2 7 1 2 7 7 2 3 2  
 9 7 1 9 2 1 2 1 2 2 3 2 2 7 2 2 9 2 3 3 2 3 3 9

「ここまで数えて、やっと落ち着いた2人。話を再開する。」

「じゃ、じゃあ……落ち着きましたし、もう疲れも取れましたか」

ら………ちょっと鍛錬再開しますね」

すつと、五和は槍をとり起ち上がると、そのまま鍛錬に入った。

「やつ、はっ！！」

寸分違わぬ綺麗な機動を、槍は描いている。突き、払い、斬り、跳ね飛ばす、叩き潰す、足すくい、二段突き、大車輪。すべて見ていると、まさしく槍の舞のようだ。

このような技が連続して繰り出される。あの細い体のどこに、あそこまでの体力があるのか。ある意味、謎に近い。調子が出てきたのか、一回、一回、技が繰り出される速度が上がっていく。10分もすれば、彼女は凄まじい技の連打を行っていた。

と、ここで五和は一端手を休める。

「すごいな。もはや達人の域に達しているんじゃないのか？」

あまりの素晴らしさに、数馬が賞賛するが、五和は首を横に振る。

「いいえ、私なんてまだまだです。もっと凄い人だっています。もっと鍛錬しないとイケません」

「ほお………奥が深いんだな………」

あれでまだまだだという事は、真の達人はどんな化け物なのだろうか。想像が付かない。

「あつ、そつだ数馬さん。1度、お手合わせ願えませんか？」

「はい？」

突然の試合の申し込み。思わず数馬は聞き返してしまった。

「な、なんで？」

「数馬さんも、武術は心得ていると思ったのですが……………ほら、先日のあの大暴れとかで、すごく強かったですし」

そういえばそんな事もあったと、思い出す数馬。だが、あの時は怒りが爆発していた状態だったのであなっただ。普段の状態ではとてもじゃないが、あそこまで動けない。

「うーん……………」

「あっ、やっぱり駄目ですよ……………」

しかし、どうも断り切れないのが数馬だ。五和が残念そうな顔を見ると、すぐに決断した。

「OK。良いよ。やるうじやないか」

「本当ですか！…！」

結局、受理してしまった。ただし、五和には念を押ししておく。

「なるべくお手柔らかに頼むよ？あと、魔術は無しで」

そんな彼の言葉に、五和はとんでもないといった表情をする。

「そんな、むしろ私の方がお手柔らかにお願いします。まだまだ未熟ですから……………」

「いや…………それは違うんじゃないかな？」

「どンドン、悪い方向に進んでいる。数馬としては此处で負けたりみっともないだろう。」

「…………まあ、よろしくお願いします」

「はい!！」

というわけで、稽古を付けることになってしまったのだが。

数馬はすっと、久々に名刀雷切を取り出した。その昔、雷を切ったとされていることからその名前が付いているこの刀は、一定時間持つと、正確には12分、持ち主は狂気に駆られ暴走状態に陥るという代物だ。

使用したのは、学園都市の工場にいた化け物との戦い以来。

この刀、特徴としては、日本刀には珍しく刀身の根本、はばきとこののだが、が三角に変形している。これでは鞘に収まらないはずなのだが、不思議な事にすっと収まってしまふ。物理的な仕組みはサッパリ分からない。

ちなみに、三角になっている部分は喉を斬るためみたいだ。

「少しだけだぞ?」

「はい、よろしくお願いします」

2人はふつと、構えの体勢をとる。そして、すつと静寂な時が流れ始める。

「……………」

「……………」

10秒、その沈黙が続く。そして、次の瞬間、五和が動き出した。

「てい!!」

数馬との間は2m。しかし、そんな距離はあっという間に詰められてしまう。

そしてすぐに一撃。柄の中ぐらいを持ち、突いてくる。数馬はすぐに避けるがまた一定距離を詰められる。

この持ち方は、棒術や格闘技で威力を発揮しやすく、切り替えもスムーズに行うことができ、また石突き部分を効率良く使いやすい。ただし、個人の熟練度が深く関わるので、うまく扱うのは難しい。五和は、すぐに分かったが凄まじい熟練度だ。滑らかに攻撃を仕掛けてくる。

「うらあ!!」

気迫でも、数馬は彼女に押されてきている。

ただし、数馬も黙っちゃいない。槍の連続攻撃には必ず切れ目がある。例えば、槍を叩き付けた瞬間だ。

五和はどうかやら連続しての技の最後には叩き付けをしてくるみたいだ。確かに、トドメをさすのにはちょうど良い。だが、数馬はすぐにそれを見切ると、彼女が叩き付けた槍を躲し、反撃に移った。

「おらあ！！！」

まず、槍を持つ者を狙う時には、槍を持つ方の腕を攻撃する。槍というのは腕と手首の細かい機動が攻撃に影響しやすい。つまりは、槍を持つ、利き腕を負傷すれば攻撃力が大幅に低下するのだ。

今回は、稽古なので刀身の峰で五和の腕を打とうとする。

五和はすぐにそれに反応すると、地面に突いている槍をすぐに持ち上げ防御に移る。

鈍い金属音が鳴り、槍と刀が激突した。数馬の一撃は思いの外強力で、彼女はバランスを崩す。

そこに、数馬は一気に畳み掛けた。大振りでの攻撃はせず、隙を見せない小振りな斬り込みで、槍に叩き込んでいく。

さすがに、槍を切つては不味いのでそこら辺は何とか手加減している。ただ、槍を切るよりも先に、五和自身の槍を持つ両手がしびれて使い物にならなくなるようにしているのだ。

小振りながらも、数馬が放つ一撃、一撃は通常の攻撃よりも強い。五和は反撃しようにも、その隙さえ与えてくれない。

そして、ついに五和の腕に限界が来る。

一撃で、彼女は再度、ぐらつく。防御の姿勢も崩してしまう。数馬はそれを見逃さず、

彼女の首に、刀身を突きつける。

「……………」

「……………」

すぐに、2人の動きは止まり、お互いを見つめ合う。

「まいりました……………」

「はい、ありがとうございます」

五和が、負けを認めると、数馬は刀を降ろす。

「すごい……………数馬さん。本当に強いですね!!」

「えっ、そ、そうか？結構、苦戦していたし……………」

五和に褒められ、ついつい照れてしまう。が、この稽古が彼の自力だったかどうかは分からない。途中から、彼の手には感覚が消えていた。代わりに、何か分からない感触が手の中を包み込んでいた。一体、あそこまでの連続した攻撃をどうやって放てるのか？彼自身はそこまで剣術はやっていない。練度は確実に、五和に劣る。

だとしたら……………すでに、彼の手はすでに狂い始めていたのかもしれない。

「いいえ、攻撃の手の内を読まれていた時点で私の負けです。さすがですね!!」

だが褒められたら、そんなのは関係無い。すぐに、雷切を鞘に入



れベンチに置いておく。

「いや……………照れちまうな」

数馬はそう言いつつ、自販機に向かいジュース、らしきパッケージの缶、を購入した。

「何だろうなこれ……………まあいいや」

良く確認せずくいつと、それを一気に飲み干す。味は初め刺すような痛みと強烈な焦燥感があり、それを過ぎると甘く感じた。なんだこりゃ。

「でも、結構旨いな」

「数馬さん、それ何ですか？」

槍を置いてきた五和が数馬の持っている缶を見る。

「へ？分かんないな」

「分からないって……………知らないで飲んでいるんですか!？」

びっくりした表情の五和に、数馬は大丈夫とでも言うつようにもう1本購入する。

「なあに、旨いからいいさ」

「……………ちよつとその缶見せてください」

五和が空になった缶を見る。その間に、数馬は2本目を飲んでい

る。  
「ぶふぁ……………旨いなぁ……………」

数馬の表情がトロンとしてくる。五和は、缶のパッケージを見て顔を真つ青にする。

「か、数馬さん！！それ、飲んじゃ駄目です！！」

「ふえ？何で？」

五和がやめるように言っているのに、耳を傾けながら彼は2本目を飲み干してしまふ。

「あつ、だから飲まないでください！！それお酒ですよ！？」

「ええ？マジで？」

すでに、数馬はベロンベロンだった。ちなみに、缶のパッケージには酒のマークが小さいながらある。そして商品名はSAKE  
普通、ちゃんと見ていれば分かるはずなのだが。

「やべえなぁ……………どうすっかなぁ……………うへへ」

見ていなかった彼は、この有様だ。普通だったら、一気飲みでも此処まで酔わないはずなのだが、数馬の場合、特別酒に弱いみたいだ。千鳥足になっていく。

「あつ、数馬さん！！大丈夫ですか？」

倒れそうな数馬を支える彼女、肩を担ぎ、ベンチに座らせようとする。

そんな中、数馬は少し五和の胸が自分の胸板に当たっている事に意識が集中していく。心情としては、もうこのままヤラナイか？みたいな感じだ。

酒というのは、人の理性を全て奪うことがある。この効果は、戦争では何回も使われてきた。

だが、それが今、彼の欲望に火を付けた。もともと、下世話な話、彼はこの世界に来てから、まああっちの方向で何もしていないのだ。別の物で例えると、弾薬が余り余っている戦車みたいなもの。臨戦態勢というわけだ。

「……………」いろいろな意味で酷い表情をしている。

視線なんかは胸にしか見ていない。酒の一気飲みによる思考回路の欠如によって、彼の顔がニヤニヤと笑ってくる。はつきり言えば、危険状態である。

「数馬さん？」

「ふえあい？」

すでに、呂律はぐちゃぐちゃ。まともに何も言えない。

ただ残るは、欲望のみ。

「どうしよう……………一端、本部で休ませた方が良いのかな？」

五和が肩を担ぎながら、本部へ向かい歩き始める。当たっている胸はさらに密着してくる。胸板に来る柔らかい感触は、さらに数馬を暴走へ走らせる燃料へと変わっていく。

「数馬さん。兎に角、本部に戻りますので頑張ってください」

「サア〜イエツサ〜」

やる気の無い声で返事をする彼だが、その目はまさしく獣だ。いつ、弾けるか分からない。

とりあえず歩いていくのだが、数馬の足の歩みが遅く、なかなか進まない。やっと、道の端、近くには茂みがある、に到着した。

で、この時に数馬は思考回路が爆発していた。

（もう、このまま行けるんじゃないか？行っちゃまうか？やるか？やるか？茂みが良いタイミングであるし、このまま行けば良いんじゃないか？突撃できるんじゃないか？やるうぜ、数馬光太郎。童貞から飛び立とうぜ。妖精から脱皮しようぜ。……………ぐへへへっへへ）

すべからず狂気で出来ている考えだ。振り下ろさんとする、握り拳だ。いつでも、やれる。だが……………

「数馬さん、大丈夫ですか？後、もう少しですから！！」

一生懸命に、五和が彼を励ましてくるその様子を見た瞬間、数馬は自分の考えをすぐに消去した。この、彼女の純粋に人を思う気持ち、汚すようなことは絶対にしてはならない。

数馬は、それまで心の中に渦巻いていた欲望を無理矢理はぎ取ると、自らの足を無理に動かし始めた。

「くおのやろお……………動くぞお……………」

たかが酔っぱらいが、やっとのことで歩みを始めただけのことなのだが。

何故か感動的だ。

「が、頑張ってください!!！」

五和も数馬をしつかりと補助してくれている。行けるはずである。必ず行ける。

「あっ、やっぱり無理……………」

その希望さえぶち壊して、数馬は胃の中から来る猛烈な激痛と吐き気で、五和をも貴添えにして、倒れる。

吐くまでは、いかずとも、大惨事になったことは言うまでもない。

午後3時30分。上条宅

「はいども、お邪魔してまーす」

玄関から入ってきたと同時に、上条は部屋から挨拶された。

「……………どういふこと何でせうか？」

帰宅した彼の家に、どっかで見た事ある魔術師達がいた。

1人は、何回も見ているあの、不良神父。そしてもう1人は、風斬の時に世話になったレンという魔術師だ。

一体、俺の部屋に何が起きてたんだ。上条は考えた。まだ、何も変なことはしていない。じゃあ一体どうして。

「あー!!とうまだ!!」

上条が帰ってきたと分かると、インデックスが駆け寄ってくる。手にはお手玉が握られていたので、遊んでいたようだ。

「レンにオテダマやトオリヤンセっていう遊びを教えて貰ったんだよー!!」

「おお、良かったな!!って、そういう事じゃなくて……………」

上条は何で、彼らが部屋にいるのか、それが知りたかった。どうして日本人では絶対なさそうなレンが、そんな遊びを知っているのかは突っ込まない。

「ああ、どうして僕らが此処にいるかですよ。分かります」

「いや、分かりますって言われても困るからな？」

「時間がないんだ。早く用件を言おう」

gdgdな会話を断ち切るようにステイルがしゃべる。だが彼の手の中にはインデックスのために一生懸命に折っていた鶴がはみ出しており、笑いを誘う。

「ぶつ……………お前が折り紙やってるなんて……………上条さん、驚きですよ」

「ですよー」

レンに上条にからかわれ、ステイルは少し苛立つが、此处で怒ってしまえば話が進まない。どうにかこらえることにした。

「……………で、とりあえず用件を言おう」

ステイルは、上条と、本当は必要ないのだが、インデックスに法の書の盗難や、ローマ正教、オルソラ・アクイナスという重要人物の誘拐。そして天草十字凄教の事を話した。

「で？俺にその手伝いをしろっていうのか？」

「ああ、そつち」

ステイルの説明を聞き終わった後、上条には拒絶したいという表情しかなかった。彼には、大量の宿題が残っている。夏休みの宿

## 題のこと

補習で奮戦し、後もう少しで終わるといつところなのだ。こんな時にそんなことをやっていては間違いないと終わらない。

「いや……ものすごく迷惑なんだが……っというか、俺よりも隣にいる数馬に頼めよ。あいつの方が滅茶苦茶凄いだろ?」

上条の疑問に、レンが残念そうに答える。

「残念ながら、先ほど行って見たのですが……タイミング悪く留守なんですよね」

レンが言ったことに、上条はおかしいところに気付いた。

「え?あいつ、今日は調子が悪いから休むって小萌先生が……」

病院に行っているのだろうか?いや、こんな時間帯まで病院にいるはずがない。じゃあ、彼は何処に行った?

「……こつちに来る前に、彼の所属している組織がローマ正教と闘争を開始したとの連絡があった。まさか、彼もそつちに引つ張り出されているのか?」

ステイルのつぶやきに、上条は数馬の安否が心配になった。ステイルの説明中にちょこちょこ入ったインデックスの補足説明ではローマ正教というのは世界最大規模の宗教らしい。ほとんどが無力な奴らだが、中には化け物がいるという。

数馬がすごいのは知っているが、彼が何処まで対抗できるのか?それは分からない。



「僕たちは、今ローマ正教と協力することになっているんだけど……  
……本国じゃ、『赤光の黒十字』に支援するだろうさ」

「でしようね、大半が烏合の衆であるローマ正教よりも、『赤光の黒十字』のような9割9分がチート。残りの1分がバグの組織の方が敵に回したくはないですよ………って、組織名言っちゃって良かったのでしようか？」

レンがふつと、機密事項である数馬の所属する組織名をすっかり話していたことに気付く。ステイルもしまったという顔をする。

どこか抜けている奴らだ、と上条は思いながらも、数馬が所属している『赤光の黒十字』の凄さに、聞いただけだが、恐ろしさを感じた。

「あいつは、そんな組織に所属する程………やばいのか？」

上条が恐る恐る聞いてみると、レンがしょうがないとばかりに答えてくれた。

「やばいって言うか………彼が強いことは確かですよ。通常じゃあ1個大隊、だいたい1000人程度です、ぐらいですが、暴走したときは5個師団程度、数に差がありますが、最大で10万人くらいでしようか。」

………最悪な時には、2chのオカルト版にある死ぬほど洒落にならない話を集めてみない？にある、巣くうものシリーズの『アレ』が5体いても対抗できるか分からないくらいですけど」

レンの説明の後半がサッパリ分からなかった上条。具体例の最後

は一体何なのだろうか。

「な、なあ。暴走時とか、最悪な時や、最後の……巢くうもの、だっけ。って何よ？」

今度はレンに代わって、ステイルが話し始めた。

「暴走時っていうのは、彼が怒りに我を忘れたときさ。人間、我を忘れたときには信じられない力が出るだろう？その強化バージョンってわけだ。彼の戦歴を統計、計算した結果がこうだった。で……最悪な時っていうのは……」

ステイルの口がどもる。彼自身はあまり言いたくないことらしい。見かねたレンが、今度は話し始めた。

「最悪な時っていうのは、彼が本当の狂気に戻りできなくなるまで取り憑かれ、殺戮の限りをつくす時って事です。こういうのも予測しておくですよ。過去に実例があつたみたいですから。」

それと、先ほどの2chの『アレ』は、ネットで調べれば出てきますから、調べた方がわかりやすいのですが……まあ、この世のどんな化け物の権化だろうとも殺してしまう、本当の化け物っていう所でしょうか。それが例え、神であろうとも」

話を聞いて上条は、抽象的ながらもその恐ろしさがよく分かった。ようするに、夏休みの時、エンゼルフォールで出現したあの天使を凌駕する者って事で理解しただけだが。

最悪な時というのも怖いが、その本当の化け物である『アレ』という者が、5体いても敵わない。という具体的ではないような所が、恐ろしく感じた。

「この予測は予言者とかも多用しているんで、結構正確なんですけど……9月の始めに出たこの結果には驚いたらしいじゃないですか、ステイル？」

レンが話を振ると、ステイルも同意するように頷く。それも深刻そうな顔で。

「本来……狂気に取り憑かれれば、状況の判断等の思考能力が欠如するから、大幅に強くなるなんて事はない。せいぜい、2倍程度だ。だけど、予測じゃ彼の場合は桁違いの強さを弾き出した」

桁違い。10万の軍勢に匹敵する程の能力を保持するというのに、まだこれ以上の強さを発揮するというのか。上条にはにわか信じがたいことだった。

「どうやら、彼の場合は狂気に取り憑かれても、思考回路はそのままみたいですから。一体、どうやってたらそんな事が出来るのやら。狡猾で、知略も出来て、残忍で、慈悲などはなく、そして強い。最悪な要素がすべて揃っています。くれぐれも、そんな状態には彼はなあって欲しくないですね」

上条の脳裏には、頭は良いが、女性に目が無く、ちよつと変態で、だがすごく優しく友だち思いな、あの数馬がよぎる。あの数馬が、そんな奴になってしまつとは、考えられない、絶対に考えられないことだった。

上条の様子を見たレンが、しかし……と付け加えるように話し出す。

「それは彼が狂った時です。狂わなければ、どうと言うことはあり

ませんよ。それに、僕はそんなに彼と接してはいませんが……あなたとは分かっているでしょうけど、優しい方です。万が一にでも、狂うこと何てありませんよ、ただ、友だち思いな面は懸念事項ですが……………」

しんと、部屋が静まりかえる。いつもはうるさいインデックスでさえ、口を閉じている。

空気を断ち切るように、ステイルがしゃべる。

「こんな事言っている場合じゃない、早く行こう。上条当麻、来てくれるな？」

ステイルがさらりと言う。上条としては、あまり乗り気ではないのだが、突如として行かないといけない気がした。直感的に。

「分かった。行ってやるよ……………」

「良い判断だ。もしも、君がNOと言ったらあの子を連れて帰るつもりだったからね」

ステイルがひょうひょうとした感じでそんなことを言うが、レンが少々噴き出す。

「ぶっ、そんな事言ってますけど、本当はインデックスちゃんが悲しがるから出来ないでしょうっ？」

レンの一言に、上条もつられて噴き出す。ステイルは顔を真っ赤にして否定する。

「ば、バカなことを言うな……そんな訳無いだろう……！」

「はいはい、男のツンデレは需要がないですよ？」

レンがステイルの怒りに油をそそぐ。話が進まないの、上条が間に入る。

「おいおい、時間がないんだろう？早く行こうぜ」

「とうま！！私も行くんだよ！！！」

と、此処でインデックスの存在に気付く。上条としては危険なところに連れて行きたくはないのだが。

「あゝこの子を一人で置いていくのも忍びないですし。連れて行きましょう。最上の防備を付けますから、安心ですから」

というレンの安全を保証する発言をいただけただけなので、上条としてもOKということにした。

「そうか……………それなら良いか」

「やった！！やったなんだよ！！！」

「ただし、上条や僕やステイルから離れてはいけませんよ？危ないですからね」

「分かったなんだよ！！！」

と、全ての準備が出来たところで。

「行きましよう」

4人は、部屋から出て行った。

午後4時10分

「いや……………すみませんでした」

「いいえ、それよりも数馬さん。本当に大丈夫なんですか？まだ1時間も経っていないですけど……………」

先ほどの泥酔？事件から、何とか本部に戻ると、すぐに建宮から水が差し出され、ガブガブと飲みまくり、少し寝てみた数馬。起きればすでに、アルコールは抜けていたらしくすっかり元の状態に。酒に酔うのが早ければ、醒めるのも早いようだ。

ただし、記憶だけは何故か都合良く残っていたらしく、はっきりと自分の痴態を思い出さされた。

「いや、さっきのお主の泥酔状態ときたら、それはそれは笑えたよな」

「教皇代理！！いい加減にしてください！！！」

からかう建宮に、五和が怒る。数馬は何も言えず、相当に凹んでしまった。

「外に出てくるわ……………風に当たりたい」

「えっ、大丈夫ですか？私も付いていきましようか？」

「いや……………大丈夫だ。一人でいい」

少しおぼつかない足取りながらも、数馬は扉に向かい歩き出し、そのまま外に出て行った。

それを見届けた建宮は、真剣な表情になる。

「……………で、五和」

「何でしょうか？教皇代理」

その表情に、思わず声が引き締まる五和。何だろつかと彼女に思わせる。

「数馬殿とは一体何処まで進んだよのな？」

真面目な表情で聞かれた内容に、五和は思わずガクツとしてしま  
う。

「な、何言っているんですか！！教皇代理！！！」

「いや、此処に数馬殿が来てからやけに、お主と仲良くつるんでい  
るからな。案外、良いカップルなんじゃないかと思っただよな」

良いカップルと聞いたとたん、五和が頬を赤く染め、下を向いて  
しまう。それを見た建宮はニヤニヤと笑う。

「確かに、数馬殿はいい男よのな。（女性には）優しくて、知的で、美男子。そりゃあ、五和としても良いと思ったんだろうなあ……………」

「きよ、教皇代理！！何言っているんですか！！数馬さんとは、そんな関係じゃ……………」

五和の声は後ろに行くにつれて小さくなっていく。

「2日間で恋に落ちる。まさしく、ローマの休日を2倍にしたようなものよな〜」

建宮の言っていることはつまり、映画ローマの休日では1日だけでヒロインが恋に落ちたが、五和の場合は2日で恋に落ちたということだ。わかりにくい言い方である。

「ど、どうしてそういう風になってしまっんですか！！！！」

「いやはや、若いっていうのは良いのよな〜」

「きょうこうだいいり！！！！！！」

まだからかう建宮に、彼女は本気で怒鳴りつける。剣幕が凄かったので、さすがに建宮も自重した。

「す、すまんよな……………冗談のよな」

「あっ、ごちらこそ……………」



少し、司令部内の空気が重くなってしまった。

「……………という訳で、さらに弾薬を3万2000発用意して欲しいんだが」

「え、そんなに?」

そして、外に出た数馬は早速、大天使こなたに連絡を取っていた。

「いや、御坂妹達が、これじゃ足りないとか言ってる……………」

「にしても、多すぎるよ。本当に必要なの?」

「分からんが…………足りなくなるよりはマシだ。矢弾尽き果て散るぞ悲しきなんていう辞世の句は残したくない」

こなたは電話越しに、少し考えていると、了承してくれた。

「いいよ。分かった。まかせなさい!!すぐに、弾薬を送ってあげるよ」

「助かる……………」

弾薬の確保が出来たので少し安心する。すると、こなたは付け加

えるように言っていきた。

「あっ、それと、君が頼んでくれたバットは用意できたから付属品と送るね」

「付属品？何だよそれ？」

一体、バットに何を付けるといっただろうか。

「説明は届いてからするよ。弾薬は何処に送って欲しい？」

「うん。そうだな………とりあえず、御坂妹達のいる場所を送ってくれ。説明は後でしておく」

「あなたはOKと言うと、メモをとっているのか鉛筆の音がした。そして書き終えたようで、電話に出る。」

「じゃあ、バットと付属品は君の部屋に送っておくから、部屋で確認したら連絡して。後、勝手に触っちゃ駄目だよ？ 死ぬかもしれないから」

「なあ、お前何送るつもりなんだよ!？」

電話越しで、まあまあと言われるが、数馬としては落ち着くに落ち着けない。死ぬかもしれないと言われた時点で、落ち着くことが不可能だ。

「とりあえず、それは後で。で、最後に確認するけど」

「いや、そこは重要なんだからさ………まあ、良いか。で何だ？」

「五和ちゃんとは上手くやってる?」

数馬は噴き出してしまった。何故、こなたが知っている。というか何でそんなことを聞くのだろうと非情に疑問に思った。

「な、何言っているんだよ!!五和とは、そんな付き合ってるとかそう言う訳じゃないぞ!!第一、まだ約2日しか経っていないのにそれは無いだろう!!」

「えっ、ちよつと……もしかして、気付いてないの?」

こなたが驚いたような口調で聞いてくるが、数馬は何を言っているのか分からない。

「何がだよ?」

「ええ、あんだけ頑張っていたのに、本人は気付いていないの!? そりゃないよ……普段、彼女欲しいとか言っているくせに、意外と鈍いんだね……」

よく分からないが、こなたにバカにされているので、数馬は少し怒る。

「おい。鈍いとは何だ!!失敬な!!」

「あのさあ……私が何を言ったのか覚えている?」

言い返すと、入れ替わりに質問をされる。数馬は戸惑ってしまった。

「えっ？いや……………なんだっけ？」

電話越しでも分かるような、深い溜息をこなたはついた。

「……………確か言っただよな？君が出かける前、でかいフラグを一本立てておくって」

「あっ……………」

「こなたの一言で、すべてが思い出された。そして、顔が真っ青になる。」

「お、おい……………じゃあまさか……………」

「そうです、五和ちゃんに立てました！……！」

数馬の顔が真っ青を通り越して、蒼白となる。

「いや、ちょ、いや、ちょ……………はいいいあけづdjskfはうえ9い!?!?」

「いや、君、何て言っているか分からないよ？」

呂律どころか、口さえ上手く動かない。慌て具合が面白いと言えば、面白い。

「……………マジかよ」

「えっ、何、その嫌々な反応……………もうちょっと喜ぶとか出来ない

の？」

「そりゃあ……………喜べるけどさ……………でもなあ……………」

数馬の反応は、どう見ても喜んでいるようには見えない。むしろ、悲しんでいるように見える。

「もしかして、五和ちゃんは嫌い？」

こなたの問にはすぐに、否と答える。

「いいや、むしろ大好きだよ。あの純潔さ、素晴らしい美貌、抜群のプロポーション、スキルの高さ。一体、何回（すべて）  
禁 発言 ですよ 検閲に より

削除）しようと思ったか」

欲望をすべてぶちまけたような発言に、こなたは引く。が、それなのに、何故嫌そうなのが分からない。

「じゃあ、何で？」

「いやさ、今までフラグ立てることに熱心だったわけだが……………あれだよ、本人の意志を無視してしまうのは、どうかって思えてきてな……………」

「本人の意志？」

本人の意志、つまりは何かをしようとする時の心持ちという事だ。それを無視するのが、彼は嫌なようだ。

「そう、例えるなら……これ使って良いネタなのか分からないけど、同人弾幕シューティングゲーム東方紅魔郷、Extraステージボスの妹様と言えば分かるかな？の妹様は、気が触れているとして地下室で監禁されてしまっていた。」

これこそ、本人の意思を無視した行為といえよう。多分、彼女だつて外に出たがっていただろうし」

「いや、それは妹様が気が触れていたから……」

こなたが異論を唱えるが、数馬はすぐに言い返す。

「気が触れているからといって、それを閉じ込めてしまえば改善は出来ないだろう？それじゃあ臭いものに蓋をするような事だ。それではいけない、いつそのこと、外に出せばいい。そして、様々な事を学ばせ、そして、様々なところを治していけばいい。」

もちろん、理想論だというのは分かっている。だけど、やらないよりはやる方が良い。もしも、俺がそこにいたとしたら間違いなく率先してその役目を受けつかまつろう。

可愛い女の子は正義なのだから」

「最後、若干自分の欲望が入っていたよね？」

こなたが一応突っ込むが、数馬は反応しない。反応するよりも何も、聞いてすらないようだ。

「と、話はそれだな。とまあ、俺はやっぱり本人の意思を無視して自分の思いがままにしてしまうのは嫌だ。だったら、自力でやってやるさ。ま、五和は上条が好きだつていう設定だったし、無理だとは思うが。とりあえず、フラグは壊してくれ……自分勝手ですまないが」

しんみりとした口調で、数馬は言うがこなたとしてはそう言うわけにはいかなかった。

「いや……………そう言われても、フラグ壊すも何も、五和ちゃんの意味を弄っているわけじゃないよ?」

「はい?」

予想外の答えが返ってきた。それだけ、たったそれだけ。だが、驚きの回答だ。

「フラグ立てたっていうのは、説明すると、不安にさせるかもしれないと思ったから岩中ってけど、チャンスを立てたっていうものだよ。

それを折るか、それとも太くして最高の結果を生み出すかは君次第なんだ。

フラグを太くしたって言うのは少し丈夫にしたって事。それでも簡単に折れちゃうんだよ?

で、その五和ちゃんとのフラグはまだ折れていないし、むしろ太くなり続けているから……………これは君が五和ちゃんを惚れさせたんじゃないの?」

「……………」

数馬は何も答えられない。つまりは何だ、全て空回りだったと言うことなのだ。それを知った彼は、安心よりも先に恥ずかしさが勝まさった。何を先ほどまで熱弁していたのだ。

「ん〜君が何にも言えなくなっているみたいだから話題を変えよう

か。とりあえず、君の部屋に向かって」

「あ、ああ……………」

部屋に戻る途中、こなたからは弾薬を送つといたと言われ、階段では五和と鉢合わせしたりもした。その時は、数馬も彼女も双方、色々聞かされていたので赤面して目を合わせられなかった。

そして、そのまま何となく、と本人達は思っている、挨拶を済ませて別れた。

「いや〜良いね良いね〜」

「やめるその言い方。腹が立つ」

と少しばかり言い合いをしながらも、部屋に付いた。

「あ〜念のため気を引き締めて行こう」

「だから何を送ったんだよ!？」

とりあえず、部屋に入る。

そして中には凄まじい量の黒い煙が。

「やめようぜ、本当に……………何をもって話だけどさあ」

「あ〜そっちの様子はひどそうだね」

酷いも何も、部屋中が嫌な臭い、例えるならば塩酸、と煙に包ま



れている。此処は一体何処だと言いたい。

「部屋の中に入るにつれて、肩が重くなっていくなだが……………」

「それぐらいだったら大丈夫だよ。あつ、でも他の人には入れさせない方がよいね。即死の恐れもあるし」

「だから何でそんな物騒なの？」

奥の方に行くと、ソファの隣に十字架の模様が付いた箱がある。まるで何かを封印しているようだ。箱を開けてみなければならぬのだろうが、数馬としては開けたくない思いだ。というかこのまま捨てたい。

「でかいな……………」

大きさは1.5m四方。色々な物が入っていそうだ。

「あつ、じゃあ開けてみて」

「……………嫌だけどな」

箱と同じく、かなり大きいふたを外す。開けた瞬間に、地獄のそこから聞こえるような叫び声があったが彼は気にしない。

「どれどれ？」

中をのぞき込んでみる。

一番最初に目があったのはヨーロッパ中世時代にありそうな鎧だった。しかも、一式すべて揃っている。

鎧などは皆無で、綺麗な一品だが、何かがおかしい鎧だ。

「いかにも曰く付きな鎧だな」

「説明は後でちゃんとするから、次を見て!!」

鎧の隣には上着とその下に着るシャツらしき物がある。見てくれは、ナチス・ドイツ第三帝国の軍服だ。だが、問題は色だ。本来だったら黒と灰色等の色が使われていたり、黒だけだ。しかし、これはすべてが赤黒い。本当に、すべてが赤黒い。何処かで見えた事のある、そう、何処かで見えた事のある色だ。

「なあ、これなんだよ」

「さあ次々!!」

最後にあつたのは、バットだ。これもこれで、おかしい所は多々ある。

まず最初に、釘バットであるという事。釘バットというのは見た目は凄いが、実際には格闘戦に有効かどうかは疑問視されている。軍人、ギャングなどは使っていないという。

次には、これもまた赤黒いという事。バットの先端部分からグリップの最初らへんが赤黒くなっている。

「……………全部見終わったぞ。説明を頼もつか」

「うん、分かったよ。じゃあまず最初に鎧、正式には全身を覆うプレートアーマーっていう物の方から」

## ドイツ農民戦争。

### 中世ドイツ。

マルティン・ルターの「95ヶ条の論題」から始まった宗教改革は、ドイツのあらゆる階層に深刻な影響を与えた。ローマ教皇と結ぶ神聖ローマ皇帝の集権化に反発する諸侯はルター派に転じ始め、没落しつつあった騎士たちは教会領を没収して勢力を回復しようとする反乱を起こし、教会や諸侯の抑圧に苦しんでいた農民も各地で反乱に立ち上がった。

この戦争が始まる少し前に、ある反乱が起きた。

騎士戦争である。

先述したとおり、没落しつつあった騎士達が勢力を回復させるために起こした反乱だった。

反乱に参加した者で、とある騎士がいた。この騎士、家系は古いが何分にも貧乏なにぶんだった。このままじゃ家族を養うことなんぞは出来ない。

そんな時に、フランス・フォン・ジッキンゲンという騎士からの使いが反乱を起こすから手伝えと言ってきた。上手くいけば貧乏から抜け出せる。家族を救える。そう期待した。

騎士には子供がいた。まだまだ小さい、将来が期待できる子だ。その子のためにも、騎士は反乱に参加した。

惨敗だった。1年間続いた反乱、最初は騎士達が奮戦したが、相手

方の数が圧倒的であった。そこら辺は考えるべきだったのだが、残念ながら、必死だった騎士達にその考えはなかったようだ。

あの騎士は最後まで戦い続けた。奇跡が起こり、そして、また家族の元へ帰れることを信じて。

だが、神というのは無慈悲だ。奇跡なんぞは起きはしない。騎士の肩を矢が貫く。バランスを崩すと、すぐさま剣が刺さる。騎士は最後まで剣を振り上げようとする。

が、それも叶わず、最後に槍を突き刺され騎士は死んだ。

鎧は血に染まり、騎士の怨念が深く残った。そう、永久に消えない怨念が。

「とまあ、こんな話だよ」

「なあ、今の話ネタだよな？んな鎧、着たくないし、着るのが申し訳ない気がするわ！！」

話を聞いた後に、今一度鎧を見ると、怨念というか負のオーラがあるようだ。数馬は思えてきてしまう。初めからこんな話だと、残りの2つも碌な物じゃないと彼は不安になってきてしまった。

「の、残りの2つは？」

「あ、じゃあ……………その軍服についての話にしよう」

時は変わり、1945年5月1日。ベルリン。

ドイツ第3帝国はすでに崩壊の時を迎えていた。ソ連軍の攻勢は圧倒的、対するドイツ軍は絶望的な戦いを強いられていた。

ベルリンの街は廃墟と化しており、住民は地獄の思いをしていた。

その中、1人の老婆がまだ壊れていない自分の家で1つの服を直していた。

老婆には1人の孫がいた。孫の父親、老婆の息子にあたる、は戦場に駆り出され戦死、母親は臨時的な看護婦としてベルリンの仮設医療施設にいるはずだ。

そして、孫自身は国民突撃隊、民間軍事組織の類である、言うなれば学徒出陣にも似た物に徴兵され戦場の真っ直中だ。

老婆は、砲弾が炸裂する度に震える手で一生懸命に、誰のかわからない軍服を縫い直していた。

と、ここまでが老婆の事を書いたが、それは彼女がそう思っているだけのこと。実際にはこの老婆には

孫も、その母親ももういない。

2人とも、すでに死んでいる。老婆はそれを知らないだけ。知らないまま、何よりも大切な孫のために服を縫っている。

軍服は誰のかは知らないと言ったが、若干ボケが入っている意図とパワフルな老婆なので、どこかの戦死した兵士からはぎ取ってきたのだろう。

飯？そんな物、もう2日間は彼女は食べていないだろう。それでも、老婆は手を動かし続けるのだ。

近くでは、避難する住民、撤退する兵士が沢山通る音がする。だが誰もこの家は素通りしてしまう。とうとう、そんな音も聞こえなくなってしまう。

老婆は孫が帰ってくると思いついていたので、逃げようとしなかった。チクチクと、軍服を縫っている。チクチク、チクチクと。

もう、何時間経ったことだろうか？老婆の手はすでに限界に近づいていた。と、ここでついに、軍服が縫い終わった。とうとう出来たのだ。老婆には喜びの感情が芽生えた。

その時、ドアを荒々しく叩く音がした。ドンドン、ドンドンと。

老婆は思った。孫だ、孫が帰ってきたのだと。彼女は老体に鞭打って、ドアに近づいていく。

外からはよく分からない声が聞こえるが、老婆には考える能力がほとんど欠如し欠けており、友だちか何かだろうと決め込んでしまった。

それよりも、一刻も早く、孫に会いたい。その一心だった。

老婆は、ドアノブに手をかけた。孫の顔が見られる。そう期待した。

そして、ドアを開けた。

同時に、扉の前に待ち構えていたソ連兵が、無慈悲にも P P S h  
- 4 1 短機関銃の銃声を響かせる。

その銃声と共に、老婆は倒れた。腕に、己の血で赤く染まった縫い直したばかりの軍服を持ちながら。

「という話だよ」

「本当に救いのない話だな!!!」

希望という物が一斉無い話を聞かされて、数馬はもう鬱気味だ。

話の内容から察するに、この軍服とシャツの赤黒い色は、血が乾いた後に残る色という事になる。

あまりにも、おぞましい一品だ。

「でも、実際にソ連軍による民間人に対する虐殺行為は酷かったからね」

「俺も知ったときは本当に身の毛のよだつような思いだったけどな」

意外と知られていない事だが、ソ連軍によるベルリン市内での行動は本当に悪魔のようだったと言われている。

特に酷かったのが女性に対する強姦だ。これはベルリンで逃げ遅れた女性、最低でも200万人が被害を被ったという。

と、そんな歴史談義はどうでも良い。

「で、後はその釘バットだね」

「これは何処かの紛争の時の代物じゃないのか？」

「おっ、鋭いね。これはルワンダ紛争の時に使われていたんだ」

予想が少し当たってしまった事に嘆く数馬。

ちなみにルワンダ紛争というのは、アフリカ中央部にあるルワンダにおいて、1990年から1994年にかけて、フツ系の政府軍及びインテラハムウエとツチ系のルワンダ愛国戦線との間で行われた武力衝突である。

「……………薄々、分かるんだけどな。これが使われていたのって……………」

「そう、ルワンダ虐殺の時だよ」

数馬は話を聞く前から嫌な予感しかしなかった。ルワンダ虐殺、これは上述したルワンダ紛争末期にて起きた大量虐殺事件である。大雑把に言えば、虐殺したのはフツ族（過激派等）であり、虐殺されたのがツチ族と穏健派のフツ族である。



この虐殺による犠牲者は、50万から100万程度だと言われている。

数値から普通に考えられるが、その中の話は残酷で、胸くそ悪くなる話が多々ある。

代表的なのは、ツチ族の赤ん坊が大量に殺され、その後遺体が発見されたという話だろう。

「その系統の話はご遠慮願いたい……………」

「でも、何も知らずに付けるのは嫌でしょ？」

こなたの言うことに、彼は反論できない。実際、得体の知れない武器をそのまま装備するには抵抗を覚える。

「まあでも、話が長くなつたし。簡潔に説明するね。

ルワンダでは、こういう釘バットみたいなのをマスっていう道具として使っていたんだ。本来だったら、刺さっている釘の頭の部分を削る必要があるんだけど……………急造した物だったんだろうね。そのままなんだよ。

それに、釘バットっていうのは寿命が短いからね。そんな急造品じゃあ長くは持たないはずだったんだけど……………」

それは、ルワンダ虐殺の間、とあるフツ族の人の手に渡り、数多くのツチ族を手にかけてきたんだ。詳しい話があるんだけどね」

「もういい。話さなくて良い。これ以上、重苦しい話は勘弁だ」

ふっと、彼は話を切る。話の内容がアレなだけに、これ以上聞く

のは忍びなかったのだ。

「そうだね。じゃあ、装備の効果を言うね」

「おう、よろしく頼む」

じゃあ鎧の説明から、と彼はこなたから装備の効果を教えて貰った。

「鎧は怨念の塊だから、効果としては大半の魔術を弾き返す若しくは、威力を半減させる等があるんだ。怨念っていうのは色々な物を壊すからね。例を挙げたら人格、精神、身体の正常性等があるけど、物理方面でも防御効果は高い。元々、そのために作られた物だし、変な物に材質が変化しちゃっているからその分耐久性も無駄にあがっている。

難点は重さで動きにくくなるっていう事なんだけど……………君の力だったら大丈夫だね」

すつと、数馬は鎧を持ち上げてみる。なるほど、彼にとってはとても軽い。悪魔の力万々歳というわけだ。

ただし持ったときに鎧から悲鳴のような声が聞こえたのだが、数馬はやむを得ず無視することにした。

「で、シャツとその軍服は……………攻撃力UPとかじゃないかな？」

「何で疑問系なのかを問い質したいね！！」

こなたも本当にこの2つはどんな物なのか分かっていないようだろうなり声を上げて考えている。



込んでいく様子を思い出すだろう。分からなくて、しかも気になる方はYouTubeでウィンターウォーと調べていただきたい。

「駄目だよ！！せっかくあるんだから！！」

「……………」

「とにかく、それを持っていれば暴走状態だとしても強いよ。……  
………ただし歯止めがきかなくなるかもしれないけど」

「もう、何も言えないよ。だから最後に1つ聞こう。何でこんな不吉な装備ばつかなんだよ！！普通、主人公だったら聖 剣みたいなものがあるだろうが！！」

半ば自棄になって聞いた数馬だったが、こなたは思いもかけないような真剣な答えをしてきた。

「あつ、それは君が半分といえども悪魔だから、そこら辺にあるような聖装備は相性が最悪なんだよ。それだから仕方がないね」

だが、そもそもな疑問もあるためそれも彼は聞いてみた。

「じゃあ何で悪魔にしたんだよ……………お前と同じ天使にしてくれればそつちで良い彼女探せたかもしれないじゃん」

「五和ちゃんフラ 「ごめんなさい冗談ですからお許しください」  
早いね…………… だけど、悪魔にした理由は結構深いからね。簡単に  
言えば……………」

悪魔と人間っていうのは至る所が似ている。例えば、強欲、残酷、

非情、自己中心的、愚劣、その他諸々。あっ、大半がそうなだけだから、違つのもいるけどね。ゼパルちゃんとか。

だから、人間を改造してパワーアップさせる時には悪魔を使用するのが一番成功率が高いんだ。確率としては86%程度だったかな。逆に天使とかの場合だと、30%以下だったりするからね。使えた物じゃないんだ」

なかなか複雑な事情を聞かされ、数馬はもう何も言えない。文句はすでに腹の中へ。

「とりあえず、そんな所かな。何か他に質問は？」

「……………もうない」

「じゃあ、そろそろ切るね。長くなっちゃったから。」

最後に、貴軍に勝利を、Siege Heil!!」

激励の言葉なのだろう、こなたの言葉にはなかなか勇気づけられる。使われている言葉はユダヤ人から総スカン喰らう言葉だとしても。

「まあ、結果に期待しとけ。Siege Heil!!」

と、こなたとの通信は終了した。使った時間は30分。通話料がえらいこつちや。

装備品（全部が呪い関係）はしょうがないので箱に戻して、出撃前に着ることにした。

「銃を使った方が良さそうな気がするが………せっかくだし、使ってやるっ」

そして後々、この決断を悔いることになるとは彼はまだ知らない。

午後5時03分

芸術劇場薄明座駐車場

「OK・こちらの戦力は約250人、正確には252人ですね？」

レンはローマ正教側の部隊長アニーゼ「サンクティスと会って初めから軍勢の状況を確認していた。

「そうです。ぶっちゃけ、こちらの方が人数的には優勢ってわけです」

質問攻めされるも、アニーゼもちゃんと答えていく。が、それで勢いが付いたのかレンは質問する数が増えていく。

「兵站は？また負傷兵に対する衛生兵の処置法などはしっかりしているんでしょうか？それと暗号表、乱数表などはこちらによこしてください」

とつとつ要求まで出してしまった。

「そ、それは機密事項ってやつですよ！！！！」

「それは困りますな。共同戦線を張るのならそれぐらいは教えてください。でなければこちらでも協力しません」

レンが鬼のような条件を言ってきたため、アニエーゼは喉が詰まり何も言えなくなってしまう。

天草式に対して苦戦しているときに、天の助けとばかりにイギリス清教から救援が来たのだ。それをみすみす返してしまうことは出来ない。

「う~~~~~……わ、分かりやしたです。ほら、持ってけ！！！」

懐から出した暗号表、乱数表をレンに渡す。渡された表2つを彼はじっと見る。

「ああ、偽物じゃないですね。安心しました」

「し、失礼なこと言っただけじゃないです！！正真正銘の本物に決まっていますよ！！！」

渋々渡した機密事項が偽物と疑われたのだから、アニエーゼが怒るのも無理はない。

横では上条と他2人が話し合っている。

「お、おい。暗号表なんて大層な物貰っちゃって良いのかよ？」

「あれは今回の作戦限りで使用する物だろう。一回こっきりしか使わないから問題は無いさ」

「でも、レンはまだまだ要求するつもりみたいなんだよ」

インデックスの一言に、2人の顔は真っ青になる。見れば、本当にレンは更なる要求をしていた。

「じゃあ次は部隊の編成表をいただきましょう」

「それは絶対に駄「協力しなくても良いんですか?」……………くそが!」

すつ、とまたもや懐から5枚の紙を出す。レンは直ぐにそれをとってしまふ。

「おお、これは別に偽物でも良かったんですよ?」

「な、何を今更言ってるんですか!」

ケタケタと笑うレンに、アニメーゼは怒り心頭だ。上条達も心配そうに見ている。

「あれは……………良いのか?」

上条が心配そうに聞くと、ステイルも苦々しい顔をしている。

「アレはちょっと貰っちゃ不味いような気がするね。面倒くさいけど後で僕が返却しておくよ」



編成表というのは司令部などの重要人物の名前、全部隊の配置などが記載されているので、これを貰うのは不味い。絶対にローマ正教は怒るだろう。

「こ、これ以上はぜってえに教ええないです!!!」

怒るアニエーゼとは対照的に、レンは非情に満足げだ。意地悪そうな雰囲気がすっと消え、にこやかな表情になる。

「いいえ。これ以上はもう大丈夫です。ありがとうございました。ごめんなさい、酷い事しましたね」

彼はすつと手をアニエーゼのスカーフに乗せ、なでなでする。背の高さのせいか、兄妹に見えてしまう。

「な、や、やめろってんです!!!そんなことしないでいいです!!!」

「おや。これは失礼しました、お嬢さん」

「お嬢さんじゃないですよ!!!アニエーゼです!!!」

「おお、それはごめんなさい」

しかし、レンの手はまだアニエーゼを撫でている。謝ってはいるが、やめる気は一切無いようだ。

「おい、急に態度が変わったな.....」

上条達も横で見ているが、先ほどの態度から一転して紳士になっ

ているという不思議さがある。

「おや、おかしいな。普通、レンだったら舌戦の場合、後10分はネチネチと責め続けるんだけど………相手が子供だからそれもあるのか？」

「へ？どういう事だよ、それ」

「あいつは子供好きだからね………少しいじめたら可愛くなってきたんじゃないのか？あの部隊長が子供だと言うことには変わりはないし」

「………俗に言うロリコンか？」

上条、爆弾発言。少しは自重しろとスタイルは思う。

「それはどうかな？本当に世話をするのが好きらしいし」

「へへへ………そついやインデックスもレンに世話して貰ってたな」

「うん！！すつごく楽しかったんだよ！！！！」

満面の笑みのインデックスから、よっぽどかわいがって貰ったのだらうと上条は分かった。子供好きというのも本当らしいとも理解した。

で、レンとアニメエーゼの方はというと、彼はまだ撫でていた。

「あへへもう、いい加減にしゃがるです……！！」

ついにアニメーゼが腕を振り回し本気で怒り出す。と、彼女は背の高さを少しでも補うために………ではなく、おしゃれのため、チヨピン（30cmくらいのコルクの厚底靴）を履いている。そのため、たびたびバランスを崩したりしているのだが、此処でその弊害が出てしまった。

腕を振り回した所為で、一気に靴のバランスは崩壊。前のめりのこけることになってしまふ。

「へあ!？」

が、目の前にはレンがいるので、地面にまでは行かず、そのまま彼に当たってしまふ。

「うぐう!?!」

「おおっと」

つまりは彼に抱きついたような感じになってしまった訳だ。

「大丈夫ですか？」

「う、う、う、うっさいです!?!」

まるでツンデレお嬢が恥ずかしがるときのリアクションとそっくりな言動のアニメーゼ。レンは全く気にしていない。

「そのぐらい元気だったら大丈夫ですね。顔は痛くないですか？」

「大きなお世話だってんです!?!このぐらい平気です!?!」

やはり、見れば見るほど兄妹に見えてきてしまう不思議。上条達もただただ苦笑。

「あいつ、優しいから結構女にもてそうだな。うらやましいぜ」

「とうまが言えた義理じゃないかも。絶対に」

「それは僕も賛成するね」

上条の一言には2人がすぐ否定をしたが。

無駄に話は延びたが、この後は真面目に状況の説明受け、ついで包囲網の突破出来る危険材料である大日本沿海與地全図と縮図巡礼の事をインデックスから教えてもらい、その魔術が使用可能なポイント、つまりはパラレルスウィーツパークスの事もインデックスは言ってくれた。

数馬としては本当は迷惑な事をしでかしてくれたと思っているだろう。（それでも彼女の可愛さによって許してしまうはずだが）

ちなみに、アニメでは移動魔術として少ししか説明が成されていないなかったこれだが本当はもう少し細かい。

#### 大日本沿海與地全図

モノは日本地図そのもの。だがあまりの精巧さと伊能忠敬の魔術技術が、偶像の理論の逆利用によって日本各所に『渦』を付け加えた。彼が地図に書き込んだ四九の『渦』は、使用条件を満たせば他の『渦』へ一瞬で飛ぶことを可能とする。

発動には特別な準備が必要で、それを満たすことによって午前0時から5分間だけ移動魔術『縮図巡礼』使用が可能となる。

『渦』の大半は看破されており、建造物等で潰されているものも多  
いが、それは逆に言えば半分は未知のままであるということでも  
ある。 天草式はこれを所持しているため未だにその本拠地を割  
り出されていない。

『渦』は、発生しているのであれば幻想殺しで触れることで消す事  
が可能。

と、こんな感じだ。 ソースは、とある魔術の禁書目録 INDEX  
から。

「ここまで話し合いましたが……………一端、休息に入った方が良い  
ですね。こりゃあインデックスちゃんにも酷すぎる」

レンの発言に、みんなが同意したい雰囲気醸し出す。 アニエー  
ゼも同意してくれた。

「そうでやんすね。それでは皆さんはとつとつ、あちらのテントで  
休んでください。ですが……………あんただけは部隊の編成表とか渡し  
ただから、話に付き合ってもらおうですよ」

が、アニエーゼも先ほどの事をまだ恨んでいたのか、レンにだけ  
は自分に付き合えと言ってきてしまった。

上条達は面倒くさいので、テントの方へ言ってしまう。

「ははっ、そりゃあ結構なことだ。僕は全然構いませんよ」

それでもレンは全くこらえた様子が無く、アニメーゼもおもしろくない。

「くっ、じゃあどつと話し合おうじゃないですか!?!」

「ちょっと待ってください。今すぐ紅茶とビスケット、それとテール、用意しますから」

彼はそう言うと、パチンと指を鳴らす。

すると、何故かたちまちの内に、レンの40cmとなり、長い(と言ってもアニメーゼが肘を付けるぐらいの高さ)一本足テール&カップに淹れてある紅茶&甘い香りのするビスケットが現れた。

「ちょ、な、何でこんな物が」

「手品ですよ。驚きました?」

手品にしては凄すぎるという物だろう。

「こんな物がこんな所にあつたら邪魔つたらありゃしないんですよ!?!」

「おや、じゃあいいりませんか?」

紅茶は湯気を上げ、香ばしい香りを上げている。ビスケットは美味しそうだ。

「い、いや、そういうわけじゃねえってんですが……………」

「じゃあいただきますしょう」

駐車場でお茶をしながら話し合いというシユールな光景だが、ア  
ニエーゼとレンは意外と楽しがりながらも、話をしていた。

午後7時21分

思ったよりも長いこと話し続けてしまったレン。アニエーゼもぐ  
だぐだ言いながらも紅茶とビスケットは美味しかったのだろう。ま  
た誘えという後台詞も残してくれた。

「さあて、僕も少し休むとしますか……………つてあれ？何だ？」

テントだらけの駐車場を闊歩していると、1人の背が高く猫目シ  
スターが背が低い三つ編みそばかすなシスターを叱っているとこ  
ろを10m離れたテント近くで見つけた。しかし、どうやったら彼の  
目は10m離れた2人の女性の特徴が分かるのかは謎だ。

とりあえず、彼はどうしたのかと気になったので近づいてみるこ  
とにした。

「どうしましたか？」

話しかけたとたんに、きつと背の高い方から睨み付けられてしまった。これにはレンも驚く。

「何でしょうか……………」

敵愾心丸出しで回答されても困るというもの、背の高いシスターにレンは、どう言おうか悩んできた。

とりあえず彼は無難に質問していくことに。

「何かあったのですか？こちらはイギリス清教から派遣された者です。お手伝いできることがあれば何なりと言ってください」

「……………異教徒ではないのですね」

異教徒という言葉聞いたとたんに、レンの顔が険しくなる。幾度も異端児やら何やらと言われてきた彼にとっては聞きたくない言葉なのだろう。

「その異教徒っていう言葉は僕が最も嫌悪する言葉なのでやめていただきたいですね。まあ無理に止める気はさらさら無いですが。でいかがしましたか？」

「……………いいえ、別に結構です。私達でやれます」

「えっ、でもシスタールチア……………手伝って貰った方が楽なんじゃ……………」

「シスターアンジェレネ！！あなたにはシスターとしての自覚はあるのですか！！シスターというのは自ら苦行に赴くというのが……………」



…」

「またもや説教が始まってしまふ。レンも口を出してはいけな  
いと悟り、聞こえてはいないだろうが失礼しましたと言  
い、去ってしまった。」

「……………シスターってのも大変なんだな」

「そうですね。そりゃあ神に仕える身ですから」

「テントに戻ると、レンは上条に今回の軍事情勢と先ほどの事  
などで話をしていた。」

「神に仕えるって言うてもさあ……………」

「上条の目が横で寝ているスタイルに向けられる。思わずレンも  
噴き出すしてしまふ。」

「ま、まあスタイルの場合はあれでもちゃんとしていますから。  
見た目はマフィアですが」

「だよな。あいつの見た目、どっからどう見てもヤクザにしか見え  
ん」

「またまたくだらない事で話に花を咲かせている2人。ちなみにイ

ンデックスの風呂イベントは起きずじまいだった。多分、数馬だったら歯がみしていたろう。

午後9時01分 テント前（ちなみに、パラレルスウィーツパークスに向けての出撃は10時30分から）

上条達が就寝した後、レンは寝付くことが出来なかった。9時という時間帯が、夜襲準備の時間と思わせるのかしばしば眠れない事があるのだ。

しかし、他の人を起こすのも申し訳ないので、1人テントに出てチョコレートフォンデュを作っていた。

「やれやれ、1人でこんな事していると虚しくなりますね」

どうやら小型のバックの中に入っていたようだ。彼は軍用の小型ガスコンロ、大きめの皿1枚、小型の皿2枚。そしてチョコレート10枚と食パン8斤入り×2、最後に串2本を用意していた。小型のバックにそこまで入るのは謎だ。

小型コンロで、大の皿に入れたチョコレートをコトコトと煮ている。もくもくと湯気が立ち、甘い香りが広がっていく。

「インデックスちゃんが起きてもししは大丈夫でしょう」

そのことも考慮して、パンは多めになっている。が、風向きから

かインデックスには臭いが行かないようだ。起きては来ない。

「寂しいですね……………ま、食べますか」

ドロドロに溶けたチョコレートに串に刺したパンを付ける。それを小型の皿で受け、少しさますと、彼は一口で食べてしまった。

「……………うまいですね」

やはりというべきか、美味しい。ただやはりというべきか、彼に寂しさが襲ってくる。

「……………」

黙々とパンをチョコレートに付けて食べていくレン。ずっと昔、人の骸しかない荒野でこれを行った記憶がよみがえる。思い出して彼は溜息をつくが。

「……………ん?」

少し外灯で照らされているこの駐車場。明かりを照らす道具もいくらか使われているが、それでも暗い。

その暗がりの中、隣のテントの物陰からこちらを見ている人がいる。

暗くてよく見えないが、背は小さい。まだ子供のようだ。レンは不審に思い、声をかけてみる。

「……………どうしましたか?」

それは彼が声をかけたとたんに、ビクツと震え、テントの物陰に身を隠してしまう。

「……………大丈夫ですよ。何もとって食おうなんて事をするわけじゃないですから。どうぞいらっしやい」

レンが優しく、と言っても彼の優しい声なんて気持ち悪い以外の何者でもな（ry、それに来るように言う。

すると、それは少しずつ、ゆっくりと近づいてきた。そして姿が見える距離まで来ると、誰だか分かった。

先ほどのシスター。たしか、アンジエレネと言っただろうかとレンは思い出す。

「おや、あなたは……………どうかしたんですか？」

「えっ、いや、そのお……………」

恥ずかしがる素振りをする彼女は愛くるしく見える。レンも笑顔になってきた。

と、アンジエレネの視線がチョコレートフォンデュに向いている事に彼は気付いた。

チョコレート甘い香りで誘われてきたみたいだ。

「なるほど……………食べますか？」

レンが言うと、アンジエレネは満面の笑顔になった。

「えっ、良いんですか？」

「どうぞどうぞ。どうせ余りそうでしたから」

レンがOKを出すと、彼女は彼の隣にちょこんと座った。レンは最初にすでにパンがさしてある串と小皿を渡す。

「食べ方は分かりますね。チョコレートに付けるだけで良いですよ？」

「は、はい……………」

アンジェレネは少し危ない手つきながらも、パンをチョコに付けて食べてみる。そしてすぐに幸せそうな笑顔になってくれた。

「はうあゝ美味しいのです！！」

「それはそれは、嬉しいです。どれ、僕も……………」

またレンも一口食べる。不思議と先ほどよりも旨いと彼は感じた。

「さあさあ、まだまだありますからもつと食べてくださいね」

「はい！！」

暗闇の中、小さな火にいる2人。食べつつ和やかに楽しむその姿、まさしく家族そのものなり。

と、この夜食タイムはルチアがアンジェレネを探しにここに来る

までの20分間続いた。

色々とルチアにこつてり絞られたりもしってしまったが、彼はなかなか充実した時間を取れただろう。

午後9時30分 パラレルスウィーツパークス 大広場

しんと静まりかえる夜。大広場には全天草教徒52名、そして妹達30名が勢揃いしていた。

「…………… 出撃前の最後の集まりみたいなもんか」

数馬はそれを目の前にして、建宮と御坂妹と共にいた。一心、軍師という立場のようだ。

「出来れば最後という言葉は使用して欲しくありませんとミサカは不吉な言動は避けるようにと諭します」

「おおつと、それは失礼した」

御坂妹が銃口を突きつけ指摘すると、数馬もさすがに謝る。彼女も神経質になっているのだろうか。

ちなみに御坂妹の場合は名前を付ける必要性がなかったのもそのまま御坂妹と呼ぶことになっている。

「とりあえず、作戦は各自確認していると思う。各員、それぞれが

奮闘するよう頼んだよな!！」

「「「「はい!！」」」」

前では建宮が全体に向かって全員に向かい、様々な用意の確認を話しており、それが経った今終わったようだ。

さて、もう終わりかと数馬が思ったとたんに。

「さて、じゃあ次は今回の軍師である数馬殿に、スピーチしてもらうよのな」

無茶ぶりも良いところな事を言われてしまった。

「……………はい?」

「ではどうぞ〜」

建宮に引つ張られ、数馬は全員の前に連れてこられてしまった。

「おい。どーして俺が話さなきゃならんだ!！」

小声で建宮に文句を付ける。が、建宮は臆することもなくひょうひょうと軽く言った。

「いやいや、こういう時にはお主のような恰好良い奴が演説的な何かをした方が良いでしょう。士気もあがるし」

「……………だからって……………」

ずっと目の前の教徒達を見ると、全員が全員、真剣な目をしている。ここでふざけてくれていれば適当に騒いであしらえたのだが、彼はその手も使えなくなってしまった。

「……………」

彼にもう、選択肢は残されていない。

「分かった。やろうじゃないか」

「それでこそ主だ」

やるしかないのだった。

建宮を下がらせると、数馬は背筋を伸ばし、つま先を少し広げる。

そして、目の前の教徒を見渡すと、ひどすぎたので没にした演説を、御坂妹と他2人のミサカが用意したマイクを使い、言い始めた。この時、俺というのはなんだかおかしいので、私という口調で彼は言っている。

「とりあえず、全員を視察したはずだから私を知らないというのは無いと思うが、数馬光太郎だ。今回、軍師を務めさせてもらった。

私は諸君とはまだ2日間も一緒にいない。まだ、私を信用出来ない方も幾ばくかはあるだろう。

私は確かにこの教徒ではない。だが、私はこの2日間にも満たないこの期間で、諸君を何回も見てきた。そして何回も世話になった。何回も助けてくれた。変で恥ずかしいことを言うが、優しさといふかなんというか、そんなものに触れられた。それなのに、私は此処



を裏切るといふことは出来ないだろう。絶対に出来ないだろう……  
……  
視察時に、諸君らのあの華麗なる技は、私には永久に出来ることはないだろう。それほどだった。

それでも、諸君は一切鍛錬の手を緩めず、何回も何回もやり続けるその様子は、まさしく本当の勇士とも思える。

そう、私は諸君らを一騎当千の強者と確信できたのだ！！

敵、ローマ正教はこちらよりも圧倒的な兵量である。だが、諸君らは必ず撃破出来ると私は信仰している！！

諸君は奴らの目的を知っているな？オルソラ「アクイナスの抹殺だ。彼女は今、頼れるのが我々だけになってしまっている。」

諸君は、諸君は彼女を、オルソラを見捨てる事が出来るか！！  
！いいや、出来ないはずだ。

あの悪逆非道な奴らは、自分達の利権のためだけに、たった1つの命を消そうとしている。

奴らは、その上、この天草十字教自体も破壊しようとしている。

それは、断固として許されることではない！！！！

私は何としてでも、彼女と、諸君らのこの宗教を守り通したい。だが、私だけではどうしようもない、すぐに押しつぶされてしまうだろう。

どうか、諸君、私に協力して欲しい。諸君らの力を、私に貸して欲しい！！



「……ん、いや、ただ単にぶつちやけたただけだ。たいしたことじゃない」

「そうだとしても、私はあの演説通りの現実を見たいです。とミサ力はやる気を出して言います」

「ああ………そうするさ、必ず」

時は来たり、決戦の時は近い。

全軍激突まで、残り40分。

オルソラ奪還戦争・大激戦「前編」(後書き)

すみません。何から何までひどい文章ですね。本当にどうにかしたい。

後半は直ぐに出したいと思います。宿題がどうにかなれば必ず早く出します。なので待っていてください。

それと地震での被災地の皆様、大変だと思いますが、頑張ってください。私も募金などで応援させていただきます。

## オルソラ奪還戦争・大激戦「中編・大砲撃」(前書き)

皆様、本当に遅くなって申し訳ありませんでした!!!

### 注意事項

今回、おふざけが過ぎている箇所が多々ありますが、なにとぞ寛容な目で見てください。

挿絵はとても低クオリティーです。すみません。作者の腕が案外、落ちていたようです。目が腐るほど酷いです。

もう1つ。無駄にグロテスクな表現が後半は出てきます。ご注意ください。

オルソラ奪還戦争・大激戦「中編・大砲撃」

心地よい風が辺りを吹き抜け、野原の草はざわざわと揺れる。

丁度、膝の辺りまで伸びている草が生い茂る、その野原の中央に4人の子供達が遊んでいた。

4人は輪になり、歌を歌いながら回っている。

その歌声は、風に乗ってあちこちに広がっていく。

子供達の可愛いその歌声は、野原の周りを駆け巡り、幸せな空気（意味不明）が漂う。

R i n g - a - R i n g o , R o s e s ,  
A p o c k e t f u l l o f p o s i e s ,  
A t i s h o o ! A t i s h o o !  
W e a l l f a l l d o w n .

歌はもう、草原の何処にいても聞こえるだろう。耳を向けている人がいたとすれば、その歌を座って聞き入っていただろう。

だが、此処には人という物は存在しない。

子供達の声が、歌が、彼らを包む空気が、急に変わり始める。

声が、声は何もかもを恐怖に染めるように聞こえ始める。声はソプラノから暗いアルトへ。歌が歌われていくと共に、呻き声が聞こえ始める。

赤いはなわだ、みんなと一緒に

ビヨウキは嫌だ、花束持とう

ハックション！ ハックション！

結局、みんな、シンジャッタ

4人の子供達の歌声で、野原の草はすべてが枯れていく。それを止めることは、誰も出来ない。草はどんどん枯れていく。

午後9時37分

2分程度の数馬にとっては恥ずかしい演説が終了し、主要なメンバーは司令部に集合していた。

「作戦の最終確認を行う。全員、心して聞いてくれ」

数馬の一言で、建宮、御坂妹、天草教徒の諫早、野母崎、対馬、牛深、妹達<sup>シスターズ</sup>4名が彼に視線を向ける。

「とりあえずは作戦における部隊編成だ。今から配布する資料を見  
てくれ」

彼は手に持っていた5冊の冊子を御坂妹に渡し、順々に配布されていく。

全員が資料を受け取ったところで、作戦会議は開始された。

「とりあえず、最初のページに部隊編成が書いてある。それを見て  
くれ」

全員が資料に目を通す。書いてある内容は以下の通り。

#### 第1御楯隊

隊長 建宮斎字

副隊長 数馬光太郎



兵数 15名

第2御楯隊

隊長 諫早

副隊長 野母崎

兵数 16名

第3御楯隊

隊長 牛深

副隊長 対馬

兵数 16名

上記3部隊は今回の主力部隊として、ローマ正教部隊を攻撃する。

第5御楯隊 戦車部隊

隊長 博霊 霊夢（ミサカ17600号） 捕捉・特徴として、

赤色の軍帽を着用。

副隊長 霧雨 魔理沙（ミサカ16582号） 捕捉・特徴として

オレンジ色の軍帽を着用。

兵数 6名

第6御楯隊 援護部隊 第1、2、3、4部隊を射撃により援護する。

司令 御坂妹（ミサカ10032号）

隊長 八雲 藍（ミサカ13564号） 捕捉・特徴として水色の

軍帽を着用。

副隊長 八雲 紫（ミサカ14897号） 捕捉・特徴として紺色の軍帽を着用。

本当はこの2人の名前は逆の方が良いんだろっけどね。

兵数20名

上記2部隊は、補助戦力として行動せよ。

なお、第6御楯隊は敵側面（側面いっぱい）に花壇らしきがある（からの射撃に徹する事。  
敵陣に躍り出て戦果を上げようとする事を禁ずる。

第4御楯隊 守備隊 砲兵隊

隊長 河城 にとり （ミサカ17291号）

兵数4名+天草教徒5名追加

本拠地の守備を任せる。ついで、援護としての砲撃も行う。

名称に関しては部隊の混乱を避けるために、呼ぶ際にはこの指定された名前にすることを厳守せよ。番号だとややこしくなるので禁止。

「前線部隊の把握は良いか？」

数馬が言い終わると、早速と言つべきか御坂妹達から不満が続出した。

「おいちよつと待て、やつぱりこの名前は納得いかねえよとミサカは名前変更のための第1声を放ちます」

まず最初にミサカ17600号、仮名称博霊霊夢から文句が出る。それが伝染するように他のミサカからも不満が。

「やはり、この八雲藍は悪のりしすぎでしょう。絶対文句が出ます。とミサカはあなた自身に降りかかる災厄を心配します」

ミサカ13564号、仮名称八雲欄から心配の声か。

一体誰に文句を言われるのかサツパリ分からない。

「なんだよ。わかりやすい名前だろうが。覚えやすいし」

「それだけで決めるべきじゃないんですよ。とつとと名前を変更させろつってんだろつが東方厨が。とミサカは罵詈雑言を散々に言います」

次にミサカ16582号、仮名称霧雨魔理沙から文句が。とにかく口が悪い。妹達っていうのはこんな奴らだったのか？と落胆してしまつ。

ただ、東方厨と呼ばれたことに関して、彼は腹が立った。

「おまつ、東方厨とは失礼な！！俺だって礼節わきまえているよ！

！」

「……何処がだ。とミサカは声を他のミサカと八もらせながら突っ込みます」「」

だが4人に突っ込まれて数馬もすぐにひるんでしまいが、それでも最後まで抵抗する。

「お、俺は東方厨じゃねーよ……ニコニコ動画のバレットM82の動画で東方ネタ出した野郎とは違うもーん」

「ガキみたいな事言っているんじゃないよ。小学生か。とミサカはあなたに冷たく言い放ちます」

今度はミサカ14897号、八雲紫から罵声が。だから数馬としては妹達ってというのはこんな奴ら（ry

「畜生……じゃあ何だったらいいのさ？」

此処は試しにと数馬は引き下がって妹達の意見を聞くことにしてみる。こうすれば急な意見の要求におろおろして、そのままお流れ。名前はそのままという事に出来ると彼は考えたのだ。

「……えっ……とミサカは東方厨として頑固に名前を決定しようとしていたあなたの急な意見の要求に、戸惑いを隠すことが出来ません」「」

案の定4人とも戸惑ってくれた。数馬、心の中で歓喜。

「だろ？案がないならこれで……」

「だったらミサカは……：……エーリツヒ・フォン・マンシュタインが良いです。とミサカは最大の願望を叩き付けます」

「へ？」

ところがどっこい。神様は彼の思い取りにしてはくれないようだ。すぐに霧雨魔理沙から名前の要求が。

エーリツヒ・フォン・マンシュタイン。ドイツの名將軍の中でも無敵な人と同じ名前である。長い上に本人に申し訳ない。

「じゃあミサカはエルヴィン・ロンメルが良いです。とミサカは勢いに乗ってお願いします」

今度は八雲藍。ロンメル、多分ドイツ軍人の中では知名度は相当高いであろう人物を頼んできてしまった。ロンメルに申し訳ない。

「今度はミサカですね。そうですね、やっぱりミハエル・ヴィットマンが好みです。とミサカ一番のお気に入りと言います」

そして八雲紫から。 - 戦車138両 - 対戦車砲132門  
を撃破した機甲戦無双なる史上最強の戦車撃破王としか言いようがないチートキャラ、以上。

この名前が出てきた時点で、もう嫌になってきた数馬がいる。

「最後にミサカはハンス・ウルリツヒ・ルーデルを名前として使いたいです。とミサカは単刀直入に言います」

博麗霊夢から。

朝起きて牛乳のんで出撃して朝メシ食って牛乳のんで体操して爆撃機で出撃して昼メシ食って牛乳のんで出撃して晩メシ食って牛乳のんで出撃してシャワー浴びて出撃して寝るといふ毎日を送ってたら、何時の間にか戦車519両（歴代最高数）を撃破し、世界最強の戦車撃破王になっていた爆撃の魔王と呼ばれる軍人。

論外。

「何でみんなドイツ軍人？」

「伝統があるからでしょう。とミサカは勝手に結論づけます」

いや、じゃあ大和軍人にも立派な伝統があるのじゃなかという疑問が数馬に沸いたがあえて言わない。

「でもさ、そんな長ったらしい名前じゃあ覚えにくいだろ」

「それはそちらが頑張れば良いのでは？とミサカはそれぐらいしろよという気持ちを遠回しに伝えます」

そんな作戦開始30分前になって言われても簡単に変えることはできない。

だが妹達も頑固で、譲りそうにもない。仕方がないので数馬は天草メンバーに聞いてみることに。

「おい、エーリツヒ・フォン・マンシュタインと博麗霊夢。どっちが覚えやすいよ？」

聞かれた教徒達はすぐに答えることはせず、それぞれかなり悩むそぶりを見せる。

そこまで博麗霊夢は覚えにくいのかと数馬は全員に小1時間問い詰めたくなってきた。

「どっちかって言ったら、やっぱり博麗霊夢の方が良いんじゃないか？」

真っ先に口を開いたのは牛深。数馬は彼にGJのエアールを心の中で送った。

「FUCK・とミサカはあんたに軽蔑する眼差しをしながら罵声を浴びせます」

霧雨魔理沙が禁句を言ったので、数馬が叱咤する。

「魔理沙！！それは禁句だろうが！！うら若き10代が言っている事じゃない！！」

「うっせええんだよ。この厨が！！とミサカはそもその原因に向かって怒鳴りつけます」

ついに彼女が数馬に向かって暴言を吐く。それに彼も怒り心頭、とうとう切れ始めてしまった。

「な、て、てめええええええ！！誰が厨だ！！お前らだつて（以下、もう禁句のオンパレード）」

くで、作戦確認開始から5分がたった

「分かりました。仕方がないので霧雨魔理沙で譲歩しましょう。ただし、これが終わったらもう駄目ですよ。とミサカは本当に渋々と譲歩します」

「よし、分かったそれでOKだ。って、後27分で出撃じゃねえか」

もう、口頭で作戦確認をする暇も無いだろう。仕方がないので彼は全員に冊子のp132を見てくれと言って終了する。

#### 部隊の配置図

<http://2509.mitemin.net/i25041/>

#### 作戦目標

イタリアからの宗教団体の撃破(約250名)  
オルソラ・アキナスの脱出(上述している宗教団体に命を狙われている)

#### 上条当麻の救出

#### 作戦概要

作戦開始30分前、第5御楯隊は敵陣から200mまでに接近。この時、敵に気付かれたら全力で撤退。第4御楯隊に撤退の援護を。この場合は、プランBで行く。

作戦開始15分前に、第6御楯隊が出撃。敵陣側面のビルで待機。



(捕捉1：この時、第1、2、3御楯隊は遅れての到着となる。理由としては、戦車単独の方が移動時にいくら小回りがきく。周囲に人などがいると、たまに轢いてしまう事があるのだ。

他には敵に察知されないためにも出来るだけ駆動音を鳴らさないように、低速で行くためでもある)

(捕捉2 プランBとは：「あ？ねえよそんなもん」)

気付かれず、作戦開始時刻になったと共に第4御楯隊からの砲撃により、敵陣を攻撃開始。なお、1番砲塔は敵軍中央を、2番砲塔は周りを囲む廃ビルを破壊する事。(駐車場を覆っているであろう人払いのルーンを破壊するため。この系統のルーンは、一角を崩すと効果がなくなるはず)

砲撃が十数発に及んだらに第5御楯隊も駐車場入り口接近。戦車による侵攻を開始。

(補足3 周辺の住民について：ご都合主義なんぞはないので、無視することのできない事はあるが、「赤光の黒十字」がなんとかしてくれるはず。信じるしかない。最悪、周辺住民は無視してドンパチします)

第4、5の攻撃によって飛び起きた敵軍を、第6御楯隊が機銃掃射を敢行。敵軍の第1波を撃退。

この時点で敵の被害大であれば即刻、第1、2、3御楯隊が突撃開始。

(被害が少ないと思われる場合は砲撃を続ける)

このとき、第4御楯隊は砲撃を中止。第5、6御楯隊は攻撃を続行。

突撃した3部隊により、敵軍の殲滅を行う。  
捕虜の人権などは尊重し、丁寧に扱うこと。ただし、反乱時には  
処刑もかまわない。

第4御楯隊は、午前0時になり次第、オルソラIIアクイナスの脱  
出を完了させる。

「それと、演説前に全員に配った特殊弾の睡眠効果を無くす薬。し  
っかり飲んでおけ。誤射を喰らっても平気なはずだ」

演説後、大天使が忘れてたと支給してきた薬。作戦開始間近だっ  
たので大慌てで全員に配るはめになり、大変だったことを、彼は記  
憶している。

誤射を喰らっても被害が出ないのであるなら、しっかりと全員が  
飲んでいなければならない。

「大丈夫よな。それぐらい、全員しっかりと飲んでいるのよ」

「そうか……」

じゃあ、もう心配事は何もない。安心して、作戦に望めるだろう。

数馬は大きく息を吸うと、今一度全員を見渡す。そして、はっき  
りとした声で言い放った。

「よし………諸君、健闘を祈る。以上、解散!!!」

作戦最終確認終了。

午後9時50分 第4、5、6、御楯隊駐屯地

重武装である妹達の部隊は、最も広い中央広場を使用している。その一角、このパレルスウィーツパークの出口に近いところに2両の戦車は停車していた。

「……………ミサカの相棒はこれですか。とミサカは戦車を見ながら惚れ惚れします」

「そうですね。素晴らしい戦車です。とミサカは心を弾ませながら言います」

戦車隊である第5御楯隊は他の部隊と比べ、出撃するのは早くなっている。

で、そんな5名の妹達は、乗る予定である自分達の戦車をじっくりと見て、ほればれとしていた。

元々、こういう物を扱うことが多かった彼女達だ。何か魅力があるのかもしれない。

「おい。出撃するぞ！！とミサカは戦車の前でたむろしているミサカ達を急かします」

そんな所に、霧雨（ミサカ16582号）が、やってきた。彼女も一応、1部隊を指揮するのだ。なかなか威厳がある。

彼女の後ろには手伝いのため、天草教徒、牛深と2名がいる。

「やれやれ、もう出撃ですか。とミサカは名残惜しそうに戦車に乗車しかかります」

霧雨に急かされ、5名の妹達はすぐさま、キングタイガーの中に入っ  
つていった。

最後に残った霧雨も乗車しようと戦車の懸架装置サスペンションに足をかけるが、  
すぐに降ろして牛深の方に向き直る。

「……………どうした？」

不思議に思い、彼が近づくと霧雨は頭を下げてきた。

「先ほど、ミサカの感情のままにあなたに暴言を吐いてしまいました。  
た。……………ミサカも、本当に悪気は無いですので、どうか許してく  
ださい。とミサカは反省してあなたに深々と頭を下げます」

「えっ、あ、ああ……………」

なかなかツンツンしている女性が、急に謝ってきたのに、牛深は  
少し動揺してしまう。が、謝ってきたというのに許さないというの  
は悪いだろう。

「別に構わんさ。そんな気にしてなんかいないって」

彼が笑いながらそう言うと、彼女は安心したような表情をし、す  
っと手を差し出す。

「では、まあ出撃の際ですし、握手をさせていたadakたいですね。  
とミサカは手を差し出して、あなたに希望します」

「……………おう」

握手を求められた牛深は、少しどもりながらも手を差し出す。

大柄の彼にとって、霧雨の手はとても小さく、少しでも強く握れば壊れてしまいそうだった。牛深は優しく、彼女と握手を交わした。

数秒して、2人は手を解くと、霧雨はすぐに司令塔の所まで登り、半身を中に入ると最後にもう1度、牛深の方を向くと

「Wish your happiness!!!!とミサカは捨て  
台詞を残し、エンジンを始動させます」

あなたに幸せを、そう彼女は言い残り戦車を始動させ、出撃した。彼女の乗る戦車が動き出すと、後ろの戦車も後ろについていった。戦車とは思えない、静かな駆動音で、戦車は出口から外へ出て行った。

「……………そりゃあ、どうも」

残った牛深は、何か少し照れくさくなりながら頭をかくと、残りの2名と共に司令部に戻っていった。

午後9時48分 司令部内一室

時は少し戻り、数馬はというと。

「注射って1人で打つのは怖いんだな」

机に向かい、1人、注射器片手に、悩んでいた。

「畜生………医学免許なんてないのに、こんな事やっていいの  
かよ」

数馬は一応、注射の打ち方ぐらいは知っているのだが、怖い物は  
怖い。

「で、何でそんな注射なんぞ打たなきゃならないのかと言つと。」

「ほんとに、本当に、おかしくならんのだらうな………これで」

そう、発狂しないため、である。

いつぞやに、数馬が日本刀（雷切）を一定時間使うと狂うとして  
いた。実際には12分だった。

今回の戦。12分で片付くはずがない。で、狂った状態で戦い続  
けたら。

戦う 狂う 敵味方問わずに虐殺 when they cry

という地獄のようなシナリオが予測できてしまう。

そんなのはご勘弁、そう思ってくれたのか、わざわざ大天使が抑  
制剤を用意してくれたのだ。説明は他の薬を貰ったときに聞いている  
のだが問題がいくらかあるとか。

1、薬効時間が極端に短く、2時間しかない。

2、薬効時間以降、戦闘行動を行っている、反動として……  
(この後は教えて貰えず)

3、テンションが高くなる場合がある。(これに関しては確率が低いらしいので問題なし)

4、打ってから効果が現れ始めるまでタイムラグがある。平均的には30分。

欠点が多いものの、あるに越したことはない。彼はさっそく使うことにした。

「えっと………こつすりゃいいんだっけか」

注射を上手く打つには色々、こつがある。

一番いいと思う血管を選ぶこと。

失敗したら困るから、と思って2番目3番目の血管を選んでみると、失敗を重ねて悪循環になるとか。

見える血管より触れる血管。

目に見えない血管であっても、弾力のある、よく触れる血管には入りやすい。

血管の走行を指でよく確認して、走行にしっかりと沿わせて針を進めると必ず血管に当たる。

合流部は血管がずれにくく、二股になっている付け根の部分を狙うのは効果的。

しっかりと、そのことを思い出して数馬は、注射針を腕の静脈に打った。少し痛みが走るが、そのまま注入。

抜いた後、すぐに机の上に置いてあった絆創膏を打った部位につける。

これでお終いだ。

「ふう……………」

賢者タイムではない。

「さあて、次はどうする？」

1、オルソラの所に行く（時間としては出撃が10時10分なので少ししか話せない）

2、五和と一緒にオルソラの所に行く（五和に迷惑かもしれない）

3、2chを見る（パソコンが無い）

「1だな」

2、3はどつちみち時間から無理そうなので、諦める事にした。

「鎧とかは……………箱に入れていて良いだろ。出してたら酷いことになりそうだし。99式小銃は、まあこちら辺に置いておいて。さて、行くか……………ん？」

コン、と何かが足に当たった。下を見てみれば、それは木片だった。

木片と言っても、綺麗な物で、1辺5cmの立方体だ。何故にこんな物が落ちているのだらう。不思議に思っ拾うと、手が少し痺



れた。

「ん？」

急に痺れたのに少し驚いたが、すぐにそれは収まった。何故痺れたのかは分からないが、どうやらあまり良い物じゃなさそうだ。捨てようかとも考えた彼だが、何となく捨てるのも惜しく、ポケットの中にしまい込んでしまった。

「さあて、行くか」

いらぬ時間をくったと思い、数馬はさつさとドアから出ると、小走りでオルソラの元へ向かった。

同時刻 薄明座 アニエーゼ部隊 司令部テント

「今すぐにでも、軍を動かさねばなりません。早く、敵の位置を発見してくださいー！」

「そんなこと言っても、無理つてもんでやんすよ。相手方も、意外としつぽを掴ませないんすから」

司令部テントでは、レン・アキナス、アニエーゼ、サンクティス、他2名程度のシスターが、会議をしていた。

中央には机が置いてあり、半径15km内の地図がある。地図には所々、赤ペンで×印が書かれている。それがもう10個はあるだろう。

「Goddamn!!!」

未だに敵の所在は掴めず、時間は刻一刻と過ぎていく。本来だったらすぐにでも見つけられたはずなのだ。だが、それさえも叶わない状況になってしまっている。

何故か。

「……………やっぱり、赤光の黒十字がローマ正教に喧嘩ふっかけてきたのがこちらには痛いです。此処いらの、というか日本全国の情報網を握っている特別高等警察に依頼でもしたんでしょう。まさか、偵察隊が狙撃を受けるとは思いやせんでした。一応、周辺が住宅地ですから、あまり表だった戦闘行動が出来ないのが真実です」

「くそが、赤光の黒十字なんて、何で名前でも赤と黒なんてあるような矛盾した厨二臭い名前の組織に煩わなけりゃならないんですかね！！！」

レンの口調がどんどん荒くなっていく。……………アニーゼの口調がうつってきたのだろうか。

それにしても、よもや天草教から特別高等警察、言ってしまうば国家機関までをも敵に回す羽目になるうとはローマ正教も思いもやらなかつただろう。

特別高等警察、略称 特高 はアメリカで言うCIA（中央情報局）のような組織であるが、CIAと同じく、ほとんどその行動内容が公開されていないのだ。つまりは様々な汚れ仕事をやっているというわけで、妨害行動も行ってくるのだろう。元々、ローマ正教の輩というのは彼らからしてみれば怪しい宗教団体にしか見えないし。

「人払いのルーンも、人口が密集しすぎた広範囲には使えやせんし、参ったもんです」

「相手がゲリラじゃあ発見するのも苦労しますしね。もう、本当に面倒くさい……………」

「大人数で行けば、天草教徒に見つかるし、最悪、特高に見つかったら戦闘になりやすし。かといって少人数で偵察すれば、何か別々、5力所において同時にオルソラを見たという報告がされやすし………おまけに1部隊、廃屋に行くと言ったきり、帰ってきやせんし。最悪ですね」

考えに考えを巡らしても、状況は八方ふさがり。刻一刻と、時間は過ぎていく。

この状況、つまりローマ正教側は行動をほぼ制限されてしまっていると言ふことなのである。しかし、数馬達天草側はわざわざ彼らから一戦仕掛けて用としている。

何というか、様々な勢力の介入から天草側がわざわざ戦いを挑まなくても、メイティング・マテリアル、つまりは引き分けに、そしてさらにはオルソラを無事脱出させる展開に持ち込めるような状況になっていたのだ。

これは最も致命的な数馬の誤算だったであろう。

「河城ー！！とミサカはそこにいるミサカに呼びかけます」

「なんでしょうか、藍。とミサカはやっぱりこのコードネームはやこしいと思いつつも、呼びかけに答えます」

八雲藍（ミサカ13564号）は部下1人と共にサイズ大の台車2つを引つ張って、オルソラの護衛を務める河城の隊の元へ何かを持ってきた。

「……………なんですか、これは？とミサカはこの台車に乗せてある大量の木箱について質問します」

2つ台車の上には大きめ木箱が8箱、中ぐらいの木箱が5箱はある。

「いや、実は弾薬不足を数馬光太郎に訴えてみたら、補給が来たのですが、その時についてあった物なのです。とミサカは正直、扱いに困りながら説明します」

これだけの量の木箱、中に一体何が入っているというのだろうか？河城が木箱の横を見れば、削って書いたようにPanzerfaustとドイツ語で記入されている。

「中身は？とミサカは気になって聞いてみます」

すると、藍は少し不安げな顔をして、少し小声で河城に言った。

「……すべて爆薬入りの実戦兵器です。とミサカは答えます」

聞いた途端、河城の顔は真っ青なつた。

「……マジですか。とミサカは驚きを隠せずもう1度確認します」

「マジです。とミサカは揺るがない事実を突きつけます」

実弾、そつだとすれば一体なんだ？と疑問が河城には浮かび上がる。

「弾薬の種類は？とミサカは何か本当にやばそうな代物だとは分かりつつも聞いてみます」

「大きい方には60年ぐらい前の兵器であるパンツァーファウスト、対戦車擲弾（つまりは対戦車ミサイルの先祖みたいな代物）が、中ぐらいの方にはブローニングM2機関銃の実弾があります。まあ、何かよく分かりませんが、前線部隊じゃ殺傷兵器は使えませんが、そちらに預けたいんですよ。とミサカは持って行くのも面倒くさいので理屈つけて、そちらに押しつけようとしています」

結局はそう言う魂胆か、と河城は呆れるが、まあ捨てるのももつたないだろうし、貰うことにした。

しかし、何故今のご時世にそんなパンツァーファウストみたいな老兵器なんぞが用意されたのだろうか？サツパリ分からない。

ちなみにパンツァーファウストの図 <http://2509.iteminn.net/i25982/>

<http://2509.iteminn.net/i25982/>

実弾にしてもそうだ。今回、数馬光太郎は非殺傷、無血勝利という面倒くさい事を目指している。なのに何故、一発でも当たれば人間のミンチが完成する弾丸があるのだ。

まあ、今更考えたってしようがないと河城は割り切った。

「良いでしょう。別に、こっちはほとんど敵の攻撃を受けやしないんです。早くラッテ上げましょう。とミサカは表面上、優しく対応しながらあなたの願いを了承します」

そう言うと、河城は部下2人を呼びつけて自分達の装備品に加えるように司令した。

部下2人は面倒くさそうな表情をしたが、実弾なので荒く扱うことは出来ず丁寧に持って行ってくれた。

「……………まったく。しかし、何でそんな兵器が混ざってたんでしょうね？」とミサカは分からないとは分かかっていても聞いてみます」

「分かるわけ無いでしょう、突如として出現した物資の送り主さえ知らないんですから。とミサカは当たり前前の答えを返します」

上条当麻のプロマイドを買ってしまった聞くことが出来ないが、魔術とかいう意味が分からない言葉が聞き取れたりもする、よく分からない状況で上条当麻を助けると言うだけで戦に参加するということもおかしな話ではあるわけだ。まあ、妹達にとっては上条当麻を助けるのは当たり前だと思っっているわけだが。

妹達から見ればふざけ半分、真面目半分で生きている人間であるよな数馬光太郎にしても、上位個体（打ち止めちゃんの事）からは

助けて貰った、いい人としか聞いていない。

つまり何やかんやで、勢いと乗りだけで妹達は戦いに参戦しているのだ。

若干、2人はどうしてこうなったんだろつと悩むが、結論が出ようと今は全く意味を成さないと考え直し、また別の話を始めた。

午後9時55分 売店                      の地下

「……………さながらこりゃあ防空壕だな」

売店の地下には、商品をため込んで置いておく地下室みたいなものがあるのだが。

それがかなりでかい。

売店の奥の部屋のさらに奥に入り口あり、降りていくと7畳程の部屋にぶち当たる。

この部屋には先述した以外の生き方が3つあるのだ。運搬の効率化を図ったのだから、右、左、上にどこかに続く道がある。多分、他の売店に続いているのだろう。

その部屋にある道に続くところには、多数の土嚢が置かれてあり、バリケードっぽくなっている。

で、その部屋の中央に、机と共にオルソラがのんびりと椅子に座っているのだ。

「つまらなくないか？こんな所で？」

なんで地下にオルソラをいれているのかと言えば、安全であるという事だろう。敵からの発見は難しく、安全性は高い。唯一の欠点としては、包囲されたとき、逃げる事がすごく難しいと言っただけだ。

だが、パラレルスイーツパークに天草教徒がいる事はまだばれていないと思われる、偵察隊全く来ない、のだから問題なしとされた。で地下に用意されたのは、机と土嚢ぐらい。それ以外は何にもない。

「いいえ、そんな事ないのでございますよ。何も無いという苦痛に耐えるのも、シスターとして当たり前のことですから」

「ちょっと待ってる。何か作ってやる」

何か、オルソラの言うことがすべて危なく感じた数馬は、とりあえずあり合わせの物で工作をすることにした。

用意する物

先ほどの立方体。

ナイフ

紐（こいつは土嚢の近くにあった）

「さあて。じゃあ……………そうだな、あれを作ってみるか」



さくつと立方体を削っていく。まずは縦に半分に切り、4つの角を直角に切り落とす。

「もしかして、それは……………」

オルソラもすぐにそれが、十字架、それもラテン十字だと分かったようだ。

で、数馬は荒々しい部分をナイフで細かくケアしていき、最後にロザリオに紐をもあい結びで括り付ける。これで完成だ。

「ほい出来た！！即席ロザリオだぞ！！」

「まあ、とても素晴らしい出来でございますね」

ロザリオは誰から見ても、良いできに仕上がっている。所要時間は2分ととても短い。

しかし、何よりも不思議なのは木片の断面が加工されているように綺麗であることだろう。ざらざら感は無、滑らかな質感は誠に素晴らしい。

木製のロザリオとしては優れものと言っているだろう。

「さあてこれを、オルソラ。君にあげよう。なかなか似合うと思うぞ？」

数馬はオルソラにロザリオを手渡そうとした途端、彼女に手を握手されるがごとく握られ、もう片方の手で包まれるようにされてしまった。

「!？」

突然の手つなぎタイムに心がひっくり返る数馬。そんな彼の事はお構いなしに、ゆっくりと穏やかな口調で彼女はしゃべった。

「それでは…… 1つだけ、たった1つだけお願いがあるのでございますよ」

「な、なんだ？」

豆だらけではある彼女の手だが、やはり女性だ、柔らかい感触が数馬の手に伝わってきた。声がつわづりながらも彼は応答する、が動揺しているのは見て直ぐに分かる。

「あなた様の手で…… 私の首にそれをかけてもらえないでございましょうか」

これは、と数馬は息をのんだ。なんと言うことだろうか、オルソラにネックレスを掛けるというイベントが起きたのだ。このイベント、数馬はてつきり上条フラグメーカーしか出来ないと思っていたのだが奇跡的にも彼はそれを出来る権利を会得できたのだ。こんなロマンティックな展開、そうそう無い。彼は体のすみずみから嬉しさがこみ上げてくるのを感じた。

「だ、大丈夫さ。も、問題ない」

つわづる声で数馬が答えると、オルソラはロザリオをかけやすくするためだろつ、瞳を閉じて顎を上げた。そうすると、必然的に彼女のその豊満な胸が持ち上げられ強調されているのが目に付いてしまふ。

どうにもこうにも、彼はこういつのに弱いらしい。つつい視線が胸元に集中してしまう。

「……………どうかなされましたか？」

なかなかかけてくれないので、オルソラがしゃべると、数馬は慌ててロザリオをかけた。

首からかけるので、手をどうしても首に回さなければならぬのだが、それがなんとなくキスをするかのように錯覚してしまう。どきまぎしながらも数馬はロザリオをかけた。

「おお……………」

ロザリオは結構小さかったため、そんな目立たないと思っていたが。

なかなかどうして、こうもオルソラの美しさを引き立てるのだから。聖女にロザリオというのは絵に出来るほど美しい組み合わせだ、と彼はすぐに思ってしまった。

「……………美しい……………」

で、最初に出た感想がこれである。こいつの場合は、美人だから誰にでも言いそうな気がする台詞だ。

「いえいえ、そんな美しいだなんてお言葉、私にはもったいないお言葉で……………」

「いいや、美しい」

「ここら辺を断言する数馬も、ある意味紳士なのか変態なのか分からないものだ。」

ただ、かなりの大声でそんな事言ってしまうものだから、一気に部屋の空気が恥ずかしい感じになってしまった。

「……………あつ」

と、ここで彼はもう時間がすでに10時である事に気付いた。出撃まで後10分なのである。

「やべえ。これじゃあ遅れちまう。……………すまんけど、オルソラ、俺、行ってくるわ」

オルソラにしても、隊員の誰かからは戦に関しては聞いていたのだろう。一転して表情が不安そうになる。

「どうしても、行ってしまうのでございますか？」

普通に考えれば、此処で戦わなければどうするんだという訳だが、彼女が言うともう心痛み。

無血戦争なんぞは関係無い。人々が争い、傷つくのが、彼女は嫌いなのだ。彼女の精神からすれば、戦争が生み出すのは、破壊、絶望、虚しさ、孤独だけなのだろう。

しかし、無情に割り切ればそれは他人の精神だ。数馬には数馬なりの精神という物がある。

「……………ああ」

だが、さすがにそんな事は言えないので呼吸を2拍おき、彼は当たり前障りのない答えをぼそりとつぶやく。そして出口である階段を上り始めようとした。

「……………そうですか」

その数馬の答えを聞いた彼女はとても、悲しそうだった。

「ただ、オルソラ。君は料理が上手だって聞いたから……………ペペロ  
ンチーノでも作ってもらいたいね。スパゲッティが食べたいんだ」

だから彼は、オルソラの悲しい声を聞きたくはなかったから、最後の最後、階段を上る直前に、そんな事を言った。

彼女はそれを聞き、先ほどまでの表情をかき消し、にっこりと笑う。

「もちろんでございます。その時は、五和さんも一緒に」

「Certo! 《もちろん!》」

オルソラの返答に、数馬は嬉しそうに言った後、地下から出て行った。

午後10時5分

「第6御楯隊、駆け足前へ！！進め！！」

軽快な軍靴の音、とゴロゴロと台車を引っ張る音が幾多も鳴り響き、部隊が出撃していく。

残り5分で主力の第1、2、3御楯隊も出撃する。はずだが、副隊長である数馬光太郎がいない。

「まったく、奴は何をやっているよな……………」

時間の遅れというのは、作戦にとっては致命的である。そのため、軍というのは時間厳守というのが鉄則だ。ここは別に軍隊でも何でもないのであるが、それでもあまり時間の遅れはとりたくない。

少し苛立ち始めた建宮。と、ちょうどそこに数馬はやってきた。

「遅いよな。何をやって……………えっ？」

「いやあ、悪い悪い。少々、装備に時間がかかってな」

文句の1つや2つは言おうとした建宮だったが、目の前の数馬の格好に啞然とした。

まず目に付くのは、彼の全身をまとっている鎧だ。光に反射して美しく輝いているのだが、その周りに少し黒い影のような物が見える。

彼の腰には脇差し、つまりは日本刀がつけてある。これはそんなに異常はない。

で、背中には99式小銃、このとき建宮は銃の名称が分からなかったのでライフルとした、が掛けてある。そして最後に、数馬が手に持っている釘バットである。

すべて統合してみれば重武装以外の何物でもない、数馬の姿。

「おいおい……そんな格好で行くのよ？」

「用意しちまったんだ。仕方がねえだろ。……やべえ、もう時間がないな」

今の時刻は10時8分。

「……行くぞ」

来てすぐに出撃するように言う数馬に、建宮は起こるよりも先に呆れてしまった。

「まったく。遅れといてそれはない……まあ、良いのよ」

ほん、と建宮は数馬の肩をたたく。数馬はそれに反応するように残っている全部隊を見渡す。見ている途中、五和と目が合ったので、ウインクをすると、最後の言葉を放った。

「我らには、主のご加護が付いている。必ず、必ず生きて帰れるだ

ろう。駆け足！！全軍、前へ進め！！！」

数馬のかけ声で、全員が大声を出すと共に、駆け足で入り口まで進んでいく。

「さあて、もう後戻りできないな……」

「そりゃあそうよな。ここまで来たんだ」

数馬は、隊の最後尾に向かう前に天を見上げ、こつこつぶやいた。

「………Bring on the hell.  
作戦開始まで、残り10分。」

(余計な補足説明。邪魔でしたら削除します)

### 数馬の装備品一覧

鎧

99式小銃

釘バット

日本刀(雷切)

能力は混戦状況での使用は致命的な隙を生むので使わない。



午後10時 17分

「残り3分ですね。とミサカは作戦開始までの残り時間を細かく確認します」

「いよいよ始まりますね。とミサカは緊張した面持ちで言います」

そんなことを言っている2人のミサカを尻目に、博麗霊夢はキューポラから外を確認するが、人影は見えない。

「本当に此処は人通りが少ないです。とミサカは戦車の存在がばれずにすむので安堵しながらつぶやきます」

「……………そういえば、博麗霊夢。敵は人の認識能力を阻害する能力を使っているとか。大丈夫なんでしょうかね?とミサカは作戦における懸念事項に今更ながら不安になります」

聞かれたことに博麗霊夢は少し考えるが、別に大丈夫だろうという表情を見せる。

「そこらへんは、支援砲火で何とかしてくれるはずですよ。とミサカは安心させるように言います」

「……………そうですか。とミサカはまだ少し不安ながらも頷きます」

「それよりも、もう少しですね……………とミサカは残り

1分である作戦時間を見て言います」

戦車の中は一気に静かになり、全員が全員、ただの乙女から、本物の戦車兵へと変わっていた。

午後10時18分 敵陣の隣のビル

「まったく、敵が視認できませんね。とミサカは隣にいる御坂妹に話しかけます」

八雲紫は不安そうに、司令である御坂妹に言うが、彼女は冷静な目つきで返す。

「大丈夫です。とミサカはそれだけを言います」

素っ気ない返しに、八雲紫も話す気力が失せた。

「……………分かりました。とミサカは不安を隠しながら頷きます」

午後10時19分

「……………始まるな」

「そうよな……………」

午後10時19分 パラレルスイーツパーク

2本の塔の上の砲台で、第4御楯隊は戦闘態勢をとっている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言が塔を包み込み、誰1人としてしゃべらない。時は刻一刻と作戦開始まで進んでいく。

砲塔の中で操作している河城にとり以下1名のミサカは、緊張するに伴い手に汗が出てくる。

残り10秒。

「・・・・・・・・・・・・・・・・各員、砲撃用意。とミサカは短く命令します」

河城が手に持っている学園都市製の無線で全員に伝える。

残り8秒

「目標再確認。とミサカは命じます」

砲塔に付属しているGPS機能により、目標の位置を特定する。

残り5秒

「撃ち方用意・・・・・・・・・・とミサカは最後にそう言います」

残り4秒、3秒、2秒、1秒・・・・・・・・

零

「撃てええええ!!!とミサカは絶叫しながら作戦開始を合図します!!!」

作戦開始と共に、2門のオート・メラーラ 76 mm 砲が火を吹いた。

作戦開始時刻10秒前 薄命座

「・・・・・・・・・・・・・・・・もう、時間がねえですね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

司令部テントは打つ手がなくなり、困り切った幹部達の沈黙によって静まりかえる。

「目標の所在地だけでも、それだけでも確定できれば楽なのですが・・・・・・・・・・・・・・・・」

レンもほとんど参っているようだ。それほどまでまずい状況なのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・とにかく、闇に紛れてまた偵察隊を出しましょう。それしか方法は・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

レンはしゃべるのをやめた。音が聞こえる。

それも耳障りな金切り声だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼がどこかで聞いた。そう、ずっと昔、どこかで聞いたことのある音。

音が大きくなるにつれて、彼はその音の正体を思い出した。

砲弾だ。

「全員、表に出ろ！！！！！」

それが分かると、瞬時にレンはテントの中の全員に言い、外に飛び出す。

直後、真後ろにあったビルが爆発を起こす。砲弾が命中したのだ。

「なっ！！！」

間髪入れずもう何発か砲弾がビルに命中し、ビルは倒壊し始めた。テントから出てきたアニエーゼは、それを見たとたんに顔を青ざめた。

「まずいです・・・・・・・・・・これじゃあ人払いのルーンが機能しない・・・・・・・・・・」

彼女の震えた声に、レンは真っ青になる。周辺住民にばれたら、全てが終わる。

近くにあったビルを見てみたが、あれほどの爆音にも関わらず人が出てくる様子がない。人がいないわけでもなさそうで、まだ明かりがちらほらと窓から見える。

「……………どういうことです……………?」

彼の疑問は、すぐに着弾した砲弾の爆音によって吹き飛んだ。

ドイツ ルクセンブルク 超高層ビル

「会長に報告!!本日、日本時間10時20分頃。東京学園都市近くにて、ローマ正教と天草教徒による戦闘に入れり!!」

「……………分かった。下がれ」

1人の部下の報告を聞いた「赤光の黒十字」の会長であるフォツケ（以下省略）は、神妙な面持ちで部下を下げると、冷蔵庫からきんきんに冷えたビールジョッキとビール瓶を持ってきて、1杯なみなみにビールを入れ、グビツと飲み干した。

「……………ぶふええ!!うめえな」

彼の組織はすでにローマ正教とたこ殴り合い、常にこちらが優勢だが、をしている。まあ、面倒くさいことではないので良いのだが。

「向こうどつなってるかな……………」

やっぱり、若い部下の事は不安になるもんである。

「向こうの特高からの連絡考えると、認識妨害関係はやっておくように命令しておいて良かったなあ……………」

今更ながら、安堵の溜息をつく。老体。心配事はすぐに出来るよ  
うだ。

「うん……………もう、向こうの支部の奴らもすつごく面倒くさがっていたし。2度とこんな事やんない」

小心者なのも影響しているのだろうか。

作戦開始から10秒後

「よっしゃああ！命中！！とミサカは正確な射撃が出来たことを  
歓喜します」

第6御楯隊からの連絡は命中だった。

「方向修正も完了しました！！とミサカは河城に報告します」

そう聞き、すぐに河城は引き金を引く。ズドンと重い衝撃が響き、  
砲弾が放たれる。それがほぼ1秒ごとに起きる。

「命中まで、5秒！！4、3、2、1……今！！とミサカは弾着の予測を告げます」

すぐに無線が入る。命中の報告だ。

「河城！！次は敵陣地に向けての攻撃に移行せよとのことです。とミサカは伝えます」

「徹甲弾はもう撃ち尽くしましたし、大丈夫でしょう。目標を変更、標準を下に設定。とミサカは2番砲塔に連絡します」

すぐに砲塔は、一応自動で回ってくれる、微調整を完了させる。

「大丈夫です！！とミサカはOKを出します」

「分かりました。とミサカは聞いたなら直ぐに引き金を引きます」

更なる砲弾が撃たれた。

午後10時23分

「よし……もう良いですね。とミサカは爆音の数を数えて思います」

戦車隊はすでに、敵陣地200mまで近づいている。博霊霊夢は無



線で後ろにいる戦車に命令した。

「黒薔薇から赤薔薇へ。戦車、全速前進！！とミサカは命令します」

静かであった駆動音は、エンジンが全力を出したことによりけたましい音に代わる。

戦車の全力の速度が出された。

「進め、進め！！とミサカは怒号を上げます」

敵陣地まで10m……5m……1m……

到着。

「止まれ！！とミサカは目標の視認を確認し、各員に言います」

なるほど、敵陣は砲撃で大慌てだ。驚いたことにまだこちらに気付いていない。

「仕事が楽ですね……………さあて、射撃用意してください。とミサカはすぐに各員に命令します」

彼女も最初の標的を定めために、ペリスコープを除く。

一番近いであろう、1つのテントに決めた。すぐにそれに照準を合わせる。

「黒薔薇より赤薔薇へ。ミサカは最前列中央のテントを狙いますから、そちらは最前列右を狙ってください。とミサカは指令します」

「問題ないぜ。とミサカは素の口調で返します」

無線からすぐに了解の返答が得られ博霊霊夢はうなずくと、引き金に手を掛けながら言う。

「黒薔薇から全車へ……………とミサカはゆっくり言います」

戦車の中の全員がつばを飲み込む。ある者は目を尖らせ、ある者は手を震わせる。

「…………… Open fire ……とミサカは引き金を引き、攻撃開始を伝えます」

第5御楯隊、攻撃開始。

「おっ、始まりましたね。とミサカは敵陣を双眼鏡で確認します」

「…………… 本当に突然、陣地が現れましたね。とミサカは少し驚きます」

薄明座の隣のビル（の裏側）から、第6御楯隊が作戦進行状況を

確認していた。

状況はおおむね良好。問題はなさそうだ。

「じゃあこちら準備しましょう。とミサカは八雲藍に向かって全員に命令するように指を指します」

「はいはい。分かりました。全員、前進する！！とミサカは後ろにいる18名に指示します」

隊の全員が、それぞれ自分の銃を確認する。

今回は機関銃を13挺と予備に2挺持ってきている。(ちなみに残りは人数不足で使えることが出来ないので全部、第4御楯隊に預けてある。)

機関銃を扱わない隊員は、機関銃を持っているミサカ達からAK-47をいくつも奪っ……じゃなくて頂いているので、今回はそれをランボーのように乱射するつもりらしい。

機関銃装備のミサカは三脚含めて銃の重さが58kgと半端なく重いので弾薬関係などともに台車10台に乗せて運んでいたのを降ろしている。(坂道が無くて本当に良かったと全員すごく安堵していた)

「前進開始！！とミサカはなるたけ小声で命令します」

敵にはまだ気付かれたくないので静かに台車を動かす。それでも誰かがこちらを見れば一発で分かるぐらいだ。なのだがやはり戦車の存在が目を引いているのか、まったくくばれない。

「おお、これはまさしくご都合主……じゃなくて天佑ですね。さっさと進みましょう。とミサカは重い台車引つ張りながら進みます」

「なんだこの緊迫感の無いムードは。とミサカは悲しくなります」

八雲藍が嘆くが、ともかく花壇には到着したので機関銃をセットする。

「うっわ。こりゃあすげえ事になっているわ。とミサカは目の前の光景に目を見張ります」

御坂妹が言うとおり、敵陣はもの凄い砲火に包まれていた。死者がないと分かっていても、想像されるのは悲惨な光景だけだろう。テントは吹っ飛び、壊れたりもしている。

そんな事を思っていた彼女だが、時間がないのを思い出すと台車から機関銃を降ろして、花壇に三脚で固定する。

少し時間がかかる作業で、4分かかった。

「やっと終わった。とミサカは作業が一段落して一息つきます」

「今から山場なんですから、休まないでください。とミサカは隊長をたしなめます」

むすつとした顔、端から見れば若干ほおを膨らませているようにしか見えないが、をする八雲藍に、御坂妹は謝るように返す。

「ああ、すみません。とミサカは適当に謝ります」

「……………まったく、反省してませんね。とミサカは半ば呆れ口調になりながら言います」

どかんとまた1発、砲弾が敵陣に着弾する。今度は戦車から放たれたようだ。

「……………御坂妹、そろそろ敵さんも反撃に来るでしょう。とミサカは確率の高い予想を言います」

「そうですね、ここまでボコられといて来なかったら本物のイタリヤ軍でしょう。とミサカは同意します」

「でも、イタリアの女性はスーパーサイヤ人並みに強いらしいですからね。とミサカはそこだけは否定しておきます」

軽口を叩きながらも、彼女達の眼光は鋭くなっていた。

的確に自陣を破壊していく砲弾を避けるために、身を伏せていたレンだったが、駐車場入り口から突如として進入してきた戦車に愕然とさせられた。

「クラウドスがなんているんだ!!」

昔、彼がイギリス本土で何回も叩き潰した、だがそれ以上に大苦戦させられたドイツの化け物とそっくりの戦車だった。

「何だがり分かりやせんけど、最悪な状況ってことですね!!」

隣のアニエーゼも焦りの汗を垂らしている。奇襲によって部隊の統率が完全に崩壊している。このままでは防戦すままならない。

「何でも良いですから、何とか全員をあの戦車の攻撃に向かわしましょう。幸い、歩兵はいないようです」

レンは経験上、戦車で単独行動の場合は歩兵による攻撃は最も有効であるのが分かっている。炎関連の魔術を良く使用したものだ。

とにかく戦車の上に乗るかかり、ハッチをこじ開けて中にいる搭乗員を仕留める何かを投げ込めばすぐに終わるのだ。

「ただし、外の装甲は最悪、魔術でも弾かれる恐れがありますからおすすめは出来ませんね」

「分かりやした、連絡用の護符も、何とか使えやすしね。すぐに連絡します」

「早くしてくださいよ。こりゃあ伏せていても当たりそうです」

1秒1秒が長く感じられる。戦車から放たれる砲弾は、どこからか撃たれている砲撃にもまして恐怖感を与えられる。特に、レンにしてみれば戦死していった同僚の大半が戦車などで木っ端微塵になったのだから、人一倍恐怖がある。

「……………つよし。連絡は回しました。10秒後に突撃します。あんたは他の奴らをかき集めてください。まだ連絡が回っていない奴もいるかもしれやせん」

「分かりました」

本当はレンも行きたかったのだが、水が無いこの辺りでは攻撃手段が無い。だとすれば足手まといにしかならないので残った方が良いでしょう。

「……………4、3、2、1……………しゃあ、突撃！！」

だっ、とアニーゼは走り出した。ほぼ同時に80名ぐらいのシスター達も走り出していくのが見える。どうやら相当な人数に連絡は行き渡ったようだ。

「頼みますよ……………」

レンは天に祈るようにつぶやくと、壊れたりひっくり返ったりしているテント群に戻っていった。

「こつちに向かってくる奴がいます。数はざっと見た限りじゃあ50以上。」とミサカは双眼鏡をのぞきながら報告します」

八雲藍の報告に御坂妹も双眼鏡をのぞく。と、本当だ。何十人ものシスターが突撃してくる。

「Shit．よしみんな、敵だ！！行くぞ！！銃のチェックをしろ！！」とミサカは指示します」

無線で全員に彼女の指示が行き渡ると、機関銃を少し動かす音ががちゃがちゃと聞こえ始める。

花壇に設置した機関銃は花やら草やらに上手く隠れるようになっており、その上、外灯のためいくらか明るい夜の闇が目立ちにくくしている。

で、ミサカ達も花壇の中の草花に埋もれている。完全なるカモフラージュだ。

「どこぐらいまで来たらやりますか。歓迎準備委員会は用意できてますよ。」とミサカは引き金をかちかちとしながら質問します」

八雲紫が焦るかのように聞いてくるが、御坂妹はさらりと返す。

「そうですね……………まあ、ミサカ達を通り過ぎたらやりましょう。とミサカはのんびりと言います」

双眼鏡がいらなくなるほど、敵が近づいてくる。まだこちらはばれていないようだ。だが、人間の心理とも言うべきか、ミサカ達は



接近する敵に射撃する衝動が抑えられなくなってきているようだ。  
無線から連絡が殺到し始める。

「敵がすぐ近くです！！とミサカは命令を早く言うように促します」

「Hold it ！！とミサカは他のミサカ達に動かないように釘を刺します」

「敵が多すぎるぞくそつたれ！！早く撃たせろ！！とミサカは「Steady！！とミサカは抑え気味に怒鳴ります」

敵、10mまで接近。

「Hold it ……………とミサカは全員に撃たないように無線で伝えます」

敵先頭、第6御楯隊通過中。

「Come …… Come ……………とミサカは言いながら引き金に指をかけます」

敵先頭、第6御楯隊から1m通過。

「Make it snappy！！とミサカは「Shut up  
！！とミサカは」ry

3m通過。

「……………」

4 m 通過。

「……………」

5 m、通過。

「NOW!!!!!!!!!!!!とミサカはぶっ放しを許可します!!!!!!!!!!」

射撃開始の命令と共に第6御楯隊全員が機関銃と自動小銃の引き金を引いた。

草花の中からうなり声を上げてブローニングm2機関銃が銃弾を真後ろから、敵に叩き込む。非殺傷弾といっても目標の10cmまで近づいて催眠ガスを爆発してはうまく弾丸なので、敵の何人かは少し吹っ飛んだ。

そして取りこぼしが無いようにAK-47の弾がばらまかれていく。10秒も経たない内に大半のシスターを撃破していく。

それにしても、敵の数が多い事に御坂妹は面食らった。予想で敵軍は70人前後と聞いていたのだが、どうみても90人はいる。テントの方にまだ残っている奴らも合わせると相当な人数だと思われる。

事実、アニメーゼ部隊は特高やら何やらで252名全員が此処にとどまっている。砲撃による被害から換算しても、まだ100名以

上は生き残っていた。

「撃て撃て撃て！！！」とミサカは大声で全員に言います」

急な攻撃を後ろから受けたシスター達はこちらに攻撃を向けようとするが、どつちみち向かってきた奴は機関銃の餌食となった。こうなると残りの手段は三十六計逃げるにしかず、撤退しかない。

シスター達は脱兎のごとく背を向けてテントの方まで走り始めた。

「1人残らずフルボッコにしろ！！」とミサカは全員に命令を出します」

命令通り、濃密な弾幕がシスター達に放たれると、またばたばたと落伍者が出る。10秒間の連射を続けると、撃ち方やめの声が出される。

「……………畜生。10名ぐらいは逃がしましたね。とミサカは舌打ちしながら悔しそうに言います」

「まあ、最初からしたらこれで上場でしょう。とミサカはフォローを入れます」

「敵さん、また戻ってきますね。こりゃあ……………」とミサカは面倒くさそうにつぶやきます」

作戦進行状況：良好

「……………機関銃の音……………」

機関銃に特徴的な金切り声が聞こえる。レンは寒気が走った。敵が機関銃を持っている、それだけで今までの悪夢がよみがえる。

次々と体を弾丸で貫かれる戦友、木っ端微塵になる子供、まさに地獄絵図と言える光景がありありと思い出させられた。

が、そんな昔のことで恐怖している場合じゃない。一刻も早く、彼は生存者を探し出さねばならなかった。テントを探し回り、意識がある者は一点に集合させている。ただ、30名やっと集まっているぐらいだ。

「上条！！ステイル！！どこにいるんですかー！！」

元のテントの場所もぐっちゃぐちゃでよく分からない。大体こちら辺だったという目星をつけて呼んでみる。

「……………ここだあ……………」

すると、微かではあるが右で複数重なっているテントから声が聞こえる。上条の声のようだ。

「そこですか、待っててくださいー！！」

すぐにレンは近づくと、壊れたテントをどかし始めた。軍用な

のでかなり重く、骨組みなどをどかすと、上条の顔が見えた。

「……………インデックスさんは？」

「まず最初に聞くことがそれかよ!？」

上条の事よりもレンにとってはインデックスの方が大切のようだ。  
ひどい。

「その様子だったら、大丈夫でしょ。インデックスさんはどうしました?」

「……………一応、大丈夫だよ。ステイルが何か守ってくれているみたいだ」

「ほう、彼もやるじゃないですか。それじゃあ、彼に悪いですからとっとと出してあげましょう」

レンはまたすぐに壊れたテントをどかし始める。上条はすぐに出てこれた、インデックスやステイルは若干奥にいたので手間取ったが何とか救出できた。

「大丈夫ですか? 2人とも?」

「ああ、まあね」

「だ、大丈夫なんだよ」

インデックスは、まだステイルに抱っこされたまま少し怯えた表情である。砲撃が怖かったのだらう。まっさきに上条に飛びつくと

思ったんだが、ステイルにしがみつけばなしだ。

「上条さんも、平気ですか？」

「ああ、大丈夫だよ」

「じゃあ、こっちに来てください。生き残りが集まっていますから」

レンが上条達を案内してテント群の奥に連れて行く。

砲弾はもう降ってきてはいない。

「成功したんですね、攻撃……………」

ぼそりとつぶやきながら、彼は集合している場所に着いた。

「さあて、着きましたよ……………って、え？」

30人程度が集まっているそこに、先ほど突撃していったアニエーゼ達が出た。

行った時の10分の1以下の人数で。

この時、誰もが絶望という言葉を感じた。

「……………とどめを刺すぞ」

低くドスのきいた声を出す数馬に建宮が答える。

「分かったよな」

駐車場入り口付近ではすでに第1、2、3部隊が待機している。

全隊員が目の中に闘志を宿らせ、兵へじわもと変化していた。

しゃべる者は誰1人としておらず、緊迫感がまじまじと伝わってくる。

数馬は後ろを振り返り全部隊を見渡すと、腹の底から目一杯大声を出す。

「全員抜刀！！！！」

その声に鞘から刀、剣が抜かれる音、斧を持ち上げる声が10秒間続き、それ以降急に音はなくなり静まりかえっていく。数馬はそれを見計らうと、大号令を発した。

「諸君！！この日は神にも見放された者を救う日である。信念とその者のために！！さすれば敵の栄光など気にもならぬ。敵は自らを無敵などとほざいているが、そんなのはすべて偽りだ！今、我々が叩きのめすのだ！！恐れなど皆無に等しい。目の前には確信できる勝利がぶら下がっている。それを諸君にも確証しよう。それだけだ！！！」

全軍、突撃イーーーーー！！！」

47名の天草教徒の雄叫びが同時に響き渡り、突撃を開始した。目指すはローマ正教アニエーゼ部隊。

駆け足で走り、教徒達は戦車をすぐに追い越す。途中、ふと数馬が横を見ると、花壇に敬礼をしている御坂妹も見えた

数馬も敬礼をすると、すぐにまた前を見る。テント群は無線からの報告通り、悲惨なことになっている。なるほど、被害は甚大の様子。

「いけるな……………」

勝機を掴んだ、そう彼は確信した。

この時、薬の投与時間からタイムラグが過ぎた。薬の効能が無くなるまで後、2時間。



「Shit!!!どうしますかね!!!」

戦車を撃破しに行った部隊は壊滅、おまけに敵の主力らしき部隊が突撃してくるのが見える。

レンは舌打ちをしながら毒づいていた。

「どうするって、やるしかないだろ」

後ろから上条が彼の毒づきに答えるように言ってくる。

「上条。あんたも簡単に言いますね……………まっ、それしかないんでしょうけど」

後ろのシスター全員も何とか使える魔法具やらなんやらを持っている。

ちなみに奇跡的に生き残っていたアンジェレネは硬貨袋、アニメーゼは丸テーブルよりも大きな車輪を背負っている。どちらも一見、攻撃に使えるとは思えない。大丈夫なのだろうけど。

「お嬢ちゃん、君も来るんですか？」

レンとしてはアンジェレネのような小さい子には来て欲しくないというのが本音ではある。なので待機させるように持って行くとしたのだが

「あつ、だ、大丈夫です。私も、力になれます」

「……………そうですか」

彼女の目には行きたいという感情がまじまじと表れていた。まるで出撃前の少年兵のような目つきだ。こうなると無理に待機させるわけにも行かなくなる。結局、全シスターが迎え撃つことになった。

「こうなったらゲリラ戦で対抗しましょう。壊れたテントの中に隠れてください！！3人1組でお願いします」

上条、ステイル、あなたたちはインデックスをしっかりと守護してください。傷一つつけないでくださいよ」

「ああ、分かった」

「アニーゼ、あなたは僕といてください。指揮官系統はばらばらにならない方が良いでしょう」

「分かりやしたです」

「それじゃあ全員散開！！」

すぐに全員があちこちのテントの下に隠れた。迎え撃つにはこれしかない。

「…………… Preserve me, O God. 《神よ、私をお守りください》」

レンも1つのテントの下に潜り込み、一言神に祈りを捧げた。

相手は悪魔、こちらは化け物。目標遂行のための死闘が始まる。

数馬達はテント群の目の前に来た。敵はまだ攻撃してこない。

「……………おかしい」

「敵が来ないとは、不自然すぎるのよ……………」

一般的に防衛戦の際、防御側は水際での迎撃に徹する事が多い。そこから考えるに、すでに此処で被害は出てもおかしくはないのだが、まだ被害は皆無だ。

「全滅した……………ということはないんでしょうね」

後ろにいた五和も話しに参加する。確かに、あれほどの砲撃を受けたとしても精鋭部隊、全滅はないだろう。上条当麻という死亡フラグを木っ端微塵にする奴もいるのだし。

「……………第4、5御楯隊、こちら第1御楯隊。支援砲撃を要請する。20秒間攻撃してくれ」

数馬は無線を取り出すと、支援砲撃を2部隊に要請した。了解と  
いう返事が無線から返された。

「全員砲撃くるから散開！！！」

47名が駐車場の端に避難する。その5秒後に戦車から、パ  
ラレルスイーツパークから、砲撃が開始された。

耳につんざくような音が聞こえた後、どすん、どすんと砲弾がテ  
ント群に降り注ぐ。テントの部品が吹っ飛び、布が宙を舞う。

「……………」

砲弾の音以外は何も聞こえなくなる。まさしく、戦争だった。

「Jesus！」

テント群はまさに地獄と化していた。砲弾が自分達の寿命をカウ  
ントダウンしているようにも聞こえる。いくらローマ正教の精鋭部  
隊と言っても、女性だけの部隊である。恐怖心は強まるばかりだ。

砲弾が炸裂する前の金切り声は、全員の気を狂わせそつだ。

「……………」

レンの隣にいるアニエーゼは何も喋らない。魔術師の戦いと、今直面している戦争は何もかもが違うのだ。

そう、魔術師による戦いが華麗なる騎士達が舞うような物であるならば、これは華麗でも何でも無い無慈悲で残酷で、すべてが失われる醜い物なのだ。

目の前のテントに砲弾が炸裂した。その下にはシスターが3人いたはずだが、もう無理だろう。

「くそつたれ！！！」

アニエーゼがそれを見て悔しそうに怒鳴る。

「敵の砲撃はあんまり味方には命中してないでしょう。今のは不幸でしたが……………」

最後に3発の砲弾が左右に炸裂すると、砲弾はもう降ってこなくなつた。

「……………来ますね」

10秒後、彼の言ったことは本当となつた。

「砲撃は効果があった分らないが……………まあい」

数馬は片手に釘バットをしっかりと握り、日本刀（雷切）を宙に掲げる。

「攻撃開始イーーーーー！！！」

彼が雷切を振り下ろしたと同時に、47名の天草十字教徒による攻勢が始まった。

敵の攻勢をじっと身を潜めながら見ているレン。ただ、まだ攻撃しない。

連絡用の護符を使い、全員にしっかりと隠れるよう指示する。ばれたらお終いだ。

敵は1人1人の間隔がしっかりと離れている。まとめて仕留めるのは無理だろう。

「アニエーゼさん。頼みましたよ」

「分かりやした」

レン自体は水がないと攻撃は不可能なのでアニエーゼのサポートに回るつもりなのだ。

彼女の持っている魔法具は杖、蓮の杖ロータスワンドという。

杖に与えた衝撃を瞬間移動させる攻撃と、杖をナイフで傷つけることで空間を裂く攻撃を可能としている。

簡単に言ってしまうえば呪いのわら人形のような物である。杖を傷つけると対象者へその衝撃と痛みが来るのである。

防具なども空間を直接叩くため、目標に確実にダメージを与えられる。先ほどの戦車への攻撃時には呪文を唱える前に、機関銃で一掃されたので使用できなかった。

まあ今度は倍返して逆襲するつもりである。

さて、それはさておき、敵が用心しながらも此処を通り過ぎていく。

じっくりとさらに通り過ぎるのを待つ。完全に後ろを見せるまで。

そして、敵が此処を安心して通り過ぎた。

チャンスだ。絶好のチャンスだ。

「GO!!!!GO!!!!GO!!!!」

レンのかけ声でシスター全員が一気にテントの下から躍り出るとレン達は奇襲攻撃を開始した。唐突な攻撃に天草教徒達に動揺が走るが、向こうも精鋭だ。すぐさま対応して乱戦に突入。剣と刀の触れ合う、白兵戦が幕を開けた。

「来やがったな！！！！」

思ったよりも頭良く攻撃してきたのには彼も驚いたが、そんなことは今関係無い。

すぐに1人のシスターと向かい合う。相手が剣を振るうが、すぐに数馬は避ける。間髪入れず、彼は回し蹴りを腹に直撃させ撃破する。

今は女性だとかそんなことは無視である。死にはしないのだから良い。

「次は！！！」

数馬がぎよろぎよろと目を光らせると、五和が1人のシスターと戦っている。五和の方が優勢だ。が見れば後ろから剣を突き出し突進してくるシスターが。

「やべえ！！！」

釘バットを地面に落とし背中から99式小銃を取ると、すぐさま



フロントサイター  
照星で狙いを定める。

走る目標にめがけてズドンという音が鳴ったと共に、シスターが1人、前のめりに転び動かなくなる。

「Good night」

それを確認した数馬はすぐさま小銃を背中に戻すと、釘バットを手に持ち戦に没頭し始めた。

SIDE五和

危なかった。今、間違いなく後ろに敵が来ていた。今の目の前の敵に集中しすぎてた。気付かなかっただらと思うと背筋が凍る。

とにかく、この目の前の敵をどうにかしないと。

「ウラァ!!!」

敵は背水の陣のような気分なのだろう。その気迫は恐ろしく感じる。

だけど……

「ウラァアアア……………」

勝てないはずはない。

周りを見てみれば、全員が全員、刃を交えている。

先ほど、後ろから銃声が聞こえた。多分、数馬さんだ。だけど近くには見あたらない。

「……………まだまだ頑張らないと!!」

槍をしっかりと握り直した。大丈夫、今度は油断しない。

五和SIDE OUT

「ごんにやる!!!!」

がすつと拳で殴り倒すのはレン。見事にアニーゼを守り通している。ただし彼女を担いだ状態で。

このような乱戦下では呪文を唱える暇なんぞは皆無に等しい。言う前にやられてしまう。そうなれば彼女はただのか弱き乙女。仕方がないのでレンが担いでいるのだが、そうなると今度は彼が動きまくるので落ち着いて呪文詠唱が出来ない。まさに最悪である。

「面目ねえです」

「大丈夫、です、よ!!」

元々、アメリカの奥地やら山脈、砂漠、ロンドンの瓦礫の下で戦っていたレンにとってはこのぐらい、余り問題はない。魔術なんぞ使えない時だつてさらにあったのだ、体術ぐらいは心得ている。

もつとも、3人も天草教徒に囲まれていればちと厳しい。

「舌嚙まないでください!!」

「へっ!?!」

天草教徒3人が一斉に武器を振り下ろす前に、レンはアニエーゼを天高く宙に投げた。そして投げ終わるとすぐに地面すれすれにまで身をかがめ、3人の足を蹴飛ばす。

そして一気に転ぶ敵めがけて、3連続で拳を顔に叩き込んだ。

この時間、わずか5秒。2秒後にはアニエーゼが落ちて、レンの腕の中に収まる。

「ば、な、何をするんでやんすか!!!!」

「おし、周りには誰もいないですね」

文句を言う彼女を無視して、レンは地面にゆっくりと彼女を降ろす。

「さあて、アニエーゼさん。早く呪文を……………」

「うりゃああああ!!!!」

そう頼もつとした瞬間、鎧を身にまとった男が殴り込んできた。

## S I D E 数馬

「うりゃああああ!!!」

やべえ、何でレンがいる。何でいる。予想外過ぎるだろ。こいつが暴れたらやばい。死ぬ。負ける。全滅する。

何だ!?もしかして7巻冒頭で出てきたあの、ステイルとイギリス清教の最大主教ローラ「スチュアートの会合にこいつも参加していたとでも言うのか!?

上条とインデックスは何とかできる。ステイルも何とか出来る。ただ、こいつだけは危険すぎる。

955

今のところ、こいつを化け物にさせる水なんかはないはず。だったら見つけられる前に倒す、即刻倒す!!!

近くに親玉アニエーゼもいる。こいつら倒せばもうこの戦い、勝つたも同然。

ただ、刀とバットを使うのも何かずるい。相手は丸腰だ。だって拳で挑む。釘バットを使って勝手も虚しいだけだ。

「てえい!!!」

幸い、顔は鎧で隠れていて見えない。声なんぞ、顔が見えなければ

ば判別はしにくい。

「ちっ、面倒くさいですね!!--」

それはこちらの台詞だ!!--

とにかく早くこいつをBlack outさせないと。まずは腹だ、腹。そこを一発殴れば……

「帰ってください」

逆に腹を殴られた。Fuck .

お返しとばかりに足を蹴る。レンのバランスが崩れる。

「とっ!!--」

崩したならすぐに脳天をグーで殴る。よし、致命傷。

「死んでください」

そう思っていた時期が俺にもありました。あれ?倒れてくんない。逆にグーで殴られた。鎧越しなのに肩口が凄く痛い。化け物かこいつ。

「逆にそちらが死ぬ」

こちらも負けじと頬を殴る。まったく効き目が成さそうで怖い。

「まったく、小さな宗教にしては頑張りました。さあ、死ぬ」

「てめえらはでけえだけでクソ弱い、独活の大木共じゃねえか。死ぬ」

殴るに殴るの殴り合い。痛いつたらありゃしない。はよ倒れてくれ。

Tutto paragone. Il quinto dei  
elementi. Ordinala canna che  
mostrapacedordina. 「万物照応」

五大の元素の元の第五。 平和と秩序の象徴『司教杖』を展

開

Prima. Segual legge di Dio  
ed una croce. Due cose diversi  
e sono connesse.

「偶像の一。 神の子と十字架の法則に従い、 異なる物と異なる者を接続せよ」

しかもアニーゼの詠唱が終わったらしい。原作で読んだあの、  
なんとかの杖を叩いたのが見えた。

「ごぼしゃと凄まじい衝撃が頭に炸裂した。ぐらりと体が倒れそう  
になる。」

「さあ Good night」

余裕な表情になるレンが腹立つ。嘗めるんじゃないよ、俺を。ぐ

つと、踏みこたえると、とりあえずレンの顔正面をグーで殴る。

殴った瞬間、驚愕の表情につつまれたレンとアニメーゼが見えた。  
ああ、気持ちいい。

「てめえこそGood night」

さあ、こつから畳み掛けるよ。怒ってるよ、俺は。

「さあて、ボツコボコにしてやん……………ぐべら!？」

後ろから、後ろからこれまたくそ痛い攻撃が……………このパンチ、  
まさか。

「てめえが親玉か……………」

上条来た……………!!ピンチ……………!!

数馬SIDE OUT

「御坂妹!!!数馬光太郎が上条にばこされかけてます!!!!とミ  
サカは双眼鏡で報告します」

「うっわ、最悪ですね。とミサカは顔を引きつらせながら言います」

ただ今、花壇から移動してテント群に接近した第6御楯隊、機関

銃を設置中。

「どうします？数馬光太郎、上条当麻の事は攻撃出来ないようです。とミサカは御坂妹に判断を仰ぎます」

「どうするったって……援護しなければならぬでしょう。まあ今回は上条当麻を救うミッションでもあります。今のところ上条当麻は敵ですからね。とミサカは機関銃に弾薬を装填しながら言います」

「そうですね、分かりました。よし、全員射撃用意！！天草教徒を援護する！！とミサカは無線で全体に連絡します」

了解との返答がいくつも聞こえてくる。

「さあて、やりますか。とミサカは銃の引き金に指をかけながらつぶやきます」

「あ、上条当麻に顔面ぼっこぼっこにされてやがりますよ。とミサカは逐一報告します」

「撃ち方始め！！！！とミサカは急いで言います！！！！」



「お、第6の奴ら撃ち始めました。とミサカは博霊霊夢に報告します」

「ほほう、もうですか。じゃあこちらも。目標は適当にそろえますから、赤薔薇も自由射撃で。とミサカは隣の無線で指示します」

何回か隣と連絡を取り合っていると、操縦士のミサカが話しかけてくる。

「敵さん。随分奮戦してますね。とミサカは単純な感想を述べます」

確かに、人数はもうほとんど刈り取られたはずなのに、良く持ちこたえていると博霊霊夢自身も感服してしまう。

「だからこそミサカ達の援護が必要なんですよ。目標、1時の方向。よし……………」

感服しながらも、なお冷静に彼女は射撃の目標をセットした。

「Feuer !とミサカは射撃命令を出します」

元に戻ってテント群

今、数馬は上条にぼこぼこにされていた。反撃なんぞいくらでも出来るが、相手が上条当麻である事が数馬に反撃させるのを躊躇わせる。

「神よ。奇跡を……………」

防戦一方である数馬。上条のパンチは本当に痛い。アニメじゃ殴られた相手が壁まで吹っ飛んでたことあるぐらいだ。

鎧という防具を着けているはずなのに、上条はひるむような事はない。こいつの拳は化け物か、そう数馬は思った。

ちなみに今攻撃しているのは上条とアニメーゼ。ステイルとインデックスは隠れている。

アニメーゼの攻撃なんぞは人間にはきつっただろうが、半分悪魔で出来ているため耐久性が尋常じゃなく高い数馬に効果は薄い。逆に上条の攻撃は精神的にもきついものがあるため、ダメージが大きいのだ。

とにかく上条の攻撃を止めないといけない。数馬はもう死にかけた。

次の1発を喰らったら気絶していたであろう。だが、その時丁度良く第5、6御楯隊から支援攻撃が来た。何百発も来る銃弾に、上条が間一髪の所で避ける。

その瞬間、数馬は脱兎のごとく走り始める。とにかく、1人だとしてどうしようもできない彼は、仲間に合流するという手段を使用することにした。上条が追いかけてよとすると逃げ足の早さで数馬に敵うわけなし。瓦礫まみれのテント群を簡単に走り去る数馬に追いつくはずもなく、上条は諦めるしかなかった。

「……………ぎりぎりの所で逃げましたね。とミサカは報告します」

「それは良かった。とミサカは数馬光太郎に同情しながらも少し笑います」

「おお、敵の抵抗も弱まって来ましたよ。こりゃあいけるかも。とミサカは双眼鏡で見物しながらつぶやきます」

「戦車隊も頑張っていますし。こちらも追い込みに掛けますよ。とミサカは機関銃を撃ちながら言います」

唸り声が幾多も響き、閃光があちこちから見える。火線がテント群に降り注ぎ、敵に恐怖を与えていることだろう。そして途中ちよくちよくと、戦車からの砲弾が着弾し煙があがる。圧倒的な味方の状況に、全部隊が勢いづき、勝てるかと確信した。

「数馬さん！！大丈夫ですか！？」

なんとか仲間と合流すると、数馬はがくつと膝をついてしまう。それを見た五和がすぐに駆け寄って、心配してくる。大丈夫だ、と数馬は言ってもそのぼろぼろな状況では説得力は皆無である。

「無理しないで少し座ってください。えっと、今手当てします！！」

五和が数馬の前に座り、小さなポーシェからアルコールティッシュを取り出す。

それで数馬の傷ついた顔をちよいちよいと吹き始める。鎧の上から殴られたのなら怪我なんぞしないと数馬は思っていたが、殴られた衝撃で中の金具にぶつかり、あちこちが切れてしまうのだ。彼の顔は血だらけのような感じになっていた。

ぴりぴりとアルコールが傷口に染みるが、心配そうな顔をしながら傷口を拭いていく五和を見ると数馬はそんな事もあまり気にならなくなる。

周りでの戦闘はよく分からないが、簡単にこんな治療をしているという事は収まってきていると言うことだ。アニーゼを仕留め損ねてはしたが、もうほとんどの敵は撃破されただろうから時間もそわかからず、降伏すると数馬は考えた。

「ところで……数馬さん、さっきはありがとうござい

いました」

「へ？」

顔を拭き終わった五和が、またポーシエから何かを取り出そうとしながら礼を言ってきた。急に言われたため、数馬がすつとんきよな声を出す。

「ほかの方から聞いたんですけど。私が後ろから近づく敵に気づかなくて、数馬さんがその敵を倒してくれたんですよね。本当に助かりました」

ふとそういえば、そうだったと数馬は思い出した。このような時だからこそ、当たり前前の行為なのだが、わざわざお礼を言われると照れくさくなる。

「い、いや……………そんな、礼なんていらんさ。当たり前前のことだし」

「でも、それでもやっぱりお礼ぐらいは……………」

「おーい、まだ終わってないのに、そこでイチャイチャやってるんじゃないのよ」

いつのまにやら数馬の後ろに建宮齋字がいた。数馬が邪魔しやがってという気持ちがありありと読み取れる、恨めしそうな顔をしながら振り返る。

「そんな顔している場合じゃないよな。まだ向こうで7名ほど燻っているのよ。なかなか仕留めるのは難しそうだから、主にも手伝っ

てももらわんとよな」

「まだ抵抗してんのか……………しぶてえ」

あまりのしぶとさに閉口する数馬。敵ながら天晴れと言っべきか、それとも無駄な抵抗と取るべきか、どう言えば良いのか分からなかった。

「さつさと片付けるか……………」

嫌々ながら数馬は重い腰を上げ、戦場に向かった。

「水をくれ！！そうすりゃどうにかなる！！！」

レン以下、7名の生き残りは瓦礫のテントを楯にするなどして徹底抗戦に徹していた。とにかくしぶとく抵抗して起死回生の一手を思いつこうとしているのだ。

だが正直、救援が来るとは思えないのが現状。レンとしても起死回生を狙うより、脱出に変更した方が良いとさえ思えと来た。

「無茶言わないでください!!!」

アニーゼが反撃しようと機会をうかがいながら怒鳴る。普通分かると思うが、こんな状況で水を持っている奴なんぞいないだろう。

現在の状況は周りに天草教徒20名以上。機関銃を持ったクラウド（ドイツ軍のあだ名？みたいなもの。ミサカ妹達の恰好がそれっぽい軍服だから）共10名以上。前者はこちらが飛び出してくるのを待機しているのだろうが、後者は機関銃を撃ちまくってくるので、飛び出して反撃しようにも出来やしないのだ。

ちなみに何回かシスターが魔術を使ったがどれも失敗している。

例えばアンジェレネは『十二使徒マタイの伝承』を基にした、硬貨袋を触媒とする魔術を使用する。そして頭上に投げた硬貨袋から六つの翼が生え、砲弾のような速度で相手を追尾し攻撃してくるのだが、投げた瞬間、ものの数秒で撃墜された。

ルチアはというと彼女は聖カテリナの『車輪伝説』をモチーフにした物で、木製の車輪を爆発させ散弾銃のように数百という鋭い破片を飛ばすという物を使う。が、彼女自身が持っていた車輪が何処かに吹っ飛んでいってしまったらしく、使うことすら出来ない。

アニーゼの場合は、目標を視界にとらえなければならぬのだが、先述したとおり、顔を出した途端、機関銃を射撃するため出すことさえ出来ない。

「水道、水道がどこかにありませんでしたっけ!？」

「んなの記憶に無いです!!!!」

水道大国でもある日本なら、駐車場の何処かに水道の蛇口でも無いかと考えたレンだがそんなこんな瓦礫の山で見つかるわけがない。

苦悶の表情を浮かべた彼が、ふと後ろにいるシスターに目を回す。そのシスターは強行的に反撃を試みようとしたのだろう。無謀にも機関銃が音が一瞬だけ止んだ時、剣を構え突撃を敢行した。

「なっ、やめろ!!!」

レンが引き留める声にも耳を貸さず、そのシスターは無我夢中で敵に突っ込んでいく。そして、当たり前のように銃弾に倒れた。そう、あっさりと、何の特別なことも起こらずに倒れた。

「あっ……………」

それを見ていた彼はあっという間の出来事で、シスターが倒れた瞬間何もしゃべれなかった。もう、2度と見たくなかった仲間が倒れる姿、それをまた見させられた。

彼の感覚が狂いそうになる。まじまじと見させられたその一抹の出来事は、それほどまでに苦しさを与えたと言っただろう。

すぐさま倒れたそのシスターに駆け寄ろうにも、敵の銃弾が降り注ぐ中行けるわけがない。レンは歯を食いしばり、何も出来ない自分の無力さを憎んだ。



「くっそ……………」

丁度、それを上条も見ていたのだろう。彼からも悔恨の声が聞こえた。

この時、レンは反撃という考えが吹っ飛び、次に浮かび出てきたのは、撤退という2文字だった。もう、四の五の言ってられない。このままでは全滅は確定的である。負け戦、これはもう負け戦だ。抵抗したって意味はない。

ただ、捕虜になるのは危険すぎる。だとしたら最後に残るは逃げるだけ。

それでは、逃げるとしてどうやって逃げる？強行突破は先ほどの事から分かるように不可能に近い。

援護射撃による撤退？そんな援護能力を持つやつはほとんどいない。無理だ。

最後に、魔術を使用した上での突破。これはレンが持っている防御魔法を使用し突破する方法。ただしこれは銃弾は避けられたとしても、人の侵入を防ぐことは出来ない。

それにそんな長時間やってられる程、防御魔術は楽ではない。せいぜい持って2分が限度だ。

レンは頭をとことん回転させ、打開策を考える。敵の銃弾は更に激しくなってきたおり、あまり考えている時間はない。

そして彼の中でやっと1つの撤退作戦がまとまった。考えついたらならすぐに実行しなければならぬ。そう思い、レンはアニエーゼの元に向かう。

「アニエーゼさん！！もうやむを得ません！！撤退しますよ！！」

銃声がけたたましく鳴り響く中、レンはアニエーゼ、と一緒にいたルチア、アンジェレネに大声で提案する。

「へ！？撤退！？」

突如として言われた撤退の進言にアニエーゼが驚きの声を上げる。そんな反応は普通に予想していたレンであったが、なんとも予想していない反応があった。

「撤退！？いけません。此処で退くわけにはいかないです」

ルチアから撤退に反対されてしまったのだ。

レンは一瞬、彼女の頭はどうかしているのかとさえ思ってしまった。撤退がいけない？何を言っているのか。この状況を全く分かっていないのか。あらゆる思考がレンの中で巡る。

「何を言っているんですか！！この状況を見てください。戦況は圧倒的に不利です。このままじゃ全滅を待つだけです！！」

「だとしても、あんな異教徒共に背を向けるぐらいであったら最後まで戦う方がマシです！！！」

ルチアの言うことに、レンは苛立ちと焦りで怒りが爆発した。この女が言っている事が、彼が大嫌いだっただ昔の司令官に似ていたのかもしれない。とにかく、彼は憤怒して怒鳴りつけた。

「ふざけたこと言ってるんじゃないぞ、この尼！！！！僕が必要悪の教会から受けた命令は貴方たちの援護だ！！！！決して全滅するま

で戦えとは命令されていない!!!僕たちの最大目標はオルソラの奪還だ。此処で全滅しちまったらすべて水泡と化すんだよ!!!」

般若のような表情でレンはルチアに言うが、彼女は怯えることはなくむしろ彼を侮蔑するような目つきで言い返した。

「そのような事を言っていますが、実際の所あなたは怯えているのではないですか？先ほどから私達のためとほざいています、それも全て偽善にしか聞こえませんか」

この一言で何かがレンの中で壊れた。とつとつ口の歯止めがきかなくなる。

「貴様が偽善と思うんだつたらそれで構わない!!!そうだよ、怯えているに決まってるんだろ!!!貴様は味わったことがあるか!?何kmにもわたる地雷原を歩き、何十もの機関銃の火線に曝されながら突撃し、何百機もの爆撃機による爆弾の雨の中、死に物狂いで民間人の避難をしたことが!?僕は怖いんだよ、自らが倒れることも仲間が倒れることも!!!」

もしも貴様の言うとおりの徹底抗戦したとして隣にいるアンジェレネちゃんはどうなる!?こんな幼い子が倒れるなんて僕は絶対に許さねえ!!!」

目玉が飛び出るかと思うほどの剣幕でレンはルチアに怒鳴った。そしてすぐに彼の剣幕で怯えているアンジェレネを抱きかかえる。

「文句は言わせません。撤退を開始します。上条!!!ステイル!!!インデックス抱えてこつち来い!!!」

恐ろしい声で怒鳴るレンに、上条達はすぐに来た。

「何だ。どうするつもりだ？」

「上条、ステイル。良く聞け。今から撤退作戦を実行する。僕が防御魔術で攻撃を防ぐから僕たちの前衛を頼む。インデックスは僕が預かる。この撤退、失敗すれば命はないんだ。頼むぞ」

「あ、ああ分かった」

「問題ないよ」

上条、ステイルの双方から了解を得るとレンはすぐにインデックスを受け取る。

「よし、そのシスター！！貴様も前衛だ。安心しろ、しっかり守ってやる。ルチア、アニエーゼ。あんたらは後方にいる。以上だ」

大まかな説明をすると、レンはすくつと立ち上がりインデックスを軽々と抱え上げ、アンジェレネを背中におぶさった。

「わわっ！！」

「すごいんだけど………なんか少し複雑かも」

「ごたごた言わない。さあて、やるぞ」

上条とステイル、そして1人のシスターが前衛。中央にレンとインデックス+アンジェレネ。後衛にルチア、アニエーゼがつく。

「Fort Erie Barrier to protect  
the homeland faithful!!!」

レンが防御呪文を唱えると、薄い煉瓦のような物が全員を囲い込む。視界は悪くなるが全く見えない訳じゃない。問題なしだ。

「全員走れえええ!!!」

レンのかけ声と共に撤退が開始された。

「敵の残党!!!こちらに向かってきます!!!とミサカは全員に報告します」

「くそ、面倒くさいな。とミサカは機関銃を撃ちまくります」

躊躇わずに機関銃を撃つ妹達であったが。

「ちょ、ぜ、前面にあの人が!!!とミサカは顔を真っ青にして指さします」

前衛に上条がいると分かったやいなや、ここにいる妹達全員が機関銃を撃つことが出来なくなってしまうた。

「おい！！敵来てるぞ！！！」

「で、ですが！！！」とミサカはおろおろします」

上条には妹達が付けているヘルメットのせいも妹達の顔は見えていないようだ。その動きに躊躇がない。

どんどん敵が近づいてくる。しかし、撃って当たってしまえば、非殺傷弾だとしても、凄まじい罪恶感にとらわれることになるという考えが妹達を覆った。八雲藍やらだったら戸惑うことなく射撃をしただろうが、そこまでの勇気があるわけではない。

「くっそ！！とミサカは機関銃を持って敵を避けます」

そこにいた3人の妹達はゴロゴロと転がりその場を離れた。

「ああ、やっぱり無理だったか……………」

「そんな事言っていないで捕まえるよな！！！」

「いや、そんな慌てなくて良いや。多分、人じゃあ無理だろうし」

少し離れたところで数馬達はレン達が逃げていく様を見ていた。いとも簡単に逃げられたため動揺する建宮だが、数馬は落ち着いて無線を取り出した。

「あゝ博霊靈夢、聞こえるか？聞こえたら応答ねが……………つてあつてきた。よし、砲撃頼むわ。目標は逃げ出したシスター部隊。そつちからでも見えたと思うが……………戦車からじゃ丸見え？なおよし。んじゃ、よろしく」

会話の流れから察するに、数馬は一気に砲撃で仕留めるつもりだ。

確かに合理的である、この指令した1発が最悪の業火となって報復されるとは彼は考えていなかった。

「なんか調子よく脱出できていますね……………」

あの状況下で何も不測の事態が発生せずに脱出しているレン達。

「なあ、おかしくないか？追っ手が全く来ないぞ？」

レンと童謡、上条も訝しんでいる。

「嫌な気がしますね……………防御魔術もあと少ししか持ちませんし」

2分間が限度な防御魔術を彼はすでに1分と40秒使用していた。レンにかかる負担はどんどん大きくなっていく。

「だったら、そんな事考えているより、早くここから逃げ出さないと不味いんじゃないか」

ステイルが若干しんどそうに言ってくる。彼の体力のなさは今もなお健在のようだ。

「とにかくこの駐車場をとっと抜け出さないといけないです」

アニエーゼが話しの流れに入ってきた。ちなみにルチアはかなり不機嫌そうな顔で黙りこくっている。

「……………そうですね」

とりあえずはここから逃げるという事で決まったのだが、どうもこの駐車場は走りにくい。テントの残骸やら鉄骨やらの障害物が多いのだ。本来、何も無ければ簡単に進めるであろう距離を、全員が全員難儀していた。

「こういう風に時間がかかるのも敵の策略じゃないかと思えてきますね」

ぼそりとつぶやくレンの声を聞いたインデックスが反応する。

「それは同意するしかないかも。やっぱり追っ手が来ないっていうのはおかしい」

「だとしたら防御魔術をといて良いのか、良くないのか。分かりませんね……………って言っているそばから悪いですけど、もう無理です」

ぶつりとレンの防御魔術が無くなる。これでは敵にどうぞ攻撃してくださいと言っているようなものだ。



「不味い、不味い。もっと早く走ってください！！何か嫌な予感がしてきま

「  
レンの警戒を促す言葉が言い終わる前に、戦車から砲弾が間近に着弾した。」

「ビンゴ！！そのまま撃ってけ！！」

双眼鏡で着弾を確認する数馬だが、怪我をしない非殺傷弾だからこそ、彼は今ここまで罪悪感無しに言っている。

ちなみに戦車は問答無用で砲弾を放ち続けている。容赦ない博霊霊夢達である。

「OK・OK・良いぞ。これで終わる」

その時の数馬の顔はまるでエースコンバットの最終ステージで敵を後ミサイル1発で撃破出来るという瞬間まで来た時のようだ。

で、そういう時に限って彼はよく失敗してGAME OVERになっただけ。そう、本当に失敗しやすい。確率としては97%程度。

「どっせい！！！！」

幼女2人を抱えながら砲弾を避けまくるレン。ちなみに砲弾は前後左右無差別に撃たれているので逃げる事が出来ない。

上条達が今どこにいるかよく分からない。それを見ている余裕さえないのだ。

インデックスとアンジェレネは恐怖によりしゃべれない。とにかく、砲弾の雨は恐ろしかった。

「e i n s z w e i G u t e n M o r g e n 壹貳 壹貳  
いちいちいち！！！！！！」

すでに余裕のなさかよく分からない事言いながら砲弾を避けている。

やばいのだ。とにかく、やばいのだ。

どこかに絶体絶命のこのピンチを乗り切る手立てはないか。レンは限界まで辺りを見回す。砲弾の音を聞き分けながら首を回す。斜め前方、約15m。見つけた。

水道管だ。

「い、行けますか！？あれ、行けますか！？いや、無理か………いや、何とか」

正直たどり着けるか微妙な位置にあるが、此処で砲弾のタップダンスをしているよりは生存確率が高い。幼女2人抱えてのダンスはちよつとどころか鬼畜なまでに厳しいのだ。

決心が出来た瞬間、レンは韋駄天のごとくかけだした。

「どりゃああああ！！！！」

気のせいか砲弾の狙いが正確になっていく。確実にレンにだけ狙いを定め始めた。水道管を壊してくれるのならレンにとってはありがたいのだが、どうもそうしてくれそうにない。

5m走っただけで砲弾が6発は来た。敵の戦車がいくら砲弾を搭載しているか知らないが、さすがに多すぎだった。

一方の数馬。

「やばいやばいやばいやばい！！！！！！射撃続行。水道管に近づく奴

を仕留める！！！！」

最悪な展開が数馬の頭に過ぎってきた。何であんな所に都合良く水道管があるのかは知らないが、もしもレンに使われてしまったとしたら。

その時には必ずあの水の化け物が出てくるに違いない。それはつまり数馬達の敗北を指し示すのだ。断固としてそれだけは阻止しなければならぬ。

「くっそ！！何故当たらない！！！！」

だが、いくら砲弾が着弾してもすべてレンには避けられるという。そんなもどかしさに、数馬は苦しみを覚えていた。

「も、もうちょい！！！！」

幼女2人背負ったのダッシュというのは彼の体力を根こそぎ奪っていく。水道管までの距離は8mと迫ってきているのだが、そこから先は砲弾の雨によって進むに進めない。

「……………迂回しかないか」

直線上が厳しいとなればそれしか方法はなくなる。それも出来るだけ大回りで、唐突に、敵戦車の照準が合わない内に水道管に到達しなければならぬ。

敵の砲撃にはごく僅かではあるが、間が空くときがある。その時が勝負所だ。

「少ししたら………」

今度は右に砲弾が落ちた。ほこりが目に入り視界がぼやける。2秒もしたら次の砲弾が着弾する、はずだが来ない。

そう、もうもうと辺りに立ちこめる煙がレンを包み込むように見えなくしているのだ。砲撃するにも命中率の低下を懸念して射撃できない。

気付いたレンはすぐさま駆けだした。

煙の中を突き出ると、水道管から直線上の道に砲弾がいくつも着弾していくのが見えた。あれを喰らったらレンといえども避けることは出来なかつただろう。

大きく迂回しながら駆けているとしても、距離は20m程。敵戦車の照準修正がどのくらい時間を要するのかは知らないが、確実に到達出来るはずだ。

「うらあ ああああああ！……！」

テントやらの残骸を踏みつぶし、彼は雄叫びを上げ突撃する。水道管まで10m。

「戦車隊！！！何やってる！！目標の照準変更急げ！！！」

数馬は喉が枯れる程怒鳴り尽くすが、そんな事したところで変わりはしない。

レンはすぐにも水道管に到達してしまっただろう。戦車隊にはもう期待は出来ない。

だとしたら最後に残るは己の射撃のみ。

「難易度高すぎるだろっ！！！」

背中に掛けてある99式小銃を取り出し、おおよそ90mの距離にいる目標に対して照準を定める。相手は素早く不規則な動きをしているため狙いが付きにくい、そこは予測するしかない。

「……………」

「じくりと生唾を飲み込む。この1発が外れば、レンは水道管に着く。緊張の余り手が震え始める。レンから水道管までの距離、7

m。

数馬はレンの背中に目がけてトリガーを引く。

数秒経ち、レンは衝撃を受けたように倒れ込んだ。

S I D E レ ン

強い衝撃を感じた。それも心臓辺りに。走っている時にそんな衝撃を受けたら、倒れるしかない。

「ぐっ……………」

前のめりに倒れるが、それでもこの2人だけは守らなければならぬ。無理に手を回しておんぶするような形をとる。顎と腹、そして膝を思いつきり地面に打ち付けた。痛い。

「大丈夫ですか！？2人とも！！」

自分の体がクッションとなったはずだから怪我はないはずだが、それでも不安だ。

砲弾の事やらなんやらあるが、倒れたところを敵が確認していればもう撃っては来ないはず。





「レ、レン……………?」

もう笑うことしかできないや。何だよ。畜生。またこれか。あの時と同じか。また無くしちゃったよ。もう嫌だ。すべてがイヤダ。もう、

ナニモカモ、ブチコワシテヤリタイ。

「Rest In Peace……………」 《安らかに眠れ》

だから、インデックスには眠って貰わないと。

この2人はここに置いていて大丈夫だよな。

じゃあ、ヤロウ。

レNSIDEOUT

「よっしやああ!!!」

数馬の弾丸は見事に命中した。鬼は消えた。後はもう楽だ。敗残

兵共を刈り取っていけばいい。

レンには多少、罪悪感はあるが非殺傷弾なのだから死ぬことは絶対にならないから安心だ

「よし、次っ……………」

そう、そう思い命令しようとした途端、ガガツと戦車隊から無線が入る。

「て、敵兵！！未だ健在です！！とミサカは驚愕の声を上げながら報告します」

「はっ！？」

その無線を聞くやいなや、数馬は自分が狙撃した方向を見た。

いた。レンはまだ立っていた。なんということだろうか、今、戦車隊も油断していてすぐに砲撃できない。数馬ももう1度狙撃しようとしたが、遅かった。

すでにレンは水道管の前に立ち、蛇口をひねっていた。どばどばとこぼれ落ちる水は、崩れていく戦況を暗示しているかのようだった。

「世界を構築する5元素の1つである、大いなる水よ

それは命を保つ優しさであり、邪悪を洗い流す力なり

み込む物なり

それは緩やか流れを起こすと共に、全ての邪悪を飲

その名は水、その役は弓

顕現せよ、悪を砕いて力を使え」

レンの詠唱と共に水は一塊になり、人の形を成していく。

彼の表情は魔術によって作られていく怪物を見ていくことに不気味な笑みになる。その笑みはまるでこれから行うであろう事を楽しみにしているようだ。

そして、ついに恐怖の権化とも言える怪物が出来た。

「ネロ……………相手はクラウドです。残虐の限りを尽くして殺し尽くしてください」

レンの命令を聞いた怪物は、ゆっくりと動き出した。そう、地獄を作るために、のっそりと。

**オルソラ奪還戦争・大激戦「中編・大砲撃」(後書き)**

反省会は次の1時間後の後書きで行います。  
読んでいただきありがとうございます。

オルソラ奪還戦争・大激戦「後編・血みどろ」(前書き)

これで、これで第7巻終了です!! ほんとうにすみませんでした  
!!!!

## オルソラ奪還戦争・大激戦「後編・血みどろ」

11時5分 パラレルスウィーツパーク

「……………今のところ、連絡はないですが大丈夫でしょうか？とミサカは不安そうに河城に聞きます」

「まあ御坂妹もいますし、大丈夫でしょ。とミサカは楽観的な見解を示します」

第1、2砲塔の全員は支援の要請も無いのでのんびりと休んでいた。たまにちよくちよくあちらこちらを双眼鏡で見回していたりもしている。だが、敵影は確認できず、緊張感もクソも無くなっていた。

「えっと今回の主目標は命を狙われているというオルソラ氏を12時に指定の場所に運ぶと言うことですね。もう1時間もありませんよ？とミサカは確認をとります」

「ああ、確かにそうですね。じゃあ11時30分にオルソラ氏を運ぶことにしましょう。とミサカは適当に時間帯を決定します」

「だとしたら……………残り25分ですね。とミサカは時計を使って残り時間を確認します」

地味に細かく後々の事について話している彼女達だったが、河城が双眼鏡を再度見ている途中、何かを見つけたかのようにぴたりと止まった。

「ん？どうしました？とミサカは不自然に固まっている河城を不自然に思い質問します」

その河城はゆっくりと、双眼鏡を上にもたせかけ、そしてまた数秒そこを凝視していると、緊張した面持ちで答えた。

「いや……………気のせいじゃない。上空に何かいる。とミサカは確信を持って言い切ります」

「え！？ど、どこですか？とミサカは自分の双眼鏡で確認します」

何かがいると聞いた途端、すぐに上空を探してみるがおかしいところは見つからない。

「どこですか？全く見えませんが……………」

「まったく、あなたの目は節穴ですか？とミサカはバカにしながらも上空に向かって指を指します」

河城の指の差す方向、それはオリオン座だった、はじっくりと見ても何も変わりはない。普通のはずだ。河城がいらいらしながら、自分の双眼鏡を見せる。

「……………？」

別に何の変哲もない、そう言おうとした時、やっと気付いた。

オリオン座の腰に相当する3つ星が、4つ星になっている。つまりは歪んでいるのだ。

「どういふことですか!?!とミサカは余りの異常事態に慌てながら驚きます」

「分かりません。ただ……………」

オリオン座の歪みは更に広がっていき、ついには空にぽっかりと空く大きな穴になった。

「……………」

第2砲塔の奴らも気付いたのか無線で連絡を入れてくる。だが河城達もとつくのとうに気付いているのだから返答は、分かっている、とだけで済ませた。

それよりも今、何が起ころうとしているのか、それが気になってしょうがなかった。

「……………何か、出てきます。とミサカは緊張した面持ちで報告します」

「……………」

ずもも…………と、よく分からない物体が出てきたかと思うとそれはすぐに弾けた。

辺りに一瞬にして閃光がほとばしる。双眼鏡を見ていた河城は間一髪、目をそらした。閃光は5秒間も続き、周りが眩しくて見えな  
いほどだった。

やっと収まったかと思い、河城が再度上空を見る。

「なっ……………!?!」



見た途端に、彼女は目を見張った。

上空、丁度オリオン座の3つ星あたりの、そこから、何百人とも思われる騎士達が降下していた。

「か、河城！！これは一体！？とミサカは双眼鏡をのぞきながら聞きます！……！」

「知りません！……！とミサカは訳が分からないのでそう答えます！……！」

降下してくる騎士達は全員が全員、甲冑を前進に身にまとい、いかにも中世ヨーロッパを思い出させる。しかし、正体が全くつかめないとなれば、彼らが味方なのか敵なのかさっぱり分からない。

「河城………あれって味方ですかね？とミサカは最も気になっている事を質問します」

「……………」

河城は何も答えない。ただ、じつと双眼鏡を見ているだけだ。騎士達はパラシュートも無いのにゆっくりと、本当にゆっくりと降下してくる。まだまだ降りてくるのには時間がかかりそうだ。敵にしてはのんびりとしているため、もしかしたら味方なのではないかと思えてしまう。

「味方ですかね……………とミサカは適当に決めつけ……………」

「いいえ、違います。とミサカはすぐさま否定します」

突然、河城が口を開き否定した。彼女の目はまだ双眼鏡にくっついており、離れようともしない。

「え、ど、どうしてですか？」とミサカは河城の意見に不思議に思い質問します」

河城は少し考えているのか答えをすぐには返さなかった。10秒して、やっと喋り始めた。

「いくつか理由があります。まず、大きな理由としては1つ、援軍が来るなんて情報は聞いていないこと。まさか援軍が来るなんていう可能性があるにもかかわらず、数馬光太郎が伝えてこないというのはおかしいですね。

2つ。服装が違う。味方全部隊の中に、あんな重厚な鎧を着ている人がいましたか。唯一の例外である数馬光太郎はドイツ式の鎧でしたが、今降ってきている奴らが着ているのはイタリア式です。

そして、これは小さな理由ですが、ミサカはこれで判断しました。元来、落下傘兵というのは地面に降りたらずくに戦闘に入れるよう武装はきつちりと用意しています。それと同じように、奴らはきつちりと剣を構え臨戦態勢になっています。

これであなたにも分かるでしょう？とミサカは説明を終えます」

河城の説明は納得出来る物だった。そしてその説明から、あの騎士達がなんだかは、簡単に分かる。

「つまり……………そういうことですか？」とミサカはもう1度確

認をとります」

「はい、奴らは間違いなく、敵です。<sup>エネミー</sup>とミサカは一筋汗を垂らして答えます」

その一言を言い終わった後、河城達はすぐさま臨戦態勢を取り始めた。

同時刻　ドイツ　ルクセンブルク　超高層ビル内　一室

「もう1度聞く。ローマ正教の騎士団の1つが消えているだど？」

「はい……どうやら移動魔術による転移であるようです」

深刻な表情をとるフォツケに、また新たな情報が入った。

「会長！！敵騎士団の転移先、判明しました！！」

伝令が来るやいなやフォツケは飛びついた。

「どこだ……どこにいる……！！」

「はっ、そ、それが場所は日本の東京、西部の廃劇場です」

報告を聞いたフォツケは顔が青くなり、ガクツと膝を突いて頭を垂れた。

「そんな………馬鹿な」

悲痛な声が部屋に響き渡った。

11時10分 薄明座

「戦車隊！！奴を止める！！！！」

叫ぶ数馬の声も虚しく、水の化け物は止まらない。砲弾は着弾してもすべて通り抜け、銃弾はすぐに取り込まれる。

「数馬光太郎！！突撃して魔術師を叩けばいいのでは！？」

「無理だ！！！！接近する前に仕留められる！！」

砲撃によって魔術師<sup>マジック</sup>を仕留めようとしてもすべてあの化け物が防御してしまう。すべての攻撃手段は通用しない。そう思った数馬だったが、1つだけまだ残っていた。

「そうだ！！第4御楯隊に！！！！」

支援砲火、それが切り札だ。支援砲火による砲撃によってあの化け物を釘付けにし、その間に戦車で片を付ける。それしかない。

数馬は急いで無線を取り出すと、周波数を合わせて第4御楯隊に向け連絡を取った。ざざつと砂嵐のような音が聞こえた後、無線が繋がった。

「よし！！こちら第1御楯隊 副隊長数馬光太郎！！第4御楯隊、聞こえるか！？どうぞ！！」

返答は直ぐに来た。

「はい！！聞こえています！！どうぞ！！とミサカは切羽詰まった声で返事します」

「そちらからの支援砲火を要請する！！包囲は先ほどと大体同じで良い！！どうぞ！！」

ひとまず連絡できたことに安堵した数馬だったが、次の返答で凍り付いた。

「それは無理です！！とミサカは状況的な判断から拒否する言動を言います」

「はい！？どういふことだよ！！？」

「支援して貰いたいのはこっちです！！ただ今、パラレルスイッチパーク内に敵兵数百名が侵入！！迎撃していますが、敵の数が多くて持ちこたえられません！！！！とミサカは悲痛な叫びを上げます」

彼は心臓が凍り付いたかのような心境にとらわれた。

一体どこからそんな物が沸いて出てきたのだという疑問よりも先に、護衛対象であるオルソラがピンチだという大問題がわき出た。何とも頭の悪い話したが、数馬もまさか原作にないような敵の出現は予測が出来なかったのだろう。防御陣営の人数はたった9人しかないのだ。

無線からは敵兵数百人と報告があった。そこから戦力差が絶望的であるのは言わずもがな。さらには装備にしても近代的であるので大型の機関銃のみ。多分、相手は剣や魔術などを繰り出してくるだろうから、接近戦に持ち込まれたら全滅だ。

「……………」

もう、なんと言ったらいいか数馬は分からなかった。状況はそれほど困難な局面にたっしている。今、ここにいる戦力を全てそちらに向けるとしても、何人が生き残れるか分かったものじゃない。パラレルスイーツパークに向かうという事はつまりこの場から撤退するということだ。

だが、あの化け物に背後を見せたら最後、死しか待っていない。どうすることも出来なかった。

「どうしたよな！？支援砲火は！？」

建宮が顔を真っ青にしている数馬に叫ぶ。

「……………パラレルスイーツパークに敵の援軍が来ている。しかも数百名」

数馬はわなわな震える声で、それだけ建宮に伝えた。一瞬、啞然とした表情をした建宮であったが、すぐに事を理解した。

「なっ……………」

あまりの衝撃に、彼も言葉を失った。

「ど、どうするよな!？」

せまりくり自陣への危機に、建宮は慌てて数馬へ詰め寄った。

「……………」

どうする、そんな事を聞かれたとしても数馬に答えようはない。先述した理由から大人数での撤退は危険だ。だからと言って、少数で行ったとしても敵は数百名、焼け石に水だ。

どちらも選べない状況に悩まされる数馬は、ふと1つの考えに至った。

少数で行けばいくらか密集したとしても各個撃破で全滅する。だが、自分1人で行けばどうなる?と。

1人であれば、少数での密集行動は不必要、それになにより敵に感づかれにくい。

これしか方法はない、そう数馬は結論付けた。

「俺1人で第4御楯隊の援護に向かう。建宮達はいくらでも時間を掛けて良いから、あの化け物を足止めしながら撤退してくれ」

「単独で行く!?!何馬鹿な事言ってるよな!!すぐにやられる!!」

「この状況じゃあまり人数は持つて行けないだろ。どうもあの化け物、俺たちが撤退しないから攻撃が甘いだけで多分、撤退しようとしたら間違いなく本気で殺しにくるぞ。だったら1人で行った方が面倒くさくなくて良い」

「しかし……………」

なおも引き留めようとする建宮に数馬は説き伏せるように言い放つ。

「お前は天草十字凄教の教皇代理だろうが！！俺の事は心配しなくて良いから早く教徒達をどうにかしろ！！」

「……………」

厳しく言い放った数馬に建宮はもう言い返そうとはしなかった。険しい表情をしていた数馬はすぐに柔らかい穏やかな表情になると静かに言った。

「大丈夫だ。こっちだって素人じゃない。死にはせんさ」

そう彼が言っても、建宮は何も答えない。

「……………じゃあ行く」

釘バットと雷切を双方、片手に持ちつつ、数馬は姿勢低く走り出そうとする。が、ふと何を思ったのか彼は建宮に振り向くと同時にひょうひょうと普通に言った。

「あと……………五和に会ったら、オルソラと一緒にスパゲッティ



作るから来てくれとでも言っておいてくれ」

そんな、いろんな意味で最も危険な台詞を残して数馬は駐車場から姿を消した。

11時25分 パラレルスイーパーク 売店地下

「シャッターは閉じましたか!?!とミサカは確認をとります」

「はい!!完全に封鎖しています!!とミサカは報告します」

「機関銃の点検完了!!とミサカは大声で報告します」

この売店地下室には第4御楯隊全員、そしてオルソラがいた。

敵である騎士達が降下してきてから、第4御楯隊の死闘は凄まじかった。

まず、敵がほとんど降下、そしてしつかりと侵入して来たところに砲撃を敢行。誘い込まれた騎士団は一時的にはあるがパニックに陥った。ここで70名から50名は撃破したと思われる。

しかし、砲陣地というのは攻撃してしまうと、ばれてしまうという物。10分も持たずに陣地を放棄せざるを得なかった。

その後、約5名の天草教徒と合流。オルソラの所へと撤退した。売店とは別の入り口から入るまでに、追撃も受けているのでいずれはこの場所も分かっってしまうだろう。ここからが正念場なのだ。

### 第1目標

### オルソラの防衛

### 第2目標

### オルソラの脱出

この2つをクリアしなければどっちにしるGAME OVERだ。

相手は数百名、もう少し正確に言えば600名前後に対抗するのは非情に難しいと言える。

以前紹介したランチェスターの法則において、攻撃側は防衛側の3倍以上の兵力を注ぎ込まなければならずと説明されているが、3倍どころか60倍もの兵力を敵は所持している。硫黄島の戦いにおける日米両軍の戦力差よりも酷い。

だが、そんな理由で負けるわけにはいかない。彼女らが望むのはただ1つ、勝利だ。

「敵の侵入経路は多分、左側からですから警戒は怠らないでください。右側はまだばれていませんがいずれは来るかもしれませんけど。シャッターの方は大丈夫でしょ。数多くある店の中から探すのは不

可能でしょうし。とミサカは予測します」

「了解、とにかく頑張るしかないですね。とミサカは返事を返します」

銃弾の用意は1万と600発、つまりは1600ものベルト式弾薬がある。ただ相手の数は多すぎるため足りなくなるという自体もあり得る。河城はちらりと持ってきてしまった実弾6000発、そしてバンツァーフアウスト対戦車擲弾計32発を見た。出来るだけならこいつを使いたくないというのが彼女の心境だ。

「近接武器は天草教徒の方々以外はサバイバルナイフしかありませんからね。とミサカは困ったなと思いつつぶやきます」

「最悪、能力ぐらいいは使っても構わないでしょ？とミサカは適当な案を述べます」

「……………それもいかなものでしょうか？とミサカは悩みながら言います」

4名の天草教徒達は近接戦に向いている装備ではあるが、妹達は先述したとおりナイフ1本という貧弱な装備しかない。このため、出来る限り近接戦は避けたいところだ。

「ミサカ18234号、盗聴器から何か反応は？とミサカはさつきから耳を研ぎ澄ましてるあなたに向かって問いかけます」

彼女達は音がしないと電波を発信しないタイプの盗聴器を左右の出入り口に設置してきた。

これは常時発信タイプよりも電池寿命が長い。場所は入り口の間近なのでぎりぎりこちらまで電波を飛ばせるはずだ。

「待ってください。今のところ反応はありませんが……………」とミサカは慎重に耳を研ぎ澄ませながら報告します「

「……………来なければ良いんですけどね。とミサカは不安になりながらその報告を聞きます「

もつとも、敵が来ないと言うことは絶対にあり得ないことなのだが。

さて、妹達は天草教徒と共に警戒しているメンバーを除いて作戦を確認する事にした。

「12時に此処の真上の店の小部屋にオルソラを連れて行けば作戦成功というわけですよね？」とミサカはもう一度確認するため全員に聞きます「

一同問題無しとばかりに頷く。

「つまり、後30分は持たせないと行けない。そういうわけですか……………」とミサカは敵が必ず来ることを確信しながら落ち込んだように言います「

「間違いなく、来るでしょうね。とミサカは心拍数が上昇するような気分にとらわれながら頷きます「

30分、持つだろうか？いや、正直言ってしまうと厳しい。

「……………とにかく、天佑なんてものにも頼ってやるしかないですね。とミサカは非科学的なことを皮肉混じりに言います」

「ある意味、此处で負けたらミサカ達はくさびを打ち込まれたようなものです。とミサカは押し寄せる重圧に緊張感を感じます」

全員がこれから来るだろう戦いの重大さに口を閉ざされる。が、それはすぐに破られた。

「河城！！左側の盗聴器に反応ありました！！！！敵が来ます！！！！とミサカは顔を凍り付かせて報告します」

「来ましたね！！！！全員、位置に付け！！！！とミサカは号令します」

妹達は全員、機関銃に取りつく。1人は弾薬を装弾し、1人は射撃するため2人ずつだ。

河城はオルソラの方に向かい、布と耳栓を見せた。

「オルソラ！アクイナス。あなたにはあまりにもむごい光景かもしれません。耳栓と目隠しに布でも付けてください。とミサカは差し出します」

オルソラは少しだけ河城に微笑むと彼女の差し出した物を受け取らず、首を横に振った。

「ありがとうございます。ですが……………私めのために戦ってくれている方々を尻目に何もせずにいるというのは聖職者としていけないのでございますよ」

オルソラのその素晴らしき精神に河城は感慨深きものを覚えたが、そんなことは言っている場合じゃないのだ。

「いいえ。ミサカ達は大丈夫です。それよりもあなたの目に万が一にでも、汚い物を見せるわけにはいけません。とミサカは無理矢理目隠しと耳栓を付けます」

オルソラが言い返す暇も与えず、河城はすべてを付け終わってしまった。

「外さないように三重で結びましたので。とミサカは意地悪く言います」

河城はすぐに左側の機関銃に向かう。

「まだ見えませんか？とミサカは機関銃手に向かって聞きます」

「いいえ、まだ。ただ、嫌な金属音が反響して聞こえてきますね。とミサカは答えます」

確かに、ガチャガチャと耳にまとわりつくような音が幾多にも聞こえる。敵は近いようだ。

「……………これが正念場ですね。とミサカはつぶやきます」

「……………これが終わったら上条当麻のプロマイドをもっと数馬光太郎から貰いましょう。とミサカは死亡フラグを折るつもりでフラグを設置します」

「ははっ、じゃあぶっ壊してやりましょう。とミサカはその面白い

考えに賛同します」

ガチャガチャという音が近くなっていく。それが10秒も続けば音は最大限になる。

ついに来た。

「まだ、まだ撃たないでくださいよ。とミサカは小さくささやきます」

「分かってます………とミサカは引き金に指をかけながら小さきささやき返します」

電気は敵が来る直前には消してある。暗闇の中、夜目で敵を視認するのだ。

見えた。馬鹿正直に列を作って接近してくる。

此処の通路はほぼ一本道、銃弾を避けることが出来るところは無い。そんな中、彼らは真っ直ぐに進んできた。河城達にとっては絶好の標的ターゲットに他ならない。

「もう少しです……10mで撃ちましょう。とミサカは一言言います」

敵が近づいてくる。20mも無いだろう。

18.....

16.....

15.....

14.....

12.....

11.....

10m。

「今です！！！！とミサカは射撃を命じます」

機関銃手が号令と共に引き金を引く。

カタカタと機関銃音が鳴り響き、すぐさま何十発もの弾丸が吐き出された。予期せぬ攻撃に騎士達は反応する暇もなく撃破される。

「そのまま射撃続行！！！！とミサカは機関銃手に厳命します」

真っ直ぐな通路に密集していた騎士達は1発の弾丸で数人が撃破される事態になった。

5秒もすれば100発のベルト式弾薬は無くなるが、すぐに次の弾薬が装填される。



ものの15秒は続いただけで通路には仮死状態の騎士が重なり合うように倒れていた。

騎士団の小隊長らしき人物が残りの少数と共に逃げ出した。彼らは逃げ足だけ早くとつと消えてしまった。

「第1波は防ぎましたね。とミサカはガッツポーズをしながら嬉しそうに言います」

「そうは言ったつてすでに弾薬を300発は使ってますよ。今仕留めたのはせいぜい15から20人が良いところですから……足りなくなるのは目に見えてます。とミサカは危惧するように言います」

300発で20人、1人に15発という単純な計算。敵が600人前後と考えると15×600で9000発。これに加えて命中しない弾も含めるとどう少なく見積もっても1万6000発は超える。ましてや相手も馬鹿正直に直進行軍してくるはずがない。弾薬の消費は加速するだろう。

「そこら辺は工夫していくしかないですね。とミサカは良いながらも苦しい表情をします」

「白兵戦の用意もしとかないと……とミサカは最悪の事態も想定します」

勝利したというのに、薄暗い気持ち全員を包み込む。

「とにかく天草教徒の方々にも抜刀だけはしておくように言っておきましょう。とミサカは適当な案を出してお茶を濁します」

「それで良いでしょ。とミサカは答えます」

（3分後）

「残り、18分間。まだ来ませんね。とミサカは緊張感で震えながら隣のミサカに言います」

「もうこのまま来なくて良いです。とミサカはやけくそ気味に言います」

先ほどの戦闘で敵を数名逃している。だから間違いなく此処の情報は知られているはずなのだが、相手も相当の準備をしているのかなか来ない。それが妹達や天草教徒達に不安や恐怖心を与える。きりきりと胃が痛み、中の物をぶちまけたい衝動に彼女たちは駆られる。

もう士気が崩壊する、そう全員が感じたとき、それは来た。

「……河城！！左盗聴器に反応！！敵兵来ます！！！！とミサカは半ば叫ぶように言います」

「来たか！！！！とミサカはいよいよだと、決戦の念も込めて返事をします」

第4御楯隊全員はすぐに持ち場につく。

散々待たされた彼らは士気高揚、戦意も急上昇だ。

「敵総数、おおよそ200名!!!とミサカは足音から判断して報告します」

「よろしい!!!とミサカは報告に満足しながら言います」

「機関銃、異常なし!!!いつでも射撃できます!!!とミサカは報告します」

「了解!!!とミサカは返します」

再度、あのガチャガチャという音が通路に鳴り響く。それも駆け足。

敵も今度は油断せず、攻撃を仕掛けようとしている。第4御楯隊全員の心臓の高鳴りは最高潮に達した。指先が震え、顔から汗が噴き出る。

「見えました!!!とミサカは敵発見の報告をします」

「よし、今度は遠慮しなくて良い!!!存分にぶちのめしてやれ!!!とミサカは勇ましく命令を出します」

「敵、距離30m!!!とミサカは伝達します」

「20mから射撃開始!!!とミサカは言います」

敵との距離はどんどん縮まる。相手も必死なのか叫び声さえ上げ

て突っ込んでくる。

25 m到達。

「狙え！！とミサカは勢いで馬鹿な事を命令します」

23 m。

「とつとと来やがれ！！歓迎準備委員会がお待ちかねだ！！とミサカは乱暴に口走ります」

22 m。

21 m。

20 m

「撃て！！とミサカは射撃を開始させます」

機関銃が命令と同時に唸り声を上げ始める。今度は遠慮なし、銃身が焼けるほどの勢いで撃ち始めた。すぐさま敵の先頭に立つ者がばたばたと倒れ始める。狭い通路に放たれる銃弾はほとんどが標的に命中する。

「撃て撃て！！とミサカは興奮して叫びます」

弾切れ、弾薬装填。

「金属野郎をぶちのめしちまえ！！とミサカは絶叫します」

「早くしろ！！とミサカは装填が遅いことに苛立ちます」

「うるせえ！！とミサカは急かされるのが嫌いなので怒鳴り返します」

そう言いつつ、装填完了。射撃再開。

敵にめがけて弾丸は突き進み、貫くように当たる。すぐに10人が倒れる。が、敵はいくらでも湧き続け、いつころにその数を減らさない。次第に7m先の通路には倒れた騎士達の山ができ、封鎖されるような形になってしまった。

「ちっ、射撃中止！！とミサカは弾薬を無駄にしたいのでそう命令します」

今のうちに機関銃の銃身も交換しておく。素手では熱いので手袋でゆっくりと外す。

「交換完了！！とミサカは報告します」

「OK！！とミサカは頷きます」

仮死状態の騎士達の山がぐらぐらと揺れている。どうやら山を崩そうとしているらしい。

あの山が崩れたとき、射撃が再開される。

「さあ、早く来い……とミサカはつぶやきます」

山が大きく揺れ出し、ついに雪崩のように崩れ始めた。

どさどさと音を立てて崩れていき、山が半分まで崩れ去ったときだ。

「今だ！！とミサカは命令します」

山の前にいるであろう騎士達に向け射撃が再開された。2秒間の射撃で敵にも相当な被害を与えたはずだ。

「よし、そのまま射撃続……………！？」

7m先には騎士達が撃ち貫かれることもなく、毅然と立っていた。機銃の弾丸が効いていないのかと河城は思った。が、騎士達をよく見て理由はすぐに分かった。

「あいつら、倒れた仲間を楯にしてやがる！！とミサカは敵がやっっていることに激怒しながら叫びます」

「おい、嘘だろ……………とミサカはあまりにもひどい報告に啞然とします」

敵はその楯で見事に第4御楯隊の銃弾を防いでいる。非殺傷弾では人の胴体まで貫通する事はできない。いつか説明したように、これは目標の目の前で炸裂、睡眠ガスをばらまくという物。複数の目標に対して効果は抜群ではあるが、甲冑のような隙間がない楯などの防御用具を用いられてしまうと威力は激減するのだ。

敵もそのことに気づいたらしい、卑怯なれどうまく楯を用いてきた。

「やばい！ー！銃弾が効かんぞ！ー」とミサカは危機感を露わにして叫びます」

「河城！ー敵、接近してきます！ー！」とミサカは報告します」

騎士達はゆっくりと、先ほどまでの決死の突撃などなかったようにこちらへと向かってくる。攻撃が効かなくなったと考えたのだから。余裕なそぶりも見られる。

「やばい、やばい、どうするどうする……………とミサカは……………」

ふと、頭を悩ませる河城の脳裏にあれが思い出された。

だが、あれは殺傷弾である。間違いなく喰らえば敵の死は確定する。しかし、そんな悠長なことを言っている余裕はない。敵はもう目の前だ。

河城は、決断した。

「今から、あの実弾全部を使う。とミサカは機関銃手に言います」

「えっ！？ど、どういっ……………」

返事を聞き終わる前に河城は急いであの弾薬を取りに行く。姿勢を低く、敵に動きを察知されぬよう、走る。中ぐらいの箱に辿り着

くと、すぐに彼女は箱の中にある弾丸を持てる数だけ持ち出した。

機関銃の元へ帰ってくると、敵はすでに5 m以内に入ってきている。焦りが彼女にわき上がる。

「急いでこれを装填してください！！とミサカは指示します」

「は、はい！！！」

がちやがちやと実弾が装填される。重みも非殺傷弾とは比べものにならない。

「装填完了しました！！！！とミサカは早口で言います！！！」

「よし！！敵さんが走り出したら射撃開始だ！！！！とミサカは返します」

5 mを過ぎたあたりから騎士達は走る用意をしていたようだ。4 mを過ぎたあたりから全速力で走り出した。

「射撃開始！！！！！！とミサカはのどをからすような大きな声で命令します」

実弾は何もかもが違った。反動も、その火を噴くときの光、そして非殺傷弾にはないけたたましく鳴り響く銃声も、何もかもが。



「装填手、向こうに行って弾丸持ってきてください。とミサカは静かに命令します」

「わ、分かりました！！！」とミサカは頷いて箱の元へ向かいます」  
そして左側には河城と機関銃手のみになる。

かちゃ、と河城は無線を取り出す。無線の電波は地下では使えず、ただ砂嵐しか聞こえないはずのだが、彼女は無表情に、だが声は恐ろしさに怯えすがりつくように、奇跡的に数馬光太郎に繋がるように祈りながら言った。

「situation critical……早く、早く来てください……」

> i 2 3 1 1 0 — 2 5 0 9 <

実弾の攻撃を受けた騎士達は、地獄絵図のような状況を醸し出した。走る騎士は銃弾に楯ごと打ち抜かれ木っ端みじんに。後続の騎士達は跳弾なども相まって頭が消し飛び、腕が消え去り、内蔵が吹き飛び、鎧がずたぼろになった。

血しぶきが飛び、断末魔の叫び声も聞こえる。

「……………」

河城も、ほかの誰も、何も言うことが出来ない。それほど凄惨な状況だったと言えよう。たった1つのベルト式弾薬を撃ちきっただけで、その後に広がっていたのは死体だけだった。敵はまだ後から来るがそれも人数は少ない。

「勝ったか。とミサカは安堵のため息を……………」

「ちょ、右の盗聴器から反応あり!!!敵です!!!とミサカは最悪な報告を今します」

「はい!?!」

なんと、こんな時に限って敵が別の入り口を見つけたのだ。

「み、味方ではないのですか!?!とミサカは念のため質問します」

「いいえ、数が100名ぐらいいはいます。とミサカはその質問に対して悪い方の回答をします」

どうやら、敵であることは間違いなさそうだ。

こんな状況下で左右両方から敵の攻撃にさらされるといって、絶望的な構図が河城に浮かび上がった。

「そっちの機関銃手!!!用意はもう出来ていますか!?!」

「もちろんです!!!とミサカは当たり前だとばかりに答えます」

河城は今の持ち場を2人のミサカに任せ、またあの箱の元へと向かう。今度は実弾ではなく、もっとひどい方だ。

「とつとつ、片付けるしかないですか……………とミサカは仕方がなくつぶやいて、ミサイルを持ちます」

そう、対戦車ミサイル、パンツァーファウストだ。

もう使う事も無くなりそうである上、戦力としては申し分ない兵器だ。使ってしまった方が良い。」

それを5本はもって右側へ向かう。ちらりと、彼女が時計を見ると時計の針は11時50分を指していた。もう少しで脱出できる。

「敵はまだ見えてませんね？とミサカは確認します」

「音は聞こえますけどね。とミサカは機関銃の引き金をかちかちとやりながら返します」

河城はこれが最後の迎撃になると確信していた。左側の銃撃も散発的になっていることから敵が少なくなってきたいるのだろう。だとすれば、脱出するのは右側の敵を片づけてからになる。

残り時間は8分。時間に対する焦りからか彼女も細かいことは考えなくなり、気が荒立ってきた。

「こうなったらとことん、やってやるうじゃないですか。とミサカはもう無血とかどうでも良くなって暴走気味に言います」

敵が見えてきた。数はやはり多い。

「もう、面倒くさいですね。とミサカは苛立ち混じりに良いながらパンツァーファウストを2本持ちます」

パンツァーファウストの射程距離は30mが良いところ。うまく被害を与えるには15m前後が最適だろう。

「さあさあ、早く来いよ腐れ外道共。とミサカは汚い口調でつぶやきます」

「やばい、キャラが崩壊している。とミサカは河城の精神状況を心配しつつ言います」

敵はすでに全速力でこちらに向かってきている。すぐに15mまで到達しそうだ。

河城は2本のパンツァーファウストの安全装置兼照準機を引き起こす。これでもう発射が可能だ。

「機関銃は撃たなくて良いの？とミサカは……」結構です。とミサカはすぐに拒否します」

敵からの距離が20mを切った。あともう少し。

……

……

……

……

15m到達。

「死ぬ。とミサカは簡単にそう言って撃発させます」

バシユ、とほぼ同時に2本の成形薬弾が放たれる。微妙に山形の弾道で進む弾頭は、走る騎士達とも相まってすぐに着弾した。

次に起きたのは大爆発だ。弾頭の形から衝撃波が一点に集中するモノロー効果を引き起こされ、爆発は騎士達を押し戻すかのように働いた。そして元々戦車を撃破する兵器のおぞましき威力は、騎士達の人体を粉微塵にした。

河城は容赦なく、3本目、4本目を発射する。さらなる爆発。最後にとどめで5本目を撃ち込んだ。

「よし。死んだらこれ。とミサカは粗末な感想を言っつて片付けます」

「黙祷ぐらいは捧げてやりましようよ。とミサカは河城に諭すように言います」

そんなミサカの言うことも聞かず、河城は時計を再度見る。針はでに11、つまりは55分を指していた。

「撤退準備始めますよ。とミサカは全員に向けて言い放ちます」

ところが左側の機関銃手から思わぬ反応が来た。

「い、いや。これじゃあ無理です！！！とミサカは慌てて言います」

「はい？どうしてですか！！！とミサカはいらいらしながら言います」

「どつやら、敵さんどつやら奥の方に隠れているみたいなんで、今此处で撤退したら追撃に来ますよ。とミサカは訳を急いで説明します」

なるほど、河城が見てみれば敵はかなり先の方で死体でバリケードを建造して待機しているようだった。これは面倒くさい。

「……………ここから25mぐらいですね。とミサカは機関銃手に確認します」

「へ？え、えーとそうみたいです………とミサカは戸惑いながら言います」

「だったら……………」

河城はまたまた大型の箱の元へ戻っていくと、今度は6本ものパシツァーファウストを持ってきた。

「ま、まさか。とミサカはこれから河城が行うであろう事が大体察しが付くので啞然とした声を上げます」

「その通り！！とミサカは言いながら問答無用で撃発させます」

発射された弾頭はバリケードを木っ端微塵に、騎士達を人肉の欠片に変化させた。

2発目、3発目、4発目、5発目。問答無用に放たれる。バリケードのさらに奥にいるであろう騎士達にもその弾頭はダメージを与えた。焼け付くような爆風と爆発に目は焦げ付き、口から喉にかけて燃え尽き、肌は真っ黒焦げになる。

敵にとっては本当の地獄に来たようなものである。泣き叫ぶことも出来ず、ただ単に死んでいく。狭い通路に爆発に爆発が続き、大勢のローストチキンが完成した。

「……………よろしい。撤退開始です。とミサカは全員に指示します」

あまりにも悲惨な光景に、敵も突撃が出来ない。今のうちに、撤退するのが一番だ。

「シャッター開けます！！！」とミサカはとつとと行動します」

「時間がない。後、3分です。とミサカは急かします」

がちゃがちゃと開いたシャッター。すぐにオルソラを連れ出す。

「さあ、急いでください。とミサカはオルソラの手を引いて階段を上ります」

「わ、分かりましたでございます……………」

階段の一番上のドア、急いでそこまで向かう。ちなみにオルソラの耳栓と目隠しは外していない。外せばまだ聞こえる騎士達の痛み、に苦しむ叫びが聞こえてしまうから。

たったと上がり、ついに出入り口ドアまで来た。

「これで、任務終了ですね。とミサカは本当の、本当の安堵の溜息

を吐いてドアを開けま……………」

ドアを開けた途端、見えたのは幾多にも構える剣だった。

午後12時 薄明座

「ほほう……………なかなかやるじゃないですか。こつそりと味方を撤退させていたなんて。こちらも気付きませんでした」

近くには大破した戦車がある。そしてレンの目の前には拘束した天草十字凄教の教徒34名がいる。

全員が全員、撤退支援をしていたために取り残されたのだ。この34名の決死の活動によって他のメンバーは脱出できたと言っても良い。

「本当だったら貴方たちのようなクズ共は殺してやりたいのですが……………残念、ローマ正教に引き渡さなきゃならんのですよ」

建宮などの天草教徒達は必死に彼らを拘束している水の縄を外そうとするが、液体であるためどんな形にも変形できるので体にしっかりと密着して放そうとしない。



「しっかし、貴方たちも卑怯なことだ。遠方からの射撃、砲撃、はたまた戦車まで用意して。それでもキリスト教の一派ですか？欲望に駆られ、オルソラまで奪いさり、面倒くさい戦にして。こちらが下手情けで生け捕りにしてやるうとしたら、貴方たちは殺傷行為ですかそうですか。」

「ふざけてんじゃねえよ！！！！」

力任せに彼は地面に足を叩き付ける。みしりという音がして地面がめり込んだ。

「ああ、殺したい。ああ殺したい。一番、きつつい殺し方をしたいです。貴様らのような異教徒共が僕は一番嫌いだね。クラウド共もスラブも全員そうだ。くずの極みだ。死ねばいい……………」

かたかたと体を震わす彼は、まるで自分を制御できない子供ようだ。怒りにまかせて、すべてを打ち砕こうとしている。

「いい加減にしないか。落ち着け」

そんな彼の肩にスタイルが手を掛ける。レンは邪魔が入り、激怒の表情を彼に向けた。

「邪魔するんじゃない……………」

振り向いてすぐ、罵声を浴びせかけようとした彼だったが、べしつとスタイルに頭を叩かれた。

「君が心配していたあの子、どうも死んでないようだよ。1人のシスターに聞いたけど、仮死状態にさせられているだけで、1日も

立てばすぐ目覚めるとぞ」

そして素っ気ない彼の報告を聞いた途端、レンの怒りの形相が消えた。

「ほ、本当ですか……………？」

「ああ」

消えた怒りの代わりに、レンの目から安堵から来た涙が溢れ出し、がくつと膝をつく。

「良かったぁ……………」

大粒の涙が彼の顔をぐしゃぐしゃに濡らす。

「他のシスター達も仮死状態だったみたいだね。君達、わざわざそんなことまでしていたのか？」

「……………」

ステイルの問いかけに建宮達は答えようとはせず、ただ一言

「人を殺すのは嫌いだな」

と言うだけだった。

「……………オルソラも、ローマ正教が回収していった。僕たちの任務もこれで終了というわけだ」

「ええ……………そうですね」

そう言いながら、レンはぐしゅりと涙を拭いている。本当に、嬉しかったのだろう。

「と、ところで上条当麻は？」

「ああ、彼なら今あそこであの子に抱きつかれているよ……………」

寂しそうにステイルは後ろを見る。なるほど、しっかりとインデックスに抱きつかれている上条がいた。

「悲しそうですね？やっぱりあの子が上条に奪われて悔しいですか？」

「馬鹿なことを……………」

レンがちやかすように聞くと、ステイルは勢い無く否定する。

そんな彼に、レンは真面目になってしゃべり始める。

「そんな事言っていると、いつまでたっても寂しいままですよ？機会というのは1度逃したら一生取り戻せない。今の内に、自分に正直になってなさい。僕みたいな思いする人が増えるのはお断りなんです」

「……………」

「小さい、あんな可愛らしい子を彼だけに独り占めされるのも何か癪ですし、それにステイル、あんたは不幸を背負いすぎです。少し

休みなさい。疲れがたまっている魔術師というのは死亡フラグのよ  
うなもんですから」

べらべらと喋り終わったレンに、ステイルは何も言わなかった。  
だが彼の言った事はちゃんと伝わっただろう。  
それに満足したレンは赤い目を少しこする。

「おい」

と、その時、建宮が不意に声を掛けてきた。レンは先ほどの怒り  
の形相から変わって。冷静な表情を向ける。

「何ですか？……ああ、先ほど怒鳴ったことなら勘弁してください。  
い。どうも感情に流されてしまって……」

「そんなことはどうでも良い……！」

妙に焦ったような声の建宮。

「じゃあどうしろと？」

「この縄を解いてくれ。それだけだ」

聞いたレンは、はあ？といった声を上げてしまった。ステイルも  
少し驚いている。

「ははっ、馬鹿なこと言わないでください。そんなこと、出来るわ  
け無いでしょ？ 仮にもあなたは敵の親玉。こちらに何の+要素が無  
いのに解放するなんてお思いで？」

レンの返しにこのままじゃ埒があかないと思ったのか、建宮は結論を先に言った。

「お主らが救ったと言っているオルソラは、ローマ正教に殺されるんよ」

聞いた天草教徒以外の全員が驚きで固まる。余りにも予想外の一言だった。

「な、何を意味が分からないことをおっしゃりますか？ まったく、何も確証がないことをしゃあしゃあと……………」

「ちっ、物わかりが悪い……………もつとよく考えてみる。何が為に我らが法の書、そしてそれを解読出来るオルソラを必要とする？」

我らは元来、迫害を受けてきた一派。他勢力からの侵攻にはそれ相応の対策は練ってあるのよ。まあ、例を挙げるとすればそちらも知っているだろうが特殊移動法『縮図巡礼』だ。大きな力なんぞ我らには必要無いのよ」

建宮の言うことは筋が通っている。おかしいところは何も無い。

「そしてもう一つ。『法の書』というのはどんな物だ？」

聞かれた問に、レンはすぐには答えられない。彼はそこまで詳しく覚えていないわけではないのだ。

「……………インデックス。言ってくれませんか？」

とうわけでインデックスに助け船要求。

「『法の書』というのは彼の守護天使とも許されざる者とも語られ

る謎の存在、エイワスによって伝授された内容を記した物で、実際には天使が使う術式をそのまま使えりとも評されているよ。その威力は絶大で、『法の書』が開かれた瞬間に十字教の時代は終焉を告げると……………」

「そこよな」

建宮はびしやりとインデックスが立て板に水を流すかのように喋っているところを遮る。

「ローマ正教は十字教のトップ。20億人もの信者を抱えている。そんな奴らが十字教の終焉を望むか？」

あつ、とレンは声を出した。そう、根本的な所を失念していたのだ。子供でも分かる道理を今まで彼らは気付かなかった。

「つまりは、そういうことか……………」

ステイルが舌打ち混じりにつぶやいた。それが全てを語っている。

オルソラは処刑されるのだ。

「……………これは、急を要する事態ですね」

「そつだね……………」

レンがパチンと指を鳴らす。途端に水の縄がほどけ、ただの水となり流れ去った。

「オルソラは今、どこにいますかね？ステイル」

「とつくに遠く離れてしまっているよ」

今からの追撃は不可能だ。

敵もそんなに馬鹿じゃない。きっと人数は分散しているだろうが並大抵ではない早さでオルソラを輸送しているだろう。

「まあそうよな。今、オルソラを救えるのは1人ぐらいだ」

建宮の言葉にレンが反応する。

「……………1人？誰かいるんですか？」

聞かれた建宮は立ち上がり、空を見上げゆつくりと言った。

「勇ましき騎士、とでも言うべきか……………まあ、そいつに期待するしかないのよ」

「……………」

天草教徒の1人が十字を切った。それに呼応するかのように教徒達は次々と十字を切っていく。

捕虜の1人であった五和もしつかりと十字を切っている。

胸に数馬光太郎の無事を祈りながら。

12時2分 パラレルスウィーツパーク 中央広場

「……………」

草むらの中、数馬光太郎は必死に敵に見つからぬよう、頭を低く地に張り付いていた。

頭の中が痛む。薬効時間はもう残り少ない。今、うるちよろして  
いる敵を殺してやりたい気分になってくる。

そんな強い衝動を抑え、ゆっくりとゆっくりと第4御楯隊がいる  
であろう売店へ向かう。

ばれたら間違いなく戦闘開始、逃げることは出来ない。彼はたら  
たらと汗を垂らした。

「その角、左に曲がって……………」

敵に気付かれぬよう、足音静かに進む。中央広場から出てしまえ  
ばまだ楽に進めるのだ。

鎧は重く、隠密行動と相性最悪の装備だ。だが、外してしまおう  
にもびつたりと何かが接着しているようだ。まったく外れない。

敵兵が通り過ぎた。進む。

敵兵が来る。右へ隠れる。

そんな事の繰り返し。

時はすでに12時を過ぎている。彼女達は脱出できたんじゃない



かと思つた数馬だったが、どうやらそうではないらしい。

少し耳を澄ませると、近くにいる2人の騎士の会話が聞こえる。

イタリア語なんて分かりもしない数馬だが、オルソラという単語、そしてそれを発した瞬間に彼らが胸くそ悪くなるような笑い声を上げる、そんな事で大体の察しがついてしまう。オルソラは捕まつたのだ。

「……………」

彼は悔しさに齒を食いしぼる。すべての計画が、無駄になつてしまつたとなれば人は悔しがるものだ。

「じゃあ、第4御楯隊を探さんとな」

だが、彼に悔しんでいる暇はない。オルソラが捕まつたとなれば必ず、第4御楯隊も捕虜となつたという事だ。オルソラはいたぶつて殺すとしても、第4御楯隊は問答無用、即刻処刑だろう。

「どこだ、どこにいるっ！！！！」

彼は血眼になつてあちこちを探し回る。敵に何度も発見され掛けたが何とか乗り切つた。

「くそがつ！！！！」

全く見つからない。何処にいるか皆目、見当も付かない。

荒い息を整え、数馬は冷静に考えた。中世、騎士というのは処刑

や決闘には広場を用いた。だとすれば此処にある広場となるが、中央にはいなかった。

第4御楯隊が抗戦していたのは恐らく、売店の地下。だとすれば売店の近くにある広場だ。

「東の方に広場あつたな……………」

近くにある広場はそこしかないはずだった。此処にいなければもう、どうしようもない。

「まだ、まだ間に合うはず!!!」

重い鎧をかちやがちやと鳴らし、数馬は走り出した。

## 東方面 広場

第4御楯隊全員は強制的に連れてこられていた。周りには剣を構える騎士達が30名、逃げることは出来ない。

そして目の前にいる1人の中隊長らしき男が流暢に日本語を使ってくる。

「貴様らには随分と苦戦させられたよ……こちらの死者はどう甘く見積もつても200名はいつている。重軽傷者も考えれば300名は行くかもしれないな。」

第6騎士団、総勢632名初めての大損害だ」

「はっ、たつた9名にそこまでやられるとは、大した騎士団だ。とミサカはせせら笑います」

河城の発言に中隊長は一気に睨みつけるような表情に変わった。

「少しは言葉を丁寧に使ったらどうだ。貴様らなんぞ、すぐに処刑しても構わん」

「はっ、そんな脅し、子供も怖がらないですね！とミサカは侮蔑しきった声を上げます」

言った1人のミサカが騎士に殴られた。痛さに彼女はごろごろと転がっている。

「なっ、このクソ野郎が……とミサカは目の前のクズに向かって怒声を上げます」

「黙れ……！」

河城も肩を蹴られ、そのままぐいぐいと踏まれる。

「黄色い猿が何を生意気に。まったく、礼儀を知らない野蛮人だ」

河城が悔しそうに中隊長を睨むが、彼は気にせず冷笑を上げる。

「野蛮人は文明人が処刑しなければな。全員、そう思うだろう!!」  
周りの騎士達が賛成でもするかのように大笑いする。それを聞いた中隊長は剣を上構えた。

「というわけだ。貴様には死んで貰おう。最後に言うことは？」

河城は顔を上げたと同時にその中隊長につばを吐きかけ、イタリア人の蔑称を声高く言い放った。

「地獄に堕ちろ、梅毒野郎が!!!」

その言葉を聞き、一気に怒りを爆発させた中隊長は勢いよく剣を振り下ろした。

となるはずだった。

振り下ろす直前に、1発の銃声が鳴り響き、中隊長の頭が柘榴になっただ。

「なっ……………中隊長!!!」

騎士達は一瞬の出来事に驚きの声を上げるしかなかった。彼らはやったのは誰かとばかりに銃声が聞こえた方向を見る。

そこいたのはドイツ式の鎧を身にまとった騎士、背中に日本刀、釘バット、ライフル。手には自動拳銃を2丁という異様な姿をした騎士だった。

「貴様！！！何ということ………」

剣を向けた騎士に銃弾が炸裂した。今度は心臓だ。

敵だ、そう叫ぶ間もないまま戦闘が始まった。

2丁の自動拳銃から放たれた13発の銃弾は的確に騎士達の急所に命中した。あっという間に30名から16名になる。

第4御楯隊は地面に伏せていたが銃声が鳴り止んだ途端に反撃を開始した。5名の妹達は自分達の能力、レベル3の電撃に物を言わせ電撃の槍を余すことなく使用した。

金属製の鎧は電流を中の身体にいと簡単に流し通す。感電した騎士は動くことも出来ず、妹達が隠し持っていたサバイバルナイフで目玉をえぐり取るかのように突き刺された。

天草教徒達も突出した身体能力を使いあっという間に残る騎士達を撃破した。

合計時間34秒。あっという間の戦闘だった。

「数馬光太郎！！！！」

終わったと同時に河城は数馬の元へと走り寄る。

「大丈夫、か……………」

数馬は蚊のような細かい声で彼女を心配する。

「ええ、大丈夫です。とミサカは正直、あなたの方が心配だと思  
いながら言います」

彼の顔は大丈夫か、そう思った河城は鎧のマスクを上げてのぞき  
込んだ。

<http://2509.mitemin.net/i26345/>

一瞬にして彼女は背筋が凍った。彼の眼球は鎧の中で血のように真っ赤に光っていたのだ。黒目はまるで猫の様に細くなっている。口元は変に歪み、まるで笑っているかのように見える。

河城は彼の鎧をよく見た。鎧の前面の隅々に赤黒く黒ずんだ何か張り付いている。恐らく血だ。それと共に人肉と思われる、小さい塊も固まって付着していた。背中 of 日本刀も釘バットもドロドロの血が付いている。

「数馬光太郎、あなたは何を。とミサカは……………」

「ああ……………まあ、少し、な」

少し、その次の言葉を数馬は言うてはくれなかった。それに、河城からすればこんな量の返り血は少しとは言えない人数を殺しているとさえ思う。

「オルソラはどうした？何処行つた？何処へ連れてかれた！！！」

彼は本題だとばかりに話をそらした。が、河城もそこまで深く問いただしはしない。むしろ、今の数馬の質問こそが最も重要なのだ。

「分かりません。大人数に引つ張って行かれましたからね……………とミサカは悔しそうに言います」

「いや、目星はだいたい付いているんだ。だが場所が分からん。GPS持ってるか？」

「あつ、此処にあります！！！」

1人のミサカが携帯のGPSを見せてくれた。数馬が目星としている所は建設中の建物。普通だったら記載されているはずはないが、そこは学園都市製のGPS。しつかりと建設中の建物は、名前まではいかなくても、記載されていた。

「こんな野球場みたいな所ですか？とミサカは驚きの声を上げます」

「ああ……………此処だ」

そこは教会。それも、日本最大規模になるであろうと予定されている、オルソラ教会だ。

ローマ正教は数が多いのが特権だ。世界中に信者がいる。日本には特別高等警察の妨害工作のため、多くはないが、いくらかの教会がある。

そして、オルソラ「アクイナスは貧困に苦しむ人々を救済するのを己の役割としている。彼女の功績は全世界から賞賛されるべきものであるのは間違いなく、だからこそ彼女の名前の教会が建設されようとしているのだ。

パレルスウィーツパークからさほど遠くはない場所にオルソラ教会はある。ローマ正教である奴らは此処を要塞として利用しようとしているのだろう。

「ここに、向かう」

「えっ、マジですか。とミサカはあなたの無謀な発言に唾然としながら突っ込みます」



「いいや、お前らは来なくて良い。とにかく、自分達の装備を回収している。おらが1人で向かう」

それこそ無謀だ、そう言ってもおかしくはない発言に河城が驚き混じりに咎める。

「なっ、何言っているんですか!!!馬鹿ですか!?!とミサカはそんな無茶なことをいうあなたに怒ります」

「時間が無いんだ!!!」

ビリビリと耳が痺れるほど大きな声で数馬は怒鳴った。

「多分、オルソラは殺される。というか殺される。状況は最悪だ」

「だからといって……………」

「やるしかない、やるしかないんだ、やるしか、ヤ、ル、シ、カ、ナ、イ、ン、ダ」

数馬の声が突然、別人のような声に変わったような気がした。しかし一瞬だけだったのでよく分からない。

「さあ、もう時間はない。さっさと片付けちまおう。起死回生の大逆転劇だ」

彼の声がだんだんと上気してくる。何かに興奮しているようだ。

鎧の中はどうなっているか分からないが、河城には彼が笑っている

ように思えた。

「……………じゃあ行く。お前らも無事に撤退しろ」

「はい……………分かりました」

彼は踵を返して走り出した。河城はどんどん離れていく彼の後ろ姿を心配そうに見ていたが、仕方が無く撤退を開始しようとした。

「ニクダ……………ヒサビサニクガ……………ハライツパイクエル……………」

そのとき、ただだけで戦慄が走るような声が、河城の耳元でささやかれた。驚き、後ろを振り返った彼女だったが、そこには誰一人としていなかった。

12時20分 オルソラ教会

建設中であるオルソラ教会ではあったが、内装はほとんど出来上がっていた。おかげで100名以上の教徒が入ることが出来ている。

そして、教徒達の視線はすべて中央に注がれていた。

がすっ、と蹴り上げる音が聞こえ、押し殺したような叫びが響く。

「ったつく……………手間を掛けさせやがって。人に迷惑を掛けるのは

駄目でしょう?」

冷酷に、しかしそれでいた今行われている行為を楽しんでいるかのごとくアニーゼはサンクティスはしゃべる。レンと紅茶をたしなんでいた時とは思えないような物言いだ。

今行われているのはオルソラの処刑、もといリンチだ。教徒達が何回もオルソラを蹴り、棒で殴るなどしている。

「本当に……………あなたの遊びにつきあっている暇は無いんです。とつとと処刑を……………」

アニーゼは途中でしゃべるのをやめた。ぼろぼろのオルソラが、当たり前だが、何も返事を返さないことに不満らしい。

「聞いてんですか?」

オルソラを足蹴にして聞く。それでも彼女は返事をしない。それがアニーゼに理不尽な怒りを生み出した。

「聞いてんですかって言ってるでしょ!!!」

怒鳴るとともに彼女の脇腹を勢いよく蹴りつけた。鈍い音が出てオルソラは転がり、痛さのあまり大きく咳をする。それにアニーゼは容赦なく自分が持っていた杖で彼女の腹をぐりぐりと突き刺すように押しつけた。

「それにしても、頼れるお友達とやらはずいぶん少なかったじゃないですか?まさか、現地であった天草式なんぞに協力を求めちゃうなんてね」

アニエーゼはそう言いながらオルソラの苦悶の表情を楽しそうに見ている。まさしく鬼だ。

「天草式も、イギリス正教も、あんな奴ら十字教の名を名乗ることさえ烏滸がましいってものですよ。そんな奴らに身を預けるから、すぐに捕まっちゃうんですよ」

「まあ、天草式の奴らにはだいぶ手こずらせられましたから。あいつらは散々いたぶってから殺してやりますよ」

嬉々と言うアニエーゼのその一言に、今まで反応を示さなかったオルソラが急に反応してきた。

「そ、それだけは………それだけはやめてください。私がどうなっても、どうなっても良いですから………彼らだけは………」

「うっせえって言うてんでしょ!!!」

アニエーゼがもう1発、蹴りを入れようとしたその時だった。

「ぎゃああああああああああああああああああああ」

まるで地獄の業火を浴びせかけられたかのような悲鳴がドアの前から聞こえた。ドアには守衛として騎士を3人置いていたはずだ。

「なっ、なんです!?!」

彼女が驚き、声を上げた途端、ドアが爆発でもするかのようにつ端みじんに破壊された。

もうもうと煙が立ちこめる中、1人の騎士がそこには立っていた。守衛の騎士かと全員が思ったがどうも違う。ドイツ式の鎧、異様な装備、そして何よりも

顔をむき出しにして目が真っ赤な輩はいなかったはずだ。

「な、誰ですか!!!」

アニーゼが大声で問いかけるが、そいつは何も答えない。ただ、持っていた釘バットを高く掲げた。釘バットは血だらけで、釘の方には守衛であつたであろう騎士の生首がずたぼろ、目は飛び出て口は裂けて舌が半分無くなっている状態、で刺さっていた。

それを見た全員が一瞬にして嘔吐しそうになる。

そいつは釘バットを振り回し、生首をどこかへ飛ばしてしまう。

そして次に、口からべっと、つばとともに何かを吐き出した。

地面にべちゃっと落ちたそれは、白く細長い物、そして2つの節がある。

指の骨だった。

それが分かつた途端、アニーゼ以下全員が顔を真っ青にした。食つたのだ、守衛の騎士を。

恐怖に顔を歪ませたアニーゼ達を見て、そいつは大きく、耳まで裂けている口を開き真っ赤な口内を見せながらげらげらと笑い始める。

アニエーゼ達の誰一人としてそいつに何も言うことが出来ない。言ったら、間違いなく殺される、そう見えたのだ。そいつは少しして笑つのをやめると唐突にしゃべり始めた。

「ハハツ、ドウモドウモコンバンワ、ローマ正教ノ糞野郎ドモ。今回、テメエヲぶつ殺ス御役目ヲイタダキマシタ。数馬光太郎デス」

かたことに聞こえる日本語は、日本人とはとても思えない。しゃべりからして狂っているとしか感じない。そいつはまだしゃべり続ける。

「ドアノ前ニイタ騎士達ハ、トテモ美味シカッタデスヨ。ドウモアリガトウゴザイマシタ」

やはり、守衛の騎士達は食われていたのだ。それだけでもおぞましい。

「トコロデ……随分ト、アソコノ女性ニ痛イ思イ、サセタミタイデスネエ……」

ちらりとその数馬光太郎はオルソラを見る。目がぼやける状態で、必死に彼女は数馬を認識した。

「数馬……さん？」

「オオット。シャベラナイデクダサイ。傷ニ障リマスカラネエ」

オルソラが見たそれは数馬光太郎ではあったが、違う。あの、料理と一緒に食べたときの優しき紳士とは、今彼女が持っている口ザリオを作ってくれた彼とは全く違っていた。



一瞬のうちにそこからいなくなった数馬は、誰も視認できないような速さでアニエーゼ達に接近した。

「なっ！！！！」

すぐに数馬は目に入った騎士とシスターを殺す。1人は首をはね、もう一人は脳天をたたき割った。脳髓や、血液が散らばり、アニエーゼ達に降り注ぐ。それでやっと、彼らは今起きている事を把握した。そう、戦闘開始だ。

「や、奴をぶちのめすんです！！！」

アニエーゼの命令ですぐさま十数人の騎士とシスターが数馬を一斉に攻撃した。だが彼はよけようとせず、攻撃をすべて受け止めた。剣が体の全方位に幾本も刺さった。が、数馬は倒れない。無理に動いて刺さる剣をすべて折り、逆に、今攻撃した彼らにすぐさま鉄槌を下した。

釘バットと日本刀を軽々と振るい、すぐに5人を惨殺した。1人には飛びかかり、顔を食いちぎった。次に3人の首をはね、4人は頭をたたきつぶした。

最後に1人のシスターの下顎を力任せに引きちぎると、そのシスターは舌をくねくねと動かしたままバタリと倒れた。

この1つの戦いを見ただけで、アニエーゼ達は確信した。こいつには、こいつだけには、絶対に勝てないと。





っ飛び、血をばらまく。

「ハハハハッハアッハッハハハハハハハハッハハッハハア」

悪魔の声が高らかに教会に響き渡る。祭壇にあるキリスト像は血に染まり、まるで悪魔に征服されたかのような姿をさらした。

血はさらに多く流れ出し、床をびしゃびしゃにする。

戦闘のさなか、精神崩壊した1人の騎士が「マンマ………パーパ………」と失禁しながらつぶやくのを悪魔が同情もせず、頭から踏みつぶして殺す、そんな事も起きた。

悪魔に屠殺され、彼らは凄まじい勢いで数を減らしていく。元々、ここにいたローマ正教徒、仮死状態から目を覚めさせられたシスターを含めて461名が、15分すればすでに75名になっていた。

「ひっ………」

周りに誰もいなくなり、1人だけ残った幼きシスター、アンジェレネはたった今、悪魔の前にいた。悪魔は今まさに、彼女に狙いを定めている。アンジェレネに対抗手段はない。

全員と同じように無残に殺される、そう思った彼女は膝をつき、涙をはらはらと流し始めた。目には生気が無く、すべてを諦めてようにも見えた。

ところが、悪魔はそんな彼女を見た途端、興味が無くなったように通り過ぎて行ってしまった。

悪魔が通り過ぎた途端、彼女は意識が遠のき、ぱたりと気絶してし



アニーゼはこの時点で、オルソラを人質にしても意味が無いことに気づいた。もしも、彼女がオルソラを殺してしまえば悪魔はもう、問答無用で殺しにかかってくるだろう。かといって、殺さずにいれば悪魔はアニーゼまで来てしまう。どっちにしる、彼女は死の定めから逃れることは出来ないのだ。

「あっ……………あぁ……………」

考えた策が、通用しないと分かった彼女はもう思考することが出来なくなった。

どさりとオルソラを手から放す。地面に落ちた彼女はもう意識がもうろうとして喋ることも無理である。

悪魔はとうとう、残った74名を処刑し始めた。アニーゼ、オルソラを除くすべてが邪魔と思ったのかデザートイーグル、S&W 29を使い射殺し始めた。蛇に睨まれた蛙のごとく動けない彼らは弾丸の餌食になりはてしていく。

73発の銃声がまるでアニーゼ「サンクティスの死刑執行を告げるカウントのように音を鳴らしていく。そして、すべての弾丸が撃ち終わったとき、残るはアニーゼとオルソラだけとなった。

「Tutto paragone. Il quinto dei  
elementi. Ordinala canna ch  
e mostra pace ed ordinala.」万物照応

五大の元素の元の第五。 平和と秩序の象徴『司教杖』を展

開

Prima. Segua la legge di Dio  
ed una croce. Due cose diversi

e sono connesse . . . !

「偶像の一。神の子と十字架の法則に従い、異なる物と異なる者を接続せよ! !」

「ロータスフンドまだ死にたくない。そう一心に思った彼女は、詠唱を唱え、蓮の杖に傷をつけて悪魔に攻撃し始めた。」

1回、2回、3回、4回。空間に衝撃を与えることによって悪魔の頭を殴打していく。だが、何一つ傷も付かずに悪魔は近づいてくる。

「死ねえ! ! ! !死ねえ! ! ! ! !」

5回、6回。そしてとうとう、悪魔はアニーゼの前に立った。

「あつ……………」

恐ろしき形相の悪魔を見た瞬間、アニーゼの頭の中は真っ白になる。人は死ぬ間際に走馬燈のように自分の記憶がよみがえると言うが、彼女もそうであった。

イタリアの路地裏でナメクジを食べて飢えをしのぎ、ぼろ布で寒さをしのいだあの屈辱の記憶、ローマ正教に収容され、シスターとして1部隊を率いた栄光の記憶。そんな事がぐるぐると彼女の頭の中を回った。

悪魔は日本刀を構えた。

「い、いけません……………数馬さん……………」

が、オルソラがか細い声で悪魔を止めた。

「主は……主はこんな事望みません……」

オルソラは、彼女はまだ、人の命を救おうとしていた。先ほどまで、彼女を殺そうとしていたアニエーゼを救おうとしていたのだ。

悪魔はぎよろりとオルソラを見た。地面にへたり座り込み、痛みで辛そうな顔をしている彼女に、顔を近づける。ニタリと悪魔は笑うと、長い舌をのばして彼女の首をじゅるり、と嘗めた。

ゾクツとした感覚に襲われたオルソラは、嘗められた後から言いしれぬ快楽に襲われた。痛みが消えさり、代わりに眠たくなるような安心感が来た。瞼が重くなり、彼女は目を閉じて眠ってしまった。

邪魔な奴は眠らせたとはかりに、悪魔は今度こそアニエーゼに目を向けた。

アニエーゼは呆然として何もしゃべらない。悪魔にとっては好都合だ。

再度、日本刀を構え、まっすぐに彼女の鳩尾に突き刺した。

「あ……あ……」

鋭い痛みがアニエーゼに走るが、もう叫ぶことは出来ない。トド

メとばかりに日本刀を抉るように回し、アニーゼⅡサンクティスを地獄へと導き入れた。

時刻 午前1時

「……………おかしいですね」

レン達はオルソラ教会へと行こうとする彼らを阻止しようとしたシスター・ルチア等と激戦を繰り広げたり、第4御楯隊や撤退していた部隊と合流していたのだ。で、此処まで着いたわけだが。

正面玄関からすでにおかしい。血だらけで、惨殺体が3体あった。

「……………」

ステイルがインデックスを抱きかかえ、見せないように努めている。

建宮達、天草教徒もあまりのひどさに目を背けている。

「どうやら、本当にあなた方が言っていた人は来たようですね……随分、派手にですが」

「そんな、馬鹿な………」

たらりと、汗を一筋、レンは垂らした。中がどうなっているのか、分からない。

いや、ドアが木っ端微塵になっていて中は見えるはずなのだが、深い深い闇で何も見えないのだ。こうなれば、中に入るしかない。

「……………入りましょう」

緊張した様子でレン達は中に入り始めた。レンは2リットルのペットボトル2本を用意している。

中は、もう何も言えないほど酷い惨状だった。ばらばらの死体があちこちに散乱している。インデックスには本当に見せてはいけない状況だ。

「……………」

ちなみに上条当麻はあまりのえぐさに、嘔吐しそうになるのを必死にこらえていた。

「建宮。ところで、あなたが此処に向かったと言っていたその1人の名前、何ですか？」

「え、ああ……………そう言えばまだ言ってなかったのよ」



キリスト像がなんとか見えるとこまで来た。

「名前は、数馬、数馬光太郎よな」

「……………えっ？」

レンがもう1度聞き返そうとすると、祭壇の方から笑い声が聞こえる。

「誰かいるんですかね……………」

笑い声はどんどん近づいてくる。そして、とうとうその姿が見えた。

<http://2509.mitemin.net/i2012>  
3 /

「次、ダアレ？」

それは本当の地獄から来た悪魔、いいや、数馬光太郎だった。

日本刀にはすでに絶命したアニーゼが突き刺さっており、まるで見せしめのような。釘バットは血だらけで肉片もあちこちに付着していた。

「……………発狂していますね」

「ああ……………」

げらげらと笑う、そんな数馬はもう狂いに狂っていた。

すでに、回復できるかも怪しい。

「おい数馬……………どうしちゃったん……………」

「今のあれは数馬光太郎じゃありません。ありゃあもう狂人です。近づいてはなりません。早く、始末しないと周りにまで被害が出来ます」

近づこうとした上条に、レンは引き留めた。

「だけどー!!」

「僕に任せてください!!!」

レンは2リットルのペットボトルを両方ともふたを開け、水を下に垂れ流し始めた。水は地面を伝って流れ去らず、そのまま剣の形を成していく。すべての水を流し終わった後には、立派な剣が2本完成していた。

彼は両手に1本ずつ剣をとり、二刀流のようになる。

「さあて……………」

対象物は狂人。そしてあの日本刀に刺さっているアニメーゼⅡサングティスの死体の回収、それが彼の任務だ。

「お覚悟してください。数馬光太郎!!!」

レンは悪魔に向かって全速力で走り出した。

釘バットと水の剣が触れあった瞬間、強い衝撃がレンに来た。相手の力は想像の斜め上をいていた。

「くっ……………」

悪魔は何も喋らず、にたにたと笑うだけだ。

一端、距離をとって体勢を持ち直したレン。またすぐに向かっていく。

激しい斬り合いが始まった。

レンは悪魔からの攻撃を最小限の動きで避けている。悪魔の方は大雑把に避けていた。

悪魔は日本刀は使わずに釘バットだけ使っていた。なるほど、アニーゼの死体を崩したくないのだろう。

上手く、上手くいけば悪魔から日本刀を切り離せる。レンは集中して釘バットの攻撃を予測し始めた。

(こいつが大振りの攻撃するのは12回から14回に1回ですね…

……今が7回だからもう少し………)

8回、9回、10回、11回、12回。

12回では来なかった。

13回も来ない。

14回。来た。

大振りの攻撃をレンは上手く避けると、釘バットが地面にめり込むように突き刺さった。今の内だ。

「こん畜生が！！！！」

悪魔の片手に握られている日本刀、その刃の中央を剣で叩き斬った。ベきつ、と折れる日本刀。そして地面に落ちそうになるアニメーゼの死体。アニメーゼをレンは剣をほっぴり出してキャッチした。

死体は鳩尾以外の外面の損傷はこれといってなかった。一応、綺麗な死体なのだろう。

「よし………」

1つの目的を達成したレン。次に狂人の始末を。

だが、2つめを完遂する前に、釘バットがレンの背中に突き刺さる。出来るはずがなかった。

S I D E 五和

数馬さんがおかしい。あんな、あんな恐ろしい表情を見せるなんて……絶対におかしい。」

前の方で誰かが、彼の事を狂人と言っていた。どういう事だろう。彼が狂ってしまったとも言うのか？そんなはずはない。

早く、数馬さんの元へ向かわないと……

「お覚悟してください！！数馬光太郎！！！」

誰かが1人叫んで数馬さんの方へ向かって突撃した。あれは……確かイギリス清教の人だったはず。どうして彼の事を攻撃しようとしているの！？

すぐさま高レベルの斬り合いが始まった。数馬さんと稽古した時彼の強さは実感していたが……今の彼はそれとは比にならないほどだ。あんな中に、私が行った所で叶うはずが無い。

でも、あのイギリス清教の人も何かを狙っているとしたか思えない。まさか、あの死体をどうにかしたいのだろうか。戦闘中に余計なことをしたら致命打を浴びせかけられるのは目に見えているのに。

数馬さんが大振りの攻撃をした。あつ！！地面に刺さって抜けなくなっている。あの人、これを狙っていたんだ。瞬時に日本刀は剣によって真つ二つに、死体が数馬さんから離れた。

すごい………死体を上手くキャッチして安堵している。だけど、数馬さんが！！

ついにあの方は殴られた。釘バットらしき物で。嫌な叫びが響き渡る。

数馬さんは情け容赦なく、あの人を殴り続けている。背中だけを滅多打ちだ。あのままでは死んでしまう。それだけは阻止しないと！！もう、此処にいるだけじゃ駄目だ。あそこへ行かないと！！

五和SIDEOUT

「数馬さん！！！！」

我慢出来ずに飛び出した五和は、フリウリスピア海軍用船上槍を片手に彼らの方へ向かった。建宮が引き留める声を上げたがそれも聞かずに走った。

彼女の声に、悪魔は意識をそちらに向けた。釘が刺さり、血だら

けのレンは満身創痍ながらも自分が出しうる力を全て使い逃げ始めた。スピードはとても遅いが。

悪魔はまだ、海軍用船上檣フリウリスティアを持ち、走ってくる五和に集中している。今の内に、早くレンは逃げなければならなかった。だが、そこまで時間を稼げるはずは無い。

悪魔は五和を障害物として認識せず、またレンに意識を戻した。レンがのろのろと逃げているのを見た途端、彼はレンを、そしてあの憎むべき輩の死体を歩いて追いかけ始めた。

動くのが遅いレンに、悪魔は簡単に追いついてしまう。レンに向かって、ステイルや上条、建宮やらが助けようと走ってくるが、もう間に合わない。

釘バットがまたもや、レンの背中に突き刺さる。そう思われたがぴたりと悪魔は手を止めた。

「数馬さん……………その手を下ろしてください」

数馬の心臓に、五和が後ろから海軍用船上檣を突きつけていた。だが、悪魔が手を止めたのは海軍用船上檣を恐れたというわけじゃない。別に、悪魔はさされても死にはしないのだ。

悪魔はにやりと後ろを見て笑う。まるで、刺してみろんでも言うかのようにだ。前ではレンは回収されていた。

悪魔はきつと、こいつは必ず、俺のことを突き刺す。それから力ウンターで済ませてしまおう。そう考えていた。その後、じっくり

とあの死体を取り戻せばいい。それだけだった。

じつと槍が刺さるのを待った。が、いつまでも刺してくる様子が見られない。不思議に思い、悪魔が後ろ振り向いた。

途端、カランと音を立てて、五和が海軍用船上槍を地面に落とし。突如、無防備になった彼女に悪魔は驚きを隠せなかった。

何故、自ら攻撃手段を無くした？何故、攻撃しなかった？理解が出来なかった。

悪魔が考えを巡らせているが、彼の結論が出ることは無かった。

「数馬さん……………もう、やめてください……………」

五和に抱きつかれたのだ。それも強く、とても強く。

彼女の声は泣いているように聞こえた。それが悪魔の心を大きく揺さぶった。頭の中がぐらぐらし始める。自分の思考回路が爆発した様になった。

彼女の胸から伝わる音が、悪魔から狂気を取り去っていく。目の赤は薄まっていき、歯は元のように丸まっていく。もう、10秒は続いたその感覚が終わった後、もう彼は悪魔ではなく、数馬光太郎へと戻っていた。

数馬は五和に抱きつかれたまま、がくと膝をついた。狂人の面影は消滅している。

地獄は、たった1人によって作られた地獄は終わったのだ。



地獄は終わっても、レンは泣くことしかできなかった。いくら、今回の悪だったといえど可愛い少女であったアニエーゼが、今はこんな姿になってしまったのだ。

「……………ごめんなさい……………」

しくしくと泣くレンの涙がぽたぽたと死体に落ちる。いくら泣いても、彼女は帰ってこない。そう思って彼が更に泣こうとした矢先だった。

突然、彼女の致命傷であった鳩尾から肉を焼くような音と、臭いが始まった。

「!?!」

彼は驚いた。火なんて無いはずだ。なのに、燃えている。奇妙な光景だった。

鳩尾が焼けていくと共に、傷口が刺された後を綺麗サツパリ無くなっていく。1分もすれば傷は完全に消え去っていた。

「え……………?」

アニーゼの口からゆっくりとした息が聞こえ始める。レンが彼女の胸に手を当てると、心臓の鼓動が伝わってきた。

「や、や……………」

彼は本当に嬉しい、といった表情になり、傷口に障るのにも関わらず、大きく叫んだ。

「やったああああああ！！！！！！」

と。

アニーゼと同じような不思議な現象は、教会の中のあるところで起こり始めていた。

そう、終わりよければすべてよしと昔から言われるが、この戦いは、最高の終わりを迎えていたのだった。

午前11時26分 学園都市 のとある病院

また、いつものカエル顔の医者がいる病院に、数馬はいた。しかも今回は散々に叱られてしまった。特に妹達を巻き込んでしまったということだ。

小1時間説教された後、傷の度合いを言われたが、かすり傷程度だったとのこと。入院服も着なくて良いから私服で適当に休んでいと診断されてしまった。

ちなみに数馬が釘バットで殴りまくった、最悪な事に数馬の記憶にハッキリと覚えている、レンは隣の病室にいるらしい。

「……………」

今でも、自分がやった行為を思い出す度に、数馬は死にたくなる。彼自身がやったことは人間としての道を踏み外している。そう彼は思っていた。何故か、喰い殺した奴らのほとんどは生き返ったというが、それでも嗚咽感は無くならない。

「何なんだろうな……………」

しょんぼりとしている彼に、携帯の着信音が訪れた。しかも「だんご大家族」だ。

さらに気分が複雑になった数馬だったが、嫌々携帯に出た。

「……………もしもし?」

「あっ、お疲れ様!!!元氣?」

元気な声できたのは大天使だ。

「ああ……………ぼちぼち」

「とてもそうには聞こえないけど……………しょうがないよね。色々あったんだもん」

大天使ももう事情は知っているのだろう。彼に同情するような言葉を掛ける。

「ああ……………まあ、俺は……………人として……………」

「だ、大丈夫だって！！！！あ、あれは君が悪魔として暴走しちゃったんだから。不可抗力だよ！！」

必死で励ましてくれる大天使が数馬には微笑ましく見えた。ここまで言ってくれると無理にでも元気を出さないといけない。

「そ、そうだな。そうだよな！！」

「うん、その調子、その調子！！！！」

大天使が安心して嬉しそうに言う。彼の演義は上手くいったようだ。

「ところで話は変わるけどさ……………あの、何か生き返ったっていう不思議な話。どういう事？」

ずっと彼が引っかかっていた事を大天使に聞くと、彼女は少し悩

んだように答えた。

「うーん。あれは完全に分かった訳じゃないんだけど……… 1つの仮説があるんだよね」

「仮説？」

「君に渡した釘バットがあつたよね？あれが原因じゃないかなって調べてみたんだけど………」

あの釘バットはルワンダ大虐殺で使用されたマスという物だと彼は聞いていた。それに何があるのだろうか？

「ルワンダ大虐殺っていうのは、過激派フツ族が多数のツチ族を虐殺した事件だつて言ったけど、本当はフツ族が全員過激派だつたつて訳じゃないんだよ。」

あの当時、ルワンダの過激派フツ達はツチ達と争おうとしない、穏健派のフツも殺していた。だから、多くのフツは殺されたくがないために虐殺に参加していたんだつて。

釘バットの持ち主だつた人は、穏健派だつたらしいね。だけど、家族の命が狙われる、そんなことにはなつて欲しくなかつたから、泣く泣く参加したんだね。

多分、その時、持ち主は涙を流しながら自分のバットを振り下ろしていたんだと思う。で、必死にツチ族に申し訳ないと心の中でつぶやいていたんだね。で、彼は強く、これは何もかも嘘、全部嘘。そう自己暗示を掛けていたんだよ。

強い念というのは取り憑く事がある。バットには嘘という念が強く憑いていたんだね。それも、すぐに嘘になるのはおかしいから、

時間差ですべてが嘘になる。そんな道具じゃないかって考えたよ

「おお……………」

すごい説明を聞いた数馬は、大天使の推理の素晴らしさに拍手を送っても良いと思ったほどだった。

「という感じなんだけど……………どうかな？」

「ああ、すげえよ。納得出来るよ、すつこく」

数馬が過剰なまでに褒め続けると、大天使は少し照れるように嬉しがつっていた。

で、そのまま7分は駄弁り続けた。

「おっと……………もうこんな時間か」

「あつ、そうだね。もう終わろうか」

「ああ、電話あんがとな。気分が楽になったよ」

「それは嬉しいね。次に来る人も、君をいやしてくれるから期待していなよ。じゃあね」

「はい？」

大天使の最後の言葉が気になったが、電話はもう切れてしまっていた。

「次に来る人？誰だ？」

数馬が不思議につぶやいた途端、コンコンとドアをノックする音がした。

大天使がいる所

「で、結局、脱走した悪霊は捕まったの？」

「はい。相当、手こずりましたが」

大天使が深刻な表情で書類を見つめている。内容はこう。

1664年 イギリスロンドンにてペストで死亡した子供による悪霊が脱走。被害は人間

数百人に及ぶ精神の崩壊及び暴走。とあった。

「まったく。厄介だったね。まさかこんなに大変になるなんて。おかげで半分悪魔のあの子が本当の悪魔に化けかけたんだもん」

「ペストを暗喩しているとと言われる童謡を歌いながら人を呪うなんて、子供にしてはたちが悪い……………」

「いや、子供だからじゃないかな」

「はい？どうして？」

「子供って、大人と違ってまだ精神が未熟なんだよ。そのうちに死

んでしまったら、自分達が悪霊かどうかなんて、見分けが付かないんだよ」

はあ、と大きく溜息をついた大天使。

「でも、あの子は不味いことになったね。あれじゃあまた、いつ暴走するか分かったものじゃないよ」

「どうします？取り返しが付かないことになる前に……………」

「それは駄目。絶対に許可しないよ」

断固とした口調で大天使はその1つの提案を拒否する。

「では……………いかかがいたしますか？」

「今のところ、現状維持でやっていこうよ。念のため、監視は強化しておこう。また、あの子に変な者が取り憑いたら、今度こそお終いだからね」

彼女達の仕事はまだ終わりそうにない。



一方 レンの病室

「お疲れ様でしたね。本当に……………」

レンの病室には神裂がいた。背中の中の肉が引きさかれまくった彼は、重傷の部類に入っていた。神裂が心配そうに傷口を見るが、レンは大丈夫とでも言うように明るい声を出す。

「いいえ。これぐらいは平気ですよ。全然ね」

「それにしても、こんな怪我……………」

「背中だけで済んだんだったらマシな方ですから。そんな痛みもありませんし、心配しなくても大丈夫ですよ」

レンが無意識に軽く神裂の頭を撫でていた。

3秒後には2人とも状況に気付く。

「あああああ、すいませえん!!!!」

「えっ、いや。別に、その、気にするようなことでは……………」

なんだか、やっぱり凸凹な2人だった。

元に戻って数馬の病室

微妙な沈黙が病室を包んでいた。  
病室にいるのは五和と数馬だけ。色々あったあとだと話にくいのだ。

「え、えーとまあ……………ごめんな、迷惑掛けて」

先に口火を切ったのは数馬だった。しかし最初の言葉が謝罪というのも悲しい。

「えっ、あつ、大丈夫ですよ！！数馬さんが謝ることなんて何もありませんよ！！」

健気にフォローしてくれる五和にほろりと泣けてくるが、数馬は自分が行った事を直視するために、五和に問いかけた。

「だけど、俺のやっていた行為を見てどう思った？やっぱり軽蔑するか？」

彼は殺戮以外にも食人をやっていたのだ。普通だったら侮蔑されてもしょうがない。

五和も答えに詰まると彼は考えたが、意外や意外、すぐに彼女は返してくれた。

「いいえ。軽蔑なんてしません。確かに、あの時の事は悲しい出来事でしたけど、それがすべて数馬さんの責任のではありません。元々、あれが起きたと原因は争いがあったからです。

私は、たった1人がすべての責任だということは絶対には思っています」

「……………そうか」

彼女のはっきりとした主張は、数馬の心に大きく響いた。不意に彼の目からほろりと涙が零れていく。それも何粒も、いくら拭いても止まらない。

「あっ、どうしました!？」

「い、いやな……………なんか、涙が出てきて」

「じじじと目を拭く数馬。そんな彼を五和がまた抱きしめた。

「それに……………ちゃんと涙が流せる人を軽蔑なんて出来ません……………」

五和の一言で、数馬からさらに涙が溢れ出す。どばどばと一気に流れる涙は10秒してやっと収まってくれた。

目が赤くなつた数馬は五和の顔を見る。

「ありがとう……………な」

「いいえ……………」

数馬はお礼を言っても、まだ彼女を放そうとはしない。それどころかもっと、体を密着させるようにしてくる。

「か、数馬さん……………」

やはり、五和は彼にとって愛おしい存在となっていた。放したくない。絶対に。

「五和……………好きだ」

素っ気ない一言で、数馬は彼女と唇を重ねた。

<http://2509.mitemin.net/i23154>

/

一瞬驚いた様子だった五和だが、すぐに彼に身を委ねた。舌と舌で絡め合う長い、長いキス。それが20秒間は続いただろうか。

「ふはあー!!」

息が続かなくなり、キスは途切れる。五和も数馬も何ともしれぬ、不思議な快樂におぼれているようだった。

「私も……………数馬さんの事が……………好きです」

五和の返事を聞くと直ぐに再度、キスに入る。少しでも長く、長く、彼らはこっついていったかった。

「何て言えば良いんでしょうね。とミサカはドアをこっそりのぞきながら今の光景の感想が思いつかずいらいらしています」

「とりあえず、リア充爆発しろとも言いたいです。とミサカは妬

ましく言います」

数馬の病室前では3人の妹達が中の様子を観察していた。見た彼女らの反応は言わずもがな。

「とりあえず、写真を1枚。とミサカは携帯で上手く撮影します」

そして、この1枚の写真が2chのお祭りレベルまで発展する大惨事を引き起こすことになってしまつのはまた今度の話。

## オルソラ奪還戦争・大激戦「後編・血みどろ」(後書き)

〈反省会〉

えっと、本当にお久しぶりです。くず作者、墜ちた海鷲です。

遅れた理由は一応、活動報告に書いてあると思いますのでそちらを参照してください。

で、こちらでは全く進歩しない作者の文章力について反省します。

本当に、本当につまらない内容ですよ。ありきたりな展開、つまらない終わり方。まだ見てくださっている方がいたとしても、失望させるレベルでしょう。申し訳ないです。

作者は頭が固いので、面白いネタがなかなか出てこないのです。ああ、情けない。もっとマシなネタを考えろってんですよ。三ヶ月間、すべて無駄だったのでしょうか。

ほかにも多々、愚かなところがあると思うので、どうか読者様、ご指摘願います。

ついでに、更新頻度にも関わるので少し、作者のリアルの近況を話します。おもしろくも何とも無いので、スルーしてもかまいません。

最近は学業が本当につらくなって参りました。ゆとりで厨坊な私ですが、なかなか苦しい時期です。努力はしていますが、テストで上位を取るのには難しい。毎晩、家に帰ればすぐに寝てしまいます。

楽しみの1つである部活も同僚の2人が長期にわたって喧嘩していて、部長の私が必死に仲介しても全く駄目。頼むから、部活崩壊するから早く仲直りしてくれ。と言いたい。

いい加減、泣きたくなってきましたね……orz

次話の構造は大体、考えてはあるので時間が出来たら執筆していきます。ただし、また無駄に話が長くなり、その上、身边でトラブルが発生してしまうと間違いなく大幅に遅れるでしょうね。

と禁の2期も終了したのに、まだまだ7巻。前途は遠いです。

お見舞いに行こう。(前書き)

とりあえず、ぎりぎり7月下旬に更新できました。

今回、やっと8巻に入りましたが、まったく展開が進んでいません。申し訳ないです。



お見舞いに行こう。

大天使がいる（以下略

薄暗い部屋の中、机の上に積み重なる数多くの文献に埋もれ、大天使ことあなたは1つの物を調べていた。

触ると痛い目に合うので慎重に、ゴム手袋をしながらいじっていた。それは木で出来ており、所々に血が付着している。そして、カトリック教徒が持つ物と同じ形だ。

そう、ロザリオである。

「オリーブの木で出来ているよね……………」

これは先のローマ正教の精鋭、アニエーゼ部隊と数馬率いる天草式の闘争時、数馬光太郎がオルソラ・アクィナスに贈った手製のロザリオである。闘争の終盤に起きた惨劇の際に大天使が部下に回収させたのだ。

回収したときに、触れた部下が負傷したなどの報告が上がっており、非常に危険な物だと大天使は判断した。それを受け取った際も、丁寧に自分の書斎、といっても薄い本だらけだったりするが、へと持ち運んだのだ。

とりあえずそれを机に置いた彼女は薄い本に埋もれていた旧新約聖書を引っ張り出し、旧約を中心に調べながらこのロザリオが何なのかを調べていた。

「力が強いなあ、これ」

ゴム手袋をしながら触っても痛みが走る。ここまで力が強い物体を見たのは彼女も久しぶりである。最後に見たのはイエス・キリストが荒れ野の誘惑と言われる試練を受けたときに現れたサタンであっただろう。

あの時の奴はとても恐ろしかったと、彼女は昔の記憶を掘り返した。

いったんロザリオは放置して。

マタイによる福音書 4章 1節から11節

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして40日間断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来てイエスに言った。

「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」

イエスはお答えになった。

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る1つ1つの言葉で生きる。そう聖書（この時は新約聖書がなく、旧約聖書のみ）に書いてあるだろう」

次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の橋に立たせて言った。

「神の子なら、飛び降りたらどうだ？」

神があなたのために天使に命じると、あなたの足が打ち当たる事のないように、天使達は手であなたを支える。と聖書には書いてるじゃないか」

イエスはこう答えた。

「あなたの神である主を試してはならない。とも書いてあるだろう」

更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せながら言った。

「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これをみんな与えよう」

すると、イエスは言われた。

「退け、サタン！！」

あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよと、聖書には書いてある！！」

そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使達が来てイエスに仕えた。

あ のとき、こなたもその様子を見物していたが、いつイエスが悪魔

の誘惑に負けるか不安でならなかった。が、彼はそんな言葉に屈せず、神に仕える姿勢を崩さなかった。まさしく神の子、と言えたのだ。

最も、キリスト教では唯一神で通しているが、実際にはこちらには多くの神がいるし、あの当時、風紀が乱れまくって「ドキッ 神様だらけの乱交パーティー」などという催しが何回もあった中、誰と誰の子なのかは分からないものだ。

一応、マリア様が生んだとされているが………怪しいものである。

閑話休題、元に話を戻す。

「オリーブの木でここまで強いのは………旧約聖書の時代しかないね」

オリーブの木が力を持ちやすいのはユダヤ、キリスト教において聖別として重宝されてからであり、それも旧約聖書時代が最も顕著である。

確率としては5割の確率で正解しているだろう。だとすれば………

「むむむ………木の記述があるのはノアの方舟だけだから………これかもね」

創世記8章10～11節

鳩は夕方になって戻ってきた。見よ、鳩はくちばしにオリーブの

葉を加えていた。の葉水が地上から引いたことを知った。

「鳩が加えてきた所にあつた木かな」

なるほど、重大な役目を知らせるための証拠である葉を持っていたその木かもしれない。鳩は神聖な生き物であるから力を授かったのだろう。

「だとしたらどこでそんな木片が……………」

そう、だとしたら数馬の元になぜこれがあるのか？

いたずらか？それとも嫌がらせか？

「あれ、どつちも同じだね……………」

そもそも数馬に恨みを持っている奴が周りにいるはずがない。

他に候補を挙げるとすれば。

「偶然？にしては確率的にあり得ないし……………」

3分間考えても分からないので。

「もういいや。とりあえずこれの処理をどうにかしよう」

次の段階に移行した。

「どうしようかな……………威力下げられるようにコーティングしちゃおうかな」

あれこれ案を考える彼女。処理をしようにも物が物だけに生半可な処理では後々、大変なことになる。

「嫌だなあ……こんな厄介な物を作っちゃうなんて」

このロザリオの降下としては大体の生物、たとえアジ・ダハーカでさえもダメージを大きく与えることが出来る。

補足説明：アジ・ダハーカ

バビロン（古代メソポタミア地方）にあるとされているクリンタ城に棲み、容姿は3頭3口6目を持ち、竜のような体型をしている化け物。傷を付けてもそこから爬虫類などの邪悪な生き物が出てくるため殺せないというとても面倒くさい輩。ただ今脱走中。見つけたら連絡ください。

「半分悪魔が作ったロザリオに、人の血をたつぷりと染みこませたそんな物が厄介じゃない訳がないよね」

聖と邪悪というのは反発する物。だが、半分であるにしても悪魔であった数馬は無理矢理、聖の位置にあるオリーブの木片に触り、さらに削ってしまったのだ。変異が起きてもおかしくない。

そして、トドメとばかりに先の惨劇で穢れているとされる人間の血液が付着した。これによって大きく変異が発生し、これが生まれってしまったのだろう。

「名前は穢れたロザリオにしよう。安直だけどね」

さて、早いこと処理しないと何か面倒くさいことが起きかねないので、こなたは電話を取った。

誰に掛けるか少し悩んだが、ここはゲルマン人の伝承に多く登場している優れた鍛冶屋、ヴェルンドに頼むことにした。人気の鍛冶屋の1人なので簡単に出てくれるか怪しかったが、呼び出し音が数回続いた後、がちやりと出てくれた。

「あつ、ヴェルンド？早速で申し訳ないんだけど……いや眠いつて言われても、ちょ、切らないでよ！！………仕事を頼みたいんだけど。謝礼？何でも良いよ、言ってごらん。」

えっ？同人誌？SAZの「小町二廻り」を寄越せ？………ええ………分かったよ。じゃあ商談成立、今からそっち向かうから」

電話を切ったあなたは直ぐに、大切な薄い本がしまわれている棚を開け、そこから頼まれた1つを取り出した。

彼女としては渡したくない逸品なのだが、背に腹は代えられない。18禁の本なので厳重に袋を2、3重に入れて、外へ飛び出した。

そのとき、ハラリと机から1枚の報告書が落ちたのだったが、彼女はまったく気づかなかつた。

> i 2 7 2 4 5 — 2 5 0 9 <

9月12日 アパート

「……………」

夏の暑さがやっと和らいできた9月の中頃。学校を休みまくって戦争やっていた数馬であったが、久々に学校に行き、小萌先生に叱られて、授業をやつて、やつと休日にこぎ着けたのだ。ちなみに、昨晚、メールで赤光の黒十字からローマ正教との講和が完了したとのこと。随分と早く終わったように感じた彼だが、昨今の戦争は短いのが特徴だ。意外にこれも普通なのである。

閑話休題。

ベットにごろんと寝転がり、少し寝ようとするのだが寝るたびに夢を見てしまう。あのときの惨劇の夢を。

食べた肉、人の肉は誠に美味だった、そう彼は嫌々ながら感じていた。ほどよく塩がきいた肉と良質なチーズ、そして赤ワインを同時に食べた、そんな感じだった。だが、そんな味を思い出すたびに彼は、胃の中から胃酸がこみ上げ、嘔吐しそうになる。

実際、嫌な話ではあるが、人の肉は非常に美味とのこと。野生の肉食動物が人の肉を食すと、その味に病みつきになり、人を襲うようになるという。北海道で起きた三毛別さんけつひくまじけん事件が最も著名だろう。

それならば、人が食べてもやつぱり美味しいわけで。もしも理性やらなんやらが無いサイコパスなどは食してもおかしくはない。

当然、数馬は理性もきちんとある人間であるのだが、あのときの彼はそんな感情をすべて失った状態だったのだ。さもうまそうに食っていた自分の姿を思い出すと自己険悪と、罪悪感に悩まされる。

こんな時、気を紛らわせることが出来るのは1つだけ。



五和とのキスを思い出すことだけだった。

「……………ふう……………」

別に抜いたわけではないのだが何となく、彼は彼女とのキスを思い出すと、顕然たる男子だったら当たり前なことだが、興奮してしまう。人間、嫌なことを忘れさせることが出来るのは快樂やら幸せなのだろう。

唇はふつくらと柔らかく、触れるたびに心地良い。舌としたが絡め合った時には言いもしれぬ征服感と快感に浸った。抱きついている時に胸板に当たる豊満な胸は言わずもなが、むっちりとした太ももさえも心拍数が上がる格好の材料だった。

かれこれそれを4回はやっていたのだろう。今思い出すと病院で恥ずかしがらずによくそこまでやっていたものだと自分自身、馬鹿だと感じてしまう。

「よっし！！気分転換完了！！」

無理矢理テンションを上げる数馬。早速着替え始める。

「休日だ、はっちゃけよう。ぶざけよう。暴走しよう、さあLet  
、 go ー！！」

とりあえず、彼は上条を誘うことにする。その後、青髪やら土御門を呼ぶことにした。

「……………しかし、いやはやこんな俺とまだ連んでくれるなんてね……………」

食人をしていた数馬を見た後でも、上条は普通に接してくれている。まったく恐れてもいない、軽蔑もしていない。しみじみと、本当に神のようなお方だと数馬は感じていた。

そんな彼、しょっちゅう不幸な彼にお礼である。晩飯に焼き肉を作ってやるかと数馬は考えた。

「電話は………うん、こなくて良いよ。絶対に」

我らは己らに問う 汝ら何ぞや!!

我らは熱心党イスカリオテ 熱心党イスカリオテのユダなり!!

ならばイスカリオテよ 汝らに問う汝らの左手に持つ物はなんぞや!!

銀貨三十と荒縄なり!!

ならばイスカリオテよ 汝ら何ぞや!!

我ら使徒にして使徒にあらず 信徒にして信徒にあらず 教徒にして教徒にあらず 逆徒にして逆徒にあらず!! 我ら死徒なり 死徒の群れなり ただ伏して御主に許しを請い……

「若本さん自重してええええええええええええええええええ!!」

突如として聞こえ始めた若本ボイスによる着信。しかもHELL SING。

「何だよ!! 狙っているのか!? 嫌がらせですかこん畜生っ!!」

泣く泣く電話に出る数馬、向こうからは元気な声が。

「やつほー若本さんの名台詞はどうだった？」

「確かに最高だとは思うがこんな時に掛けてこないで!!!」

任務だったら絶対に、絶対に断る、そう思いつつも彼は用件を聞き始めた。

「今回は何のご用で？」

「あゝ今日はとりあえず、任務は頼まないよ。さすがに、まだ色々大変ばいからもう少し後。

今回は装備を色々送ろうと思って」

「えっ？装備？」

てっきり任務の連絡かと思っていた数馬は拍子抜けしてしまった。

「うん。いやさ、結構減ったでしょ？日本刀は真っ二つだし、銃弾だっていい加減備蓄が無くなっただろうし」

「そーいや……………確かに」

先の戦で、レンには日本刀を真っ二つにされ、銃弾は無駄に撃ちまくっていた。彼が少し、Lリアタッシュケースを覗いてみると中はあの呪書と銃、デザートイーグル、S & amp; W 29、99式小銃。

そしてあの釘バットと弾倉2個、弾丸入りの箱5個しかなかった。ちなみに鎧と軍服は押し入れの中。

「ありやま〜」

「やっぱり無かったんだ」

武具が無いとすると後は数馬自身の能力だけとなるのだが、重力を操れたとして用途は敵の機動能力の大幅減少、銃などの武装の破壊、そして殺傷しかない。微妙に細かい事には向いていないのだ。ついでに長時間の戦闘に耐えきれぬ自信が無いというものもあるが。

「じゃあすぐに武具は送るから、テーブルの上片付けといて」

「分かった」

すぐに彼は大きなテーブル、元々は祖母の家の物だった、の上にあるエロい……ではなく真地面な本を本棚などに片付け始めた。

「よし、良いぞー」

「OK、drop bombs!」

爆弾を落とすしちやダメだろ、と彼は思いながら来るのを待つ。

10秒後、ゴトンと段ボールが1つ、そして長い風呂敷で包まれた物が落ちてきた。

「うわぁ…すごいな」

「来たら中見てみて〜」

「こそりと、まずは段ボールを開けることにする数馬。」

中には・50A E（鋼）と書かれた弾が7発入り弾倉として50個、44マグナム弾（鋼）と書かれた15発入りの箱が60個、後よく分からない7.7mm弾（爆）とでかでかと表記された13発入りの箱40個、とやけに多い。」

「デザートイーグルの方、S & W 29の弾丸は対人スチール・コア弾に、99式小銃の弾はこっちの警察が、新しく開発したボムアーミーピラシング爆裂徹甲弾にしておいたよ。」

そう説明されても、数馬にとっては弾丸の違いなんて分かるわけがないのだが、それにしても数が多い。

「これ……アタツシケースに入らないだろ」

「とりあえず持てるだけ持っておいて、後はどっかにしまっておいたら？」

あまり部屋の中に銃弾を置くというのも気が進まない数馬だったが、仕方がないので押し入れに突っ込もうとする。と、ふと彼は非殺傷弾丸が無いことに気付いた。

「おい、いつも支給してくれたよく分からない特殊弾はどうした？」

「ああ、いやさすがにこれからのイベントで……あの特殊弾じゃ威力不足だと思って。多分、これからバシバシ出てくる敵に対して無血で争うのは不可能だろうし」

「……………そうか」

あまり実弾を用いての殺傷行為はこれ以上したくはない数馬であったが、先のことを考えて言っているこなたの主張は正しいと言わざるを得ない。駄々はこねずに受理しようと彼は決めた。

「じゃあ次は風呂敷を開けてみて」

押し入れに段ボールを突っ込んだ数馬は、こなたに言われて彼は風呂敷の方を見た。風呂敷はきつちりと紐で結ばれており、丁寧に包まれていた。それは細長く、触ると彼は固い感触を感じ取った。

「……………」

するりと風呂敷を解くと、そこには立派な日本刀があった。前の日本刀、雷切とは細かい部分が違うのが見受けられる。きちんと鞘に留め具が付いており、雷切にあったような刃が曲がっているような所はなく、真っ直ぐだった。

刀身を見ると、錆は一つもない、とてもとても綺麗な刃であった。

> i 2 3 1 5 5 | 2 5 0 9 <

「これは……………」

悪くはない、それどころかとても良いのだ。数馬はこの日本刀の詳細が気になった。

「刀の名前は？」

「ああ、きよみつ、清き光と書いて清光だよ」

綺麗な名前だ、そう思いながら数馬は切っ先から鐔をじっくり見る。

「製作者は？」

「それは分からない。ただ、それを良い刀と選んだのは岩崎航介という方だよ」

岩崎航介という名前だけ言われても、彼はサッパリ分からない。

「誰よ？」

「やっぱり知らないよね……説明してあげるよ。」

岩崎航介氏は新潟県三条市の刃物の発展に努めた人で、刃物問屋の人だったんだ。腕はとても良くて、有名な話だと1年に1度しか研いでいないこの人が作った剃刀で、1000人剃っても平気だったっていうのがあるくらい。

まあ、すごい人だって考えてくれればいいよ」

最後に適当に済ませた彼女だったが、数馬は入手経路を聞いてみた。

「あ、これは友達から貰ったんだよ。その友達の本家が岩崎航介氏の留学やりに資金を出していたんだって。それで友好関係にあつて、

貰ったのがこの刀だとか」

「友人から貰って良い物なのか、これ？」

「使わなければ宝の持ち腐れだって言っただけで快く譲ってくれたよ。ただ、そのままじゃ君に渡しても直ぐに壊すだろうからもう一回、腕利きの鍛冶屋に頼んで打ってもらったんだ」

ふーん、と数馬は納得したような声を出して刀を鞘にしまう。

「斬ることに關しては雷切に劣るかもしれないけど、重量の軽さ、使い勝手なんかの総合的な面では圧倒的にこっちが勝っているはずだよ。それに、暴走もしなくて済むし」

「なるほど……………」

確かに、数馬としては暴走しなくて済むのは非常に助かる。近接戦の際に時間制限があつてはたまつたものじゃない。

「で、これだけで終わりか？」

数馬がふと時計を見るとすでに時計の針は2時7分を指していた。遊んで焼肉をバツクバクと食べるには少々時間がおしてきている。

「あつ、それと最後にこれだけ!!」

慌てたような声でこなたは何かを送つたようだった。10秒はかかるかと思つたが3秒と案外早く来た。

「……………ロザリオ？」



「とりあえず、おまけみたいな物だよ。お守りと思って付けていて  
」

「ふうん」

> i 2 7 2 3 8 — 2 5 0 9 <

それは銀製のロザリオでしっかりと磨かれていた。十字架にはイエス様を取り付けられており、首にかけられるように56個の数珠が付いている。本格的である。

「ありがたい、貰っておくよ」

「そう言ってくれると嬉しいよ。って、ありやま。もうこんな時間だね。じゃあもう切るね。バイバーイ」

「はいよ〜」

ピツと電話を切った。すぐに部屋は静まりかえり、後に残るは送られてきた装備のみ。

「ロザリオか……………」

銀のロザリオというのは何とも厨二患者が好む代物ではあるが、どうもこのロザリオは付けたくない数馬。ただ、どうも貰った物というのはゲームでも現実でも使いたくなる性分でもある彼はひよいと首に掛けてみることにした。

「……………数珠が邪魔だな」

大粒の数珠が紐代わりとなっているため、どうも違和感が残る上に少し重い。

Yシャツの下に入れてしまうと形が浮かび上がって変な感じになっってしまう。

「ポツケにでも入れておこう」

とりあえず彼はぐるぐるに丸めて突っ込んでしまった。さて、時刻はすでに2時15分。

「とりあえず、出かけるかあ」

のんびりと数馬光太郎は外へ出て行った。

9月13日 午前9時34分

昨日、結果14万5862円を消費した数馬光太郎。少々、胃も

たれ気味であった。

「クツパが俺は好きなんだよ」

未だに焼き肉店でメニューからクツパが消えていたことにすごく文句を言っている。

「……………さて、どうするか」

だが、いつまでもウジウジと文句を言っている暇は彼にはない。これからは第8巻に移行するのだ。

「1人作戦会議」

「……………スケジュールがハード過ぎるな」

第8巻のイベントの始まりは明日。同時進行で3つの流れが形成されている。

1つは一方通行、もといセロリ（アクセラロリータの略）のルート。もう1つは白井黒子のルート。

そして、一番活躍が薄い上条当麻ルート。

「俺としては……………セロリルートだな」

このルートにはアニメ時に視聴者、特に小さい子供が好きな紳士が悶絶するような場面がある。それは打ち止めと一方通行の入浴シーンだ。

正直セロリは誰得だと言いたいが打ち止めに関してはきつと何万人もの紳士がぶっ壊れたことだろう。現に、放送直後のPIE X IVを閲覧した際、通行止め、つまりはセロリと打ち止めのカップリングのイラストが急激に増えていたことからそれもそれは分かる。

数馬としてはこれを見逃すのは愚策中の愚策だと考えている。だからこそ、見逃すわけにはいかないのだが。

「でもここで新キャラ登場なんだよなあ……………」

どうもこの原作は頻繁に新しいキャラが出てくることが多い。最も、今回出てくるのは一度だけ出演しているが。

「新キャラ狙いだ和白井黒子ルート。そうなる……………」

少し思考した後、数馬は決断した。

「イベントというのは繰り上げてなんぼだ」

残念ながら、愚策である感は否めない決断ではあったが。

病院 午前10時42分

「308号室か……………」

今、数馬は病院の中、目的地の部屋のドアの前にいた。手にはスピアリブと山形産の桜桃を持っている。小綺麗な階段で3階まで上り、301号室から308号室のドアにたどり着くまで、彼はどう入って良いのか分からずに緊張していた。

「いつぞやに何か大金渡してなかったか、そっいゃ」

いくら何でもあの時の数馬の去り方、つまりは大金渡して直ぐに消えてしまったあれ、は酷いと彼自身も感じ始めていた。それから何も連絡を入れず、1度妹達の召集のために打ち止めの脳内にハッキングしていたが、突然見舞いに来られても向こうは困惑するだけだろう。

「……………というか考えてみれば妹達を使っちゃっていたことはばれてないよな。ばれたら殺されちゃうな……………」

一方通行は過去に妹達に対し、自らが行った事を反省し、償いは出来ぬとしても妹達を守ると決めている。まあそれは原作3巻などを読んでくれれば最も簡単に片付く事ではあるが。

それなのに数馬は彼女達に傭兵まがいの事をさせてしまっている訳で、もしもそれが彼に知られたとしたら、結果は見なくとも分かる。

ひしひしと恐怖がわき上がってくる数馬。このまま桜桃とスピアリブだけ置いていって帰ってしまいたくなってきた。

「……………帰ろう……………神様もきつと許してくれる」

回れ右をして帰ろうとした数馬。だが目の前に人がいた。

「ん？お前は……………あの時の不良学生じゃん！！」

運の良い悪いというのは重要なときに限って悪い方に傾く、そう感じた彼だった。

「いや、いや、あのね、無理。なんか俺は場違いっぽいから！！」

「遠慮することないじゃんかよー！！」

部屋に入る事を断固して拒否する数馬とそれを無理に入れようとする黄泉川愛穂。病院内でのその様子は騒がしく、かつ異様であった。

「いやね、マジで今回は一方さんに殺されちゃう。死んじゃう。そんな気がする！！」

「いやいや、あいつも今は患者だから。全然平気じゃん」

「そ、それに俺は不良学生の認定を……………」

「まあ表向きはそうだが、実際はスパイだから大丈夫じゃんよー！

「！」

「機密事項をさらりと言わない！！後大丈夫ではない！！」

「打ち止めがお前にはお世話になったって言ってたし、ささっ、入った入った！！」

「おぁ……………わが神、わが神、どうして私を見捨てられたのですか！！！」

がらりとドアが開けられ、数馬は地獄の中へと放り込まれた。

数馬は目をつぶり、頭を抱えこれから起きる確率が高い地獄に恐れおののいていた。が、一方通行の声は聞こえない。

「何だ、眠ってるじゃん」

黄泉川の一言を聞いて彼も顔を上げて一方通行を見た。そこには昼時も近いというのにぐーすか寝ている学園都市第1位がいた。ついでに付属として打ち止めも何故か近くで寝ている。

「……………」

この時、数馬には2つの案が頭の中に考え出た。

一つ、このまま帰る。

2つ、セロリをなく…ではなく起こす。

「……………うん」

正直、こんな安らかに寝ている様子から察するに一方通行は数馬の愚行を知らないと思われる。もしも知っていたとしたら怒り狂って病院から抜け出し数馬を抹殺しようとするだろう。

どうせスペアリブが冷めては美味しくないし、桜桃も冷やしたいしで数馬は彼を起こすことにした。

「さて……………どう起こそうか？」

なかなかこういう機会もない。小学校の頃から寝起きで唐突に起こされてびっくりさせられる立場であった彼である。どんな起こし方をしようかと考えてしまう。

「……………よし、最も嫌みな方法で」

「ん？何するつもりじゃん？」

数馬は指を口元に当て、静かにと言うと一方通行の耳元に近づぐ。そして。

「このロリコン、変態、幼女好き、変質者、もやし、男の娘、鈴科百合子、ドS、シヨタ、ペドフェリア、変態という名の紳士、ロリコン、ついでにロリコン、あともう一つロリコン、ファッションセンスの、ウルトラマンもどき……………ロリコン、ロリコン、ロリコン……………」



彼がネットで見つけた一方通行専用の悪口？をぶつぶつとつぶやき始めた。

人間、寝ているときに耳元でつぶやかれると変な夢を見たりする。それが悪口だったりすると特に酷い悪夢になる。

で、一方通行の場合も例外ではなく。

「んなアあああああああ！？」

見事に飛び起きてくれた。数馬歓喜。

「おお、おはよう！！一方通行君！！」

「……………」

彼の半開きの目がとても機嫌悪そうに数馬を見る。なかなか威圧感がある。

「どうした？そんな怖い顔をして？」

「……………てめエ……………誰がロリコンだ。あア！？」

「あつ、聞こえてましたかー」

「ましたかーじゃねエ！！死にてエのか？おい？」

機嫌の悪さMAXな一方通行。確かに、誰だってロリコンと言われたら怒る。

「いやいや、こんな真つ昼間から寝ている不健康な貴様に現実を教  
えてあげただけさ」

「何が現実だア？てめエそんな根も葉もないこと誰が信じるとでも  
オ？」

挑発的な態度の第1位だが、数馬は冷静に、そそくさと言つての  
ける。

「はっ、誰が信じるかつて？そりゃあ2chの色々な板にそんな情  
報がいくらかでも流れているから2chネラーの9割方が知っている  
……………」

「上等だ！！てめエ、ここでぶちのめされたい様だなア？」

一方通行がベットから勢いよく立とうとしたその時。

「はい、はい。そこまでにしとくじゃん。ここは喧嘩する場所じゃ  
ないぞ？」

本格的な闘争状態に入ろうとする前に黄泉川が両者を止めに入っ  
た。ここで黄泉川が止めに入らなかつたら病院が灰燼とかしたかも  
しれない。

「……………ちっ」

一方通行は舌打ちをして臨戦態勢を解除した。

端から見れば嵐が去っていったのと同義である。

「俺も少しふざけすぎたかな」

数馬も反省している態度こそ見られないがそう、言葉だけは発しておく。なんだか彼は楽しんでるように見える。

「でエ？一体何のよオ何ですかア？」

一方通行からようやく本題の話になった。数馬もすっかり忘れていたように、あっ、と声を出すとビニール袋からごそごそと取り出した。

「いやな。遅くなっちまったが見舞いの品だ。あんたは肉が好きそうだからスペアリブ買ってきた。食ってくれ、いや食え」

まだホカホカでとても美味しそうなスペアリブ。肉が好きだと後々豪語する第1位にとって腹の虫が鳴る物だ。

「おいおい、病院内じゃあこういうのは御法度じゃん？」

「構わないだろ。どうせ何処の世の中でもルールってというのは多少無視されても崩壊しないんだから」

変な言い訳で黄泉川を受け流し、数馬は一方通行に肉を突きつけスペアリブる。

「何で俺がこんな物食わなきゃいけないエンだよ？」

だが一方通行はいやがるような声を出す。数馬は少し苛立ちを覚えた。

「とにかく食っとけ。いいから食っとけ。旨いから。すっげえ旨い

から

「……………」

何回も押しつける数馬に、さすがの一方通行も折れた。無言でスペアリブを受け取ると、ふたを開けて食べ始めてくれた。

「よし。それで良い」

数馬も満足げな声を出す。

と、そんなスペアリブを食う音が聞こえたのか、打ち止めがゆっくりと起きた。

「ん〜……………なんだろう、良いにおいがする。とミサカはミサカは寝ぼけながらつぶやいてみたり」

彼女が起きた途端に、数馬は気持ち悪い程ニツコリ顔になって彼女に近づく。

「ああ、起こしちゃったかな？ごめんね、お嬢ちゃんフロイヤイン」

急にとても優しい声に変わる彼はまるで別人な様。一方通行はともかく、黄泉川ははあ？みたいな顔をしている。

「あれ……………あなたは……………とミサカはミサカは目の前の人が誰だか思い出せ……………あつ！！あなたはあの時の料理を作ってくれたお兄さん！！とミサカはミサカはテンションが上がりながら思い出してみたり！！」

「ご名答！！さすがだね、お嬢ちゃんフロイヤイン」

いつぞやの時、打ち止めに初めてのご飯を提供したのが彼なだけあって、印象はとても良いみたいだ。とびっきりの笑顔で思い出しにくれた。

「全然会いに来なかったからうつかり忘れちゃったよ！！とミサカはミサカは正直に本音を言ってみたり」

「うつ……ご、ごめん。最近忙しくて……お土産持ってきたから許してね？」

がさがさと今度は桜桃を取り出す数馬。優に70個はあるその美味なる果実は子供にとって嬉しい物。無論、打ち止めも例外ではない。

「うわあ！！すごく美味しそう！！とミサカはミサカは心底喜んでみたり！！」

「美味しいぞ！！山形産だからな！！しっかり水で洗ってあるからすぐに食べて良いぞ！！」

山形県産である事をあえて押していく彼ではあるが、実際に山形県産の桜桃は美味しい。ぜひ皆様も1度で良いから食べてください。うちの祖父が喜びます。

さて、打ち止めに桜桃を渡すと彼女はすぐさま食べ始めた。水で洗ったものを保冷剤で冷やしておいていたため、ひんやりしていて美味しい。ただし、桜桃の旬というのは初夏であるためまったく季節外れではあるのだがそこら辺は気にしない。どうせ温室栽培の奴

もある。

「ん~~~~、美味しい!!とミサカはミサカは感激しながら言ってみたり!!」

本当に美味しそうに食べる彼女はまさしく天使だ、そう数馬が考えてもおかしくはなかった。一方通行がセロリへと変貌するのがよく分かる。

とそんなセロリもスペアリブを食べる手が止まり、微笑ましく、目だけが、打ち止めを見ていた。まるで小学生の娘を見る父親のような感じである。

「やはりこの子は可愛いな。あんたもそう思うだろ？」

「けっ、こんなクソガキのどこが可愛いんだよ……………」

口では冷たいことを言っているが、本心ではないのは丸わかりである。

「男のツンデレなんぞは誰得だぞ？」

「あア!?俺のどこがツンデレだっつんだっ!？」

「いやはや、そんな所さ。まあいや。あぁっと、お嬢ちゃんフロイライン、種はちゃんとはき出しなさい」

無理矢理話しを切られた上に、数馬は打ち止めの方に向かってしまふ。一方通行、置いてけぼりであった。

「けっ、分かんねエ奴だ……………」

「まったくじゃん。でも、悪い奴じゃない、そうだろ？」

黄泉川の問いかけに対して彼はうんともすんとも答えなかった。気持ちの良い、晴れた午前中前の出来事である。

（1時間後）

「ねえねえ！！お話してよ！！とミサカはミサカはおねだりしてみたり」

「お話？」

桜桃を食した後、ずっと打ち止め、後ついでに一方通行、と遊んでいた数馬。ところが急にそんな要求をされてきてしまった。

これは困ったと考える数馬。今まで、子供にお話なんてしたことが無かった。いや、絵本を読んであげるとはあったが、こんな自分が覚えているお話なんて持ち合わせていないのだ。

「……………よし、じゃあシューベルトの魔王を…痛っ！！」

一方通行に無言で殴られた。確かに、そんなもの話したら打ち止めが泣くだろう。

「分かったよ、悪かったよ……じゃあどうするかな」

正直、彼の頭の中にしつかりと残っているお話なんて小学校の頃、とても泣いてしまったという苦い記憶がある。「ちいちゃんのかげおくり」や「かわいそうなぞう」「一つの花」ぐらいしかない。それもどれもが悲しいお話である上に、歴史が違うこの世界では話していけない物だろう。

「う~~~~ん……………よし、これにするか」

一生懸命に考えて、1つだけお話を思い出した数馬。  
小さい頃読んだ絵本の中で、最もお気に入りだったお話だ。

「スーホの白い馬、というお話をしてあげよう」

「わ〜パチパチパチ!!とミサカはミサカは自分で拍手してみたり  
!..」

一方通行は馬鹿らしい、と言いながらごろんと横になってしまっ  
が、薄めではあるがしつかりと目を開けてくれているところは優し  
い人だ。

「それでは……………」

さてさて、彼はゆっくりと、その話を始めた。

(注意:別にギャグとかは何にもない、ただのお話です。つまらな



いと感じている方は飛ばしてください)

モンゴル民話「スーホの白い馬」

中国の北の方、モンゴルには、広い草原が広がり、そこに住む人達は昔から、羊や、牛や、馬などを飼っていました。

このモンゴルに、馬頭琴という、楽器があります。楽器の一番上が馬の形をしているので馬頭琴と言つのです。

けれど、どうしてこつこつという楽器が出来たのでしょうか？

それには、こんなお話があるのです。

昔、モンゴルの草原に、スーホという貧しい羊使いの少年がいました。

スーホは年をとつたおばあさんと二人きりで暮らしていました。

スーホは大人に負けないくらいよく働きました。毎朝早く起きて、彼はおばあさんを助けて、ご飯の支度をします。

それから、20頭あまりの羊をおつて、ひろいひろい草原に出て行きました。

スーホはとても歌が上手く、他の羊飼いに頼まれて、よく、歌を歌いました。スーホノ美しい歌声は、草原を越え、遠くまで響いていくのでした。

ある日の事でした。日は、もう遠い山の向こうに沈み、あたりはぐんぐん暗くなつていくというのに、スーホが帰ってきません。

おばあさんは心配でたまらなくなりました。近くに住む羊飼いだもどつしたのだからと騒ぎ始めました。

みんなが心配でたまらなくなった頃、スーホが何か白いものを抱きかかえて、走ってきました。

みんなが、そばに駆け寄ってみると、それは生まれたばかりの、小さな白い馬でした。

スーホは嬉しそうに笑いながら、みんなに訳を話しました。

「帰る途中で、子馬を見つけたんだ。此が地面に倒れてもがいていたんだよ。辺りを見ても、持ち主らしい人もいないし、お母さん馬もない。ほうっておいたら夜になって、おおかみに食われてしまうかもしれない。それで、連れてきたんだよ」

日は、1日、1日と過ぎていきました。

スーホが心を込めて世話をした御陰で、子馬は立派に育ちました。体は雪のように白く、きりっとひきしまつて、誰でも思わず、見られるほどでした。スーホはこの馬が可愛くて仕方ありませんでした。

ある日の晩、眠っていたスーホは、はっと目を覚ましました。けたたましい馬の鳴き声と、羊たちの騒ぎ声が聞こえます。スーホは跳ね起きると外に飛び出し、羊の囲いのそばに駆けつけました。

みると、大きなオオカミが、羊に飛びかかるうとしています。そして、小さな白い馬がオオカミの前に立ちふさがって、必死に防いでいました。

スーホはオオカミを追い払って、白馬のそばに駆け寄りました。白馬は体中、汗でびっしょりと濡れていました。随分長い間、1頭でオオカミと戦っていたのでしょう。

スーホは、汗だらけになった白馬の体を撫でながら、兄弟のように話しかけました。

「よくやってくれたね。本当にありがとう……」

月日は飛ぶように過ぎていきました。

ある年の春、草原一帯に知らせが伝わってきました。このあたりを納めている王様が、街で競馬の大会を開くということです。そして、1等になった者は王様の娘と、結婚させるというのでした。

この知らせを聞くと、仲間の羊飼いは、スーホに進めました。

「ぜひ、白馬に乗って競馬に出てごらん」

そこでスーホは、大好きな白馬にまたがり、広々とした草原を越えて競馬の開かれている街へと、向かいました。

街はとても大きく、スーホは何となく、自分とは違う感じがしました。周りにいるのは自分よりもずっと良い服を着た人達。スーホはうらやましい気持ちになりました。

競馬の場所には、見物の人達が大勢集まっていました。台の上には王様が、どっかりと腰を下ろしていました。

競馬が始まりました。国中から集まった、たくましい若者達は、一斉に革の鞭を振りました。

どの馬も飛ぶように駆けます。でも先頭を走っているのは……

………  
白馬です。

スーホの乗った、白い馬です。

「白い馬が1等だぞ！！白い馬の乗り手を連れて参れ！！」

王様は叫びました。

ところが、連れてきた若者を見ると、それは貧乏な羊飼いではありませんか。

そこで、王様は娘の婿にする約束などは、知らない振りをして言いました。

「お前には銀貨3枚をくれてやる！！その白い馬を此処において、さっさと帰れ！！」

スーホはカツとなって夢中で言い返しました。

「私は競馬に来たのです。馬を、売りに来たものではありません！！」

「なんだと！！卑しい羊飼いのくせに、このわしに逆らうのか！！ものども、こいつを打ち倒せ！！」

王様が怒鳴り立てると、家来達が一斉に、スーホに飛びかかりました。スーホは大勢に殴られ、蹴られ、気を失ってしまいました。

王様は、白い馬を取り上げると、家来達を引き連れて大いばりで帰って行きました。

スーホは、友達に助けられ、やっとの思いでうちに帰りました。  
スーホの体は、傷や、痣だらけでした。

おばあさんが、つきつきりで手当をしてくれました。おかげで、何日か経つと傷もやっと治ってきました。それでも、白馬をとられた悲しみは、どうしても消えてくれませんでした。白馬はどうなったのだろうか、スーホはそれだけを考えていました。

白馬はどうなったのでしょうか？

素晴らしい馬を手に入れた王様は、まったく良い気持ちでした。こうなると、馬をみんなに見せびらかしたくてたまりません。そこである日のこと、王様はお客を沢山呼んで酒盛りを開きました。

さて、その酒盛りの最中、王様はいよいよ白馬に乗って、みんなに見せてやることにしました。

家来達が馬をひいてきました。

王様は、馬にまたがりました。

その時です。白馬は恐ろしい勢いで跳ね上がりました。王様は地面に転げ落ちました。白馬は手綱を振り放すと騒ぎ立てるみんなの間を抜けて、風のように駆け出しました。

王様は起き上がろうともがきながら、大声で怒鳴り散らしました。

「早く、あいつを捕まえろ！！捕まらないなら弓で射殺してしまえ

「！！」

家来達は弓を引き絞り、一斉に、矢を放ちました。

矢は、うなり声を上げて飛びました。白馬の背には、次々に、矢が刺さりました。それでも、白馬は走り続けました。

その晩のことです。スーホが寝ようとしていたとき、不意に外の方で音がしました。誰だ？と聞いても返事はなく、かたかた、かたかたと、物音が続いています。

様子を見に出て行つたおばあさんが、叫び声を上げました。

「白馬だよ！！うちの白馬だよ！！」

スーホは跳ね起きて掛けていきました。見ると本当に、白馬はそこにいました。けれど、その体には矢が何本も突き刺さり、汗が滝のように流れ落ちています。若い馬は、酷い傷を受けながら、走つて、走つて、走り続けて、大好きなスーホの所へ帰ってきたのです。

スーホは、歯を食いしばって、辛いのをこらえながら馬に刺さっている矢を抜きました。傷口からは、血が噴き出しました。

「白馬、僕の白馬。死なないでくれ！！」

でも白馬は弱り果てていました。息はだんだんと細くなり、目の光も消えていきます。

次の日、白馬は死んでしまいました。

悲しさと悔しさで、スーホは幾晩も、眠れませんでした。

でも、やっとある晩、とろとろと眠り込んだとき、スーホは白馬の夢を見ました。スーホが撫でてやると、白馬は体をすり寄せました。そして、優しくスーホに話しかけました。

「そんなに、悲しまないでください。それより、私の骨や、皮や、筋や毛を使って、楽器を作ってください。そうすれば、私はいつまでも貴方のそばにいられます。あなたを、慰めてあげられます」

スーホは夢から覚めるとすぐ、その楽器を作り始めました。夢で、白馬が教えてくれたとおりに、骨や、皮や、筋や、毛を、夢中で組み立てていきました。

幾晩も掛けて、とうとう楽器が出来上がりました。これが、馬頭琴なのです。

スーホはこれを、どこへ行く時も持って行きました。それを弾くたびに、スーホは白馬を殺された悔しさや、白馬に乗って、草原を駆け回った楽しさを、思い出しました。

そして、スーホは自分のすぐ脇に、白馬がいるような気がしました。そんなとき、楽器の音は、さらに美しく響き、聞く人の心を揺り動かすのでした。

やがて、スーホの作り出した馬頭琴は、広いモンゴル中に広まりました。そして、羊飼い達は夕方になると、寄り添い集まり、その美しい音に耳をすまし、1日の疲れを忘れるのでした。

参考：福音館書店「スーホの白い馬」

「はい、おしまい」

「おおくぱちぱちぱち。とミサカはミサカは面白いお話だったと思  
いながら盛大な拍手を試してみたり！」

「喜んでくれれば嬉しいよ。一方通行、おまえはどうだった？」

数馬が寝ているふりをしている彼に向かって問いかけるが、彼は  
何も言わない。

「ねえねえ、あなたの感想も聞かせてよ！！とミサカはミサカはあ  
なたをユサユサと動かしてみたり」

打ち止めが強く彼を揺ると、うっとうしく感じたのが彼女をの  
けて起き上がった。

「知るかア……ンなモン……ただの楽器の馬で作った楽器の話じゃ  
ねエか」

「もう！！そんな適当なこと言って！！とミサカはミサカはあなた  
に怒ってみたり」

数馬は何も言わず、ただ一方通行がちゃんと最後まで聞いていた  
んだなと分かってニコニコしているだけだ。



「はいはい、お話も済んだことだし、そろそろ風呂に入るじゃん？  
その2人」

ここで、黄泉川が横から話しに入ってきた。風呂に入る、その言葉  
を聞いた瞬間、数馬のセンサーが反応、ビクンビクンと体が動い  
た。

「はア？何でこんな真つ 昼間から風呂なんか入んなきゃ……………」

「一方通行、今すぐ入ってこい。良いから入ってこい。そこのお嬢  
ちゃんを連れて今すぐに入ってこい」  
フロイライン

面倒くさがりまたもや横になろうとする彼の襟元を数馬はつかみ、  
ずりずりと引きずり始めた。

「いつてエ！？てめエ何してきやがんだア！？」

「風呂というのは神聖な行為だ。それを怠る事は全世界の法則に逆  
らうと言うこと。お嬢ちゃんフロイライン、あなたもこいつと風呂に入りなさい、  
きつと楽しいぞ？」

「わーい！わーい！お風呂だお風呂だー！！とミサカはミサカはつ  
まらないこの入院生活の唯一の楽しみを訪れに喜んでみたり！！」

一方通行がまだ何か言いたげだったが、それを無視して数馬はず  
りずりと風呂へと連れて行ってしまった。

「ありゃりゃ、何だあいつは……………」

まったくもって、黄泉川の言いつとおりである。

大天使がいる（ry

一通りの荷物を送り、薄い本も片付けて、ほっと一息ついたところで、報告書を読んでいるこなた。天使としては上の地位であるからにして、報告書、懇願をするような申し出などがよく届く。お慈悲がある答えを返すこともあれば、冷たく突き放す事もある。

さて、今、彼女が読んでいる報告書はなかなか重要な物であった。

「弾薬の流出ねえ……………」

どうも、ここのところ倉庫に保存されている兵器類が多数、盗難されたとの報告である

大多数はもう用済みと言っても良いほど老朽化していた物だが、盗

まれたとあつてはセキュリティ上の問題を指摘せざるを得ない。

そして、その盗難された物というのが、これまた悩ましい物だった。

「パンツァーファウストと、機関銃の弾……………こりゃあ偶然じや済まされないよ」

あの先の惨劇において、どうも装備が提供していた物と違う物があつたという話と、複数放置された金属の棒から予想は簡単につく。何者かが数馬光太郎に干渉している。

「そろそろ、こっちの捜査網も強化しないといけないね。これ以上好き勝手にさせるわけにはいかないし」

ただでさえ、不味い方向へ特急で突っ走っている数馬に、下手に干渉されてはどうなるか分かった物じゃない。最悪、もしもあの報告書の通りになるとしたら、彼はもう人間という存在ではなくなくなってしまう。せつかく彼が、数馬自身が作った恋をすべて棒に振ってしまうのだ。

送り出して、ここまで手助けしたのなら最後まで責任をとるというのは当たり前である、それが彼女の信念だ。

電話をとると、すぐに部隊の主要なメンバーに連絡を入れる。

「ああ、明日の6時に緊急会議行つから、絶対に来て。内容は今回の盗難問題の犯人の逮捕だから、絶対に来てね」

上司として、てきぱきと命令を下す彼女の姿はいつも、数馬が電話越しに聞いているちゃんぽらんな声ではなかった。



「……………もういいや」

黙りこくりに、数馬は1人で今後のことを考え始めた。残念ながら今のイベントは逃したのだ、それは認めて、次のイベントについて考える方が良い。次のイベントはともシリアスだ。負傷、その他諸々のリスクが多く含まれる、戦闘イベント。

「……………移動系の厄介な能力者による死闘。そんな感じだったし」

8巻というのはどうもページ数からして薄い、正直、入浴シーンしか印象に残ったところなんぞ無い彼だ。だが、印象が薄いながらもえらく大変な戦闘であるのは覚えている。

「ムーブポイント座標移動の攻略法を考えるのが先決という訳だ」

今回の敵の能力、それが座標移動、空間移動系の能力の中でも厄介な部類に入るほうである。

一度に飛ばせる距離は800m、重量は最大で4520kg、ただし1000kg以上の輸送は体に大きく負担がかかるとのこと。その上、単に距離や重量の限界値が大きいただけでなく、他の空間移動能力と異なり始点・終点が固定されていない。そのため接触すら必要なく能力を発動でき、レポートやアポートはもちろん、自身から離れた2地点間を直接移動させることすらできる。

ゲリラ遊撃戦において、これほどまでに完璧な能力はないとさえ言える、すばらしい能力なのだ。

「銃系統の装備じゃあ対抗は難しいな……………」

空間を移動されてしまつては銃弾を命中させることは不可能、ましてや日本刀での斬りかかりは馬鹿馬鹿しくて考える気にもならない。

相手の予測降下ポイントが分かりさえすれば、それは一方的な虐殺戦が可能なのだが、それが出来ないから苦戦するのだ。

「まあ、これは他の方々に期待だな……………」

結果、他人任せに決定。

さて次、一方通行の事。

「しかし…………あのパワーダウンは非常に痛い……………」

彼が入院している理由というのは、無論、あの頭部にサブマシンガンズドンの出来事のためである。あれのおかげで、一方通行自身の演算能力が壊滅状態に陥った。それを冥土帰し、カエル顔の医者、が何やら相当な無茶をしてミサカネットワークで彼の演算能力を補助出来るようにした。そんな感じである。

ただし、その補助をする機器というのがバッテリーを動力源としているため、能力に制限がかかっているのだ。此処がネックとなっている。

機器は彼の首にチョーカー状の物として付けられている。これは最大充電し、節約した状態で48時間、フルパワーを使って15分、それだけでバッテリーが切れてしまう。何というか、これではまるで長距離を走破出来ない重戦車と同じである。

「あの制限が無ければもう、面倒くさい事がすべて解決してくれるのだが……………」

それもこれも、すべて数馬が阻止できなかったのが問題だと思うと、彼は急に暗い気分になった。

「……………俺、何やってたんだよ、あん時……………」

どうにもこうにも、彼はちよくちよく過去のことを悔やむ癖があるらしい。垂れていた頭が更に垂れてしまう。うじうじと3分間、ぐちぐちと愚痴を言っていた。

「面倒くさいのでカット」

「さて……………もう一方通行の件は放棄しよう。うん」

結果、過去のことは振り返らない。

「思考中断。もう何も無い。以上!」

誰から見ても、何も成果に結びつけられてないはずなのだがこれにて1人作戦会議は終了した。彼を見て、不安に感じない方はいないだろう。

兎にも角にも、考えがまとまった?所で風呂場で騒いでいる一方通……………ではなくセロリと打ち止めはどうしたのかと気になる数馬。

「随分と長湯だな、おい」

中ではまだきゅっきゅうふふといった声が聞こえ、数馬に苛立ちを覚えさせる。こういう場合、電車でいちゃいちゃしているカップルを見ると爆発してしまえと思ってしまふのと同じ心理で、ある意味嫉妬心を生み出すのだ。

最も、数馬にしてもすでに恋人はいるのだが、まだ非リア充思考が残留しているのだろう。

「……………」

しかし、こうも考えてみると幼女と一緒に風呂に入っているセロリは非常に特定の紳士から見れば羨むべき存在ではなかるうか。

馬鹿馬鹿しい話だが、こういう風呂場のイベントというのは本当に怖い事が起きたりもする。彼はそんな気がした。例えば、出ようとしてスッテンコロリンと転んでしまい、抱き合ったりする。例えば、(検閲により削除。子供に性的な意味で手は出しちゃ駄目だよ！！)

「……………」

自分で考えておきながら、数馬は自らが不安になってきてしまった。

「まさかね、まさかね、まさかね。原作じゃあそんなシーンは無かった。無かった。……だが……もしかた予測出来ない展開があったらどうする?……………」

変なときにいらぬ心配をして、暴走する事が人にはあったりする。

「念のため、念のため……………」



がっとな風呂場に繋がるドアの取っ手を握りしめ、数馬は浴室を除こうとした。

「お風呂からでましたー！！とミサカはミサカはポカポカ上機嫌になりながらドアを勢いよく開けてみたり！！」

そのとき、突如として打ち止めによって開かれたドアが数馬の顔面にクリティカルヒットした。これは痛い。

「…………風呂出たばかりで騒ぐんじゃねエ」

後からのっそりと一方通行も出てくると、床にうずくまって鼻を押さえている数馬を見つけた。

「…………何やってんだ、てめエ…………」

不審そうな目で一方通行が話しかけるが、数馬は痛みで何もしゃべれない様子。

気持ち悪いのも相まって、一方通行はもう無視してドタバタとはしゃぐ打ち止めの髪を拭きに向かおうとした時、突然足首を数馬に捕まれた。

「なアっ！？ な、何しやが……………」

危うく転びそうになった一方通行がきつと足下の奴を睨み付けた。が、睨み付けたその顔は一瞬にして哀れみの顔に変わった。

「た、頼む…………せめて、その役目だけは…………髪を拭く権利だけ

は……………俺にやらせてくれ……………」

彼の足下の愚かな青年は、ドアに顔を強打して鼻血を出していないから、一方通行に惨めな要求をしてくるのだ。これを哀れと言わずになんと言おう。いや、ただ単に暗愚と言つべきなのかもしれないが。

あんまりにも哀れすぎるので、彼は何も言わずに数馬に対して頷き、数馬の哀れな要求を受託してくれたのだった。

「恩に着ます。さあ、打ち止め！！俺が頭拭いてやるぞー！！」

鼻血を出しながらも素早く打ち止めの元へと行ってしまふ数馬。そんな馬鹿な奴に、一方通行はただただ一言。

「あいつの方がロリコンだろオが……………」

と、意見が分かれるような事をつぶやくだけだった。

「結構、こういうのは自分でやると拭ききれない事が多いからね。しっかりとやらないと」

「うわーたーすーけーてーと、ミサカはミサカはふざけてみたり！！」

く何やかんやで約3時間後く

午後3時32分

入浴後、どうせ暇なのだからと、打ち止めと一方通行を交えて思いつく限りのお話をしてあげ、手遊びなどを教えるなどして数馬は充実した時間を過ごすことが出来た。

途中、黄泉川が仕事で帰ってしまうという寂しい事もあったが、それでもやはり楽しいものは楽しかっただろう。

「もうそろそろ、お暇しないとな……………それじゃあ、帰るよ」

「えー、そ、そんなあ……………」とミサカはミサカはあなたが帰ってしまふことに寂しさを感じてみたり……………」

帰りたくなるような言葉を言う打ち止めに、数馬の心はあっさり揺らぐ。

「しょうがねエだろ、素直に諦めとけ」

一方通行が彼女を諭すと、みるみるうちに彼女はシヨボンとなっってしまった。これではどうも、帰るに帰れない。そう思った数馬は1つだけ

「よし、じゃあ最後に神様のお祈りでもしてあげるか」

「神様へのお祈り?とミサカはミサカはいきなり宗教的な事をすると言われて不思議に思ってみたり」

「おいおい、科学の粋がすべて集まった学園都市で神様のお祈りな  
んぞ、意味があるわけねエだろ」

一方通行が元も子もないような事を言うため、数馬がむっとして  
言い返す。

「信じる者は救われるんだよ、馬鹿野郎。まあ、そんな気味の悪い  
事じゃないんだ。昔、祖母に教えて貰ったんでな。やらせてくれや  
打ち止め、一方通行のベットに座りなさい」

彼女が素直にベットに座ると、数馬はポケットに入っていたロザ  
リオを取り出し、首に掛けた。

そして、打ち止めの頭に手を乗せて祈り始めた。

「天の父なる神さま、あなたの大いなる御名を賛美します。今、こ  
こにいる2人がこうして健やかに過ごさせていただいていることを、  
誠に感謝します。

どうか、今後ともこの子と、彼が生を全うするまで仲睦まじく、  
幸せに暮らせるようお願いいたします。

どうか、この彼がいかなる苦難にもくじけず、必ず生きて帰って  
きてくれるようお願いします。

この祈りを、主イエス・キリストの御名によってお捧げします。

Amen

Amenと言い終わった瞬間、ロザリオからビギリと音が鳴った。

そして祈りは終わったのだが、病室の中はまだ静かのまま。いや、  
時間が止まっているのだろうか。じわじわと、彼は時間が戻ってく  
るような感覚に襲われる。

「……よ、よし。もうこれで終わりだ。んじゃあ一方通行、打ち止め、元気にしてるよ」

ようやく、体の感覚が戻ってきた。そう感じてホツとする数馬は彼らに別れの挨拶を告げた。

「うん。ばいばーい。とミサカはミサカは満面の笑顔で別れを言うてみたり」

可愛らしい別れの挨拶をする打ち止めと、何も言わないセロリ。セロリはツンデレということで数馬は割り切った。

「それでは……」

ドアをがらりと開き、数馬は半身を外へと乗り出した。と、その時、待つて……と彼を引き留める。

「ん？何だい？」

「今日来てくれたお礼をあげるよ……とミサカはミサカは良い物を渡してみたり……」

彼女から手渡された物は容量4GBの小さなUSBだった。中に何かデータが入っているのかと、数馬は首を傾げる。

「中には何があるのかな？」

「それは秘密だよ……とミサカはミサカは後々の事を楽しみにしながらニコニコしてみたり」

「ほお………。そいつは楽しみだね。よし、帰ったら見てみるよ。あんがとね。じゃあ、またね」

数馬はなでなでと打ち止めの頭を撫でるのを最後に、病室から出て行った。USBは壊さないように胸ポケットに保管しておく。

病院から出ると、約4時間ぶりの日光が彼を迎える。なかなかどうして、日光というのが気持ち良いものだとな数馬は感じた。

「さて、どうするかね」

この後には何も計画がない。そもそも、今日の目標というのがこの病院に来る事であったのだからそれが終わってしまったえば家に帰ればいい話である。

少し、このロザリオも気にかかっているのもある。足取り早く数馬は家へと向かう。

斜め前方にコンビニが見える。なんだか、赤葡萄のジュースが欲しくなってきた数馬。そそくさと店内に入り込んだ。

「そういえば、コンビニ寄ったときに強盗らしき奴らが襲撃してきたよなあ。いまじゃ良い思い出だけだ」

流石に同じ事が何度も起こってはたまらない。そう思いつつ、彼はカゴを持ちながら飲料コーナーへと向かう。着いたところで赤葡萄ジュースという商品名で売られているジュースを探すが、マイナーな商品なのか売っていない。

「がーんだな…出鼻をくじかれた」

孤独のグルメのネタを言った所で、やむを得ず彼は店内から出ようとする。菓子売り場をちらりと見ると小学生、低学年程だろつか、が3人ほどお菓子を選んでいた。

いかにも普通の光景を、数馬はじつくりと見ている。今後、地獄のような出来事が続くであろうその時には、こんな光景は2度と見られないかもしれない。だとしたら、今の内にこうやって噛みしめながら見ておきたいと、数馬は考えたのだ。

まだ、ここから離れたくない。動きたくない。

何かにとらわれたかのように、数馬は足を動かさなかった。まるで、足に根が生えたみたいだ。だが、いつまでもいることは出来ないのだ。しぶしぶ彼はレジへと足を向かわせた時、ふと、コンビニの自動ドアの方を見る。

そこには、突っ込んでくる大型トラックの姿があった

次の瞬間、コンビニ店内は轟音と悲鳴に包まれる。ガラスが木っ端微塵に割れ、商品棚が吹き飛んだ。数馬はとっさに身を伏せるが、ガラスの大きな破片が背中にいくらか突き刺さったようだ。じわじわと痛み始める。

「つくつくそが……っ」

事故はあり得なかった。もし事故だとしたら、ここまで真っ直ぐ

突入できるはずもないだろう。その上、あのトラックのバンパーにはわざわざ鉄板さえ付けてあるのだ。事故のはずがない。

あまりにも露骨な突入に、彼にも苛立ちの表情が見られた。ジャツジメントは何をしているのだと悪態を尽きなくなる衝動に襲われもする。

しかし、文句はともかく、菓子売り場にいた小学生が心配だった。彼が見れば商品棚は吹き飛ぶが崩れている。

急いで数馬が菓子売り場であつた場所へ向かうと、商品棚と商品棚が漢字の「人」のような形で折り重なっている間に小学生達はいた。奇跡でも起きたかのように、商品棚の重なり具合が幸いしたのだろう。

「大丈夫かい!？」

泣きじゃくる子供達はただ、ただ泣くだけしかできない。小学生だつたら当たり前ではあるが。

数馬が見た限り、重傷者はおらず、少し膝を擦りむいているだけだ。

ほつとした彼はひとと、3人の小学生を抱きしめた。耳元で、大丈夫、大丈夫ともつぶやいてあげた。すると、落ち着いてきたのかやっとすすり泣く声が止まり、彼らはしゃっくりをするぐらいになつてくれた。

「怪我はないね？」

小学生達は数馬の念のために聞いた質問に首を縦に振った。それだけで、安堵感はあるとなる。彼は彼らを自分の方へと向かせると、



しつかりとした口調で言った。

「いいかい？今からお兄ちゃんはお兄ちゃんの方にいる悪い人達と話して  
くるから、君達はしつかりと耳をふさいで、目を閉じて、ジャッジ  
メントやアンチスキルの人が来てくれるまで待つていなさい。分か  
った？」

彼らはしつかりと頷くと、すぐに耳をふさぎ、目を閉じた。これ  
で大丈夫だろうと、数馬はすくつと起ち上がる。

目標は今のトラックにいる輩共。まだ幼き子供を泣かせた罪は重  
い。数馬はすぐさま2丁の銃を取り出した。弾倉にはしつかりと新  
しく支給された銃弾を使っている。

商品棚から出ると、そこには6人前後のわざわざ覆面をかぶり、  
ベレッタM92を装備している強盗団がいた。拳銃を持っている時  
点で能力者ではなく、スキルアウトだろうと数馬は予測出来た。

彼らは作戦が成功したとも思ったのだろうか。いやらしい笑み  
を浮かべて周りのクリアリングもせずにいる。数馬の腸が煮えくり  
返りそうになった。

(店員は……………無事だな……………)

レジはトラックの直撃を受けず、被害を免れていたのだろう。店  
員は手を上げて、動かずにいる。

それを確認出来ればもう、問題はない。ゆっくりと、数馬は行動  
を開始した。

「はっははっはっはっ！！こりゃあ笑いがとまらねえや！！」

リーダー格と思わしき輩がしゃべるにしゃべる。隠密性を考えていないのだろうか。

「よおし！！2人はレジを探とけ！！後の奴らは人質を捕まえる！！」

おう！！と他のメンバーが応答すると、彼らは一斉に動き始めようとする。

その時、商品棚の1つからのつそりと、1人の学生が現れた。これは早速、恰好の人質を手に入れたと、ほくそ笑む彼ら。

「おい！！そこの野郎！！手を挙げてこっちに来て！！」

どこにでもありそうな学生服を身にまとったその学生は、素直にこちらへ歩いてくる。ただし、手は後ろに組んだまま。

「なっ、手を挙げるっつつてんだろ！！」

学生、ガン無視。聞く素振りもなく、そのまま進んでくる。

「と、止まれ！！」

強盗団全員が拳銃を構えるが、学生は何とも思わないのか。ずんずん、ずんずんと突き進む。とうとう、1人が耐えきれずに発砲した。

学生の腕に銃弾が命中した。だが、彼は微動だにもしない。血すらも出ていない。

「はっ、はあ!？」

驚いた強盗団が次々と撃ち始めるが、倒れない、死なない、押し戻されもしない。スピードは遅くなったが、それでもこちらに来る。しまいには、喋り始めたのだ。

「悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである」

低く、不気味な声で、詩の一節を読むかのように、すらすらと言い放つ。

「このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う」

恐怖を増幅させるその声は、しだいに強盗団全員を切り詰めてゆく。

「このような人は流れのほとりに植えられた木の時が来ると実を結び、その葉もしほまないように、そのなすところは皆栄える」

この時、とうとう銃弾が尽きた。大人数で弾倉を分けて使用していたから、予備など持ち合わせていない。銃撃はもう出来なくなってしまった。

「悪しき者はそうでない、風の吹き去る初殻のようだ」



大口径の銃弾により大穴が空いた上、内部を切り裂かれた哀れな犠牲者は、吹っ飛んで倒れた。

「ひっ、ひiiiiiiiiiiii!!」

強盗団の誰もが誰も、目の前で起きた出来事に恐怖した。足を動かすことも忘れ、恐怖で体が強ばり、逃げることさえしなかった。

学生はそのまま、立て続けに発砲した。1人、2人、結果3人が銃弾の餌食となる。

「あっ、あえやっ、にっ、逃げるぞ!!!」

やっと今の状況を理解し、残った2人が突っ込ませたトラックに乗り込んだ。アクセルを始動させ、車をバックさせようとする。

車の中からちらりと学生を見た。発砲はしていない。そうとなれば急げや急げ。トラックはバックを開始した。

学生が、拳銃ではなくライフルを構えているのもしらずに。

「逃がすか……………」

7・7mm弾とは思えない轟音と煙が出たかと思うと、銃弾は鉄

板が貼つてあるトラックのバンパーに命中、そして。

鉄板を突き破り、前面を貫通。遅延信管が作動。

爆発した。

小さなライフル弾ではあり得ない、大口径の砲弾並の威力の爆発。無論、トラックは大破。運転席にいた愚か者共は、即死だろう。

「……………ふう……………」

パトカーのサイレン音が聞こえ始めた。アンチスキルが来たのだろう。このままだとジャツジメントもすぐに到着しに来るはずだ。ここにいれば、面倒くさい事に巻き込まれるのは間違いない。数馬は、そそくさとその場を立ち去ることにした。

小さなコンビニで起きた、殺戮は、到着したアンチスキルによって鎮火されたトラックにより、終焉を迎えたのだった。



お見舞いに行こう。(後書き)

次は必ず、本題に突入します。ええ、必ず。

それと、明日から作者は部活の合宿に行つて参りますので、2日間、来るかは分かりませんが、ご感想に返信する事が出来ません。皆様にご迷惑をおかけして申し訳ありません。



## 接触（前書き）

お久しぶりです。一ヶ月以上、更新できなくて本当に申し訳ないです。

少々、私情ではたついていました。

## 接触

数馬の自室 午後5時15分

ベレッタM92の弾丸、合計33発が命中した、彼の肉体からは一滴も血が流れていない。制服はボロボロだが、まだ予備があるので問題はないだろう。

数馬は、自分が受けた傷を見るべく、Yシャツを脱いだ。そして血が噴き出してくるのでは、という恐ろしい予想を撥ね除け、肉の奥深くに埋まっている金属を取り出した。

「なんだよ、これ……………」

弾丸が突き刺さっている部分から、弾丸を1つ1つ抜いていくと、にちゃりと嫌な音を立ててその部分だけが、肉で、新たに出来た肉で埋まっていく。

気持ち悪い。数馬は、そう思うしかなかった。

彼自身は知らないかもしれない。それは前の、あの狂気の惨劇の時と同じだった。あの時の彼も、大多数との戦闘により負傷したが、すぐに治癒してしまっていた。だからこそ、あの地獄が作られたのだ。

ぶちぶちと弾丸を取り除くという嫌悪すべき作業を、彼は黙々と行う。4分もすれば、すべての弾丸は取り除かれ、後には何も残ら

なかった。

数馬は服を着替えると、

勢いによって生じてしまった、今度の殺戮。アンチスキル、ジャツジメントに、彼の関わりがばれてしまうのだろうか。そのことだけが、ただただ、数馬の不安であった。

「……………大丈夫じゃないか？仮にも、裏組織？的なものに属しているわけだし」

自問自答開始。

「いやしかし……………さすがに、殺傷は誤魔化せない、か？」

どんどんと、長くなりそうな雰囲気になってきた。

「でもなあ、一応、正当防衛にはなるだろ。いや、過剰防衛ともなり得るか……………」

進展しない、そんな一人問答。それを打開するかのように、タンスの上から、時計が急降下。

どごおむ、と鈍い音が鳴り、ぎゃあ、と痛みが伝わってくる叫びが響く。その後、そこには頭を抱えて痛みに震えている数馬がいた。

「くっそあ〜」

あまりの痛さに、数馬はポロポロと涙を流す。銃弾を喰らおうとも涙を流さず、戦闘行動を取った怪物が、時計の攻撃で涙を零すとは誠に滑稽である。

「……………なんだかなあ」

痛みが引いてくると、段々と、彼は悩んでいることが馬鹿らしくなってきた。今更悩んでも、仕方がないのだ。そう割り切ると、数馬は気分がすつとした。本当は、もっと悩むべきなのだろうが。

スキルアウトに関しても、あの様子ではアンチスキルが対応しても面倒くさいことになるだろう。そもそも、民間施設に手を出した時点で屑と同等なのである。

さすがに、そこまで考えないとしても、銃器で武装したテロリストに対し、情けを掛けることは命を危機にさらしているようなものだ。だとすれば、彼の判断は正しかった、そう考えるしかない。

確かに、ジャツジメントであるならば犯人を殺害することはなかっただろう。だが、数馬光太郎はジャツジメントではない。1度狂った悪魔なのだ。そんな細かいことは出来ない。

「じゃあない。寝る」

そもそも、敵を生かしたまま撃破するなどという芸当程、難しいことはない。彼、数馬光太郎にはまだ、そこまで高度な技術を会得していないのだ。

言い訳がましいかもしれない。だが、事実、彼はその技術たるものを持ち合わせていなかったからこそ、先ほどの戦闘があったのだ。未熟な技術であった自分を責めても、もうどうする事も出来ない。だから、数馬は、もう寝ることにした。

ベットの上上がり、布団に潜り込み、顔を枕に押しつけて、彼は夢の世界へと度だった。

ただし念のために書いておけば、どんな理由があるにせよ、人を殺めた代償は大きいではあるが。

アスガルト  
天国大本営 地上部第1部2課（作戦担当）

「死者、6名追加。これで19名。以上、報告終わり」

30人の部下を使い、大天使こと、こなたは戦況を把握せんとしていた。

ついでに言えば、今の戦況は最悪と言える。

「どうしようかな……」

数馬がまたもや、やらかした。そんな悪報が入ったのは、13分前だった。その後、第3次報告の時点で、6人殺害という正確な数値を叩き出し、彼女の胃の中がジワジワと痛み始めた。

「19名では、さすがに政府を誤魔化すことなど出来かねます」

部下の1人が首を振りつつ、悲壮な声を上げる。こなたにしても諦める事はないにせよ、部下の言う事が至極当然なのは分かっていた。

しかし、誤魔化さなければいけない。誤魔化さなければ、本当に、本当に地獄のような任務を、彼に行わせねばならないのだから。

ここの法律では、天使及び悪魔のいかなる種族においても、地上において殺害行為を行った場合、償いをしなければいけない。半分、悪魔と化してしまった数馬も、すでにその法律が適用されるようになってしまっている。

それは、殺害した人をカテゴリ別に分け、そのカテゴリの人物、例えるならば聖職者などと、命の代価が対等になるまで、人を救済するというものだ。

もちろん、悪人を殺したとしても償いは少ないが、善人を殺したとなれば多くの人を救済しなければならない。

ただし、救済すると言っても、人を助けることだけが救済になるとは限らない。凶悪犯罪者を殺害することによって、救済とされることも可能だ。

「19名……19名の殺害だと、一体何名への救済が必要？」

隣で電卓を使用して計算している部下に、こなたは唐突に質問した。

「えっ、はっ……少々お待ちを」

がたがたと、報告書をなめ回すように見ていく部下は、1分もしない内に答えを返した。

「えっと、非戦闘員である聖職者の殺害は1人当たりにつき、500名を救済。ただし、報告書によれば戦闘員も兼ねているとありますから、-450人となりますので50名。

強盗団に関しては、1人あたりにつき20名。  
合計すれば……770名になります」

「770名!？」

吹っ飛ぶような数値に思わず、こなたは大きく声を上げる。

「770名って……ミドルレベルのテロリストを片付けるにしても何日もかかるじゃん……」

「そうですね……」

今、数馬にそんな時間の猶予は無い。なのに、何日もかかるような償いをしなければならないのだ。どうすればいいと言っただ。

「……………」

まるで、夏休みの宿題が最終日の今の今まで終わっていないかった、あの時のように、頭を抱えて悩みこみ始めるこなた。

出来るだけ手っ取り早く、なおかつ救済される人を多くするには。

「1日でこの量の人を救済するには、どうしたらいい？」

2度目の質問に、今度はコンピューターに向き合って座っていた部下が答えた。

「シリアルキラー連続殺人犯を、殺害する。ですね」

「それしかない、よね」

部屋の中が静まり変える。それもそのはず、シリアルキラー連続殺人犯の殺害、考えただけでも難しい仕事だ。

「ですが……その任務ではさすがに、二の足を踏む可能性も……」  
部下の1人が困惑しながら反論するが、こなたは顔を厳しく、きっぱりとした口調で言い切った。

「状況は絶望的だし、何よりも彼だったら大丈夫でしょ。それに、厄介な犯人もとっ捕まえたいからね。狂った殺人犯に彼を突き付けたら、間違いなく寄って来るはず」

部下は今度こそ、何も言い返さず、ただただ頷くだけだった。

「それじゃあ決まりだね。今回の目標は、数馬光太郎の罪の軽減、そして、彼に干渉している人物を逮捕する。以上だよ」



30人もの部下達が踵を揃え、命令を受理する返答を一斉に言い放つ。

作戦の開始だった。

9月14日 午前9時8分

少し寝るだけだったつもりが、朝まで熟睡してしまったでござるの巻。

「なんてこつたい……………」

またもや頭を抱える大馬鹿者1人。何をやっているのだから。

「やっべえよ。準備できてないよ。どうすんだよ……………」

ちなみに休日ではないので恐らく、学校も遅刻。最悪である。

「学校なんかどうでもいいよ……………」

自暴自棄になってとんでもない事まで言い出してしまった。

もうこうなると手が付けられない。無計画の戦闘を行う事になってしまうのだ。とことん負けるはめになる。フラグ的にもそうだ。

「弾だ、弾」

がさがさと段ボールを漁り、銃弾を取り出す。アタッシュケースには、兎に角入るだけ入れておくのだ。ぎゅうぎゅうに元々中に保存されていた物を詰めていき、それに出来た隙間に銃弾のマガジンを突っ込んで行く。結果、マガジンが5つ入った。

「これが限界かな……………」

極限まで弾丸を補充すると、今度は服を着替えることにした。午前中の、しかも学校が始まったばかりの時間帯に学生服で闊歩したものなら、即刻アンチスキルにつかまってしまう。

「何があるかなあ……………」

服装なんぞ、今の今まで学生服で通してきた気がする数馬。それ以外の服と言っても、軍服ぐらいではなからうか。

「1度も使ってない服で確か……………あつたよな」

クローゼットの奥に探りを入れると、すぐにそれは見つかった。

「……………これはなあ……………」

が、取り出した服を見た途端、数馬は着服するのを躊躇するような声を上げた。

出て来たそれは、一目見るだけで目立ちそうな真っ黒なロングコート。内側には、上等のスーツ、トレードマークのように見える、

血に染まったように真っ赤なスカーフ。最後に真っ黒なハット。

「いやさ、これは無いよ。さすがに」

まだまだ残暑が残る中で、こんな暑苦しい服を着たくもない。それに、厨二病末期のような色合いは、非常にドン引きせざるを得ない。

だが、これしか他に服はないのだ。まさか軍服なんぞを着ながら外を出てしまえば、右翼だと思われるもおかしくはない。

「……………はあ……………」

駄々をこねても仕方がない。数馬は渋々、この服を着用することにした。

サイズは数馬より少し大きい程度で、具合は悪くないようだ。着心地も良好であり、コレがもしも冬だったとしたら重宝したはずである。

だが、今はまだ残暑残る9月。非常に暑い。

「むう……………」

すでに、汗がポツポツと、彼の肌から湧き出している。数時間もすれば汗だくだ。

「……………まあしょうがない。我慢だ、我慢」

諦めるかのように、小さく呟いた数馬は、ゆっくりと玄関へと向かう。アタッシュケースは小さくして、ポケットの中に入れてある。

準備は万端とは言い難かったが、悪くはない。

ドアノブを掴み、ぐっと押す。外のじんわりとした熱気が、真っ先に迎え、出掛ける気力を失わせる。ぐらっと、中へ押し戻されかける数馬だったが、一步一步を重く動かし、町へと繰り出した。

午後10時47分 地下街エリアセール

「あつつい!!」

苦悶の表情を浮かべ、汗を垂らしながら、数馬は叫んだ。周りの人々からは異様な目で見られているが、そんなものは関係ない。とにかく暑いのだ。ロングコートを脱いでも、スーツなので全く涼しくならない。Yシャツになっても良かったのだろうが、そこまでしてしまうと、体格から学生であることがばれてしまうので無理だった。

「ああ……………きつつい」

何となく、数馬はこの真っ黒なスーツが、グリム童話「三人の見習い職人」に出てくる悪魔に似ているな、という誰も分からないだろう例えを頭の中で出す。本当に、誰も分からないのが残念なのが。

「これで片足が馬の足だったら完璧だな」

話の中の悪魔はそういう特徴だった。片足は馬、もう片方は人間という何とも恐ろしいものだった。今思い出せば、あれは結構、え

ぐい話でもあった。少し震えが来る。

「馬鹿なこと言っていないで、行こうか」

暑さが紛れたところで、数馬はもう少し先にある目的地に向かった。

午後11時 地下街エリアセル 出口A03

目的地、それであって迎撃地点である場所に着いた。ここが、今回、数馬が根城にする所である。

「さて、ここでスタンバってるか」

ちらりと腕時計を見ると、イベント発生までの時間を予測してみた。

様々な状況、人物の移動距離から判断するに、午後20時がベストだと思われる。9時間のスタンバイである。

「うわぁ……………」

9時間というと、数馬が1人カラオケで5時間歌い尽くした1.8倍である。寂しいどころではない。そもそも1人で5時間もカラオケをしているという時点で、どうなのかと思うところだが。

「今更家に帰るのも億劫だし……………ここら辺をぶらついているか」

幸い、地下街であるから、軽食店、ゲームセンターなんかは多くある。暇つぶしには事欠かない。  
というわけで。

「カラオケ行こう」

彼は何故だか知らないが、周りに多くあるゲームセンターに行かずに、カラオケに行くことになってしまった。

午後11時10分

アスガルト  
天国大本営 地上部第1部第2課

部内は慌ただしく動いており、職員達も汗を浮かべ、ひいひい言いながら働いている。数馬光太郎にまとわりつく、不審者兼犯罪者の特定をしていたのだ。だが、学園都市というのはどうにもこうにも、人口密度が高い。世界基準からすれば上位に入るはずであろう日本でも、比でないくらいだ。

その中から、恐らくは人間に化けているはずの犯人を捜し出すのは、無理難題というものであった。数馬の近くにいる可能性は高いので、目下、彼の近くで探索を続けている。

「後9時間もすれば、ここらで戦闘が起きます。そこがチャンスでしょう。必ず、犯人が食いつくはずです」

職員がそう報告すると、こなたはゆっくりと頷いた。

「分かった、じゃあ、その時に全探査機を集中させよう。何とか、ここで見つけないと……」

「大天使様、チョココロネ持って来ました」

深刻な状況なのにも関わらず、チョココロネの報告が入る。その途端、こなたの目が光る。

「やったー！！じゃあ休憩しよ」

部内の全員が、そんな様子を見て笑う。明るい部内というのが、此処にはあった。

午後14時32分 カラオケ内

「やらないか。 やらないか。 やらないか！！ ゆらりゆらり揺れている 漢心<sup>かんしん</sup> ピンチ！！ かなり かなり やばいのさ。助けてダクリン クラクラ……」

やらないか。(替え歌)を熱唱中の数馬(学生)

午後15時52分

「五和 目も合わせられない 恋に恋なんてしないぜ 俺は お前は俺の 嫁だぜ」

替え歌、すでに20曲目。

午後17時45分

「夏休み中 スカイプで会話中の友達が

「彼女できたよー^^」

報告するな (死ね!!) しにたい」

愚痴曲(やっぱり替え歌)に突入。

午後19時45分

「五和と したいーーーー!!!」

とうとうリミッターが外れた。

午後19時55分 地下街エリアセール 出口A03

「さあて、スタンバイ、スタンバイ」

カラオケで散々歌ってきたも、彼の喉は快調そのものである。元  
気よく、テンションを上げていく。入り口は自動車が埋め尽くして  
おり、昼間のように隙間はあまりない。人が自らの足で動くしか、  
早くは進めないだろう。

さて、そんな事を考えている数馬はおいておくとして、今回の話  
はこんな感じだ。



樹形図の設計者、英語名ツリーダイアグラム。そんな長ったらしい名前の、学園都市が作った並列コンピューターがある。

恐ろしいまでに高性能で、正しいデータさえ入力すれば、完全な未来予測が可能という代物。

そのため学園都市では天気予測は「予報」ではなく、「予言」とさえ言われる。

表向きは完全な天気予報を行うために作られた代物だが、主目的は研究の予測演算。そのため天気予報は一ヶ月分をまとめて出力し、残りの時間で予測演算を行っているという。

その高性能さ故に、様々な組織に奪取する機会を窺われており、絶対鳴る安全確保のため、人工衛星「おりひめ1号」に組み込まれていた。

このコンピューターは厄介なことに、御坂妹と一方通行の「実験」をも未来予測しており、こいつの御陰で、2万程度の命が生まれ、その内の1万以上が潰える事になった。

だが、7月28日、つまりは第1巻の時に、インデックスが放った竜王の殺息がおりひめ1号を直撃し大破、未来予測を行う事が不可能となり、今では衛星軌道上を漂う存在となっている。

今回は、その大破したときに地球上に落下した、ツリーダイアグラム、以下ツリーと省略、の残骸レムナントの欠片を巡る闘争だ。

流れとしては、学園都市の人間がツリーの残骸を回収し、帰路についている途中、科学結社のメンバーがそれを襲撃。残骸を奪取した。通報により、ジャッジメントである白井黒子が駆け付けた。こんな感じである。

闘争には3つの勢力が与しており、以下に表記する。

1つは『樹形図の設計者』の再構築を狙う、結標淡希ら科学結社の協力者。結標淡希の説明は別にするとして、この科学結社というのは学園都市外部の組織である。ツリーを狙う、組織の1つであり、最も学園都市に侵入している可能性の高い組織だ。

2つは実験の再開に繋がる再構築を阻止するだけでなく、争奪戦そのものを止めようとする美琴。先述したように、ツリーは御坂妹の「実験」にも関わっており、もしもツリーが再構築されれば、再開の可能性もある。それを叩き潰すために参戦。

3つは、ある意味では巻き込まれるような形にはなったのだが、上記の理由を知って、美琴の世界を守ろうとする白井黒子。数馬は白井黒子に荷担する。

さて、どうやら時間になったようである。闘争の開始だ。

午後20時5分

「見つけた!!」

入り口に、5名の黒いスーツ姿の男達が走っていく。最後尾はキヤリーケースを所持している。数馬はすぐさま、彼らを追いかけた。

ただし、数馬は捕まえない。ここはまだ、民間人が多くいる。敵は拳銃を装備しているだろうから、ここで発砲されれば被害が出る。

入り口から出れば、彼らは自ら人気のない裏道に入ってくれらるう。ところが、数馬の狙いだった。見失わなければ、その作戦には何ら問題はないだろう。

敵は車の間をしどろもどろに、進んでいくが、彼はまったく問題無いとも言つかのように、彼らと一定間隔を開けながら車の上を走っていく。

「拳銃に弾は……って殺しちゃ不味いか」

恐らく、犯人との接触と同時に白井黒子にも出会っただろうから、殺害してしまつては非常に具合が悪い。久々に、能力を使用する事になるだろう。

「よっし、此処までこれた」

入り口を出て、外気に触れる。外はすっかり日が暮れて、真っ暗だ。

敵を見失わないように、追いかけていくと、1人が裏道へと続く道に入り、ぞろぞろと他が付いていく。

「よおしっ!!」

全速力で、道に入る。彼は直ぐに見えるだろう光景を、簡単に予想できた。

「ありゃあ……やっぱりね」

奥の方に、敵が持っていたであろうキャリアケースを持つ白井黒

子。そして、彼女に向かって拳銃を構える敵の方々。

「あら、あなたは……………」

白井黒子が、数馬に気付いた。敵もこちらに振り返る。

「お話は後だ。3、2、1、ドン!!」

振り返り、隙ができた敵。その周りの重力を一気に大きくする。急激な重力がかかったことにより、敵は地面に勢いよく叩き付けられた。全身を強く打ったのだろう、全員が気絶してしまっている。

「撃破完了!!」

「……………な、なに、勝手に人の仕事奪ってるんですの?」

数馬とは反対に、白井は不満足そうに文句を言う。なるほど、彼女にとってこれぐらいの相手、すぐに片付けられたのだろう。それに気付いた数馬だったが、これといって謝ることはしない。

「いやね、たまたま、道を曲がったら、たまたま、あんた方がいたっていただけだ」

「ジャッジメントでもないあなたがこんな事をして良いとも思っ  
て……………」

「まあ良いじゃないか?それよりも、そのキャリアケースが大切だ  
ろ?」

数馬がキャリアケースに指を指す。それを言われた途端に、白井

は黙り込んでしまった。確かに、優先順位はこちらの方が圧倒的に高い。

「仕方がありませんわね。これを本部に送ったら、たっぷりとお説教をしてあげますわ。この件と、その奇妙な服装も一緒に」

「ははっ、そりゃあ勘弁だ」

軽く彼が笑うと、白井も笑みが出てくる。どうも掴みにくいのが、相変わらず彼は彼と言った所なのだろう。

「さて、これがなんだか、あなたには分かるか？」

「さあ……って、あなただってこれなんだか知ってるんですの？」

「まあ、学園都市の第23区から学舎の園に輸送中、此処にいる奴らに奪取された、非常に厄介な代物、とでも言うべきかな？」

軽く聞いたはずだった質問に、数馬はスラスラと答えると、白井は目を開けて驚く。

「なっ、何でそこまで分かりますのっ？」

「ん？まあそりゃあこっちの情報網ということだ」

白井が問い質しても、数馬は何も答えない。いや、原作の知識から何て言えたものじゃないので、答えられないとでも言うべきか。

「そろそろ、あなたの相棒さんが報告してくれると思うから、そっちに聞いておいとけ」

彼が話を変えるように言った一言と同時に、白井の携帯から着信音が鳴り響く。

「あつ、失礼……………本当に初春ですの……………あついやこつちの話ですわ。そんな要求よりも報告を早くお願いくださいませ」

白井が携帯で会話をしているので、数馬はぐるりと辺りを見渡す。狭い路地、多人数同士での戦闘には不向きではあるが、この少人数だつたら平気な程度だ。

同士討ちの可能性があるため、銃器の使用は控えねばならないが、数馬にとって、今回は殺すわけではないので問題はないだろう。

しかし、相手は本気で殺しにかかってくるだろう。心して戦わなければならぬ。

と、ここで白井の会話が終わつたらしい。キャリアケースの件もいくらか分かつたようだ。

「確かに、あなたが言っていたとおり、第23区から輸送されてきたものでしたわ。本当に、あなたはこういう情報網を持っているんで…」

「おっと、白井。もう一つだけ言っておくと、次は御坂美琴から連絡が来るぞ」

ジャストタイミングで携帯の着信音が鳴る。白井、すぐにそれを取る。

「……お姉様からですの……」

「だろ？早く出てやれ」

原作を読んでいる数馬には、会話の内容をしつかりと覚えていた。寮監が部屋の抜き打ちチェックを行うのだが、白井にやってくれないかと頼むのだ。

この時、御坂は外に出ている。そう、第2勢力として行動中なのだ。恐らく、必死になって今回の首謀者を捜し回っているのだろう。

「お、お待ちくださいですの！！お姉様！！一刻も早く寮に向かいますゆえ、良い子良い子ぎゅーしてあげましょーうねの権利は私がッ……って何するんですの！？」

白井の会話が終わりそうなを見計らい、数馬は彼女から携帯を取る。そして、まだ繋がっているであろう御坂に話しかけた。

「あー御坂か？久々だな。数馬だよ。元気にしてつか？」

「え？何であんたが出てくんによ？」

案の定、数馬の登場に驚く御坂。だが数馬はそんな質問は無視して話を続ける。

「どうやら、今、外に出てるみたいだが、あんま無茶すんなよ」

何もかも分かっている、そうでも言うつかのような数馬の一言。

「いやっ、そんな無茶って言われてもそんな事する必要……」

「いいか、焦りすぎるな。もっと慎重に行動しろ。急いでは事をし損じるんだ。いいな？まだ時間はある。ゆっくりと、しっかり物事に向き合え」

アドバイスをするかのような彼の言葉に、彼女は何も返事をしない。

「前は何にも出来なかったが、今回は俺も手伝える。安心して、行け。大丈夫だ。何も問題はない」

「……………分かったわ」

最後、御坂はそう言って、電話を切った。数馬は携帯を白井に返す。

彼の言ったことは伝わったか分からない。が、数馬は伝わったと確信しているように、満足そうな表情だ。

「ちよ、あなた何、人の携帯で勝手に……………」

さて、これからが本番になる。文句を言う白井に、数馬は言い放つ。

「白井！！キャリアケースから離れる！！」

大声で言われた彼女は、すぐに反応が出来なかった。ガクンと、彼女の手を支えていたキャリアケースが消える。

間違いない。奴が来た。数馬はすぐさま白井に抱きついた。



「なっ、何をしますの!!」

相次ぐ、数馬の行動に、白井は戸惑いを隠せない。彼女はすぐに引き離そうと、数馬の右肩に触れる。

ロングコートの上から、何かが刺さっていた。驚いて、見てみれば、それは鋭利な金属だった。太い針の部分はバネのように渦を巻き、グリップは白い陶器のよう。それは、ワインのコルク抜きだった。

彼女はやっと、状況が分かった。攻撃を受けたのだと。

「だ、大丈夫ですよ!?!すぐに手当を……」

「そんなのどうでもいい!!前を向け!!」

白井を離すと、数馬は路地の入り口を見た。そこに見えるは、楽しげな表情を浮かべる少女。髪は頭の後ろで2つに束ねて纏めてある。青い長袖のブレザーの袖に腕を通して無く、ただ肩に掛けているだけ。ブレザーの下にブラウスが無く、上半身は裸、胸部は薄いピンクのインナーを包帯で巻いているだけである。腰にもベルトがあるが、ただ単に飾りのようだ。金属板で作られたベルトにはホルダーらしき輪があり、そこに警棒にも使えそうな懐中電灯があった。そして、その少女の傍には先ほどまで、白井が手を掛けていたはずのキャリアケースがある。

「空間移動!? で、でも……」

白井の能力である空間移動テレポートは触れた物体であつたら移動できるだけ。それなのに、目の前にいる少女は触れてもいず、いつのまにや

らキャリアケースを傍らに寄せている。白井には理解が出来なかった。

「あら？もうお気づき？流石に似たような系統の能力だと理解が早いわね。けど、あなたとはタイプが違うのよ」

不敵に笑う、その少女が言う。

「私の力は…座標移動↑フポイントとでも言うべきかしら。出来ない貴方とは違ってね、いちいち物に触れる必要なんて無いんだから。どう？素晴らしいでしょう？」

淡々とした声で、白井をあざけるように言うと、今度は数馬の方を向く。

「それにしても、あんたもあんたね。わざわざ抱きついてまで、彼女を守るなんて。何？惚れてんの？」

「はっ、ただ単に、傷つかせたくなかっただけだ。こいつにはもう思い人がいんだよ。女性だけだな。俺が入り込む隙なんて無いさ！」

数馬はにんまり笑うと、刺さっているコルク抜きのグリップに手を掛ける。

「やめときなさい。深く刺さっているそれを抜くなんて、痛くてとても出来るわけ……っ！？」

肉がえぐれる音がして、彼のロングコートが黒から赤黒く変わった。左手には血だらけのコルク抜きをしっかりと持っている。

とてつもない痛みがあるであろうはずなのに、数馬の顔は笑顔のまま。ただし、その笑顔は恐怖しか生み出さないような笑顔だ。

「へえ……………凄いわね。痛くないのかしら？」

冷静さを保つために、少女は淡々とした声を保ち続けるが、心の動揺は止まらない。この男はおかしい。そう思うしかなかった。

「いやあ、分からないなあ。痛いかもしれないし、痛くないかもしれない？さあ、どっちだ？」

質問に、質問で返す。この上なく苛立つ事だ。彼の挑発か、何かか。

この男の隣にいる白井黒子は簡単に処理できる。だが、彼は違う。簡単に済むはずがない。雰囲気がそう物語っていたのだ。

「数馬さん！！止まってくださいまし！！此処は私めが！！」

白井が止めに入るように声を上げた。その声の中にあつた、単語に、少女は聞き覚えがあつた。

数馬、数馬光太郎。窓のないビルで、要人を運んだとき、偶然耳にした名前。あの時、その要人はしっかりと危険因子だと言っていた。まさか、彼が、そうなのか。

「いいや、白井。お前は動かなくていい。こいつは俺が仕留める。なあ、結標淡希？」

数馬は、少女の名前、結標淡希という名をしっかりと言った。結

標は慌てた。何故、彼が名前を知っているのか。しかし、今はそれを考えている暇ではない。

「それではお相手しよう。小娘!！」

彼は走りはしない。ただ歩く、少し速く歩くだけ。隙だらけの様子だった。だが、それは結標にとって、絶対に近づけてはいけない。近づけたら最後、地獄が待ち構えているだろう。ならば、相手が来る前に撃破するまで。

彼女は金属のダーツを3本放った。直線に、しっかりと数馬の方へと向かう。だが、ただ直線に投げただけでは避けられる。予期せぬ機動をしなければならぬ。この時、結標は飛んでる途中のダーツに座標移動をかけた。これならば、相手の死角になる場所から攻撃出来る。

迫り来る男は避ける素振りを見せないが、結標はギリギリで回避すると推測した。ならば、若干、軌道を変えるだけで言い。そう、数馬の目の前でダーツを移動、1本は左肩、2本は両脇腹に出現した。

3本は命中、ダーツは深々と刺さる。普通だったら重傷だ。

だが、相手というのが普通では無かった。

「なっ、何で倒れないの!？」

標的は倒れることなく、歩みを進めている。倒れるような素振りには微塵もない。彼女が唾然としている内に、数馬は、彼女の目の前へ来ていた。

真っ黒なロングコート。血に染まったように真っ赤なスカーフ。真っ赤な目。そして片足が馬の足。その姿、まさしく悪魔サタンの化身なり。

大きく腕を広げ、1人の少女を捕まえようとする。まるで、生贄を求めているかのようだ。彼女は何かに魅入られたかのように、動けない。1秒、1秒と、死が近づいていた。

「これでお終いですのー!!」

だが、ここで神が結標に微笑んだ。白井黒子が、彼女の真後ろに立ち、釘を向けている。これにより、悪魔は動きを止めた。

「これ以上は、民間人が手を出すわけにはいきませんの。此処でお縄についていただきますわ」

結標にとって、これほどの機会はない。一瞬の機転を利かせると、素早く白井に振り返った。その勢いで、警棒になる懐中電灯を当てに行きながら。

懐中電灯は見事に白井の腕に直撃。腕に激しい痛みを覚えた彼女はうずくまった。この時だ。結標は脱兎のごとく、三十六計逃げるにしかずとばかりに駆けだした。数馬が追う間もない。路地を抜け出し、あっという間に消えてしまった。

「くそっ、逃がしたか……」

ぎりりと歯ぎしりをして、怒るように言う数馬。だが、逃げてしまった者はしょうがない。それよりも、うずくまっている白井が心配であった。

「おい、大丈夫か？ たく、出てくるなっつたのに」

「申し訳ありませんの……」

懐中電灯が直撃した彼女の腕を見ると、真っ赤になって腫れている。警棒のようなもので殴られたのだ。当たり前だろう。冷やすものは、彼は今持っていないし、用意出来るわけではない。

「こりゃあ1度、寮に帰った方が良いな。送ってやってやる、立てるか？」

「えっ、ですが……そんな事は……」

遠慮しがちに言う彼女だが、数馬には何で遠慮するのが理解できない。これ以上言われても面倒くさいので。

「よっしらじょっし」

とりあえず、彼女をおぶさることにした。

「えっ、いやっ、ちょっと……」

「はっい。出発しますぜ」

おぶさつたら即刻ダッシュ。無駄なく、早く、数馬は白井黒子が  
住む常盤台中学学生寮へと向かった。

## 接触（後書き）

はい。またも長期間、更新が出来ず、申し訳ありませんでした。やはり、学業というのは大変だというのが身に染みています。

で、この小説、実は7月で1周年を迎えていたことに気付きました。今更です。しかも1周年だというのにこのグダつきよう。駄目な作者です。

こんな小説ですが、これからも読んでいただけたら幸いです。よろしく願います。



1 / 2 / 3 / 4 / (前書き)

珍しく、早めに更新できました。奇跡に近いです。

注意事項：主人公がこれまた、気持ち悪いほどひどいです。

結標さん好きには、ご気分を悪くされるかもしれませんが  
ん。

午後9時12分 学舎の園 常盤台中学 学生寮裏

「分かっているんですの!?!ここは男子禁制つ……………」

「手当が先だろうが、ごたごた言うな。そもそも、ばれなきゃ良いことだ」

「それはそうですが……………」

とりあえず、白井黒子、そして御坂美琴に部屋の所まで着いた。  
ここから空間移動レポートをすればいい。

「殴られた所は大丈夫か?」

「このぐらい問題ありませんの。ですから別に……………」

まだごちゃごちゃ言う彼女に、数馬はさっさと手を取る。

「じゃあ早く空間移動するぞ。ここにいつまでもいられるか」

「わ、分かりましたわよ……………まったく」

一瞬、時が空いたかと思うと、真つ暗な部屋に着いた。辺りが暗いと不便なので、電気を付けることにする。

白井がパチッとボタンを押し、電気が部屋中を照らす。

「よし、まずは傷の手当てだ。傷を見せる」

「いや、別に自分で手当ぐらい出来ますの」

「自分でする手当っていうのは、当てにならないことがあるって俺の軍医だった親戚が言ってた」

再度、彼女の腕を見る。やはり、懐中電灯で殴られただけあって、かなり腫れている。直ぐに冷やすべきだろう。

「おい、冷えピタとか此処にあるか？」

「えっ、は、はい。確かその冷蔵庫に………」

これは幸い。打撲を冷やすとき、氷だと直につけると凍傷になる恐れがある上、固定が面倒だ。その点、冷えピタというのはそこから辺をカバーできている。

数馬は冷蔵庫を開け、冷えピタが入っている箱から一枚取り出す。そして手の体温で暖まらない内に、患部に貼る。

「ひっ……」

急な冷気に、白井が声を上げる。それでも、冷たければ治りは早いので、貼っただけでは剥がれてしまうので、今度は固定するように包帯で巻く。

「応急セットとかあるだろ？それ貸せ」

「そこまでしなくてもいいのでは……………」

「ごたごた言わせない数馬。応急セットを見つけると、包帯を取り出した。」

「じつとしてろ、巻くから」

丁寧は、彼女の細く、白い腕に、包帯を巻き付けていく。丁寧に、丁寧に、簡単に外れないように。

4周も巻き付ければいいだろう。固結びで包帯を止める。できあがりだ。

「これでいいだろ。さあて、どうするかな」

手当が終われば、数馬はすぐに次に移ろうとしてしまう。が、そこまでは白井は許さなかった。

「お待ちください。あなたの手当もしなければいけません」

しまったとばかりに、数馬は固まる。そういえば、ダーツを3本は喰らっていたことを忘れていた。白井もそれは見ていたはずだから、知っているのも当然だ。

「いいや、俺は別に……………」

「いけませんの。軽傷なんでしょうが、どうみたって私より重傷を負っているはずですよー!!」

ずいっずいっと近づくと白井に、思わず数馬はたじろぐ。今、傷口を見せるわけにはいかない。

「いや、自分でやるから……」「自分での手当があてにならないこともあると、あなたの親戚はおっしゃっていたのでしょっ？」……」

彼自身の発言がブーメランのように帰ってきた。非常に不味い状況だ。

「いや、じゃあダーツは俺が取り出す……」「テレポート空間移動で取り出して差し上げますの」……」

追い詰められた。このままだと、数馬の体が、普通とは違う事に気付かれてしまう。

「なあ、ちよつと待ってくれ。ぶつちやけ、女性に肉体見せる事なんて無い経験だから、少しは心の準備を……」処置は早急に行つたほうか……」「頼むから……」

白井がまだ言うが、それを押し切つて、後ろを向く。ロングコートを脱いで、スーツを脱ぐ。下のワイシャツの両肩、両脇腹が血に染まっている。確かに、ひどい怪我だ。

白井にばれないよう、こっそりと刺さるダーツを抜いていく。深々と刺さり、肉を抉るようにして抜けていくダーツだが、痛くない。

(ありゃあ?)

そう、今更ながら、痛覚、つまりは痛みという人間にとって大切な感覚を感じないのだ。何故だかは分からない。

だが、今は考えるのは後回しだろ。数馬の後ろの白井が怪しみ始めた。すぐにどうにかせねばならない。とりあえず、ダーツを完

全に抜いてしまつては不味い。傷口に浅く刺さっている、そう見せかけるだけで良い。考えてみれば、非常にグロテスクな行為をしているが、彼にとっては、痛くなければどうでもいい事だ。

「よっし。もう良いぞ」

Yシャツも脱ぎ捨て、上半身裸の状態になる。案外、がっしりとした体に、少し白井も驚いたようだ。数馬にとってはそこまで意識はしていなかったのだが。

「あつ、部屋汚れちまつたら不味いな。とりあえず……………」

ロングコートを地面に敷き、その上に彼は乗った。ロングコートが気の毒だが、仕方があるまい。そもそも風呂場でやった方がいいのじゃないかと思うが、そこまで気が回っていない彼ら。

「そ、それでは……………」

彼の脇腹に浅く刺さっているダーツを空間移動で地面に転移させる。なるほど、確かに便利な能力だ。

だが案の定、傷口を塞いでいた物が取れ、血が勢いよく噴き出した。自分以外の人の、そんな状態を見ることはあまりないのか、白井も顔が引きつっている。

実際は、無理矢理ダーツを浅くまで抜くことで、血を噴き出させるようにして、傷口が再生していく所を見せないようにするのが数馬の目的だったのだが。

「消毒液とか薬、それと包帯貸してくれ。こっからは自分でやる」

「さっきあなたは……」「いや、脇腹とかは自分でやった方が効率良い」……分かったの」

チューブ状の薬のような物を渡された。なるほど、原作にはしっかりと表記してある、対外傷ジェルだと、数馬は分かった。消毒、止血、そして傷口を塞ぐという3つの機能をまとめた代物という説明も、あっただろう。

「こりゃありがたいな……よつと」

ジェルを傷口4カ所に塗りつける。ジェルを白井に返すと、彼は包帯をさっさと巻いていく。手際よく、早々と巻いていくので傷口の異常も、彼女には気付かなかっただろう。

包帯を巻いたら、Yシャツを着て、スーツも着てしまふ。

「よし。治療完了だ。………作戦の立て直しだな、次は」

実は、白井をおぶさって走る途中、彼女に初春飾のいる、ジャツジメント本部に連絡を送っていた。だいたいの概要、キャリアケースを奪取された事、結標淡希の事を伝えておいたのだが、そろそろ連絡が来るだろう。

「あつ、電話………初春からですの」

「そっちはまかせた。とりあえず、適当に報告でも聞いておけ」

その時に気絶させた犯人は、一応捕獲は出来たのだろう。何かしら、そこから情報が手に入っているはずだ。

数馬はその間に、色々な準備をすることにした。

「風呂場借りるぞ」  
ユニットバス

「はいつ!?!?」

答えも聞かず、数馬は風呂場に入る。別に風呂を使うというわけではなく、銃器の準備をするだけだ。

デザートイーグル、S & amp; W M29、99式小銃はここ最近の相棒とも言える拳銃。よく、あそこまで射撃をしていて壊れないものだと、彼は感心しながら銃の手入れをする。

初めてやることだが、前の銃も手入れせずにぶっ壊したのだから、やらなければ大変なことになるだろう。

アタツシケースの奥の方に、ずっと使っていない、そんな手入れ専用の道具やらがある。洗剤とガンオイル、そしてボアクリーナーだ。説明書も付属しているので、見よう見まねで、数馬がやってみた。

あんまりにも地味にやっついていく作業だが、丁寧にやっていないと効果が薄いとも書いてあったのでしっかりと行う。

〈7分後〉

「こんなもので良いかな……」

数馬にとって初めての手入れなので、所々おかしい点はあるが、仕方がない。アタツシケースの中は年がら年中、乾燥しているので、その中に入れておけば勝手に乾いてくれるだろう。

と、終わったと同時に連絡が終わったのか、白井が風呂場に入ってきた。



「なあに勝手に人様の風呂場に入っているんですのって……本当に何してるんですの？」

風呂場でも入れていると思ったのが、きよとんとする白井。アタツシユケースはすでに数馬のポケットの中なので、見られてはいないだろう。

「何もしてないさ。ただ、少し用意を、ね」

「本当ですのお？あなたのことだから隠しカメラでも仕掛けたのか」と

さらりと失礼なことを言う。

「んなわけあるか。馬鹿が」

面倒くさいので、とつと立ち上がり、彼は風呂場を出ようとする。

だが。

「……………しっ！！」

突然、白井に風呂場へと押し戻され、ドアを閉められてしまった。そしてその直後、ドアを開ける音がする。

誰かが、いや、誰かではない。御坂美琴が、彼女が帰ってきたのだ。

電気も付けっぱなし。おまけに風呂場の光も付いている。これで

ユニットバス

は此処にいるのがすぐ分かる。

「……………黒子？」

やはり気付かれた。数馬の場合、此処ではねると非常に不味いで、音を立てずに浴槽に転がり込んだ。

「なに？お風呂に入ってるの？」

御坂が更衣室の前で止まる。白井はドアに寄りかかり、中があまり見えないようにする。

と、どうやら御坂もドアに寄りかかったらしい。薄いドアが少し軋む音をする。

「え、ええそうです。ちょっと仕事で汚れてしまいました……………」

白井が何とか誤魔化していく。数馬はそれを見ているしかない。

「へえ……………電話の時、急に数馬が出てきたけど、何かされたんじゃないでしょうね？」

御坂にそんなことを思われていたとは彼にとって心外だった。

「い、いえいえ、あの殿方もさすがにそこまでしませんでした。やっていたら半殺しでしたけど」

白井も随分とひどいことを言ってくれる。

「そつ……………ならいいわ」

「それはそうと、お姉様はこれまでどちらへ？」

今度は白井の質問、御坂は少し考えるかのように間が空いたが、すぐにしゃべった。

「ん〜？ 買いそびれたアクセサリーを集めにつてトコかしら。ここ最近、あっちこっち探し回ってんだけど、まだビシッてくるものが見つからないのよね。今は忘れ物を取りに来たってトコ。これからまたちよつと出かけてくるわ。あつ、お土産なんて期待しないようにね、黒子」

なるほど、やはり詰めの良い言葉で言っていると数馬も感じた。

ここで、もし、白井がついて行くとさえ、どうするつもりなのだろう。

（まあ、あいつもこの状況で、そんなことしているとは思ってないだろうけどな）

しかし、どうも彼から見たら御坂は焦っているようだ。何か言った方が良さだろう、と数馬は適当にペンとメモ帳を取り出して、さらさらと書いていく。

「そうですね……………分かりましたわっ……………？」

彼は白井にメモ帳を渡す。１ページ目に伝言とでかにか書いてあるから分かるだろう。

「ああ、そういえば、数馬さんから伝言を預かっていますの。ちよつと言いますわね」

「へえ？伝言？なんかあいつ、色々言ってくるわね。別に大変なことなんてないっていうのに」

まったくもって嘘だと知っている数馬は、何とも言えない気持ちになる。

「まあそういわずに……ええっと。」

悪事を働く者は主によって必ず倒される。

彼らは打ち倒され、再び立ち上がることはない………という感じですよ」

端から聞けば、意味が分からない、単なる聖書の1節だが、御坂には伝わるはずだろう。現に、彼女は一瞬だけ、驚いて息を呑んだようだ。

それから少し沈黙があつて、御坂の声が少しだけ柔らかくなったようだ。

「そう………ならあいつに言っておいて。心配してくれてありがとうって。なるべく早く帰るよつにするわ」

「分かりましたですよ」

ドアがまた軋む。御坂が離れていったようだ。少しして、ドアがバタンと閉まる音がした。

「さて」

白井はふうと息を吐き、彼に言った。

「お姉様が、一体何をしているのか、教えて頂けませんこと?」

数馬にしても、断る理由などというのは無い。頷き、すべてを、何もかもすべてを話し始めた。

御坂美琴の遺伝子から、クローンが作られたこと。そして、そのクローンが「実験」として死地へと赴いていたこと。そして、その計画が8月21日にぶちこわされたこと。

最後に、計画を未来予測していた樹形図シミュレーションの設計者、ツリーダイアグラムが破壊された。だが、それをまた再構築しようとする集団がいるということも。

「これで全部だが……何か質問は?」

軽く言う数馬だったが、その目は真剣そのものだ。

「いいえ……ありませんわ。それよりも……」

白井の目が光り、怒りが伝わってくる。言いたいことが、数馬には簡単に分かった。

「そのクズ野郎共を、とっとと見つけてやらないといけませんわね」

お嬢様が使うとは思えないその、言葉に、数馬はニヤリと笑う。

「そうか……… よろしい、ならば戦争だ」  
クリーク

闘争は、さらなる勢力の参加により、最終段階に突入していた。

午後9時22分 アスガルド 天国大本営 地上部第1部第2課

「第1課から報告入りました。『不審人物の座標確認せり。これより地上へ捕獲に向かう』だそうです。おそらく、ホシですよ」

「やったね。さすが第1課。アグレッシブな人たちが多くて助かるよ」

犯人を捜すのに躍起になっていた第2課だったが、とうとう見つけた。それを後は、実行部隊がいる第1課に任せたのだ。

「第1課から逃げることは不可能でしょうから……いけますね」

部下が今までの労力が報われたと、万歳三唱する。こなたも嬉しそうだ。

「よし。チヨココロネ5本持ってきてー！！今日はお祝いだ！！」

どんちゃん騒ぎになる第2課。その部内の全員が全員、浮かれに浮かれていた。

午後9時30分

「敵の詳細は教えたと思うが……初春から、敵の予想進行ルートは聞いたか？」

「もちろんですよ」

数馬は空間移動テレポートは出来ないので、白井の手をしっかりと握って、一緒に移動している。

いちいち、話が中断するのは面倒くさいが、致し方があるまい。

「さあて、敵さんは面倒くさい相手だからな。心してかかれよ」

「それも、もちろん。抜かりはありませんわ」

敵の主戦力、結標淡希。レベル判定は4とされるが、実際にはレベル5ともタメを張れるほどの能力の持ち主だ。

だが、二年前のカリキュラムにおいて転移座標の計算ミスにより片足が壁にめり込み、それを不用意に引き抜いてしまったことで密着していた足の皮膚が削り取られるという大怪我を負う事故があり、それがトラウマとなっているという。

また、そのトラウマが原因で、自身の移動というものに若干のタイムラグを生み出しており、レベル5、つまりは超能力者認定されていないのだ。

能力の名称は、結標淡希も言っていた、座標移動ムーブポイント。空間移動系統の能力だ。以前にも記述したが、一度に飛ばせる距離は800m以上、重量は最大で4520kgだが、1000kg以上は身体に

負担が大きい。

そして、大量の物質を転送する際には出現に先行して空間が歪むらしく、完全な「瞬間移動」ではなくなるという。利点多くて、欠点少ないという能力だ。

絡め手や遊撃戦のエキスパートとさえ言われるこの能力は、正直言えば正面攻撃を得意とする御坂美琴よりも、数馬にとっては相手にしにくい。言うなれば、大威力だが、動きがとろい、重戦車よりも、中威力だがスピードが速く弾丸が当てにくい中戦車の方が強力ということだ。

「殺すわけにはいかないからな。銃器の使用は厳禁……」

「えっ、まさかあなた、銃なんて持っているんじゃないですわよね！？」

「つつつつぶやいた彼の独り言が、見事に白井に聞かれてしまった。」

「いやあ、もしも、もしもの話だ。ははっ」

誤魔化してみるが、彼女からは疑惑の目で見られている。それはそうだろうが。

「その件に関しても、後でお話を……って、こんな時に電話が」

ナイスタイミングで携帯が。数馬、この時の自分の運に感謝する。

「初春ですの？何か情報が……なるほど。分かりましたわ」



「なんか分かったのか？」

「ええ。あの女の予想進路、やはりというべきか、相当に短いですの。自身が移動できないのであれば、当たり前なんでしょうけど。ここから角度修正右に5度だそうすわ」

少しだけ、行く方向が変わった。なんと便利な能力だろうことか。再度感心する数馬だったが、またそろそろ、事が起きるだろうことを予測した。

「おい、白井。そろそろ、どでかい花火が来るぞ。注意だ」

「へっ？花火ですの？今日はそんなイベントはなかったはず……………」

そのとき、ゴガン！と、どこか遠くで落雷のような音が鳴った。夜空を見上げてても、雷雲1つ無いことから、自然のものではないのはすぐに察しがついた。

ならば、あの高圧電流の絶叫はどこから来たか。

「まさか！！」

「ああ、その通りだ。こん畜生め！！彼女、もうやってやがる！！」

進路変更、すぐさま爆音とどろく方向へと向かった。

爆音が、近い所まで来た。白井は高速移動を解除して、数馬と共に地面に降り立った。

あんな馬鹿でかい雷を落とせるのは、自然かそれとも、電撃姫みさかみことだけだ。

彼女が襲われているとなれば、いてもたってもいられない。

場所は、建設途中のビル。8月31日にここで倒壊事故が起きており、鉄骨から建て直しを行ったはずだった。ここで、何かが起きている。だが、戦況も状況も何も分からぬまま飛び込むのは愚の骨頂だ。彼女達は、ビルの角、死角になるような場所で、中を覗く。

戦場、そこには戦場と呼んでも過言ではない光景が広がっていた。それも、たった1人の少女が作り出す、闘争の場。

ビルの入り口にはマイクロバスが横倒しになっているが、中には誰もいない。どうやら、ビルの中に逃げ込んだようだ。

そして、そのビルの中に逃げ込んだ、大小合わせて30名近くの男女達がビルの中で陣取っていた。銃を構える者も入れれば、学園都市の能力者もいる。

おそらくは、ここが外部勢力との接触場所なのだろう。よく見れば、結標淡希もいるではないか。

戦力差は30倍以上。敵は能力者、銃を扱う者まちまち。普通であつたら、ここは撤退をするのが定石、というよりは当たり前だっ

ただらう。

だが、超電磁砲レールガンの異名、もとい威名は。

その戦況のすべてをぶち壊した。

御坂美琴の指先から、閃光が走った。

音速の3倍で打ち出された小さなコイン。それはビルの柱となる分厚い鉄骨を簡単に引き裂いた。銃をかませた男達が、わずかな破片の煽りを受けてなぎ倒され、上階で御坂の頭を狙っていた能力者は、足場の柱を失い、真下へ墜ちていく。

鉄骨を10本はぶち抜いた超電磁砲だったが、これではまだ終わらない。彼女が使ったコインは、1ヶ月前、数馬光太郎から貰った残り52個の特殊なコインだ。遅延信管が作動したかのように、大爆発を起こす。そう、これがトドメだった。

ビルは、全体は壊れることはないものの、その3分の1を木っ端みじんにする。敵数十人の部隊を巻き添えにして。

それは、まさしく圧倒的勝利、いや完全勝利だ。パーフエクトゲーム彼女にとっては、とても簡単なことなのかもしれない。だが、凡人には不可能。彼女達のような、恐るべき能力者にしかできないのだ。

「出てきなさい。卑怯者。仲間の体をクッションにするなんて、良い身分じゃない」

そこから一步も動かず、仁王像のように立っている御坂美琴は、戦が終わった場所に侮蔑を込めた声を言い放った。

「仲間の死は無駄にしない。そんな美談はいかがかしら？」

女の声が聞こえた。なるほど、まだ答える余力は残っているらしい。聞いていた数馬にとっては、このまま気絶してくれていた方が良かったのだが。

大きな白いケースを片手で引きずり、まだ笑顔を浮かべている。そんな彼女、結標淡希は3階の鉄骨の足場から現れた。彼女の周囲には、爆風の衝撃で気絶した男達が加工用に転がっている。恐らくは爆風で吹き飛ばされかけたのを、その直前、クッション材の代わりに転移させたのだろう。おかげで、鉄骨に当たっても、自分へのダメージが少なかったのだろう。

「悪党は言うことも小さいわね。まさか40秒逃げ切っただけで勝利宣言しようとしているわけじゃないでしょうね？」

「いいえ。貴方が本気を出していたなら、今の一撃でこの一体は焼け野原でしょう。まあ、だから何なのかって感じだけど」

結標が鉄骨の上でキャリアケースを固定する。

「それにしても、今回は随分と焦っているのね。以前は情報戦が主流で、どれだけ力を持っていても、超電磁砲という直結的な暴力を使った『実験』の妨害はしなかったのに。そんなに『残骸』<sup>レムnant</sup>を組み直されるのが怖いのかしら？それとも、『復元された樹形図の設計者』の世界流出による、『実験』の再開？」

「……、言葉の汚い女は口をつぐんでなさい」

御坂の前髪で、怒りを表すかのように火花が散る。

結標は招くように、懐中電灯ライトを下から上へと緩やかに振った。

状況はサシに持ち込まれた。白井としては、いつ、どのような状況で乱入し、攻撃を仕掛けるか判断できなかった。もしも、中途半端な時に突入すれば、戦闘に混乱が生じる可能性もある。試しに、彼女は自分よりも場数を踏んでいそうな、いつぞやはどこかの国から勲章を授与していたので、数馬に聞いてみようとした。

が、隣を見ればいつの間にかいない。逃げたのか、と一瞬思ったが、負傷をしてもなお、敵を捕獲、いや殺害しようとしていたであろう彼が逃げるということが考えつかなかった。

「どこいったんですの……？」

辺りを見渡しても見あたらない。と、見つからぬ内にまた会話が始まってしまった。

「うふふ、弱い者など放っておけば良いのに。そもそも、貴方が大事にしている『あれら』は『実験』のために作られたんでしょ？ だったら本来通り壊してあげれば良いのよ」

「あなた、本気で言ってるの？」

「本気も何も。結局、貴方は自分のために戦っている。そうでしょう？ 私と同じで、自分のために、自分の力を、自分の好きなように振るって他者を傷つける。別に悪い事じゃないわ、自分の中にある物に対して自分が我慢することの方がおかしいのだから。そうでし

「よっ？」

仲間の体をクッションにして、平然と笑う女は、嘲るように言った。

結局、私欲のため、それだけのために、足掻きを見せているのだと。

両者は同類なのだから、そちらが一方的に憤るのはおかしいと。

「そうね……………」

その言葉に、御坂は小さく笑い、全身という全身から、断続的に青白い火花を散らしつつ。

「私はむかついている。私は今、頭の血管がぶち切れそうなくらいむかついているわ。ええ、そうよ。『樹形図の設計者』の残骸掘り返したり、私欲のためにそれを強奪する馬鹿が現れたり、やっとこさみんなで治めた『実験』を再び蒸し返そうとされたり。確かにそれはむかつく。この件に関わってる機関の中枢をまとめて情報戦でぶっ壊したぐらいには」

鋭い眼光が、結標を真っ直ぐに貫く。

「けどね、私はそれ以上に頭にきてんのよ」

突入、そして御坂の足を引っ張らず、むしろ援護を出来る策を練っていた白井が、ふと御坂の言葉に思考を止める。

「……………あの馬鹿、この私が気付いていないとでも思ったのかしら。入室届も出さずに、部屋のゴミ箱に血まみれのダーツがあつて、応急キットが無くなってて、おまけに伝言をつつかえつつかえで、や

つと言えたような……あんなひどい状況で……」

その声に、白井は息が止まりそうになった。彼女が、何に怒りを感じているのかを知った。

「一番むかついているのはここよ！！この件に私の後輩を巻き込んだ事。その馬鹿が医者にも行かず、テメエで下手な手当をやった事、そこまでポツロポロになってもまだ諦めが付いてない事！！あまつさえテメエの身を差し置いて！！私の心配をするような台詞を吐来やがったこと！！まったくあんな馬鹿な後輩を持ったことに腹が立つわー！！」

白井の胸が、詰まる。いろんな意味で。

御坂の台詞は、結標には通じないだろう。その上、彼女は此処に白井がいることも知らない。では、その叫びは誰に向かっていつているのか。

白井には明白だろう。そう、それは、

「ああ私はむかついているわよ、己自身の私利私欲で！！完璧すぎて馬鹿馬鹿しい後輩と、それを傷つけたクズ女と、何よりこの最悪な状況を作り出した自分自身に！！」

御坂の叫びは、自分自身を叱咤している。『樹形図の設計者』によって引き起こされたこの、碌でもない『闘争』で、いがみ合う両者を止めるように。

「この一件が『実験』を発端にしたものだって言うのなら、その責任は私にある。馬鹿な後輩が傷ついたのも、そしてあなたが私の馬<sup>たい</sup>せう

鹿な後輩を傷つけてしまったのも！！それが全部、私のせいだつていうなら、私は私の義務と権利、全部を使ってあんたを止める！！」

レベル5の、その勇ましき電撃姫。その彼女は、たった1人で、誰にも、白井にさえも、相談せず、戦い続けていた。1人ぼつちで、勇み戦い続けていたのだ。

白井には、『精密機械』アクセサリを探していると嘘をつき、忠告をする数馬に大丈夫と気丈に言つて。誰も巻き込まず、己自身だけを戦場いくさばへと投じた。

彼女にとつて、白井が味方で、結標が敵などではない。ただ単に、『実験』しくの道へと進む者を止めたかっただけなのだ。

だが、白井にとつて、ある意味、複雑な気分ではあつた。御坂は素晴らしい、少なくとも白井にとつては歡喜できるような事を言つてくれた。しかし、怪我をしたのは自分ではない。自分は、軽い怪我しかしていないのだ。

逆に、大きく怪我をしたのは、今どこにいるか分からない数馬光太郎。彼は自分自身の身を犠牲にして、白井を守り、彼女に傷を付けたくなかつたから、自分に傷を付けた。

すなわち、本当に殊勲賞ものなのは、数馬光太郎なのであつて、自分自身ではない。その事を白井はよく分かつていた。それでありながら、御坂にまつたく心配されていないというのは、彼が怪我をするはずもないと思つているのか、はたまた存在を忘れているのか。

まあ、それはどうでもいいだろう。鬭争はもう進んでいる。

「もう終わりにしてやるわ。あんた達が私の『実験』じっけんに引きずり込まれる理由なんて、どこにもないんだから」

キャリアケースの上で、足を組んで結標はクスクスと笑う。



「甘ったるいほど優しいわね。別に、貴方が『演算中枢』を作ったわけでもないのに。大人しく自分も被害者だとも嘆いていれば戦わなくて済んだくせに」

「だけど、あなたが戦うきっかけになったのが、私たちの『実験』だつて言うのなら、

絶対能力進化実験にしても、それ以前の量産型能力者実験にしても」

御坂が言い切る前に、結標が割り込んで言った。

「貴方の、ではなく、妹達シスターズと最強の能力者の、『実験』でしょう？……やっぱり倒された仲間から、話ぐらいは聞いていたのね。なら分かるでしょう？ 貴方が1人の能力者なら。私は、此処で捕まるわけにはいかない。誰を犠牲にしても、どんな手を使ってでも逃げ延びさせて頂くわ……」

最後の言葉だけが、ふざけた口調ではなくなった。本気だ。

「……あんたのちっぽけな大能力で、私の雷撃から逃げ切れると思っつ」

「あら。確かに光の速度の雷撃は目で見てからでは避けられないでしょうけど、それだけよ。前触れを予測して、それに合わせて転移をすれば……」

「無理よ」

今度は、御坂が言い終わらせなかった。

「あんだとぶつかるのは初めてじゃないけど。自分でも気付いてるんでしょ？あんだの能力には、癖がある。何でもかんでも移動させている割には、自分は移動しない。そりゃそうよね。ビルの壁の中や、車道の真ん中に移動しちゃったら終わりだもの。」

他人を犠牲にしても自分を救いたい、そんなあんだにとつちや、自滅する可能性は避けたいってわけか」

彼女は納得するかのようない方で、結標にとつての、致命的な弱点を論じていく。当の本人は、何も答えることが出来ない。

「もしかして、私が何も気付いてないとも思ってた訳？あんだが仲間の体やあたりの看板なんかを移動座標↑ポイントで散々目くらましに使ってきたのに、自分だけ走って逃げてたらおかしいと思うわよ」

くだらないとも言つように、御坂はため息をはく。

「大体、これだけ不利になれば、普通なら逃げるってというのが定石でしょ。まさか、あんだがまだ出し惜しみをするとでも？そんな余裕は無いの、誰だつて分かるでしょ」

結標淡希は、まだ薄く笑っている。が、その指先は不自然に揺れていた。自分の事を、ここまで分析している敵に。何もかも知り尽くしているように話す敵に、少しの恐怖が、少しの臆病が出てきたのだ。

「書庫バンクに残っていた暴走事故の件も絡んでいるんでしょうけど。あんだは他人や物体を飛ばすのはためらわない。だけど、自分の体を飛ばすのは別じゃない？例えば、計算式に違いがないかで2、3秒のタイムラグがあるとか」

書庫バンク、それは、能力者の個人情報データを記してある膨大な情報データ。

御坂はそこまでも閲覧していたというのか。

そして、電撃姫こと、御坂美琴は告げた。

「3秒あれば、必ず1発は撃てるわね」

「……………書庫バンクにはそこまでの情報を記録していたかしら」

「同じ事を言わせるな。五月蠅いわ。書庫バンクに書かれて無くても、おかた予想は付くわよ。あんたの戦い方を見てればね」

答えに、結標淡希は笑みを深く刻んだ。

キャリアケースから降りて、鉄骨の足場にしっかりと立つ。彼女の持つ懐中電灯ライトのゆったりとしたモーションが、突然止まった。

「だけど…………私以外の体だったら、移動させることにためらったりはしないわ」

自信たっぷりの言葉と同時に、結標の眼前に11人の人間がかき集められた。全員が全員、彼女の仲間であるはずだ。学園都市外部、内部の人間どちらにも、大人子供と混じっている。

それはまさしく、人間を使った楯だ。

「随分と、スツカスカの楯ね!!」

御坂には、そんな脆い楯などには無いにも等しい。そもそも、人間の形というのは多種多様。必ずそこには穴が空くはず、多少楯の人間も傷つくかもしれないが、敵ならどうでもいいことだ。

10億ボルトの高圧電流の槍、それを御坂は放とうとしていた。

そして、今発射するというまさにそのとき、楯の向こうの結標が笑っていった。

「さて問題」

声はまるで、今の状況を嬉々と思っていないように明るい。そう、結標にはすでに作戦が出来上がっていた。

「この中に、私たちと関係ない一般人は一体何人混じっているでしょう?」

その問題、結標の計画に、御坂は思わず自身の攻撃にブレーキをかけてしまう。これこそが、結標の狙いだった。

雷撃の槍がストップすれば、再度射撃する間に3秒のタイムラグを埋めてしまう。この間に、彼女は逃げるつもりだった。たったのだ。

だが、それは御坂しか敵がない場合。そして、結標にはこの場に、敵といふべき悪魔が存在していた。

「ほほう。なら、楯がない方向からぶっ放すまでさ」

結標が、その声に驚きの表情を起こす。つい2時間前に聞いたばかりで、しかももう2度と聞きたくなかったあの声が、自分の近くで聞こえた。それだけで、座標移動ハイポイントの計算を完全に中断してしまう。

その瞬間、1発の銃声が鳴り響いた。銃弾は2秒間の時間をかけて、結標の2m離れたビル内部に着弾、大爆発した。突然の奇襲、そして爆発に、さしもの彼女も対応に遅れた。爆風になぎ倒され、壁にたたきつけられる。

「かつ……はっ」

肺の中の空気がすべて吐き出された。息が出来ない。だが、かろうじて銃弾の飛んできた方角を見ることは出来た。もっとも、本当であつたら見たくもなかつた光景だつただろう。

そこには、ライフルを肩に担ぎ、崩れた瓦礫の上でニヤニヤと笑っている、数馬光太郎がいた。服は前と同じ、真つ黒なロングコートに、真つ赤なスカーフ。両足はそれぞれ人と、馬の足。そして、悪魔を連想させるような真つ赤な目。

また来た。またあの悪魔サタンが来た。結標の頭の中が一瞬にして恐怖一色になる。

逃げなければいけない。それが彼女にとっての、一番の優先事項だ。再度、移動の計算を実行する。数馬からここまでの距離は、3秒間で来る事は不可能であろう。その安堵感だけが、結標にとっては頼みに綱だ。

「逃がさんよ」

だが、綱は一瞬で断ち切られた。彼女は突然、地面にたたきつけられた。体が押しつぶされるほど重く、そして痛い。こんな状態では計算なんて出来るはずもない。

「はっ、こつちだつてレベル4なんだ。お前とタメ張れるぐらい出

来る」

なんと、彼は大能力者だということのか。結標は驚くと同時に、戦慄した。先の戦闘で、こいつの化け物っぷりは身に染みて分かっている。その上、今は逃げられない。例えこの場で奇跡的に彼を撃破できても、下にはレベル5の御坂美琴がいる。どうあがいても、絶望というのは、このことだった。

「さあて……話は聞いてたさ。全部。弱い者など放っておけば良いのに。そもそも、貴方が大事にしている『あれら』は『実験』のために作られたんでしよう？ だったら本来通り壊してあげれば良いのよ。だったか？」

もう、結標は恐ろしくて今迫り来る男を直視出来なかった。何も見たくない。悪夢で、何もかも悪夢で終わってくれと、ただひたすら思うしかなかった。

「ならば、俺からも言ってやろう。俺から見れば弱い者であるお前は、俺にとつての『実験』のためにいる存在だ。ちよつど、銃の手入れをしたばかりだったからなあ。

どのぐらい調子が良いのか、試させて貰うよ。なあに、すぐには死なない。手足それぞれ撃つてから、心臓と頭ぶち抜いてやるさ」

狂っている。そう、彼は何もかもが狂っている。死にたくない。ここで死にたくない。目をつぶりながら、彼女の目から何粒もの涙が零れだした。

「なに泣いてやがる、糞女<sup>くそめま</sup>。てめえがやっていることだって、今、真下にいる可愛いお嬢ちゃん<sup>フロイライン</sup>を泣かしているじゃないか。おあいこだよ、おあいこ」

そしてとうとう、数馬は結標の首を掴み、そのまま空へとあげる。

「あ、貴方は何も関係ないじゃない!!」

やっと、彼女は一言だけしゃべれた。だが、それは謝罪でも、命乞いでもなく、ただの彼の暴力に対する反論だった。確かに、一見すれば数馬は何もこの件に関係していないかもしれない。

しかし、表面を取り除き、中を見れば、しっかりと関係しているのだ。

「関係ない？ほお、糞女くそめま、関係ないと言うか。上等だ、全く、上等だよ。くそが!!」

結標の首を絞める手が強くなった。息をするのも困難になる。

「てめえらの組織には1度、大きくやられてんだよ。8月31日のあのとき、大切な、俺にとって大切な奴の頭を、お前らの銃弾はぶち抜きやがった!!」

そう。彼女が手を組んでいる、その外部組織は、8月31日に、科学者であり絶対能力進化実験に参加していた天井亜雄と接触していたのだ。

そもそも、なぜ外部組織の者達が『樹形図の設計者』に相当詳しいのか？一般の学生では知るよしも無しに、だとすれば、学園都市内部の科学者方面しかない。

そして、学園都市の内部の重要な人間と接触できたのは、後にも先にも、この組織のみだ。

あのととき、その組織のメンバーと、数馬の間で戦闘があった。そして、メンバーの最後の流れ弾が、一方通行の頭に直撃した。数馬はそのことを忘れもしない。

「さあ、これで言い返せないよな？ 答えは聞かない。殺す。ただし、下に降りてからたっぷりとな」

3階から、彼はいとも簡単に飛び降りる。もちろん、結標の首は逃げられない程度に軽く締めたまま。

下に降りると、御坂美琴が何事かと目を見開いて驚いていた。それはそうだろう。自分だけしかないと思っていたその中に、数馬光太郎がひよっこりと現れたのだから。ただし、彼の姿を見て身震いはしたが。

「はっ、さっきまで、お前が逃げようとしていた可愛いお嬢さんが、目の前にいるぞ！！こりゃあ傑作だ！！」

パツと、彼は彼女を地面に落とす。もちろん、重力は大きいまま。

地面に再度、強くたたきつけられた。もう、力なんて残っていない。後はこのまま、殺されるだけだ。

「そおれ、じゃあ右腕からやるかな。デザートイーグルで試すとしてよう！！」

いつの間にやら、彼の片手には拳銃が握られている。握られた拳銃は、すぐにスライドが引かれ、銃口は、しっかりと右腕を狙っていた。





ただただ、絶望の涙を流して、流し続けるしかない。

そう、そしてその時は来た。数馬光太郎はニヤリと笑い、一瞬間を空け、ゆっくりと。

「死……………」

ね、と。そこまでは言えなかった。幸か不幸か、はたまた奇跡か、彼の右肩後ろを1本の釘が突き刺した。

4 m左前方の所に、白井黒子がいる。彼女は、どうやらこの状況が大変不味いものだと感づいたらしい。銃を構える数馬に、やむを得ず釘を打ち込んだのだ。

そんな、1本の釘で倒れることは絶対にないであろう彼だったが、何か、彼の中でトリガーを引いたらしかった。目が、赤くなくなつた。足が人間に戻つた。

にやつく表情が、一瞬にして恐怖に変わった。人間として、正気を持ったまっとうな人間としての至極当然な、表情に。

結標淡希にとって、2度目となる奇跡。彼女もそれはよく分かっているだろう、体の押しつぶす能力も消えて、逃げないわけがない。目は涙に濡れたまま、5秒間、移動計算を行い、座標移動を実行する。彼女の姿は忽然と消えてしまった。その上、まだそこまで考える余力があつたのかは怪しいが、キャリアバッグも一緒に。

午後10時40分

悪魔的、そもそも半分ではあるが悪魔なのだが、戦いをした数馬光太郎。戦場跡に残る3人は、余りそのことに触れず、数馬と白井は、ここまでの経緯（本当に重要な事は除いて）を説明して、次に簡単な作戦会議を開いていた。

「御坂、これはしょうがない。1人でやるには大きすぎた。というか無理だ。今回は協力戦で行こう。その方が手っ取り早い」

「分かったわ。それで良いわよ……」

周りの人間を巻き込みたくない彼女にとっては、納得いかなかったが、あまり反論している時間も無いのなら、それでも良しとするしかなかった。

「じゃあ作戦はこうだ。とりあえず、御坂と白井は結標の方を追ってくれ。俺が追いかけると何か悲惨なことになりそうだ。間違いない」

これには2人も、頷くしかない。今度こそは殺しかねない、それは全員にとって自明の理だった。

「俺は、今回の騒動の元になった、クソ野郎共を叩く。叩き潰す。もう許さん。絶対に許さん」

そつちもそつちで悲惨なことになる可能性がビンビンしているが、まあ大丈夫だろうという結論に落ち着く。

「では、何やかんやで長い時間、殺り合ってきたんだ。いい加減、蹴りつけるぞ。可愛いお嬢さん方。フロイライン」

それと、めっちゃくちゃ言い訳がましくなるかもしれないが、これだけは言わせてくれ。

さっきの俺は、確かに俺だ。だが、全部の俺がそうじゃない。そこだけは分かっというてくれ。以上」

彼の言ったことを聞いた両者は、勿論と頷いた。

さて、鬭争はもう、終わりの直前を迎えようとしていたのだ。

午後11時

「さて、まずは組織の場所だ」

携帯を取り出して、こなたに連絡を取る。なかなか掛からない。

「早くしろ……………」

時間はもう無い。

繋がった。

「は？い？どうしたの？こんな深夜に電話してきて」

「なんだか、いつもよりゆったりとした物言いで、こなたが出てきた。」

「よし。ちょっとそっちで特定して欲しい場所がある」

「急だねえ、別に良いけど」

「よし、今、学園都市にいる外部の秘密結社、恐らくは1つだけだが。その場所を特定してくれ」

秘密結社。その言葉を聞いたあなたは、直ぐに返事を返さなかった。

「何をするつもり？」

「聞いてどうする？」

今まで、何をするか聞いたこともなかった彼女が、今初めて聞いてきた。

「ちょっと、こっちでこたついで、あんまり不味いことはしたくないってだけだよ」

あまり非合法すぎることはするな、遠回しにそう言っているのだ。

「そうか………だったら大丈夫だ、ちょっとカクテル作るくらい簡単に、そう、簡単な、お灸を据えるだけさ」

カクテルという具体例に、何となく引っかけた、こなたは、その意味がうつすらと分かったような気がした。

「じゃあ少し待って。20秒で結果が出るよ」

20秒、随分と早く結果が出るものだ。まったくもって、こなたが住むところは、数馬にとって羨ましい程素晴らしい世界だろう。

「出たよって……場所が2つある。第7学区と、第19学区に1つずつ」

「マジか」

これは予想外の結果が出た。2カ所も存在していたというのが、数馬は少し驚いた。

「まったく。学園都市の警備網はどうなってんだか。まあいい。どっちの方が、規模がでかい？」

「えっ、というか、この組織、支部と本部に別れているみたいだね。だから2つ見つかったわけだから………規模的には第7学区の方がでかい。けど、電波状況から察するに、通信施設がしっかりしているのは第19学区だね。」

その上、どうやら地下にも反応があるみたいだから………こっただよ」

「分かった。助かる。ありがとう」

礼を言って、電話を切ろうとしたが、最後、こなたが言った。

「せめて……カクテルを作るんだったら、20人分までにして。それ以上作ったら、飲みきれないよ」

何とも、簡単な言い回しだろう。誰だって分かる。

数馬はそれに、ここう答える。

「へっ、まあ努力はする……」

これ以上は何も言わせないとばかりに、彼は電話を切った。

デザートと29、両方の拳銃を懐に仕込む。準備はもう出来ている。

「……お客様にあげるのは、フリップデメアリー血の女王。お代は心臓。

20人で収まるかな？」

血の味を、奴らにたっぷり味わって貰おう。

1 / 2 / 3 / 4 / (後書き)

何やかんやで更新しましたが、まだ8巻は終わりません。話が遅くて申し訳ないです。

ちなみに作者としては結標淡希は上位に入るほど好きなキャラなんですけどねえ………何でこうなっちゃったんだろう。

ご意見、ご感想、その他諸々、お待ちしております。



## 殴り込む前に寄る所（前書き）

55日ぶりです。本当に遅くなりました。墜ちた海鷲です。本当はもう少し早く更新したかったのですが、馬鹿な事に最近、ずっと調子が悪く、最終的に気管支炎 肺炎になってしまい、この様になってしまいました。このように大幅に遅れてしまいましたこと、誠に申し訳ありません。

## 殴り込む前に寄る所

午後11時30分 第7学区 とある病院の1室

この夜、もう病院内の照明は落とされ、病室も真つ暗な、こんな夜。その1室の患者は目を覚まし、事の深刻な状況に不安を積もらせていた。

(急がなければ……………)

容姿は御坂美琴に瓜二つだが、何処か違う。そう、彼女はあの忌々しい「実験」のために作られた、御坂美琴のクローン「妹達」の一員であるミサカ10032号だ。

彼女は、御坂美琴と同じく電気能力者であり、そして同時に同じ波長の脳波を持つもの同士であつたら電気的な通信を行える者達だ。今は「実験」の壊滅以降、自身の体を治療するため、この病院に厄介になつている。

ちなみに他の妹達は学園都市外部の施設で治療を受けており、学園都市に残る者は少ない。

今、御坂妹を動かそうとしているのは、世界各地の同志である妹達からの情報と、それらの全てを統合、管理している検体番号20001号の出した結論によるものだ。

これまで、世界各地で断片的な情報がもたらされていたのだが、その情報を議論、結合させた事により、恐るべき陰謀が浮かび上がったのだ。

(それでは状況確認を行う。とミサカ10032号はネットワーク

を介して諸君の記憶情報の最適化を実行します)

連絡を取りつつも、彼女は室内にある大切な特殊ゴーグル、電気力線を読み取ることが可能になる、を手にとった。

(現状、世界8カ国と19の組織が宇宙開発の名目でシャトルの打ち上げを実行、または計画をしているのは、衛星軌道上にあると推測される『樹形図の設計者』の残骸を入手するためであるという事で間違いないですね?)とミサカ10032号は不特定多数の個体に向けて質問を發します)

もしも、それが本当であつたら、「樹形図の設計者」が再構成されると言つことになる。そして、今まさに、再構成に必要な「残骸」レムナントを巡る闘争が行われている。

世界最高、それでいて忌々しき悪魔の発明品の修復は、妹達の「あくむ実験」が再開

する可能性を格段に上げる事を意味していた。

とある少年と少女が、命をかけて止めてくれた「あくむ実験」の再開は、妹達にとって、断固として回避したい事だ。

(オーストラリア、ウーメルにおいても同様の動きあり。とミサカ10501号は肯定します)

(ケープケネディ宇宙基地にて、打ち上げの予定を確認!!--と18820号も報告します)

(ノボシビルスク、アカデムゴロドク地区にて破片の一部を回収済み。との情報を入りました。とミサカ19999号、及び20000号の報告を終えます)

ベッドから床に降り立った御坂妹には膨大な情報が流れ込んでくる。彼女達は互いの脳波を使い、ネットワークを構築する事で世界9996カ所の情報を、瞬時に入手できるのだ。

(現状、『樹形図の設計者』の復元が可能な『レムナント残骸』は学園都市にあるものだけだったみたいですね。とミサカ18820号は再度、情報を提供します)

(他機関に渡ってしまった『欠片』や、衛星軌道上にある『断片』が学園都市から放置されているのは、単にそこから何も復元できないからでしょう。つまりは、困です。とミサカ14002号は推測します)

(ケーブケネディでは、同様の情報から学園都市内部に侵入、『レムナント残骸』の奪取を行おうとする組織がいたようです。今はもう、学園都市に移動してしまったようですが。とミサカ18820号は最後の報告を終えます)

(その組織名は『科学結社』っていうらしいの。ってミサカはミサカは追記してみる。あれ？ここではミサカ20001号って言った方が良いのかな?)

やはりというべきか、吉報を伝えてくる者は1人もいず、唯々悪い情報しか伝わってこない。御坂妹は、奥歯を噛みしめた。

「すでに外出禁止時間ですが、こうしている場合にはありません。とミサカは緊急の言い訳を自分自身に言い聞かせます」

寝間着に手を掛け、彼女は着替えを始めた。簡素な手術衣は、前

を止めている紐を外せば簡単に脱げ、その下から下着も何も無い、綺麗な白い肌が露出された。

手術衣を脱ぎ捨てると、タオルを使って汗を拭う。タオル越しに、自分の体温が平常よりも高いのが感じられる。体調不良で、微熱を伴っているのだ。肌の色も、ほんのりと赤みが差している。

ややふらつく足で、彼女は衣服を着ていく。微熱を伴った状態での着替えは、予想以上に体力を消耗した。

最後に、ゴーグルを頭に掛けて、靴を履く。床に脱ぎ捨てた手術衣はベッドの上に畳んで置いておいた。念のため、最低限の準備運動をして、窓の方へ寄る。

ドアからの外出も考えた彼女だったが、見つかる可能性は否定できない。だとすれば、窓からの外出が最も手っ取り早かった。鍵を開け、窓をスライドさせる。

下を見る。2階から見る地面はとても遠いようだった。

だが、そんな事に構っている彼女ではない。

(とにかく、学園都市に存在する『レムナント残骸』の回収が最優先でしょう。とミサカ10032号は結論します。『樹形図の設計者』の再構成だけは阻止しなければなりません。とミサカは決意を新たに突き進みます)

御坂妹は決意するものの、無表情の中に、苦い込められているのが分かる。

壊れようとしていた御坂妹を助けるために、夜の駐車場へやってきた少年。

学園都市でも最強とうたわれた能力者を無視して、彼女に放たれた叫び。

御坂妹は今でもその内容を覚えている。

「……………」

思考を現実に戻した。

こうしている間にも、彼女達を巡る状況は進行している。事件の中心を捉えることは出来ていないが、外郭を埋めていくように、少しずつ分かり始めている。

だが、そこまで分かっているのに。彼女達はその先に踏み込めない。現在、学園都市に残っている妹達は10名以下。そしてそのほとんどは、過剰な遺伝子操作と成長促進制御の治療中であり、つまりはこの闘争に対処できる状態ではない。

そんな状態の彼女が、今、向かうのは、この事態を救ってくれる、妹達の命運を救えるであろう1人の少年だ。

夜の駐車場にたった1人でやってきた、あの少年。学園都市最強の化け物に拳一つで立ち向かった少年。何度打ち倒され、どれだけの攻撃を受けようとも、歯を食いしばって立ち上がった、あの少年に。

こうした時に、真っ先に思い浮かぶのが彼の顔だ。例え何が起こっても、決して諦めようとしなかった彼の表情だった。勿論、もう巻き込むようなことはしたくなかった。

だが、頼れる人間は他にはもういないはずだ。

御坂妹は、非力な自分を呪った。

自分で問題を解決出来ず、あまつさえ他人を巻き込んでしまうよ

うな不甲斐なさに、唇を噛んだ。

妹達は、ある学生寮の位置を知っている。御坂妹は、そこで過去にジューズを運んだことがあるから知っている。その情報は全ての妹達に知れ渡っている。

そして、今現在、その学生寮に最も近い存在が、御坂妹なのである。ちなみに、ここには20001号もいるのだが、身体能力その他諸々が当てにならない。

窓枠に足を掛けた。降下するのだ。

(最終確認を行います。とミサカ10032号は告げます。学園都市に残る全妹達はプラン228に従い、全力を挙げて『レムナント残骸』の回収を開始してください)

(10032号、あなたは全個体の中でも損傷が酷いはずですよ。やはり、治療に専念すべきでは？とミサカ10774号は懸念を表します)

窓枠に掛けた御坂妹の足が揺れる。もとより、妹達は寿命の短い細胞クローンで製造され、さらに短期間での肉体作成のために様々な手が加えられている。そんな狂ってしまった体のバランスを戻すために、こうして治療が加えられているのだ。

御坂妹は「実験」当時はあの一方通行に、執拗な攻撃を受けており、肉体の衰弱は他の妹達と比べて大きい。短時間の歩行ならまだしも、実戦並みの行動はまだ冥土返しから、許可すら下りていない。

ここまで具合が悪くなる前には、大きな実戦を行っているが、あ

れは銃器による射撃だけであつたため、程良い運動で済んだ。だが、今から行つのは白兵戦。肉体を激しく使う戦闘になる事が予想された。

今も彼女は微熱を帯びており、もしも想定内以上の無理な運動をすれば、途端に体内の熱が爆発、御坂妹は血を吐いて倒れてしまうかもしれない。

だが、御坂妹は頭を振った。

（構いません。このまま降下します。とミサカ10032号は返答します）

迷わず、暗闇の中を見つめる。その瞳には、ねじ曲がらない決意が秘めていた。

（この程度の負傷、何するものぞです。ミサカは、生き続けるために、絶対に止まるようなことはしません。とミサカ10032号は分かりきった宣言を今一度繰り返します）

その宣言に、ネットワーク全体が数秒間沈黙した。そして、引いた波が返ってきたかのように、

（了解、同志の幸運をお祈りする。とミサカ20000号は首を縦に振ります）

（貴殿の武運を祈りましょう。とミサカ19002号は言います）

たくさんの激昂が、彼女の頭の中に響いた。一つ一つに、とても勇気づけられていく。



（ありがとうございます。それでは、ネットワークによる通信を遮断します。同士達もお気を付けて。とミサカは最後に一言言って、通信を切ります）

そして、御坂妹はスカートがめくれるのも気にせずに、窓から飛び降りた。服と肌の間を風が通り抜けていく。上手くいけば、そもそも上手くいかなければならないが、すぐに目標地点に着地出来るはずだった。

（下に人はいませんよ……………ねっ！？とミサカは自分の視界に人が1人いるのを確認して驚愕します）

そう、なんとも運が悪いことに人がいた。不味い事に、御坂妹の着地点に。相手方も気付いているのか受け止めようとして動かない。もしも、受け止められてしまったら、病院に逆戻りである。

（軌道修正っ……………出来ないっ！！）

出来るわけがないことをしようとしても、上手くはいかない。

そのまま、すうっと、その人の腕の中に受け止められた。だが、彼女は受け止められたはずなのに、相手は倒れることも揺れることもなく、衝撃少なく腕の中に入ったのだ。

（何者ですか……………？この人。とミサカは疑問を抱きます）

普通の一般人であれば、落下してきた人、それが中学生、いや、小学生であったとしても相当な衝撃を受けるはずなのである。運が悪ければ骨折だ。だが、受け止めた相手は微動だしなかった。一般

人だとはあまり、考えられなかった。

御坂妹は顔を上げ、まじまじと相手の顔を見る。真っ黒なハット、真っ赤なスカーフ、どす黒いロングコート。どう見たって不審者だ。

「下ろしてください。とミサカは感謝よりも、不審すぎる相手なので下ろして貰うことを先決させます」

あまりにもひどい物言いだ、服装から考えれば当たり前かもしれない。とにかく不気味だ。

「おいおい……それはさすがにひどくないか？」

相手が口を開いた。

「あれ、あなたは……」

彼女にとって、聞いたことのある声。ああ、思い出したと、彼女の頭の中で1人の人物が浮かび上がった。

「あなたは……東方厨……じゃなくて、数馬光太郎……とミサカは肝心なところで間違えたことに気まずさを覚えながら、あなたの名前を言います」

「ははっ、お久しぶりだな。カメラード戦友」

ハットの中からは、にやりと笑う、彼の顔が見えた。相変わらず、元気そうである。

「ここで何をしているんですか？とミサカは質問します」

「逆に聞くけど、お前は何で2階から飛び降りてんの？」

最初から、彼女は答えに詰まった。なんと説明すれば良い？まさか『樹形図の設計者』が壊されていて、それがなんか再構築されようとしていて、そうなってしまつと『実験』が再開してしまうから、と言って分かると思うだろうか？

「……………ミサカは黙り込みます」

「黙ってないと思うがなあ」

いちいち数馬のツッコミが鬱陶しく感じる。

仕方が無いと、彼女はとても簡単に、こう一言説明した。

「ミサカの、ミサカ達の、命に関わる問題なのです。とミサカは答えます」

これで伝わらない彼ではないだろうと、御坂妹は思っていた。というよりは、思ってくれなければ困るのだ。

「ほう……………それは大変だな」

幸運な事に、彼にはちゃんと伝わってくれたようだ。数馬の目つきが瞬間的に鋭くなる。

「ですから、すぐにでも下ろしてくれませんか？とミサカは急かすようにあなたに頼みます」

次に彼はYES、または肯定的な答えをしてくれると期待した。

のだが。

「いや、駄目だ」

よりよつての否定的な返答が来てしまった。

「えっ、いや、聞いてました？だからミサカ達の命に関わる問題があるんですよ。とミサカはためえ何ほざいてんだ、このアホンダラと思いながらも冷静装い聞きます」

「そんなこと言うが、お前の場合は今まさに生命の危機じゃねえか。顔赤いぞ。熱あるだろ？」

さくりと、数馬に痛いところを言われてしまった。だが、それでも彼女は行かなければならないのだ。腕の中でじたばたと手足を動かす。

「そんなの大丈夫ですから、下ろしてください。とミサカは本当怒るぞと思いながら言います」

しかし、数馬は怒気を含んだ彼女の言葉に、何一つ表情を変えずに言った。

「おおかた、体の調整中と言ったところなんだろ？無理をすれば、体が壊れると言われるほど、体は衰弱しているようだし、な」

ずばりずばりとの確な事を言う彼に、御坂妹は驚かずにはいられなかった。この人は、何もかも知っているのだらうか？

「こつちにも若干、というか大きく影響させちゃったみたいだし。こりゃあ責任とらにゃあかんよな」

「はい？」

ふいに、彼の顔は御坂妹がいた病院2階の1室に向けられた。何故だろうか、彼女には嫌な予感がビンビンした。

「大丈夫だ、ゆっくりと行く」

数馬がそう言うと、彼自身の体がゆっくりと浮き始めた。いや、彼だけでない。御坂妹も何となく、自分が浮かび上がるような感覚に襲われた。

「無重力なんて、初めてな試みだからなあ」

彼の言葉で、彼女は納得したような声を上げた。なるほど、能力でも使っているのだろう。ゆっくりとだが、安定して上に進んでいる。上にだけだが。

「で？どうやって部屋に入るのでですか？とミサカはまさか考えてないことはないだろう、と思いながら聞きます」

無重力空間では、人間は自力で身動きが取れない。ただ、ただ浮き続けるだけ。何か、強い力で押して貰わなければならないのだ。

「そりゃあ勿論……」

で、数馬はポケットから銃を取り出した。再度、御坂妹は嫌な予感がした。それも強く。

「耳は塞いどけ」

すぐに彼女は耳を塞ぐ。そして次の瞬間、腹に響くような炸裂音が3回鳴った。

ぐわんと、体が横にスライドする感覚が来る。そしてそのまま、窓が開けっ放しだった病室へ突っ込んだ。

「痛いな……………」

「当たり前でしょう。とミサカは呆れ顔であなたに突っ込みます」

どこか間の抜けている人だと、御坂妹は改めて数馬に対して思った。

さて、病室に入った、この場合は突っ込んだと言うべきか、数馬は御坂妹を元のベッドに寝かせた。

「早く寝ておけ。ゆっくりと」

「いや、だからですね……………」

彼女はしぶとく、起き上がるうとするが、数馬の手がそれを許しはしない。

「いいから、休め。死に体なのに無理するのは危険だ」

はっきりした彼の言い分は、まったくもって正論であり、御坂妹も反論は出来なかった。視線を床に落とし、黙り込む。

「大丈夫だ、決して悪いことは起きない。絶対に」

そんな様子を見てか、数馬は彼女の頭を撫でながらそう言った。

「何故……そんなことが言えるのですか？」

御坂妹としては、何の根拠もない言葉だった。だから、あえて何故かと理由を問うた。それに対し、数馬は自信満々に、こう言った。

「俺が何とかするからだよ」

その返答に、彼女はポカンとさせられた。

彼が何とかする？確かに彼は強いが、ただ一般の能力者に過ぎない。その彼が何とかする？恐らく大規模な秘密組織を相手に？荒唐無稽も甚だしい。そもそも、数馬自身は一体、この件に関して何を知っているというのか。

この緊急事態において、御坂妹は、彼が口から出任せを言っているのではないか、という心理に陥っていた。

「何を、馬鹿な事を……………」

否定的な言葉を吐き、苛立ちを出す。無表情の彼女ではあったが、心は焦燥感で覆われていた。

だが、数馬は言葉を続ける。

「いいや。本気さ」

彼のギロリとした瞳には、とても出任せを言っているとは思えない。

「本気だから、こうとだけは言っておく」

頭を撫でていた手を離すと、数馬は窓際に移動し、足をかける。

「残骸は元に戻ることはなく、ただ無意味に屍を生み出すだけになる」

「……最後に勝利し、幸せを享受できるのは、貴女たちだ。それでは、また」

そして、彼は言い終わるやいなや、窓の縁を蹴り、外へと出て行った。あまりにも早く行ってしまい、御坂妹が呼び止めることも出来なかった。

「……………」

部屋に残された彼女は、何だ、と呟いた。

彼は結局、何もかも分かっていたのだ。疑う事さえも馬鹿らしいことだった。彼は、本当に何とかしてくれるだろう。彼女にも、あの瞳が本気であったのは分かっているのだ。

繋がるかは分からないが、ミサカネットワークの通信を再開させる。彼女は一刻も早く、他のミサカ達に伝えたかった。

勇猛なる戦友がミサカ達を助けてくれる、と。

カメラード



午後11時46分

病院の入り口から、のっそりと、彼は現れた。学園都市最強の名をほしいままにした、怪物、アクセラレーター一方通行が。

彼が向かうはただ1つ。守ると決めた者達に、牙を向けようとする「鉄屑」を持つ者だ。状況は芳しくなく、むしろ悪い。一刻も早く、動き出す必要があった。

(ちっ、少し時間を喰っちゃったか……)

何故かは知らないが、彼は病院正面玄関からの突破を試みた。なので、非常に厳しい監視の目をかいくぐり、外へ出たのだ。

目標が何処にいるかは、ミサカネットワークの通信を傍受、というよりは盗聴か、しており、大方見当は付いている。ならば急いで、そこに追いつくのみ。

とりあえず、見つかる厄介ではあるから此処を直ぐに離れる必要がある。杖持ちにとっては、急ぐという事は非常に難しい事なのではあるが。

(さアて、行くとするか………あ?)

進み始めようとする一方通行の前に、おかしな輩がいた。何がおかしいかと言えば、脛を抱えて悶えているという所と、冬にはほど遠いにも関わらず、とても暑苦しい格好をしているという事だろうか。

「……………」

話しかけるのは面倒だと、彼はそれを無視して道を行こうとした。が、悶える声に、嫌なことではあるが聞き覚えがあったのだ。まさかと思い、顔を覗く。

「なアにやってんだ？オマエ」

そう、そのおかしな輩は、数馬光太郎、その人だったのだ。

「いや、ちょっと2階から飛び降りたら着地したときに、脛ぶつけどちやっとな」

「馬鹿かオマエ？」

「反論はしない」

2階には妹達の1人がいると、一方通行は分かっている。どんな経路で知ったかは分からないが、数馬も、この件に関わろうとしているのはすぐ分かった。

「さて、それは良いとして、一方通行。あんたは一体、どういった理由でこんな夜中にお出かけで？」

未だに脛は痛そうであったが、そこに突っ込む一方通行ではない。

「そつちこそ、こんな夜中になにしてンですかア？しかもそんな不審者じみた恰好で」

「いや、少し躰が足りない犬がいてな。仕置きをしてやろうと思つて」

「ほう、そオかい。そいつア大変だな」

見え透いた、簡単な言い回しだった。

「いやあ、鉄屑を探しに行くそつちの方が大変だろうに」

「そこまで分かつてンのか。大したモンだ」

お互いが、気味悪くニヤリと笑った。やることは違つが、目的は同じ。それだけで、一種の連帯感があつたのだ。

「さあ、時間は無いんだ。俺は行く。鉄屑えいせいは頼むぞ」

「けつ、ンなことぐらい大丈夫だ。てめエこそ、次の日には見舞いに来るぐらい、マシな体で帰ってこい」

一方通行らしくない台詞に、数馬は口を大きく曲げて笑った。

「ああ、勿論だ」

怪物と悪魔は、それぞれが行うべき場所に向かう。9970名の少女達が望んだ、幸せを授けるために。

午前12時3分 第19学区

全力疾走での現場急行。数馬にも少しの息切れが出てきた。

「10分以内に第7学区から第19学区に到着ってすごくない？ねえ  
すごいよね？」

誰に言っているのか分からないが、確実に頭は逝っている数馬。

「さて、本拠地は何処にあるのだろうか……」

うつかりしていたが、大天使からは第19学区にあるとしか情報を聞いていないのだ。さすがに、風潰しに探すことは出来ない。か  
とって、また電話するのも気が引けるものだ。

「むむむ」

何がむむむだ。と言いたいところだが、打開策を思いつくのが先  
だ。

「地下にも何階かはあるんだよね……だったら」

数馬の視線は地面に向き、そこをじっと凝視した。今まで、厨二

臭く、そしてチート臭くもあつてか、使う機会がほとんどなかった能力が、此処で今使われようとしていたのだ。

「魔眼つてこんなにも見えるんだな……」

そう、以前、どつかの馬鹿悪魔がつけてくれた、あらゆる物を見通す魔眼である。実際には悪魔にとって無くてはならない物であるため、悪意があつてつけたわけではないのだが。

さて、地下まで見通せる事に成功した彼だが、なかなか地下まであるビルは見つからない。すでに30軒は超えただろうか、一向に見つからない。

「畜生……何処にある?」

もうこうなつたら恥を忍んで再度、大天使こなたに電話でも掛けようかと思つた矢先、それはあつた。

「……………マジかよ」

第19学区というのは再開発に失敗し、急速に寂れてしまった学区であり、街並は古く、前時代的なのである。

だが、彼が見つけたそれは、おおよそ地下15階にも及ぶ、馬鹿でかいビルだった。間違いない、此処だ。

「距離はここから700m……………よっしゃ」

すでに息は元に戻っている。数馬は、最後の疾走を始めた。

第7学区 とある病室

(であるからして、状況は好転したと言っても過言じゃありませんよ。とミサカ10032号は意気揚々と報告します)

3回も連絡を失敗して、やっとここさつとこ繋がったミサカネットワークでの御坂妹の報告は、全妹達に驚愕を与えた。

(そいつは最高だ、まったくもって最高だ。とミサカ15539号は狂喜乱舞します)

(良くやった。褒美としてフランクフルト名産のソーセージをやる。とミサカ19222号は褒め称えます)

(そこはオプーナだろ、常識的に考えて。とミサカ12228号はミサカ19222号に突っ込みます)

反応は様々、中には関係無い発言まであるが、皆一様に嬉しがっていた。そんな中で、再度、御坂妹が口を開いた。

(さあ、これからが正念場になります、が……残念ながら、当事者であるはずのミサカ達は傍観するしかないのです。とミサカ10032号は少し気落ちしながら言います)

(ですが、仕方がありません。ここまでくれば、もうあの人に任せるしかないでしょう)

(どうか、彼に幸いあることを。とミサカ10032号は祈りを捧げます)

その言葉に、ネットワーク全体が静まりかえり、代わりに彼の無事を祈る思いが押し寄せた。

午前12時8分 第19学区 とあるビル

「おお、寒いなあ……」

深夜遅くまで、正面玄関の警備をさせるとは上層部も鬼だ。

そう思いながら警備員マイケル・カポネ、国籍はアメリカ、は懐に手をつ込みながら震えていた。ここまでは一般の警備員とは変わらないが、1つ違つとすれば、それはその懐には拳銃が仕込まれているということであろうか。

このビルを所有しているのは学園都市の技術を盗まんとする「秘密結社」だ。拳銃の1つや2つは保持していて当たり前。

この警備員も元は下つ端の下つ端に位置していたが、長年の功績を認められて、やつとこさ本部の警備を行えるまでになった。ちなみに、部下として3人程が彼についている。

「酒でも飲みたいよ。まったく、どうして上の奴らはこういう所を考えてくれないのか」

ぶつぶつと言ってみるが、部下の誰1人として反応してくれない。冷たい奴らだ。





「なっ!?!」

見れば、不審者の手には回転式拳銃リボルバーが握られている。この時点で、彼はこの不審者が敵だと判断した。エネミー

ロベルトだった物はあっさり倒れる。警備の指揮を執る者として、頭をフル回転させた結果、次の指令を出した。

「ジョージ! お前は下の方に連絡してこい!! フレッド! こいつを殺せ!!」

「Y, Yeah!!」

急いで中に入っていくジョージを尻目に、フレッドが射撃を開始する。

敵はすばやくそれを避けると、第2射を放った。2丁の拳銃で、弾を惜しげもなく使い、合計13発の銃火が光る。

あっという間に、フレッドが蜂の巣になった。だが、これはマイケルにとってはチャンスになる。横合いの至近距離から、3発の銃弾を命中させたのだ。通常であれば、即死ないし重傷である。

通常であれば、の話だが。

「がっ……!!」

男は弾丸を受けても倒れなかった。逆に、マイケルにはボディブローが決まっていた。

この時点で、勝敗は決していると言っても良いだろう。ブローを受けた彼の体は地面に転がり、そこへ容赦なく10発の銃弾が叩き込まれる。

ただの組織の警備員であった彼は、何も言えずに殺されたのだ。た。

## 殴り込む前に寄る所（後書き）

もうすでにひどい厨二病全開ですね。どうしよう……

ともかく、こんな感じで、のろのろと更新していきませんが今後ともお付き合い願えたら幸いです。

ちなみに次の更新は月曜の10時には出来そうです。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

## 遊びを望む者達（前書き）

何とか更新できました。

楽しんでいただけたら幸いです。

## 遊びを望む者達

ビル 地下15階

「同志！！地下2階の警備隊から連絡を受けました。ただ今、地上正面玄関に敵が出現。警備員と戦闘中です」

部屋の中で伝令の音が響き渡り、広々とした椅子に座っている同志と呼ばれた者はゆっくりと口を開いた。

「警備部隊にはそこを死守させる。撤退はさせるな」

「はっ、はい！！」

淀んだ声が、伝令に命令し、最後には下がれと言う。伝令が消えた後、部屋にいる男のその顔は、相手を不愉快にさせるほど気持ち悪い笑顔で満ちていた。

地下1階

警備隊は全員で70名いる。迎撃として25名を出動させた後、残り45名で此処の防衛を担当していた。警備隊の指揮を取るカルロス・マルセロは、迎撃に向かわせた25名が敵を撃破してくれると信じていたのだが。

「迎撃隊、応答願います！！応答願います！！畜生、Fuck！！」

25名全員からの連絡途絶という現状であった。途中報告からは敵戦力1人と聞いていたので、安心はしていたのだが。

「相手は能力者でしょうか？」

「ああ、その上、レベル4以上の能力者なのは間違いない……」

レベル5の超能力者の中で、この計画を妨害してくるのは第3位の電撃姫ぐらい。しかもその彼女も、大きい囷に騙されてこちらには目を向けていない。

とすれば、レベル4の能力者となるのだが、こちらの警備兵も精鋭を揃えている。銃器によるゲリラ的攻撃によって、大概の敵は撃破可能のはずだ。

「報告からは、どうも敵には銃器の効果が薄いとも入っていましたね」

「んじゃあ何か？そんな都合の良い能力を持った奴が責めてきたとでも？」

「そもそも、能力者かどうかも怪しくありませんか？能力者になれるのは学生だけと言いますし、だったらただの学生が何でこんな所へ……」

考え、話し合っても、何も分からない。ただ分かっているのは、敵は非常に危険だということぐらいだ。

と、その時、伝令が入ってきた。

「同志からの命令です。『撤退は許可できない。その場を死守せよ』」

だそうですね」

「そりゃあそうだろうがな……」

これより下には、組織のメンバー約145名が隠れているのだ。そうそう撤退は出来ない。

それに、ビルの構造上の都合、防衛拠点として機能できる程、広い部屋があるのはこの地下1階だけなのである。下がったとしても、防衛は不可能だ。

「モニター室から連絡が!!」

またもや連絡だった。モニター室は監視カメラの確認もしているので、敵の動向が大方分かるはずである。

「よし、出よう」

電話の受話器を取ると、その向こうからは恐怖に怯えた声が聞こえた。

「こ、こちらモニター室。敵は迎撃隊の攻撃を退け、そちらの地下1階に向けて進撃中です」

「……………迎撃隊はどうなっている?」

カルロスの方に、声の主は震えながら答えた。

「細部までは見えませんが……………恐らく、全員死亡。確認出来る者だと、頭部が無くなっています……………」

沈痛な叫びをこらえ、彼は最後の質問をした。

「敵がここに来るまで、何分だ？」

「早くて6分。遅くても10分は掛からないでしょう」

そうか……ご苦労、そう言って、カルロスは受話器を置いた。悲しい沈黙が、全体を包む。

「諸君。今の戦況は最悪だ。敵は迎撃隊を撃破、こちらに進撃中。最後の砦は俺たちしかない。断固として、此处を死守する」

決死の戦いが、始まるうとしていた。

「前衛、準備完了。いつでも攻撃可能です」

「後衛も完了しています」

敵は直ぐ目の前に来ている。その危機感が、ひしひしと警備員達を蝕んでいた。ドアは完全ロックされているが、いつ破られるかは分からない。破られるのは確かではあるが。

「もう5分は経過しています。そろそろ来ますよ」



「……………」

準備は万全ではあるものの、勝機は見いだせない。むしろ、完全敗北を喫する方がありえてきた。

「よし！！全員、戦闘用意をしろ」

号令と共に銃器を構える音が聞こえ始める。その音も、10秒も経たない内に聞こえなくなった。

ドアから、こつ、こつと足音が聞こえる。敵は近い。

カルロス以下、警備隊の取った作戦は奇襲である。此処の扉は内開きである。敵が一定距離に近づいたら、自分達の方にドアを開け、前衛の5名が一斉射撃を行う。敵が怯んだ隙に、残りの前衛10名が突撃。成功すれば後衛も援護に乗り出す。という風であった。

足音が近づく。警備隊の緊張は最高潮になる。

こつ、こつ、こつ、こつ、こつ、こつ、こつ……………」

足音が止まった。

「今だ、突撃！！」

カルロスの命令で、1人が扉の取っ手を掴む。4名が射撃体勢に入る。今、扉が開かれようとした。

その時だった。

シュツッと扉の向こうから、何か放たれた。そして3秒も経たない内に、扉が大爆発を起こした。前衛5名が吹き飛び、扉の破片が飛び散る。

「なあっ!?!」

想定外の爆発に、警備隊に混乱が生じる。この時点で、カルロスの作戦は完全に破綻したと言ってもいいだろう。彼は、敵が能力者だという事に集中しすぎた。いや、誰だって、そこに集中せざるを得ないだろう。だが、それが致命的だったのだ。

もしも、相手が能力だけでなく、他の装備も所持していたとしたら?もしも、扉を突破できるような携帯兵器を所持していたなら?普通であつたら、絶対にありえない事ではあるのだが、今まさに襲撃してきた敵は違ったのだ。

煙の中、混乱によって警備隊は射撃体勢が崩れている。それに乗じて、さらなる攻撃が仕掛けられた。破れた扉の向こうから2個のM67 <sup>アップル</sup> 破片手榴弾が投げ込まれたのだ。

誰かが気付いたときにはもう遅い。直径15mの2つの円上に、地獄が作られた。

前衛壊滅、後衛にも被害が及ぶ。とうとう、警備隊に大混乱が起きた。

「Stop!!!Stop!!!」



地下14階

銃火が消えて、後に残るは死だけ。灰色の壁に、たっぷりと『アカイ』ペンキが塗られ、不気味なオブジェがいくつもできた。

そんな部屋で、ただ1人だけ立っている者。服は全て血に染まり、雫が床にぼたぼた垂れる。

「215人か………もう制限オーバーだ」

彼は最初、生け捕りで捕まえる事になっていた。が、それが守られることなく、自制もきかず、とうとうこんな事になってしまった。それでも、彼は、数馬光太郎は気にすることはない。罪悪感、理性、良心は何処に行ったのだろうか。すでに、彼の中に存在しないのは確かではあったが。

「さあて、次で最後かな？」

階段を見つげ、それを下りる。彼のすべてが墮ちていくのを表しているかのように長く、下りていった。

## 地下15階

少し残っていた組織員を殴殺し、数馬は最後の部屋に入った。

暗い。電気が付いていない。どこかにボタンは無いかと、壁に触れると、鋭い痛みが走った。

「っ!？」

壁を見ても、何も無い。それなのに、触ることができない。

「……………?」

彼がもう1回、壁に触れようとした途端、電気が付いた。

「あまり、壁には触らない方が良くないんじゃないかな？」

すぐさま、数馬は銃を取り出して声の方を向いた。

部屋は広く、少なくとも30畳はあり、柱が4本は立てられている。

その奥に、大きな黒檀の机に肘をつけ、椅子に座っている男がい

た。今まで、気配も何も無かったはずである。

「……………あんたが親玉か」

「その通りだ。名前はサロット・サル、コード81、バン・ポー、どれでも良い。さて、君の名前は？」

髪の色は黒、体格はやや太っていると云うべきか。色は黄褐色で東南アジア系を連想させる。

「数馬……………光太郎」

「では光太郎君！！ようこそ、我が科学結社『クメール・ルージユ』へ。私は君を歓迎しよう」

黒檀の机から立ち上がった彼は、ゆっくりと数馬に近づいてくる。

「はっ、部下を散々殺しておいて、歓迎されるとは嬉しいこった」

「いやあ、それでも歓迎してあげよう」

互いに、にこやかに笑っている。

「死ね」

同時に2つの銃声が聞こえた。数馬にとって、銃弾なんぞはまっ

たくダメージにならない、何故だかは知らないが、物となっていたのだから。

逆に、ただの人間であるはずのこの親玉に、大口径の銃弾は即死を意味する。数馬にとって、これは勝利を確信させられた。

「……………はっ」

「うっ……………」

実際には、逆の展開が起きていたのだが。

「な、何で……………」

「おいおい？ご大層な事言ってた割には苦しそうじゃないか」

数馬の腹に当たった弾丸は、まるで熱されているかのように、熱く、痛い。通常の弾丸では絶対なかった。

「小型回転式拳銃 S & a m p ; W M 3 6 専用、法儀礼済、9 m m 銀銃弾の威力はどうだい？」

「……………なに？」

法儀礼済、銀銃弾。いかにも対化け物専用の言葉だ。ワード

「なあに、完全に悪魔だったのなら、これだけで死んでいるはずなんだ。半分だけで良かったじゃないか。ええ？」

半分悪魔、それをこの男は知っていた。数馬はこいつには出会ったことがないはずだ。地上でも、天界でも。

「何なんだ……お前は」

銃弾が効果ない時点で、人間だという事はない。

「いやあ、君の少しは回る頭の中だったら、誰か分かるんじゃないかな？この私が誰なのか？ちなみに答えは、悪魔以外にしろ。合っ  
てはいるけど」

彼は悪魔、そう分かった途端に、数馬は寒気が走った。今まで相手にしてきたのは人間ばかりであったが、まさかこんな所で悪魔と戦うとは考えてもみなかった。

それにしても、サロットは誰だか分かってはいたが、本当に見た事もない。この男の事を。数馬は本当に分からなかった。

「……………」

互いの沈黙が少し続くと、サロットの方が口を開いた。

「やっぱり無理か。歴史が得意で、好奇心があつて、ネットを使っている奴だったら、分かったかもしれないが………」

残念そうな顔をした、サロット・サルは銃口を数馬の頭に向けた。

「やはり私も忘れ去られているのか。まあ、仕方があるまい。それじゃあ、さようなら」



銃火が見える前に、数馬は地面を転がりそれを避けた。

「ほほう、まだそこまで元気があったか」

「勝手に殺そうとすんじゃないよ。てめえの正体も分かってねえんだ。ここで死ねるか」

「ははっ、それは嬉しい。まだまだ物足りないと思っていたところだ」

銃を構え、2人は死闘を始めた。

数馬は最初、重力を小さくして、体の負担を減らし、機動力を上げた。敵の攻撃命中率を下げるためである。あの銀銃弾を2発でも喰らえば、数馬は即死だろう。

そして、柱の陰に隠れて、遮蔽物の代わりにする。長期戦にするつもりだった。

(あの野郎、射撃の腕は良さそうだ。油断はしてられっ)

弾丸が彼の顔をかすめた。いつのまにか、サロットがそこにいる。

「ほらほら、早く逃げないと死ぬぞ?」

「くそがっ!」

今のはお遊びの1発ということだろう。まったくもって、いやな

相手である。射撃の腕も、耐久力もあちらが上なら、機動力も上なのである。

戦闘は、数馬の不利に動いていった。

撃てども撃てども、相手にはダメージを与えられず、逆にこちらは先ほどの負傷もあってか体力をジワリジワリと失っていく。よもや、ここまで傷が深いとは数馬も予測できなかった。

今更ながら、彼の戦術は失敗だったと言わざるを得ない。長期戦に持ち込んだのは、自滅だったのだ。

かといって、短期決戦に持ち込むにしてもその要素に欠けていた。敵に多大なるダメージを与えることは難しく、さらには自身に反撃を受けたときに持ちこたえられる体力も少ない。

(どうする……………?)

サロットが持っている銀銃弾。あれはつまりは悪魔にとって致命傷を与えられる弾丸となる。そして、彼も悪魔であり、だとすればあの銃弾も効果があるということだ。だが、今の数馬にそんな銃弾は保持していない。何か代用できる物は無かったか、数馬は服の中を探す。

(なにかないか、なにか、なにか……………)

銀、法儀礼済、つまりは聖なる物。

(……………あった)

そう、彼は持っていた。聖具の代表的な物を。

ただし、それには接近せねばならず、なおかつ実行中、攻撃を避けるのは難しい。そこら辺を考えるためにも、時間が必要だった。

「ところでだ……お前は何で、『樹形図の設計者』を完成させるために能力者を複数の人数、使ったんだ？裏切られるかもしれないに」

見え透いた、いかにも時間稼ぎをしようとしていると分かるような問いかけだった。だが、サロツトは少し黙っただけで、簡単に話に乗ってくれた。

「そりゃあ勿論、使えるからだよ。私は使えない者を雇うことはない」

「使える？裏切るリスクも考えて、使えると判断したのか？」

「はっ、あいつらに裏切るといふ事は無いはずだったからな。少なくとも、『樹形図の設計者』が完成するまで、は」

自信満々に喋る彼に、数馬は何故か心底嫌悪感を抱いた。

「子供というのは、まったくもって、自分の決めたことを忠実にやるうとする。だから、便利で、大人に使われやすい」

「……………」

「少年十字軍だってそうだ。馬鹿な子供が、聖地奪還だと言って、最後には奴隷に売られて終わり。あの能力者達も、人間の代わりに

超能力を扱える個体は存在するのかを知りたいから協力する。だと  
言ってきた。

馬鹿だと思つたよ。ただ利用されるだけに終わるのが、分らないのかとね。まあ、実際、利用するだけ利用したやつたさ。だが、  
今頃はボロ雑巾にでもなってるんじゃないかな？ 傑作だよ、笑いが止まらない」

「あの哀れな能力者は、自分の能力が恐ろしくなって、現実から目を背けた結果、死にかけている。まったくもって、喜劇じゃないか  
！！」

数馬は答えなかった。肩をわなわなと震わせ、歯を食いしばり、  
感情的にならないようにしていた。

「無駄話が過ぎたな。さて、光太郎君。地獄へ旅立つ準備は出来た  
かな？ 出来たのなら言ってくれ、すぐに逝かせてあげよう」

この時、数馬の中で、すべてがまとまった。まとまったのなら、行  
動は早くするべきである。

「はっ、馬鹿な事言ってるじゃねえ。地獄に行くのはそつちだ。く  
そが」

「まだ言い返す気力があるか。良いだろう、それを全部叩き潰して  
やる」

柱に近づくサロットに、数馬はニヤリとしながら言い放った。

「それとだ。確かにあの能力者は馬鹿同然だがな、だがな、だから  
といって、おめえみたいなクソ野郎に、子供を馬鹿にする権利はね

えんだよ!!!」

言い終わるか終わらないかの内に、数馬は勢いよく柱から飛び出し、サロットへ向けて走り出した。

「馬鹿が!! わざわざ出てくれるとは、手間が省けた!!」

彼が発砲した。間髪入れずに、5発である。避けることも考えているのだろう、一点に集中せず、複数の射線をとっている。だが、それは数馬にとって幸いだった。

向かってくる弾丸は2つ、構えたままのS & amp; W M 29を真ん前に向ける。

ここで魔眼を使い、その予測進路、高度座標を判断する。この間、時間は1秒も取れないので、正確に分かることは出来ない。だが、推定でも構わなかった。予測ポイントに向けて、5発の・44口径対人スチール弾が放たれた。

1秒後、2つの鋭い金属音が鳴り響いた。サロットもこれには目を開く。

銃弾と銃弾同士が、ぶつかり合い、互いに進むことが出来ず、地面に落下する。つまり、かち合い弾を生み出したのだ。

攻撃を凌げば、後は突き進むのみである。前へ、前へと。

「おのれええええ!!」

至近距離になれば、銃は必要無く、肉弾戦となる。そして、これ

が数馬の狙いであった。

サロットの殴りをあえて喰らう。重い衝撃ではあるが、耐えられる。次は数馬の攻撃、いや、トドメであった。

かれの振り上げた右の拳には、何かが握られていた。指と指の間にとげのような物が。

「ああ!？」

数馬の手に握られていたのは、十字架<sup>ロザリオ</sup>。大天使から貰った十字架であった。

銀製であり、聖具であり、悪魔が最も嫌う物。その代名詞は、確かに、悪魔にとって致命傷を与えるには充分だった。

そして、サロットが気付いたときには、もう遅い。

振り下ろされた拳は、サロットの左胸に注がれ、それと同時に、十字架<sup>ロザリオ</sup>が突き刺さった。

だが、それだけでは終わらない。

悪魔の力は強大だ。人を殴殺するその力によって、十字架はそのまま肉を引き裂き、骨をも砕き、最後には彼の心臓を貫いたのだ。

血を吐き出すサロットと、勝利をまだ感じていない数馬。

この時、『科学結社クメール・ルージュ』は壊滅したのだ。

午後1時45分 学園都市 郊外

この深夜、1人の敗残兵が、安全であろうルートを辿りながらフラフラと歩いていった。

1度目は、予期せぬ敵に敗北し、2度目もその敵に殺されかけた。

そして、3度目。今度は第3位の電撃姫と、ジャツジメント所属の空間移動能力者に完膚無きまで叩きのめされた。詰まるどころ、この敗残兵は連戦連敗であったと言えよう。

ただ、それでも敗残兵、結標淡希は、任務に失敗はしていなかった。手にはキャリアケースをしっかりと持ち、ゴロゴロと引きずっていた。

全体に貫通傷があり、若干の火傷も見られる。服に至ってはボロボロで、上着はあの綺麗だった時を思い出せないほど汚れていた。電撃姫達と戦った代償だ。だが、さらに致命的なのは、今、彼女の精神状態が最悪であるということであろう。

先述した対電撃姫戦において、結標が行った脱出方法というのが自身を転送するというものだった。彼女は能力テストでの事故、自身が壁に埋まってしまうというトラウマのためにそれだけは出来な  
いはずだった。

それを無理強いして行った結果、過去のトラウマの復活、精神崩

壊寸前という事になってしまったのだ。こうなると、彼女に戦うことは出来ない。脳が冷静にならなければ、ただでさえ演算が難しい座標移動は不可能になってしまうからだ。

(どうすれば……………どうすれば……………)

崩壊寸前の精神しかない結標には、目的という物を無くしてしまっていた。どうにかして、意識を集中させて心の落ち着きを取り戻そうとする。少し落ち着き、外部の組織にこれを渡さねばならないと思いつ出した。

(連絡……………連絡しなきゃ……………)

キャリアケースを持つ手を強く握り、無線機を取り出す。

「こちら、A0001よりA0000へ。符号の確認の後、状況の報告  
〈……………〉

マニュアル通りの指示を出す。これで繋がれば御の字なのだ。

繋がらないのだ。まったく。

無線機の向こうからは雑音しか聞こえない。それ以外は何も聞こえない。

「こちらA0001よりA0000へ。符号の確認の後、状況の報告を……………」

手が震え、再度指示を繰り返す。しかし、返答は無く、ただ無意味に雑音が繰り返されるだけ。



「ちよつと！！聞こえてんでしよう！？何で返答しないのよ！！！」

《《聞こえているさ、しつかりとなあ》》

声が聞こえた。ただし、それはいつもも応答する声とは違う。だが、聞いたことはある。もう二度と聞きたくない声、数馬光太郎の声ではあつたが。

「な、何であんたがつ……」

背筋が凍り、声色が恐怖で染まる。

《《いやあ、それは簡単。お前さんと手え組んでいた組織の奴らを皆殺しにしたからさ》》

「う、嘘でしょう……？」

無線機から告げられた言葉で、彼女は目的さえも失った。ブラフかもしれないとは、考えられなかった。無線機の周波数は、しっかりと教えられた連絡先と一致している。それに、数馬が出たということは、彼が組織に乗り込んだということである。恐らく、そこにいた敵を除外して。

《《まあ、そんなことはいいさ。後はお前だけなんだ。覚悟は出来るな？》》

おどろおどろしく言う彼に、結標はもう雀の涙ほどしかない勇気を振り絞って言い返した。

「覚悟なんて言ったって、あんたは私が何処にいるか分かっているはずっ」「残念、俺じゃない奴が担当してくれるから問題無いんだよ」  
「……………えっ?」

数馬ではない、それでは誰が来るといふのか。結標には、理解が出来なかった。誰が、誰がこんな辺鄙なところに来るといふのか。

《《心しておけ。いかなる者においても、怪物の逆鱗に触れば死しかない。逃げようとしても、追いつかれ、隠れようとしても、見つけられる。》》

悪を行う者が身を隠そうとしても暗黒もなければ……………《》

……………死の闇もない。それが今、証明されようとしている。

じやり、と足音が聞こえた。結標の歩く道は一本道で、車はまったく走っていない。音は近づき、次第に、彼女もその姿が分かってきた。

この場合は、分かりたくもなかっただろうが。

髪は白髪、服は奇妙な黒白の縞が入っていて、右手に杖持ち。

「ああ、もオメンドくせエ。見つけるまでこんな時間が掛かっちゃまった」

本名不明、学園都市第1位の怪物。一方通行が、そこにいた。

アクセラレーター

「で……………」

その顔が、狂人のような笑顔を見せた。

「俺がぶつ潰さなけりゃならねエ奴は、オマエ、だな？」

もう、結標淡希は怯えるしかない。目の前の現実から、必死に目をそらすしかない。

そして、この哀れな敗残兵が、怪物によって完全沈黙させられるまで、5分もかからないことだった。

午前2時34分 アスガルド 天国大本営 地上部第1部第2課

先ほどまで、お祭り騒ぎのはずだった第2課は、完全に静まりかえっていた。予期せぬ犯人逮捕失敗であるからである。

だが、この場合、犯人に逃げられたという訳ではなかった。犯人が死んでいた、というのが正解であったのだ。

「……………なんてこつたい」

「こなたが頭を抱えてそう呟く。部下も落ち込んで言う。」

「まさか数馬光太郎に殺害されているなんて……………こりゃあ無茶苦茶ですよ」

「そう、大天使達が捕まえようとしていった、その犯人こそが、サロット・サルであったのだ。」

「とりあえず、アンチスキルが来る前に第1課が回収した物があるので、それを確認していただけますか……………」

「大天使様！！第1課から届いた物に、映像記録が残されていました！！」

「部下の1人がドアを勢いよく開けて入ってきた。この雰囲気がかつていないのかと少し呆れるものだが。」

「映像記録なんて……………そんなただ単にHな物じゃあないの？」

「いや、それが……………サロット・サルが殺害される、1間前に残したものでですよ」

「見ようか」

「すぐさま映像再生の準備に取りかかる。殺害される少し前の犯人が映像を取っているなんて、おかしい事だ。何を取ったのか、大天使には非常に気になることだった。」

「わざわざビデオカメラに映しているなんて、何やってたんだか」

接続コードを繋ぎ、とりあえず見てみることにした。

まっさきに映ったのが、サロット・サル自身だった。

「……………何やってんの？」

「さあ……………」

大天使達が呆れ顔で言っていると、映像の中のサロット・サルは喋り始めた。

《《あぁっと。映像を見るときは、画面から離れて、部屋を明るくしてから見てください。よし、これでOKだな》》

見ていた者、全員がずっこける。

《《さて、この映像が天界の大本営辺りに届く頃には、私は死んでいると思う。なので、そちらさんに向けてメッセージだけは残しておこう》》

《《私、いや、私達が色々と行動しているのは知っているはずだろう。数馬光太郎、今、このビルに侵入、虐殺の限りを尽くしている奴に対してだ。そして、それが多数で行われている事も分かっているだろう。その通り、こちらは組織であり、目的を達成するためならば、何でもする、そんな団体だ。私達を率いているのは、普段総統と呼んでいる。》》

で、ありがたいことに、我らが総統はその目的を教えて差し上げようというのだ。ありがたいと思えよ。絶対に。さて、では目的を非常に簡単に話すとすれば、こうだ》》

《《あの怪物を使つての、史上最大の戦争を起こす。それだけだ》》

「はいつ!?!」

大天使が驚き、声を上げ、部下は脛を椅子にぶつけた。

《《あんまり時間が無いから、要点かいつまんで言うことだけ言つておこつ》》

《《私達は、この世界に江戸時代頃に干渉した地獄の20の軍団を率いる序列55番の偉大なる君主である悪魔、オロバス。涼宮ハルヒと言つた方が良いかな。に使えていた。その時にやっていた事は、そちらさんも知っているとおりだ》》

「ああ………あの大馬鹿な人の部下なのね」

いつぞや、確かフィンランドに行ったときに、数馬に教えた事だったと、大天使は思い出した。

《《閣下が捕まった後、私達は世界中に離散、再起を図つた。なんせ、天界で帰ることも出来ないんじゃ、やることはこれだけだからな。》》

だが、残念なことにこの世界、なかなか戦争が起きてもそれが世界規模になることがないんだよ》》

《《だから、そちらが送つてきたあの彼を、使つてやろう。そう考えたんだ。で、ありゃあ素質がある奴だった。いくらでも、狂人に染め上げられる。こいつあ、楽しい、戦争の火種を作ることが出来ると楽しみにした。》》

だが、もつと狂わせたい。さらに狂わせて、さらに凄い戦争の火種を作りたいと思ったんだよ》》

《《そして、あいつには色々な物を送ってやった。まあ、貴様らの検閲の目をかいくぐって送りつけるのは難しかったがな。特に雷切とかいう日本刀は苦勞した。

それでも、途中までは上手くいっていたんだ。途中までは》》

《《まつさか、恋人が出来るとは思ってもみななかった。あれがなければあ、ぶつ壊れた人間として完成していたんだが………残念だよ》》

《《とまあ、こんな感じに、計画は順調でも何でもなくて、非常に厳しい状況になっているということだ。ちなみに、こんな感じにグダグダになってしまった責任もかねて、数馬光太郎を壊す生贄として此処にいるんだがね。まあ、今まで100以上の世界で好き勝手に暴れてきたから、そこまで不満は無い》》

《《さあ、あの怪物が7階を突破したようだ。モニター室から連絡がない。そろそろ、終わりにしよう。

私が死んでも、計画は進行し続けるし、止まることも、止められることもない。目的を達成するために、一心不乱に進み続ける》》

《《我が君主、オロバスは、遊びたいがために、世界に干渉を起し、戦争を始めた。そして君主が捕まったとしても、今度は私達が遊び足りないのだ。まだまだ遊びたいのだ。戦争で、戦火で、爆発で、毒ガスで、銃弾で、刃で、何でも良い。戦争をしたいのだ。地獄のような戦争をしたいのだ。だからこそ、計画は終わらない。進み続ける。絶対に止まらない》》

《《そちらが、何をしようとも、彼が壊れ続けるのを止めることは出来ない。絶対に壊れてしまうだろう。まあ、頑張ってみる》》

《《以上で、メッセージは終了する。メッセージというよりかは、宣戦布告とでも受け取ってくれ。それでは、永久に、さようなら》》

映像が途切れた。もう、サロットの顔は映っていない。

「……………まったく、どうしてこう厄介な奴らが出てきちゃうんだろ  
う」

こなたがぼそりと呟く。

「それにしても……………このメッセージの相手も、碌な奴に化けて  
いませんでしたね」

部下の一言に、こなたはウンウンと頷く。

「サロット・サル……………いや、ポル・ポト。そして、クメール・ル  
ージュ、カンボジア共産党。かつて、カンボジアで170万人の民  
衆を死に追いやらせた最悪の独裁者。元々は英雄だったはずの彼が、  
暴君となってしまうていたのはよく分かってなかったんだけど、や  
っぱり悪魔が化けていたんだ」

「で、どうしますか？第2課に召集かけますか？」

「勿論、そのつもりだよ」



大天使が受話器を取り、第2課のメンバーに招集をかける。

まだまだ仕事は終わりそうになかった。

## 遊びを望む者達（後書き）

こんな感じで、超展開、無茶苦茶、馬鹿らしい風に突き進んでいこうと思います。

とりあえず、何とか原作8巻の話は終了です。次は9巻に入らず、恐らく本編とは関係無い話になると思います。多分、作者の趣味思考、やってみたかった事、すべて盛り込んだ感じになりますが、読んでいただければ嬉しいです。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7026m/>

---

とある数馬の転生物語

2011年11月21日22時16分発行